

群跡遺數叢

—森ノ木遺跡の調査—

筑後市文化財調査報告書

第 6 集

1990

筑後市教育委員会

群跡遺數叢

1990

筑後市教育委員会

卷頭圖版



森ノ木遺跡第2號

序

彦敷遺跡群森ノ木遺跡の発掘調査は筑後北中学校の新設工事に伴い、昭和62年度に学校敷地予定地内に所在する埋蔵文化財の調査を行ったものです。校舎建築の工期との関係で、3ヶ月間という非常に限られた期間の中で調査を行いましたが、その中で大きな成果があったものと思っております。

森ノ木遺跡からは、多くの堅穴住居跡、掘立柱建物跡、落し穴、円形周溝状遺構等が発見されました。中でも堅穴住居跡は240軒以上が発見され、筑後地方の堅穴住居を考えるうえで大変貴重な資料になると思われます。

この報告書は3ヶ月間にわたる発掘調査の記録であり、今後の文化財保護思想の普及の一助として、また学術研究の資料として、広く活用していただければ幸いで

おわりに、この報告書の発行にあたり、調査を担当していただいた福岡県教育厅南筑後教育事務所の佐々木隆彦技術主査のご労苦に深く感謝の意を表するとともに、発掘調査に参加された皆様と関係各位に対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成2年3月31日

筑後市教育委員会

教育長 森田基之

例　　言

1. 本書は、昭和63年度に筑後市立北中学校建設に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査の結果についての報告書である。
2. 調査に係る費用は筑後市が負担し、福岡県教育委員会の調査指導のもとに筑後市教育委員会が実施した。
3. 遺構の実測図は、川述昭人、飛野博文、佐々木四十臣、佐土原逸男、江上貴子、牛島アケミ、浅川文枝、大塚啓子、田島洋子、西坂ヨシエ、佐々木隆彦が作成し、整理での実測・製図は、平田春美、豊福弥生、若松三枝子、鬼木つや子、鶴田佳子、佐藤みゆき、関久江、蘭牟田秀子の協力を得た。
4. 遺構写真は、川述、佐々木（隆）、佐土原が撮影し、遺物写真は、九州歴史資料館の石丸洋技術主査、須原悦子、矢野明美にお願いした。
5. 遺物整理は、福岡県教育庁指導第二部文化課整理指導員の岩瀬正信の指導助言を得て九州歴史資料館で行った。
6. 壁穴住居跡の面積値はプラニメーターによる測定である。
7. 本書の執筆は、Iを県立甘木歴史資料館副館長の川述昭人、IIを筑後市教育委員会社会教育課永見秀徳、他は佐々木（隆）が分担した。
8. 題字は筑後市中央公民館主事、下川栄次氏による。
9. 本書の編集は佐々木（隆）が行った。

本文目次

	頁
I. はじめに	1
II. 遺跡の位置と環境	3
III. 発掘調査の記録	5
(1) 壇穴住居跡	5
(2) 掘立柱建物	239
(3) 周溝状遺構	243
(4) 落し穴状遺構	251
(5) 土墳	251
(6) 壇穴状遺構	262
(7) 溝状遺構	262
(8) 墓地	263
(9) その他の遺物	266
IV. おわりに	269

図版目次

- 図版 1 (1) 森ノ木遺跡内立柱跡
(2) 森ノ木遺跡東側斜面
- 図版 2 (1) 9号竪穴住居跡周辺構
(2) 9号・10号竪穴住居跡、3号周辺遺構
- 図版 3 (1) 12号竪穴住居跡周辺斜面
(2) 16号・21号竪穴住居跡周辺斜面
- 図版 4 (1) 19号竪穴住居跡周辺斜面
(2) 23号・48号竪穴住居跡周辺斜面
- 図版 5 (1) 34号～38号竪穴住居跡周辺斜面
(2) 43号竪穴住居跡周辺斜面
- 図版 6 (1) 43号竪穴住居跡周辺斜面
(2) 58号竪穴住居跡周辺斜面
- 図版 7 (1) 59号竪穴住居跡周辺斜面
(2) 66号竪穴住居跡周辺斜面
- 図版 8 (1) 79号竪穴住居跡周辺斜面
(2) 91号竪穴住居跡周辺斜面
- 図版 9 (1) 100号竪穴住居跡周辺斜面
(2) 93号～96号竪穴住居跡斜面
- 図版 10 (1) 106号竪穴住居跡周辺斜面
(2) 116号・117号・124号竪穴住居跡斜面
- 図版 11 (1) 127号竪穴住居跡周辺斜面
(2) 137号竪穴住居跡周辺斜面
- 図版 12 (1) 140号竪穴住居跡周辺斜面
(2) 159号竪穴住居跡周辺斜面
- 図版 13 (1) 180号竪穴住居跡周辺
(2) 199号竪穴住居跡周辺斜面
- 図版 14 (1) 201号・218号竪穴住居跡、5号・6号獨立柱建物周辺斜面
(2) 208号～212号竪穴住居 24号土壤剖面
- 図版 15 (1) 220号竪穴住居跡周辺斜面

(2) 1号・2号土壙瓶、石蓋土壙瓶の跡

図版16 (1) 12号竪穴住居跡、5号・6号周溝状遺構

(2) 16号竪穴住居跡

(3) 23号・42号・71号～74号竪穴住居跡

(4) 19号竪穴住居跡

図版17 (1) 19号竪穴住居跡カマド

(2) 35号～38号竪穴住居跡

(3) 34号竪穴住居跡遺物出土状態

(4) 44号(B)竪穴住居跡遺物出土状態

図版18 (1) 40号・43号竪穴住居跡

(2) 45号・103号竪穴住居跡

(3) 103号竪穴住居跡屋内土壙

(4) 53号・54号竪穴住居跡

図版19 (1) 59号竪穴住居跡

(2) 7号周溝状遺構、15号・17号土壙、1号落し穴

(3) 64号竪穴住居跡遺物出土状態

(4) 63号・64号・65号竪穴住居跡

図版20 (1) 61号・62号竪穴住居跡、11号・12号土壙

(2) 66号～68号竪穴住居跡、13号土壙

(3) 75号～77号竪穴住居跡

(4) 79号～81号竪穴住居跡

図版21 (1) 82号竪穴住居跡

(2) 83号竪穴住居跡、10号周溝状遺構

(3) 84号竪穴住居跡、20号土壙

(4) 91号・92号竪穴住居跡

図版22 (1) 93号竪穴住居跡

(2) 86号～90号・98号・119号竪穴住居跡

(3) 101号・102号竪穴住居跡遺物出土状態

(4) 121号・122号竪穴住居跡

図版23 (1) 122号竪穴住居跡屋内土壙

(2) 126号～128号竪穴住居跡

(3) 129号竪穴住居跡

(4) 130号竪穴住居跡

図版24 (1) 132号竪穴住居跡

(2) 135号・136号竪穴住居跡

(3) 136号竪穴住居跡遺物出土二態

(4) 137号・153号・154号・171号・172号竪穴住居跡

図版25 (1) 138号・139号・171号竪穴住居跡

(2) 138号竪穴住居跡屋内土塙

(3) 140号・147号・148号竪穴住居跡

(4) 143号～145号竪穴住居跡

図版26 (1) 147号竪穴住居跡屋内土塙

(2) 150号・167号竪穴住居跡

(3) 159号～161号竪穴住居跡

(4) 159号竪穴住居跡屋内土塙

図版27 (1) 142号・176号・177号竪穴住居跡

(2) 180号～183号・185号・187号・188号・190号・192号・196号竪穴住居跡

(3) 200号・201号竪穴住居跡

(4) 202号・203号竪穴住居跡

図版28 (1) 208号～212号竪穴住居跡

(2) 208号竪穴住居跡屋内土塙

(3) 217号竪穴住居跡屋内土塙

(4) 218号竪穴住居跡屋内土塙

図版29 (1) 4号掘立柱遺物

(2) 3号周溝状遺構

(3) 16号土塙、1号落し穴状遺構

(4) 2号落し穴二遺構

図版30 (1) 3号落し穴状遺構

(2) 3号土塙

(3) 25号土塙

(4) 1号土塙

図版31 (1) 2号土塙

(2) 石蓋土塙

(3) 石蓋土塙蓋石陥却後

(4) 3号土塙

図版32 3号・9号・14号・16号竪穴住居跡出土遺物

- 図版33 16号・18号・19号・23号・24号・27号竪穴住居跡出土遺物
- 図版34 27号・29号・34号竪穴住居跡出土遺物
- 図版35 34号竪穴住居跡出土遺物
- 図版36 34号・37号・38号・43号・44(A)号竪穴住居跡出土遺物
- 図版37 44(A)・(B)号竪穴住居跡出土遺物
- 図版38 45号・47号・48号・49号・54号竪穴住居跡出土遺物
- 図版39 55号・57号・58号竪穴住居跡出土遺物
- 図版40 58号竪穴住居跡出土遺物
- 図版41 58号・61号・62号・64号竪穴住居跡出土遺物
- 図版42 64号竪穴住居跡出土遺物
- 図版43 64号竪穴住居跡出土遺物
- 図版44 64号竪穴住居跡出土遺物
- 図版45 64号～66号竪穴住居跡出土遺物
- 図版46 66号～68号・75号竪穴住居跡出土遺物
- 図版47 73号・78号・80号・81号・82号竪穴住居跡出土遺物
- 図版48 82号～84号・87号竪穴住居跡出土遺物
- 図版49 87号～89号・91号竪穴住居跡出土遺物
- 図版50 93号～96号・98号・100号竪穴住居跡出土遺物
- 図版51 100号竪穴住居跡出土遺物
- 図版52 100号・101号竪穴住居跡出土遺物
- 図版53 102号・103号竪穴住居跡出土遺物
- 図版54 103号・104号・106号・107号・111号・112号・117号・119号竪穴住居跡出土遺物
- 図版55 119号・120号・126号(127号)竪穴住居跡出土遺物
- 図版56 130号・133号・135号・136号竪穴住居跡出土遺物
- 図版57 136号・137号竪穴住居跡出土遺物
- 図版58 137号・138号・142号・144号～146号竪穴住居跡出土遺物
- 図版59 147号・153号竪穴住居跡出土遺物
- 図版60 159号・170号～172号・178号・180号・181号竪穴住居跡出土遺物
- 図版61 183号・188号・190号・191号・194号・198号竪穴住居跡出土遺物
- 図版62 196号・199号・201号・203号・208号竪穴住居跡出土遺物
- 図版63 208号・217号・220号・223号・227号・229号・235号・239号竪穴住居跡出土遺物
- 図版64 240号・243号・244号竪穴住居跡、2号・4号周溝状遺構出土遺物
- 図版65 3号・9号・12号・17号土壙、3号土壙袋、竪穴状遺構出土遺物
- 図版66 各ピット出土遺物

挿 図 目 次

	頁
第 1 図 森ノ木遺跡と周辺の主要遺跡分布図.....	2
第 2 図 森ノ木遺跡周辺地形図(1/5,000)	4
第 3 図 1号竪穴住居跡実測図(1/80).....	5
第 4 図 1号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	5
第 5 図 2号竪穴住居跡実測図(1/80).....	6
第 6 図 2号竪穴住居跡出土石器実測図(1/3)	7
第 7 図 3号、4号竪穴住居跡実測図(1/80).....	7
第 8 図 3号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	8
第 9 図 4号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	9
第 10 図 5号竪穴住居跡実測図(1/80).....	9
第 11 図 8号竪穴住居跡実測図(1/80).....	10
第 12 図 8号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	10
第 13 図 9号竪穴住居跡実測図(1/80).....	11
第 14 図 9号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	12
第 15 図 10号竪穴住居跡実測図(1/80).....	13
第 16 図 10号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	13
第 17 図 12号竪穴住居跡、5号周溝状遺構、5号土壤実測図(1/80)	14
第 18 図 12号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	15
第 19 図 13号竪穴住居跡実測図(1/80).....	16
第 20 図 13号～15号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	16
第 21 図 15号竪穴住居跡実測図(1/80).....	17
第 22 図 16号竪穴住居跡実測図(1/80).....	18
第 23 図 16号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	18
第 24 図 16号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)	19
第 25 図 18号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	19
第 26 図 19号竪穴住居跡実測図(1/80).....	20
第 27 図 19号竪穴住居跡カマド実測図(1/40)	21
第 28 図 19号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	21
第 29 図 19号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2)	22

第 30 図 21号竪穴住居跡実測図(1/80).....	22
第 31 図 21号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	23
第 32 図 22号竪穴住居跡出土石器実測図(1/3)	23
第 33 図 23号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2・1/4)	24
第 34 図 24号竪穴住居跡出土石器実測図(1/3)	24
第 35 図 24号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2)	24
第 36 図 27号竪穴住居跡実測図(1/80).....	25
第 37 図 27号～29号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	26
第 38 図 27号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)	27
第 39 図 29号、105号竪穴住居跡実測図(1/80)	28
第 40 図 30号竪穴住居跡出土土製品実測図(1/2)	28
第 41 図 34号竪穴住居跡実測図(1/80).....	29
第 42 図 34号竪穴住居跡出土土器実測図その 1 (1/4)	31
第 43 図 34号竪穴住居跡出土土器実測図その 2 (1/4)	32
第 44 図 34号竪穴住居跡出土土器実測図その 3 (1/4)	33
第 45 図 34号竪穴住居跡出土土器実測図その 4 (1/4)	34
第 46 図 34号竪穴住居跡出土石器実測図その 1 (1/3)	35
第 47 図 34号竪穴住居跡出土石器実測図その 2 (1/2)	35
第 48 図 35号、36号竪穴住居跡実測図(1/80).....	36
第 49 図 36号～40号、43号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	37
第 50 図 37号竪穴住居跡出土土器実測図(1/2)	38
第 51 図 39号、41号、104号竪穴住居跡実測図(1/80)	39
第 52 図 40号竪穴住居跡実測図(1/80).....	40
第 53 図 43号竪穴住居跡実測図(1/80).....	41
第 54 図 43号竪穴住居跡出土石器実測図その 1 (1/2)	42
第 55 図 43号竪穴住居跡出土土器実測図その 2 (1/3)	43
第 56 図 44号(A、B)竪穴住居跡実測図(1/80).....	44
第 57 図 44号(A)竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	45
第 58 図 44号(B)竪穴住居跡出土土器実測図その 1 (1/4)	47
第 59 図 44号(B)竪穴住居跡出土土器実測図その 2 (1/4)	48
第 60 図 45号、103号竪穴住居跡実測図(1/80)	49
第 61 図 45号竪穴住居跡出土土器実測図その 1 (1/4)	50
第 62 図 45号竪穴住居跡出土土器実測図その 2 (1/4)	51

第 63 図	47号縫穴住居跡実測図(1/80)	52
第 64 図	47号縫穴住居跡出土土器実測図(1/4)	52
第 65 図	47号縫穴住居跡出土石器実測図(1/3)	52
第 66 図	48号縫穴住居跡実測図(1/80)	53
第 67 図	48号縫穴住居跡出土土器実測図(1/4)	54
第 68 図	48号縫穴住居跡出土石器実測図(1/2)	54
第 69 図	49号縫穴住居跡実測図(1/80)	54
第 70 図	49号縫穴住居跡出土土器実測図(1/4)	55
第 71 図	49号縫穴住居跡出土石器実測図(1/3)	56
第 72 図	50号、51号、52号縫穴住居跡実測図(1/80)	57
第 73 図	50号縫穴住居跡出土土器実測図(1/4)	58
第 74 図	52号縫穴住居跡出土土器実測図(1/4)	58
第 75 図	53号、54号縫穴住居跡実測図(1/80・1/20)	59
第 76 図	53号、54号縫穴住居跡出土土器実測図(1/4)	60
第 77 図	53号縫穴住居跡出土土製品実測図(1/2)	60
第 78 図	55号縫穴住居跡出土土器実測図(1/4)	61
第 79 図	55号縫穴住居跡出土石器実測図(1/2)	62
第 80 図	56号縫穴住居跡出土石器実測図(1/2)	62
第 81 図	57号縫穴住居跡出土土器実測図(1/4)	62
第 82 図	58号縫穴住居跡、8号周溝状遺構実測図(1/80)	63
第 83 図	58号縫穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)	65
第 84 図	58号縫穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)	66
第 85 図	58号縫穴住居跡出土土器実測図その3(1/4)	67
第 86 図	58号縫穴住居跡出土土器実測図その4(1/4)	68
第 87 図	58号縫穴住居跡出土石器実測図(1/2)	68
第 88 図	59号縫穴住居跡実測図(1/80)	69
第 89 図	59号縫穴住居跡出土土器実測図(1/4)	70
第 90 図	59号縫穴住居跡出土土塊実測図(1/4)	71
第 91 図	61号、62号縫穴住居跡実測図(1/80)	72
第 92 図	61号縫穴住居跡出土土器実測図(1/4)	73
第 93 図	61号縫穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2)	74
第 94 図	62号縫穴住居跡出土土器実測図(1/4)	76
第 95 図	63号縫穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)	77

第 96 図	63号竪穴住居跡出土土器実測図その 2 (1/4)	78
第 97 図	63号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)	78
第 98 図	64号、65号竪穴住居跡実測図(1/80).....	79
第 99 図	64号竪穴住居跡出土土器実測図その 1 (1/4)	81
第100図	64号竪穴住居跡出土土器実測図その 2 (1/4)	82
第101図	64号竪穴住居跡出土土器実測図その 3 (1/4)	83
第102図	64号竪穴住居跡出土土器実測図その 4 (1/4)	84
第103図	64号竪穴住居跡出土土器実測図その 5 (1/4)	86
第104図	64号竪穴住居跡出土土器実測図その 6 (1/4)	87
第105図	64号竪穴住居跡出土土器実測図その 7 (1/4)	88
第106図	64号竪穴住居跡出土土器実測図その 8 (1/4)	89
第107図	44号、64号竪穴住居跡出土土器実測図(1/8)	90
第108図	64号竪穴住居跡出土石器実測図(1/4・1/2)	91
第109図	65号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)	92
第110図	66号竪穴住居跡出土土器実測図その 1 (1/4)	93
第111図	66号竪穴住居跡出土土器実測図その 2 (1/4)	94
第112図	66号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)	94
第113図	67号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	94
第114図	67号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2)	95
第115図	68号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	96
第116図	69号竪穴住居跡実測図(1/80).....	97
第117図	69号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	98
第118図	70号、71号竪穴住居跡実測図(1/80).....	99
第119図	70号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	100
第120図	72号～74号竪穴住居跡実測図(1/80).....	101
第121図	73号竪穴住居跡混入土器実測図(1/4)	102
第122図	73号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)	103
第123図	75号～77号竪穴住居跡実測図(1/80).....	104
第124図	75号～77号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	105
第125図	78号竪穴住居跡実測図(1/80).....	106
第126図	79号竪穴住居跡実測図(1/80).....	106
第127図	78号、79号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	107
第128図	80号、81号竪穴住居跡実測図(1/80).....	108

第129図	80号堅穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2)	109
第130図	81号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	110
第131図	81号堅穴住居跡出土石器実測図その1(1/3)	111
第132図	81号堅穴住居跡出土石器実測図その2(1/2)	111
第133図	82号堅穴住居跡実測図(1/80)	112
第134図	82号堅穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)	113
第135図	82号堅穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)	114
第136図	82号堅穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2)	114
第137図	83号、151号堅穴住居跡実測図(1/80)	115
第138図	83号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	116
第139図	83号堅穴住居跡出土土製品実測図(1/2)	116
第140図	84号堅穴住居跡実測図(1/80)	117
第141図	84号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	118
第142図	85号、120号堅穴住居跡実測図(1/80)	118
第143図	86号、100号、119号堅穴住居跡実測図(1/80)	折り込み
第144図	86号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	119
第145図	87号堅穴住居跡実測図(1/80)	120
第146図	87号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	120
第147図	87号堅穴住居跡出土石器実測図(1/4・1/2)	121
第148図	88号堅穴住居跡実測図(1/80)	122
第149図	88号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	123
第150図	89号、90号、98号堅穴住居跡実測図(1/80)	折り込み
第151図	89号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	123
第152図	90号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	124
第153図	91号、92号堅穴住居跡実測図(1/80)	125
第154図	91号堅穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)	126
第155図	91号堅穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)	127
第156図	91号堅穴住居跡出土石器実測図(1/2)	128
第157図	93号堅穴住居跡実測図(1/80)	129
第158図	93号～95号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	130
第159図	93号堅穴住居跡出土土製品実測図(1/2)	130
第160図	96号堅穴住居跡実測図(1/80)	131
第161図	96号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	132

第162図	97号竪穴住居跡実測図(1/80).....	132
第163図	97号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	133
第164図	98号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	133
第165図	99号竪穴住居跡実測図(1/80).....	134
第166図	100号竪穴住居跡出土土器実測図その 1 (1/4).....	折り込み
第167図	100号竪穴住居跡出土土器実測図その 2 (1/4).....	136
第168図	100号竪穴住居跡出土土器実測図その 3 (1/4).....	137
第169図	100号竪穴住居跡出土土器実測図その 4 (1/4).....	138
第170図	100号竪穴住居跡出土土器実測図その 5 (1/6).....	138
第171図	100号竪穴住居跡出土石器実測図(1/4・1/2)	139
第172図	101号、102号竪穴住居跡実測図(1/80).....	140
第173図	101号竪穴住居跡出土土器実測図その 1 (1/4).....	141
第174図	101号竪穴住居跡出土土器実測図その 2 (1/4).....	142
第175図	101号+102号竪穴住居跡出土土器実測図(1/8)	143
第176図	101号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)	143
第177図	102号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	144
第178図	103号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	145
第179図	103号竪穴住居跡出土石器実測図(1/3)	146
第180図	103号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2・1/4)	146
第181図	104号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)	147
第182図	105号、106号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	148
第183図	107号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)	149
第184図	111号、112号、115号、117号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	150
第185図	116号竪穴住居跡出土鐵器実測図(1/2)	150
第186図	119号竪穴住居跡出土土器実測図その 1 (1/4)	152
第187図	119号竪穴住居跡出土土器実測図その 2 (1/4)	153
第188図	119号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)	153
第189図	120号、121号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	153
第190図	121号竪穴住居跡実測図(1/80)	154
第191図	122号竪穴住居跡実測図(1/80)	155
第192図	123号竪穴住居跡実測図(1/80)	155
第193図	126号、127号竪穴住居跡実測図(1/80)	156
第194図	126号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	157

第195図	126号堅穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	158
第196図	127号堅穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	158
第197図	128号堅穴住居跡実測図(1/80)	159
第198図	129号堅穴住居跡実測図(1/80)	159
第199図	130号堅穴住居跡実測図(1/80)	160
第200図	130号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	161
第201図	130号堅穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2).....	161
第202図	131号堅穴住居跡実測図(1/80)	162
第203図	131号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	162
第204図	132号堅穴住居跡実測図(1/80)	162
第205図	133号、134号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	163
第206図	135号、136号堅穴住居跡実測図(1/80).....	164
第207図	135号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	165
第208図	135号堅穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	165
第209図	136号堅穴住居跡出土土器実測図その1(1/4).....	166
第210図	136号堅穴住居跡出土土器実測図その2(1/4).....	167
第211図	136号堅穴住居跡出土土製品実測図(1/2).....	167
第212図	137号堅穴住居跡実測図(1/80)	168
第213図	137号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	169
第214図	137号堅穴住居跡出土石器実測図(1/4・1/2)	170
第215図	138号、139号堅穴住居跡実測図(1/80).....	171
第216図	138号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	171
第217図	138号堅穴住居跡出土石器実測図その1(1/3).....	172
第218図	138号堅穴住居跡出土石器実測図その2(1/4・1/2)	172
第219図	140号、148号、156号堅穴住居跡実測図(1/80)	折り込み
第220図	140号～145号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	173
第221図	142号、176号、177号堅穴住居跡実測図(1/80)	174
第222図	142号堅穴住居跡出土石器実測図(1/2)	175
第223図	143号～145号、157号堅穴住居跡実測図(1/80)	176
第224図	144号堅穴住居跡出土石器実測図(1/2)	177
第225図	145号堅穴住居跡出土石器実測図(1/2)	178
第226図	146号、158号堅穴住居跡実測図(1/80)	179
第227図	146号～148号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	180

第228図	147号竪穴住居跡・実測図(1/80)	181
第229図	147号竪穴住居跡出土石器、鉄器実測図(1/4・1/2)	182
第230図	149号竪穴住居跡出土土石器実測図(1/2)	183
第231図	150号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	183
第232図	153号竪穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)	185
第233図	153号竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)	186
第234図	153号竪穴住居跡出土土器実測図その3(1/4)	187
第235図	153号竪穴住居跡出土土器実測図(1/2)	187
第236図	155号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	187
第237図	158号竪穴住居跡出土土石器実測図(1/2)	187
第238図	159号竪穴住居跡出土土器実測図(1/80)	188
第239図	159号、163号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	189
第240図	159号竪穴住居跡出土土石器実測図(1/2)	189
第241図	163号、164号竪穴住居跡実測図(1/80)	190
第242図	165号竪穴住居跡出土土器実測図(1/80)	191
第243図	165号、166号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	192
第244図	165号竪穴住居跡出土土石器実測図(1/2)	192
第245図	166号、169号、231号竪穴住居跡実測図(1/80)	193
第246図	169号竪穴住居跡出土土石器実測図(1/2)	193
第247図	170号竪穴住居跡出土土石器実測図(1/2)	194
第248図	171号、172号竪穴住居跡実測図(1/80)	194
第249図	171号竪穴住居跡出土土石器実測図(1/4)	195
第250図	171号竪穴住居跡出土土石器実測図(1/2)	195
第251図	172号竪穴住居跡出土土石器実測図(1/2)	196
第252図	173号竪穴住居跡出土土石器実測図(1/80)	196
第253図	173号竪穴住居跡出土土石器実測図(1/4)	196
第254図	174号、175号竪穴住居跡実測図(1/80)	197
第255図	174号竪穴住居跡出土土石器実測図(1/4)	198
第256図	175号竪穴住居跡出土土石器実測図(1/4)	199
第257図	178号竪穴住居跡出土土石器実測図(1/4)	199
第258図	178号竪穴住居跡出土土石器実測図(1/2)	200
第259図	180号、181号、186号竪穴住居跡実測図(1/80)	201
第260図	180号、182号～186号竪穴住居跡出土土石器実測図(1/4)	202

第261図	180号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2).....	202
第262図	181号竪穴住居跡出土石器、鉄器実測図(1/2).....	203
第263図	183号～185号、187号竪穴住居跡実測図(1/80)	204
第264図	183号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2・1/4)	205
第265図	188号、246号竪穴住居跡実測図(1/80).....	折り込み
第266図	188号竪穴住居跡出土石器、鉄器実測図(1/2).....	207
第267図	190号、191号、193号、194号竪穴住居跡実測図(1/80).....	折り込み
第268図	190号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	208
第269図	190号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2).....	209
第270図	191号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	209
第271図	191号竪穴住居跡出土石器実測図(1/4).....	210
第272図	194号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	210
第273図	195号、199号竪穴住居跡実測図(1/80).....	211
第274図	195号、196号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	213
第275図	196号、197号竪穴住居跡実測図(1/80).....	214
第276図	196号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	215
第277図	199号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	215
第278図	199号竪穴住居跡出土石器、鉄器、土製品実測図(1/2).....	216
第279図	200号、201号竪穴住居跡実測図(1/80).....	217
第280図	201号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	218
第281図	201号竪穴住居跡出土石器実測図(1/4).....	218
第282図	202号、203号竪穴住居跡実測図(1/80).....	219
第283図	203号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	219
第284図	203号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	220
第285図	208号～212号竪穴住居跡実測図(1/80).....	折り込み
第286図	208号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	221
第287図	208号竪穴住居跡出土石器実測図(1/4).....	221
第288図	212号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	222
第289図	214号竪穴住居跡、26号土壤実測図(1/80)	222
第290図	217号、218号竪穴住居跡実測図(1/80).....	224
第291図	217号竪穴住居跡出土石器実測図(1/3).....	225
第292図	217号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	225
第293図	218号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	225

第294図	220号、221号竪穴住居跡実測図(1/80).....	226
第295図	220号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	226
第296図	220号竪穴住居跡出土石器実測図(1/3).....	227
第297図	222号竪穴住居跡実測図(1/80).....	228
第298図	222号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	228
第299図	223号、224号竪穴住居跡実測図(1/80).....	229
第300図	223号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	230
第301図	225号～227号、244号竪穴住居跡13号周溝状遺構実測図(1/80).....	231
第302図	227号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	231
第303図	227号竪穴住居跡出土土製品実測図(1/2).....	231
第304図	236号(E)、238号(F)竪穴住居跡実測図(1/80).....	232
第305図	238号竪穴住居跡出土石器実測図(1/4).....	233
第306図	239号、240号竪穴住居跡実測図(1/80).....	234
第307図	240号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	235
第308図	243号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	235
第309図	244号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	236
第310図	1号掘立柱建物実測図(1/60).....	239
第311図	3号(E)、4号(F)掘立柱建物実測図(1/80).....	240
第312図	5号(G)、6号(H)掘立柱建物実測図(1/80).....	241
第313図	7号(I)、8号(J)掘立柱建物実測図(1/80).....	242
第314図	1号、2号周溝状遺構実測図(1/80).....	折り込み
第315図	1号、2号、4号周溝状遺構出土土器実測図(1/4).....	244
第316図	2号周溝状遺構出土石器実測図(1/2).....	245
第317図	3号周溝状遺構実測図(1/60).....	245
第318図	4号周溝状遺構実測図(1/80).....	246
第319図	5号、6号周溝状遺構実測図(1/60).....	247
第320図	7号周溝状遺構実測図(1/60).....	248
第321図	7号、10号周溝状遺構出土土器実測図(1/4).....	249
第322図	10号周溝状遺構実測図(1/60).....	249
第323図	11号周溝状遺構出土石器実測図(1/2).....	250
第324図	1号、2号、3号落し穴状遺構実測図(1/30).....	252
第325図	3号土壤実測図(1/60).....	253
第326図	3号、6号、9号土壤出土土器実測図(1/4).....	254

第327図	8号、11号、12号土壤実測図(1/40).....	256
第328図	12号、17号土壤出土土器実測図(1/4)	257
第329図	14号、23号、25号、26号土壤実測図(1/40・1/60).....	259
第330図	24号土壤出土土製品実測図(1/2)	260
第331図	25号土壤出土土器実測図(1/4)	260
第332図	26号土壤出土土器実測図(1/4)	261
第333図	豊穴状遺構出土土製品実測図(1/2)	262
第334図	石蓋土壤墓、1号土壤墓実測図(1/40).....	264
第335図	2号、3号土壤墓実測図(1/30).....	265
第336図	3号土壤墓出土土器実測図(1/4)	265
第337図	3号土壤墓出土鐵器実測図(1/3)	266
第338図	各ピット出土石器実測図(1/2)	267
第339図	各ピット出土石器実測図(1/3)	267

表 目 次

第 1 表	不掲載堅穴住居跡一覧表	237
第 2 表	1号掘立柱建物計測表	239
第 3 表	3号掘立柱建物計測表	239
第 4 表	4号掘立柱建物計測表	239
第 5 表	5号掘立柱建物計測表	243
第 6 表	6号掘立柱建物計測表	243
第 7 表	7号掘立柱建物計測表	243
第 8 表	8号掘立柱建物計測表	243

付 図

- 付図 1 森ノ木遺跡遺構配置図(1/400)
 付図 2 森ノ木遺跡の集落時期別変遷図(1/800)

I　は　じ　め　に

本の木遺跡は筑後北中学校新設工事に先立つて緊急に調査を実施したものである。

当該地区は文化財等遺跡分布地図(筑後市分)に載る遺跡として記載されている周知の遺跡であり、遺跡は広範囲に所在することが予想された。

昭和62年の夏、当該地区が中学校新設予定地となすため地区内の文化財の保護について、県教育委員会と筑後市教育委員会と協議を行った。県・市の文化財担当職員による現地調査の結果、遺跡は丘陵基部を除く頂部から斜面部にかけての全面に所在することが予想された。県・市による協議の結果、工法的には、斜面部を削平した上で低い部分を埋めて用地を確保するしかねないとの結論に達し、全面発掘調査による削除量(面積は約15,000m²)となつた。市側から、開校は平成元年4月1日であるため早急に調査を開始して欲しいとの要望があったが、他に発掘調査が予定されているなど県側の懸念・制約が整わなかったため、時間の調整が必要であった。

昭和63年2月に入り、重機を使っての全面発掘取出作業を開始し、発掘調査の本格的取り組みは3月20日からとなり、6月18日までの間で実施した。

調査関係者は下記のとおりである。

調査責任者 筑後市教育委員会

教育長 中島栄三郎(前任)

同 森田 基之

社会教育課長 江里口 〇

社会教育係長 水松 三夫

社会教育係長 氷見 秀徳(担当)

社会教育係 木本 敏昭

体育係長 山口 邦郎

同 本村 三時

同 江口昌勝 田中純一

同 光延 久幸(文化財担当前任)

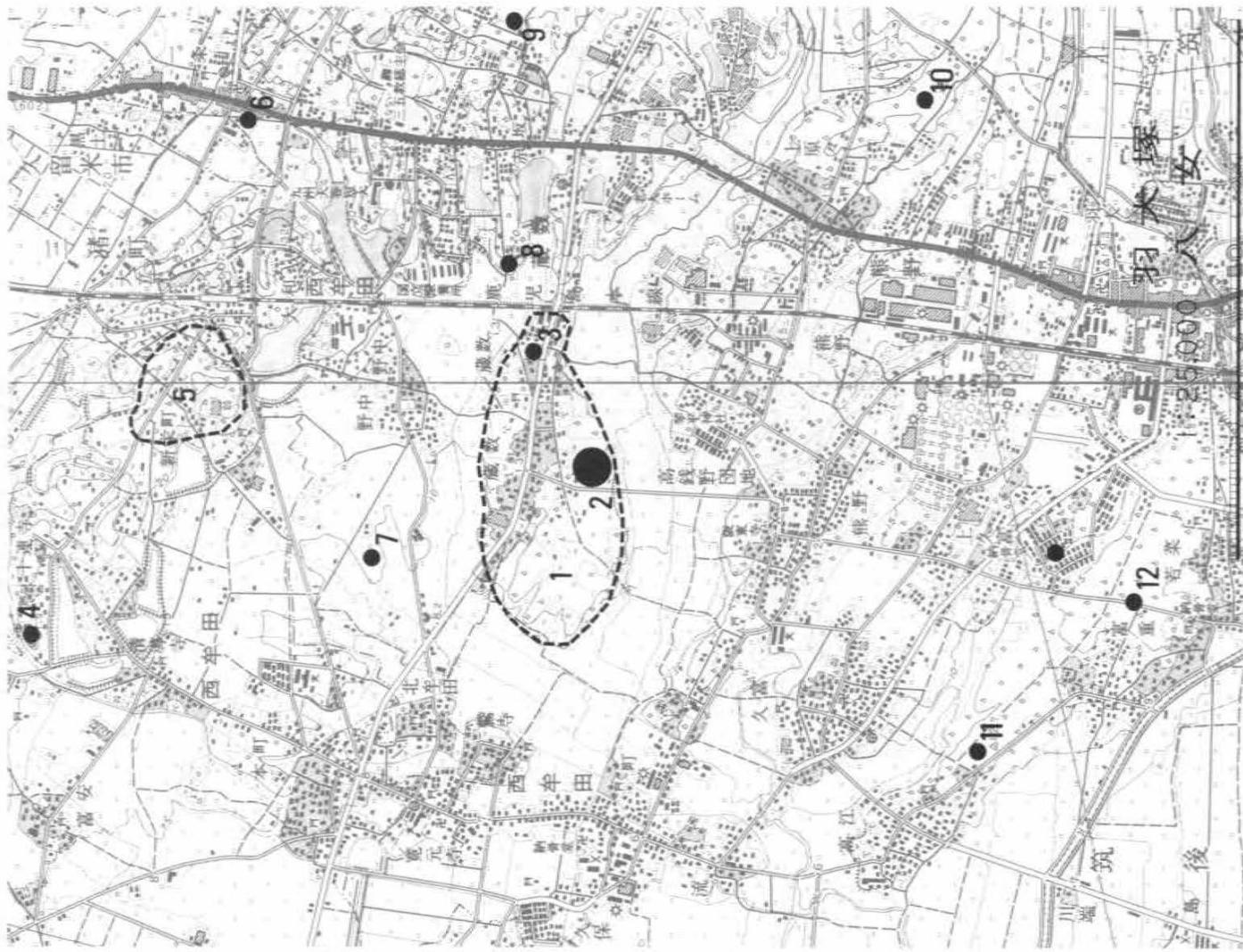
福岡県教育厅南筑後教育局

社会教育課 技術主査 川述 仁(原人
佐々木隆彦(前任))

同 主任技師 芹野 博文

補助員 佐土原逸男

このほか、福岡県文化財保護指導委員の佐々木四十恵氏より指導・助言ならびに発掘調査の手助けを頂き、また、八女市教育委員会の赤崎敏男氏には実測についての御高配を頂いた。現地作業にあたっては地元歴史地区の区長成吉基助氏のお世話により地元の方々に作業に従事して頂き調査を無事に終了することができた。記して感謝の意を表します。



1. 蔴數遺跡群
 2. 森ノ木遺跡
 3. 蔴數東野居敷跡
 4. 清志古墳(土壙古墳)
 5. 十八錢龟遺跡
 6. 瑞王寺古墳
 7. 田佛遺跡
 8. 長原山遺跡
 9. 鯉ノ谷遺跡
 10. 前津中ノ谷遺跡
 11. 高江遺跡
 12. 江道遺跡

第1図 森ノ木遺跡と周辺主要遺跡分布図 (1/25,000)

II 遺跡の位置と環境

歴史遺跡群は福岡県筑後市大字融畠一帯に広がる一大遺跡群である。

筑後市は福岡県南部、筑後地区のはば中央に位置し、久留米市から南へ12km、大牟田市から北へ21kmの距離にある。JR鹿児島本線に平行する209号線沿いにある未免達の市街地は、江戸時代の宿場町一里塚の名残りをわずかにながらにとどめている。市の北部はハ女丘から西方にびる八女丘陵が、草をばせたようにならに分岐してローム質の低丘陵群を形成している。この低丘陵群は茶畑や果樹園に利用されており、特に近年は果樹園として拓け、梨やアボウの栽培が盛んである。市の南部は標高5m未満の低湿地を中心をなし、広く水田が抜けているが、灌田が多く無数のクリークが流達している。

歴史遺跡群は筑後市の北部、ハ女丘陵の西端近くに展開し、遺跡群東部には郷村山城跡の東野櫓跡が所在する。森ノ木遺跡は遺跡群西部の丘陵南斜面に位置している。この森ノ木遺跡には、東から立山丸山古墳、針崎1・2・3号墳、鶴見山古墳^(注1)、青藏塚古墳、渠場古墳、筑紫の引磐^(注2)の奥津城である岩戸山古墳、神奈熊田古墳、そして筑後市に入って欠壁古墳、石人山古墳等の前方後円墳が点在する。円墳では、石人山古墳の東方300mに装飾古墳として知られる弘化谷古墳が存在し、西方1kmには珠文鏡・本心・鉄板張輪鏡などを出土した増王寺古墳^(注3)がある。また、欠壁古墳の南方500mの前津地区には、奈良時代の集落遺跡である前津遺跡群が展開し、前津中の玉遺跡ではカマドを有する土器跡が12軒確認されている。

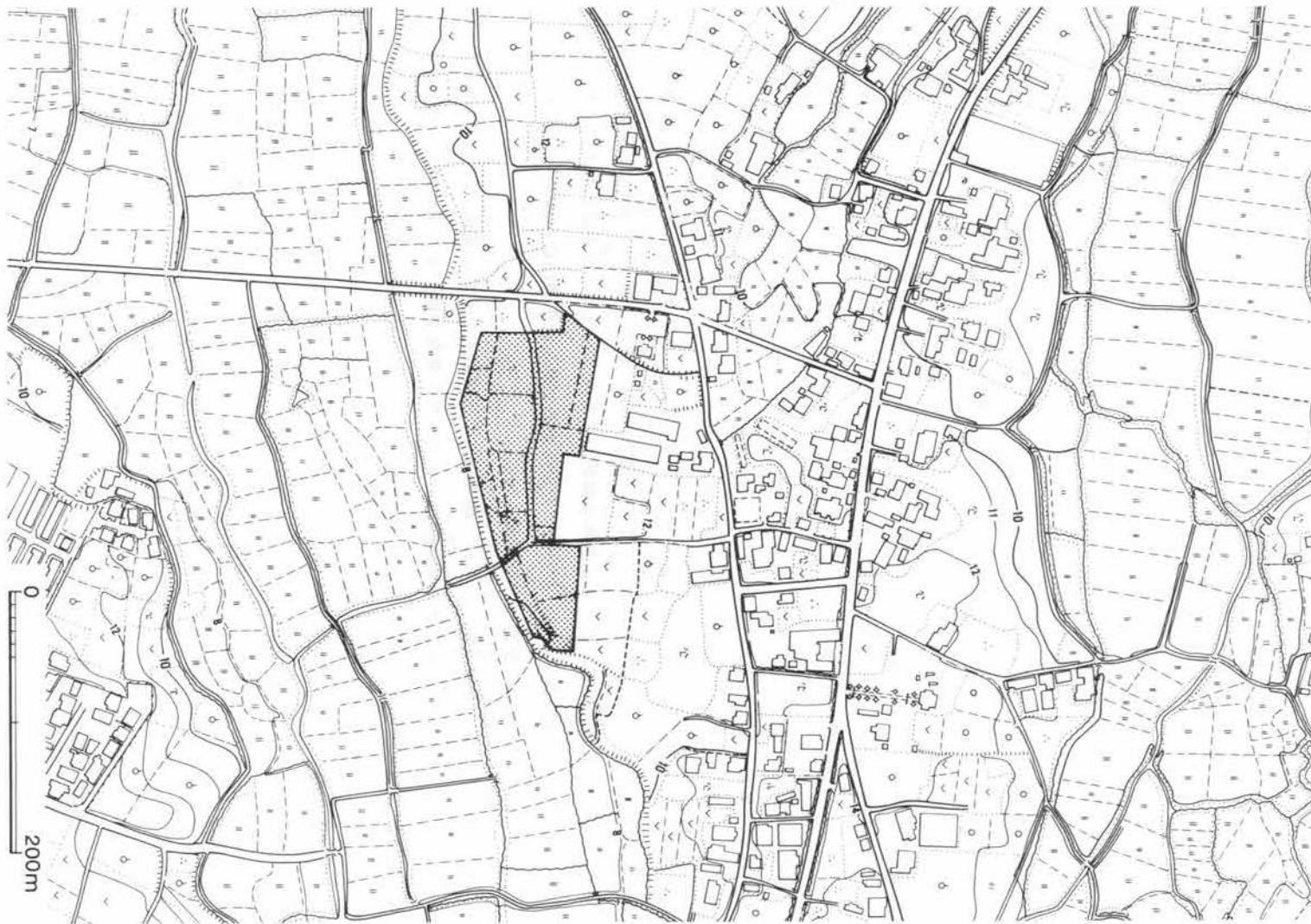
筑後市内その他の主な遺跡としては、縄文時代の集落跡である奥山遺跡、弥生時代前期から中期にかけての集落・墓地跡である滑川遺跡、古墳時代の集落遺跡である田佛遺跡、弥生時代から近世までの複合遺跡で湖州鏡などが出土した高江遺跡、奈良時代から平安時代にかけての和目瓦を出土した石櫻寺跡などがある。

そのほか、奈良時代の官道である西街道を「車地」の小字名等から推定する説もある。

また筑後市一帯は、石人山古墳や岩戸山古墳の石人・石馬で知られるように石造美術の宝庫である。中でも鎌倉時代のものとして龍野坂東寺の真言五重塔や准胝光明寺の石造ノ重塔、室町時代のものとしては、南北朝鮮乱期の正平・延暦の作で古指定文化財の六所宮の應比須神像、少し時代を下り、水田天満宮の石塔群、熊野神社の天鏡橋、江戸時代のものとしては、水田天満宮の石造馬頭などがあり、何れも貴重な資料として知られている。

- (注1) 筑後市文化財調査報告書第3集「周王寺古墳」筑後市教育委員会 1984
- (2) 筑後市文化財調査報告書第4集「前津中の玉遺跡」筑後市教育委員会 1987
- (3) 「奥山遺跡」筑後市教育委員会 1986
- (4) 「孤塚遺跡」筑後市教育委員会 1970年—1970年—一般所蔵
- (5) 筑後市文化財調査報告書第5集「日伊遺跡」筑後市教育委員会
- (6) 木下 俊「車路」考 福岡県二郎原古記念論集 1978

第2図 森ノ木遺跡周辺地形図(1/5,000)



III 発掘調査の記録

(1) 壴穴住居跡

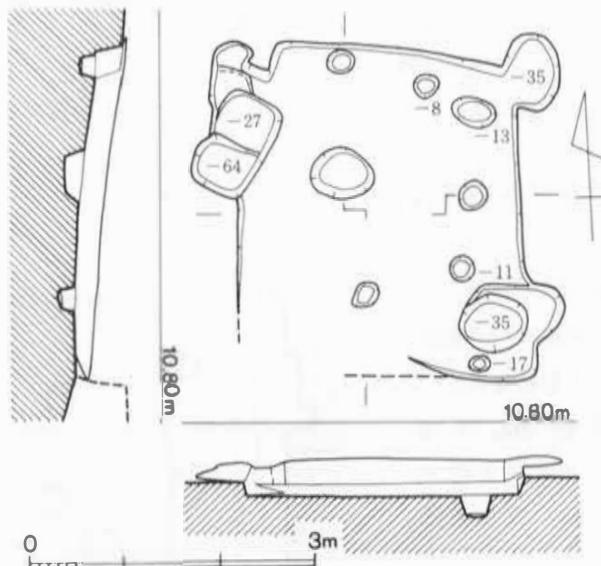
1号竪穴住居跡(図版2-1, 第3図)

調査区の南斜面に位置する住居跡で、現況での平面形状は方形を呈するが、ベット部分の削平が考えられる。規模は東壁が3.40m、床面までの深さは30.0cm前後を測る。支柱穴など詳細は不明である。

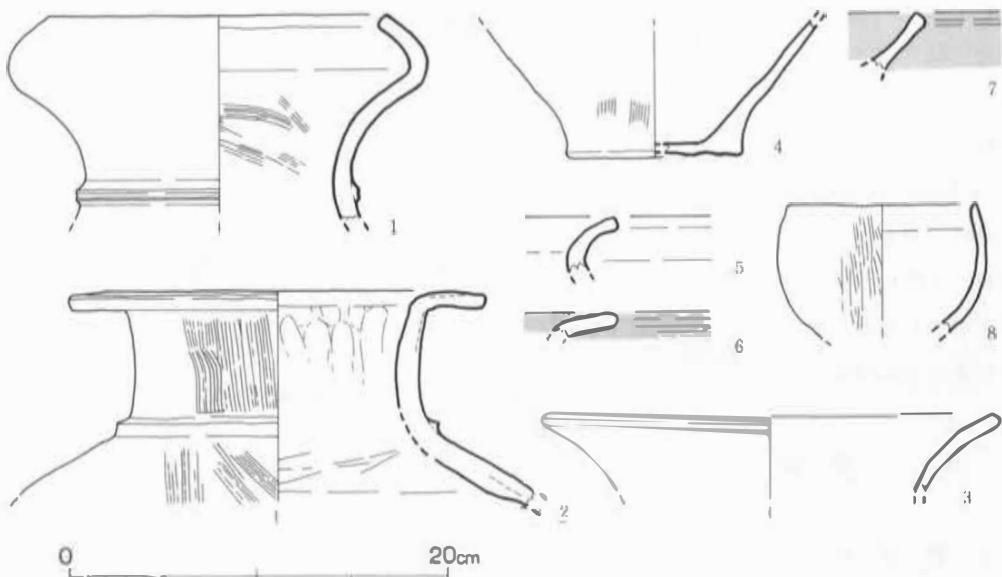
出土遺物は壺、甕、鉢がある。

出土遺物

土器(第4図)



第3図 1号竪穴住居跡実測図(1/80)



第4図 1号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

壺は1～4がある。1は中期末の袋状口縁壺の発達したもので、口縁部が鋭く内湾するが、屈折部に稜をもたない。頸部には「M」字状の突帯を貼付する。2は鋤先状口縁が退化した壺で、頸部に三角突帯を貼付する。外面には荒いハケを施す。復原口径22.0cm。3は朝顔状に外反する口縁を有す壺で精製土器である。復原口径24.0cmを測る。4は壺の底部で薄手作りである。二次加熱を受け淡く赤変する。

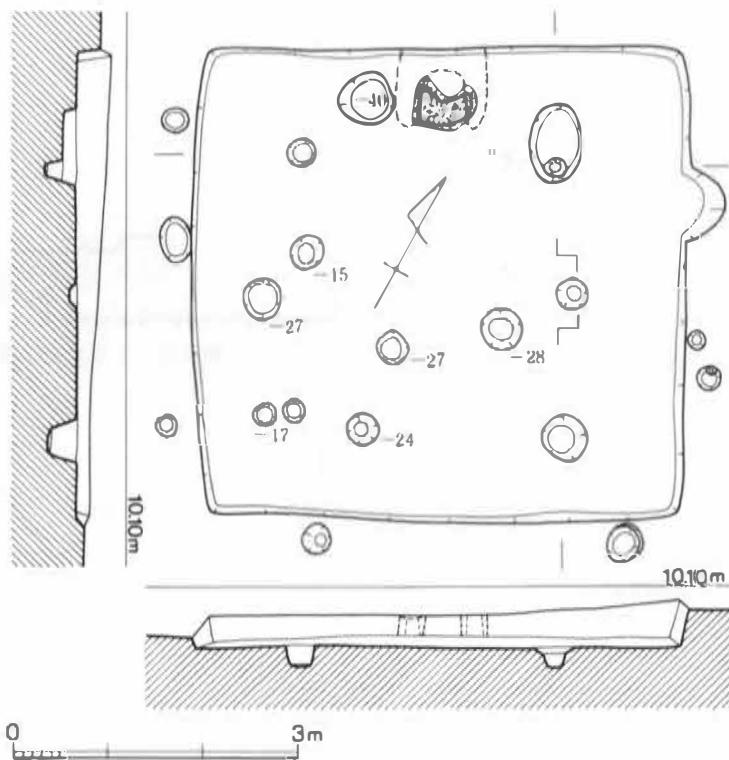
甕は5～7がある。5は6よりも新相を呈するが、頸部内側の稜は不明瞭である。6・7は円墳りで、7は樽形土器の可能性がある。

鉢形土器は8がある。半球形の体部を有すが1/4の残存である。

2号竪穴住居跡（第5図）

南斜面で検出した竪穴住居で、平面形状は方形を呈する。規模は4.50m×5.10m、深さは北壁で38.0cm。床面積は24.76m²である。支柱は4本であるがいずれも浅い。北壁の中央にはカマドを付設する。支柱軸から主軸方位はN 29°Wを示す。

遺物は埋土中から少量の土器片と砥石片が出土したが、図示可能な土器はない。



第5図 2号竪穴住居跡実測図(1/80)

出土 遺 物

石 器（第6図）

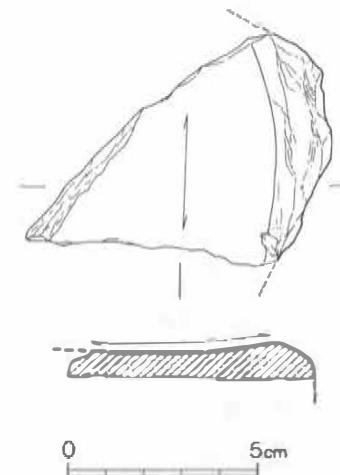
緑泥片岩製の砥石片がある。現存での研面は1面で、石皿を再利用した可能性がある。埋土中

からの出土である。

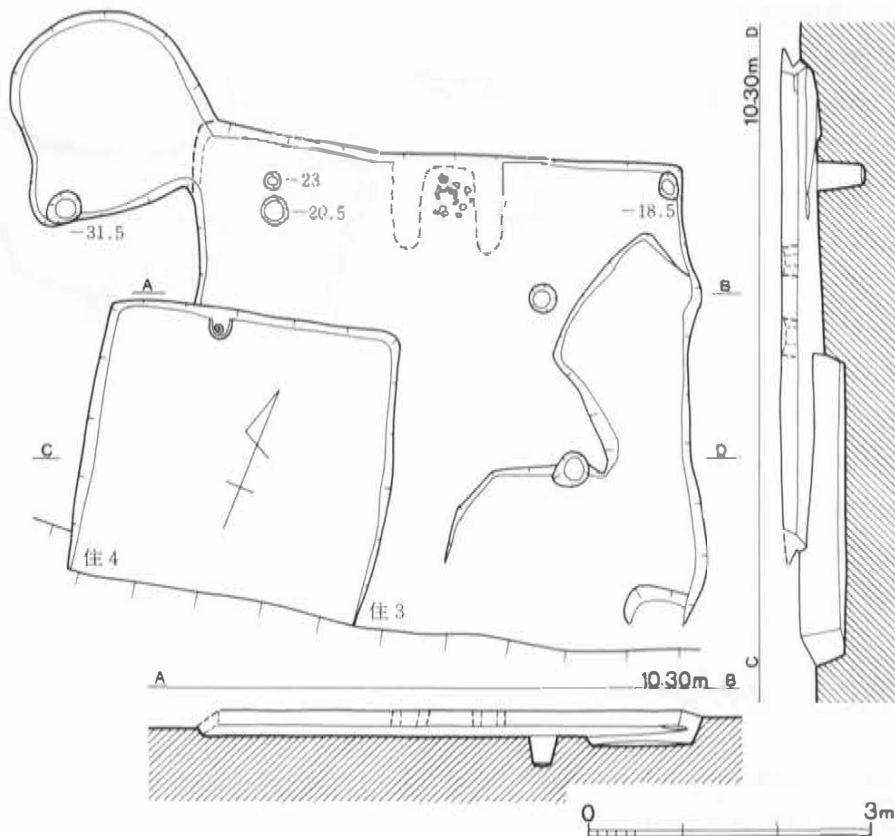
3号竪穴住居跡(第7図)

調査区の南斜面で検出した竪穴住居跡で、4号住居と重複する。南壁は削平され遺存しないが、平面形状は方形であろう。規模は北壁のみ計測可能で5.20mを測る。支柱は現況で2本を検出したが、本来は4本である。北壁の中央には「U」字状のカマドを付設しており、カマド内には鉢の小片が散在していた。

出土遺物は土師器の甕・鉢、須恵器の坏身・高坏がある。



第6図 2号竪穴住居跡出土石器
実測図(1/3)



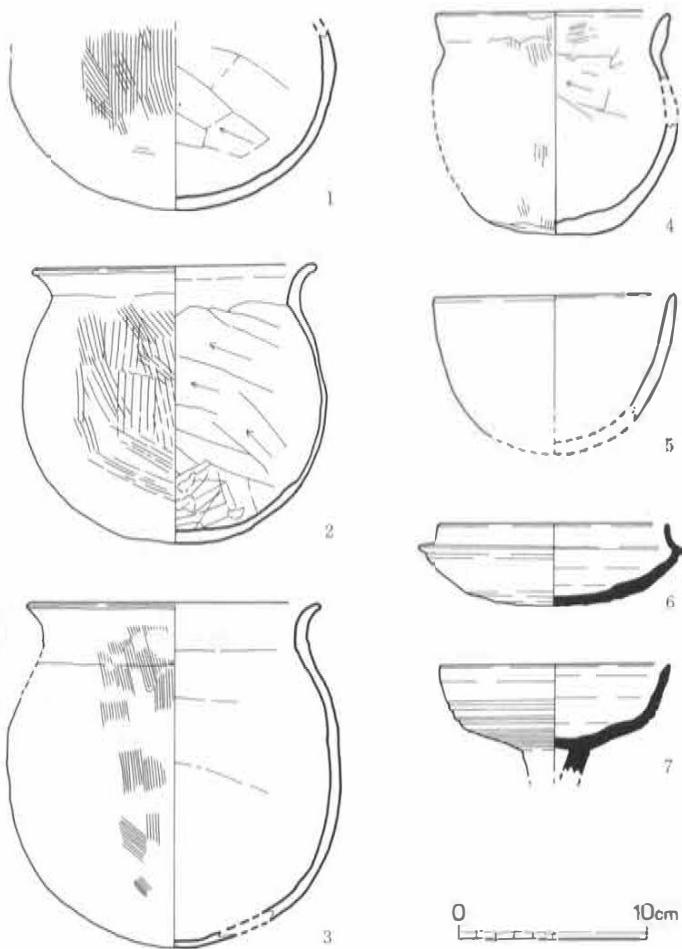
第7図 3号、4号竪穴住居跡実測図(1/80)

出土遺物

土器 (図版32 第8図)

土師器 燐には1～4がある。1～3は同タイプの小型甌で反り気味に外反する口縁に球形の体部を有する。調製は外面が荒いハケ、内面は左廻りの荒い箒削りで仕上げ、頸部内面は削りによる棱をなす。2の口径14.8cm、3は15.5cmを測る。3は二次加熱を受ける。4は粗いつくりの小型甌で、全体に二次加熱を受ける。口径12.4cm、器高11.7cm。3は半球形の鉢で二次加熱を受け赤変する。カマド内の支脚として再利用されていた。復原口径12.8cm。

須恵器 6はほぼ完形の壺身で口径12.1cm、器高4.25cmを測る。7は高壺の壺部で脚部を欠失する。口径12.1cmを測る。



第8図 3号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

4号竪穴住居跡 (第7図)

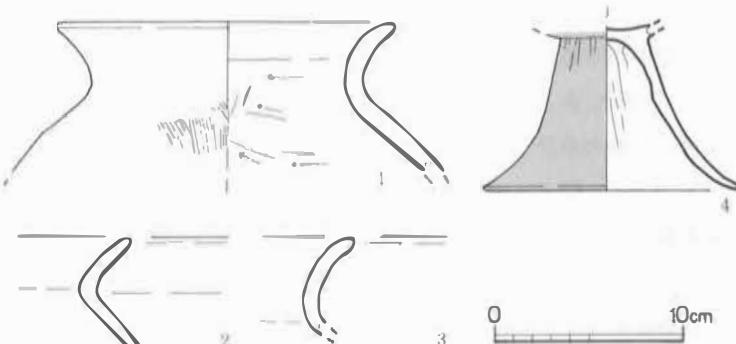
3号を切った状態で出土した小壁の竪穴住居跡である。平面形態は南壁が削平され不明。規模は北壁が3.10m、深さ30.0cmを測る。床面上には柱穴その他の遺構は見当らず、詳細は不明である。

出土遺物は甕、高坏がある。

出土土器

土器(第9図)

4号竪穴住居出土
土器は3号住居との
混入が考えられる。
變形土器3個と高坏
とがある。鋭く外反
する1・2と、反り氣
味に外反する3のタ
イプがある。4の復
原口径18.0cmを測る。

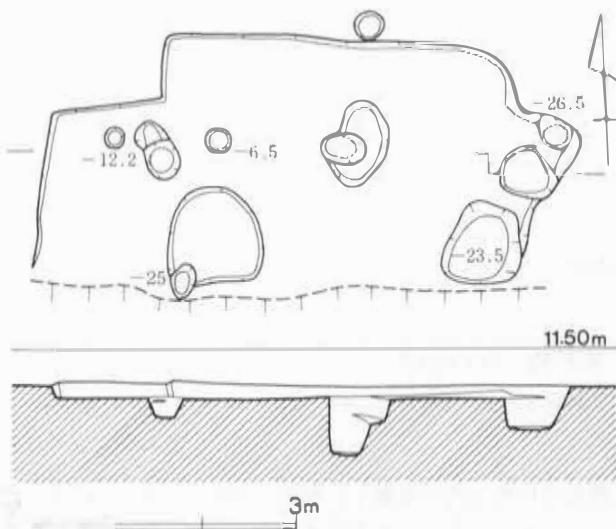


第9図 4号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

4は高坏で精製された土器である。坏部を欠失している。外面は丹塗り磨研で、裾部径13.6cmを測る。

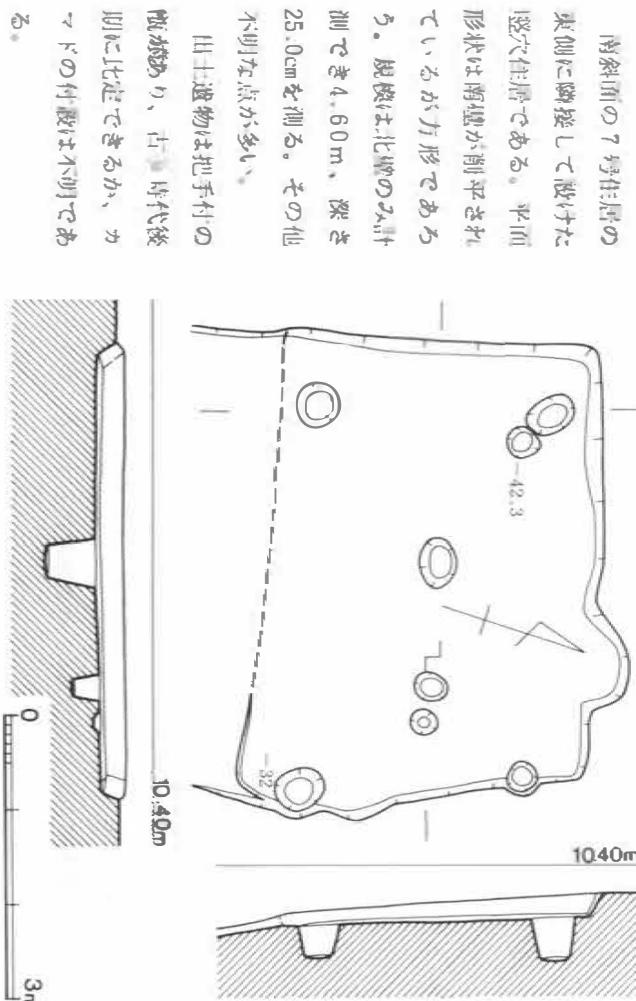
5号竪穴住居跡(第10図)

3号住居の北側に位置する
竪穴住居跡で、約1/2を耕作
による段差で削平されている。
支柱は断面で示した内
の1本が深さ60.0cmを測り、支
柱の1本であることから、南北
に柱間を有す2本柱と考え
られる。北西壁の屈折部分は
ベット状遺構の一部であろう
か。その他詳細は不明で、出
土遺物も無いことから時期も
不明であるが、支柱2本である
ことから弥生時代に比定で
きよう。



第10図 5号竪穴住居跡実測図(1/80)

8号堅穴住居跡（第11図）



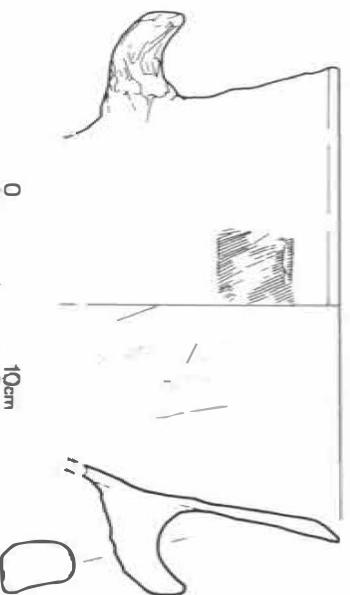
第11図 8号堅穴住居跡実測図(1/80)

出土 遺 物

土 器 (第12図)

実測可能な土器に把手付瓶片がある。体部から口縁部にかけては直線的で、胴部に扁平な把手を貼付している。茶褐色の色調を持ち、復原寸径25.0cmを測る。

9号堅穴住居跡 (図版2-(1)・(2) 第13図)



第12図 8号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)

南斜面の1号住居 重複した堅穴住居跡である。南側壁は遺存しておらず、平面プランは明確でないが方形であろう。北壁の規模は4.20m、深さ20.0cmを測る。支柱は1本であろう。現在ではカマドの付設はみられず、床一面に燧土、炭化木が散在しており、火災に遭遇したことが判る。

出土遺物は土器の鉢・壺・高杯・瓶、瓦、
漆器の环蓋・外身がある。

出 土 遺 物

土 器 (図版32 第148)

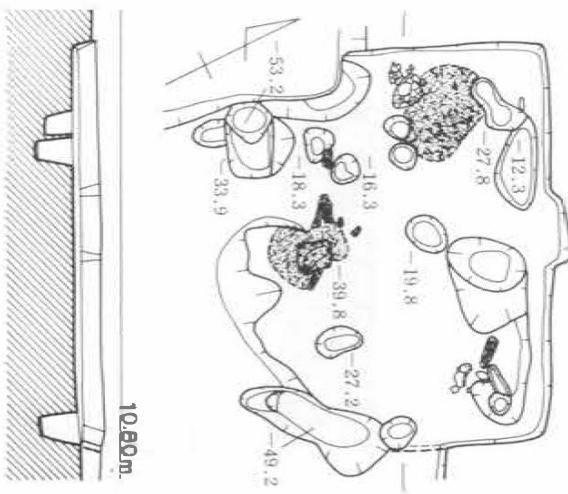
土器 1は蓋の内縁上で反り立ち外反する。復原口径20.6cm。住居の東側落込みから出土。

2は丸か高杯の外縁片で内外面に片を削りする。復原口径12.0cmを測る。精製された土器で3の高杯と同一個体の可能性がある。

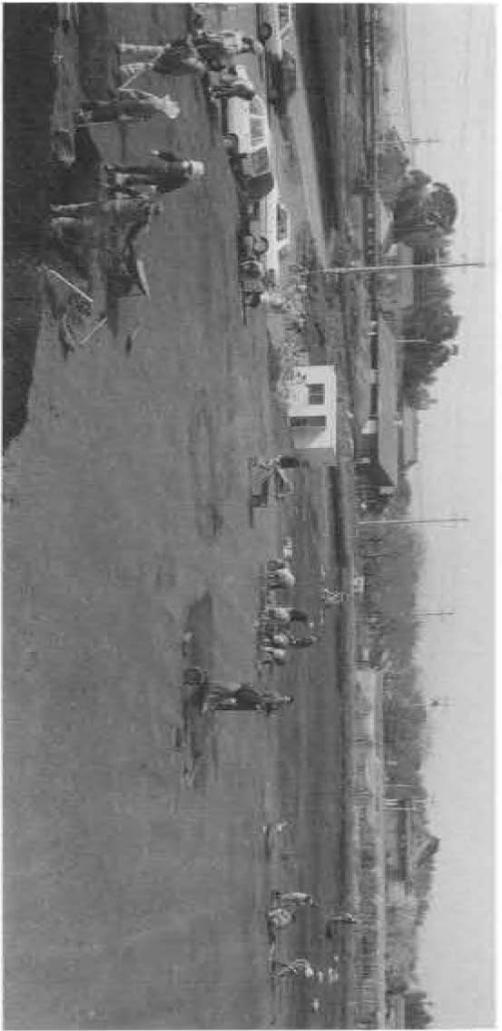
3は高杯の脚部片で2と同様精製品である。器表面が摩耗し内巻りかげかけは不明。1はほぼ完形の把手付盤である。調整は荒いハケと鋸削りで仕上げ、内面に粘土膏の接合面が残る。口径26.6cm、底部10.0cm、器高26.3cmを測る。

漆器器 漆器には环蓋と外身がある。5～8は环蓋ですべて破片である。形態的には5・6

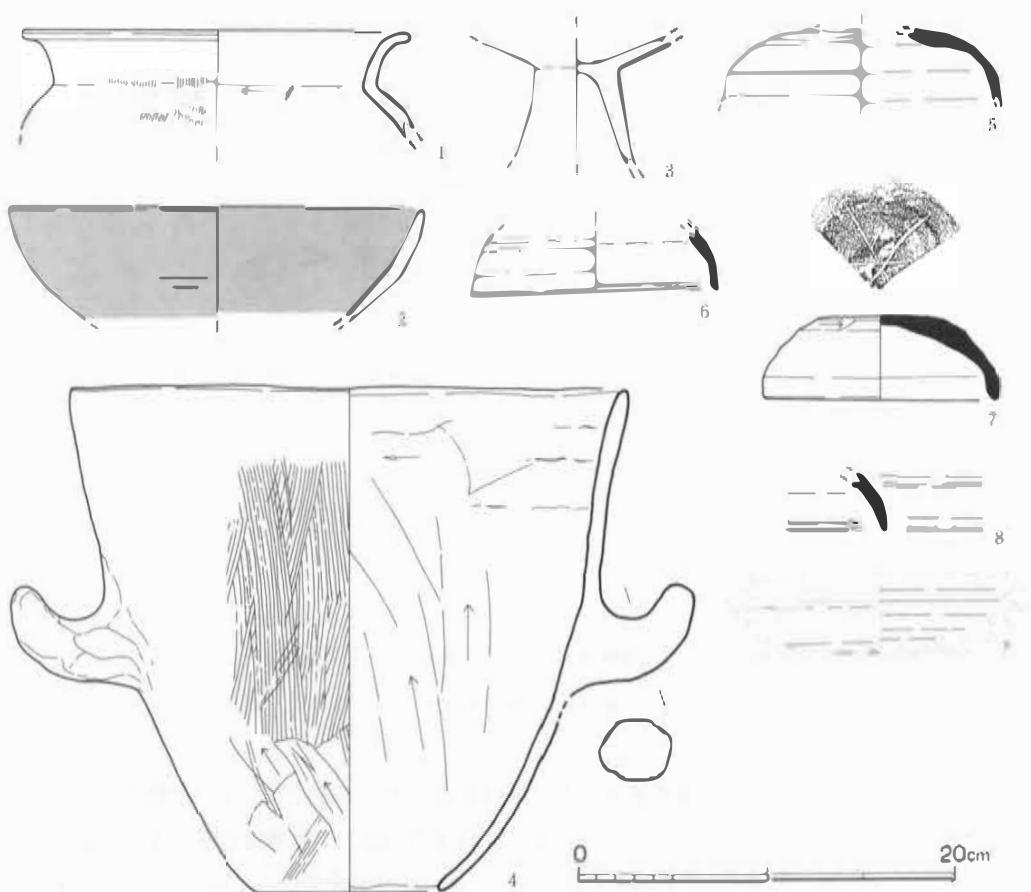
が古くⅢB型式、7・8はⅣA型式となる。6の復原径13.0cm。7は器體が薄く天井外面にはヘラ記号を刻む。復原口径2.4cm、器高4.4cmを測る。9の外身も破片で2/3焼失する。5の外身になるであろう。復原口径13.4cm、器高4.05cmを測る。



第13図 9号竪穴住居跡実測図(1/80)



発掘調査風景



第14図 9号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

10号竪穴住居跡 (図版2-(1)・(2) 第15図)

9号住居より新しい住居跡で南側約1/2を欠失する。規模は北壁で5.0m、深さ40.0cmを測る。西壁際には焼土が残り、不整形ピットの部分はカマドが付設されていたと思われる。その他の付属施設は明らかでない。主軸方位はN56°Wを示す。

出土遺物は甕・塊がある。

出 土 遺 物

土 器 (第16図)

1は小口の窓で、口縁部の外反邊
は鋸い。調査は荒いハケと窓削りで
住上げる粗製土器のある。口径 2.4
cmを測る。

2・3は境の破片で、2の復原口径
12.4cmを測り、内面に煤が付着する。

12号竪穴住居跡

(図版3-(1)・16 第17図)

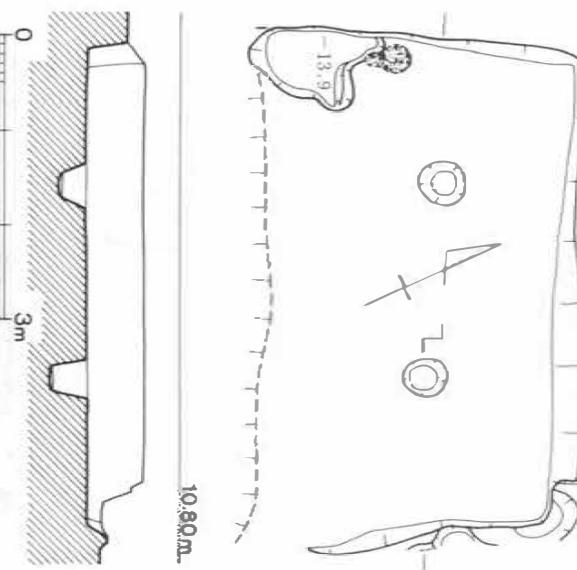
調査区の南西隅で、1した窓穴住
居である。5号・6号窓溝状遺構を
切っており、5号土壌に切られてい、
るため全容は把握できない。平面形
状は方形を呈し、規模は9.0m×
10.0m、深さ10.0cmを測る。現況での
床面積は14.9m²である。支柱は
1本のうちの1本が残る。北西壁
の中央には遺物状態の悪いカマド
が残る。その他詳細は不明である。

遺物は住居の南側から出土して
いるが、図示した土器は5号土壌
の土器も混入して、り時期差があ
る。器種は甕・壺がある。

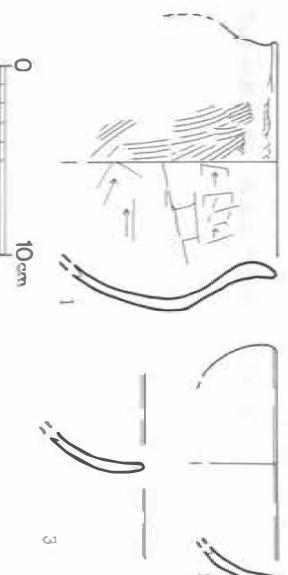
出 土 遺 物

一 器(第18図)

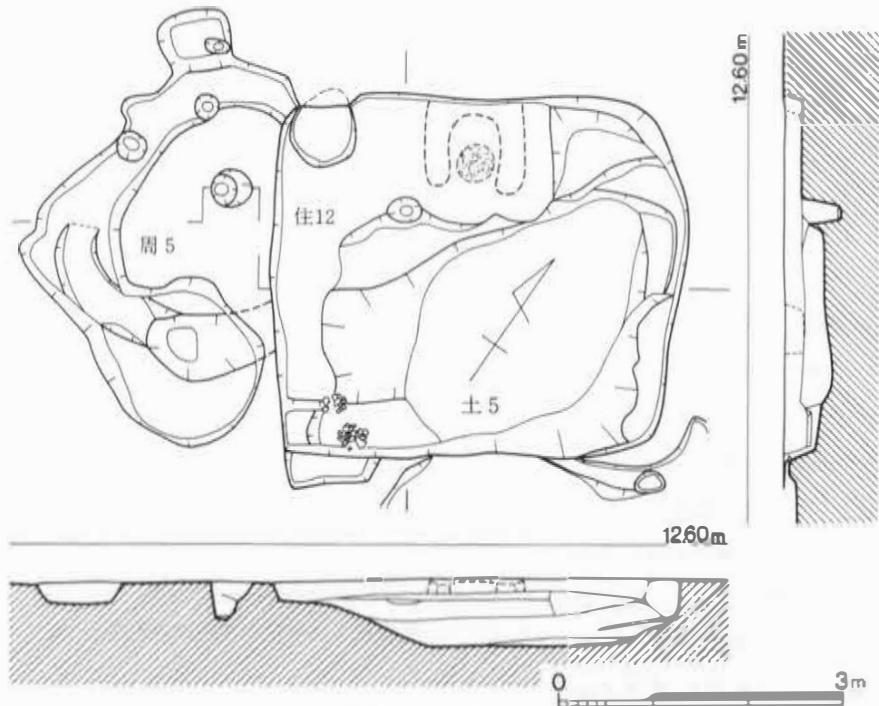
数多くの甕の破片が出土しているが、時期差が認められる窓穴住居と5号土壌が完全に重複する
とから、取上げ時に混入した可能性がある。伴關係からみると1～5、8～10、13が共存すると
考えられ、7世紀中～の農耕の時期が考えられる。これらの土器は、5号土壌に伴うと考えられる。
12号竪穴住居に伴う土器群は、6、7、12、14、15であろう。これらは6世紀の半～終末葉に
[七]定できよう。



第16図 10号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



第15図 10号竪穴住居跡実測図(1/80)



第17図 12号竪穴住居跡、5号周溝状遺構、5号土塘実測図(1/80)

1、2は同タイプの甕で、短頸に鋭く外反する口縁部を有す。復原口径20.0cm、19.0cmを測る。3は鋭く外反する口縁に張りのある肩部を有す。4・10は肥厚する口縁を有し、5、7、8、9は3と同様な口縁形状でありながら肩部の張りは鈍い。6、11、14は器壁が薄く前者の一群に比較すると口縁部の外反度は鈍い。調整は全て荒いハケと箒削りで仕上げる。

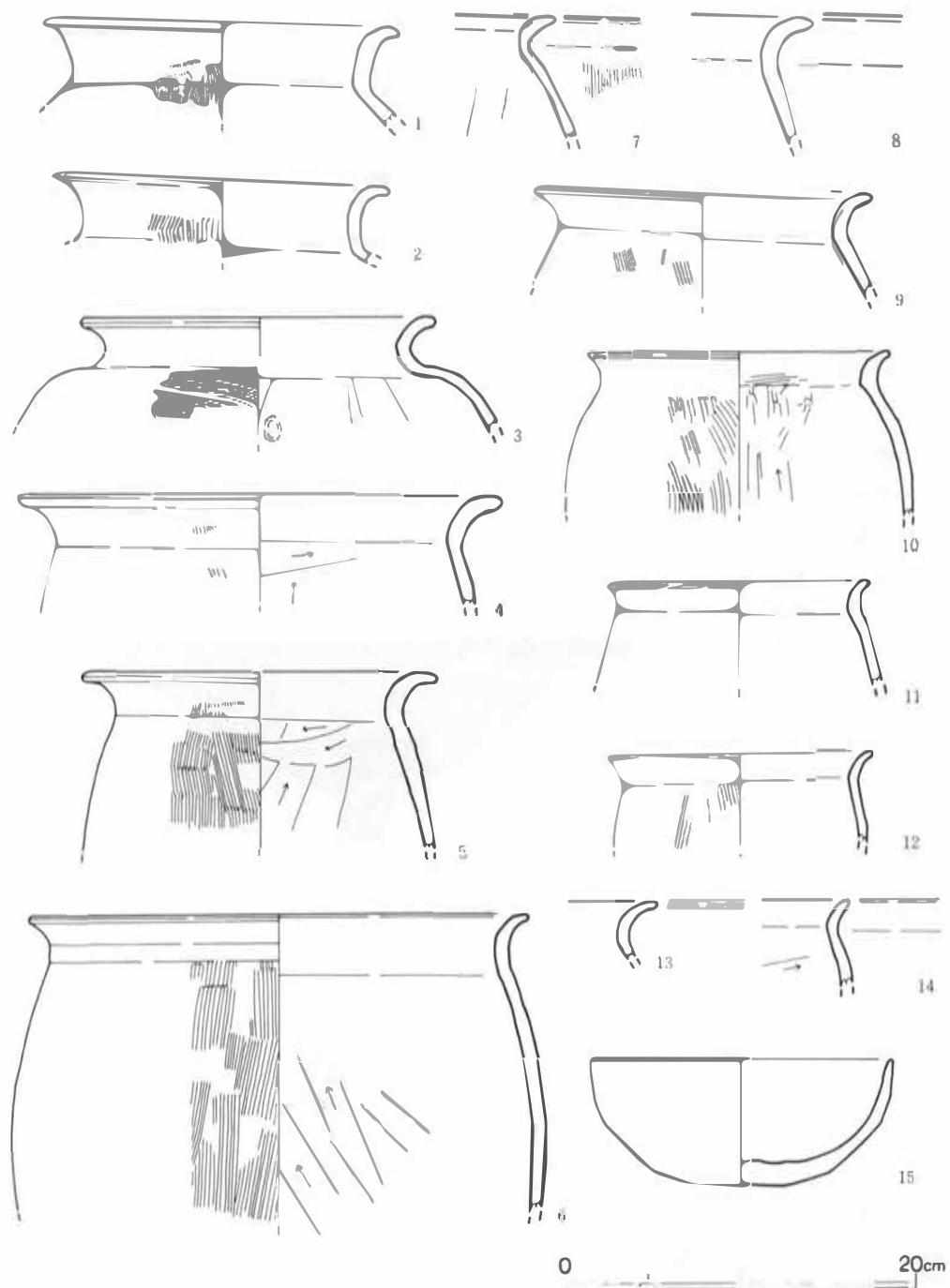
15は器壁の厚い甕で、復原口径17.0cmを測る。住居の堆土中からの出土である。

13号竪穴住居跡 (図版3-(1) 第19図)

調査区の南西側で検出した竪穴住居で、4号櫛立柱建物と重複する。平面プランは方形を呈し、南北壁3.10m・2.80m、東・西壁3.20m・2.90m、深さ10.0cmを測る。床面積は8.70m²を測る。床面は貼床部分を掘ったため2/3が一段深くなる。出土土器からカマドが付設される時期であるが検出できていない。その他詳細は不明。

遺物は甕・壺の破片がある。

出土遺物



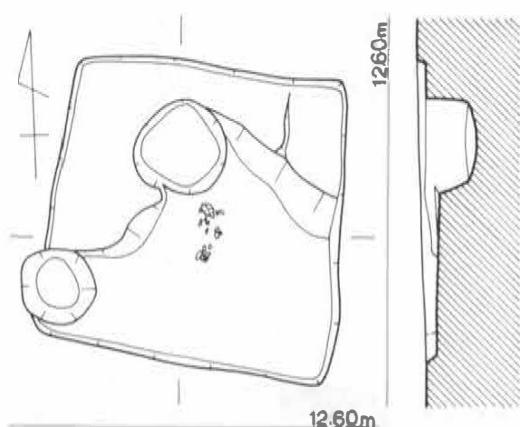
第18図 12号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

土 器 (第20図)

1は小型甕の小片で鋭く外反する口縁部を有す。胎土には砂粒の他、赤褐色粒子を含む。調整はハケと箒削りで仕上げる。床面から出土した。

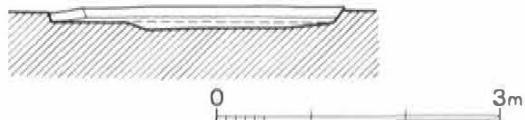
2は甕の小破片で住居跡の埋土中からの出土である。

14号竪穴住居跡出土遺物

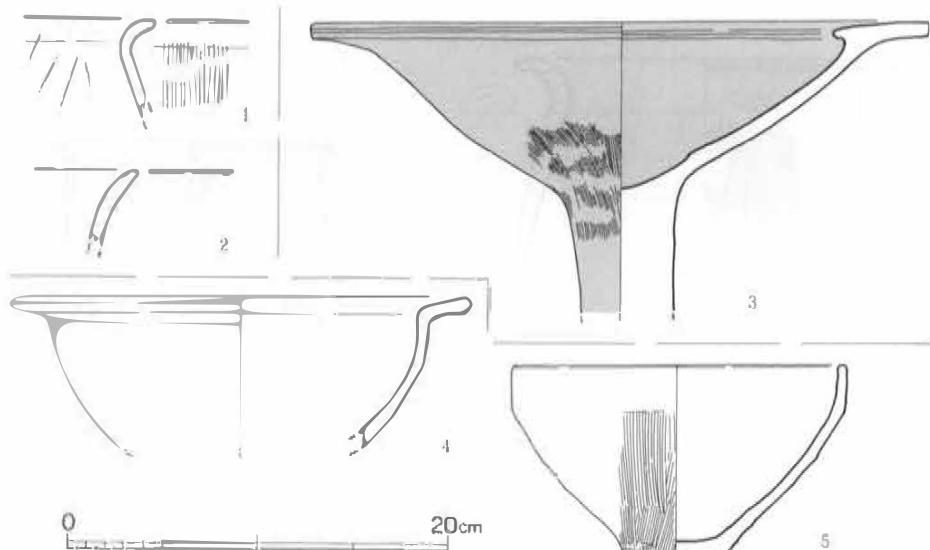


土 器 (図版32 第20図)

3の高杯がある。脚裾部を欠失する。口縁部は鋤先状を呈し、体部の丸味は少ない。現存での脚部はスマートな柱状を



第19図 13号竪穴住居跡実測図(1/80)



第20図 13号-15号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

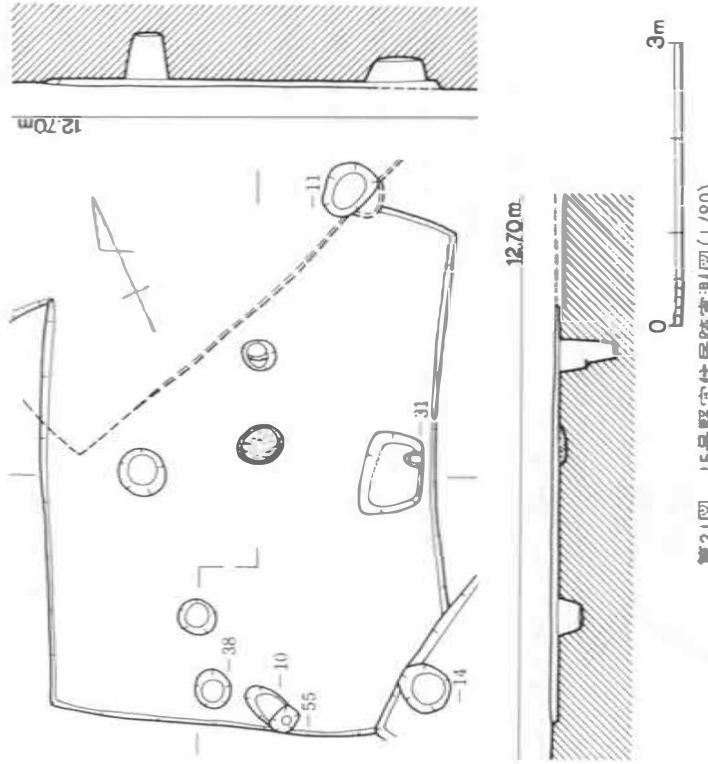
なす。調整は内外面とも丹塗り磨研であるが一部外面に極細のハケが認められる。胎土には微砂粒を多く含む。角閃石と赤褐色粒子も少量含んでいる。口径32.6cm。屋内土壌内からの出土である。

15号⁽²⁾ (住)

図版3-(1) 第21図)

3軒の堅穴住居と
の近縁がある。15号
は17号住居より古
く、104号住居より
新しい、平面形状は
長方形を呈する。北
壁は大半が農道によ
り削平を受けている
ため、規模の推定の
できない。支柱は2
本と思われるが、南
側の1本は検出でき
ていない。床面中央
には径40.0cm、深さ
5.0cmのかいを削込ん
でおり、底面には焼
痕が残る。東壁付近には陽向長方形の堅り土壙を設けている。長辺85.0cm、短辺60.0cm、深さ
25.0cmを測る。

遺物は高环・鉢が、る。



第21図 15号堅穴住居断面図(1/80)
15号は陽向長方形の堅り土壙を設けている。長辺85.0cm、短辺60.0cm、深さ25.0cmを測る。

出土遺物

土器(第20図)

4は高环の环部片で、内側する逆「L」字状の口縁部を有し、胴部は平底形状を呈する。胎上
は高环にしては砂粒を多く含み、黄味橙色を呈する。復原口径24.2cmを測る。

5は直口鋏で細味の底部を作す。調整は外面がハケ、内面はナデで仕上げる。外面に二次加熱
を受け淡く赤変する。口径17.6cm、底径5.7cm、基部9.8cmを測る。

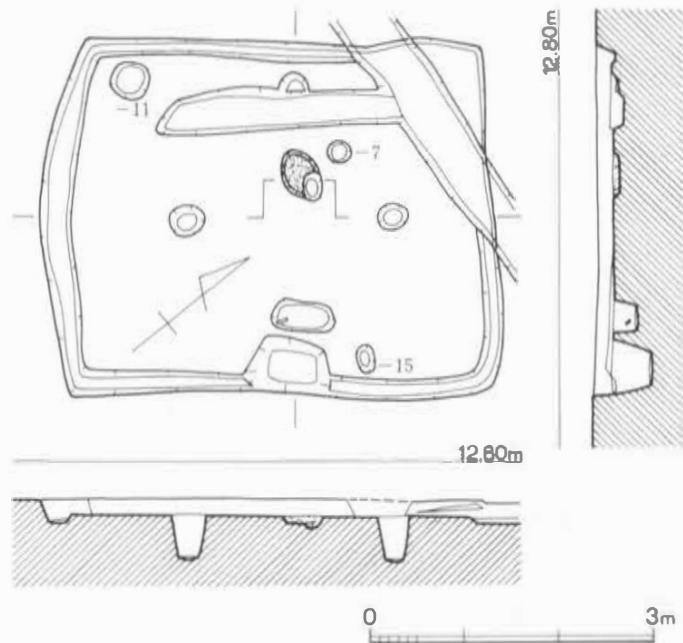
16号堅穴住居跡(図版3-(2)・16 第222図)

調査区の西側で検出した堅穴住居跡で、平面形態は長方形を呈する。北側は細い農道で擾乱さ

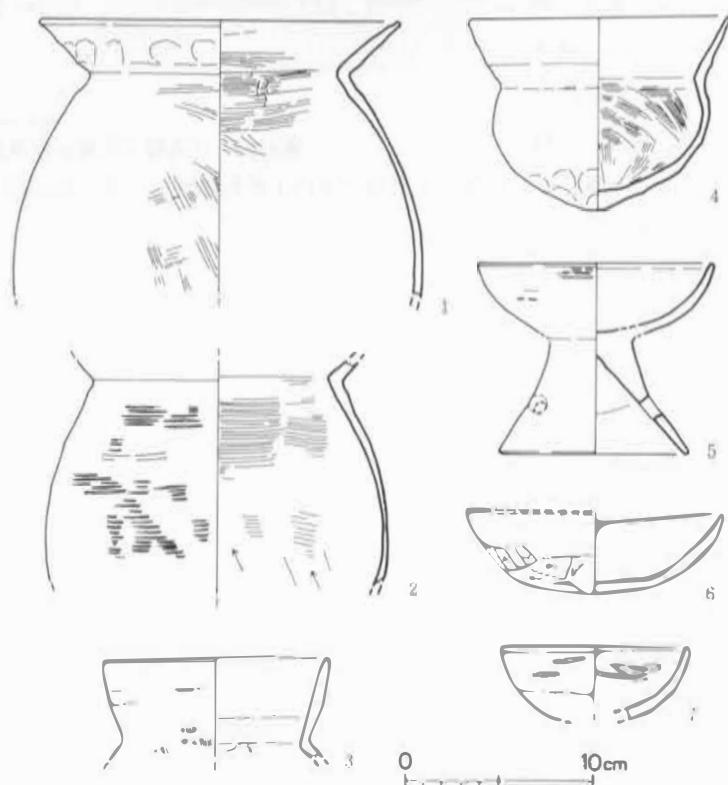
れている。規模は長辺4.20・4.50m、短辺は3.64・3.80m、床面までの深さ15.0cmを測る。床は硬く踏締められ、面積は16.19m²である。支柱は2本で48.0～50.0cmを測り、柱間は2.20mである。支柱間に楕円形の浅い穴を掘込み、中は赤く焼痕が残る。長壁の際には長軸80.0cm、短軸56.0cm、深さ42.0cmの屋内土壌を掘り、幅広の周溝と繋がる。屋内土壌の傍には深さ26.0cmの楕円形の土壌を掘込んでおり、中から流れ込んだ状態で砥石が出土している。西側の床面には周溝に並行して幅40.0cm、深さ10.0cmの溝が掘られているが、この上面は貼床を施していた。主軸方位は2本の支柱からN 39°Eを示す。

遺物は土器、石器があり、器種は甕・小型丸底・高杯・壺その他、砥石が出土している。

出土遺物



第22図 16号竪穴住居跡実測図(1/80)



第23図 16号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

+ 器 (図版32・33 第23図)

1・2は所謂庄内式の雙形土器であるが、最大径が腹中央から下部にある。庄内式特有の「く」字状に外反する口縁部を有し、頸部内面の稜は明顯である。調整は1の外面が叩き痕と不定方向のハケが僅かに残り、内面は頸部付近に横ハケ、肩部は鷹削りを施す。口縁外面には指頭圧痕を残す。2は外面が横方向の細い叩き、内面は横ハケと鷹削りを行する。两者とも赤褐色粒を多く含む。1の復原口径19.0cmを測り、壙土中から出土である。

3・4は小型丸底盤である。3は他の土器よりも新規を呈し、進入(5世紀初頭～前葉略)の可能性が強い。口縁部は僅かに内湾し、棕褐色を呈する。復原口径12.0cmを測る。壙土中から出土である。4は庄内式盤に共作する小型丸底で、直線的に口縁部は延び、体部は肩胥球を呈する。底部は尖り底である。調整は外筋がナデ。体部内面は細いハケを施す。口径13.7cm、器高10.1cmを測る。

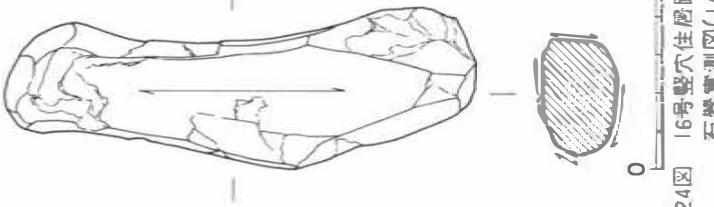
5は筒状で外縁は浅い塊状を呈する。脚部は無い、スカート状で、1/4の残存のため明らかでないが、穿孔は3ヶ所であろう。調整は器内面が摩耗しているが、驚異と考えられる。(1) 筒径5cm、脚部復原径10.0cm、器高9.9cmを測る。

壙土中から出土である。

环は6・7がある。6はつくりが粗く外筋底部付近は鷹削りを施す。7はやや小振の杯で磨擦で仕上げている。外面には黒塗り(漆?)が残る。前者の復原口径13.6cm、器高4.3cmを測り、貼床中から出土である。後者は復原口径10.0cmを測り、壙土中から出土である。

石 器 (図版33 第24図)

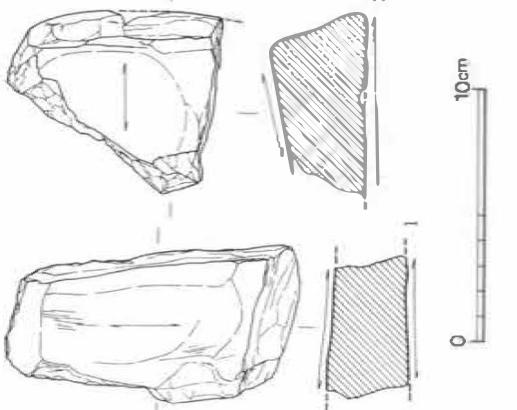
手持ちの仕上げ砥石が1点ある。石制は片岩質砂岩で、前面は平面である。全長12.5cmを測り、4面とも研込まれ凹面状を呈する。壙内土礫に隣接するビット内から出土した。



第23図 1号・2号庄内式土器実測図(1/2)



第24図 6号豊穴住跡出土石器実測図(1/2)



第25図 18号豊穴住跡出土石器実測図(1/3)

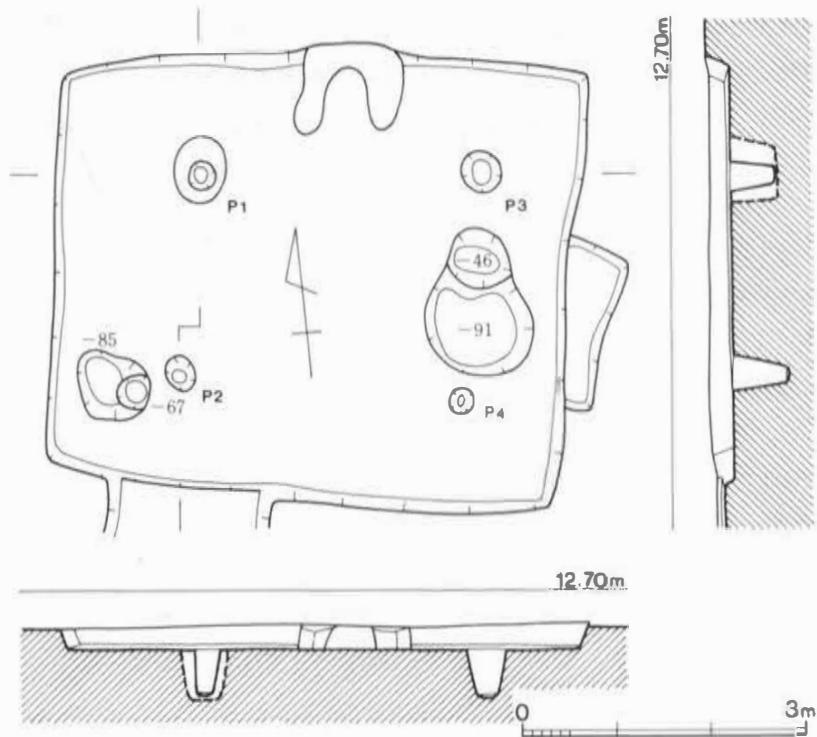
18号豎穴住居跡出土遺物

石 器 (図版33 第25図)

大小の砥石が3個出土している。1は粘板岩質砂岩で、研面は2面を使用している。現存長11.0cm、厚さ3.0cmを測る。仕上げ砥石である。2は砂岩の砥石で2面を使用している。荒砥である。3は硬質砂岩製の仕上げ砥石で、研面は3面でかなり使用され研ぎ減りが認められる。現存長15.0cm、厚さ2.0cmを測る。

19号豎穴住居跡 (図版4-(1)・16-(4)・17-(1) 第26図)

33号豎穴住居を切った状態で検出した豎穴住居で、平面形状は歪な長方形を呈する。規模は南・北辺5.40m・5.50m、東・西辺4.60m・4.10m、深さ20.0cmを測る。床面積は23.06m²である。支柱は4本を数えるが、住居の柱間空間が平面プランに沿った形状を呈する。柱間はP₁-P₂が2.14m、P₁-P₃が3.00m、P₂-P₄が3.00m、P₃-P₄が2.40mを測る。



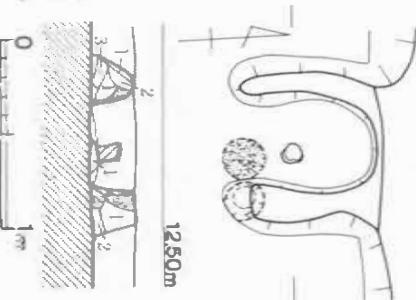
第26図 19号豎穴住居跡実測図(1/80)

北壁の中央には「ひ」字状のカマドを設けている。カマドは黄褐色粘土と黒灰色土で構築し、中央には黄褐色の粘土の跡よりの「」に土製支脚を立てている。支脚は焼めて黒い、二次加熱を受け非常に脆く壊し時に破壊した。

主軸方位は支材の南北線上で N 12° E を示す。遺物はカマド周辺から出土しており甕、鉢、手摺ね土器の他、不明石器、土製品がある。

出 土 遺 物

1. 明鏡(5粘土)
2. 黑灰色土
3. 黄褐色粘土



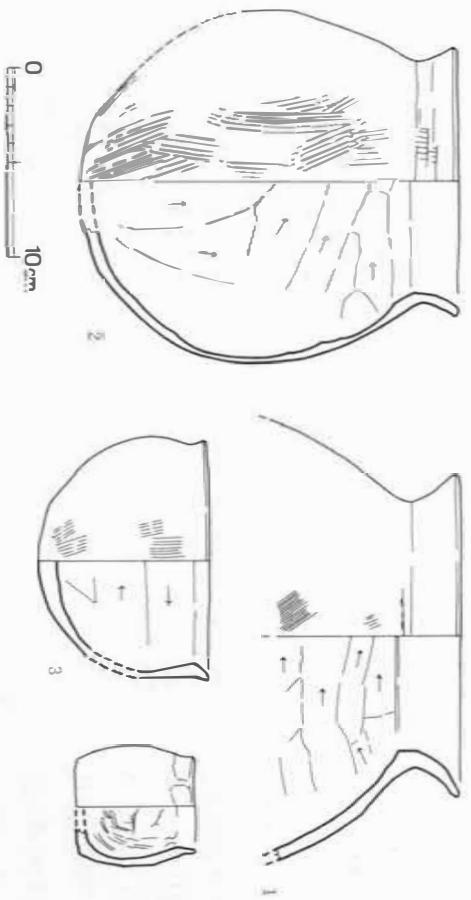
第27図 19号竪穴住居跡カマド
実測図(1/40)

土 器 (図版33 第28図)

甕には1、2の2タイプがある。1は反り甕に外反する

細狭の口縁を有し、肩部はやや膨らみ、一見壺の形状を有する。2は純く外反する口縁部を持つ。肩部は擦痕で崩れから下部にかけ2は丸味を行す。調者とも調査は内面が荒い、窓削り、外面が荒いハケで仕上げる。2の器壁は薄い。1は埋土中からの出土で、口径17.0cmを測り、2は11.5cm、器高18.7cmを測り、カマド左側傍から出土した。全体に二次加熱を受けが変する。3は半球形状の鉢で、口縁部は肥厚させ僅かに外反する。調査は窓削りとハケで仕上げ、外面に二次加熱を受ける。口径12.4cm、器高9.05cmを測る。カマド右側から出土。

4は手摺ね土器で約1/2残存。平底を呈し、後原口径5.1cm、底径5.0cm、器高6.2cmを測る。



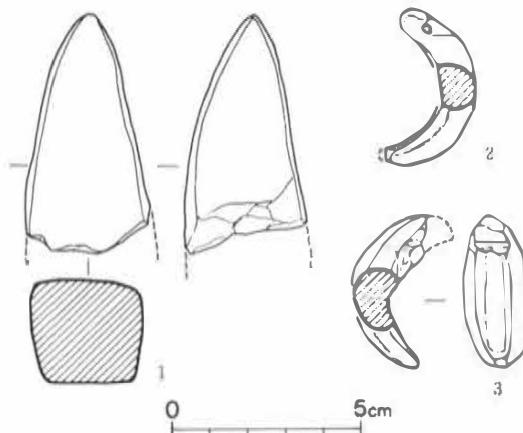
第28図 19号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

石 器 (図版29)

1は方柱状の不明石器である。一方は尖る。表面が風化し灰白色を呈する。石材は安山岩質である。埋土中から出土した。

土 製 品 (図版33 第29)

2、3は土製の勾玉である。2は細味のつくりで内側を扁平にする。全長4.1cmを測り、胎土・焼成とも良い。カマド右傍から出土。3の勾玉は2よりも粗いつくりで、内側は凹面をなす。胎土、焼成とも2同様良い。全長4.0cmを測り、カマド内から出土した。

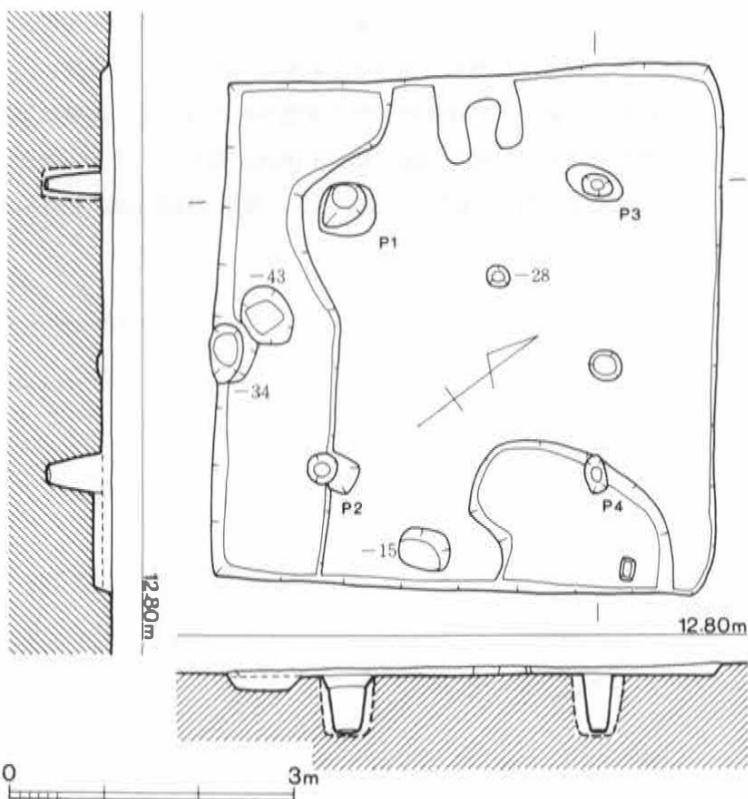


第29図 19号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2)

21号竪穴住居跡

(図版3-2 第30)

31と32号竪穴住居（殆ど遺存しておらず実体不明）と重複した住居跡である。平面プランは方形を量し、規模は一辺5.20(北壁は5.60m)mを測る。床面までの深さは10.0cm弱で遺存状態は悪い。床面積は26.29m²である。南西壁沿いは住居の掘削時に深く掘り、後に貼床を施している。支柱は規則



第30図 21号竪穴住居跡実測図(1/80)

性のある4本柱で、柱間はP₁—P₂は2.90m、P₁—P₃は2.65m、P₂—P₄は2.90m、P₃—P₄は3.05mを測る。

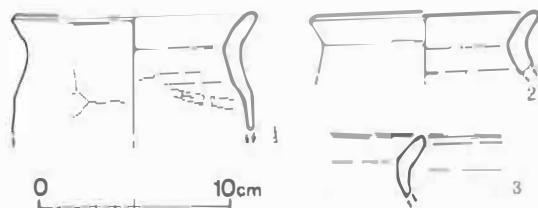
カマドは北西壁に付設するが、住居自体の遺存状態が悪いため不明な点が多い。カマドの付設する方向は、12号住居と同一方向をとる。住居の主軸方位はN 53° Wを示す。

出土遺物は少なく小型の甕がある。

出土遺物

土器(第31図)

1～3の小型の甕がある。いずれも破片で粗いつくりである。口縁部は厚く、しかも「く」字状に緩く外反する。全て二次加熱を受ける。1の復原口径13.0cm、2は12.2cmを測り、埋土中からの出土である。

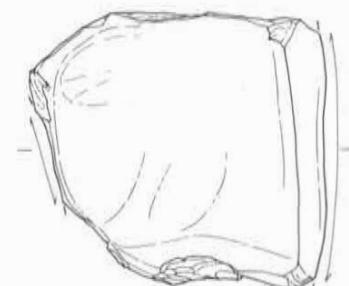


第31図 21号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

22号竪穴住居跡出土遺物

石器(第32図)

砂岩製の砥石が1点ある。研面は4面で、荒砥として使用したものであろう。現存長10.5cmを測る。屋内土壌からの出土である。



23号竪穴住居跡出土遺物

石器(図版33、第33図)

大小の砥石が3点出土している。1は大型の花崗岩質砂岩製の砥石で、表裏の2面を研面とする。周縁は自然面を残す。2面とも使用頻度が高く凹面をなす。現存長22.3cm、厚さ4.0cmを測る。床面からの出土である。2は手持の仕上げ砥石で、現存での研面4面を残す。灰白色を呈し、花崗岩質砂岩製であろう。側面には鋭い研痕がある。埋土中からの出土である。3は全長4.5cmの小型の仕上げ砥石で断面は三角形を呈する。石材は鉢型に使用されるもので、花崗岩質砂岩かアプライト



第32図 22号竪穴住居跡出土石器
実測図(1/3)

製であろう。研面は3面である。住居のピット内からの出土である。

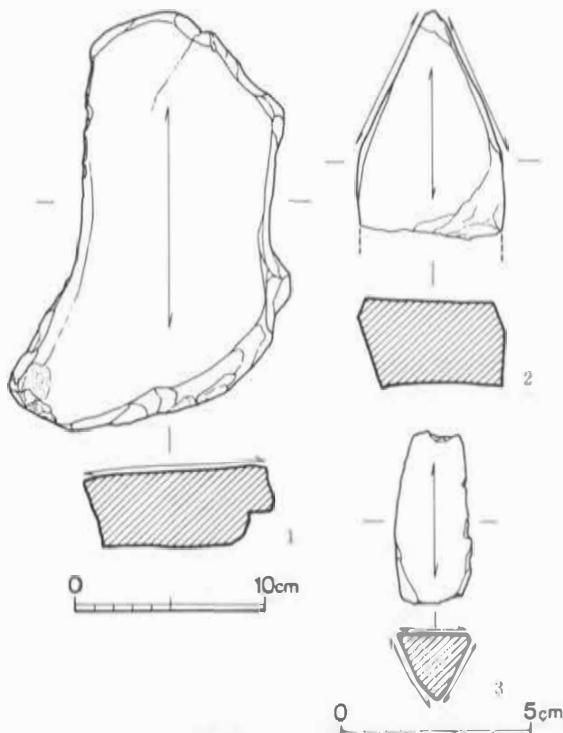
24号竪穴住居跡出土遺物

石 器 (図版33 第34図)

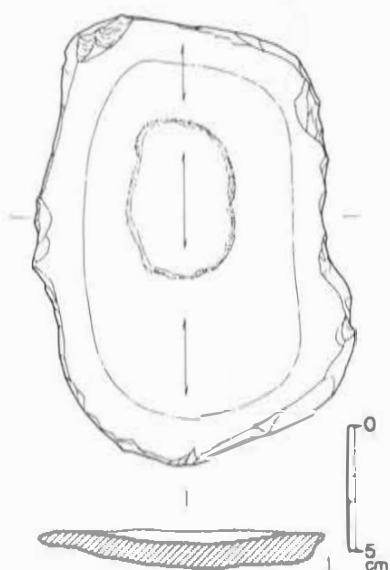
1は緑泥片岩製の石皿があるが、砥石として使用した可能性もある。凹状の平滑な面は表のみで他は自然面を残す。周縁は欠失している。これに伴う摩石は出土していない。現存長17.5cm、厚さは中央部で1.0cmを測る。屋内土壇からの出土である。

2は輝緑凝灰岩製の石庖丁片で2/3を欠失する。刃部の研ぎ出しは鋭く、背は丸くつくられる。床面からの出土である。

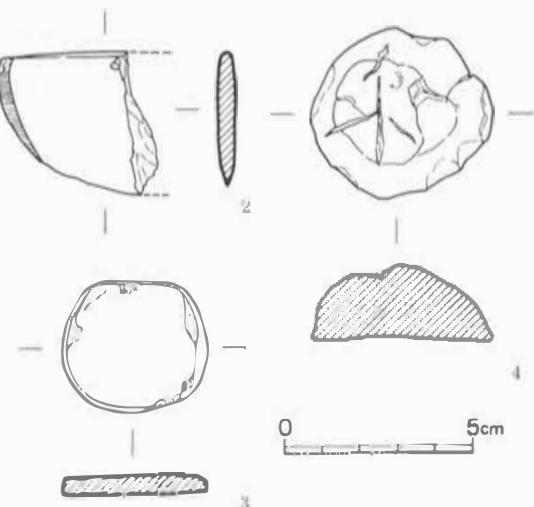
3は雲母片岩の石製円盤である。周



第33図 23号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2・1/4)



第34図 24号竪穴住居跡出土石器実測図(1/3)



第35図 24号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2)

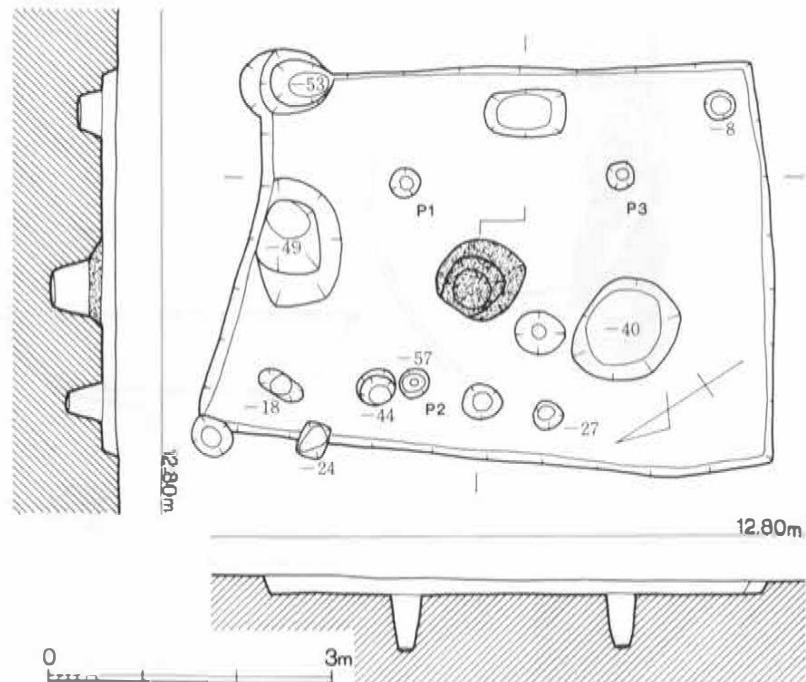
縁は丁寧な面どりをしている。径は3.9cm×3.5cm、厚さ0.5cmを測る。重さは15.6gである。

土製品(図版33 第35図)

4の蓋状土製品がある。断面形は鉗状を呈する。胎土はやや粗く、焼成は良い。径は4.8cm×4.5cmの不規則円形を呈する。厚さは2.0cmを測る。屋内土壇からの出土である。

27号竪穴住居跡(第36図)

21号住居の南西に位置する住居跡で31、32号住居と重複する。平面形状は長方形を呈するが北壁は歪む。規模は長辺が5.20m・6.10m、短辺3.90m・4.30m、床面の深さ15.0cm前後を測る。床面積は20.49m²である。支柱は4本で、この内の1本は検出できていない。柱間はP₁—P₂



第36図 27号竪穴住居跡実測図(1/80)

が2.10m、P₁—P₂ 2.30mを測る。東壁沿いには楕円形の屋内土壇を擁っている。床面中央部のピットは弥生時代後期のもので、炉址と重複していた。炉の周囲には炭化材が床面上に接しており、焼失住居であることが判る。

遺物は壺・甌・瓶・高杯・支脚・手握ね土器の他、砥石がある。

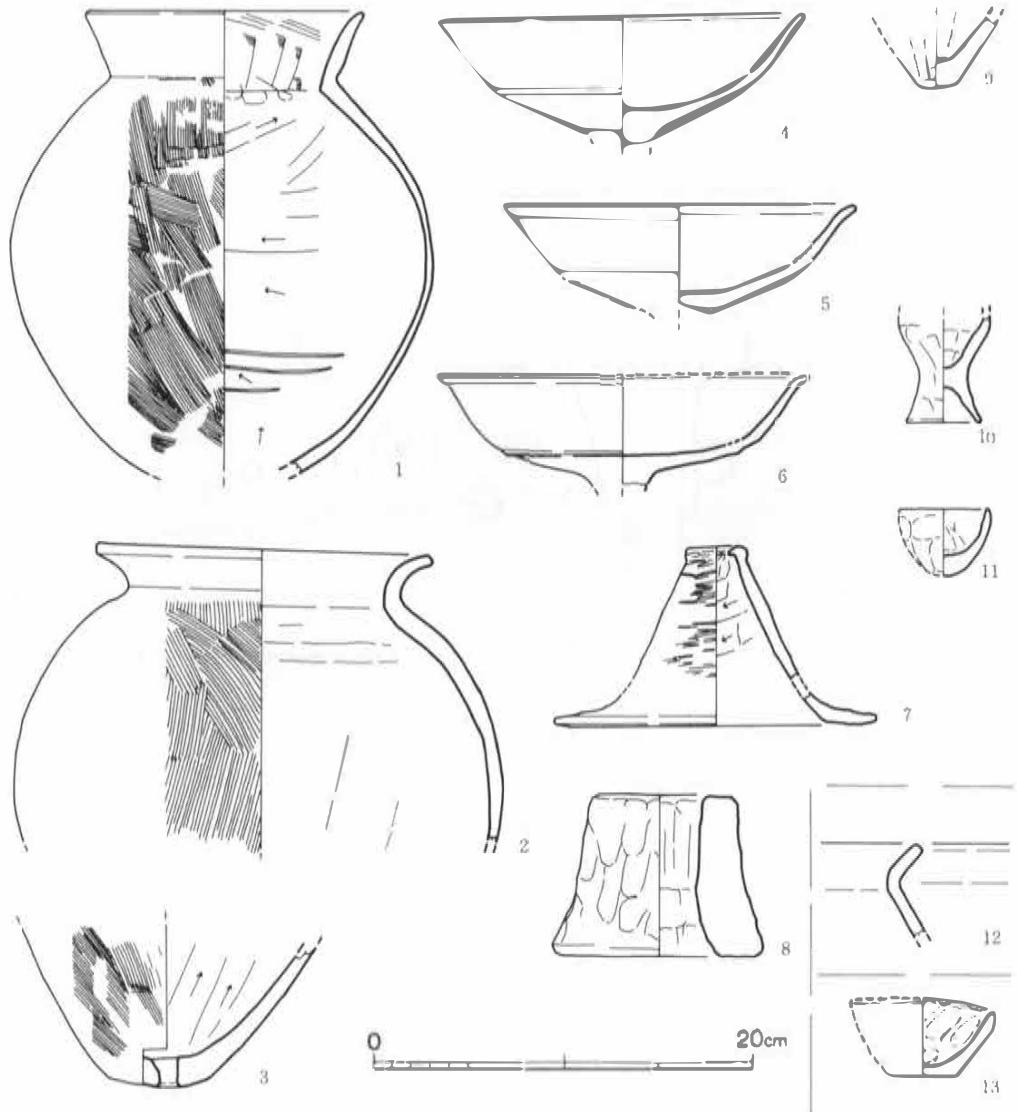
出土遺物

土器(図版33・34 第37図)

1、2の壺がある。1は「く」字状に外反した口縁部に球形の体部を有した壺である。調整は

外面がやや細かいハケ、胴部内面は箆削りで仕上げ、器壁を薄くする。二次加熱を受け外面に煤が付着する。口径14.6cm、胴部最大径22.2cmを測る。屋内土壙内からの出土である。2は鋭く外反する短い口縁部に張りのある球状胴部を有す。調整は外面が1に比較して荒いハケ、内面は箆削りで仕上げるが1よりも器壁が厚い。胎土、焼成とも1より劣る。口径17.7cmを測る。埋土中からの出土である。

3は瓶で尖り氣味の丸底に焼成前の孔を穿つ。調整はハケと箆削りで仕上げる。おそらく砲弾



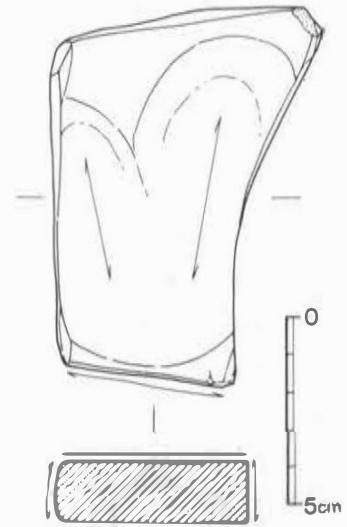
第37図 27号～29号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

状の瓶であろう。

高杯は4～7がある。4・5は同タイプの杯部で、6の底部は平坦で体部は丸味を有す。口縁部は総じて緩く外反し、6は外反度が強い。4の口径19.2cm、5は18.5cm、6は復原口径19.6cmを測る。7の脚部はスカート状に聞く柱状部を有し、裾部で強く屈折する。調整は外面横方向の細い磨き、内面は横方向の箝削りで仕上げる。精製な高杯である。裾部復原径17.0cm。全て埋土中からの出土である。

8は器高の低い支脚で器壁を厚くつくる。調査は指頭圧痕とナデで仕上げる。全体に二次加熱を受け赤変する。口径7.6cm、底径11.2cm、器高8.4cmを測る。

手捏ね土器は9～11がある。10は径4.0cmの脚台が付く。全て埋土中から出土した。



第38図 27号竪穴住居跡出土石器
実測図(1/2)

石 器 (図版34 第38図)

砂岩質の中低がある。すべての面を研面とし、使用頻度が高く凹面をなす。現存長10.0cmを測る。住居内のピットからの出土である。

28号竪穴住居跡出土遺物

土 器 (第37図)

12は「く」字状に外反する口縁部を有す甌である。焼成は良く、胎土に砂粒の他、赤褐色粒子を若干含む。埋土中からの出土である。

29号竪穴住居跡 (図版4 第39図)

弥生時代後期の105号住居と完全に重複した竪穴住居跡で、28号住居を切っている。平面形態は歪な長方形を呈し、規模は長辺5.66m・5.20m、短辺3.20m・4.40m、床面までの深さは10.0～20.0cmを測る。床面積は20.05m²である。支柱は4本であるが、その内の1本は不明である。柱の配置も平面プランに沿った位置に拘んでいる。

一方の長辺壁には「U」字状のカマドを付せるが、調査時に破壊した。カマドを付設する位置は柱間からみると片寄っている。住居の主軸方位はN44°Wを示す。

出土遺物の図示可能なものは手捏ね土器があるが、弥生時代の土器であり混入であろう。住居

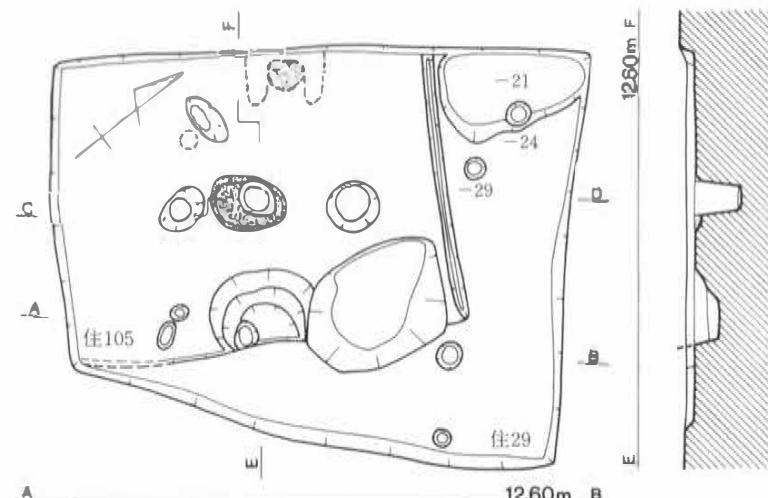
の時期はカマドの付設状況から12号、21号住居と同一時期であろう。

出土遺物

土器

(図版34 第37図)

13の手捏ねの鉢がある。復原口径7.6cm、底径3.5cm、器高4.1cmを測る。住居内のピットからの出土で混入である。

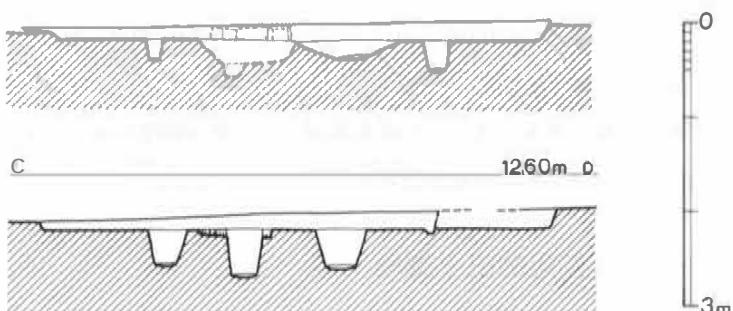


30号竪穴住居跡出土遺物

土製品 (第40図)

二次加熱を受けた土器片再利用の土製円盤がある。周縁の面取りは粗く、一方

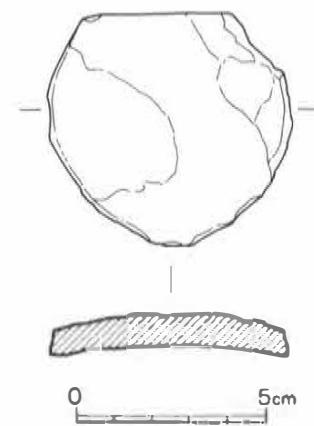
は直線的に磨る。6.4cm × 6.0cmを測り、重さ38.3gである。埋土中からの出土である。



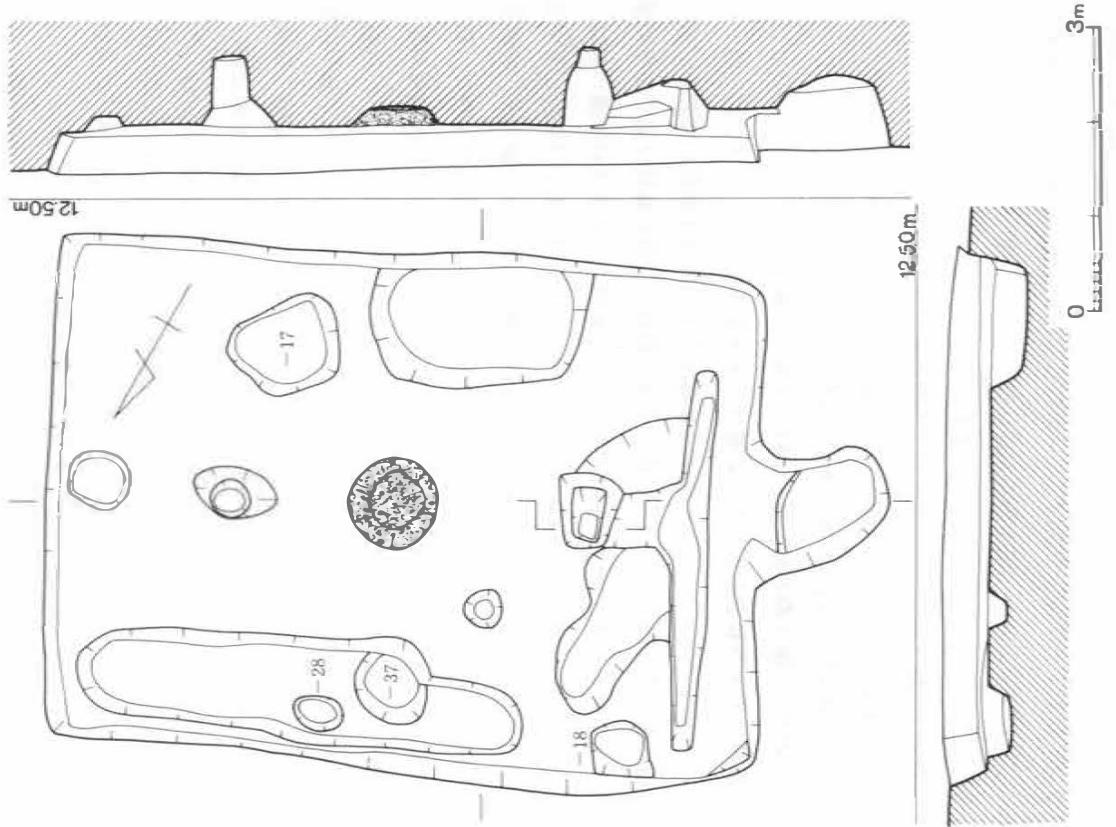
第39図 29号、105号竪穴住居跡実測図(1/80)

34号竪穴住居跡 (図版5-(1)・17-(2)(3) 第41図)

調査区の南側で検出した大型の竪穴住居跡である。平面プランは長方形を呈する。規模は長辺7.50m、短辺5.10m・5.30m、床面までの深さ45.0cmを測る。床面積は37.33m²である。支柱は2本で、西側の柱穴は方形を呈する。柱間は3.80mを測る。柱間の中央には円形の炉を設け、内面は焼痕が著しい。北壁沿いには長円形の掘込みがあるが上面は貼床を施していた。南壁際には長軸2.26m、短軸1.40m、深さ38.0cmの屋内土壙を備えている。さらに、西側壁と支柱間に長さ4.0m、幅30.0



第40図 30号竪穴住居跡出土
土製品実測図(1/2)



第41図 34号堅穴住居跡測定図(1/80)

cm~40.0cm、深さ50.0cmの溝を掘込んでいる。この溝の機能を考える上で知りに突出した薪込み部を出入口とすれば、この溝は一種の簡便な玄関を構成するものもできよう。住居の主軸方位は柱間軸を探用すればN65°Eを示す。

遺物は多く、床面直上の埋土中に検索された状態で出土した。器種は壺・甌・鉢・高杯・器台・手摺ね土器の他、砥石がある。

出 土 遺 物

土 器 (図版34・35 第42・43・44・45図)

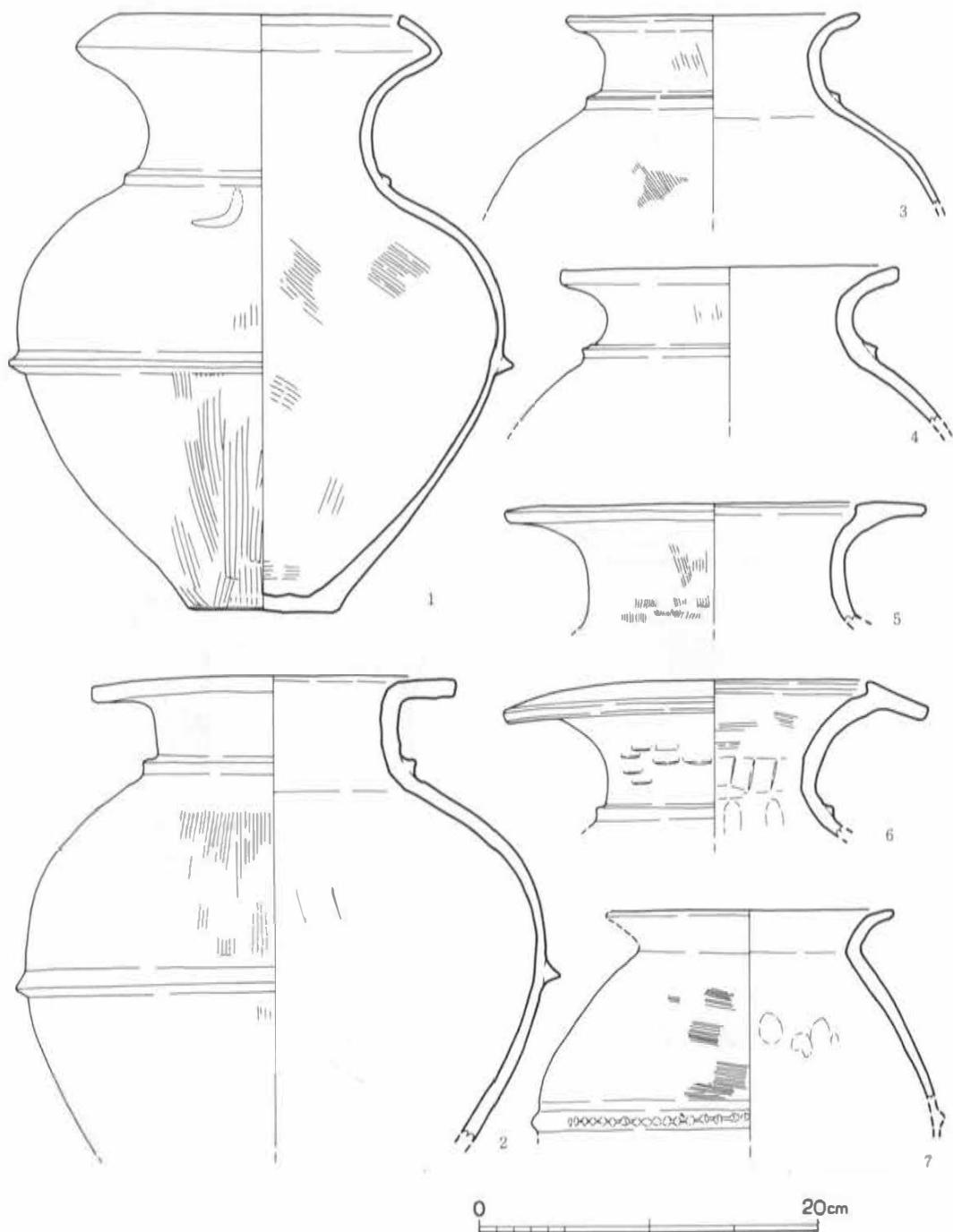
壺は1～10がある。1は所謂袋状口縁壺で口縁内外に不明瞭な稜をなす。頸部は短かく、肩部は大きく張る。肩部に三角凸帯、胴中央部には台形凸帯を貼付する。復原口径16.6cm、底径8.9cm、器高35.1cmを測る。埋土中からの出土である。2は鋤先口縁壺の系譜を引く壺で、鋤先部は退化する。肩部と胴部に三角凸帯を貼付する。外面は二次加熱を受ける。復原口径21.4cm、胴径32.0cmを測る。埋土中からの出土である。3、4は2から発達した壺で形態的には新相を呈する。3の口径17.4cm、4は20.0cmを測る。両者とも埋土中からの出土。5、6は鋤先口縁壺で、6の口縁上面は外傾する。5は二次加熱を受ける。前者の口径24.8cm、後者は25.0cmを測る。7は外反度の鈍い口縁の壺で肩部は撫肩である。胴部には低い三角凸帯に棒状の刻み目を配する。復原口径17.0cm。8は鈍く外反する口縁部を有し、直口壺に近い。胴部は大きく張り、最大径が胴中央部にある。胴部の凸帯は剥離する。口径16.9cm、底径8.8cm、器高32.9cm、最大径30.9cmを測る。9、10は口縁部は欠失する。両者とも胴中央部に台形凸帯を貼付する。9の胴部は張りがあり安定感がある。壺の調整は総じて外面ハケ、内面ナデで仕上げる。全て埋土中からの出土である。その他、口縁に円形浮文を貼付する大型壺がある。

甕には11、13～17がある。13、15は同タイプの甕で「く」字状に外反する口縁部を有すが、頸部内面の稜は不鮮明である。肩部は張りがある。13の口唇部は沈線が廻る。両者とも二次加熱を受けている。13の口径33.0cm、底径9.7cm、器高41.7cm、15は口径32.0cmである。14は低い脚台付の尖形品で13に比べると口縁は立ち、頸部内側の稜も明瞭である。肩部は張り、胴下半は細まる。口径36.0cm、底径12.9cm、器高47.7cmを測る。11、16、17は小型の甕で11の底部は大きく安定感がある。16は二次加熱を受け赤変する。17は逆「L」字状の口縁に扁平な胴部を有すタイプで丹塗り土器として使用される甕であるが、17の甕は調整を荒くハケで仕上げる。口径15.2cm、底径7.3cm、器高13.9cmを測る。調整は総じて外面ハケ、内面はハケとナデで仕上げる。全て埋土中からの出土である。

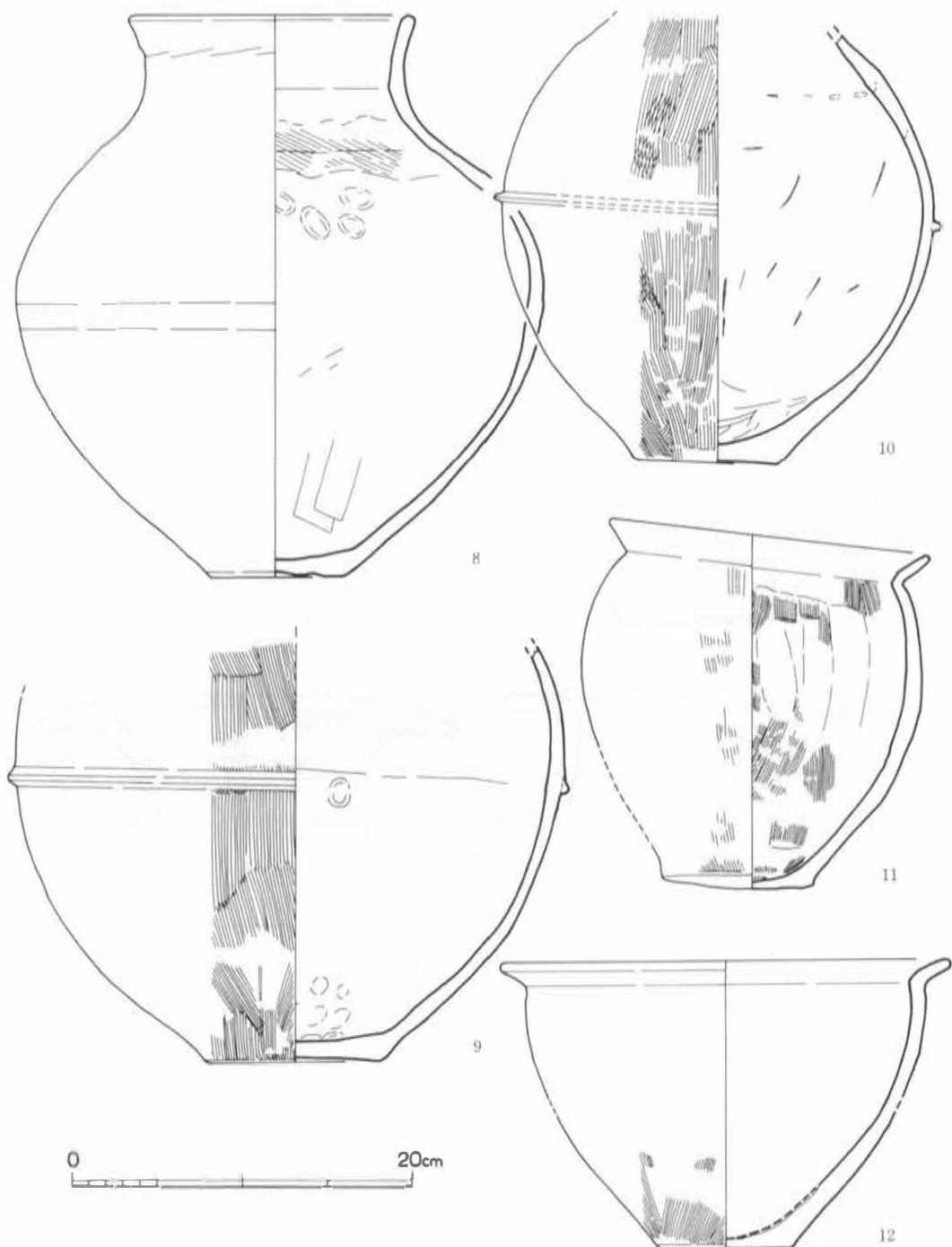
鉢は12、18、19がある。12、18は同タイプの鉢で短く「く」字状に外反する口縁部を有す。12に対して18の胴部は丸味を持つ。18は内面に赤橙色の化粧土を塗布する。12の口径26.5cm、底径8.2cm、器高16.8cm。18の口径23.8cm、底径7.8cm、器高17.7cmを測る。19は器壁の厚い小型の鉢でつくりが粗い。復原口径12.4cm、底径3.3cm、器高10.0cmを測る。すべて埋土中からの出土。

高杯は20の脚部がある。柱状部は上部が中実となる。調整は荒くハケで仕上げて器壁も厚い。器部径16.9cmを測る。

21は均整のとれた器台である。最小径が上半にあり、調整はハケとナデで仕上げる。外面は二次加熱を受け赤変する。口径14.0cm、裾部径20.3cm、器高21.3cmを測る。埋土中からの出土。



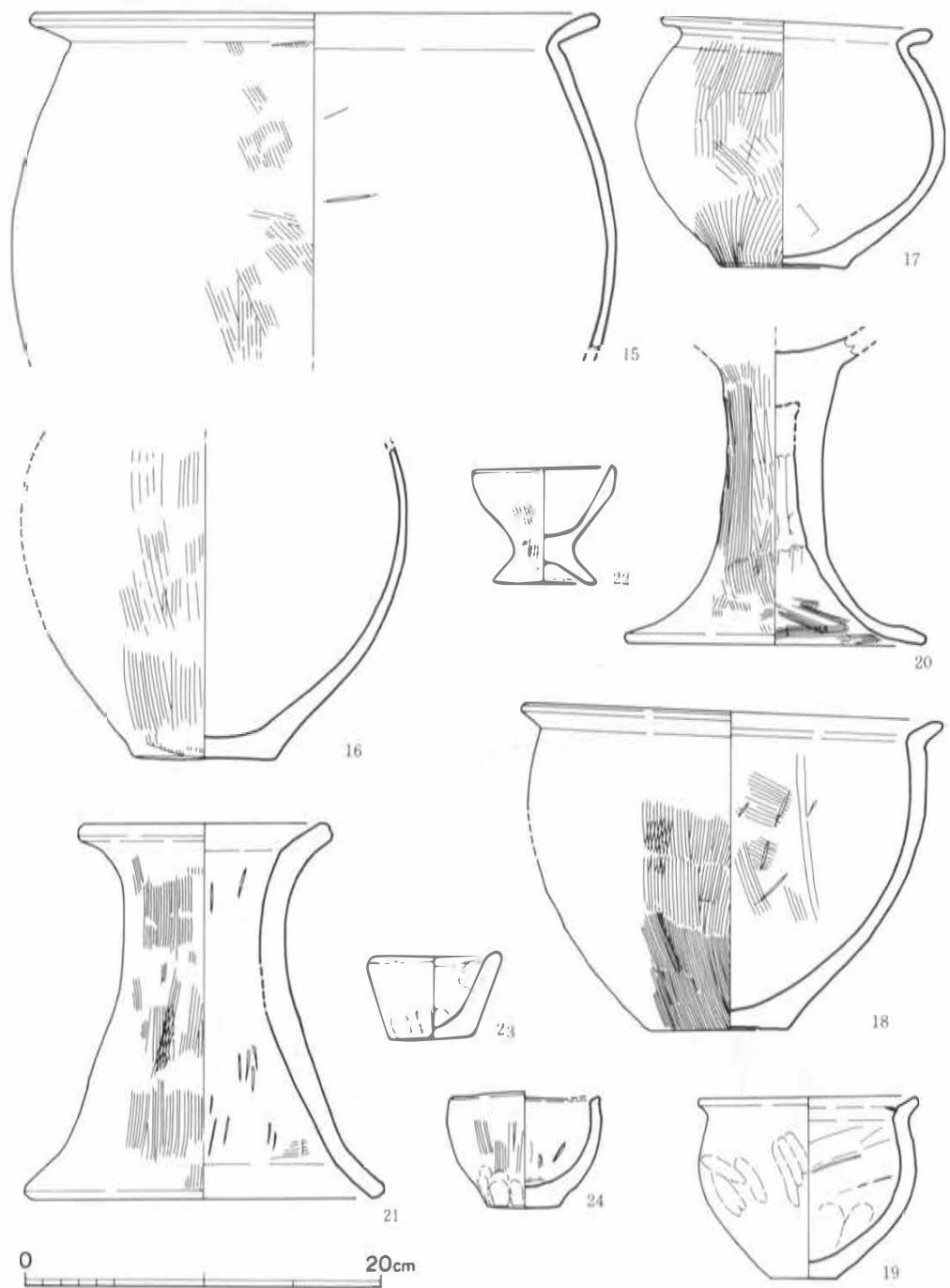
第42図 34号竪穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)



第43図 34号竪穴住居跡出土土器実測図その2 (1/4)

第44図 34号竪穴住居出土土器実測図セの3(1/4)





第45図 34号竪穴住居跡出土土器実測図その4(1/4)

手標ね土器は22～24がある。22は脚付の鉢を模している。23は断面逆台戸を基し、胴部に粒頭が残る。「さは丸味のある体部」に安定感ある底部をなす。22は口径8.0cm、底径5.9cm、器高6.5cm、23の口径7.5cm、底径4.8cm、器高4.7cm。24の口径8.3cm、底径4.0cm、器高6.5cmを測る。すべて埋土中から出土。

石 工 (図版36 第46・47図)

大小の砥石が4点ある。1は埋土中から出土した雲母片岩の石材を使用した中～大砥石である。研面は2面で他のは自然面である。表面の4ヶ所に鑿削痕を残す。砥石としての質は良くない。現長17.5cm。2も雲母片岩製の中砥である。現長17.5cm。2も研磨を受けて表面を滑らかにする。現長19.7cm。3は砂岩製の荒砥で、加熱を受け淡く赤変する。4は1/2程度欠失した砂岩製の砥石で4面の軒面を持つ。中砥である。

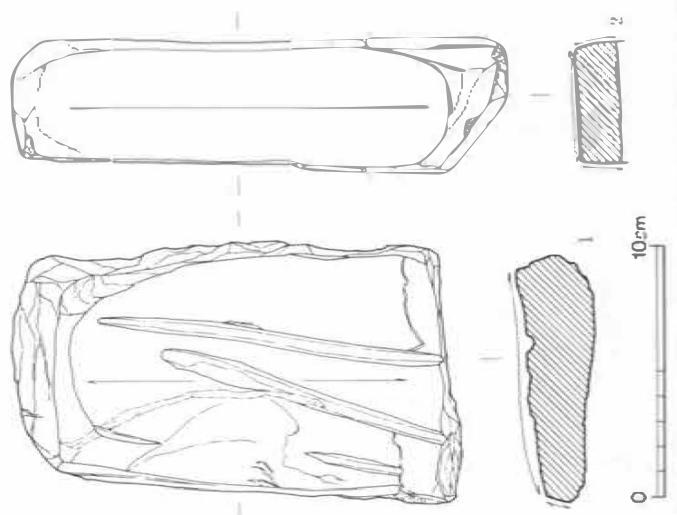
日暮二かじの出土。

35 住居跡

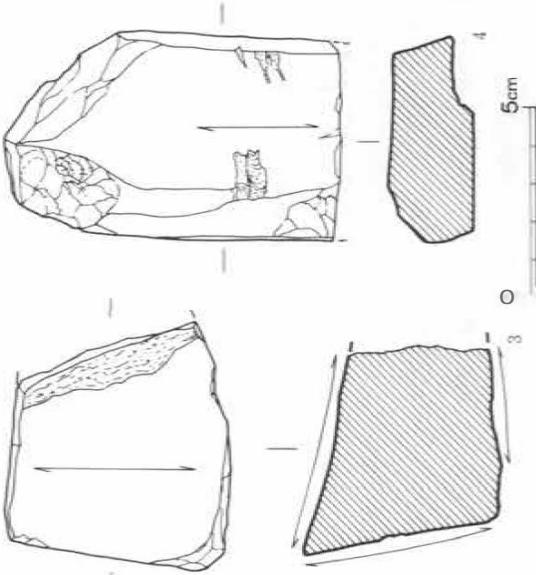
(図版5-(1)・17-(2) 第48図)

36号住居に大半が削平された1号穴住居跡で、全容は殆ど把握できない。北壁と西壁が遺存するのみで、前者が3.70m、後者は3.80mを測り、ほぼ方形を呈する。壁高は15.0cm前後である。その詳細は不明である。

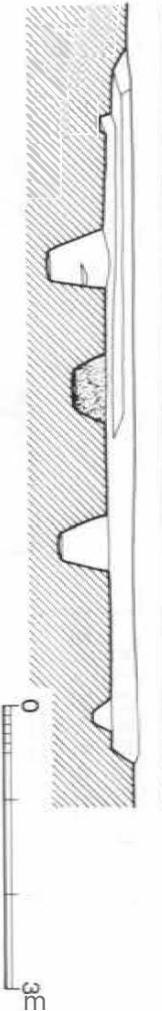
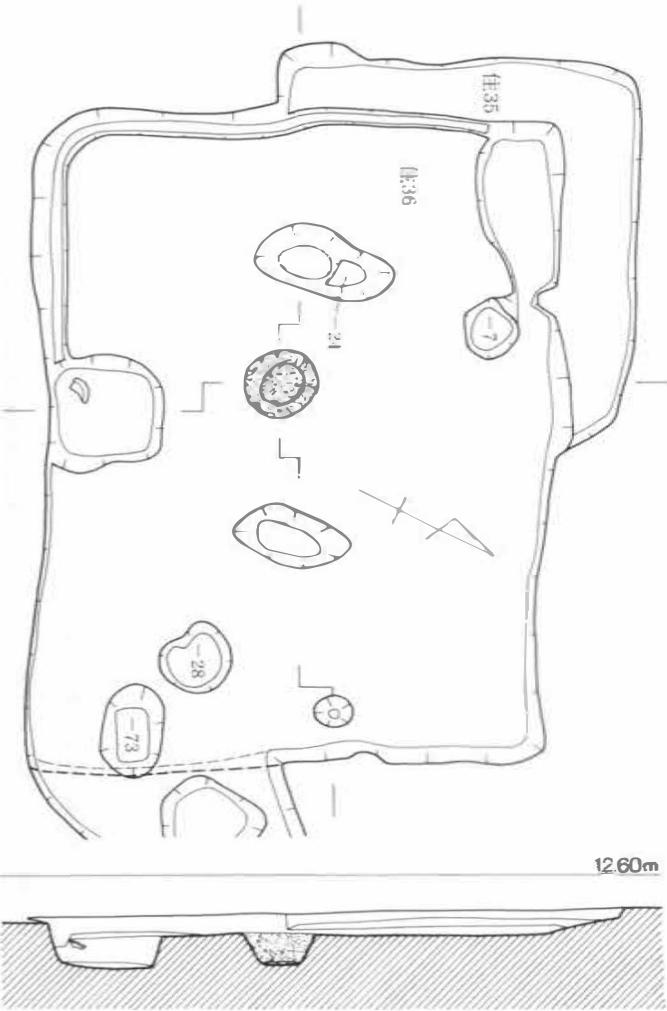
出土遺物は皆無であるが、後期初頭頃の36号住居より古い住居である。



第46図 34号竪穴住居跡出土石器実測図その1(1/3)



第47図 34号竪穴住居跡の36号住居より古い住居の出土



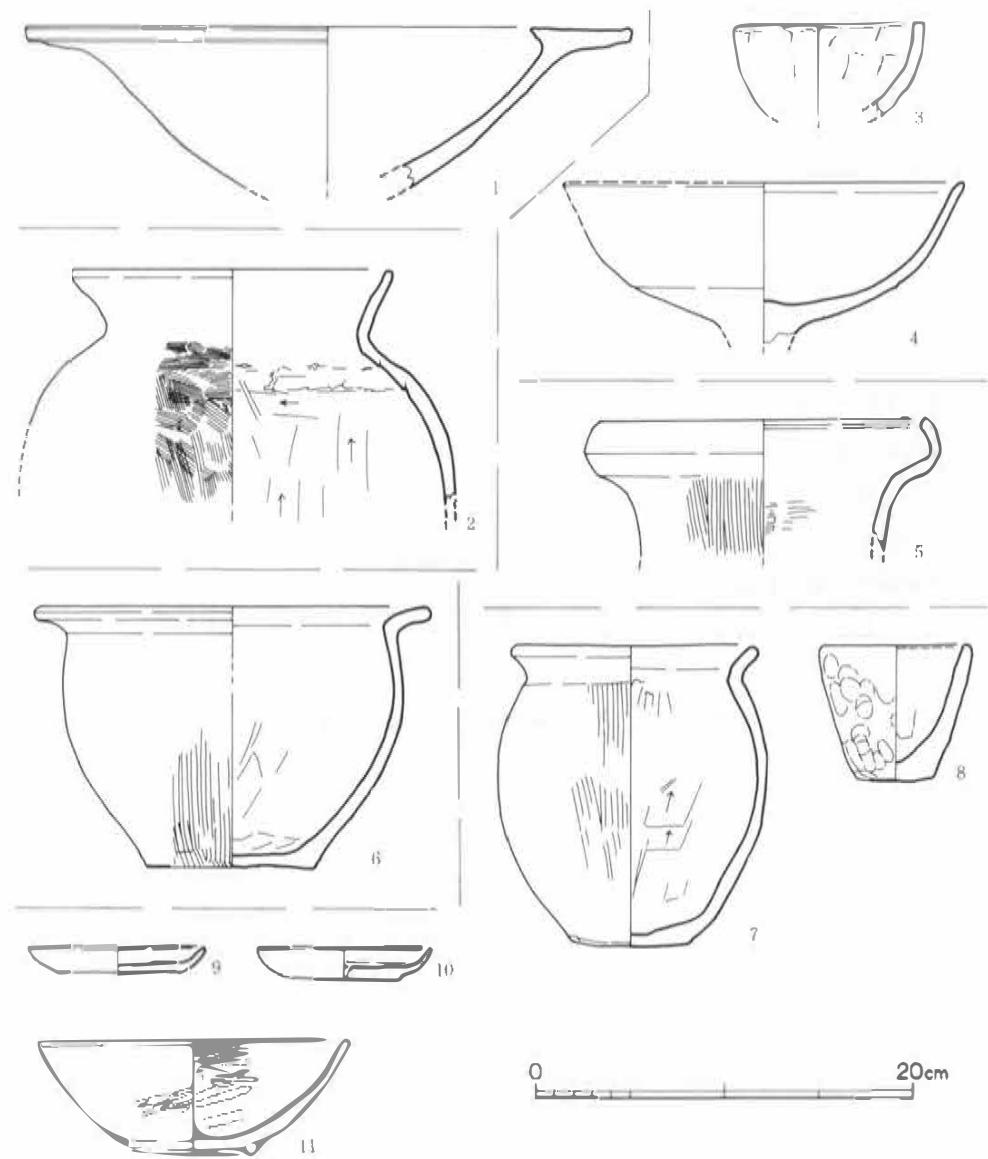
第48図 35号、36号竪穴住居跡実測図(1/60)

36号竪穴住居跡 (図版5-1) 第48図)

34号居の東側に隣接して營まれた竪穴住居で、34号工事にてされている。平面形態

は長方形を呈し、東壁の1/2が他の不整形遺構で削平されている。規模は約7.00m・6.70m、東・西壁が5.50m、壁高20.0cm強を測る。床面積は34.59m²。34号住居よりは小型であるが大型住居の範疇に入れる。柱は2本で、柱間は3.0mを測る。柱間に円形の竈を備え、焼き出しのためか深さ34.0cmに達する。南壁際には1.10m×1.20m、深さ30.0cmの竪穴方形の腰壁式窓を備え、西から南壁沿いを走る周溝と繋がる。屋内土壌の埋土中からは高塙片が出土した。住居の主軸方位は柱間軸からN 64° E を示す。

出土遺物は極めて少なく甕の一部を示可能な高塙があるのみで、移動時に搬出したと考えられる。



第49図 36号-40号、43号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

出土 遺 物

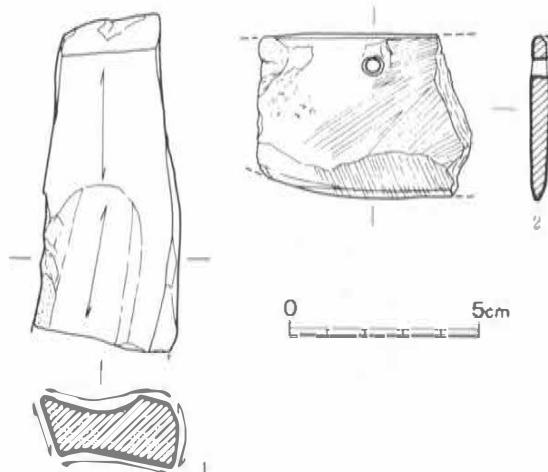
土 器 (第49図)

鋤先状口縁の高壺の杯部片がある。胴部の丸味は少ない。胎土は緻密で、明るい橙色を呈する。摩耗しているが丹塗りの可能性がある。復原口径32.0cmを測る。屋内土壤からの出土である。

37号堅穴住居跡出土遺物

土 器 (図版36 第49図)

2は直線的に広がる口縁部を有し肩部は張る。調整はハケと箒削りで仕上げ器壁を薄くつくる。肩部内面は粘土帯の接合部が明瞭に観察できる。口径16.9cmである。



石 器 (図版36 第50図)

1は硬質砂岩製の砥石で1/3を欠失する。研面は5面で使用頻度が著しく凹状を呈する。

2は鷲巣巖灰岩製の石庖丁であるが、出土土器とは共伴しないことから混入である。刃部付近は使用痕（擦過痕）がみられ平滑になる。径1.0mmの孔は一方向から穿つ。

第50図 37号堅穴住居跡出土石器実測図(1/2)

38号堅穴住居跡出土遺物

土 器 (図版36 第49図)

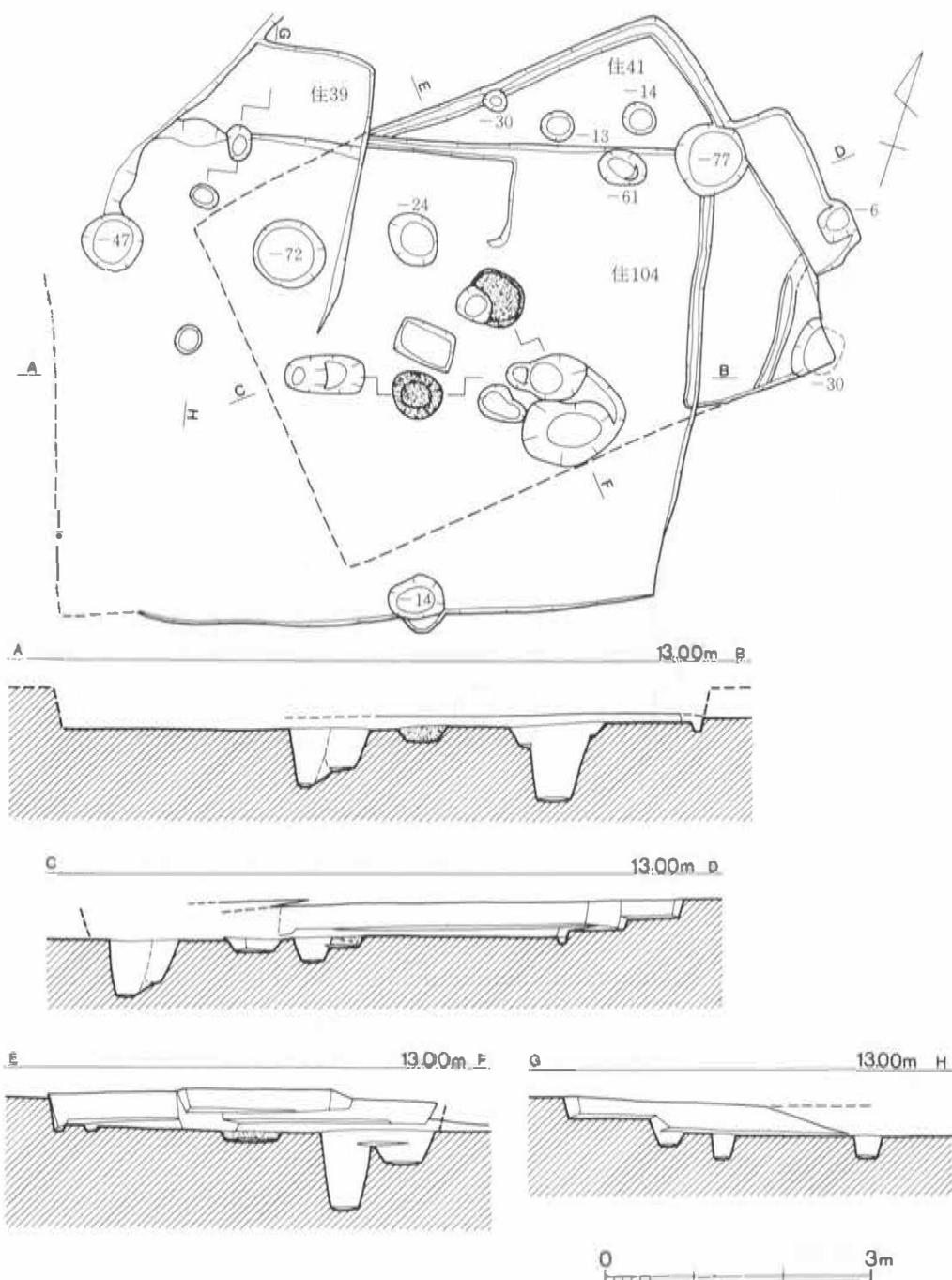
3の壺と4の高杯がある。3は壺の破片で胎土には砂粒と赤褐色粒子を含む。復原口径11.0cm。

4の高杯坏部は底部から胴部にかけての屈折は不明瞭で丸味を有す。胎土は緻密で砂粒が少ない。復原口径21.2cmを測る。

39号堅穴住居跡 (図版 5-(2) 第51図)

当該住居は4軒の重複がある。40号住居より古く、41号・104号住居より新しい。大半が40号住居と農道で削平を受け全容は把握できない。平面形状は長方形であろう。支柱は2本で、柱間には床面が薄く赤変した箇所がある。東壁際には円形（径80.0cm、深さ72.0cm）の屋内土墻を設けている。北側は高さ18.0cmのベット状造構を付設する。その他詳細は不明である。

出土遺物は壺がある。



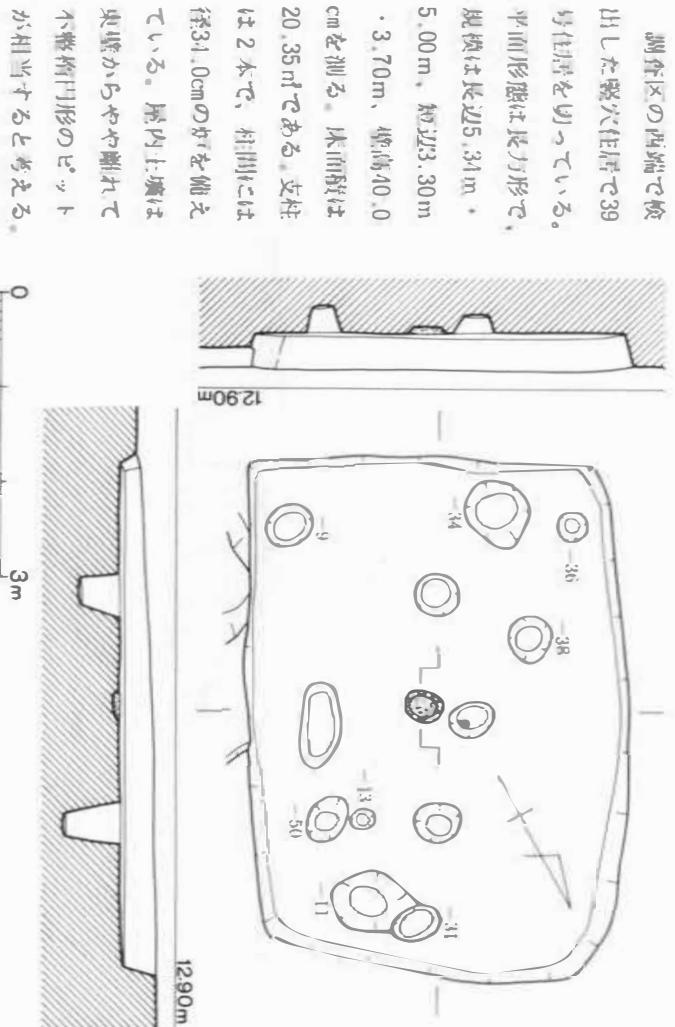
第51図 39号、41号、104号竪穴住居跡実測図(1/80)

出 土 器

土 器 (第49図)

5の袋状口縫部の破片がある。袋部の破は不明瞭でない。調査はハケとナタで[[...]]
径18.0cmを測る。

40号堅穴住居跡 (図版 5-(2) 第52図)



住居の主軸方位はN

29°Eを示す。

遺物は小片の他、図示した跡がある。

出 土 器

土 器 (第49図)

6の鉢がある。逆「L」字状の口縫部を有し、上面は内傾する。肩部から胴部にかけては丸味を持ち、大き目の底部をなす。焼成は良好で、内外面に二次加熱を受け淡く赤變する。復原口径21.0cm、底径9.0cm、器高14.0cmを測る。

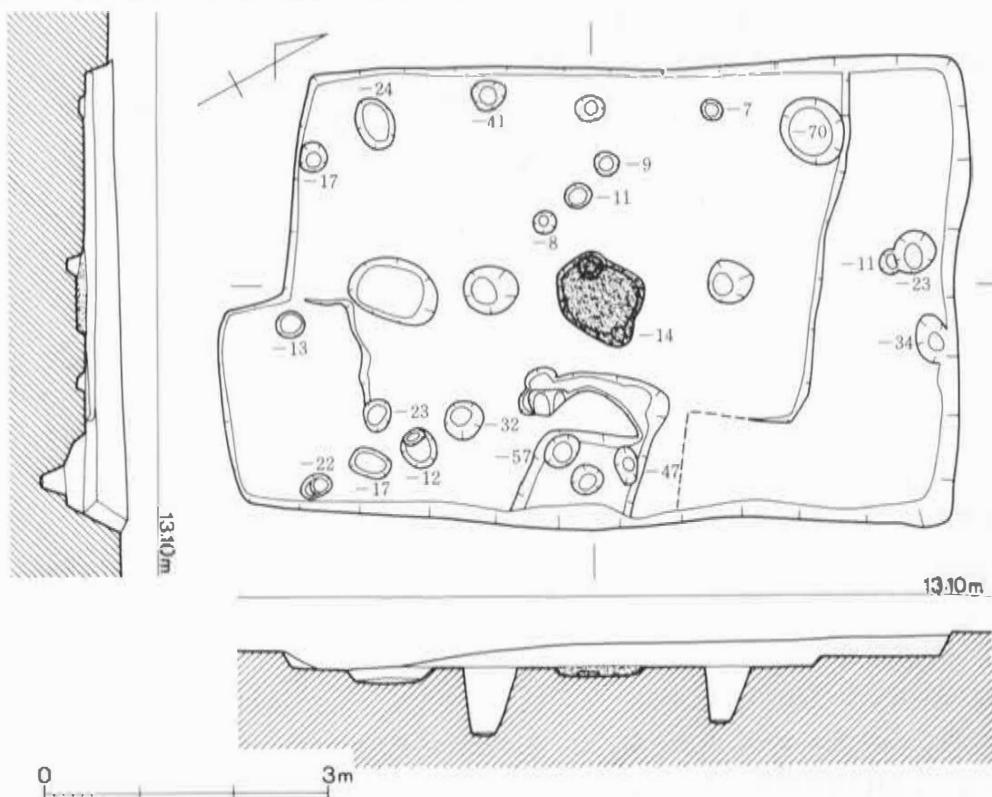
41号竪穴住居跡 (図版5-(2) 第51図)

104号と大半が重複し、調査時点での切合に気付かず発掘したため新旧関係を明確に捉えていない。東壁のみ遺存しており4.40m、壁高32.0cmを測る。北壁と東壁沿いの一部には周溝が廻っている。104号の床面には2箇所の炉址を検出しており、一方が41号住居の炉であろう。その他詳細は不明である。

出土遺物は無い。

43号竪穴住居跡 (図版5-(2)・6-(1) 第53図)

調査区の西端に位置する竪穴住居で、44号(A・B)の一部と重複する。平面形状は長方形を呈し、南壁には造出し部を有す。造出し部の両端には柱間1.70mの柱穴が掘られており、しかも有段をなすことから住居の出入口と考えられる。規模は長辺6.80m・7.50m、短辺4.90m・4.62m、壁高は40.0cm前後を測る。床面積は34.17m²とやや大型の住居である。支柱は2本で柱間には



第53図 43号竪穴住居跡実測図(1/80)

径90.0cm前後の穴を設けている。東壁中央には不整形の隙内土塊を付設する。土壤内の側端には2個の柱穴を配する。北壁と東壁ないの一端にはベット状遺構を設けている。住居の主軸方位は柱間軸でN29°Eを示す。

出土遺物は鐵・手耕ね土器・石庖丁・石ノミ・砥石・鋸石の他、埴土中から中世の小皿と高台付城(瓦器)があるが、覆土中に中世の遺構が存在した可能性もある。

出土遺

土 器 (図版36 第19図)

7、8の甕・生土器と混入の土師器
9、10、瓦器1ヶある。7は小型の甕で
「く」字状に外反する口縁部に張りのある
肩部を有す。底部はレンズ状を呈し
不安定である。調査は内面擦過、外面
荒いハケで仕上げる。復原口徑13.0
cm、底径6.5cm、器高15.8cmを測る。

8は鉢を模した手摺ね土器である。
表面には指圧痕を残す。復原口徑7.9
cm、底径3.9cm、器高7.1cmを測る。

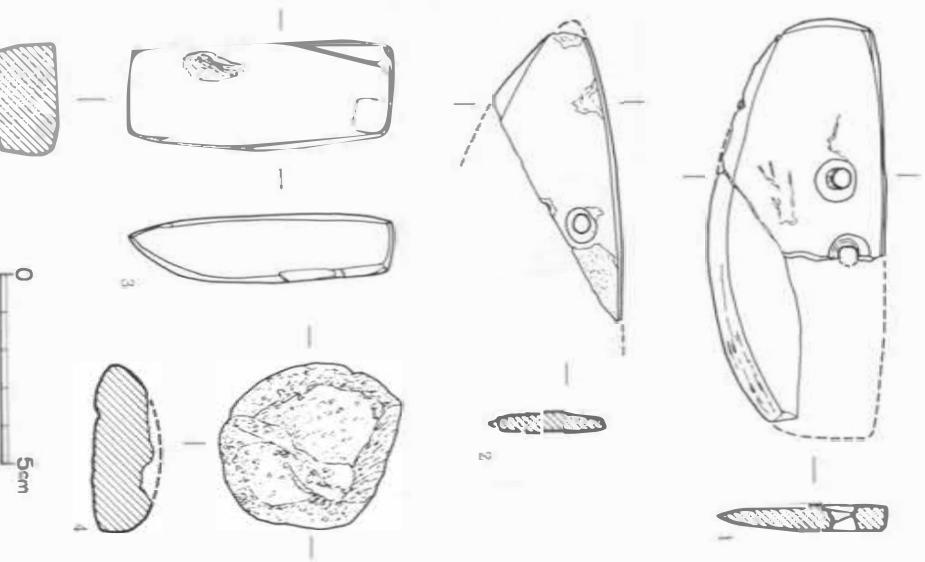
9、10は小型の甕で口徑9.3cm、9.2
cm、底径6.5cm、5.9cm、器高1.4cm、1.65
cmを測る。底部には糞切痕を残す。

11は瓦器の底で低い高台を貼付す
る。体部から口縁にかけては直線的で
ある。調査は内外面とも横方向の簡朴
な施す。口徑16.5cm、底径6.9cm、器
高5.9cmを測る。

石 器 (図版36 第54・55図)

1は雲母片岩製の石庖丁で段違いに
幣形を徑5.0mmの孔を穿つ。刃は平坦
面をなし、鋭い刃を研ぎ出す。現

10.5cm、幅4.7cmを測る。床面近くからの出土。2は断続擦灰岩製の石庖丁片で、形態的には古相



第54図 43号竪穴住居跡出土石器実測図その1(1/2)

を有する。孔の直径5.0mmである。

3は真岩質の石ノミで完形品である。現長7.0cm、幅2.9cm、厚さ1.7cmを測る。床面からの出土である。

4は軽石で屋内土壌の傍から出土した。浮子として使用した可能性がある。

5は縞状片岩質の砾石である。侧面は2面で他は自然面をなす。現長19.0cm、厚さ2.0cmを測る。屋内土壌からの出土である。

44号墳穴住居跡 (図版5-(2)・17-(1) 第56図)

44号住居は総数4軒の重複があり、当初1軒の住居の認識で扱っていた。出土土器を観察した結果2軒の重複であることが判明したが、ここではA・Bで識別する。

A住居跡はB住居跡よりも古いが、床面が同一レベルにあるため判明した点が多い。2本の支柱穴が掘られ、その柱穴間に不整形ながを設けている。南壁沿いには長轄1.80m、短軸1.00m、深さ26.0cmの梢円形の屋内土壌を付設しており、底面には1個のピットを掘っている。

出土遺物は壺・甕・陶杯・鉢・手握ね土器がある。

B住居跡の平面プランは長方形であろう。北壁は東壁に比べて傾斜に近く、A住居の北壁がほぼ同一場所にあったことが窺える。東壁の長さは3.71m、壁高20.0cmを測る。東壁沿いにはベット状遺構を付せている。床面中央には不整形のがを削込んでいるが、支柱穴は不明確で断面図に示したピットは支柱穴とはなり得ない。その他詳解は不明。

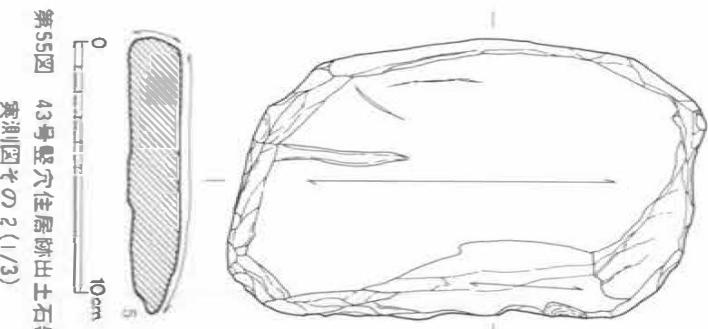
出土遺物は壺・甕・鉢・器台などがある。

A号墳穴住居跡出土遺物

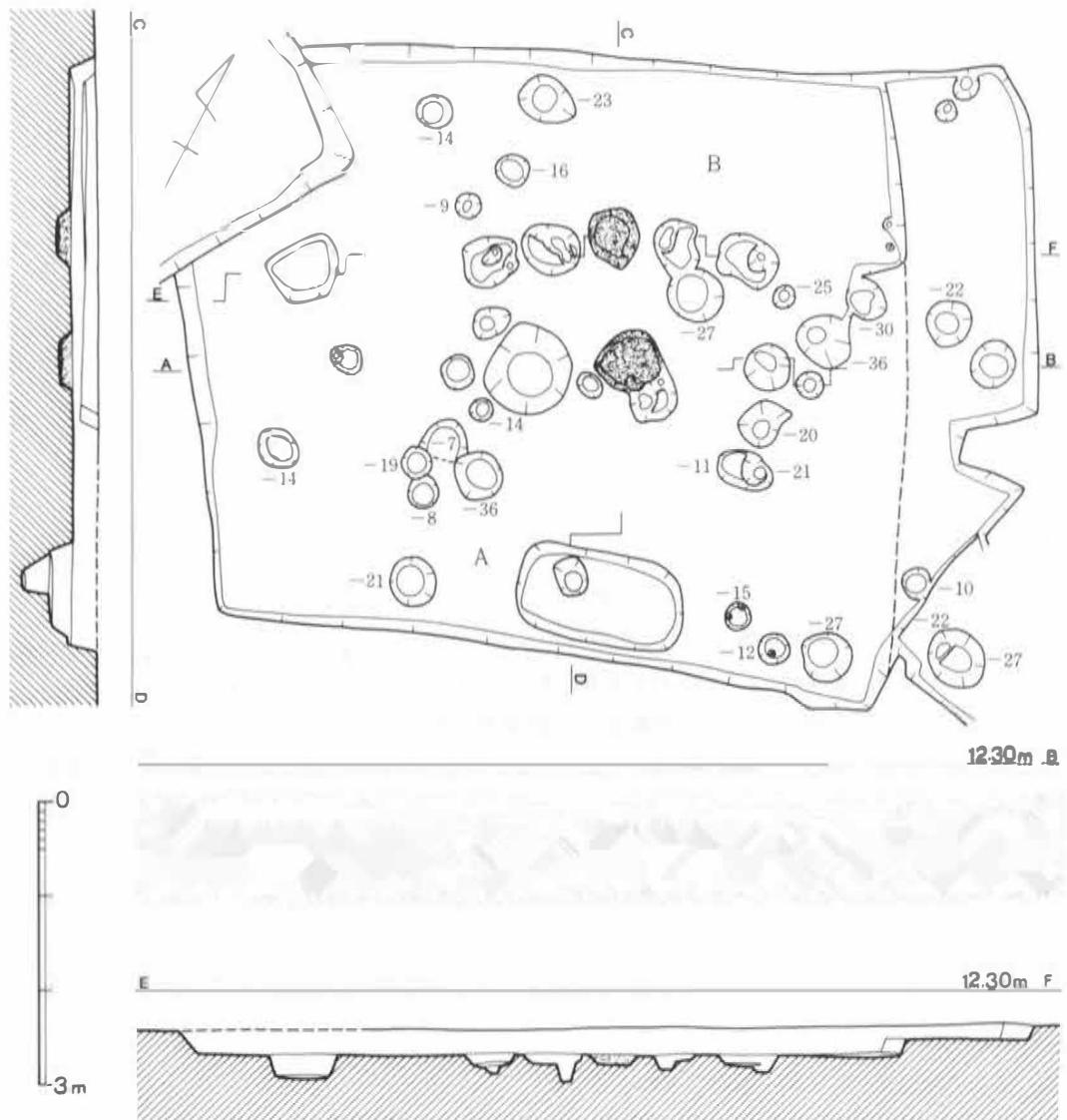
土 器 (図版36・37 第57図)

44号2軒の重複があるようで、土器に時期差がある。取上げ時に若干混入したことが考えられる。

1は口縁の采譜を有する壺で、肩折縁の横縁は削離である。頸部は短く、肩部に三角山型を有する。復原口径15.4cmを測る



第55図 43号墳穴住居跡出土石器
実測図その2(1/3)

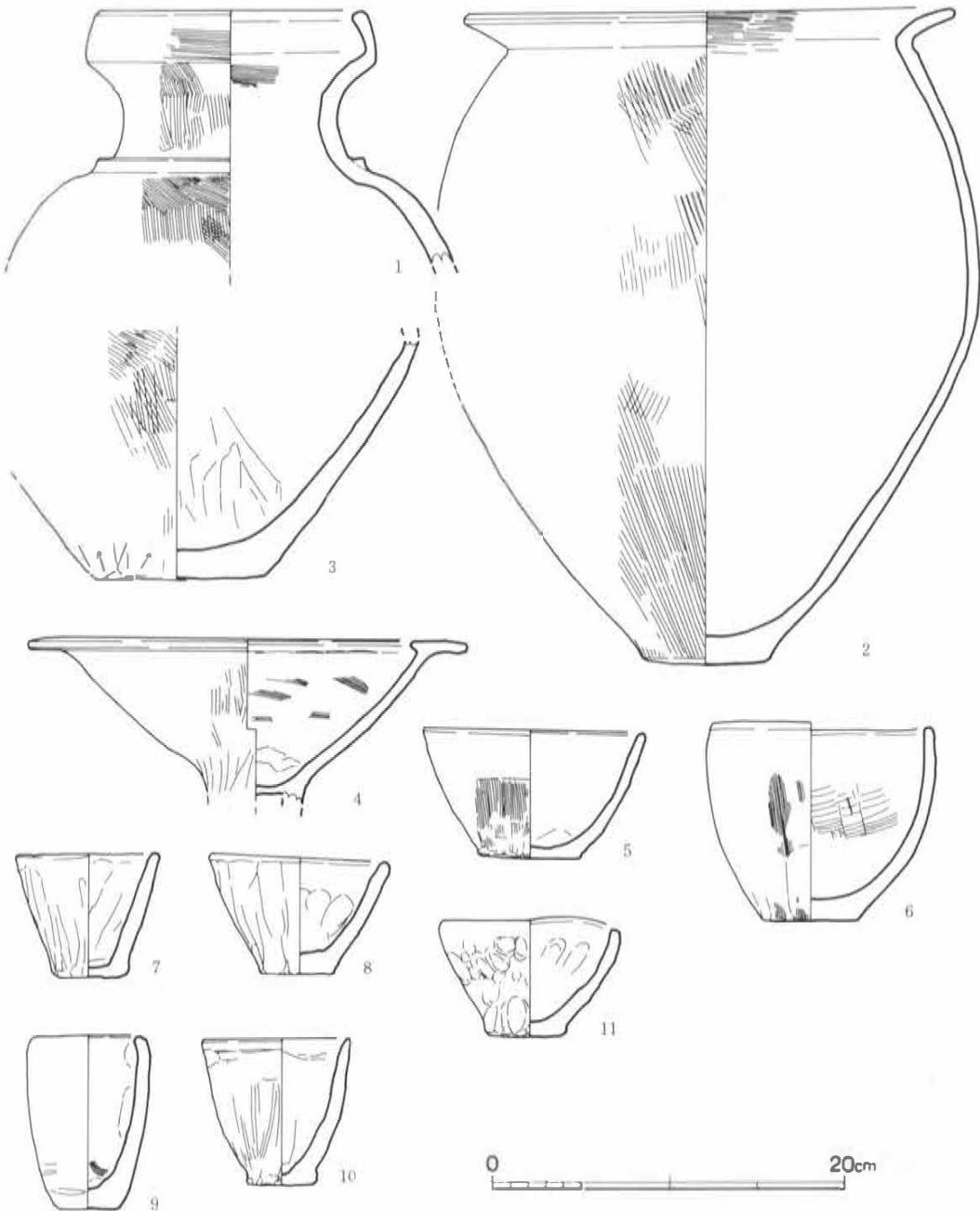


第56図 44号(A、B)竪穴住居跡実測図(1/80)

甕は2、3がある。2は「く」字状に外反する口縁部に肩部の張る甕で、細味の不安定な底部を有する。内外面に二次加熱を受け赤変する。口径27.9cm、底径7.1cm、器高36.9cmを測る。

4は鋤先状の口縁部を有す高杯で、体部から底部にかけては直線的につくる。つくりの粗い高杯である。復原口径25.0cmを測る。

5・6は小型の鉢で調査はハケとナデで仕上げ、6の内面は荒いハケがみられる。5の口径



第57図 44号(A)竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

12.6cm、底径5.7cm、器高7.2cm。6は口徑12.7cm、底径5.4cm、器高11.2cmを測り、二次加熱を受ける。

7～10は手捏ね土器で9を除くとつくりが粗い。7は二次加熱を受けている。口徑8.2cm、底径4.4cm、器高7.0cm。8は口徑10.2cm、底径4.0cm、器高6.6cm。9は復原口徑6.5cm、底径3.3cm、器高9.7cm。10は二次加熱を受ける。口徑8.3cm、底径4.0cm、器高8.2cm。11は復原口徑10.2cm、底径4.5cm、器高6.6cmを測る。

B号竪穴住居跡出土遺物

土 器 (図版37 第58図)

1は脛の胴部片で上半に三角凸脊を貼付する。調整は外面ハケ、内面は擦過のちナデで仕上げ、外面にはハケの上から丹を敷布する。

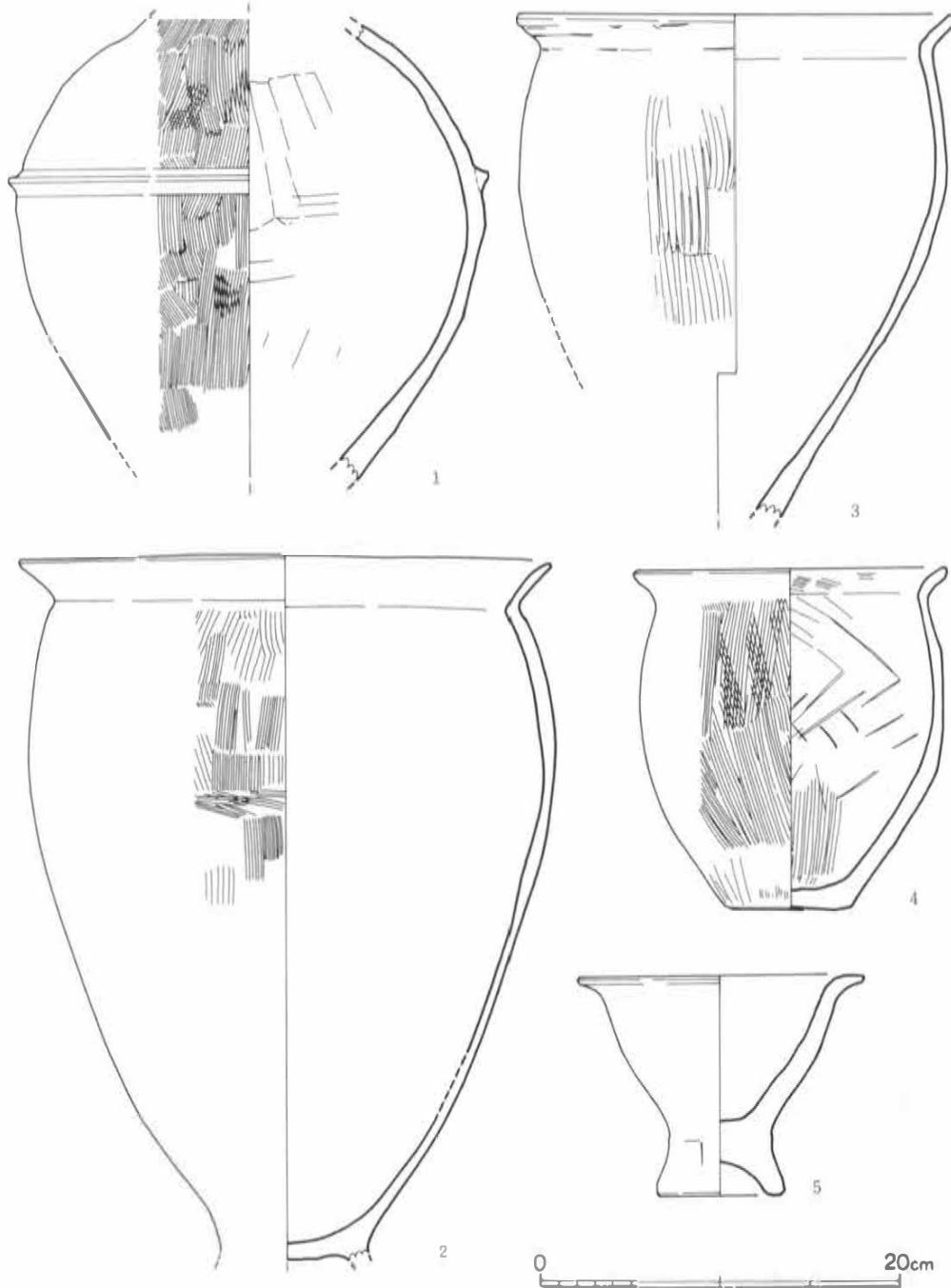
甕は2～4がある。2、3は同タイプの長胴の甕で、「く」字状に外反する口縁部に肩部はやや張る。胴下半は細まり低い脚台がつく。調整は荒いハケとナデで仕上げる。両者とも二次加熱を受け煤が付着する。4は小型の甕で「く」字状に緩く外反する口縁を有す。調整は外面が荒いハケ及び擦過、内面は擦過痕を残す。口徑17.5cm、底径7.0cm、器高18.9cmを測る。

鉢には5～8がある。5は脚台付の鉢で胴部から口縁部にかけては朝顔状に開く。外面は二次加熱を受ける。口徑15.8cm、裾部径7.0cm、器高12.0cmを測る。6は体部が半球形状の鉢で小さな平底をなす。調整はナデで仕上げる。口徑17.1cm、底径6.7cm、器高10.4cmを測る。7は口縁部が短く僅かに外反する。荒いハケ調整を残す。8は小型の鉢で二次加熱を受け煤が付着する。口徑10.9cm、底径5.5cm、器高6.5cm。

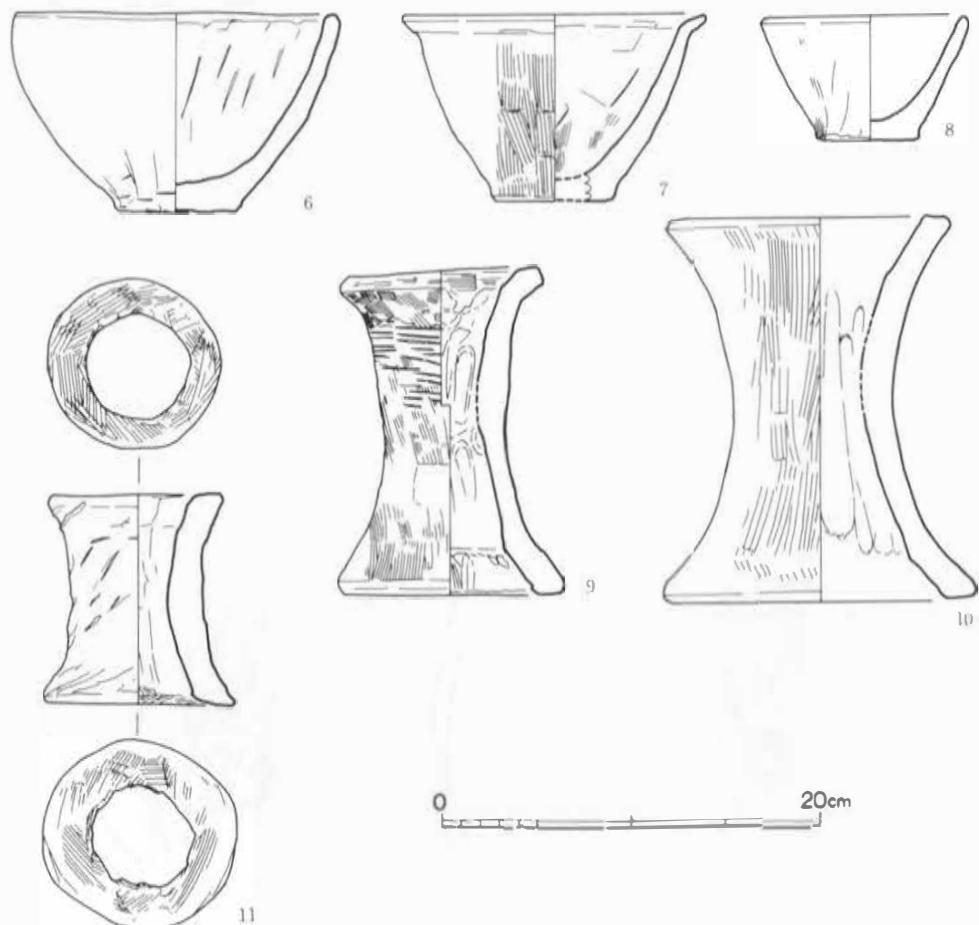
器台は9～11がある。9は粗いつくりの器台で最小径が器体中央部にある。荒いハケと叩き痕がみられる。口徑10.0cm、裾部径11.5cm、器高17.2cm。10も最小径が器体中央にある所謂鼓状の器台で荒いハケとナデで調整する。調製手法から(A)の土器と共に伴する可能性がある。口徑15.0cm、裾部径16.5cm、器高20.0cm。11は小型の器台で9と同様つくりが粗い。表面には荒い叩き痕が残り、上下の口唇部は荒いハケを残す。口徑9.1cm、裾部径10.0cm、器高11.1cmを測る。

45号竪穴住居跡 (図版 6-(1)・18-(2) 第60図)

調査区の西端で検出した竪穴住居跡で103号住居に切られている。平面形状は現存で観察する限りでは方形を呈する。規模は東・南壁が計測可能で4.50m・4.70m、壁高34.0cmを測る。床面には支柱穴が見当らず、断面に図示した柱穴は支柱とはなり得ない。またが址も検出できておらず不明な点が多い。



第58図 44号(B)豊穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)



第59図 44号(B)豊穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)

出土遺物は壺・甕・鉢・高杯がある。

出土遺物

土 器 (図版38 第61・62図)

壺は1、2がある。1は頗る稀な壺で頸部の長い直口壺であろう。肩部には三角凸帯を貼付し、直下には細い波状文を廻らす。精製品である。2は「く」字状に鋭く外反する口縁を有す壺で、肩部と胸部に三角凸帯を貼付する。底部は大きく安定感がある。調整は荒いハケとナデで仕上げ

發しているが、表裏の中央に幅1.7~2.0cmの加熱を受けない部分が横状に走る。おそらく屋内の中に巻いて用いていたものが住居の火災で焼かれた時のやのこ×を受けていない結果と考えられる。現長15.0cmを測り、床面から出土した。

50号堅穴住居跡（第72図）

調査区の西端で検出した小型の住居跡である。平面形態は長方形を呈し、規模は南壁3.50m、西面幅2.70m、壁高20.0cm前後を測る。復原床面積は8.85m²である。炉・支柱などは不明で、南壁際には梢円形（75.0cm×50.0cm）の炉内土爐を備えている。土爐を挟む形で小ピットを配している。出土遺物は幾つか破片が数点ある。

出土石器

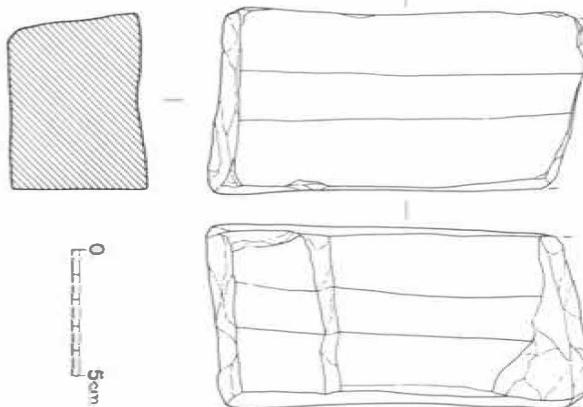
土器（第73図）

1、3の逆「L」字状と「く」字状に外反する口縁の甕がある。1は口唇部を缺ね「L」状にすむ。復原口径26.0cmを測る。2は甕内部の梗が不明瞭で口唇部を肥厚させる。3は外縁に舟を擧げし、口縁平坦部に刺突火を施す。復原口径22.0cm。4は底径7.8cmの底部で径が細いことから蓋の可能性もある。5の底部は10.0cm。すべて住居の堆土中から出土である。

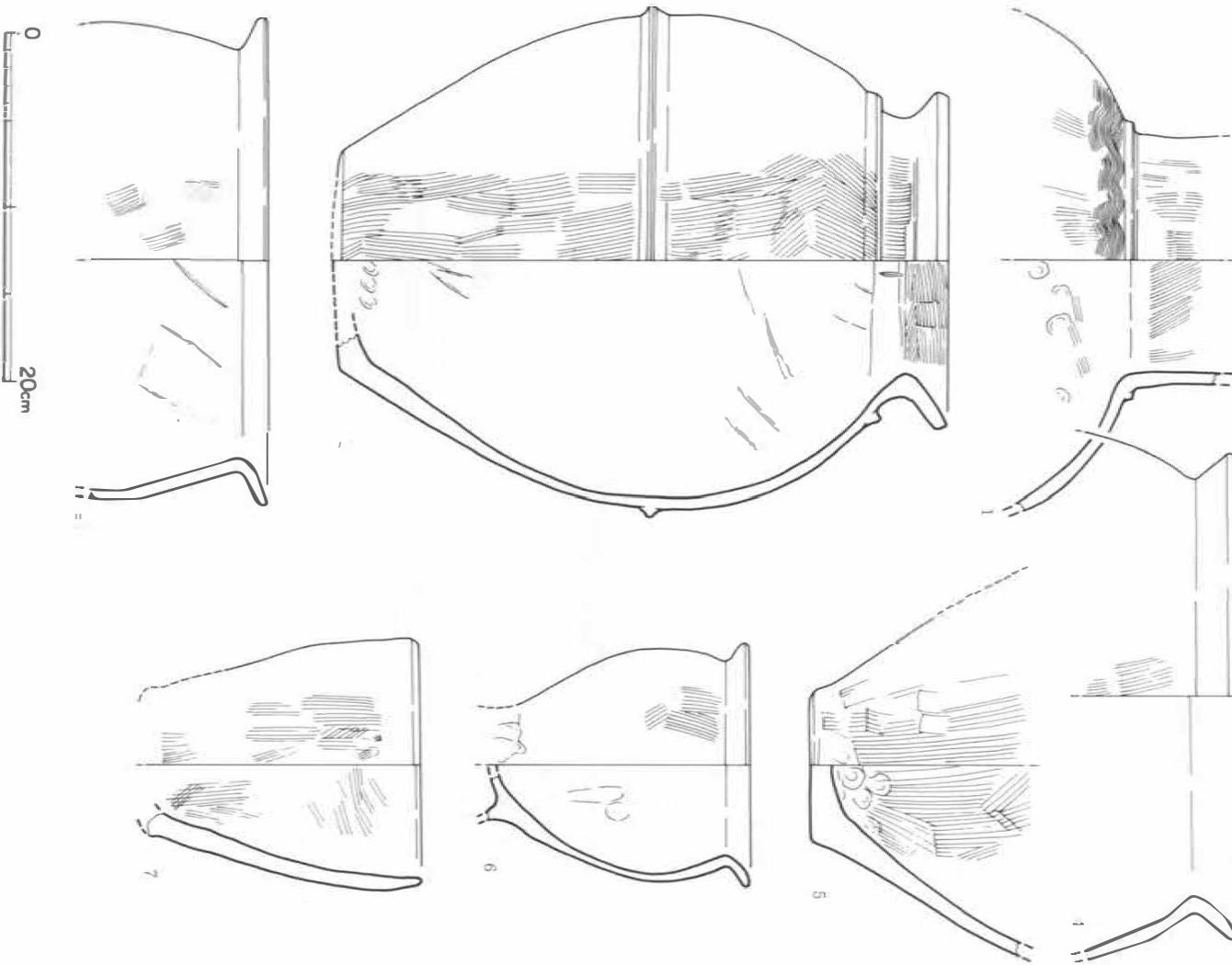
51号堅穴住居跡（第72図）

調査区の西端で検出した堅穴住居跡で3軒の重複がある。51号住居は50号住居より新しく52号住居より古い。約1/2が調査区外のため完掘に至っていない。規模は一方の長辺6.40m、壁高40.0cmを測る。實際には不整形の屋内土壤を掘っている。床面上には支柱穴が見当らず、床面は硬く崎縮められていた。

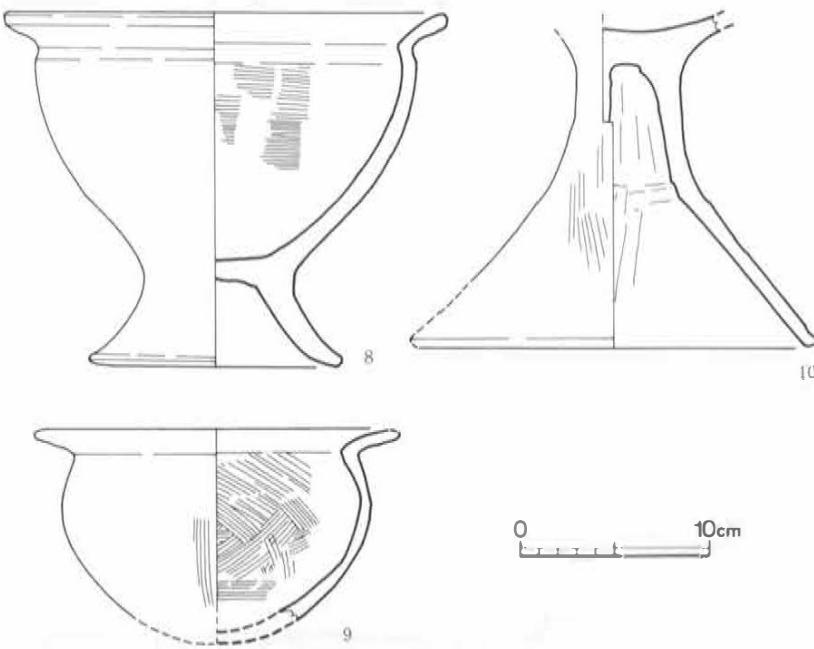
出土遺物は図示不可能な小片があ



第71図 49号堅穴住居跡出土石器実測図(1/3)



第61図 45号竪穴住居跡出土土器実測図その1 (1/4)



第62図 45号竖穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)

10は高杯の脚部で柱状部は短く屈折してスカート状に開く。胎土は砂粒の他赤褐色粒子を含む。幅部径21.5cm。二次加熱を受ける。

47号竖穴住居跡 (図版4-(2) 第63図)

44号A竖穴住居跡の一部と重複した住居跡である。平面プランは長方形を呈する。規模は南・北壁4.40m・4.50m、東・西壁5.90m・5.80m、壁高24.0cm前後を測る。床面積は25.12m²である。支柱は基本的に2本であるが、壁際に寄り過ぎている点が疑問視される。柱間には橢円形の炉を設けている。屋内土壌は東壁際に付設する。住居の主軸は柱間軸でN 13°Eを示す。

出土遺物は壺と鉢の破片の他、砥石がある。

出 土 遺 物

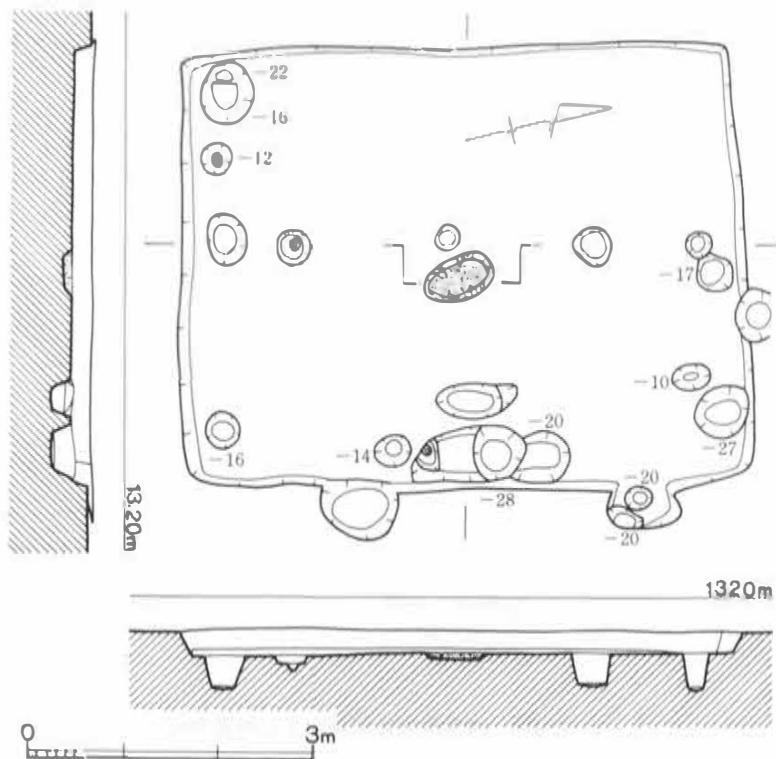
土 器 (第64図)

1、2は鉢で1の表面には一部丹の痕跡が残るが、丹塗りか否か不明瞭である。復原口徑15.0cm。2は小型で荒いナデ調査を施す。復原口徑9.2cm、底径4.0cm、器高5.2cmを測る。

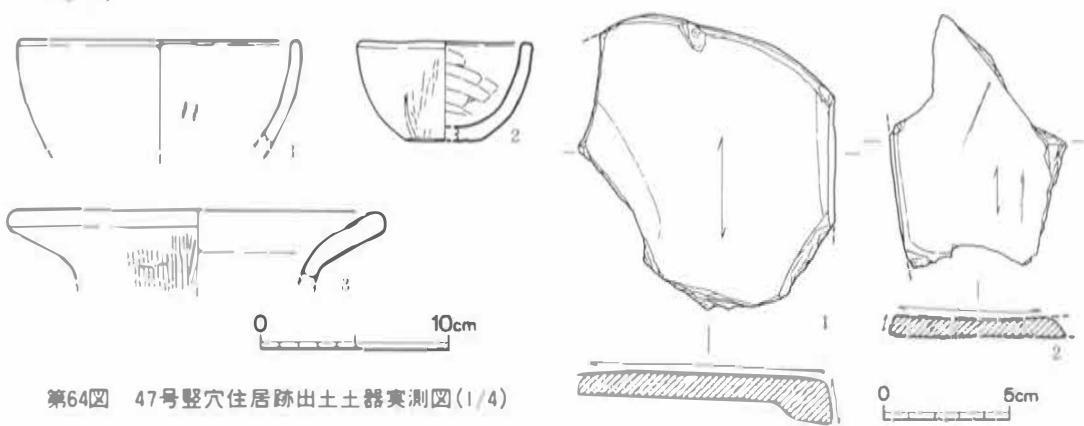
3は壺の口縁
片であろう。外
面に荒いハケが
残る。復原口径
20.0cm。

石 器 (図版
38 第65図)

硬質砂岩製の
仕上げ砥石が2
点ある。1の研
面は3面で現存
長11.5cmで周囲
を欠失する。屋
内土壌からの出
土である。2の
研面は2面で埋
土中からの出土
である。



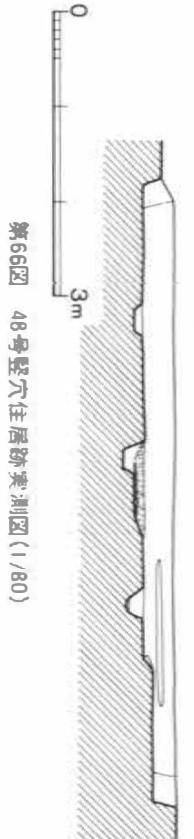
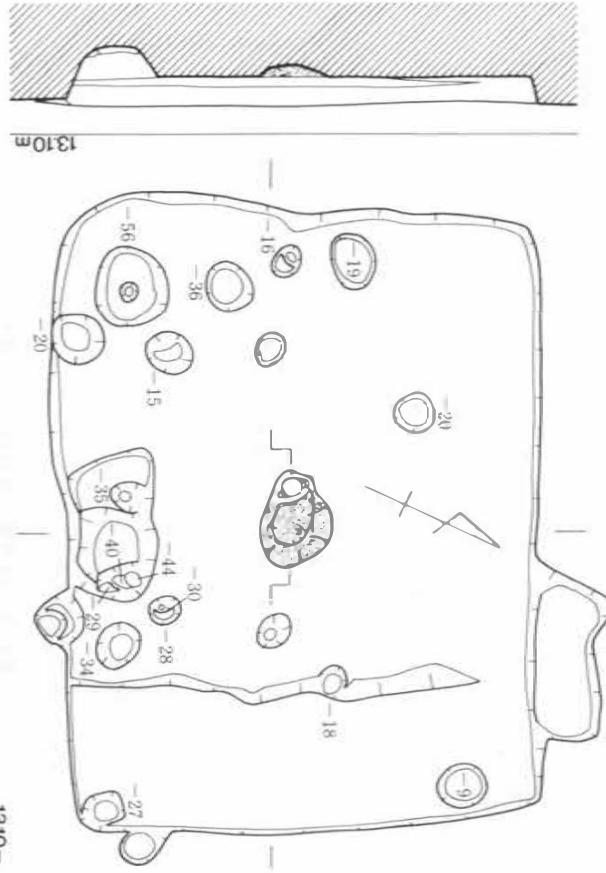
第63図 47号竪穴住居跡実測図(1/80)



第64図 47号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

第65図 47号竪穴住居跡出土石器実測図(1/3)

47号住居の南側で検出した平面プランが長方形を有す竪穴住居である。規模は長辺6.50m・
6.10m、短辺4.90m・4.80m、壁高30.0cmを測る。床面積は30.58m²である。支柱は2本である



第66図 48号竪穴住居跡実測図(1/80)

が、両者とも浅い。柱間には不規則形の浅い坑を掘込んでいる。南側壁には長削り、短削り94.0cm、深さ35.0cmの幅円形状の柱内土壙を付設する。土壙内の両端には小さな柱穴を配する。東壁には幅1.30mのベット状遺構を削り出している。主軸方位はN65°Eを示す。

出土遺物は壺・甕・鉢・焼器・器台の他、砾石が1点ある。

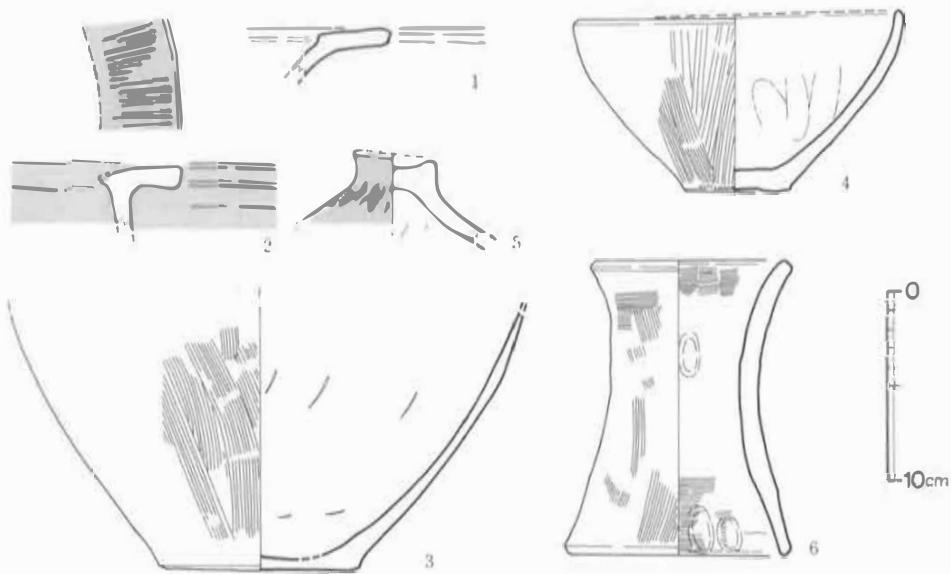
出土

土 器 (図版38 第67図)

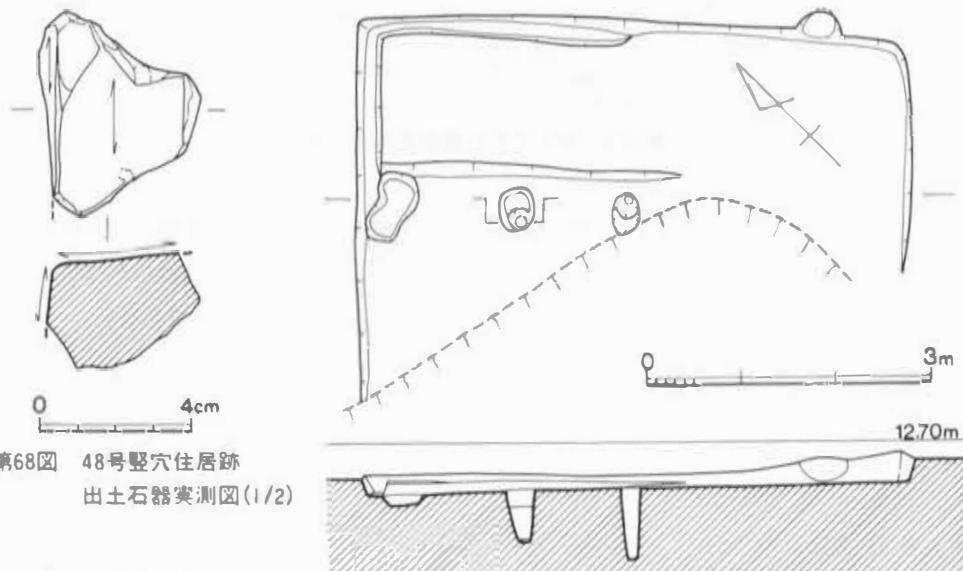
1は鋤先状口縁部の口縁部小片である。胎土には砂粒を多く含む。

2、3は甕である。2は「T」字コマヘヤヌのもので、甕体での内面には円を彫りし研磨される。3は安てんのある底部で底径11.5cmを測る。

4は鉢ではほぼ完成品である。調整は外周へヶ、而ばナデで上げる。口径17.3cm、底径5.6cm、高さ9.3cmを測る。



第67図 48号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



第68図 48号竪穴住居跡
出土石器実測図(1/2)

5は甕蓋の小片である。
摘み部の天井は凹面をな
す。外面は丹塗り磨研で内
面はナデで仕上げる。

6は鼓状の器台で完形品である。最小径が胴上半に移りつつある。ハケとナデで仕上げる。二

次加熱を受け内側器表がひび割れしている。口径10.6cm、器部径11.9cm、器高15.6cmを測る。

石 器(第68図)

砂岩製の荒砥の小片がある。研削は2面で、風化著しく表面がざらつく。加熱を受け淡黒く変色している。

49号堅穴住居跡(図版6-(1) 第69図)

調査区の西側で検出した堅穴住居であるが、大半が土取で削平を受けているため全容は把握できない。現存での状況からは長方形のプランを有すると考えられる。片側の頸辺は5.70m、壁高20.0cm前後を測る。支柱の1本は半うじて遺存し70.0cmと深い。東壁にはベットを付設し、それに沿って部分的に周溝を廻らす。

出土遺物は鏡と手標ね土器の他、砾石が1点ある。

出 土 遺 物

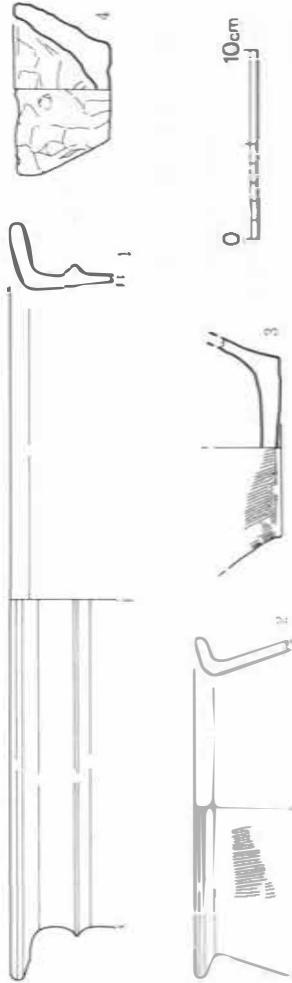
土 器(第70図)

1～3は鏡で逆「L」字状と「く」字状に外反するものがある。1の口縁下には三重凸唇を貼付する。内外面とも二次加熱を受け未焼成する。復原口径40.0cm。2は頸部前面の縁はや明瞭である。3は底径9.4cmを測る。二次加熱でが、發する。

4は手標ねの完形品で灰土から出土した。口径9.0cm、底径5.2cm、器高5.0cmを測る。

石 器(図版38 第71図)

砂岩製の荒砥が1点ある。研削は4面で自然面(図の下方)を除いて全面に加熱を受け淡く赤



第70図 49号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)

發しているが、表裏の中央に幅1.7～2.0cmの加熱を受けない部分が横状に走る。おそらく屋内の中に巻いて用いていたものが住居の火災で焼かれた時のやのこ×を受けていない結果と考えられる。現長15.0cmを測り、床面から出土した。

50号堅穴住居跡（第72図）

調査区の西端で検出した小型の住居跡である。平面形態は長方形を呈し、規模は南壁3.50m、西面幅2.70m、壁高20.0cm前後を測る。復原床面積は8.85m²である。炉・支柱などは不明で、南壁際には梢円形（75.0cm×50.0cm）の炉内土爐を備えている。土爐を挟む形で小ピットを配している。

出土遺物は幾つか破片が数点ある。

出土石器

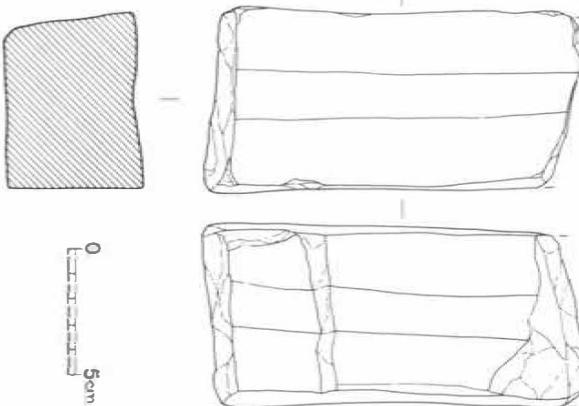
土器（第73図）

1、3の逆「L」字状と「く」字状に外反する口縁の甕がある。1は口唇部を缺ね「L」状にすむ。復原口径26.0cmを測る。2は甕部内面の棱が不明瞭で口唇部を肥厚させる。3は外縁に舟を擧げし、口縁平坦部に刺突火を施す。復原口径22.0cm。4は底径7.8cmの底部で径が細いことから蓋の可能性もある。5の底部は10.0cm。すべて住居の堆土中から出土である。

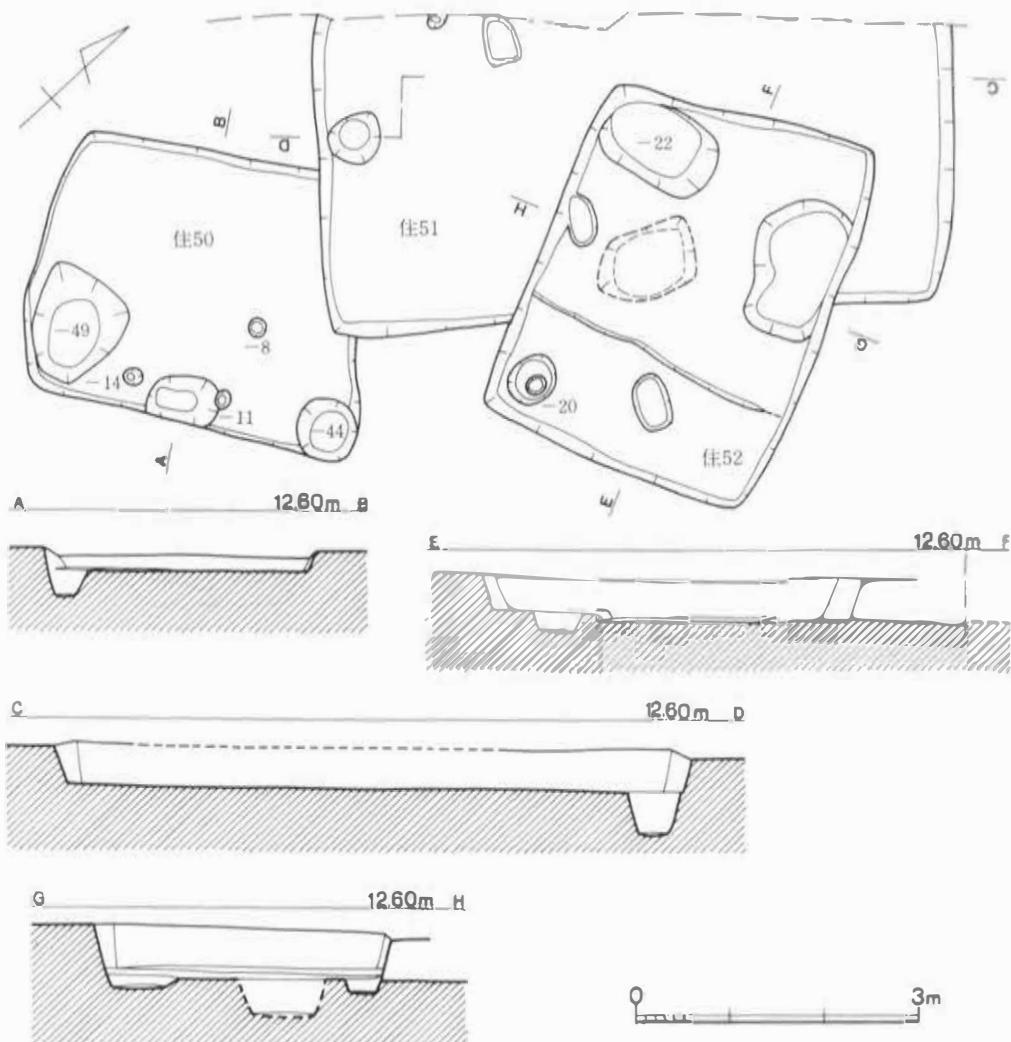
51号堅穴住居跡（第72図）

調査区の西端で検出した堅穴住居跡で3軒の重複がある。51号住居は50号住居より新しく52号住居より古い。約1/2が調査区外のため完掘に至っていない。規模は一方の長辺6.40m、壁高40.0cmを測る。實際には不整形の屋内土壤を掘っている。床面上には支柱穴が見当らず、床面は硬く崎縮められていた。

出土遺物は図示不可能な小片があ



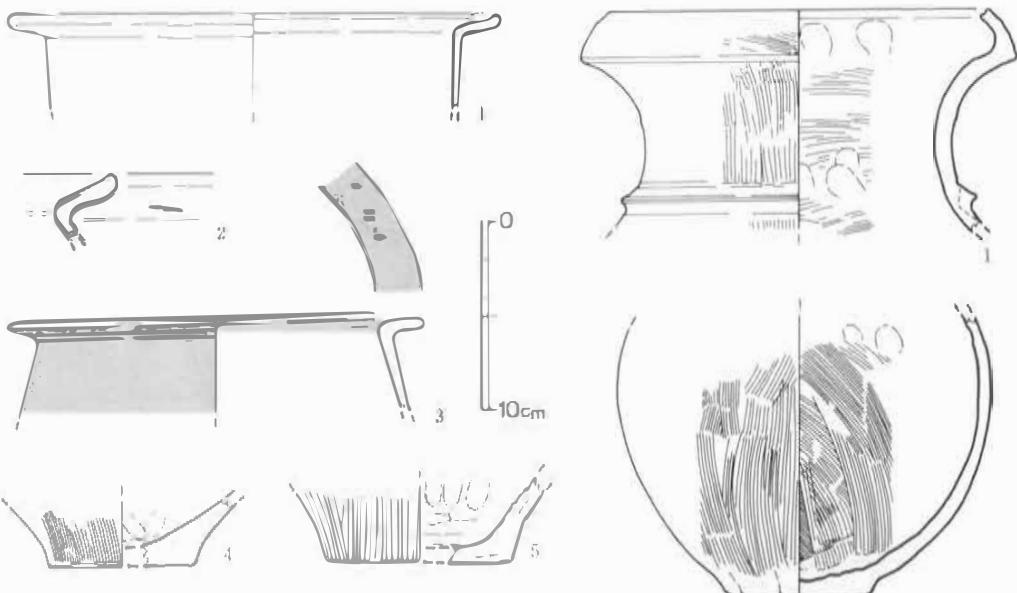
第71図 49号堅穴住居跡出土石器実測図(1/3)



第72図 50号、51号、52号竪穴住居跡実測図(1/80)

52号竪穴住居跡(第72図)

51号住居を切った小型の竪穴住居跡である。平面プランは長方形を呈し、規模は長辺4.10m・3.70m、短辺2.90m、壁高50.0cm強を測る。床面積は11.04m²である。南壁には高さ10.0cmのベットを削り出している。ベット上には径50.0cm、深さ20.0cmのピットが在り中から壺の胸部片が出土している。



第73図 50号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

出土遺物

土器 (第74図)

壺が2点ある。1は複合口縁壺で内縁する口縁は短い。外面の稜線は明瞭で頸部は短い。肩部には三角凸帯を付す。復原口径20.0cm。2は壺の胴部で球形を呈する。底部は細まり7.3cmを測る。調整はハケが主体である。

53号竪穴住居跡 (図版6-(2)・18-(4) 第75図)

調査区の北東隅で検出したが、大半が調査区外のため一部を調査したに過ぎない。南壁の長さ6.70m、壁高50.0cm弱を測る。壁際には1.20m×90.0cmの長方形の屋内土壙を掘り、不对称な位置にピットを配する。壁沿いには細い周溝が廻る。

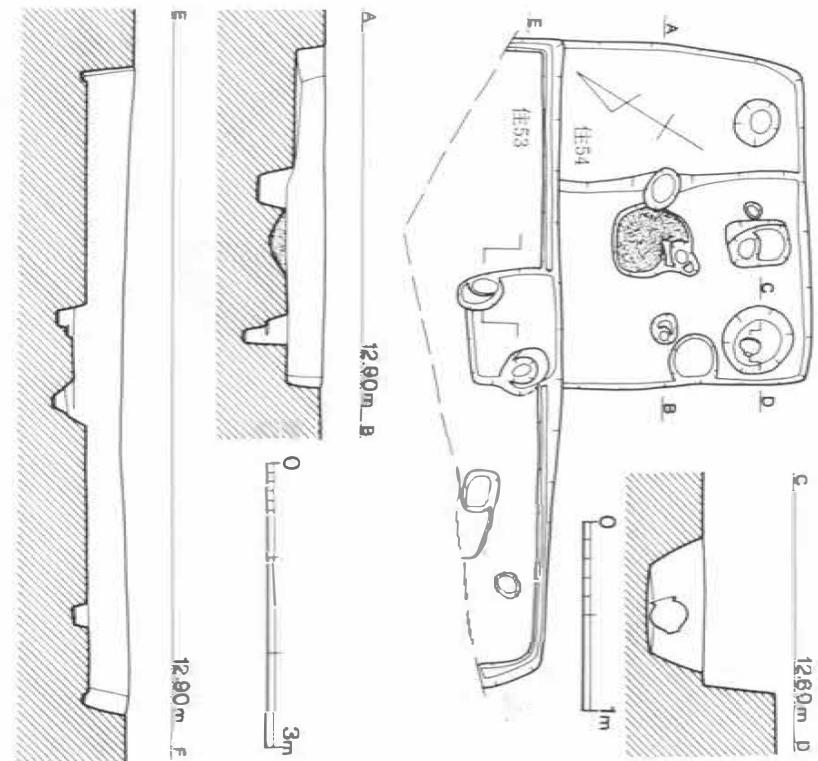
出土遺物は壺・鉢の他、不明土製品がある。

出土遺物

土器 (第76図)

1は複合口縫形の
口縫片で屈折部の破
は明瞭である。復原
口径16.2cmを測る。
埴土中から出土し
た。

2は断面逆S形状
を示す鉢で、口縫
部は僅かに外反し
る。調整は外面が荒
いハケ、内面はハケ
のちナメで仕上げ
る。口径10.5cm、底
径6.0cm、器高8.8cm
を測る。埴土中から
の出土である。



第75図 53号、54号竪穴住居跡実測図(1/80・1/20)

用途の明らかでな
い焼成土塊がある。
表面(図示している
部分)は仰側、裏面は焼側。尖突があり、深いもので8.0mmを測る。屋内土壇からの出土である。

54号竪穴住居跡(図版6-(2)・18-(4) 第75図)

53号住居に切らオホシ小屋の櫻穴住居跡である。平面形態は不明確
方形に近い形状を示す。南壁長3.20m、標高10.0cmを測る。支柱は2本で柱間に不整形のがれ
破けている。これは2段掘りの屋内土壇を掘込み、南西隅には幅70.0cm、深さ60.0cmの屋内
貯藏穴を有しており、中から焼形土器が出土した。東側には幅1.25mのベットを備えている。住
居の東側は柱間軸でN59°Eを示す。

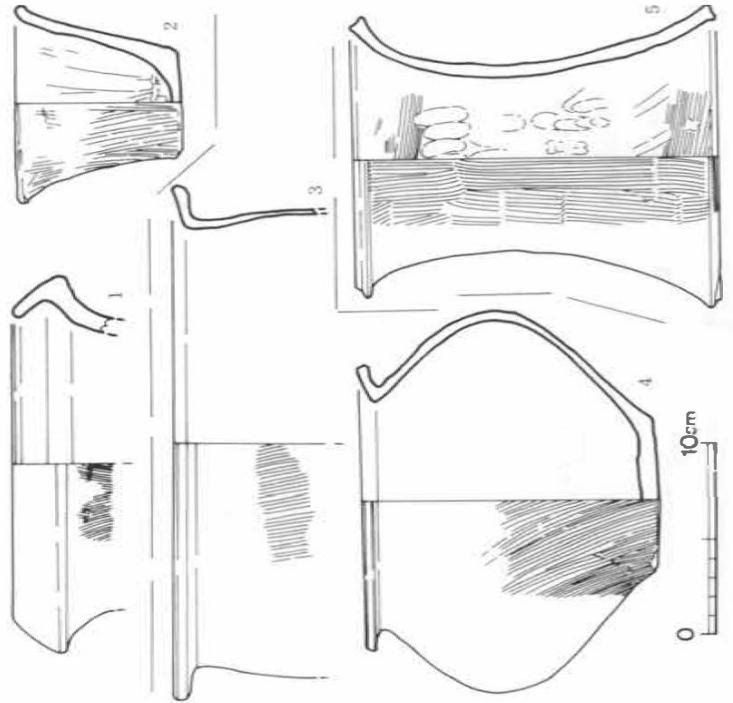
出土遺物は甕・器台がある。

出土遺物

土 器

(図版38 第76図)

3・4の甕と5の器台がある。3は逆「L」字状の口縁を有し口唇部は肥厚する。復原口径27.1cmを測る。埴土中から出土である。4は「く」字状に鋭く外反する口縁を有す甕で胴部は扁平となる。堅穴住居の隅のピット(屋内貯藏坑)から出土したもので完形品である。口径15.0cm、底径8.0cm、器高16.0cmを測る。



第76図 53号、54号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)

測る。

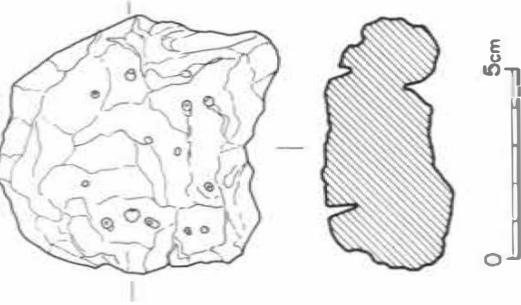
5はつくりの良い幣美な器台で器盤も薄く仕上げている。綫やかに口縁部が外反し、口唇部を肥厚する。脚部はハケとナデで仕上げる。口径14.8cm、脚部径16.1cm、器高19.0cmを測る。埴土中から出土である。

55号堅穴住居跡出土遺物

土 器

(図版39 第78図)

1~4の甕がある。1、2は「く」字状に外反する口縁を有し1の肩部は張る。3の口縁の外反度は無い。3の底部はレンズ状を呈し不安定である。1の口径25.5cm、底径9.2cm、器高29.4cmを測り、二次加熱を受け焼が付着する。2は小型の甕で復原口径18.2cm、底径7.4cm、器高18.5cmを測る。3は口径16.2cm、底径6.2cm、器高16.6cm。脚部はすべてハケとナデで上げ、埴土中からの出土である。4は小型の甕で胴部には張り、



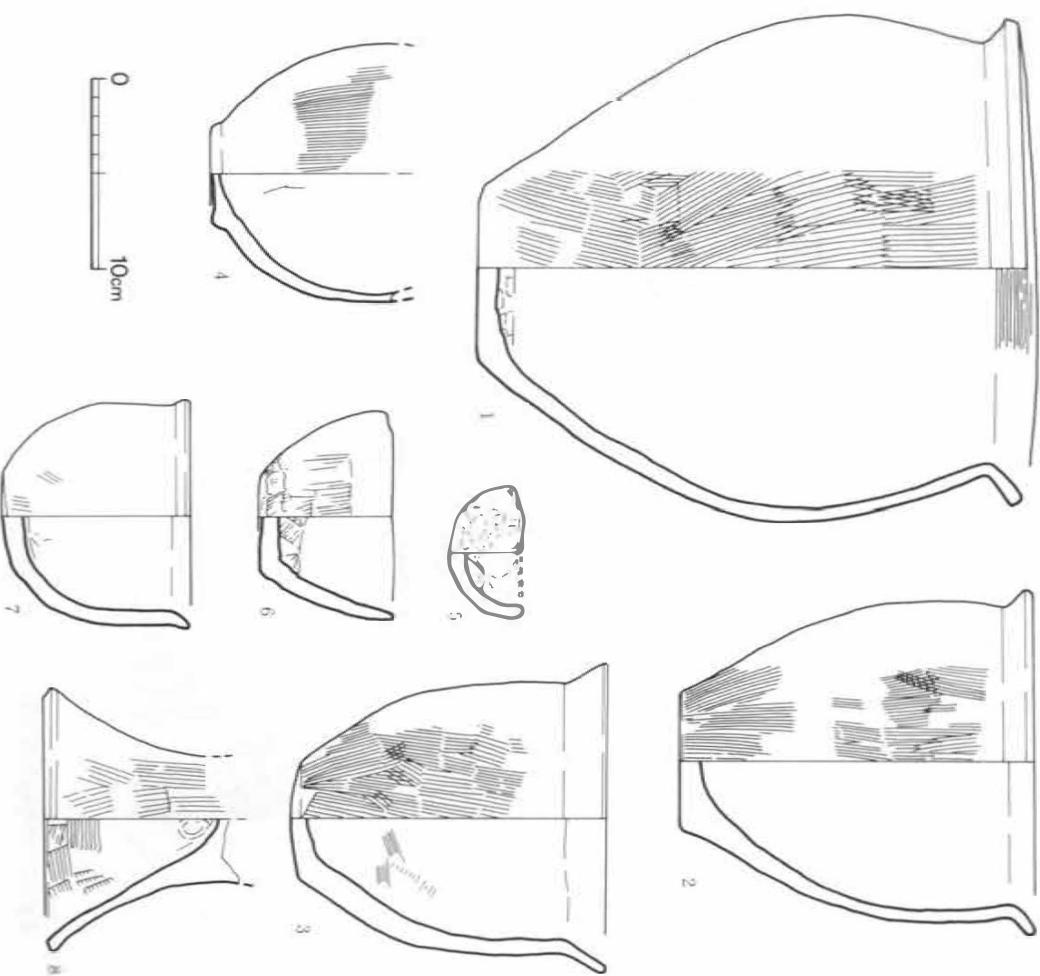
第77図 53号堅穴住居跡
出土土製品実測図(1/2)

径5.5cmの底部を有す。細いハケとナデで仕上げる。埴土中からの出土である。

体は6、7cmある。6は手押す風の鉢で口径10.9cm、底径5.0cm、高さ7.0cmを測る。埴土中か
ら出土である。7は口縁を僅かに外反させ体部から底部にかけて斜状を有す鉢で、1、2の甕
とは共伴しないことも考えられる。口径12.0cm、器高9.8cmを測る。埴土中からの出土である。

8は高杯の脚部と考えられるが、柱状部は太い。瓶端部は僅かに肥厚する。調整はハケが主体
である。瓶部径13.9cmを測る。埴土中からの出土である。

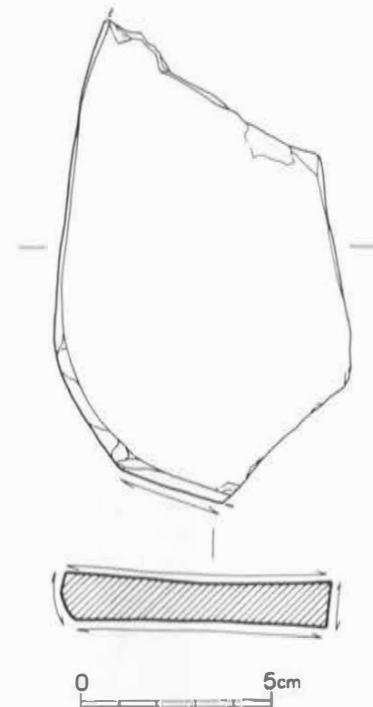
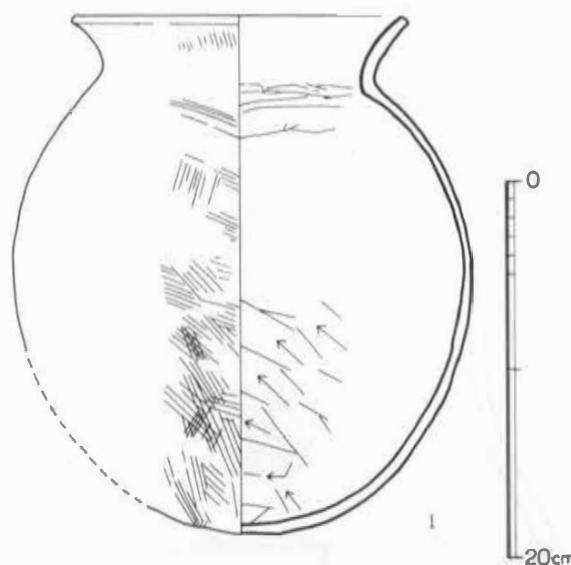
5は手押す土器で復原口径7.0cm、器高3.7cm。



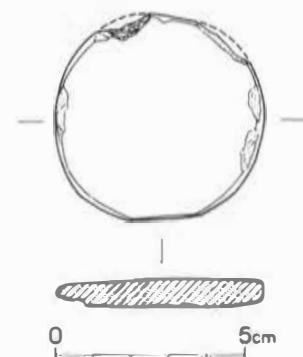
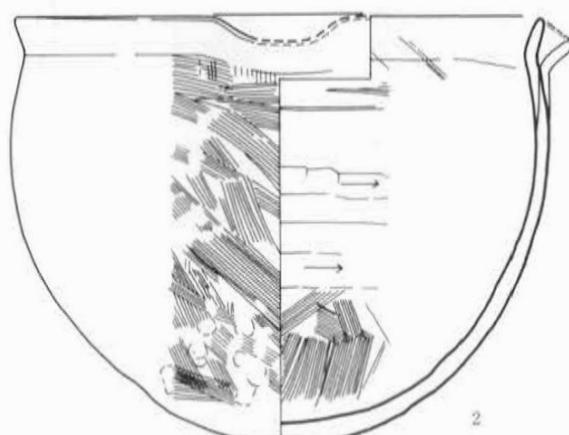
第78図 55号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

石 器 (図版39 第79図)

屋内土壌から出土した硬質砂岩製の仕上げ砥がある。
約1/3を欠失する。研面は5面でかなり研込み凹面をなす。



第79図 55号竪穴住居跡出土石器
実測図 (1/2)



第80図 56号竪穴住居跡
出土石器実測図 (1/2)

第81図 57号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

56号堅穴住居跡出土遺物

石 器 (第80図)

裏は片岩製の円盤がある。おそらく、紡錘車の未製品であろう。径は $5.5\text{cm} \times 5.4\text{cm}$ 、厚さ 7.0mm を測り、周縁の面どりは丁寧である。重さは 40g である。

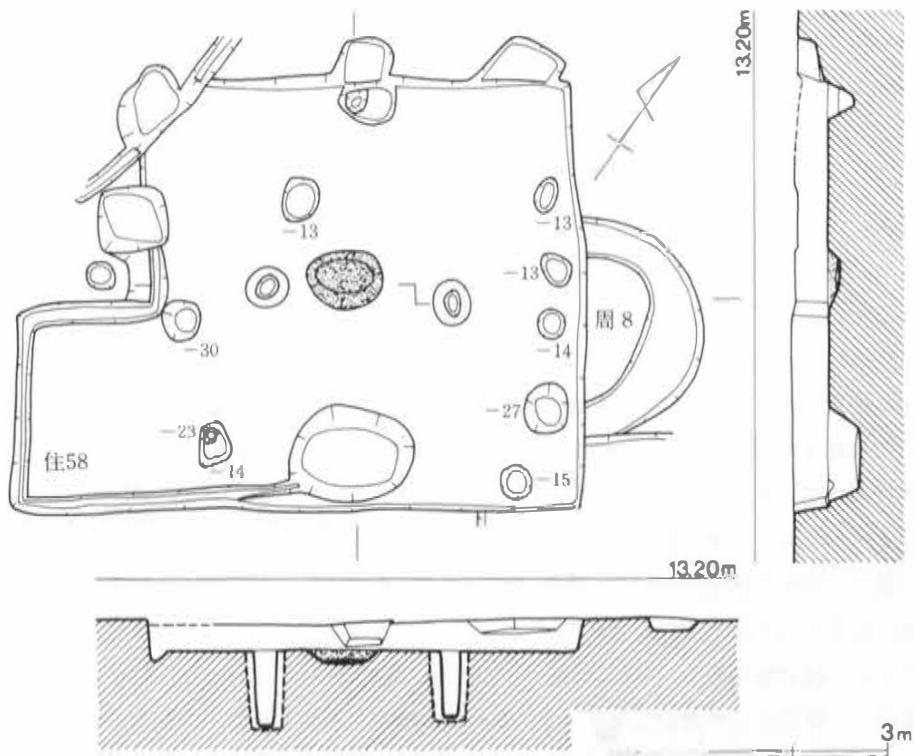
57号堅穴住居跡出土遺物

土 器 (図版39 第81図)

1は口縁部が長くしかも「く」字状に鋭く外反する甕である。肩部から胴部にかけては球形を呈する。調整は外面が荒いハケ、内面は丁寧な箠削りを施し器壁を薄くする。外面は二次加熱を受け変色する。口径 17.7cm 、器高 27.4cm を測る。

2は片口土器で半球形を呈する。調整は荒いハケと箠削りで仕上げる。胎土は良く細かい砂を僅かに含む。復原口径 29.4cm 、器高 22.5cm を測る。両者とも埋土中からの出土である。

58号堅穴住居跡 (図版 6-(2)・7-(1)・19-(4) 第82図)



第82図 58号堅穴住居跡、8号周溝状遺構実測図 (1/80)

調査区B-1区で検出した櫛穴住居跡で、8号周辺状遺溝を切り57号、64号に一部を切られている。平面形態は方形を呈し、南北壁の一側に造出し部を設ける。規模は4.60m、4.55m、壁高35.0cmを測り、造出し部は1.40m、2.10mである。床面積は21.37坪である。支柱は2本で、柱間には梢円状の炉を備えている。南壁傍には梢円形1.20m×1.00m、深さ31.0cmの屋内土壙を設けている。さらに造出し部の東部には柱間1.20mの2本の柱穴がみられ、出入口の上部の支柱と考えられる。東壁沿いには5本の柱穴が規則的に配されているが機能は捉めない。造出し部から壁内土壙にかけて焼付いたことは周溝が廻る。住居の柱間の主軸と壁とは平行せず、柱間が壁に対して東方向にずれている。

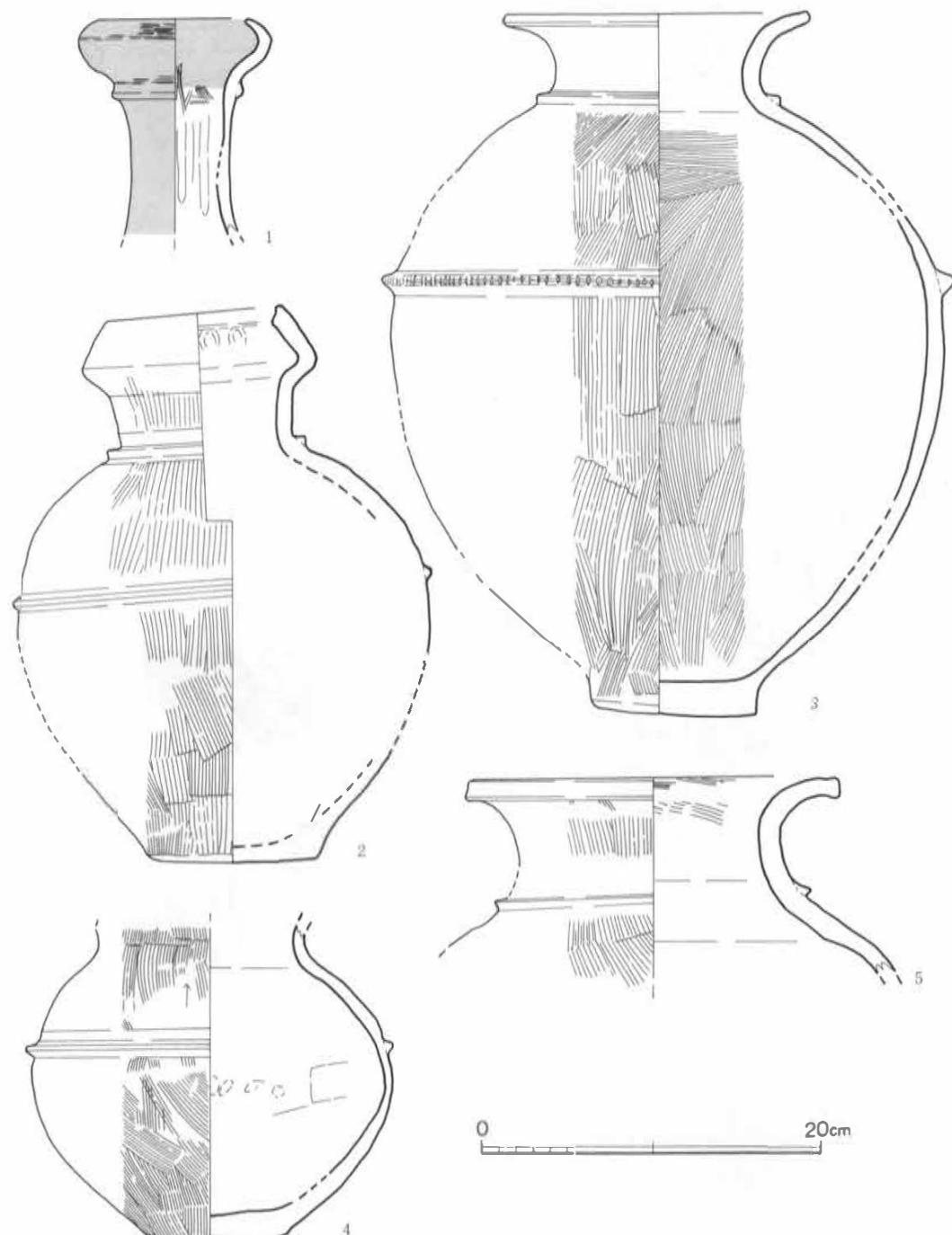
出土遺物は多く盤・甕・瓶・高杯・鉢・器台立脚の他磁石があり、二次加熱を受けた土器が多く焼失住居であろう。

出土

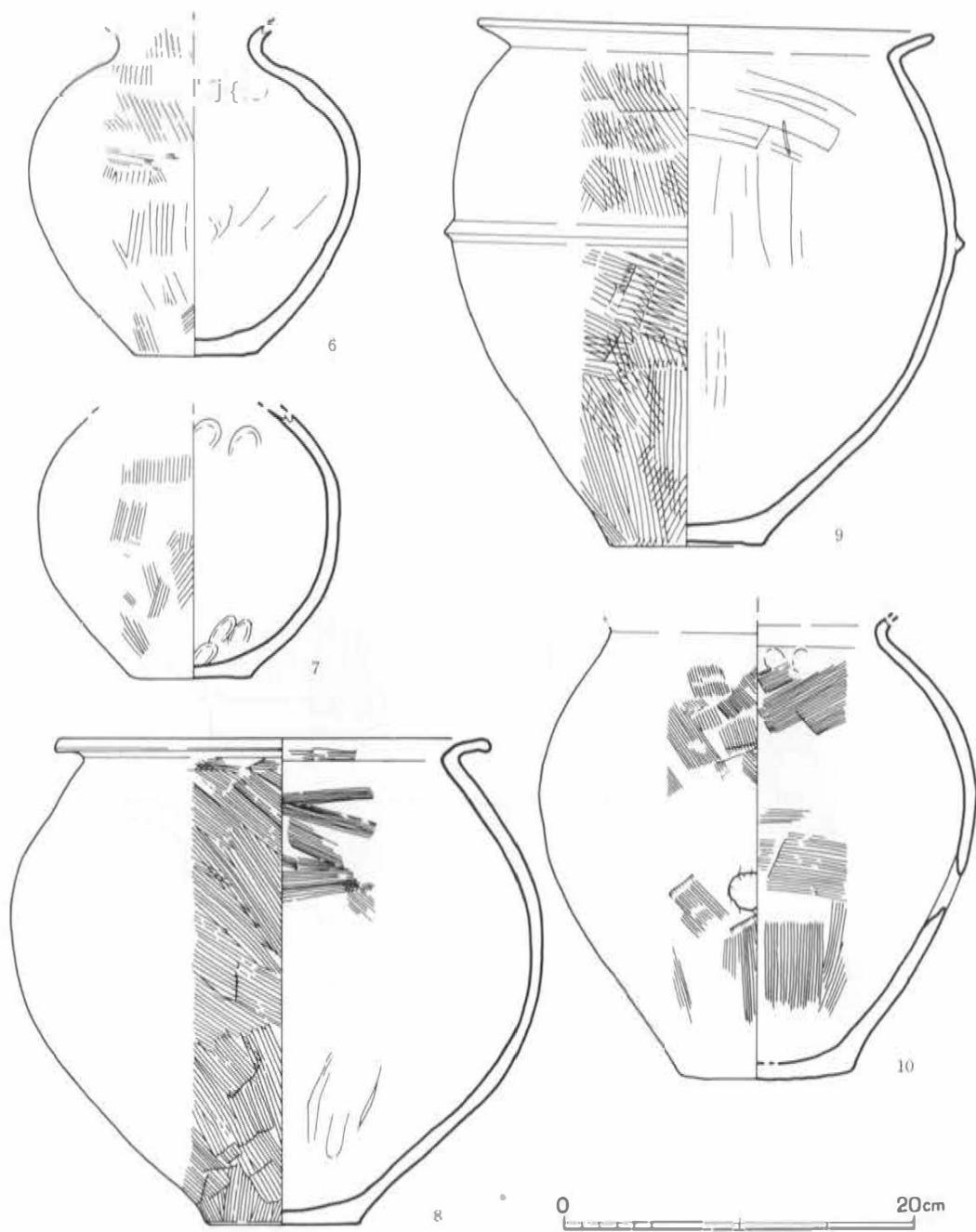
土器(図版39・40 第83・84・85・86圖)

番は1～7がある。1は所謂袋口縁部で口部下を欠損する。口縁直下には三角凸唇を付す。調整は川塗り焼付であるが表面が風化し剥落する。口径8.8cmを測る。埋土中からの出土。2は複合口縁部で口唇部を肥厚させる。頸部は細まり肩部と胴部に凸唇を貼付する。調整は荒いハケとナデで仕上げる。口径10.4cm、底径10.0cm、器高22.2cm。埴土中と床面から出土した破片が接合した。3は朝顔状に外反する口縁部を有し、口縁部に比較して胴部は大きく球状を呈する。肩部には三角凸唇、胴部半には刻み目を密に配する台形状凸唇を貼付する。底部は細まり不安定な平底をなす。調整は内外面ともハケで仕上げる。口径18.0cm、底径9.8cm、器高40.8cmを測る。床面から出土である。4は頸部ヒモを欠く。胴部はやや扁平で三角凸唇を貼付する。調整はハケとナデ。底径8.3cmを測る。5は鋤先口縁が退化した部で大きく外反する口縁部を付す。周部には鋤い三角凸唇を付す。口径21.6cm。両者とも埋土中と床面からの破片が接合した。6・7は同タイプの壺で口縁部と頸部ヒモを欠く。両者とも肩部の張りが強い。調整は荒いハケ目が残る。6の上半は様が付着する。底径は6.4cmと6.8cmを測る。床面からの出土である。

盤は8～14がある。8は他の甕に比べて扁平で鋤く「く」字状に外反する口縁を有す。体溝は大きく張り、粗味の底部につづく。調整は荒いハケとナデ。復原口径21.7cm、底径9.0cm、器高27.5dm。直からの出土である。9は甕一胴部に凸唇を有す甕で、口縁の外反段は鋤い。調整は荒いハケ目と擦過痕が残る。口径25.9cm底径8.7cm、器高29.3cmを測る。10は口縁部を放題に打火したもので、調整にも外側から穿孔する。器外面は暗褐色を呈しヒ料土の焼付が考えられる。調整は細いハケ目が残る。何らかの祭祀に使用された器であろう。床面からの出土。11は口縁は鋤く「く」字状に外反する。肩部は張り体溝は長く、細目の底部につづく。二次加熱を受け内外とも



第83図 58号竪穴住居跡出土 土器実測図その1(1/4)



第84図 58号竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)



第85図 58号竪穴住居跡出土土器実測図その3(1/4)

赤変する。口径26.6cm、底径7.8cm、器高34.7cmを測る。12・13は小振の甕で前者は口縁の外反度が強く、胴部も張る。両者ともハケとナデで仕上げる。

12の復原口径21.9cm、底径6.0cm、器高22.6cm。13は口径17.4cm、復原底径5.8cm、器高21.7cmを測る。床面からの出土である。14は脚台付甕で外面は二次加熱を受けているようである。復原口径19.1cm、底径10.0cm、器高23.6cmを測る。埋土中からの出土。

15は瓶で焼成前に穿孔している。埋土中からの出土。

16は完形に近い鉢で床面からの出土である。口径17.5cm、底径8.0cm、器高17.3cm。18の鉢は口縁部を僅かに内側させ上底をなす。復原口径14.6cm、底径5.6cm、器高6.9cmを測る。床面からの出土。その他20、21の鉢は小型で両者とも二次加熱を受け黒ずむ。前者の口径12.0cm、底径6.5cm、器高7.8cm。後者は口径11.6cm、底径4.6cm、器高7.0cmを測る。床面からの出土である。

17は高杯の脚部で高杯にしてはつくりが粗い。柱状部は短く、裾部は大きく開く。脚と杯部の接合部は指で強くナデしている。外面二次加熱を受け黒く煤ける。裾部径17.0cmを測る。床面からの出土である。

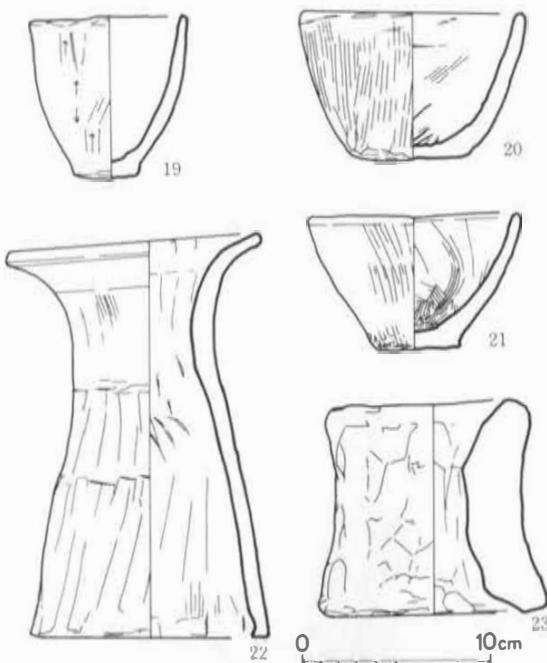
22は完形の器台で口縁は大きく朝顔状に開く。最小径が上半にあり、裾部の開きは鈍い。調整はナデと擦過で仕上げ、外面二次加熱を受ける。口径13.4cm、裾部径12.6cm、器高20.8cm。埋土中からの出土。

23は支脚形の土器で器壁は非常に厚い。調整も粗く凹凸が激しい。全体に二次加熱を受けて赤変する。口径10.8cm、底径12.2cm、器高11.0cmを測る。床面からの出土である。

石 器 (図版4) 第87図)

粘板岩質の仕上げ砥石がある。完形品で研面は6面である。

現長9.0cm、幅4.4cm、厚さ2.0cmを測る。床面からの出土である。

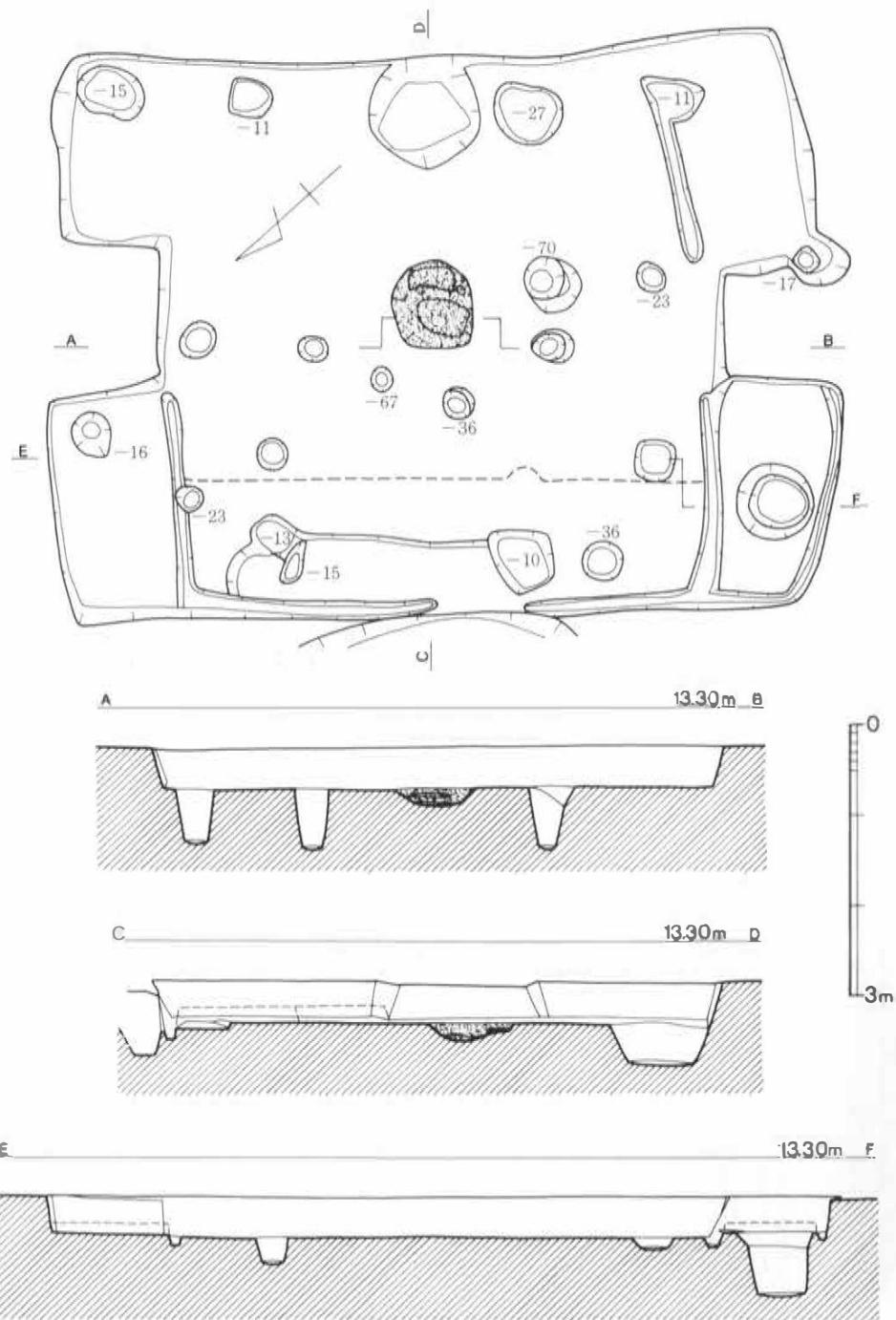


第86図 58号竖穴住居跡出土土器実測図その4(1/4)



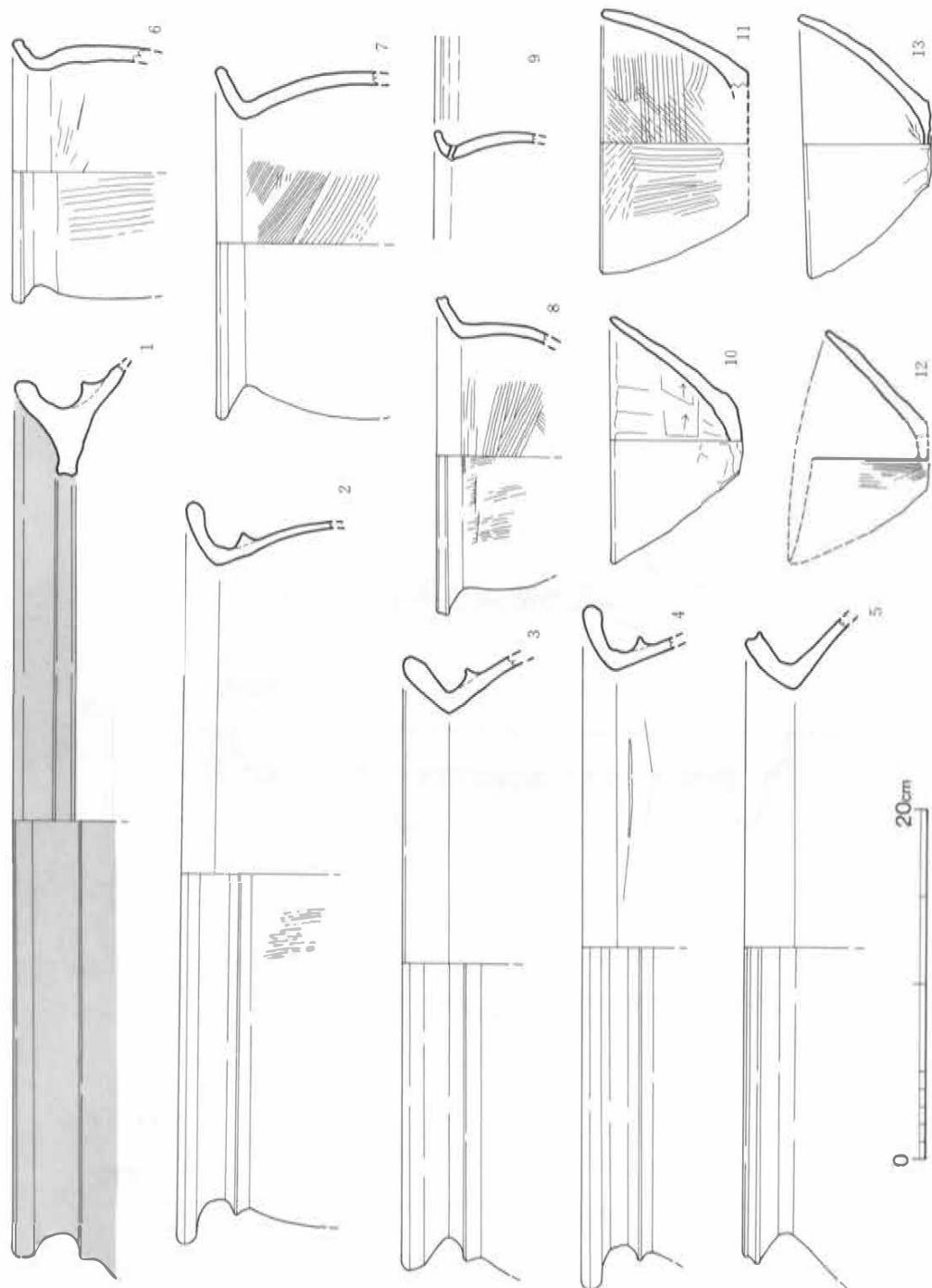
第87図 58号竖穴住居跡
出土石器実測図(1/2)

59号堅穴住居跡 (図版7-(1)・19-(1) 第88図)



第88図 59号堅穴住居跡実測図 (1/80)

第89图 59号竖穴住居跡出土土器実測図(1/4)



調査区の北西で検出した大型の竪穴住居跡で、7号周溝状遺構で一部切られている。平面形態は特殊な形状を呈し、短壁の西側中央には内側に突出部を設け類稀な住居である。規模は長壁7.80m・8.00m、短壁6.30m、壁高40.0cmを測る。床面積は44.59m²である。支柱は2本であるが、東壁際に1本の支柱を立てている。支柱間は2.60mを測り、中央には壁面に焼痕を残す2段掘りの炉を備える。短壁に平行して3箇所にベット状遺構を貼付し、それに沿って短い周溝を掘る。北壁側には幅1.35mにわたって床面が変色しており、この部分にもベット状遺構の存在が考えられる。対峙する長壁際には径1.20m、深さ50.0cm弱の屋内土壙を備えている。西壁のベット上には径82.0cm、深さ70.0cmの所謂屋内貯蔵穴を掘込んでいる。住居の主軸は支柱間軸からN42°Eを示す。

出土遺物は甕と鉢の他、粘土塊がある。

出土 遺 物

土 器 (第89図)

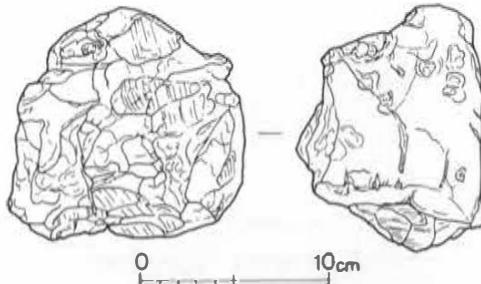
甕は1～9がある。1は中期の「T」字状口縁の系譜を引く甕で、口縁下には三角凸帯を貼付する。器面が風化し不明瞭であるが、円が塗布されていたと考えられる。復原口徑50.0cm。2～5は「く」字状に外反する口縁を有す甕で、口唇部は肥厚させる。頸部内面の稜は3、5が明瞭である。5を除くと頸部に三角凸帯を貼付する。胎土はすべて砂粒の他に赤褐色粒を含む。2の口徑42.0cm、3は35.0cm、4は39.0cm、5は36.0cmを測り、すべて埋土中からの出土である。6、7は小振の甕で7の口縁は鋭く外反する。6の復原口徑15.0cm、7は20.0cmを測る。9は小型の甕で、外反する口縁を短くつくる。頸部には外側から2孔一対の孔を穿つ。

8、10～13は鉢である。8の鉢は口縁部を外反させ体部は丸味を持つ。調整はハケが主体。復原口徑17.6cm。11は内外にハケを施す。復原口徑15.1cm、底径8.2cm、器高8.4cmを測る。

10、12、13は手捏ね状の小型の鉢で口縁部と比較して底部は小さい。10は底部が丸味を持ち不安定である。10の口徑14.0cm、底径5.0cm、器高7.5cm。12の復原口徑15.0cm、底径4.8cm、器高7.1cmを測る。埋土中からの出土である。

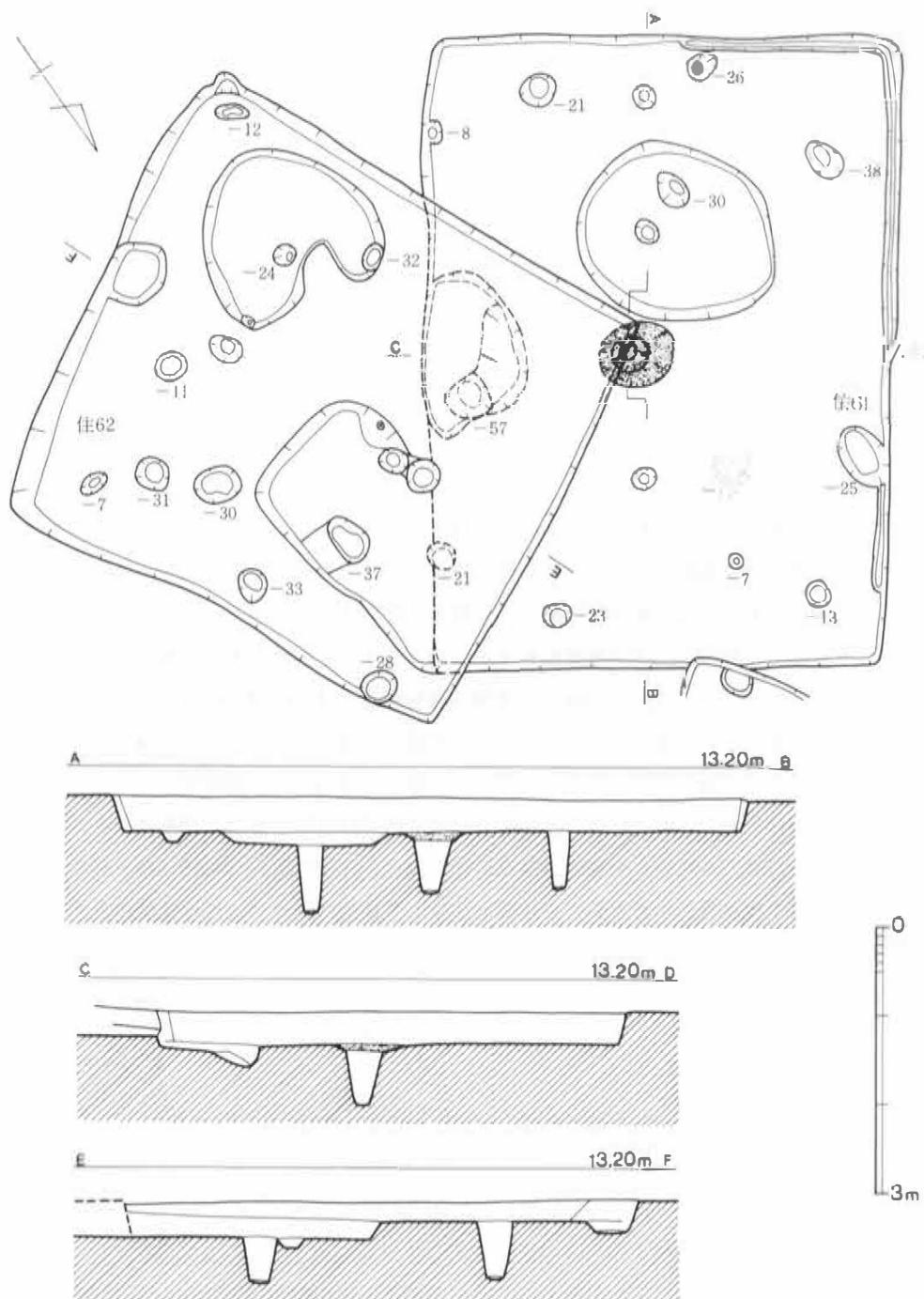
粘土塊 (第90図)

埋土中から出土した意味不明の粘土塊がある。粘土塊は焼成されており、部分的に削り痕がみられることから、住居内で完略な土製品や手捏ね土器を製作するための粘土が何らかの時点での焼成したと考えられる。



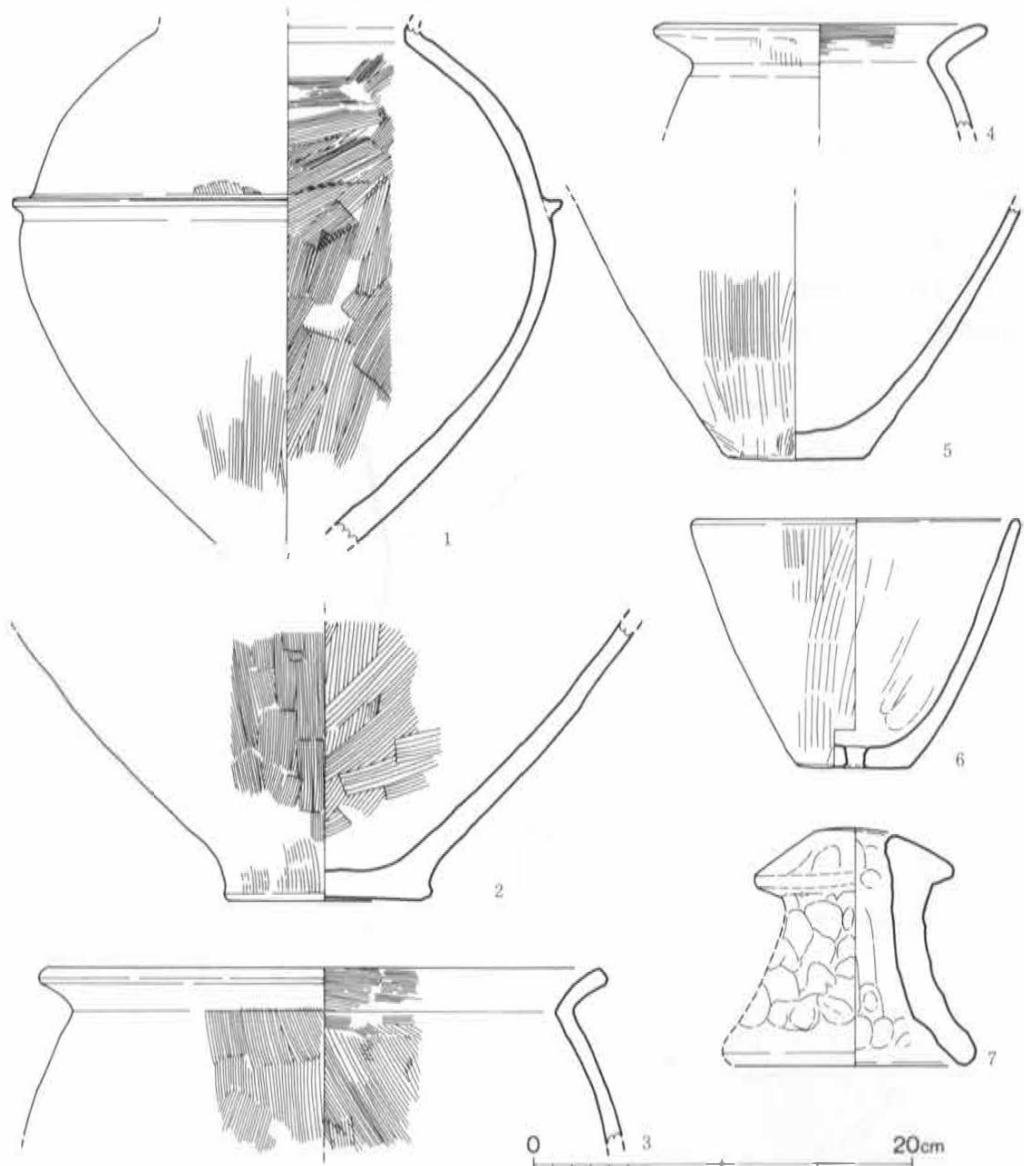
第90図 59号竪穴住居跡出土土塊実測図(1/4)

61号竪穴住居跡 (図版 7-(2)・20-(1) 第91図)



第91図 61号、62号竪穴住居跡実測図(1/80)

62号より古い住居で、床面下には住居より古い1号土壙がある。平面形状は長方形を呈する。規模は長櫛が7.00m・7.10m、短櫛が5.30m・5.00m、櫛高30.0cm~40.0cmを測る。床面積は35.06m²である。支柱は2本で、柱間に円形の炉を備えている。炉の下層には柱穴があるが、当該住居に伴うものではない。62号住居と重複する壁際に不整椭円形の屋内土壙を掘っており、土壙内に1本の柱穴を配している。周溝は南・東櫛に一部廻らす。住居の主軸は柱間軸からN 35° E



第92図 61号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

を示す。

出土遺物は鐵・銅・錫・支脚の他、磁石、石庖丁、網羅網などの石器、土製円盤がある。

出土

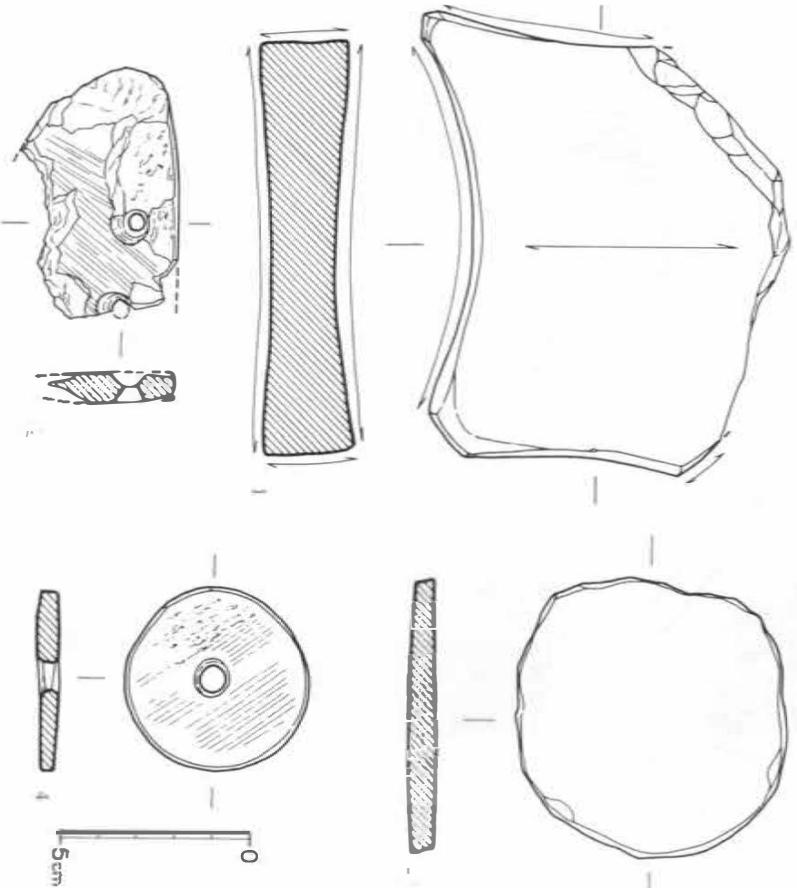
土器 (図版41 第92図)

壺は1・2がある。1は側部片で上半に台形状の凹部を廻らす。底部近くは細まる。調整はハケとナデで仕上げる。腹内土壤からの出土である。2は壺の底部で底径10.8cmを測る。

甕は3～5がある。3は「く」字状に外反する口縁部を有し、肩部は張る。ハケで仕上げる。復原口径30.0cmを測る。4は小壺の甕で、復原口径17.6cmを測る。

6は鉢形の壺で荒いハケとナデで仕上げる。復原口径17.4cm、底径6.0cm、高さ13.0cmを測る。

7は支脚で、口縁部は肥厚し端部は外傾する。器壁は厚くつくれられ、器部は僅かに開く。調整は指頭研磨がみられ、全面に二次加熱を受ける。口縁径10.5cm、器部径13.3cm、器高12.5cmを測る。



第93図 61号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2)

石 器 (図版41 第93図)

1は砂岩製の荒砥である。約1/2を欠損する。研削面は上部の欠損部を除いてすべての面を使用している。屋内土壤内からの出土である。

2は砂岩系の石材を使用した石庖丁片である。全面が強い二次加熱を受け剝離が著しい。穿孔径4.0mmを測る。埋土中からの出土である。

4は雲母片岩製の紡錘車で整美なつくりである。表面は擦痕が残り、二次加熱を受け黒く変色する。径4.7cm×4.8cm、厚さ5.0mm。孔は両方向から穿つ。孔内7.0mm、孔外9.0mmで重さ19.5gである。埋土中からの出土である。

土製品 (第93図)

3の土製円盤がある。土器片の再利用と考えられるが、断面では弧を描いておらず、底部が大型土器の再利用と考えられる。49.1gを計る。

62号堅穴住居跡 (図版7-(2)・20-(1) 第91図)

61号住居と重複する堅穴住居跡で61号住居より新しい。平面形状が方形を呈する。規模は南北壁が5.45m・5.10m、東・西壁が5.30m・5.50m、檜高20.0cmを測る。床面積は28.49m²である。支柱穴は2本で、炉址及び床面上での焼痕は認められない。床面下には12号土壙があるが、上面は貼床を施している。主軸方位は柱間軸からN21°Wを示す。その他の施設については不明な点が多い。

出土遺物は壺・甕・鉢・高杯がある。

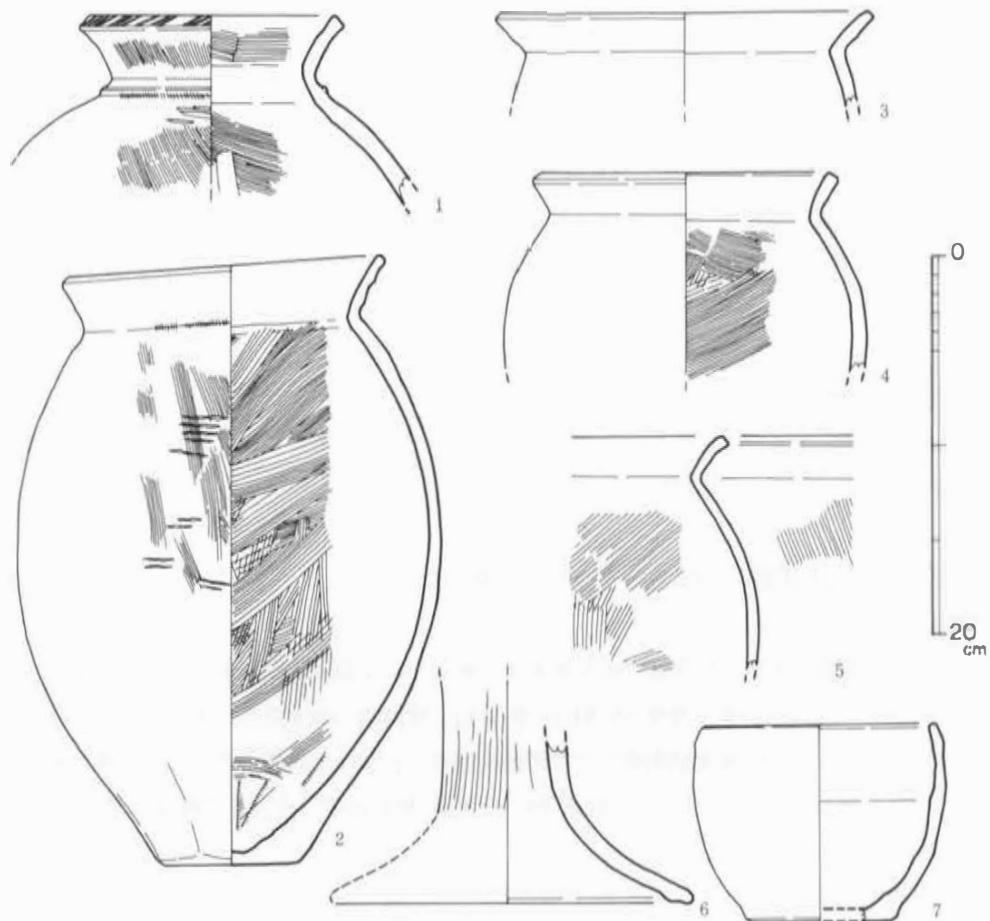
出 土 遺 物

土 器 (図版41 第94図)

「く」字状に外反する口縁部を有し、口唇部を肥厚させる壺がある。頸部には低い三角凸帯を付せる。調整は内外面ともハケを多用する。口径13.9cmを測る。埋土中からの出土。

甕は2～5がある。2は完形品で「く」字状に外反する長い口縁を有し、長胴の体部をなす。底面はやや糰まり平底を呈する。調整は外面をナデで仕上げるが叩き痕とハケ目が残る。内面はハケで仕上げる。外面は二次加熱を受け黒ずむ。口径17.0cm、底径7.5cm、器高32.0cmを測る。埋土中からの出土である。3の口径20.0cm。4は口縁の外反度が鈍く、肩部は張る。復原口径16.0cm。埋土中から出土。

6は高杯の脚部で端部を肥厚させる。裾部径19.0cmを測る。



第94図 62号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

7は口縁が内窵し、体部は丸味を有す。復原口径12.4cm、底径7.9cm、器高10.3cmを測る。埋上中から出土した。

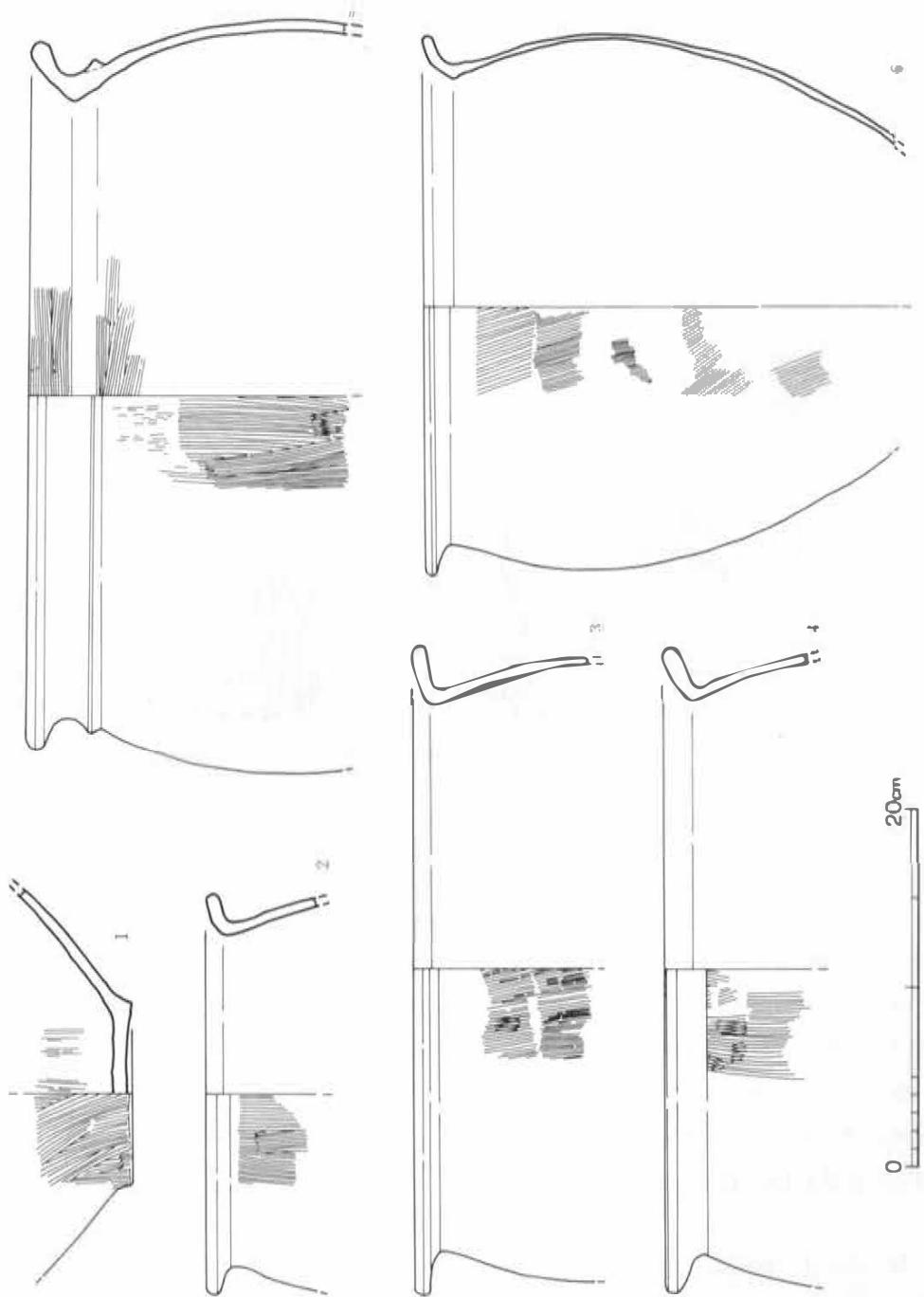
63号竪穴住居跡出土遺物

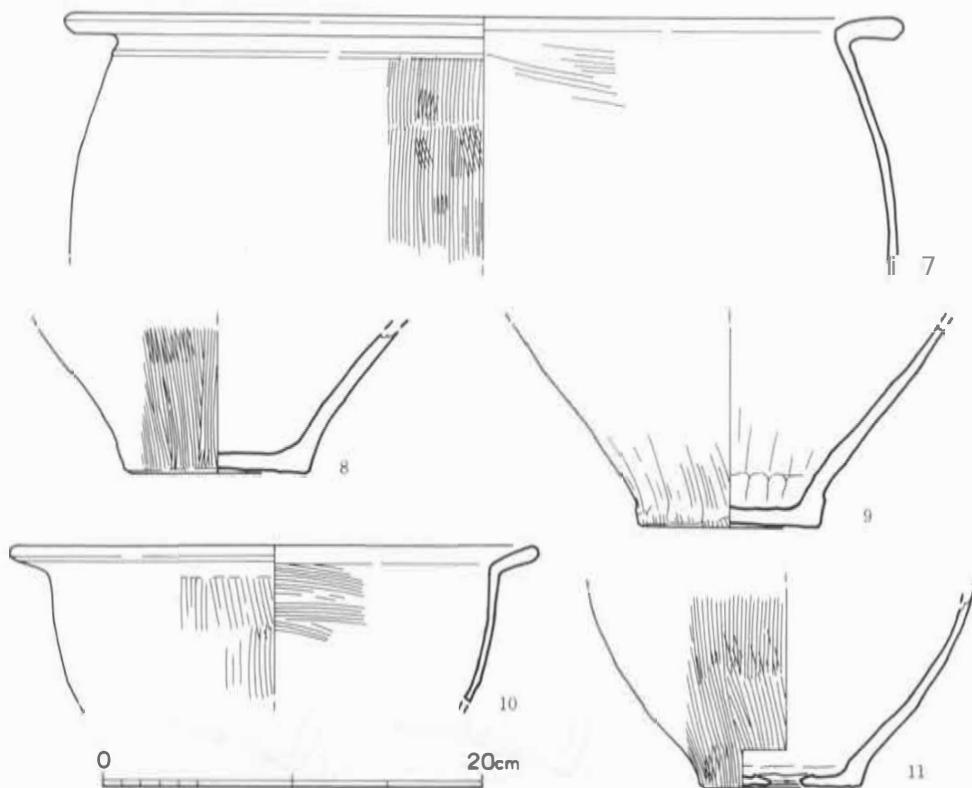
土 器 (図版41 第95・96図)

1は壺の底部で、器壁は薄くつくられる。僅かに上げ底をなし、外面ハケ、内面ハケのちナデ仕上げである。底径10.0cm。

甕は2～9がある。形状では逆「し」字状から「く」字状に移行する過渡的様相を示し、弥生

第95図 63号堅穴住居跡出土土器実測図その1 (1/4)





第96図 63号竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)

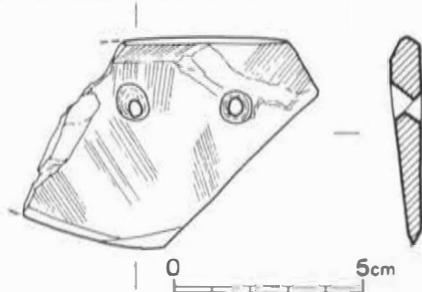
時代中期末から後期初頭の形態的変化が認められる一群である。頸部に凸帯を貼付するのは5のみである。底部はやや細まり、若干ながら上底をなす。総じて調整はハケとナデで仕上げている。4、6、9は加熱を受け赤変する。2の口径22.2cm、3は35.8cm、4は36.0cm、5は39.0cm、6は30.0cm、7は42.0cm、8の底径9.8cm、9は9.0cmを測る。

10は鉢で斜め上方に外反する口縁部を有す。ハケとナデで調整する。器面は二次加熱を受け淡く赤変する。復原口径28.0cmを測る。

11は瓶に使用されたもので体部は丸味を持つ。底部には焼成前に孔を穿つ。外面には煤が付着する。底径8.4cmを測る。

石 器 (図版41 第97図)

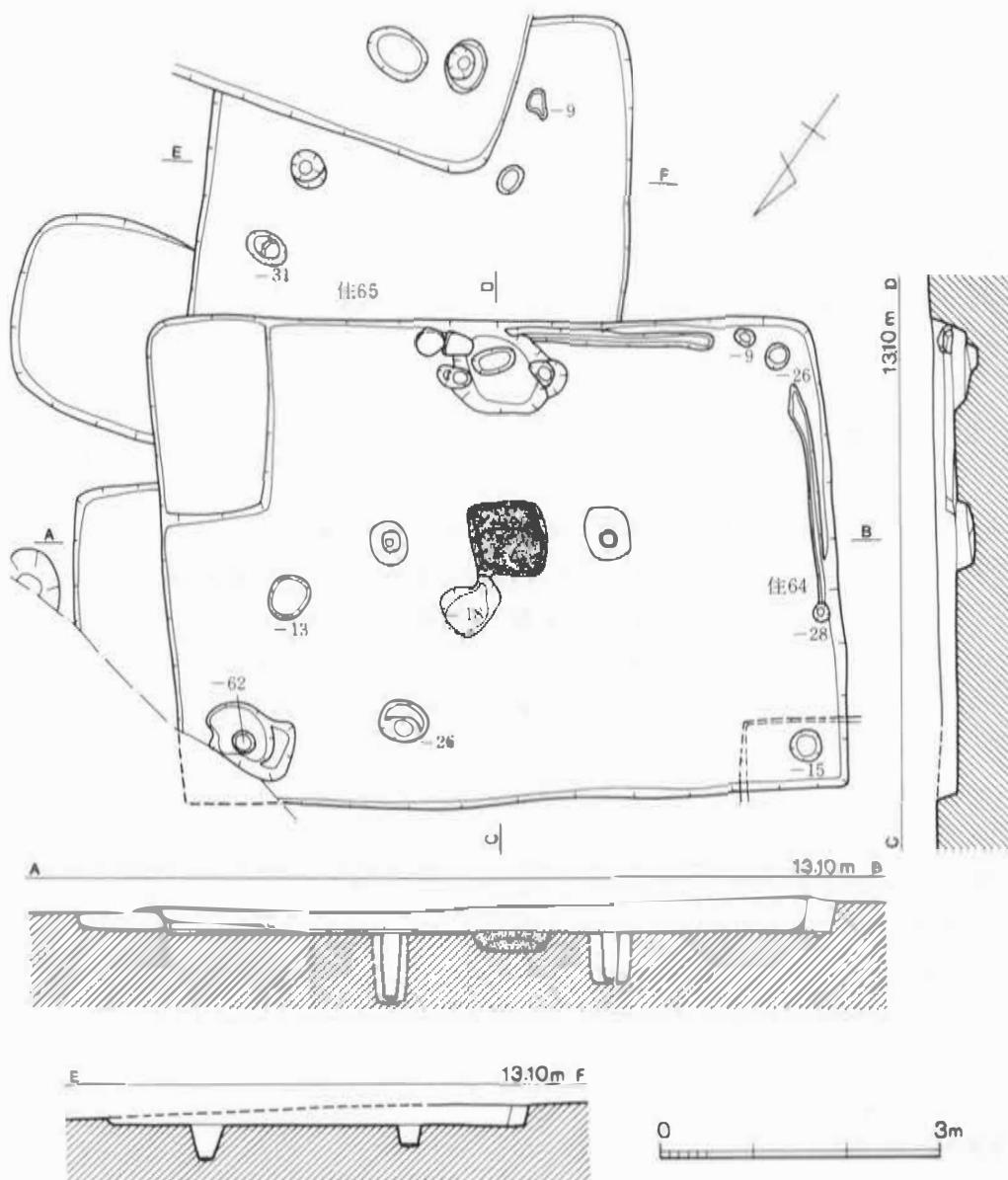
硬質砂岩製のやや大型の石庖丁片がある。両方向を欠失し、孔の部分が残る。背部は整美な



第97図 63号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)

面取りを施し、鋭い刃部を研ぎ出す。孔は両方向から穿つか、穿孔部の位置がくいちがう。幅は5.5cmを測る。

64号竪穴住居跡 (図版 7-(1)・19-(3)・(4) 第98・107図)



第98図 64号、65号竪穴住居跡実測図 (1/80)

3軒の住居の痕跡があるがすべての住居より新しい。平行形態は長方形の山型する。規模は南北壁が7.08m・7.10m(復原)、東・西壁が5.20m、5.00m(いざれも復原)、壁高20.0cm~30.0cmを測る。復原床面積は35.37坪である。支柱は2本で柱間は2.35mである。柱間に内陣門形の施設著いがを備える。南壁の中央には不整形の屋内土壇を設け両端には小さな柱穴を配する。櫛内土壇の傍には河原石の作業台2個が置かれていた。東壁の一部には幅1.30m、長さ2.10mのベットを付せている。

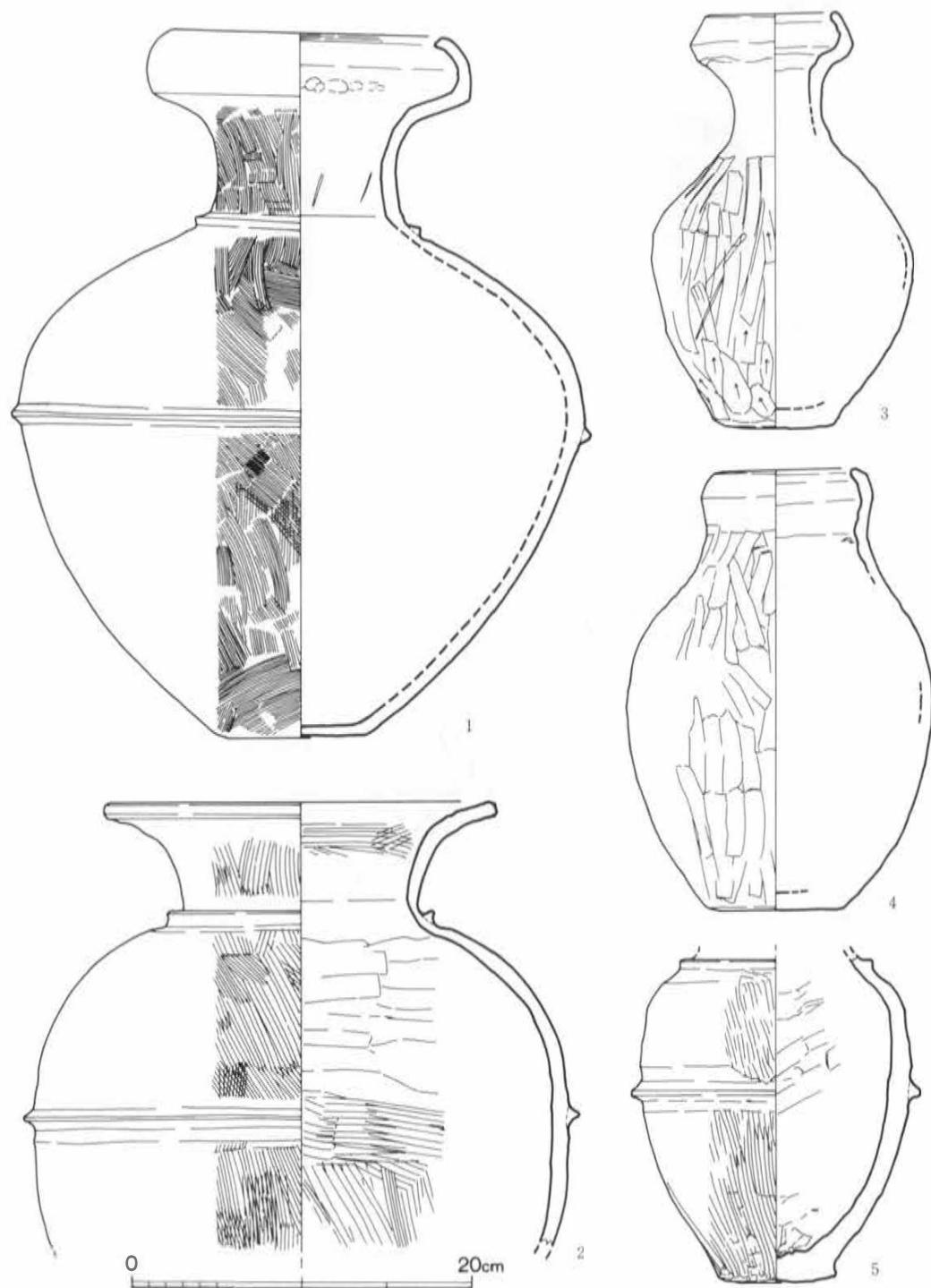
当該堅穴住居は火災に遭遇しており、床面上には多量の焼土と炭化材が散乱していた。それに伴って多数の土器が原位置を保った状態で出土しており、焼失後は放置されたまま焼絶したらしく。土器の出土状況は床面に密着するもの、焼土上にあり床面よりやや上間に転倒するものなど層位的に一様でない。

焼失住居のため出土遺物も多く、当時の1軒の住居内の燃焼構成が捉えられる。遺物は堅・鎌形土器・鉢・器台・支脚・子母ね土器・土製玉子の他、砥石、柱状片列石斧、不明石器がある。

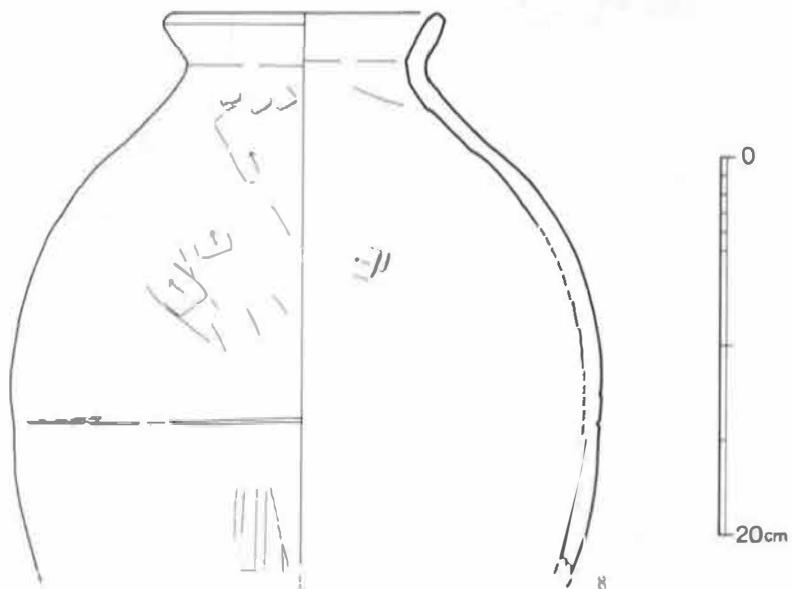
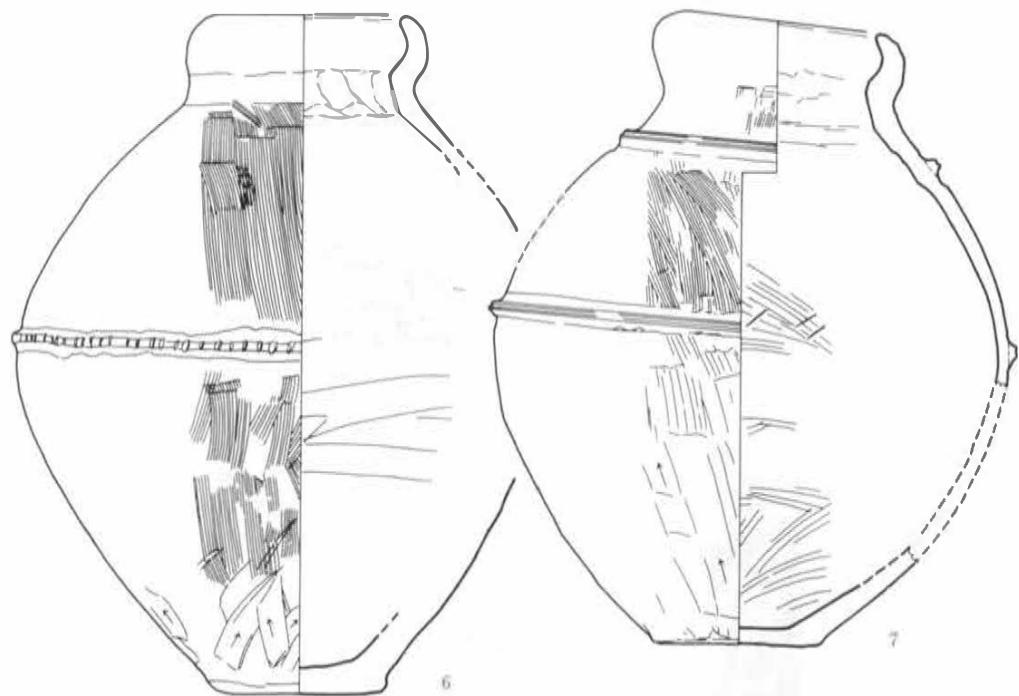
出 土 遺 物

— 器 (図版41・42・43・44・45 第99・100・101・102・103・04・15・106・107図)

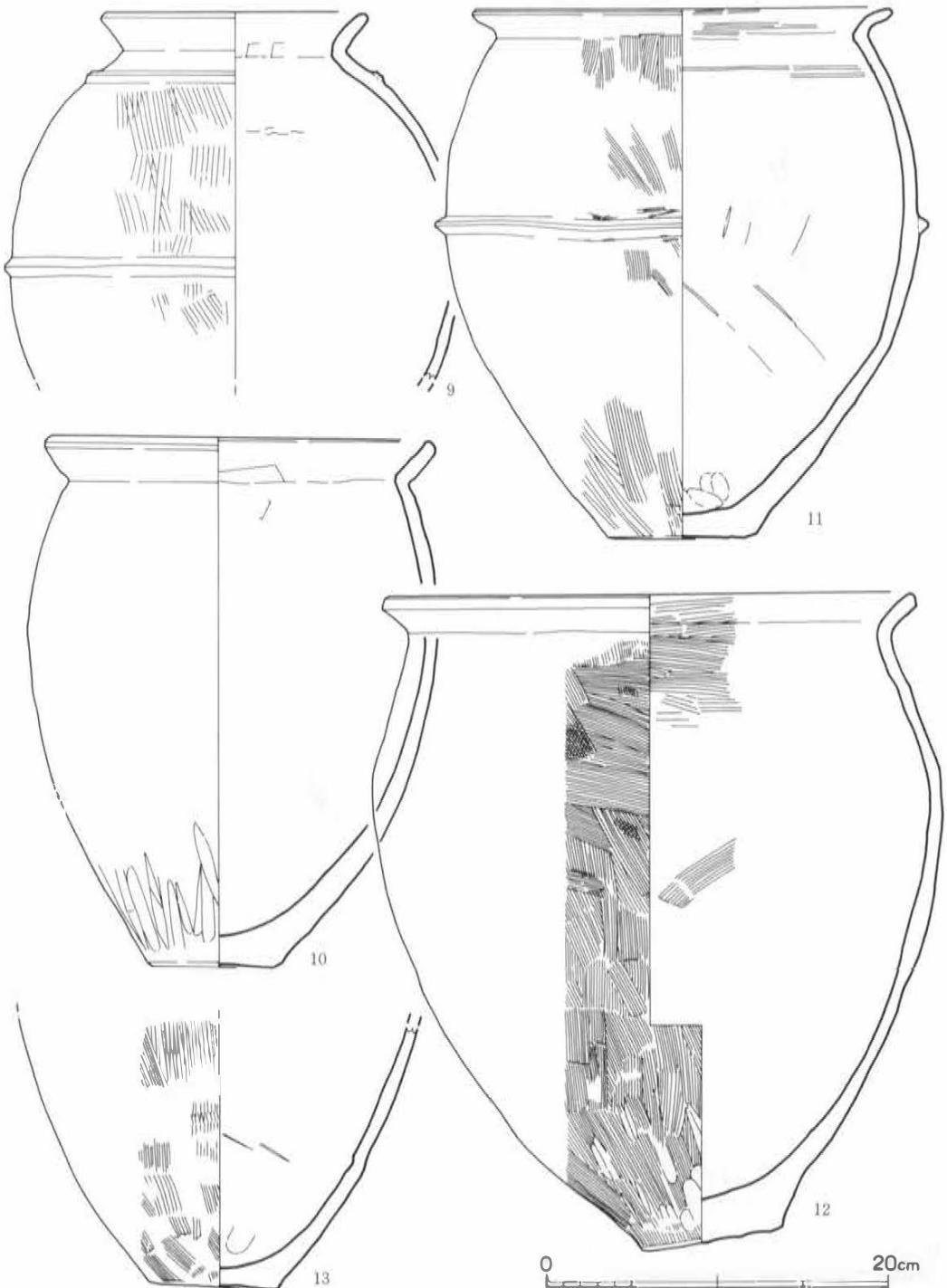
1は1~9があり完形品が多い。すべては三次加熱を受けている。1は袋状口縁の系譜を引くもので口縁は丸く内凹する。頸部は頗るしかめ細い。肩部から体部の張りは大きく、肩部と胴中央には三角及び台形の凸凹帯を付す。調整はハケとナテで仕上げる。口径15.6cm、底径8.2cm、器高41.3cmを測る。床面からの出土である。2は口縁部が湖底状に崩く所謂「伏口縁」の系譜を引く形で、肩部から胴部にかけての張り・著しい。肩部と胴部上半には三角凸凹帯を備付する。調整は荒いハケが主体である。復原口径23.1cm、壇土中から出土した。3、4は小型の複合口縁で、されど完形品である。當にしてはつくりが粗い。3の胴部外面は籠状工具による擦過痕が残る。口径8.0cm、底径7.2cm、器高24.2cmを測る。4は完全な複合口縁の形狀はとらず、袋状口縁の退化した形態を示す。口縁は内凹させ、肩折沿の縫は不明瞭である。肩部は撫拭で胴下半は丸味を持ち安定感がある。調整は3と同様である。口径8.3cm、底径8.0cm、器高25.5cmを測る。床面からの出土。5も小型の盤で頸部上半を欠く。肩部に三角凸凹、胴部に台形凸凹帯を附付する。器壁は厚くつぶれ粗い感を受ける。調整は外面が荒いハケ、内面は擦過痕を残す。口径7.0cm、壇土中からの出土である。6、7は同タイプの盤で完形品である。口縁部のつくりは1と同様であるが、体部にセベロ縁が小さい。肩部は撫拭で胴中央部に最大張りがある。6は中央部に刻みを配する台形凸凹帯を付し、7は肩部と胴部に「M」字状凸凹帯を貼付する。調整はハケ、擦過、ナテで仕上げる。前者の口径9.8cm、底径9.5cm、器高35.7cm、後者は口径10.3cm、底径9.0cm、器高33.0cmを



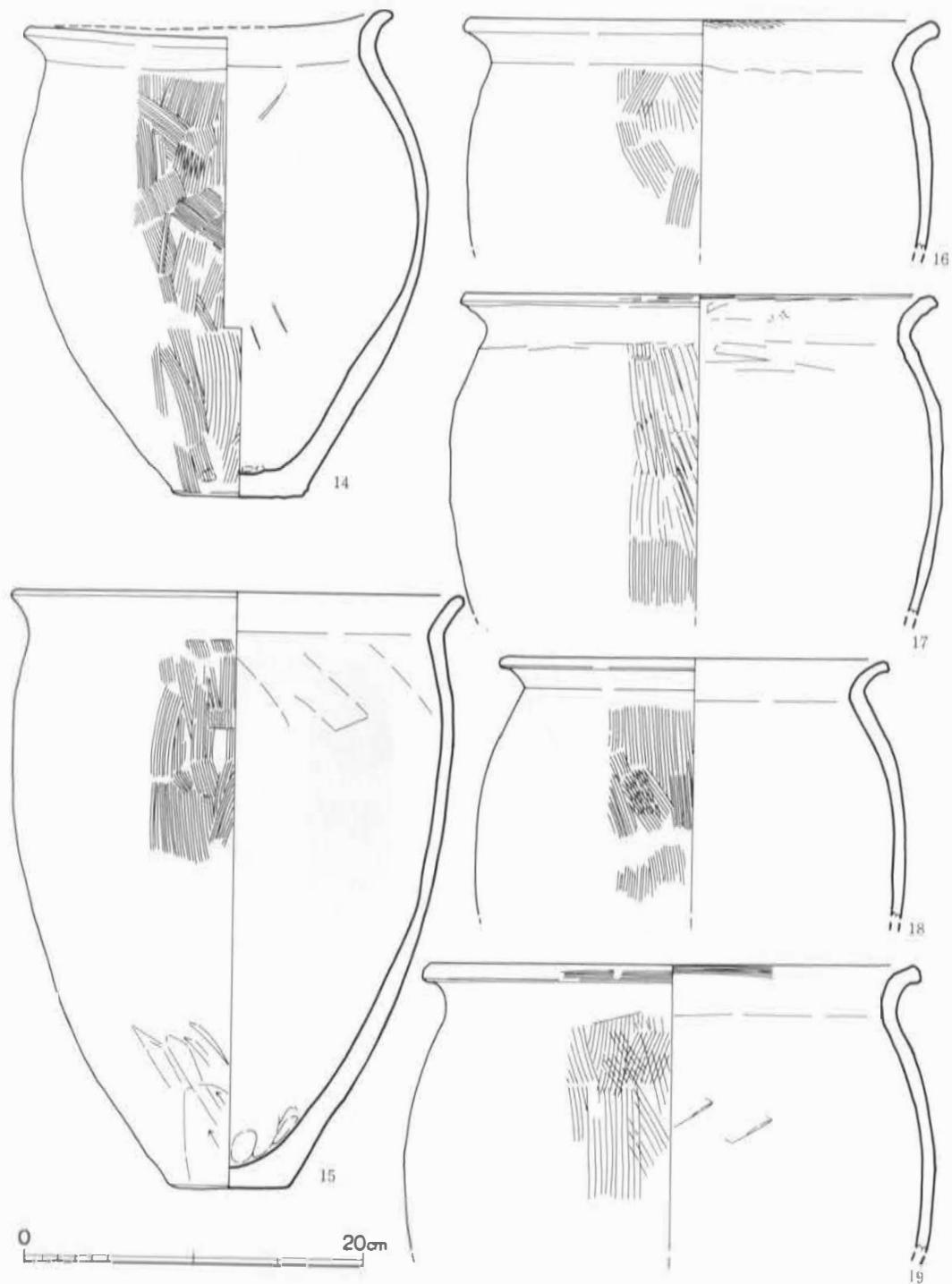
第99図 64号竪穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)



第100図 64号竪穴住居跡出土土器実測図その2 (1/4)



第101図 64号竪穴住居跡出土土器実測図その3 (1/4)



第102図 64号住居跡出土土器実測図その4(1/4)

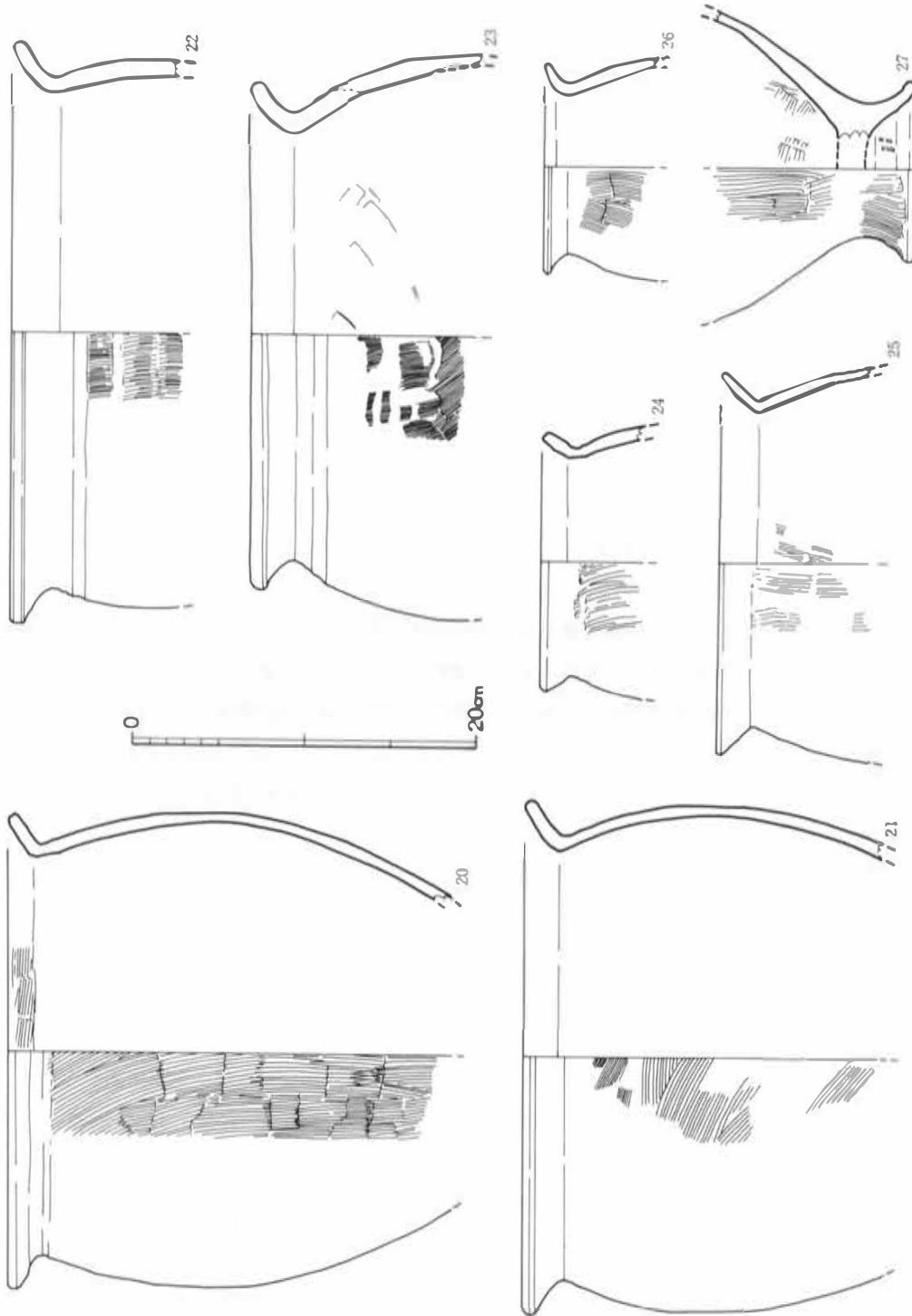
測る。床面からの出土である。8は体部に比較して小さい口縁を有す壺である。調整は擦過のちナデている。胴部には細い沈線が部分的に残っており、凸帯を貼付する目安としている。凸帯が剥離した感は受けない。口径14.8cmを測る。9は「く」字状に短く外反させた口縁を有す壺で、胴下半を欠損する。肩部には「M」字状、胴部には三角凸帯を付す。調整は荒いハケとナデで仕上げる。口径15.5cmを測る。埋土中からの出土である。

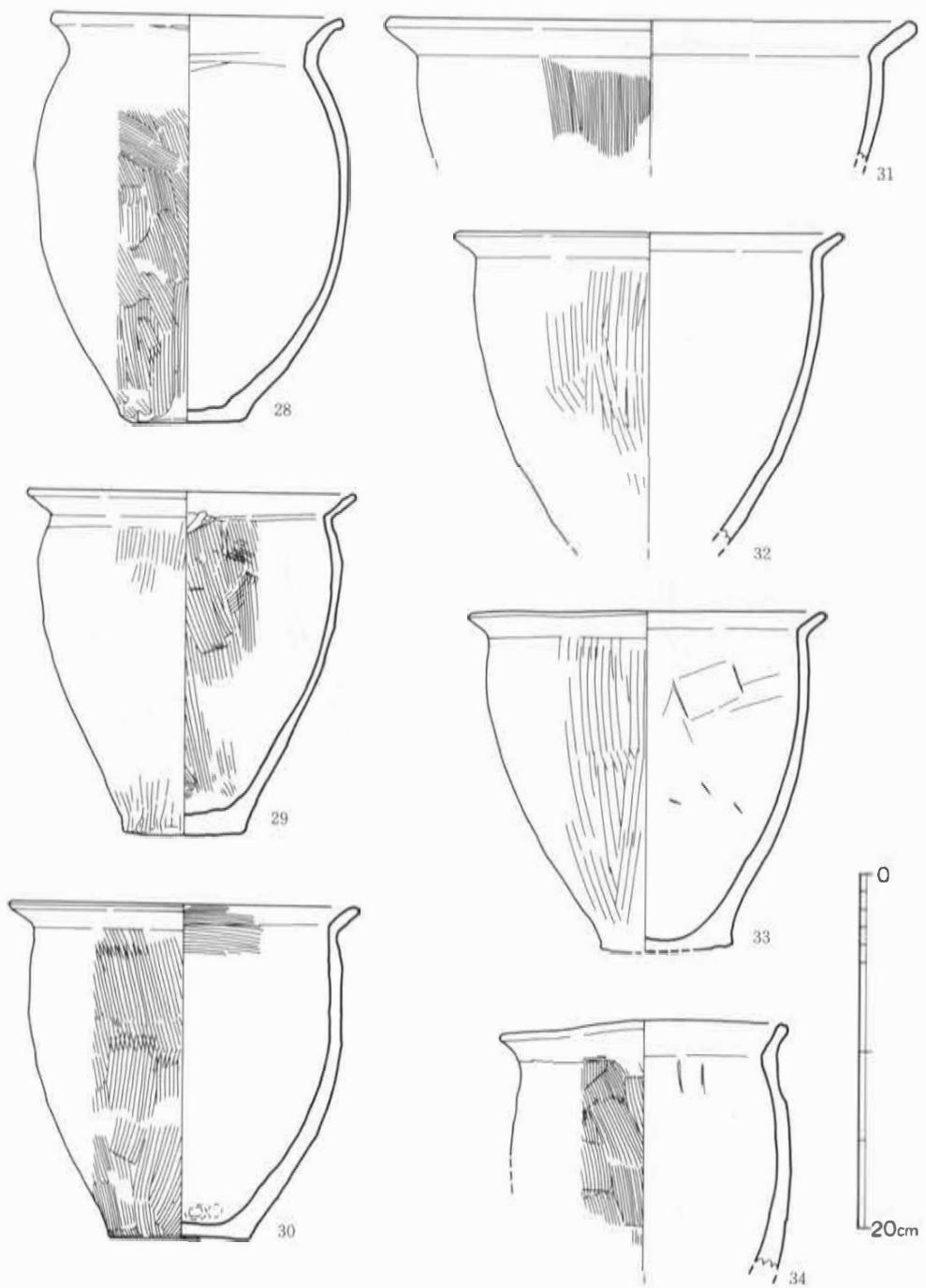
甕は出土数が多く、10~34がある。この内、24~34はやや小振の甕である。10~23の口縁部の特徴をみるとすべてが「く」字状に外反するが、この中で胴部が球形に近く中央に凸帯を付するもの、口縁が反り氣味に外反し、頸部内面に稜がつかず肩部が張るもの、直線的に外反し頸部に明瞭な稜をなしやや撫で肩のもの、胴部が長胴のものなどがある。調整は総じて外面がハケ、内面がナデで仕上げる。胎土は総じて荒く、砂粒、石英、角閃石、赤褐色粒を含む。すべて二次加熱を受け、床直の埋土中と床面からの出土である。22、23の甕は肩部に凸帯を貼付していたものが剥離したと考えられる。10の口径22.7cm、底径7.9cm、器高30.9cm。11の口径24.2cm、底径8.5cm、器高30.7cm。12の口径31.0cm、底径8.4cm、器高37.7cm。13は底径7.3cm。14は口径21.4cm、底径7.9cm、器高27.7cm。15は口径26.5cm、底径7.0cm、器高35.0cm。16は口径28.0cm。17は28.2cm。18の口径23.0cm。19の口径29.4cm。20の口径27.8cm。21の口径30.0cm、22は口径34.0cm。23は口径29.6cmを測る。24~34の小振の甕も頸部内面の稜が鮮明のものとそうでない甕がある。27は低い脚台が付く。31は鉢になる可能性がある。調整と胎土は前記の甕と同様であるが、内面にハケを残す甕もある。24の復原口径15.0cm。25は復原口径22.0cm。26は復原口径12.4cm。27の基部径10.6cm。28は口径16.5cm、底径7.1cm、器高22.9cm。29は口径18.4cm、底径6.8cm、器高19.2cm。30は口径19.7cm、底径8.0cm、器高18.9cm。32は口径22.0cm。33は口径20.0cm、底径7.4cm、器高19.4cm。34は口径16.2cmを測る。すべて二次加熱を受ける。

35は樽形土器である。口縁下には台形凸帯を貼付する。外面は丹塗り磨研で内面はナデで仕上げる。復原口径30.2cm。

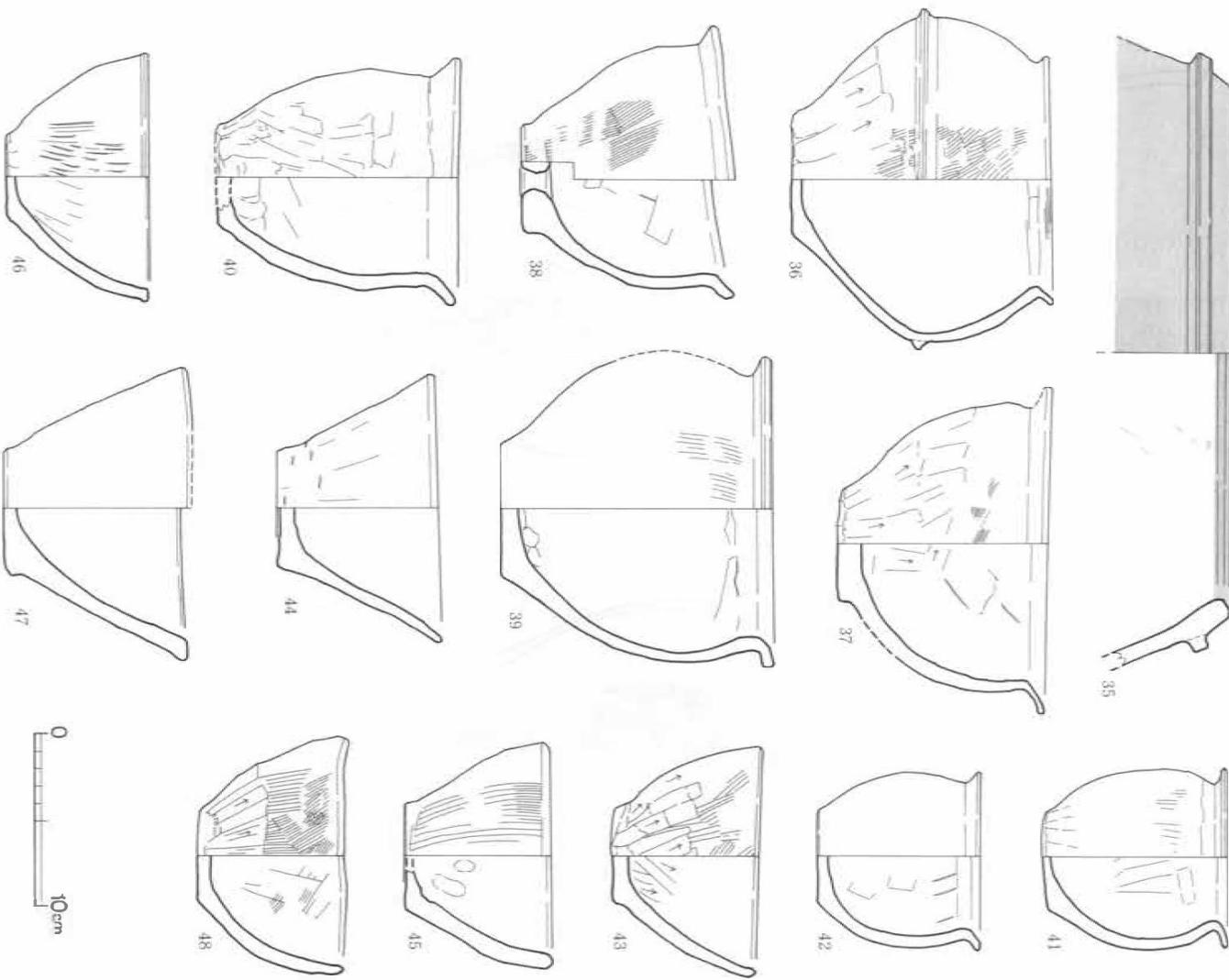
36~50は鉢としたが、36、39、40、41、42は小型甕の範疇と考えた方が良いかも知れない。口縁部が「く」字状になるものとそうでないもの(43~50)とがある。36は胴部に三角凸帯を付せる。36、37、40の外面は擦過痕が残る。38は瓶として使用されている。49、50は口縁部を逆「L」字状に外反させる。殆どが二次加熱を受け淡く赤変する。床直上埋土中か床面からの出土である。36の口径13.8cm、底径7.3cm、器高14.8cm。37は口径18.0cm、底径6.4cm、器高12.2cm。38の口径15.6cm、底径6.2cm、器高12.2cm。39の口径17.8cm、底径7.6cm、器高15.4cm。40は口径14.3cm、底径5.7cm、器高13.8cm。41は口径10.4cm、底径5.6cm、器高10.7cm。42は口径10.3cm、底径5.3cm、器高9.4cm。43の口径12.8cm、底径5.4cm、器高8.5cm。44の口径15.3cm、底径6.8cm、器高9.2cm。45の口径13.0cm、底径6.05cm、器高8.4cm。46は口径14.2cm、底径5.0cm、器高8.1cm。47は口径16.8cm、底径7.3cm、器高10.8cm。48の口径13.2cm、底径5.0cm、器高8.5cm。

第103図 64号竪穴住居跡出土土器実測図その5(1/4)

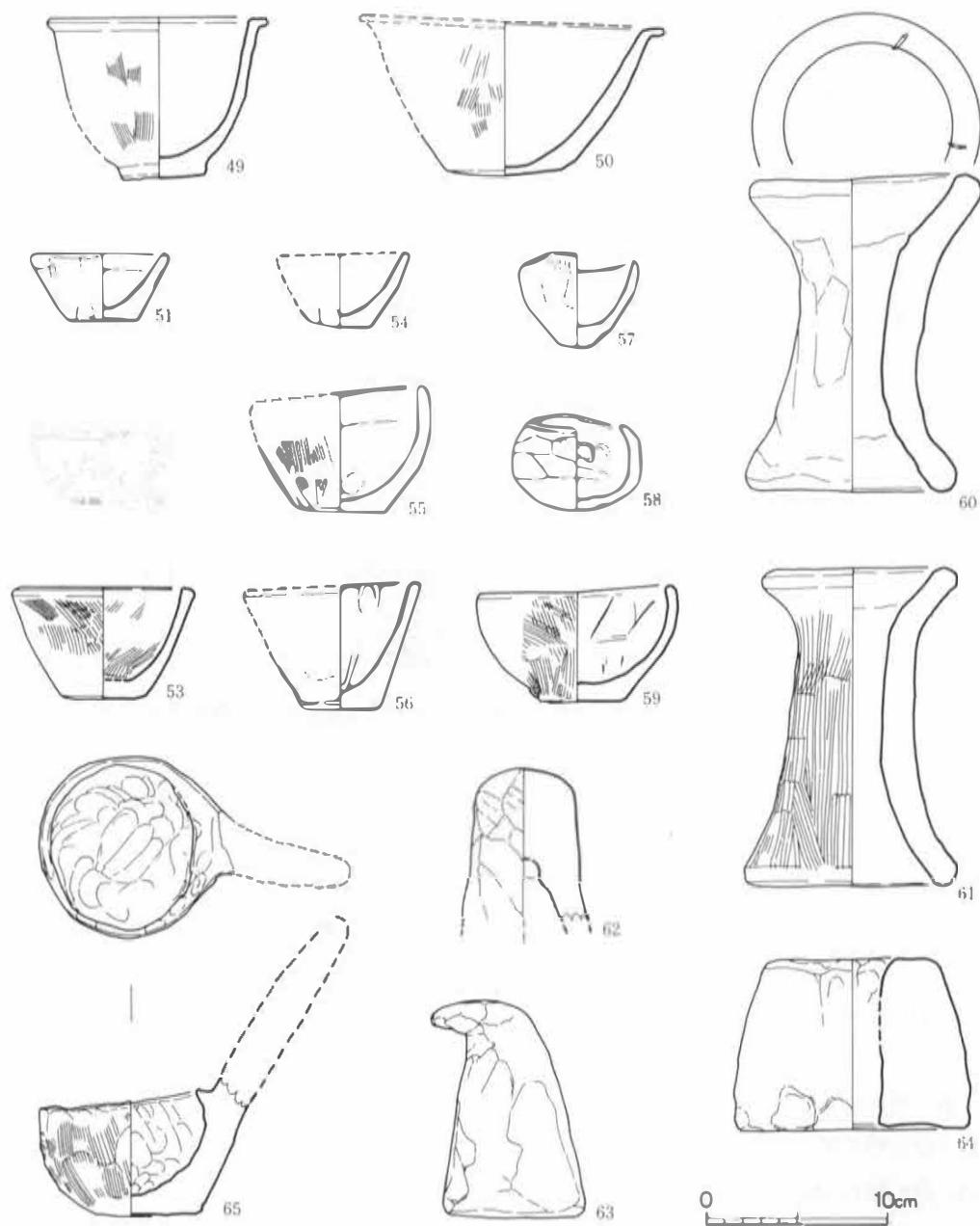




第104図 64号竪穴住居跡出土土器実測図その6(1/4)



第105図 64号竪穴住居跡出土土器実測図その7(1/4)



第106図 64号竪穴住居跡出土土器実測図その8(1/4)

49の口径12.1cm、底
径4.5cm、器高8.6cm
を有る。

51～59は手摺ね土
器で、体部から口縁
部にかけて直線的に
延びるものと内窪す
るものがある。大
半が二次加熱を受け
ている。

器台は60、61がある。
両者ともつくり
が粗い。前者は擦過
痕を残し、後者は燒
い、ハケを施す。両者
とも器前に板压痕が
数箇所ある。

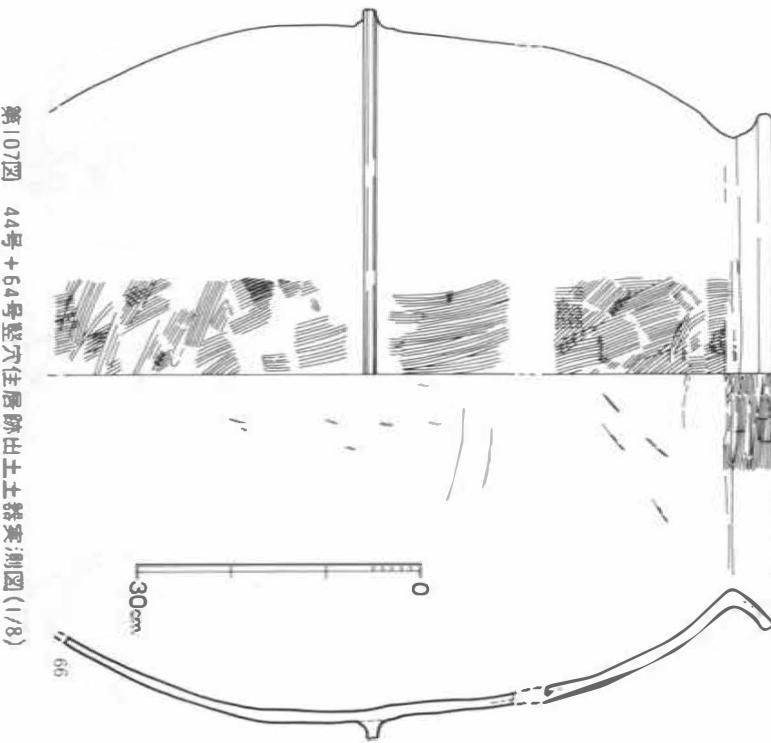
62～64は支脚であ

る。3個とも形態が

異なる。62は上端が丸味を持ち、器部がやや聞くものであろう。63は嘴状を呈する支脚で器高11.6
cmを測る。64は器高が低い支脚で器體は厚い。

65は土製玉杓子で柄の部分を欠失する。形状は手摺ね土器に柄をつけた様に見える。

66は大型の復原実測である。「く」字形に口縁を外反させ、肩部から胴部にかけては盛る。胴部
には高い台形状の凸部を廻らす。調整はハケとナデで仕上げる。外面は円錐の痕跡が僅かに残
る。44号A・B住居と64号住居から出土したものが接合した。復原口径54.0cmを測る。



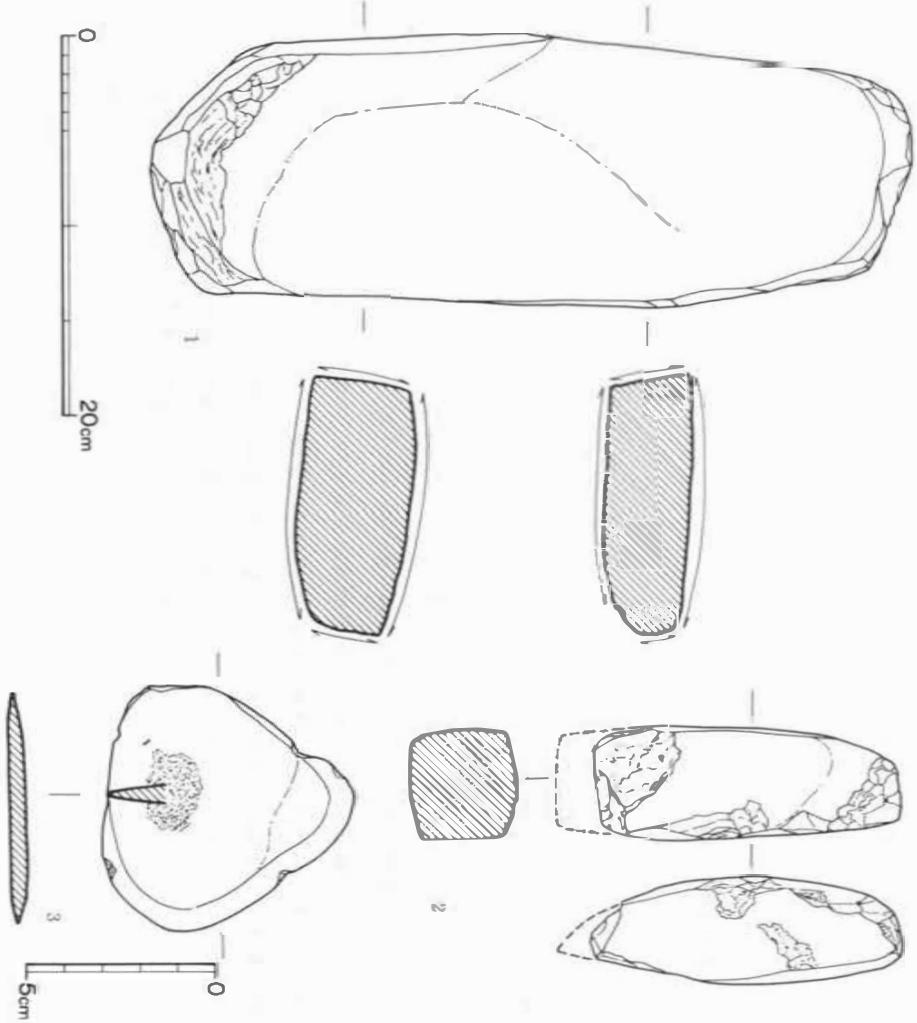
第107図 44号+64号竪穴住居跡出土土器実測図(1/8)

石 器 (図版45 第108図)

1は大型の縞泥片岩製の中砥石である。外面は5面で、5面とも非常に平滑となる。現長40.3
cm、最大幅14.0cm、厚さ6.0cmを測る。灰面からの出土。

2は柱状片刃石斧で長い、刃部が黒ずみ表面が剝離する。便質砂岩製か。埋立から
の出土である。

3は縞泥片岩製と思われる不明石器で、周縁を刃部状に研いでいる。色調は淡緑色を呈するが、
部分的に加熱を受け赤變する。埋土中の出土である。



第108図 64号竪穴住居跡出土石器実測図(1/4・1/2)

65号竪穴住居跡(図版19-(4) 第98回)

64号・66号竪穴住居に認められた住居跡にあるが、可住居の削平を受け全容は不明である。図示した柱穴も支柱とはなり得ない。壁高は20.0cmを測る。

出土遺物は土器片少數の他、石製刀鎌等がある。

出 土 遺 物

埋土中から出土した雲母片岩製の紡錘車がある。つくりは丁寧で表裏に煤が付着する。周縁の面とりは丁寧でよく磨っている。径は5.2cm×5.3cm、厚さ8.0mmを測る。穿孔外径1.1cm、内径7.0mmで重さ34.5gを計る。

66号豎穴住居跡出土遺物

土 器 (図版45 第110・111図)

1、3は壺で1は大きく弧状に外反する口縁を有し、胴部は玉葱状を呈する。調整はハケとナデで仕上げる。口径17.3cm。埋土中からの出土である。3は短い口縁を「く」字状に外反させ、肩部から胴部にかけては大きく張る。調整は外面がハケ、内面はナデで仕上げる。全面に二次加熱を受ける。復原口径16.2cm、底径8.9cm、器高23.7cmを測る。埋土中からの出土。

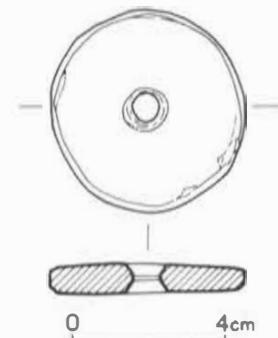
2は短い口縁を「く」字状に外反させ体部を丸くつくる壺である。調整は外面が荒いハケ、内面はナデる。口径17.8cm、底径7.8cm、器高18.7cmを測る。埋土中からの出土である。4は脚台付壺の胴部片で全面に二次加熱を受けている。埋土中からの出土。

鉢は5～7がある。5は完形品で、口縁部は内削し口唇部は肥厚させる。内外面に火たすき痕が認められる。調整は外面がハケ、内面はナデる。二次加熱を受け部分的に器面が剝離する。口径25.2cm、底径7.8cm、器高18.4cmを測る。床面からの出土である。6はつくりの粗い鉢で復原口径17.0cm。埋土中からの出土。7は鉢の底部で体部は丸味を持つ。僅かな上げ底をなす。底径7.5cm。埋土中からの出土。9は小型の鉢で胴部は下脹れとなる。底部は小さくやや不安定で、底径4.9cmを測る。埋土中からの出土。

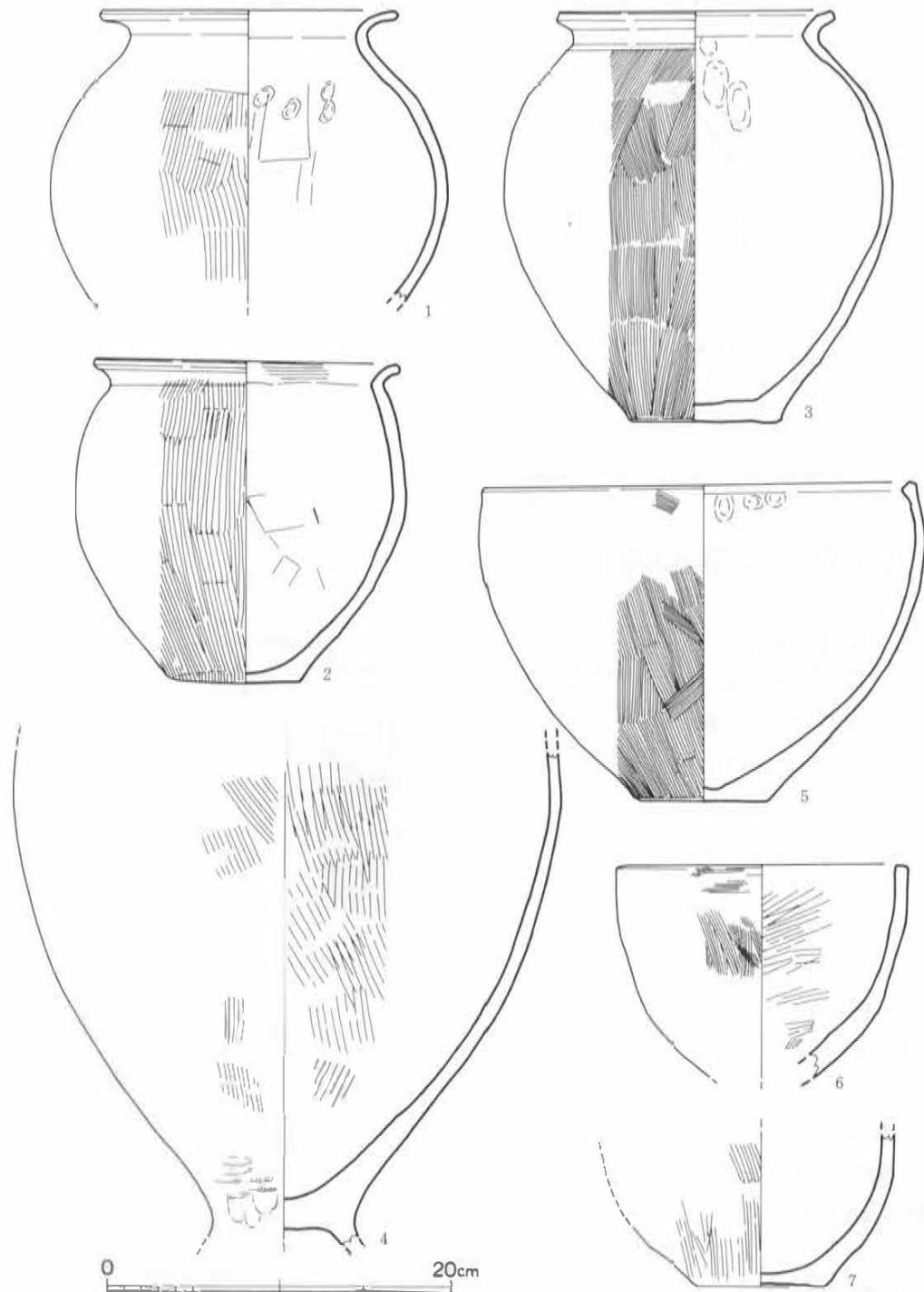
8はつくりの粗い器台で、器表面に荒い叩き痕が残る。最小径が胴中央部にある。全面に二次加熱を受ける。口径15.6cm、裾部径16.6cm、器高20.0cmを測る。埋土中からの出土である。

石 器 (図版46 第112図)

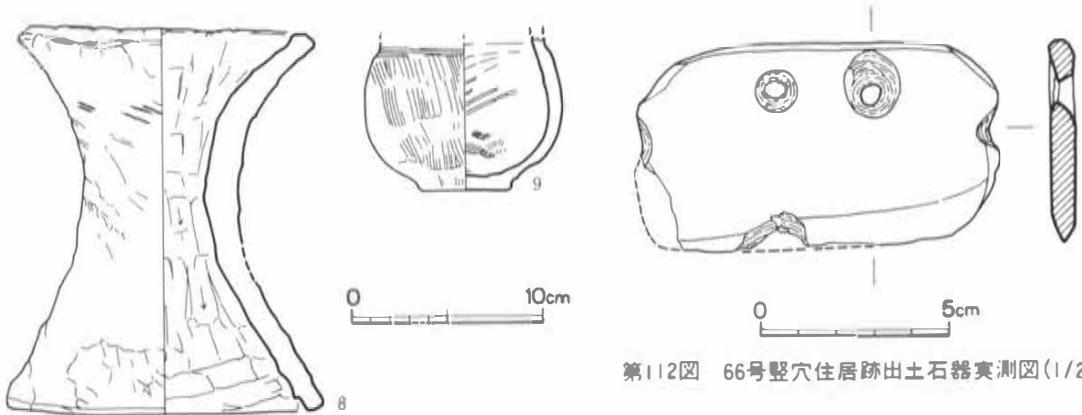
雲母片岩質（金雲母多く含む）の幅広の石庖丁がある。両端には浅い抉りを入れており、出土例が少ない。穿孔方法がやや雑である。刃部は鋭く研ぎ出す。現長9.5cm、幅5.4cm、厚さ7.0mmを測る。加熱を受け部分的に赤変する。床面からの出土である。



第109図 66号豎穴住居跡
出土石器実測図(1/2)



第110図 66号整穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)



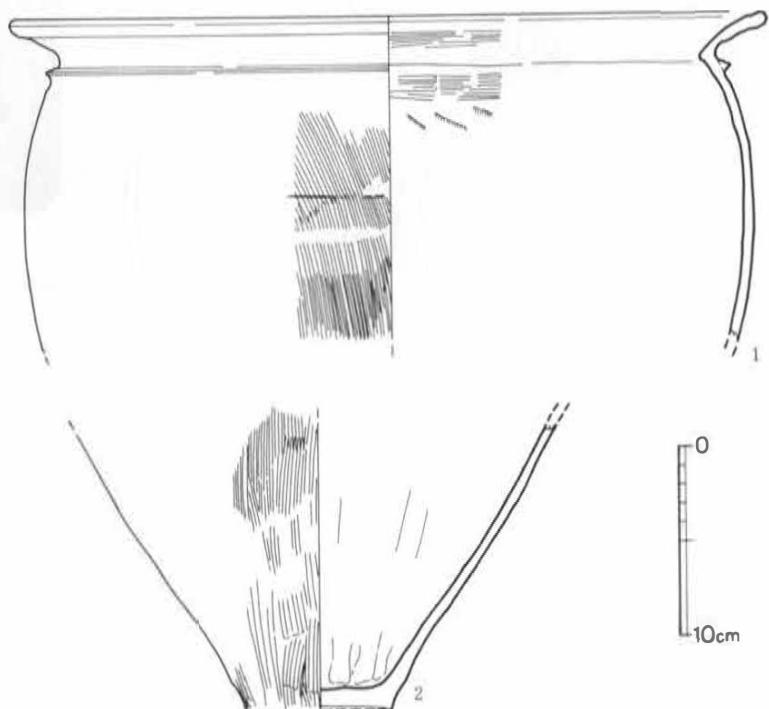
第112図 66号竖穴住居跡出土石器実測図(1/2)

第111図 66号竖穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)

67号竖穴住居跡出土遺物

土 器 (第113図)

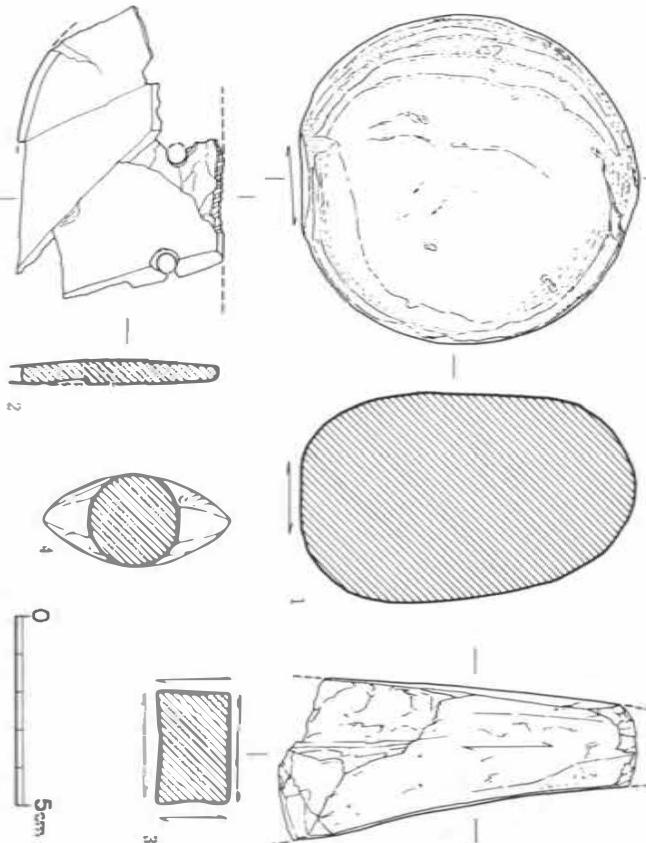
1、2の甕があるが、形状、器壁の厚さ、色調などからみて同一個体と考えられる。口縁部はやや長く「く」字状に外反させる。頸部内面の稜線は明瞭で肩部はやや張る。胴下半から底部にかけては細まり、径の小さな底部をなす。調整は外面がハケ、内面はナデる。全体に煤が付着する。復原口径40.0cm、底径7.7cmを測る。



第113図 67号竖穴住居跡出土土器実測図(1/4)

石 器 (図版46 第114図)

1は屋内土壤から出土した磨石で全体が平滑と



第114図 67号竖穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2)

なる。特に一方の側面は摩耗している。加熱を受け全体が黒く変色する。

2は大振りの石槌丁片で硬質砂岩製である。製作途中に破損したらしく、刃部の研ぎ出しは認められず、刃部を形づくらない部分もある。背部には鋸利な刃物痕が残り鋸い凹凸をなす。孔は圓筒孔で、身つが、中火部の破はみられない。

3は砂岩製の砥石である。全面に亘り加熱を受け砥石自体がもろい。研削面4面を残す。

土製品（図版46 第114図）

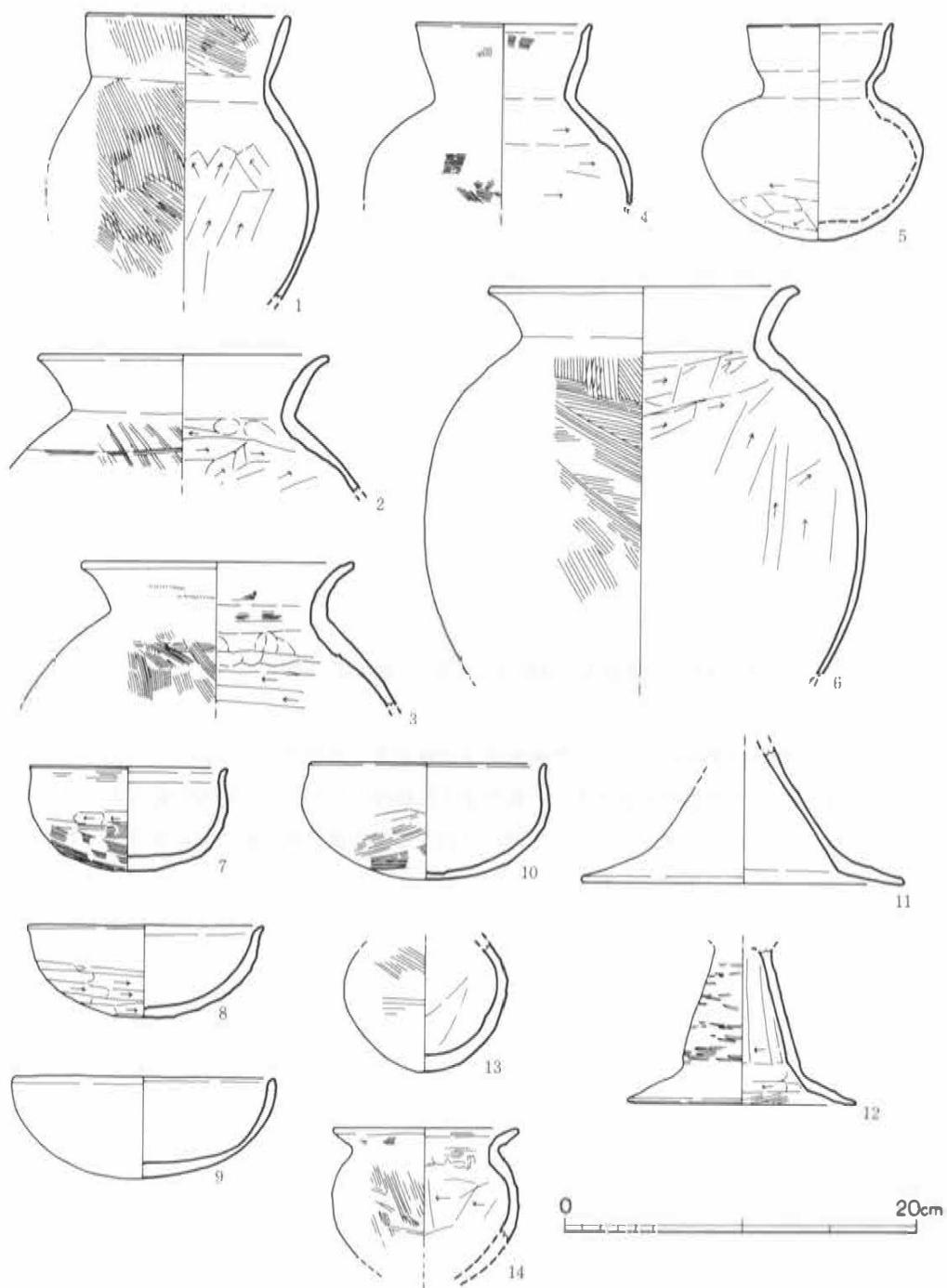
丁寧なつくりの挽鉢がある。胎土は良好で角閃石を含む。長さ4.9cm、中径2.4cmを測る。重さ20.8gである。壁上中から出土した。

68号竖穴住居跡出土遺物

土 器（図版46 第115図）

1は小振りの壺で外面がハケ、内面は磨で削る。口徑1.6cm。

2、3、6は同タイプの壺で、反り気味に口縁が外反し、肩部から胴部にかけては球形を呈する。調査は外面がハケ、内面は磨削りで仕上げる。2の口徑16.5cm、3は15.5cm、6は17.6cmを



第115図 68号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

測る。

4、5は小櫛丸底土器で両者とも口縁を内側させ、口唇部は僅かに外反する。側部は玉懸状を呈する。調整は外面はナテ、5の底端は窓で削る。4の内面は窓削りで5は窓のちナテである。1の復原口径10.0cm。5は光形で口径8.3cm、器高12.1cmを測る。

窓は7~10が有る。側部から肩部にかけて内窓させ、口縁部を僅かに外反させる7、10と器高が低く口縁部を外反させる8及び半扁平球状を呈する9の3形態がある。調整は内面から胴上半は横ナテ、下半は窓削り及び削りの「」から「」を施す。胎土は絶じて良く緻密である。7の口径11.2cm、器高5.8cmである。8は口径13.4cm、器高5.1cm。9は復原口径15.0cm、器高5.7cm。10は三次加熱を受け赤変する。口径13.4cm、器高6.6cmを測る。

13. 14は小型の甕で手押ね甕である。

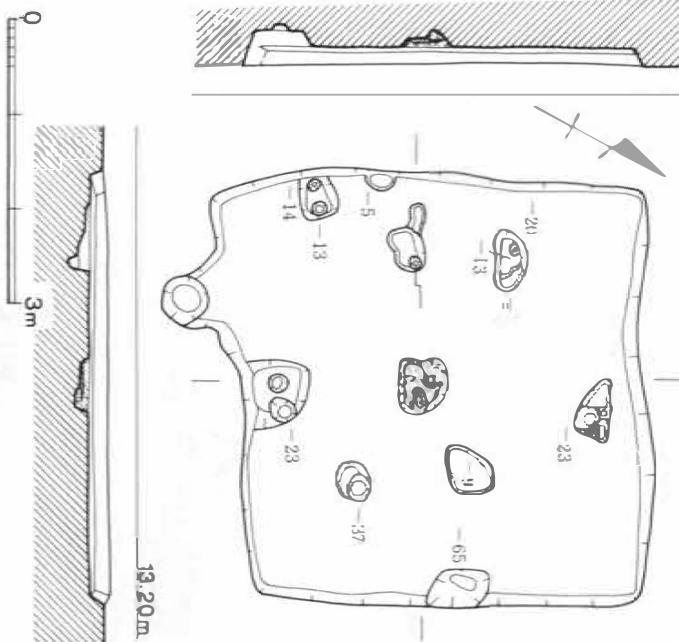
窓は11と12の脚部がある。両者とも精製されたものである。11の脚部は「」状に引き狭帯を折してさらに開く。脚部径18.1cm。12は柱状部の開きは鈍く、脚部で強く屈折する。調整は横方向の窓削きと内面窓削りで仕上げる。脚部径13.0cm。

69号堅穴住居跡（第116図）

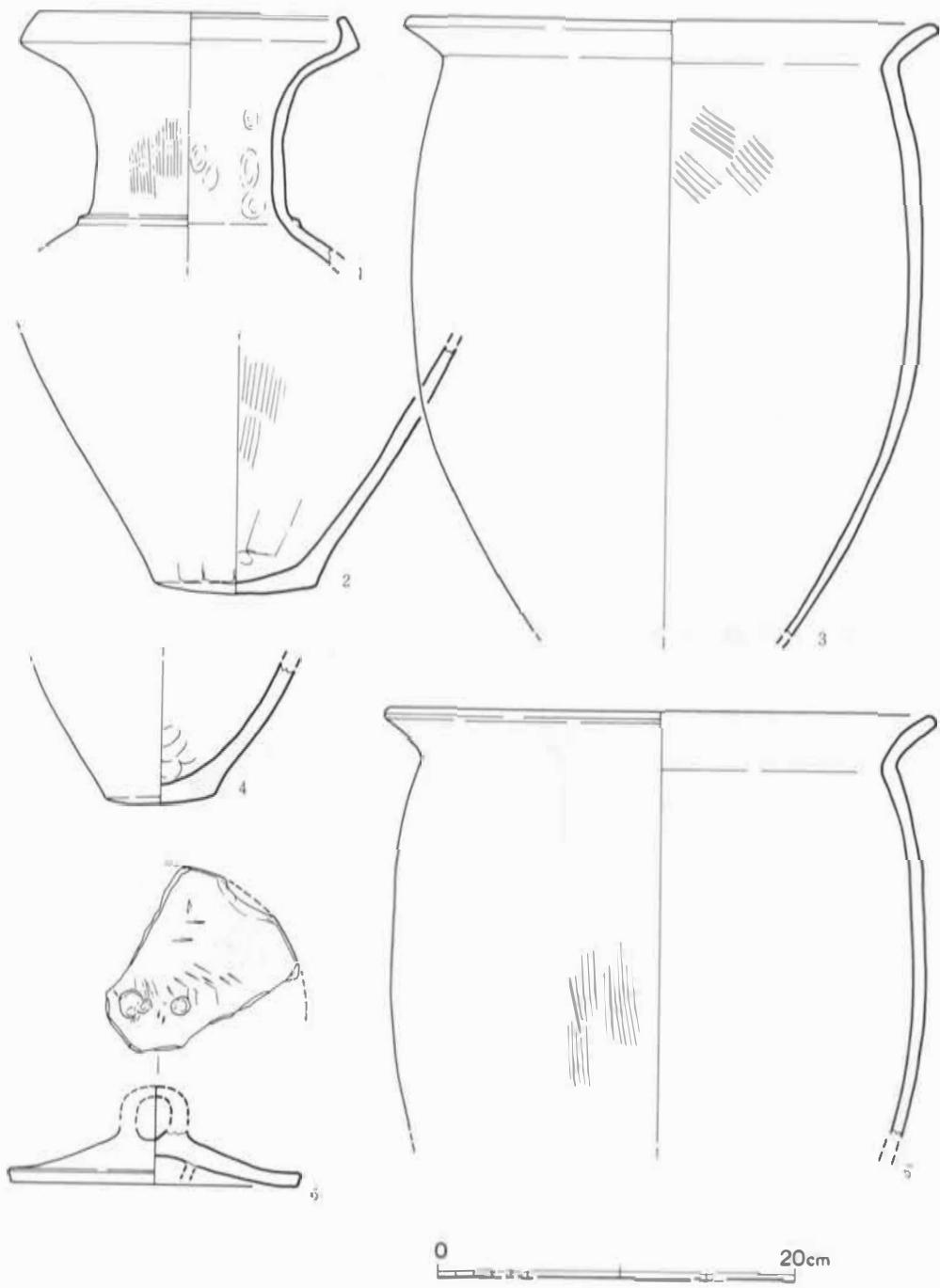
調査区のE-1区で検出した
堅穴住居で、平面プランは方形
を呈する。規模は南・北壁4.30
m、東・西壁4.00m・4.50m、
壁厚15.0cmを測る。支柱穴は檢
出せずおののく、床面中央には
不整形の窓がある。床面積は
17.43坪である。南壁際には
70.0cmの不整「」形の屋内土塀を
備えている。

出土遺物は甕・甌・蓋状土器
があり、蓋は開閉の少ない形状
を呈する。

出土遺物



第116図 69号堅穴住居跡実測図(1/80)



第117図 69号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

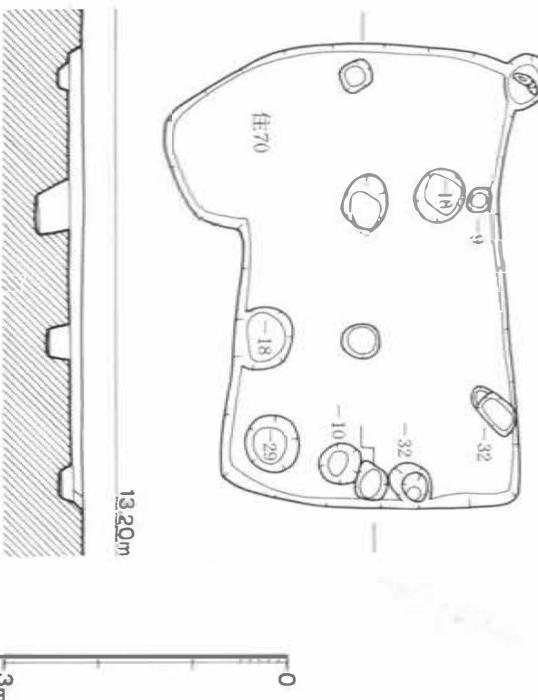
1は複合口縫部で口縫部は短い。肩折部の縫線は明瞭で、頸部は細くて長い。肩部には低い三角凸部を付す。口徑一.2cmを測る。

壁は2～5がある。2、4の底部はレンズ状を呈し、三次加熱を受ける。3、5は同タイプの壁で「く」字形口縫を外反させ、長胴をなす。測定は摩耗し、不明瞭。おそらく三次加熱を受けているのであろう。胎

1は砂利、赤褐色粒子を多く含む。3の口徑30.0cm、4は30.8cmを測る。

6は蓋つ、中心、部に環状みをつける。

内面中央には低い脚状部があつたと思われ、剝離痕が残る。測定はナデでハケの起点が残る。胎土は精製されており、復原径16.2cmを測る。



70号竪穴住居跡

(第118図)

調査区のD—3区の検出した竪穴住居跡であ

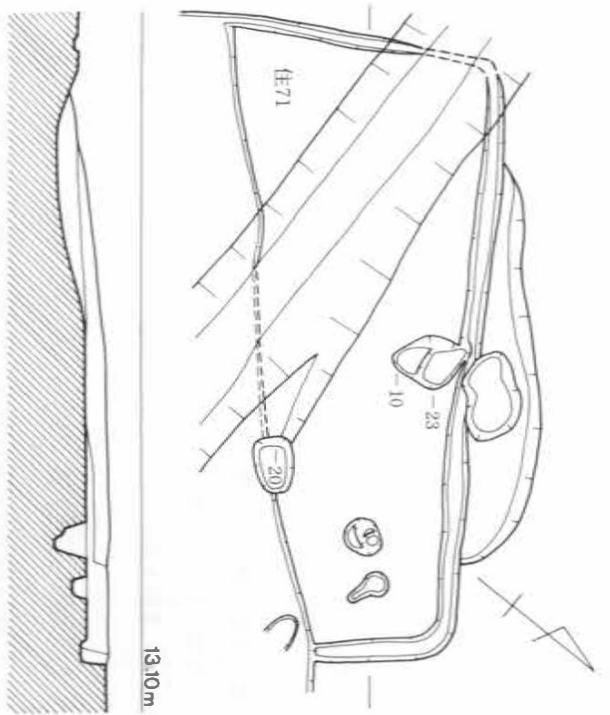
る。平面プランは長方形を呈し、南壁は別の遺構と重複し変形している。

規模は長壁の4.70m・

4.30m、短壁3.15m・

2.80m(復原)、壁高10.0cmを測る。床面積は13.56m²である。現況での

2本であるが、浅いため支柱となり得たか疑問である。その他洋



第118図 70号、71号竪穴住居跡実測図(1/80)

細は不明である。

出土遺物は鐵の破片が少種ある。

出 土 遺 物

土 器 (第119図)

1は体部が扁平な
盤である。口縁部は
「く」字状に外反させ、頸部内面の破は
鮮明である。湖盤は
摩耗し不明。胎土は
砂粒を多く含み赤褐色
色粒子は含まない。
復原口径38.0cmを測
○ 2は小盤の盤で
古相の「T」字状口
縁が残る。口縁上面
は僅かに内傾する。
胴部はやや盛り気味
で小さな底部を有す
る。湖盤は荒いハケとナマで仕上げる。復原口径19.4cm、底径5.7cm、器高14.8cmを測る。



第119図 70号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

71号竪穴住居跡 (図版3-(2)・4-(2)・16-(3) 第118図)

D-4区で検出した竪穴住居であるが、軌道と耕作による削平で遺存状況は悪い。23号・42号との重複がある。現状では北壁のみが計測でき6.40m、奥幅20.0cmを測る。その他詳細は不明で、出土遺物も無い。

72号竪穴住居跡 (図版16-(3) 第120図)

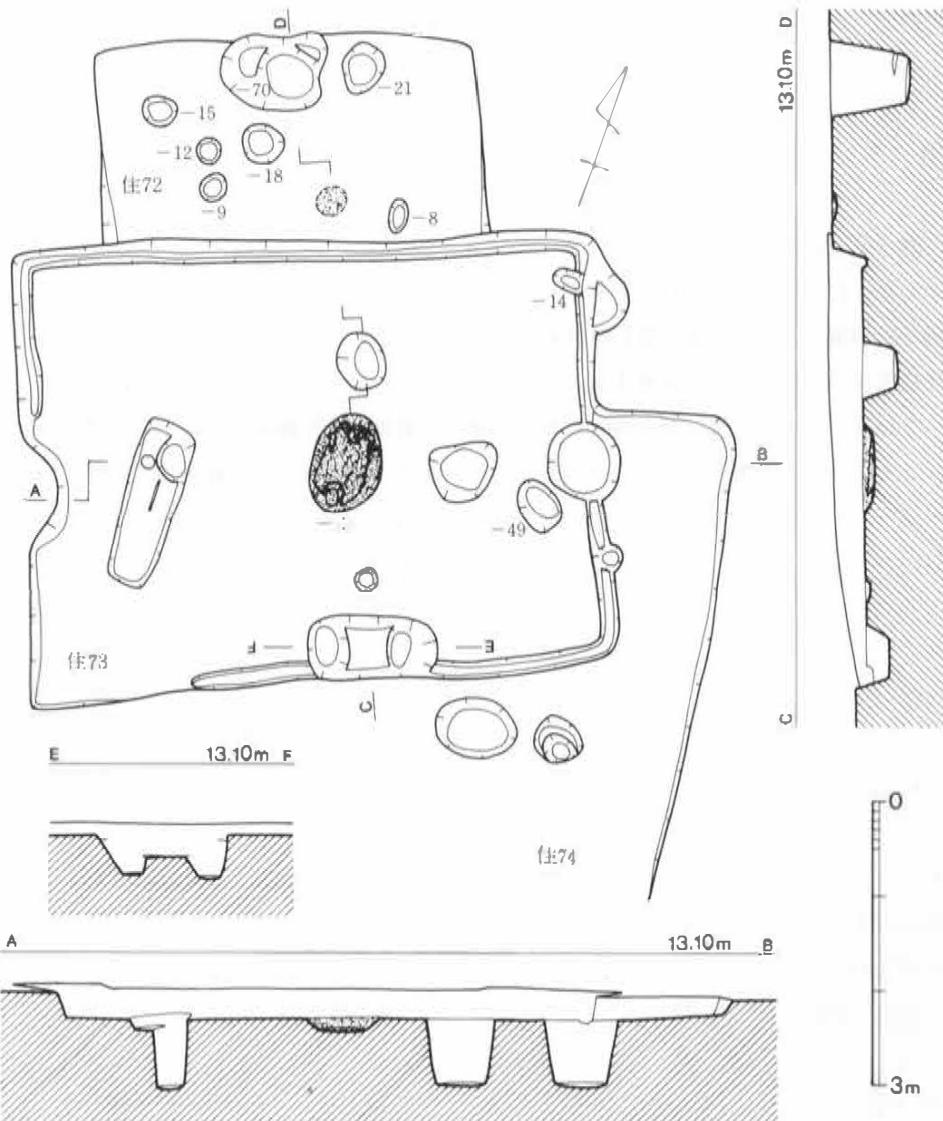
73号住居に切られた住居であるが、調査時に既に床面が露呈しており、全容は捉えることが叶かない。床面中央部に小さな円形の焼痕がみられる。北壁の規模は4.00mで、北壁際のピットは

当該住居に伴うか否か不明。

出土遺物は無い。

73号竪穴住居跡 (図版 3-(2)・4-(2)・16-(3) 第120図)

72号、74号竪穴住居を切った住居で、平面形状は長方形を呈する。規模は南・北壁が6.20m・



第120図 72号-74号竪穴住居跡実測図(1/80)

6.15m、東・西壁が4.55m・4.80m、壁高30.0cm前後を測る。床面積は26.69m²である。西壁の中火は内側に突出しており、出入口の可能性がある。支柱は2本であるが、西側の支柱穴は住居の廃棄後中世の土壤層に切られている。柱間は3.00mを測り、床面中央には楕円形の炉を設けていた。炉の中からは図示した甌・鉢・壺などが出土しているが、住居の形態やその付設する遺構内容は弥生時代に流行した形を採用していることから出土した土器との時期的な整合性は認め難い。南北壁際中央には楕円形の屋内土壤を掘り、両端にピットを配する。壁沿いには細い周溝が廻る。

出土遺物は古墳時代の土器の他、石庖丁の末製品がある。

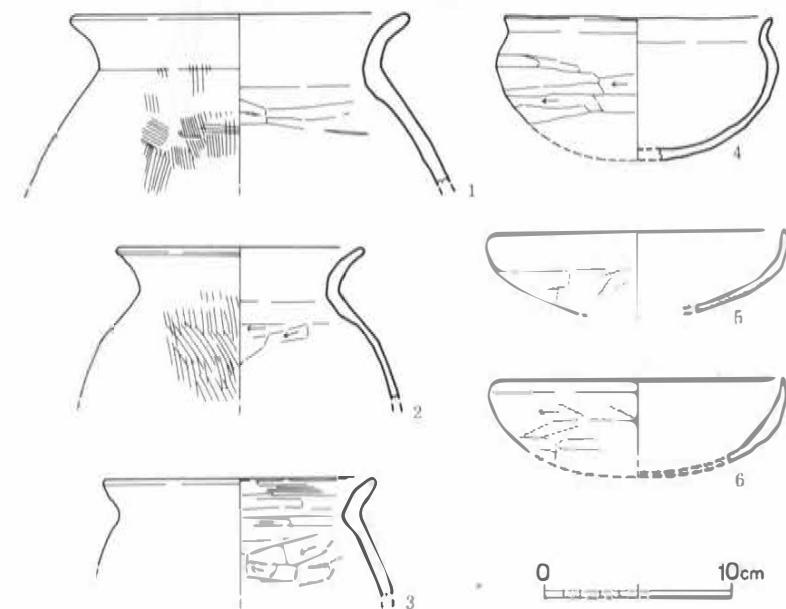
出土物

土器(第121図)

図示した一群の土器は、支柱穴間の中央ピット(炉跡)から出土したもので、前述したように住居内部の形態などから当該住居には伴わない可能性があるが、炉跡内からの出土であることから73号住居の出土遺物として説明する。

1～3は甌で、1の口縁は反り氣味に外反させる。肩部はやや撫肩で荒いハケと箒削りで仕上げる。2も同タイプの甌であるがやや小振である。3は「く」字状に口縁を外反させ、つくりが粗い。すべて二次加熱を受けている。1の口径17.8cm、2の口径13.0cm、3は口径14.4cmを測る。

4は鉢で口縁部は僅かに外反する。肩部は張り扁平な胸部を有す。調査は外面が箒削り、肩部から内面はナデる。口径13.9cm、器高7.5cmを測る。

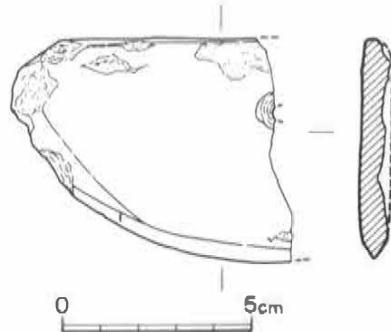


第121図 73号竪穴住居跡混入土器実測図(1/4)

5、6は壺でいずれも破片である。口縁は内湾し体部は扁平となる。5の口径15.6cm。6は口径15.4cmを測る。胎土は精製されている。

石 器 (第122図)

緑泥片岩質の石庖丁の未製品がある。刃部の研ぎ出しが鋭い。表面には穿孔痕が残るが、孔を穿つに至っていない。穿孔時に破損したと考えられる。片面は剝離が著しい。出土した土器には共伴しない。



第122図 73号竖穴住居跡
出土石器実測図(1/2)

74号堅穴住居跡

(図版3-(2)・16-(1) 第120図)

73号に切られた堅穴住居であるが、農道及び耕作による削平で実体は不明である。

出土遺物は無い。

75号堅穴住居跡 (図版20-(3) 第123図)

76号堅穴住居跡に切られた住居である。平面形状は歪な長方形を呈する。規模は明らかでないが2辺の壁が計測でき5.30m、4.80m、壁高15.0cmを測る。断面に図示した深さ80.0cmの柱穴は支柱の1本であろう。東壁沿いに若干の朱の痕跡がみられた。

出土遺物は小型壺と手捏ね土器がある。

出 土 遺 物

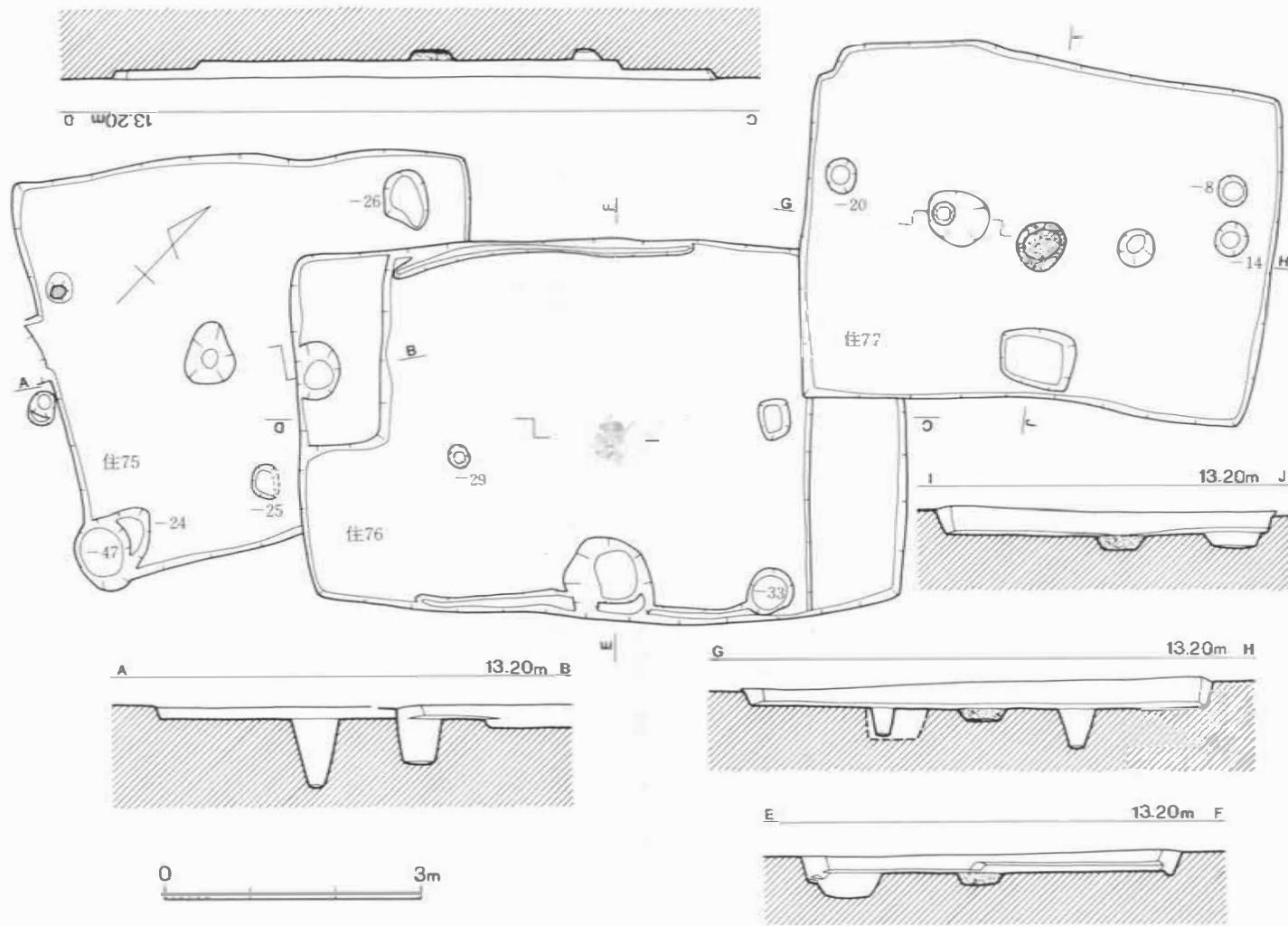
土 器 (図版46 第124図)

1は小型の壺である。短い口縁部は僅かに内湾する。頸部は短く、胴部はやや扁平球状を呈する。調整はハケの上をナデているが、粗い調整である。口径5.7cm、底径5.1cm、器高11.0cmを測る。

2は手捏ね土器で口径5.5cmを測る。

76号堅穴住居跡 (図版8-(1) 20-(3) 第123図)

3軒の重複があり、75号住居より新しく77号住居より古い。平面形状は長方形を呈し、規模は



第123図 75号～77号竪穴住居跡実測図(1/80)

計測可能な長壁6.85m、短壁4.00m、壁高20.0cmを測る。復原床面積は29.21m²である。床面上には支柱は見当らず、図示した柱穴は支柱になり得ない。床面中央には径50.0cmの焼痕の残るがを備えている。南壁には不整円形の2段掘りの屋内土壌を付設し、壁沿いを廻る周溝と直結する。両端壁には貼床のベットを付せる。

出土遺物は少なく鉢・手捏ね土器がある。

出土 遺 物

土 器 (図版47 第124図)

3の鉢がある。口縁部は「く」字状に外反させ、洞部は張り玉葱状を呈する。底部は小さく不安定感がある。調整はナデが主体で一部ハケが残る。口径14.2cm、底径5.5cm、器高12.2cmを測る。

4、5は手捏ね土器で、形態を異にする。5は薄手づくりである。

77号堅穴住居跡 (図版8-(1) 20-(3) 第123図)

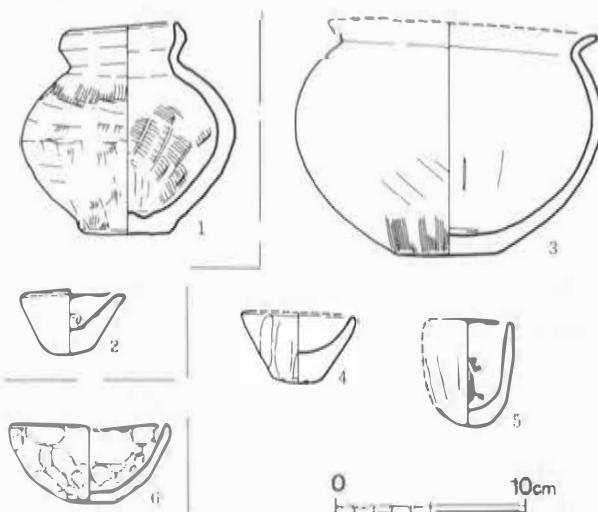
76号を切った状態で検出した堅穴住居跡である。平面プランは長方形を呈する。規模は長壁で5.20m・5.50m、短壁3.90m・4.10m、壁高20.0cm~30.0cmを測る。床面積は20.52m²である。支柱穴は2本検出した。柱間は2.30mで、中央には径55.0cmのがを掘込んでいる。片方の長壁の中央には長方形の屋内土壌がある。柱間軸はN55°Eを示す。

出土遺物は図示可能な手捏ね土器がある。

出 土 遺 物

土 器 (第124図)

6は手捏ね土器である。底部は小さな平底をなす。調整は指頭ナデで仕上げる。復原口径8.4cm、底径2.6cm、器高4.05cmを測る。



第124図 75号～77号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)

78号竪穴住居跡 (図版 8-(1) 第125図)

E-3区で検出した小型の竪穴住居跡である。平面プランは長方形を呈する。規模は長幅で5.00・4.55m、短幅で3.30m・3.40m、檻高20.0cm前後を測る。床面積は16.47m²である。支柱は2本で、柱間は1.50mである。柱間中央には不整形の焼痕著しいかげを設けている。屋内土壌は南東壁際に掘込んでいるが、やや南側に片寄っている。両端には2本のピットを配している。柱間軸の方位はN51°Eを示す。

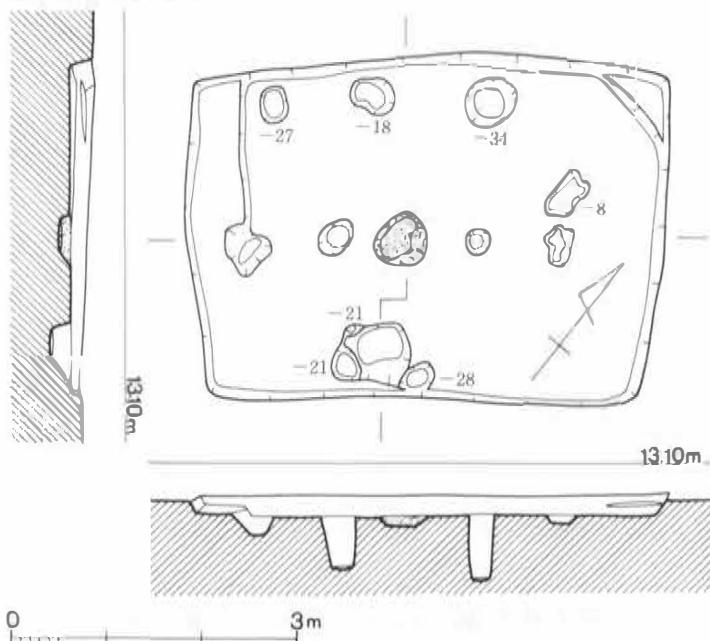
出土遺物は壺・鉢がある。

出土遺物

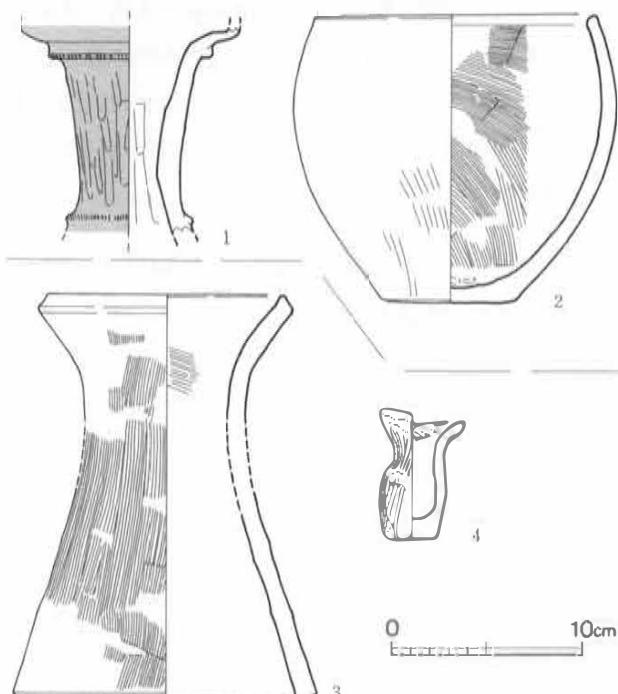
土器 (図版47 第127図)

1は袋状口縁壺の頸部片である。口縁下と頸部下には密な刻み目を配す低い凸帯を貼付する。調整は外面丹塗り磨研、内面はナデで仕上げる。胎土は精製され、二次加熱を受け淡い茶褐色を呈する。

2は鉢の復原実測で1/2が残存する。口縁部を内窵させ胴部



第125図 78号竪穴住居跡実測図(1/80)



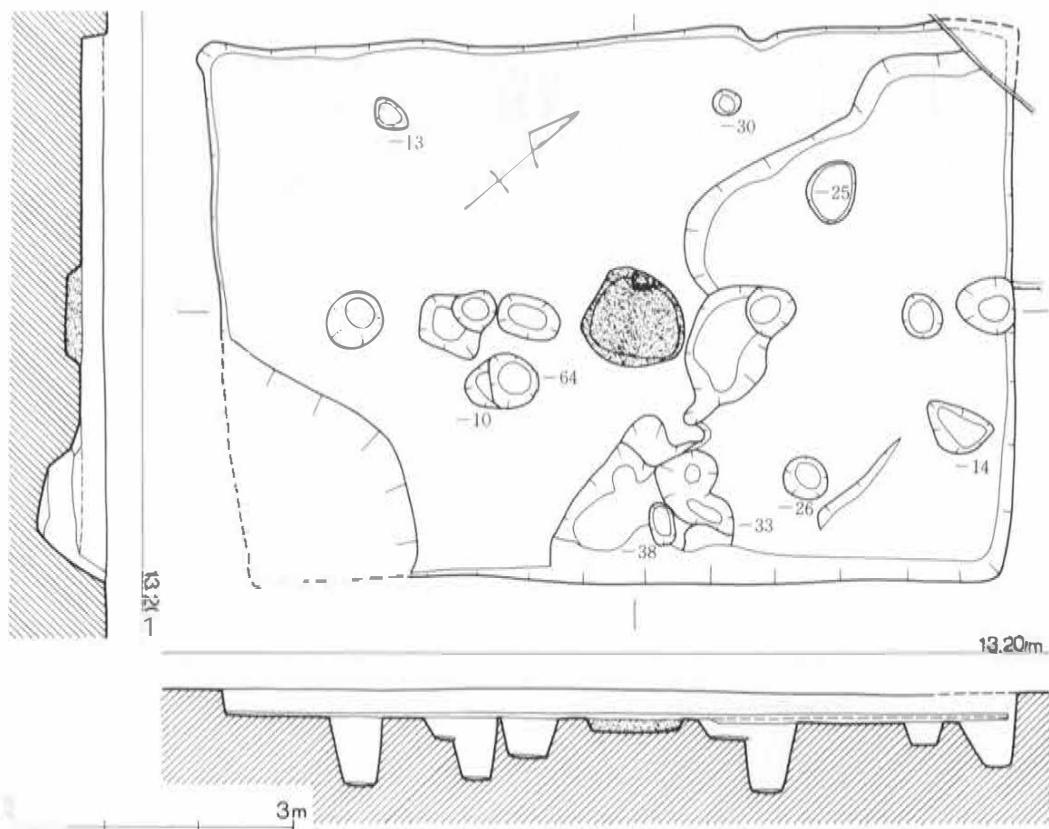
第126図 79号竪穴住居跡実測図(1/80)

は丸味を有す。調整は外面がハケのちナデ、内面はハケで仕上げる。復原口径14.9cm、底径6.9cm、器高15.0cmを測る。

79号竪穴住居跡（図版8-(1)・20-(4) 第126図）

下-2・3区で検出した大型の竪穴住居で3軒が重複する。80号住居より古く、81号住居より新しい。南側の一部は新しい搅乱を受ける。平面形態は長方形を呈し、規模は長壁8.00m・8.60m、短壁5.90m・5.80m（いずれも復原）、壁高25.0cm前後を測る。復原床面積は46.39m²である。支柱は基本的に2本で柱間軸の延長線上にさらに2本の副次的な支柱が認められる。支柱間には不整円形の炉を掘込んでいる。南東側の壁際には不整形の屋内土壇を設けている。北側の広範囲の落込みは貼床部分を掘下げた結果による。柱間軸の方位はN40°Eを示す。

出土遺物は器台・手捏ね土器の他、砥石、土製円盤、投弾がある。



第127図 78号、79号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

土 器 (第127図)

3の器台がある。最小径が上半部にあり、口縁部は緩く外反させる。口唇部は肥厚する。調整はハケとナデで仕上げる。復原口徑13.4cm、底部徑15.9cm、器高21.2cmを測る。

4は手捏ね土器である。かなり重な土器で、粗いハケとナデで仕上げる。口徑4.3cm、底徑2.6cm、器高6.9cmを測る。住居の支柱穴内から出土した。

80号竪穴住居跡 (図版 8-(1)・20-(4) 第128図)



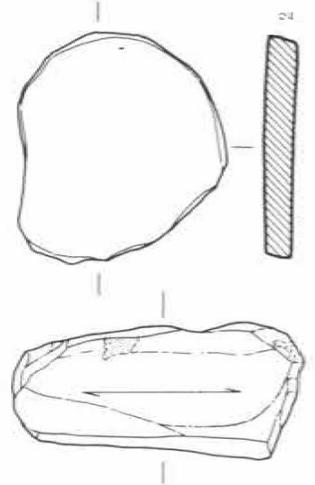
第128図 80号、81号竪穴住居跡実測図(1/80)

F-2区で検出した堅穴住居跡で、79号住居と81号住居を引っている。平面プランは長方形で、東側は南・北幅が3.40m・4.00m（復原）、東・西側が4.80m、壁高15.0cmと深い。支柱は住居形態から2本であらうか検出できていない。屋内土壌は103号住居と同様南東隅に付設されており、長軸1.50m、短軸1.00mを測る。

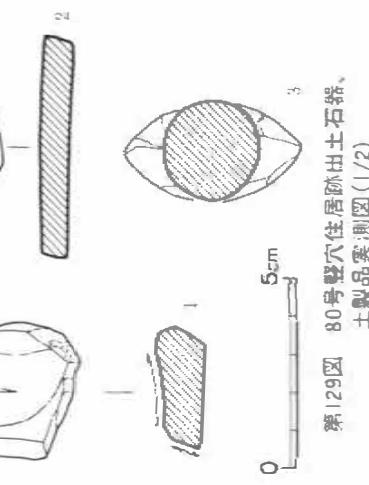
出土遺物は表示不可能な土器片少量の他、砥石、土製品がある。

出土遺物

石 器（図版47 第129図）



土 製品（図版47 第129図）



第129図 80号堅穴住居跡出土土石器
土製品実測図 (1/2)

81号堅穴住居跡（図版8-(1)・20-(4) 第128図）

重複する2軒の住居に切られた堅穴住居跡である。F-2区で検出した。平面形状は長方形を呈すると思われる。短軸での計測値は4.90m、壁高10.0cmを測る。支柱は2本で、柱間は2.00mを測る。柱間には輪円形のゆ地を設けている。その他詳細は不明である。

出土遺物は甕・鉢・盤台の他、石砲丁と砥石がある。

出土遺物

土 着（図版47 第130図）

1～5は甕である。口縁部が逆「L」字状から「く」字状に移行する段階のものである。1、

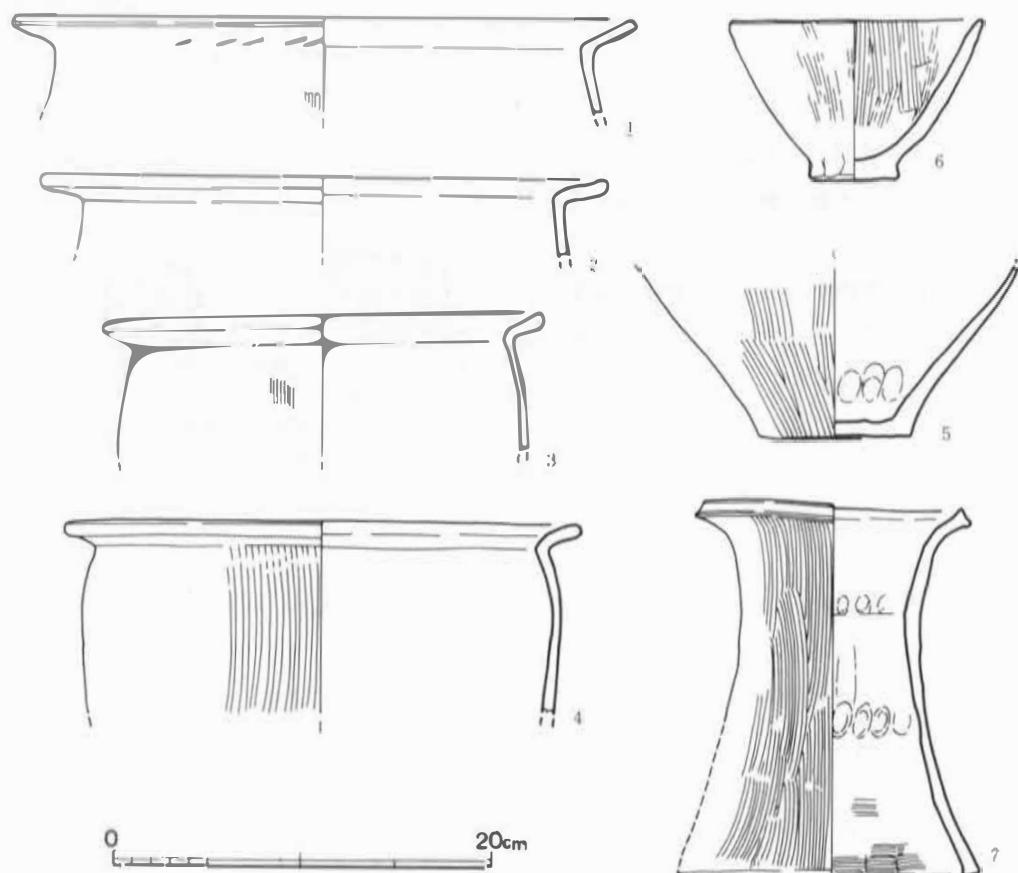
3、4は口縁上面の内傾が2に比較して強くなる。2は逆「L」字状に近く形態状は中期末的様相を呈する。すべて最大径が口縁部にあり、胴上半に最大径が移る直前の甌である。1の口縁外側には刺突状痕を配する。総じて器壁は薄い。1の復原口徑33.0cm。2は30.0cm。3は23.2cm。4は27.1cm。5は底径7.95cmを測る。

6は鉢の完形品で、体部から口縁部にかけては直線的である。底部は細まり厚くつくる。外面には煤がみられる。口徑13.5cm。底径4.8cm、器高8.4cmを測る。

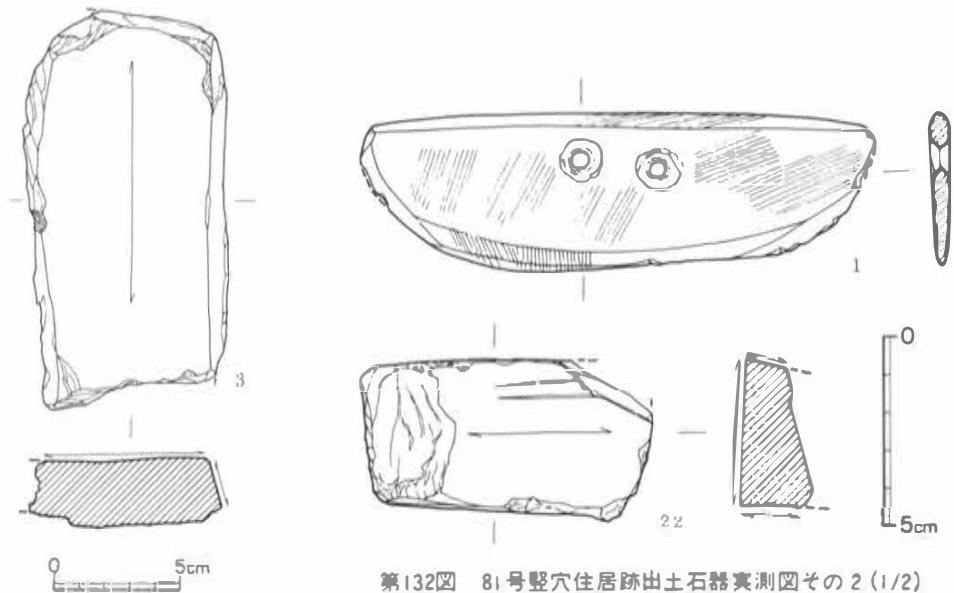
7は盤台で2/3残存する。最小径を上半に有し、口唇部を肥厚させる。調整はハケとナデで仕上げる。外面二次加熱を受け淡く赤變する。口徑14.6cm、裾部径16.0cm、器高19.4cmを測る。

石 器 (図版47 第131・132図)

1は石庖丁の完形品である。輝緑凝灰岩製であるが、不純物が多く材質は不良である。孔は段



第130図 81号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



第132図 81号竪穴住居跡出土石器実測図その2(1/2)

第131図 81号竪穴住居跡出土石器
実測図その1(1/3)

速いに穿ち、内孔径4.0mmを測る。刃部は使用頻度が高く摩耗し丸くなる。長さ13.5cm、幅4.1cm、厚さ5.5mmである。

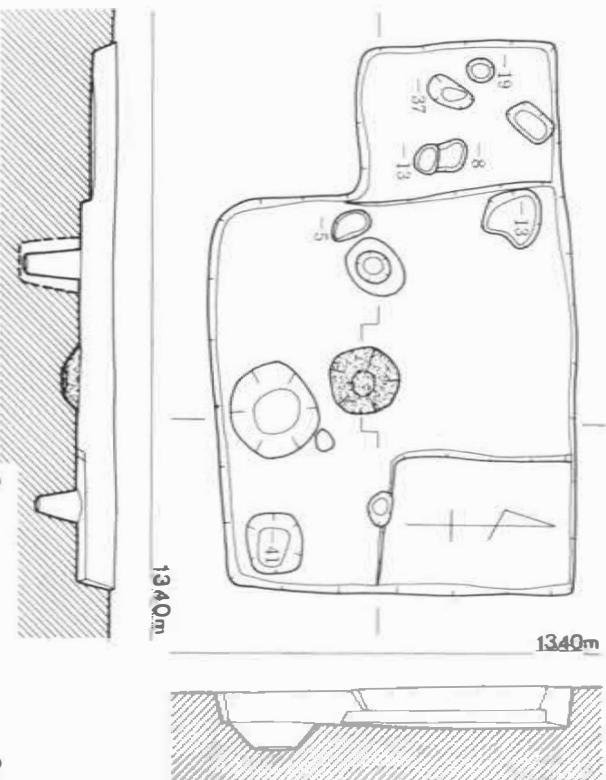
2、3は大小の砥石である。2は雲母片岩製の砥石で風化し表面がざらつく。現長7.5cm、幅4.0cmを測る。3も雲母片岩製の砥石で中砥であろう。現存での研面は2面で裏面は自然面を残す。現長15.7cmを測る。

82号竪穴住居跡 (図版21-(1) 第133図)

E・F-1区で検出した小型竪穴住居跡で火災に遭遇している。平面プランは長方形を呈する。規模は南・北壁が4.00m・4.30m、東・西壁は3.70m・3.60m、壁高35.0cm~40.0cmを測る。西壁側には奥行1.50m、幅2.00m、床面からの高さ10.0cmの造出しを備えており、住居の出入口と考えられる。床面積は17.35m²である。支柱は2本で、柱間には径70.0cmの炉を掘っている。柱間は2.55mを測る。造出し部にはピットが散見できるが、規則的な配置はみられない。南壁際には径1.00m、深さ30.0cmの屋内土壙を堀込んでいる。東壁沿いには幅1.35m、長さ2.00mの貼床ベットを付設する。柱間軸の方位はN88°Eを示しほぼ東西に主軸をとる。

出土遺物は壺・甕・壺坏・器台の他、砥石、投弾がある。

出土遺物



第133図 82号竪穴住居跡実測図(1/80)

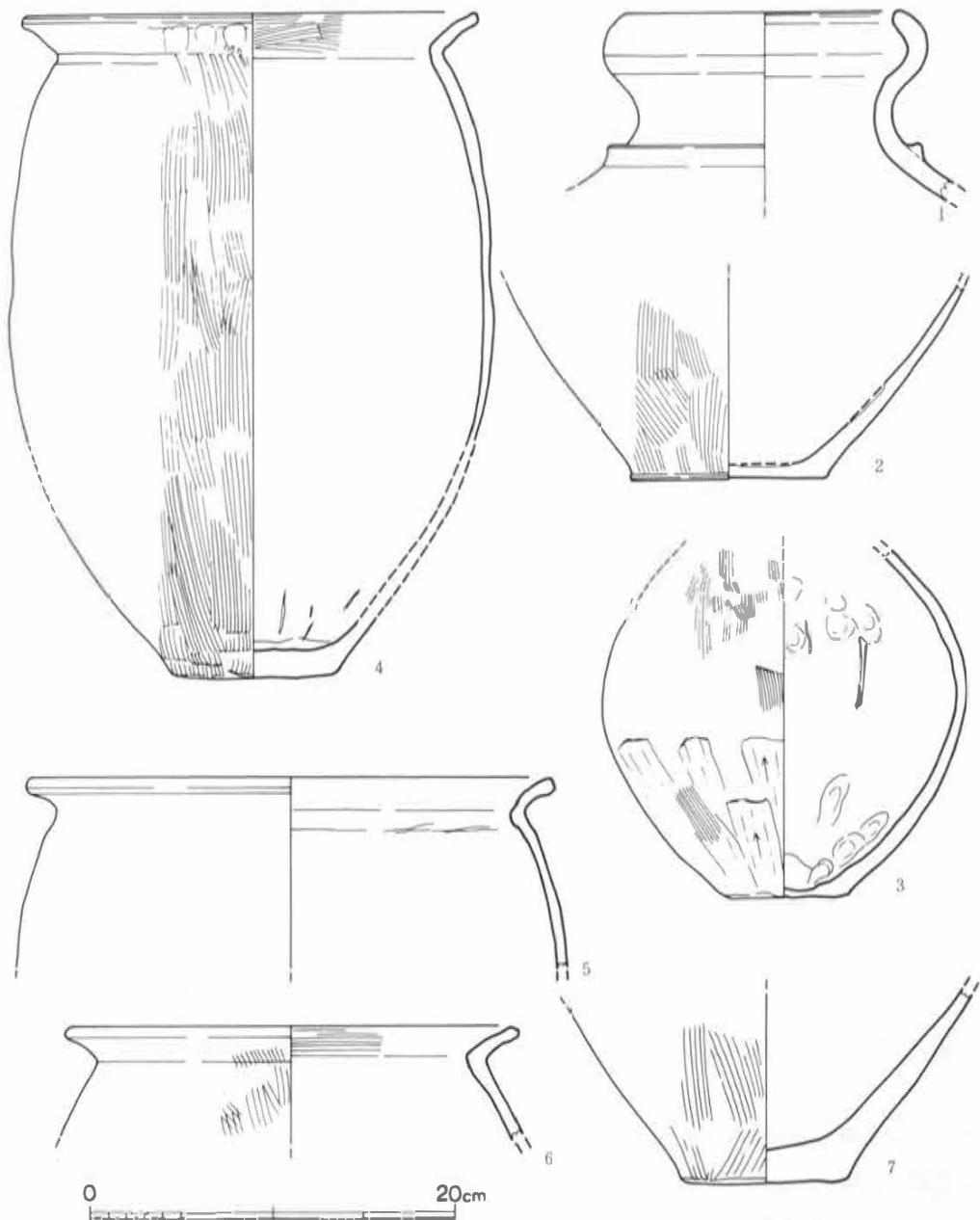
土 器 (図版47・48 第134・135図)

壺は1～3がある。1は袋状口縁邊の系縫を引く壺で川折沿の縫はない。頸部は短く、肩部に三角切削を施行する。復原口径15.0cmを測る。2は櫛手づくりの底部でハケとナデで仕上げる。底径10.8cm。3は頸部上半を欠く。調整は外側が細かいハケと下半部の擦過痕が残る。内側はマテである。底径7.0cmを測る。

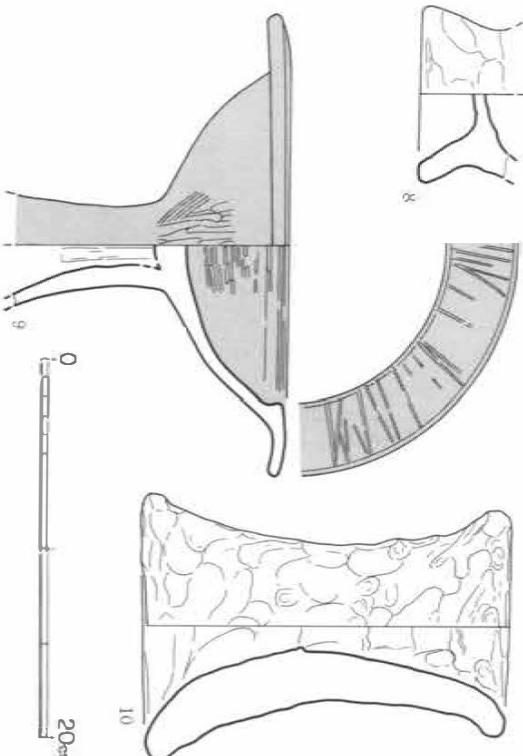
壺は4～8がある。口縁部はすべて「く」字状に外反し、頸部の縫は明顯である。肩部は張り最大径を胴部に持つ。5の口縁は又り気味につくられ、口唇部は凹凸する。8は底い脚台をつけた。調整はハケとナデが主体である。4、5、8は二次川熱を受ける。4は口径25.0cm、底径9.2cm、器高36.3cmを測る。5の復原口径29.0cm、6の復原口径24.8cm、7の底径9.2cm、8の底径9.3cmを測る。

9は円錐形の断面された壺である。口縁部は鋸先状を呈す。胴から底部にかけては幾つくる。脚台は状部は細く下半を欠く。内外面は丁寧な窓磨きを施し、口縁部には不規則な暗文を配する。全面に二次川熱を受け赤黒く変色する。口径24.0cmを測る。

10はつくりの粗い器台で器身も厚い。調整は全面に指頭に擦かみられる。口径11.95cm、底径14.0cm、器高19.0cmを測る。



第134図 82号竪穴住居跡出土土器実測図その1 (1/4)



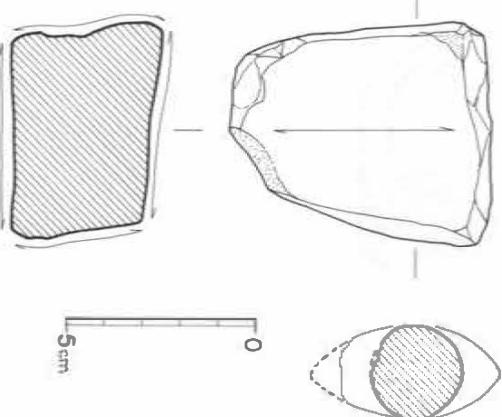
第135図 82号竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)

石 器 (第136図)

砂岩製の器口の刃である。刃面は4面で、加熱を受け微く赤變する。現存長6.9cmを測る。

土 製 品 (第136図)

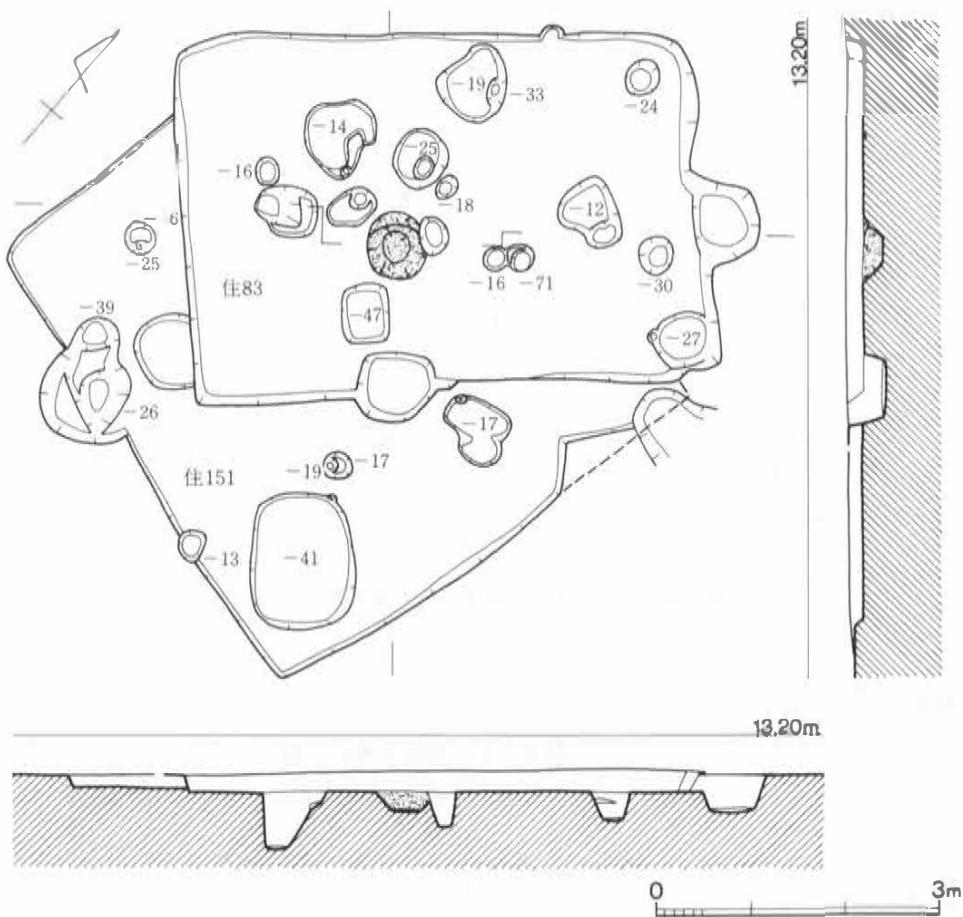
坑内から出土した投擲がある。胎土は精製されてい、るが焼成はあせい。復原長5.0cm、径2.4cmを測る。坑内からの出土は投擲を付属品内のかで焼成していたことを窺わせる。



第136図 82号竪穴住居跡出土石器、
工製品実測図(1/2)

G-1区で検出した竪穴住居跡で時期不明の151号住居を引っている。平面形態は長方形を呈し、規模は長幅が5.60m・5.35m、短幅が3.50m・3.70m、構造が20.0cm前後を測る。床面積は19.21m²である。支柱は2本である。その内の1本は深さ30.0cmと浅く、図示した-71.0cmの柱穴が支柱となり得るが、柱頭部に対してかなりのぞれが生じる。柱間にには径65.0cmの窓を備える。窓内土壤は南壁に掘込んでいたが、壁から突出しており屋内土壤として機能したか否か疑問である。

出土遺物は鐵・鉄の他、土製投擲がある。



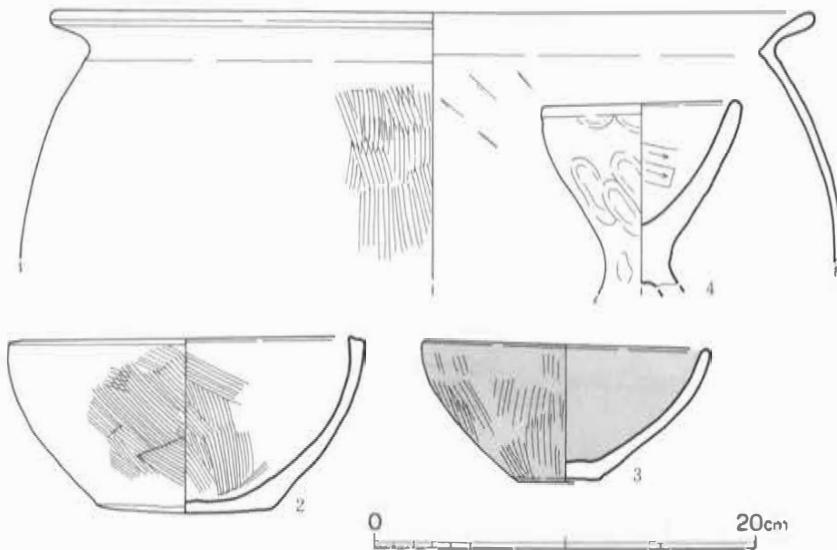
第137図 83号、151号竪穴住居跡実測図(1/80)

目二 遺 物

土 器 (図版48 第138図)

1は甕の破片で、「く」字状に外反する口縁部を有し口唇部は肥厚する。肩部の張りは強く、器壁は薄くつくる。調整はハケとナデで仕上げる。復原口徑40.0cmを測る。

2、3は鉢で口縁から胴部にかけては丸味を持つ。口唇部は肥厚する。調整は内外面ともハケを施す。口徑18.8cm、底径9.2cm、器高9.1cmを測る。3は小振の鉢で胴部から口縁部の丸味は少ない。調整は外面が荒いハケ、内面はナデで仕上げ、内外面に丹を塗布する。口徑15.2cm、底径4.5cm、器高7.1cmを測る。2、3とも屋内土壤内からの出土である。4は脚台付の鉢で一見手握ね風のつくりである。口徑10.6cmを測る。



第138図 83号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

土製品(第139図)

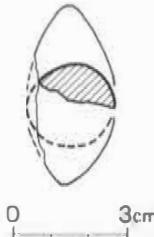
投擲がある。約1/2を欠失する。胎土は精製され、焼成も良い。長さ5.7cmを測る。

84号竪穴住居跡(図版8-(2)・21-(3) 第140図)

調査区の日-1・2区で検出した竪穴住居である 20号土壌より新しい。平面プランは方形を呈し、規模は北東壁・南西壁が5.70m・5.80m、北西壁・南東壁が6.40m・5.90m、壁高10.0cm前後で遺存状況は良くない。床面積は34.48m²である。支柱は規則的な4本柱で、各柱間はP₁-P₂が3.05m、P₁-P₃が2.90m、P₂-P₄が2.70m、P₃-P₄が2.90mを測る。

出土土器を観察する限りカマドの付設が考えられるが、カマドは付設していない。筑後地方でのカマド出現期直前の住居と考えられる。北東壁際の不整形土壌は屋内土壌の可能性がある。

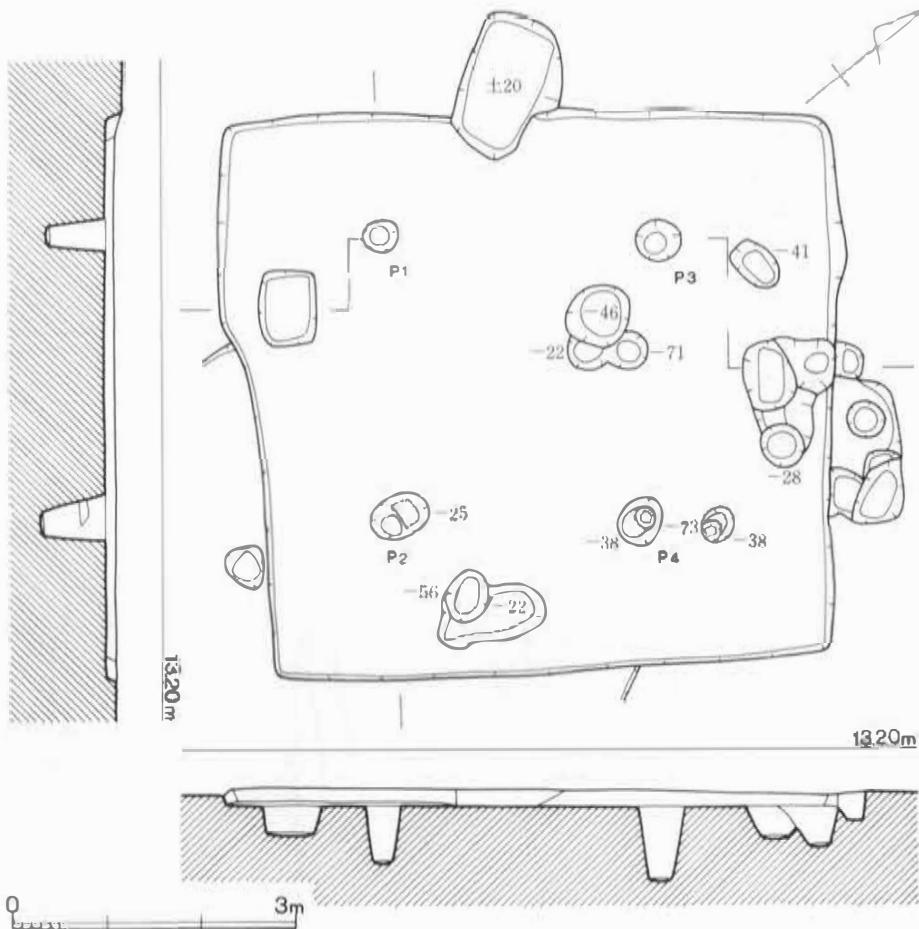
出土遺物は甕・高杯・杯がある。



第139図 83号竪穴住居跡
出土土製品実測図
(1/2)

出土 遺 物

土 器(図版48 第141図)

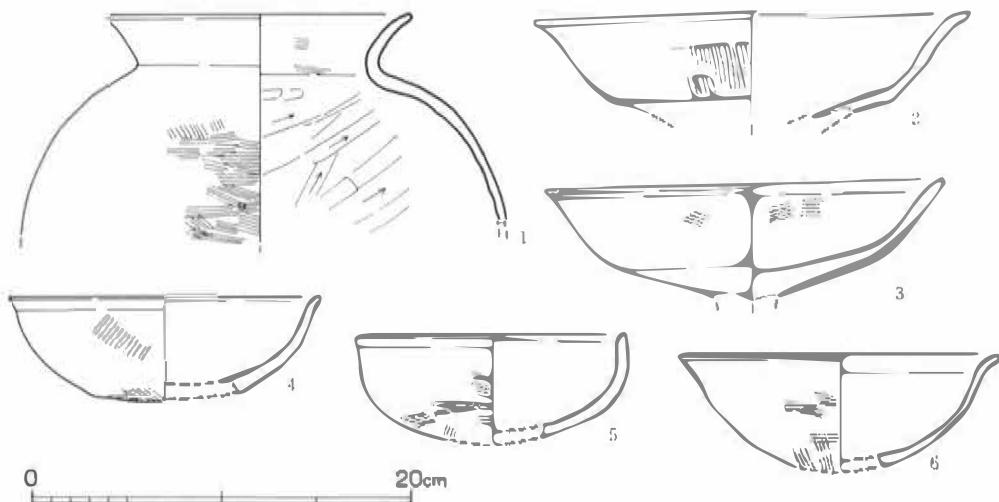


第140図 84号竪穴住居跡実測図(1/80)

1は壺で胴下半を欠損する。口縁部は鋭く外反し、肩部の張りは強い。胴部には横ハケが認められ、内面は箆で削り器壁を薄くする。口径16.0cmを測る。

高杯は2～3があり、同形状をなすものである。底部から胴部の屈折は明瞭で口縁部外反する。杯部は浅くつくられる。調整は横ナデで若干ハケが残る。2は復原口径23.0cm、3の口径21.0cmを測る。

4～6は壺である。口縁部を緩く外反させ胴部の丸味の少ない4、6と口縁の外反度は鈍く胴部に張りのある5がある。調整は外面にハケが残り、内面はナデで仕上げる。4は復原口径16.7cm、器高5.4cm。5は口径14.4cm、復原器高5.8cm。6の口径17.0cm、器高6.1cmを測る。



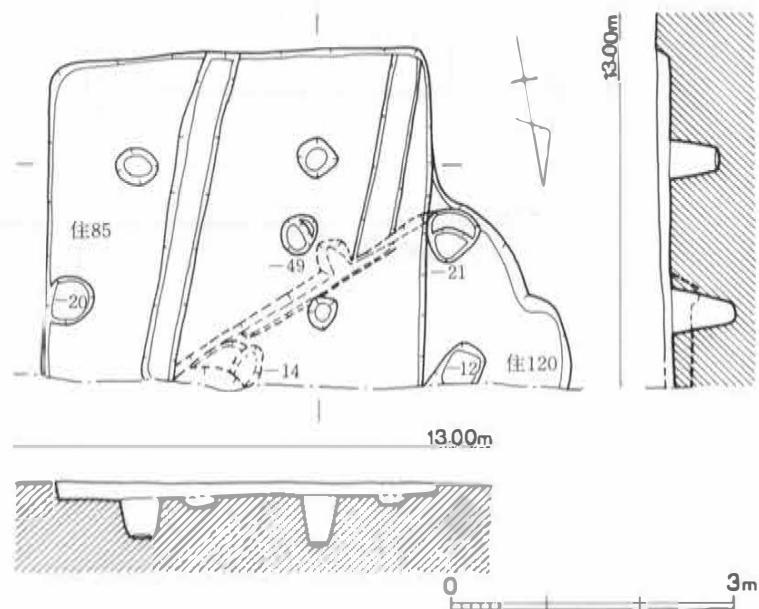
第141図 84号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

85号竪穴住居跡 (第142図)

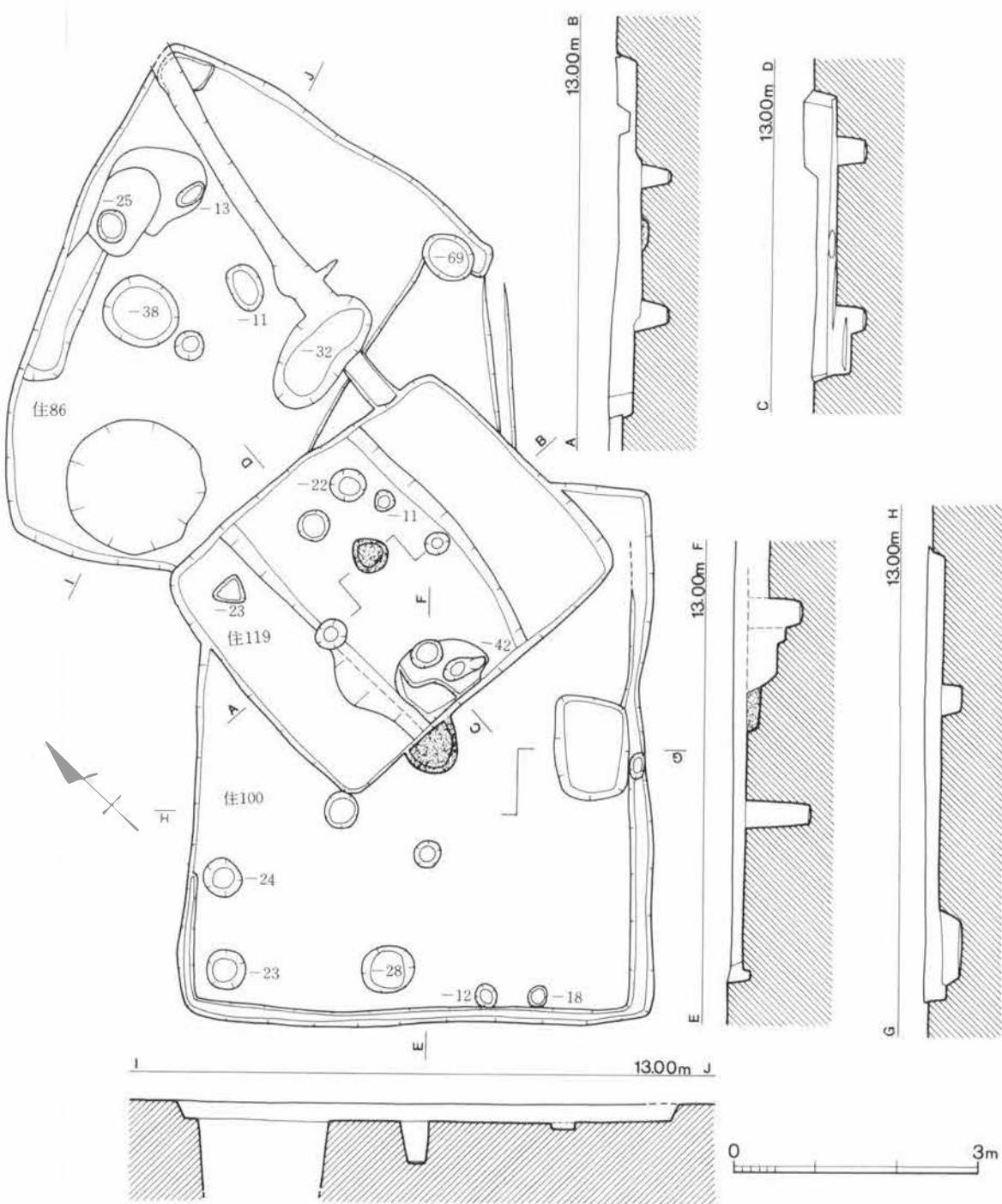
I-1区で検出した竪穴住居で、120号住居を切っている。約1/4が調査区外のため規模などは不明であるが、支柱の配置（4本柱）から方形であろう。南壁は3.90m、壁高は10.0cmと浅い。1本の支柱の内の1本は検出できていない。

柱間は1.90m・1.60mを測る。カマドは調査区外に存在するとと思われる。床面には新しい散砂2本が走る。柱間の主軸はN9°Eを示す。

出土遺物は皆無に近いが、99号と同一時期であろう。



第142図 85号、120号竪穴住居跡実測図(1/80)



第143図 86号、100号、119号竪穴住居跡実測図(1/80)

86号竪穴住居跡 (図版9-(1)・22-(2) 第143図)

119号住居に切られた竪穴住居跡で、床面は新しい井戸で一部擾乱を受けている。平面プランは長方形を呈する。規模は北壁6.30m、東壁4.00m(復原)、壁高20.0cmを測る。支柱は2本と思われるが明瞭な柱穴は見当らない。南壁際には楕円形(1.56×77.0cm)の屋内土壙を備えている。

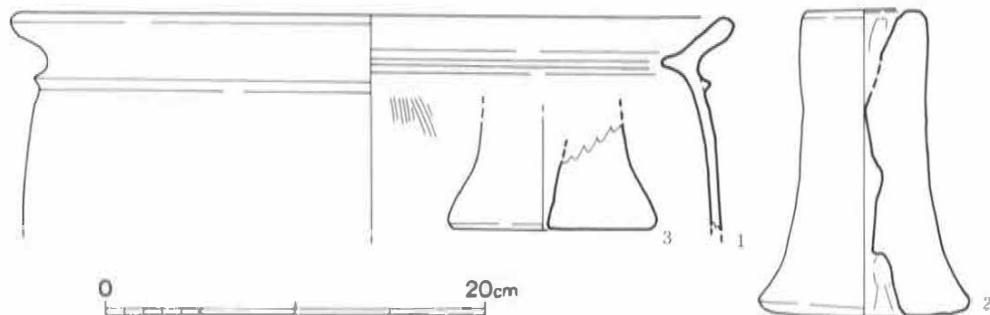
出土遺物は甕・支脚がある。

出土物

土 器 (第144図)

1は「T」字状口縁から発展した形状の甕で、頸部内面は突出する。肩部はやや張り三角凸帯を貼付する。復原口径38.0cm。

2、3は支脚で内面は僅かに空中をなす。二次加熱を受けている。3位1体で使用されるものである。2の上端径6.6cm、底部11.0cm、器高16.3cm。3の底径11.0cmを測る。1、2は屋内土壙からの出土である。

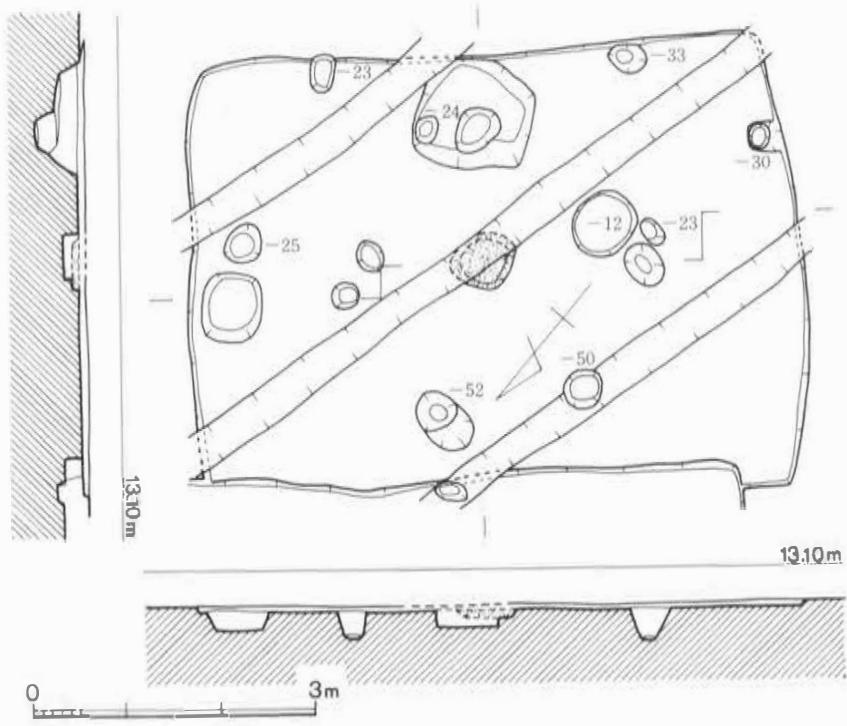


第144図 86号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

87号竪穴住居跡 (図版9-(1)・22-(2) 第145図)

100号竪穴住居に切られた住居跡で、平面形態は長方形を呈する。規模は長壁が5.90m・6.20m(復原)、短壁は4.80m、壁高7.0cm前後を測る。復原床面積は29.14m²である。支柱は断面に表示した2本であるが浅い。柱間は3.10mで、柱間にには敵溝に切られたがが僅かに残る。南東壁の中央には不整形の屋内土壙が設けられている。

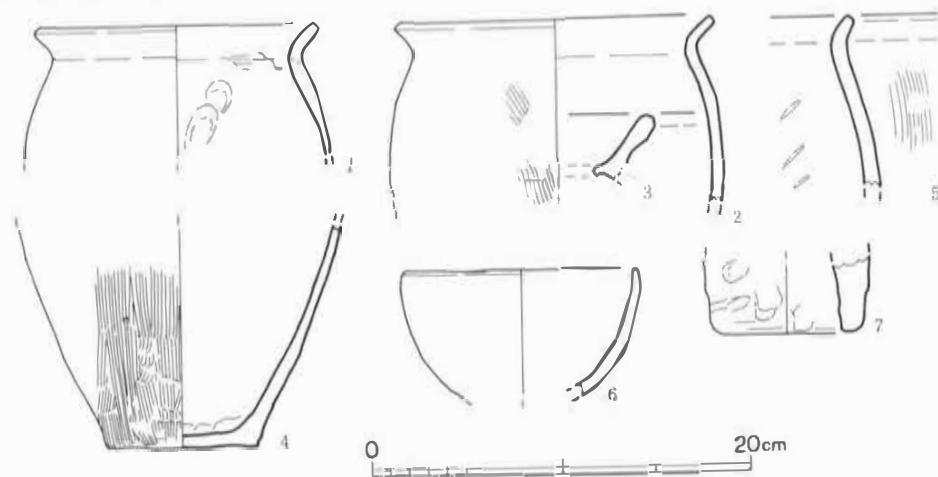
出土遺物は甕・鉢・支脚の他、砥石、石庖丁がある。



第145図 87号竪穴住居跡実測図(1/80)

出：三重県

土 器 (第146図)



第146図 87号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

甌は1～5がある。1、2は同形状の甌で口縁は緩く「く」字状に外反するが、頸部内面の稜は不鮮明である。調整は摩耗して不明瞭である。2は二次加熱を受ける。3は86号住居出土の1の甌と同タイプである。4は大き目の底部を有す。5は口縁が短く口縁の外反度は緩い。1の口径は15.0cm。2は16.8cm。4の底径8.0cmを測る。

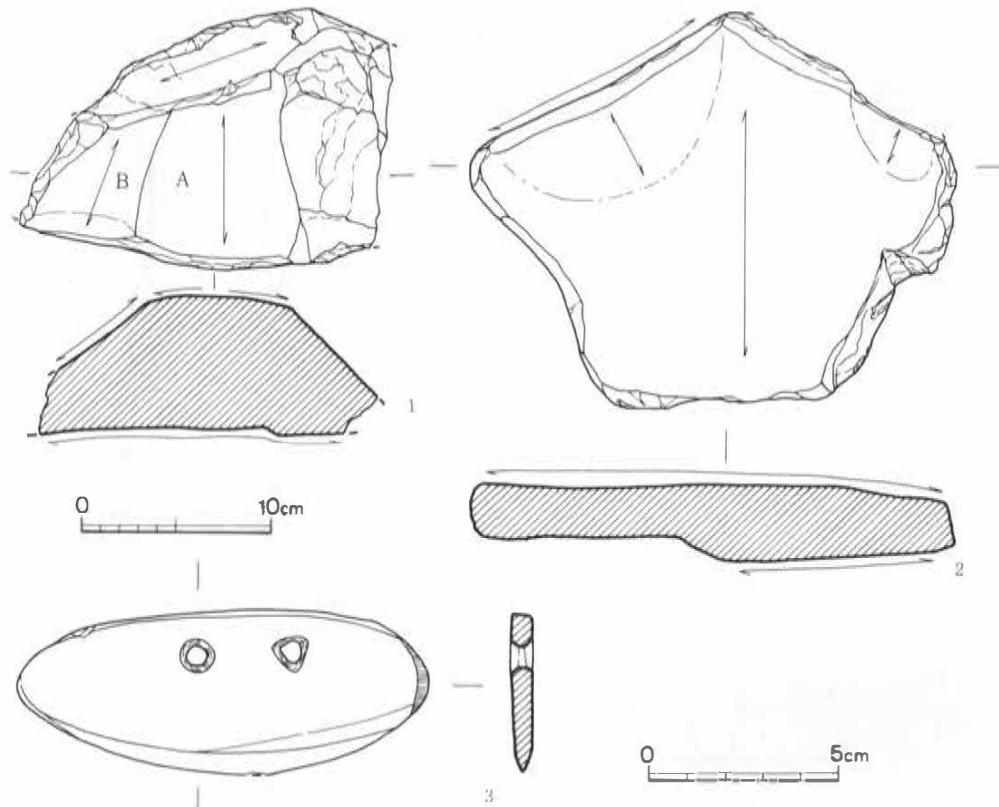
6は鉢で半球形を呈する。調整はナデ。復原口径12.4cmを測る。

7は支脚片である。外面は二次加熱を受ける。底径8.0cmを測る。屋内土壌からの出土である。

石 器 (図版48 第147図)

1、2は大型の砥石である。両者とも花崗岩質砂岩である。1は研面から5面を数え、使用されていない面は1面のみである。特にAとB面は使用頻度が高く平滑となる。2は仕上げ砥石で研面3面である。表面は3方向に研痕がある。1、2とも屋内土壌からの出土である。

3は長円形の尖形の石庖丁である。砂岩製の石材を使用し、雲母類が嵌入する。孔は丁寧に



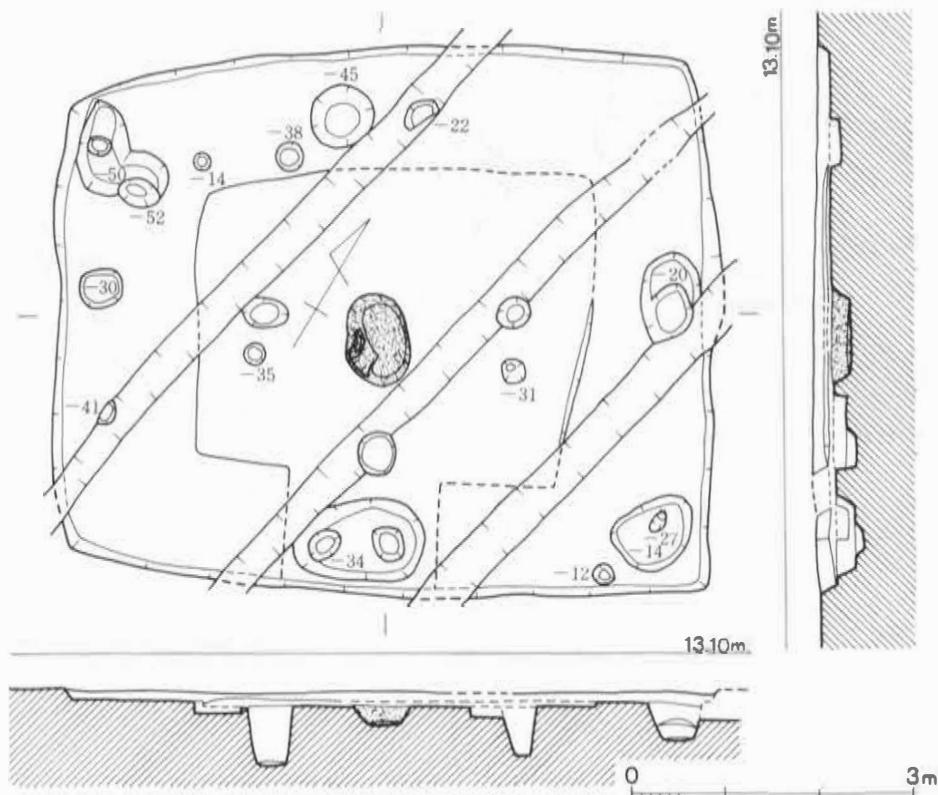
第147図 87号竖穴住居出土石器実測図(1/4, 1/2)

穿っているが、一方は三角形を呈し内径5.0mmを測る。表面は平滑となり、刃部は鋭く研出する。長さ10.8cm、最大幅4.4cm、厚さ5.5mmを測る。

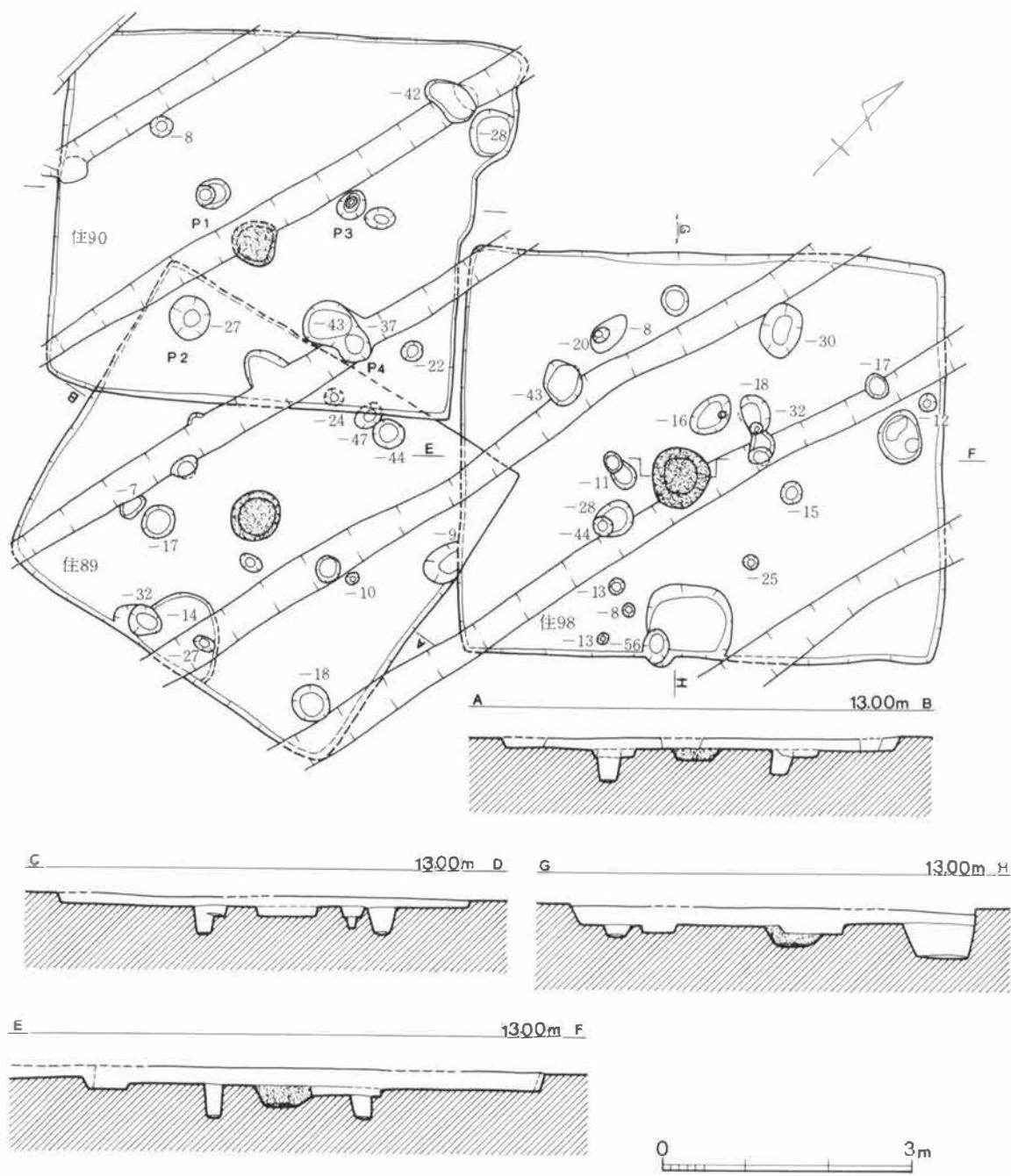
88号竪穴住居跡（図版9-(1)・22-(2) 第148図）

I・J=3区で検出した竪穴住居跡で、重複関係はない。平面プランは胴張り長方形を呈し、規模は南・北壁が6.80m・6.50m、東・西壁は5.60m・4.70mを測る。床面積は35.75m²である。支柱は2本で、支柱間に楕円形（98.0cm×66.0cm）のがれを掘っている。南壁沿いの中央部には1.40m×0.88m、深さ20.0cmの屋内土壙を掘込み、両端には小ピットを配する。ピット間は70.0cmを測る。屋内土壙部分を除く周囲の壁沿いには幅1.20m～1.40mのベット状遺構を貼付する。柱間軸の方位はN 59° Eを示す。

出土遺物は少なく小型の甕がある。



第148図 88号竪穴住居跡実測図(1/80)



第150図 89号、90号、98号竪穴住居跡実測図(1/80)

出土物

土器 (図版49 第149図)

小型の甕が1点ある。口縁部は「く」字状に外反させ、胴部は球状を呈する。器表面は摩耗しているが、内面は箠で削る。口径10.7cm、器高11.3cmを測る。



第149図 88号竪穴住居跡
出土土器実測図(1/4)

89号竪穴住居跡 (図版9-(1)・22-(2) 第150図)

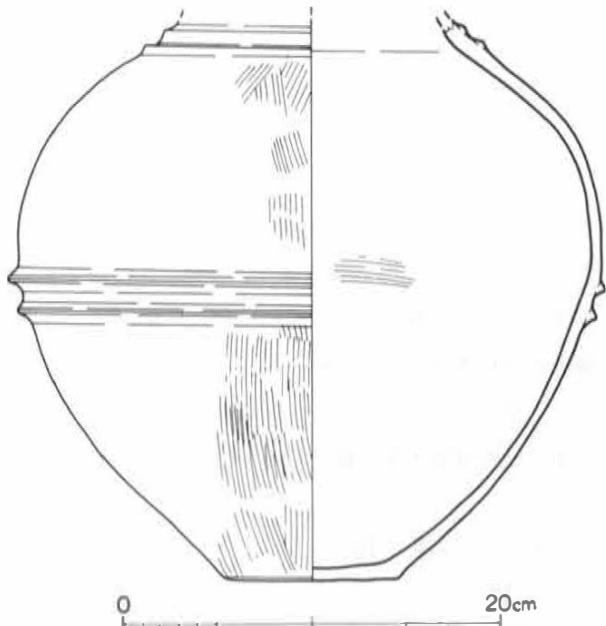
当該住居を含め3軒の重複がある。90号住居に切られている。平面プランは長方形を呈し、規模は南・北壁4.60m・4.90m、東・西壁4.20m・4.00m、壁高14.0cmを測る。床面積は19.51m²である。支柱は2本で、柱間は2.10mである。柱間に幅58.0cmの炉を設けている。南壁際には不整形の屋内土壙を備え、両端にはピットを配する。ピット間は70.0cmを測る。主柱間軸の方位はN81°Eを示す。

出土遺物は壺がある。

出土物

土器 (第151図)

頸部上半を欠損する壺がある。肩部と胸部には二条の三角凸帯を貼付する。調整は外面がハケ、内面はナデる。底径9.3cm、胴径31.7cmを測る。



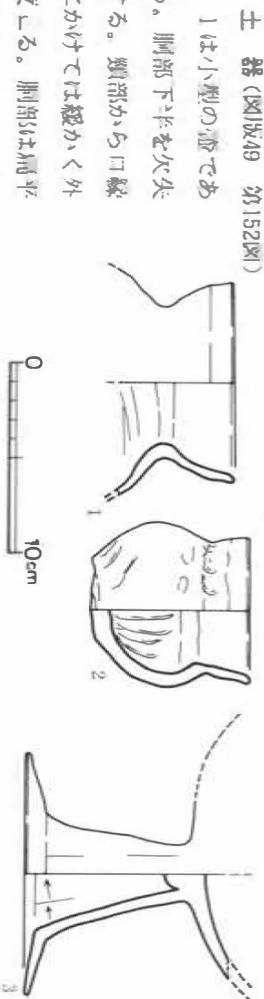
第151図 89号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

I-2区で検出した竪穴住居で89号住居を切っている。平面形態は方形に近い形状を呈している。規模は、南・北壁4.90m・5.10m(復原)、東・西壁4.6

0m・4.20mを測る。支柱は4本で柱間はP₁・P₂が1.50m、P₁・P₃が1.75m、P₂・P₄が2.00m、P₃・P₄が1.70mを測る。柱はP₁寄りに掘られている。

出土遺物は小型壺・壺形がある。

出土遺物



第152図 90号竖穴住居跡出土土器実測図(1/4)

10.6cmを測る。

2は子母ね狀の壺で底部は未調査である。口径7.8cm、高さ8.3cmを測る。

3は壊坏の脚部である。柱状部はスマートで脚部で鋭く開脚する。全体的に摩耗しているが、つくりは良好である。2.6cmを測る。

91号堅穴住居跡(図版8・21-(4) 第153図)

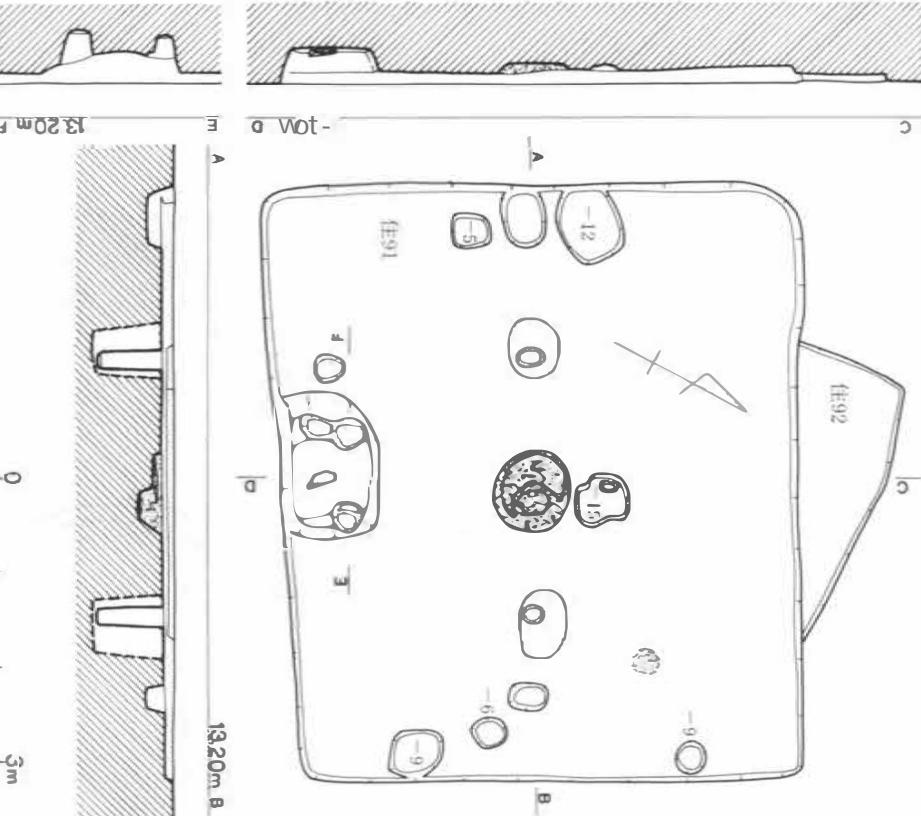
G・H-2・3区で検出した堅穴住居跡で、92号住居を引っている。平面形状は長方形を呈し、規模は南・北幅6.20m・6.10m、東・西幅5.30m・5.70m、壁高10.0cm前後を測る。床面積は32.02m²である。支柱は2・3・4・5本で柱間は2.70m・1.50m、深さ25.0cmの幅1.5mの扇形の窓内土壙を掘込んでいる。土壙内からは雙片岩(石器)の板石が底面から出土している。土壙の両端には2個のピットを配しており、ピット間は90.0cmを測る。柱間軸の方位はN 62° Eを示す。

出土遺物は壺・甌・鉢・高杯・筒形器台・器台・支脚、平盤ね土器の他、砥石がある。

出 土

土 器(図版49 第154・155図)

1～3は複合口縁甌である。1・2の口縁の折沿は明瞭な縫をなし、3は不明瞭である。

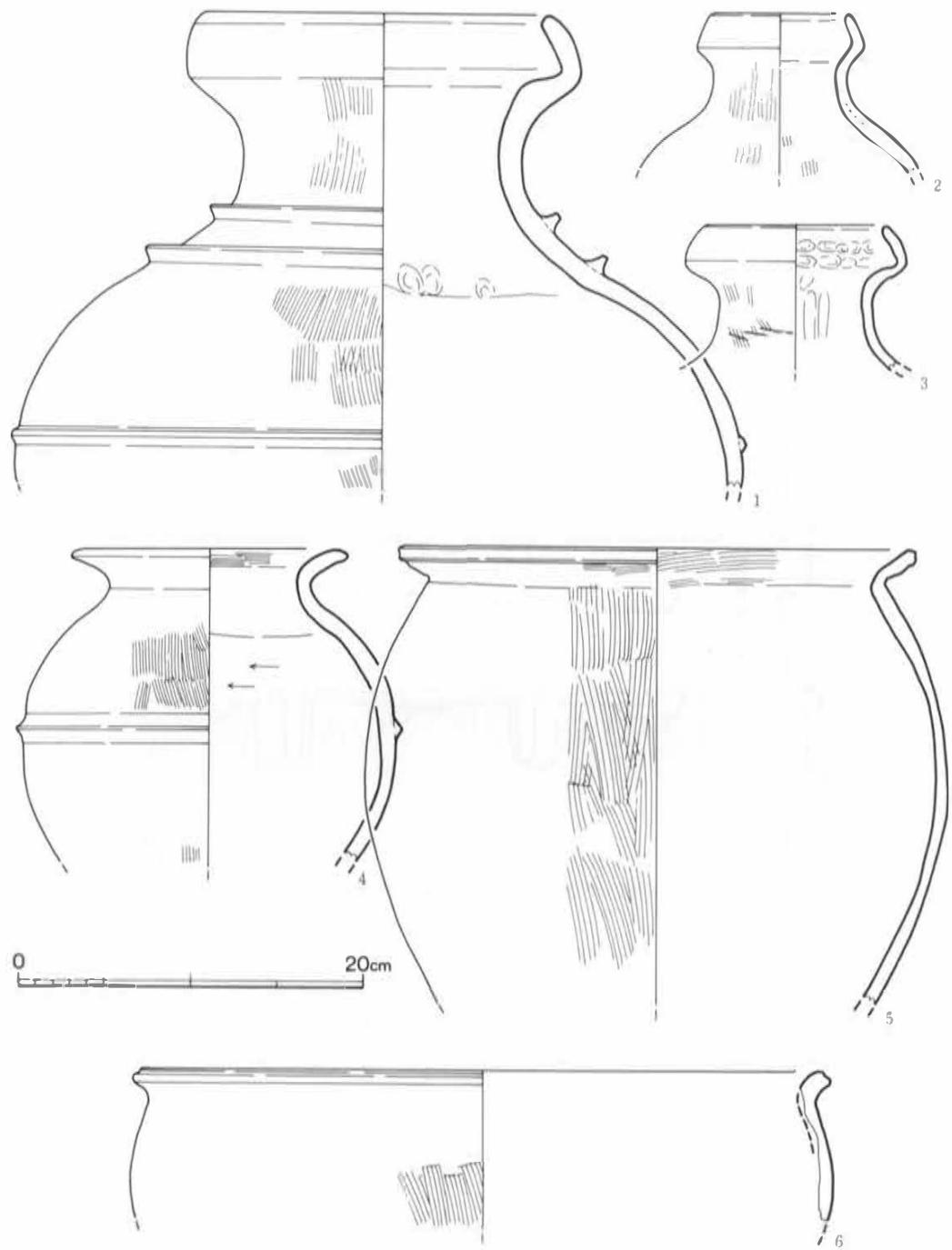


第153図 91号、92号豎穴住居跡実測図(1/60)

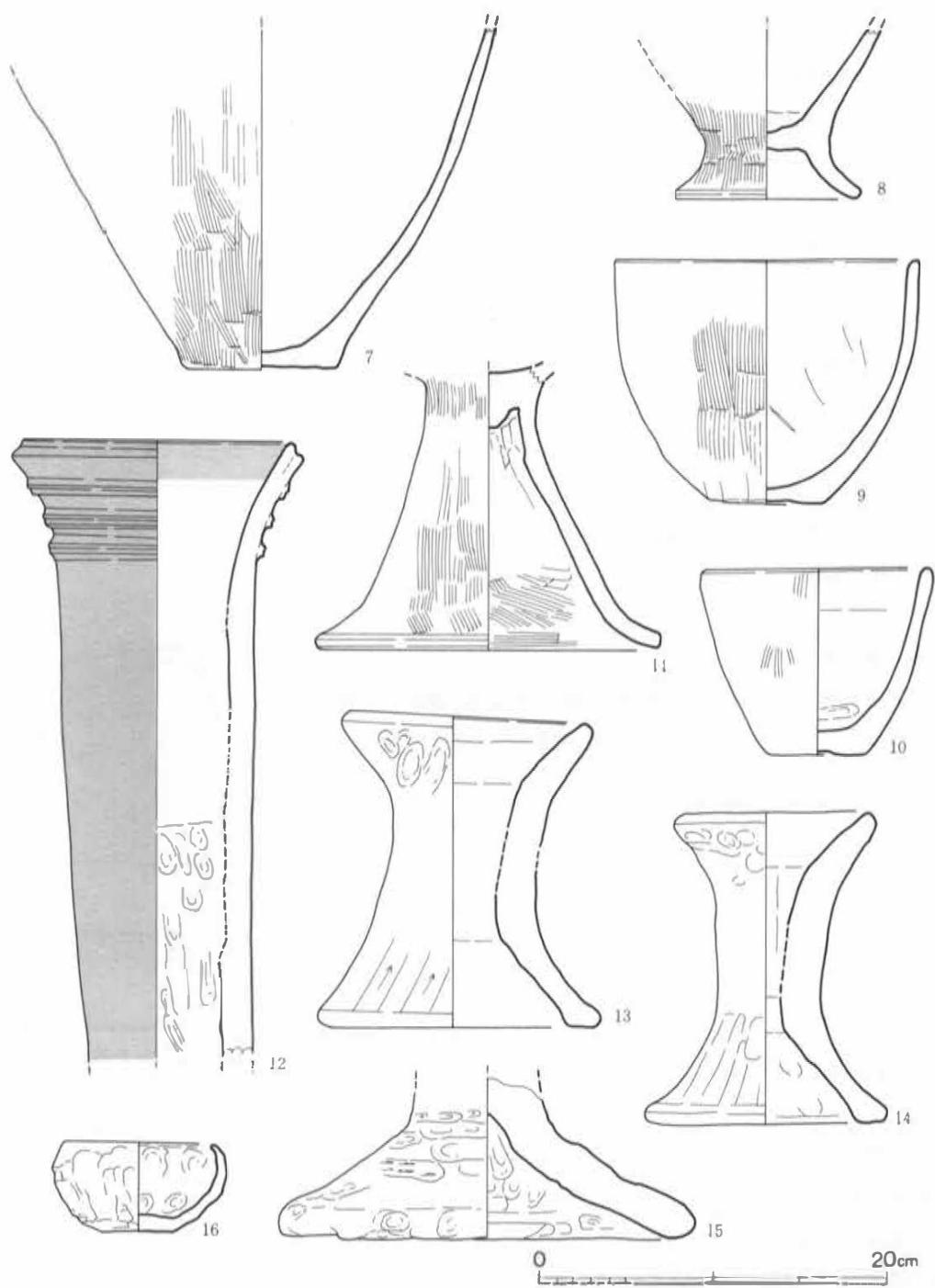
3個体とも頭部は短く、1は肩部から胸部にかけての張りは強い。肩部には2本、胸部には1本の台形凸筋を付ける。3の口縁内面には指頭圧痕がみられる。1の口径20.0cm、2は口径8.3cm、3の口径10.9cmを測る。4は頭部から口縁部にかけて鋭く外反する窓で体部は球状を呈する。胸中央部には低い三角凸筋を付す。復原口径16.0cmを測る。

蛇は5、6、8がある。5は口縫を「く」字状に鋭く外反させ口唇部は肥厚する。肩部から胸部は強く張る。外面と口縫はハケを施し、内面はナデている。三次加熱を受け淡く変色する。口径29.8mmを測る。7は底径9.0cm。8は低い脚台がつく窓で、底径10.8cmを測る。両者とも二次加熱を受けている。

6、8、9は鉢である。6の口縫部は短く、僅かに外反させる。口縫部は横ナデによる凹線が残る。復原口径0.0cmを測る。9は口縫部が直口する鉢で体部は丸味を有す。復原口径17.8



第154図 91号竪穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)



第155図 91号竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)

cm、底径7.0cm、器高13.9cmを測る。屋内土壙内からの出土である。10は小型の鉢で胴部から口縁にかけては直線状である。口径13.2cm、底径5.4cm、器高10.5cmを測る。

11は高杯の脚部で、柱状部は頗く大きい。裾部は僅かに外反する。調整はハケを多用する。高杯にしてはつくりが粗い。裾部径20.0cmを測る。

12は筒形器台で下半を欠失する。口縁部は緩く外反し口唇部は肥厚する。口縁下には「M」字状凸帯を三条貼付する。調整は丹塗り磨研であるが風化が著しい。内面はナデで仕上げる。外面は二次加熱を受け赤黒くすむ。現存長36.0cm、口径16.6cmを測る。

13、14は器台である。いずれも最小径が中央部にある。器壁は厚くやや雑なつくりである。外面下部には擦過痕が残る。14の表面には粗痕が残る。13の口径14.4cm、裾部径16.1cm、器高18.0cm。14は口径11.7cm、裾部径14.0cm、器高17.7cmを測る。

15は非常につくりの粗い土器で、器壁も分厚い。器種は明確ではないが支脚と考える。表面には凹凸があるが、叩き痕か否かは明らかでない。底径23.95cmを測る。

16は手握土器である。口縁部は内窵する。内外面は指頭でナデる。口径8.5cm、底径3.9cm、器高5.1cmを測る。

石 器 (第156図)

硬質砂岩製の仕上砥石がある。約2/3を欠失する。現存での研面は5面で、すべての面が平滑となる。床面からの出土である。

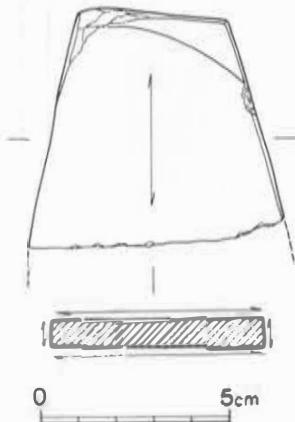
92号堅穴住居跡 (図版8-(2)・21-(4) 第153図)

91号住居に大半が削平され全容は殆ど把握できない。壁高は8.00cmと浅い。

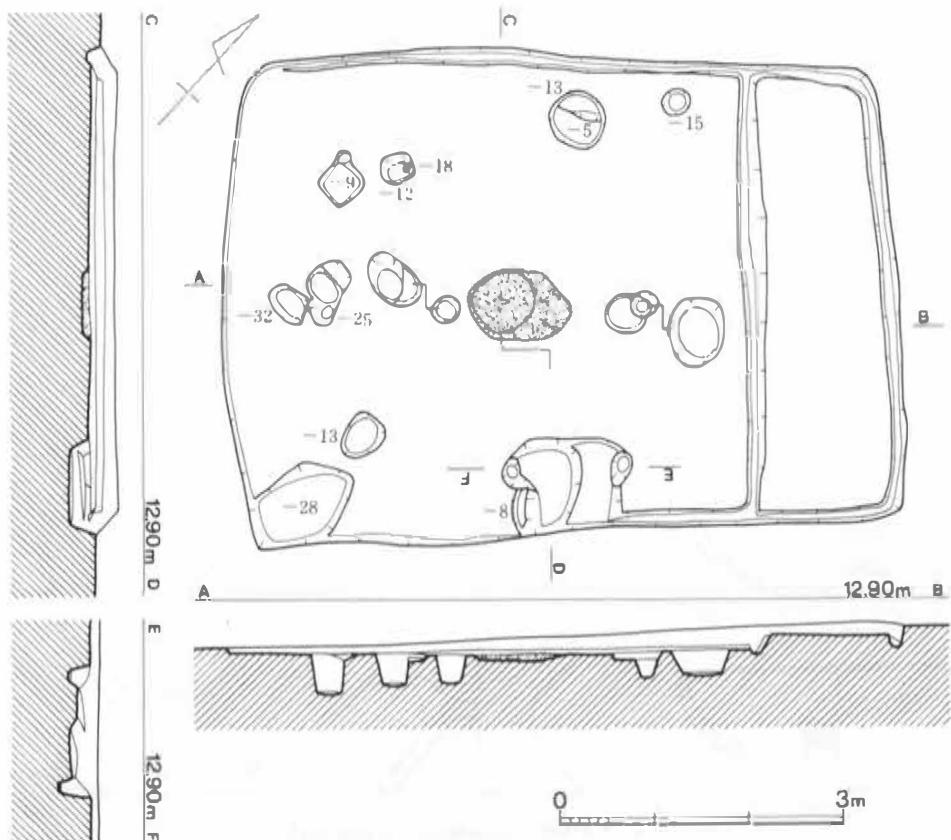
出土遺物は皆無である。

93号堅穴住居跡 (図版9-(2) 第157図)

G・日-4区から出土した堅穴住居跡で、平面形状は長方形を呈する。規模は長幅が6.90m・6.60m、短壁が5.10m・4.70m、壁高5.0cm~15.0cmを測り遺存状況は良くない。床面積は33.83m²である。支柱は断面上には數本あるが、基本的には2本柱である。柱間は2.70mを測り、中央部には橢円形の浅い坑を設けている。屋内土壙は南東壁際に在り、2段壇の不整形を呈する。両端には小さなピットを配し、ピット間は1.20mを測る。短壁の一方には幅1.10~1.30mのベットを付設する。



第156図 91号堅穴住居跡
出土石器実測図(1/2)



第157図 93号竪穴住居跡実測図(1/80)

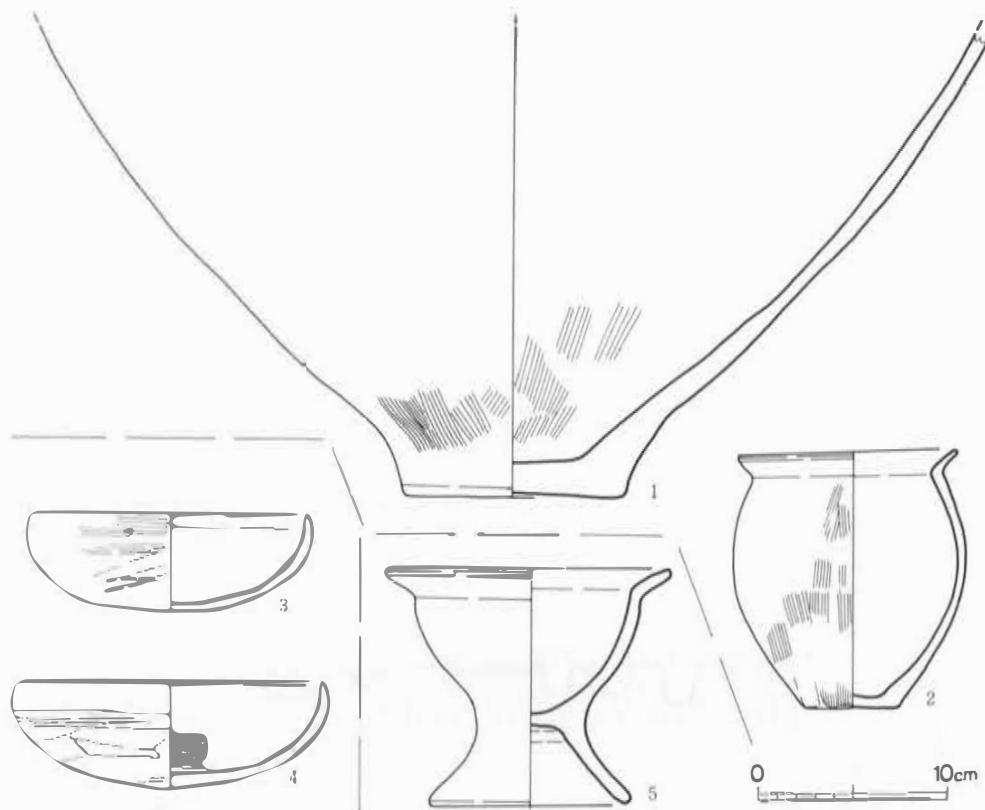
出土遺物は壺・甕の他、土製円盤がある。

出 土 遺 物

土 器 (図版50 第158図)

1は大型の壺で胴下半部のみ残存する。体部の大きさの割りには底部が小さく、底径11.8cmを測る。外面は僅かに二次加熱を受け赤変する。

2は小型の甕で1/2残存する。口縁部は「く」字状に外反し、胴部中央に最大径を有す。調査は外面がハケ、内面はナデる。復原口径11.6cm、底径5.0cm、器高13.4cmを測る。



第158図 93号-95号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

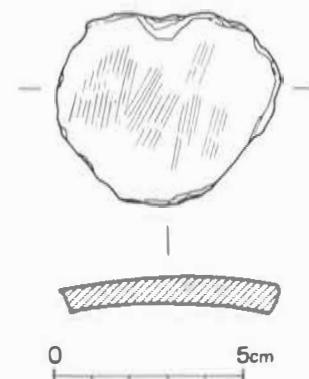
土製品(第159図)

土器片再利用の土製円盤がある。26.5 gを計る。

94号竪穴住居跡出土遺物

土 器(図版50 第158図)

3、4は同形状の壺で精製品である。口縁部は内脇させ、扁平形状を呈する。調整は両者とも外面が箝削り、4の内面は丁寧な箝磨きを施す。3は二次加熱を受ける。3の復原口径14.5 cm、器高5.2cm。4は口径15.2cm、器高5.7cmを測る。



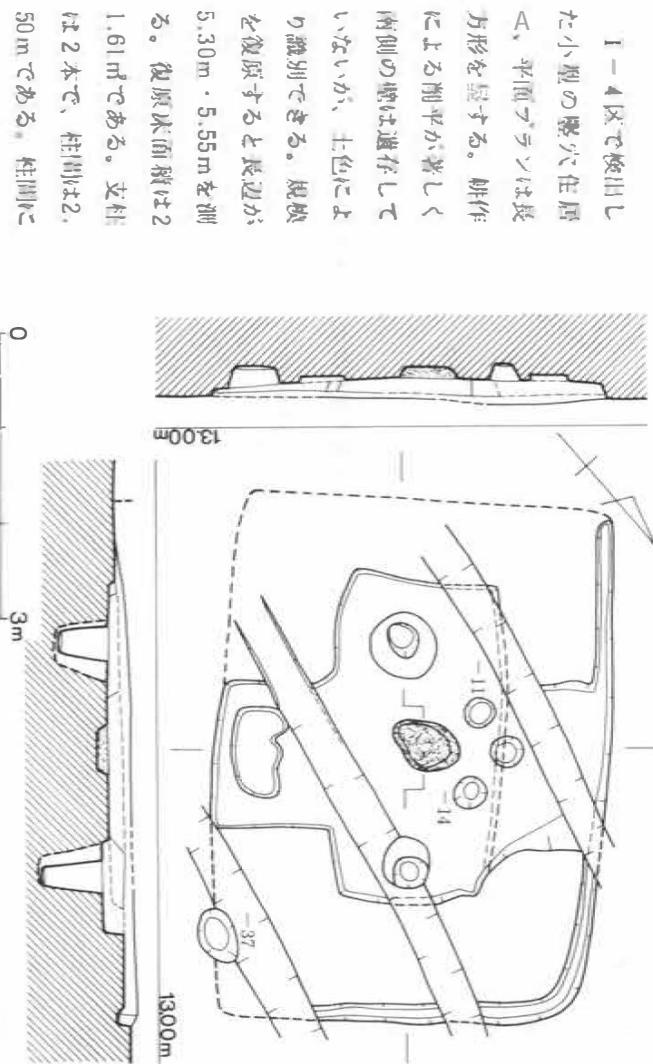
第159図 93号竪穴住居跡
出土土製品実測図(1/2)

95号竪穴住居跡出土遺物

土 器 (図版50 第158図)

脚台付の鉢がある。口縁は斜め上方に外反させ、体部はやや張り気味につくる。調整は摩耗しているか、外面にハケが残る。胎土は小砂粒が多い。復原口径15.1cm、幅部径10.6cm、器高12.5cmを測る。

96号竪穴住居跡 (図版9-(2) 第160図)



I-4区で検出し
た小型の堅穴住居

△、平面プランは長方形を呈する。耕作による削平が著しく南側の壁は遺存していないが、土色により識別できる。規模を復原すると長辺が5.30m・5.55mを測る。復原床面積は2

1.61m²である。支柱は2本で、柱間は2.

50mである。柱間に

は、整形の焼成着し
い坑を設けている。

門の北側傍には柱洞85.0cmの2本の小柱が掘られている。壁沿いには「[]」状にベットを配置し、不整形の屋内土壙を南東壁に備える。柱間軸の方位はN40°E示す。
出土遺物は鉢、高杯がある。

出 土 遺 物

土 器 (図版50 第161図)

1～3は鉢である。1は尖り気味の底部で縁壁を厚くつくる。胎土は精製され非常に良い。外

面は磨き、内面はハケとナ
テで仕上げる。2の鉢は口
唇部を肥厚させ体部は丸味
を有す。内外面ともナデで
仕上げる。復原口径18.0cm
を測る。3の鉢は小型品
で、ナデとハケで仕上げ
る。口径11.4cm、器高4.3
cmを測る。屋内土壙からの
出土である。

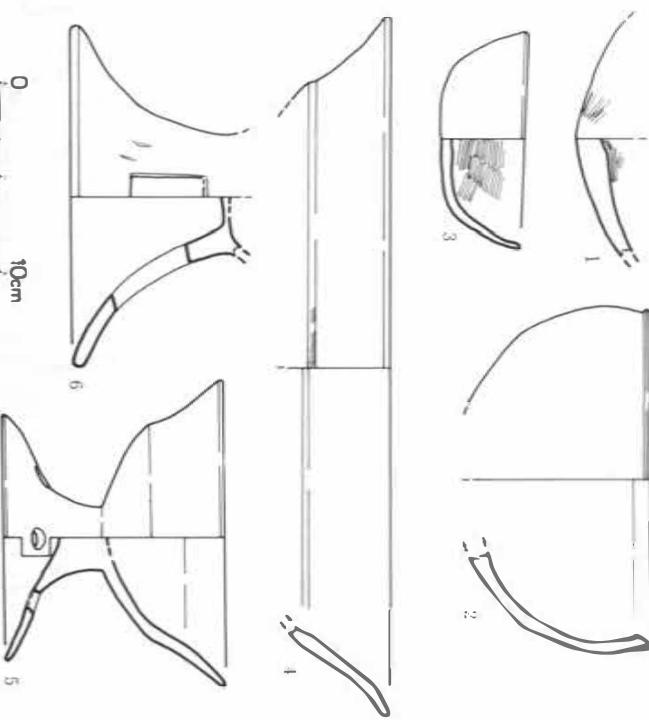
4～6は高杯で大小がある
。4は大型の溝杯脚部片
で崩折部は明顯で漆生的形
状を残す。復原口径37.0
cm。5は光形品で精製され
た高杯である。杯部は深く
崩折部から反り気味に長く
のびる。脚部は深く擴部は
大きく開脚する。脚部には
1孔を穿つ。口径16.2cm、
底径13.0cm、器高11.6cmを
測る。6は脚部片で三個並
に長方形の透しを施す。
調整はナテである。脚部径
18.0cmを測る。

18.0cmを測る。

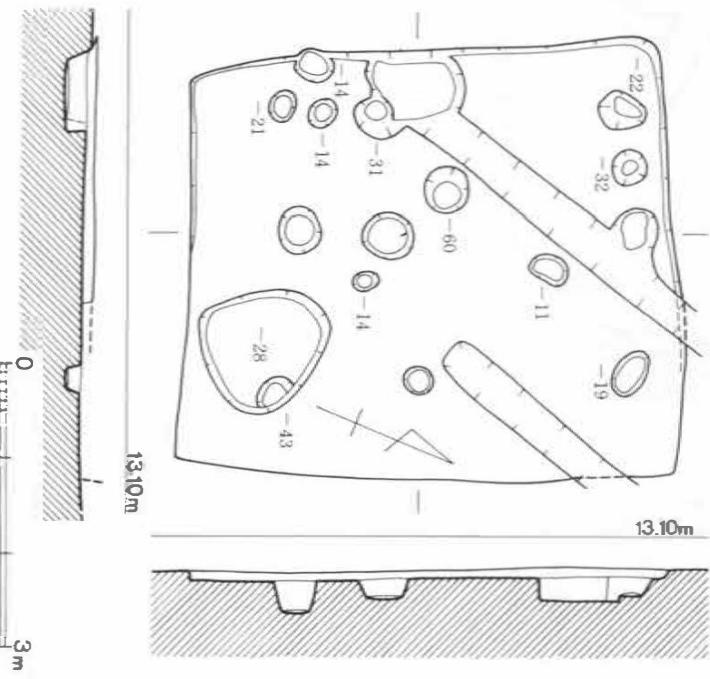
97号竪穴住居跡

(第162図)

88号竪穴住居の南側で檢
出した住居跡で、平面形状
が長方形を呈する。削平が、
激しく東壁は遺存しない。



第161図 96号竪穴住居跡出土土器実測図(1/14)



第162図 97号竪穴住居跡実測図(1/80)

規模は東・西4.9mか5.30m・4.90m、南・北壁4.00m・4.60mを測る。支柱は明確な跡だが、見当たらない。屋内土塙は大半の住居と異なり西壁際に備えている。その他詳細は不明である。

出土遺物は壺がある。

出土遺物

第163図 97号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



土器(第163図)

口縁部が強く外反する壺で肩部に三角形引抜を附付くる。測定は外径が荒いハケ、内径はハケとナーベで仕上げる。復原口径19.0cmを測る。

98号竪穴住居跡(図版9-1・22-(2) 第150図)

89号住居に短壁の一端を切りられた竪穴住居跡である。平面形態は長方形を呈し、規模は長辺5.70m、短辺は4.70m・4.00m、壁高20.0cmを測る。正面積は26.82坪である。支柱は2本で、柱間は1.80mを測り、住居の横壁の割合には短い。中央部には窓を掘込んである。南東壁の中央に1.00m×0.9mの腰内土塙を備えている。土塙の片方には1本の柱穴を掘ってい、柱間軸の方位はN-Eを示す。

出土土器は少く、示可能な丹繪りの小型甕がある。

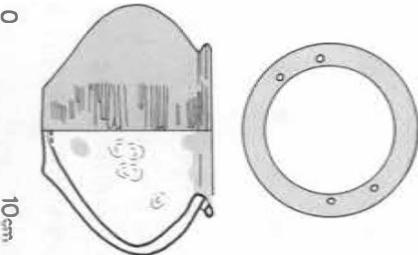
出土遺物

土器(図版50 第164図)

小型の甕がある。測定は外面が丹繪り磨研、内面はナーベで仕上げる。口縁部は直く、しかも「く」字状に鋭く外反する。底部は扁平状を呈する。胎土は精製され無筋である。口径9.05cm、底径4.4cm、高さ8.8cmを測る。

99号竪穴住居跡(第165図)

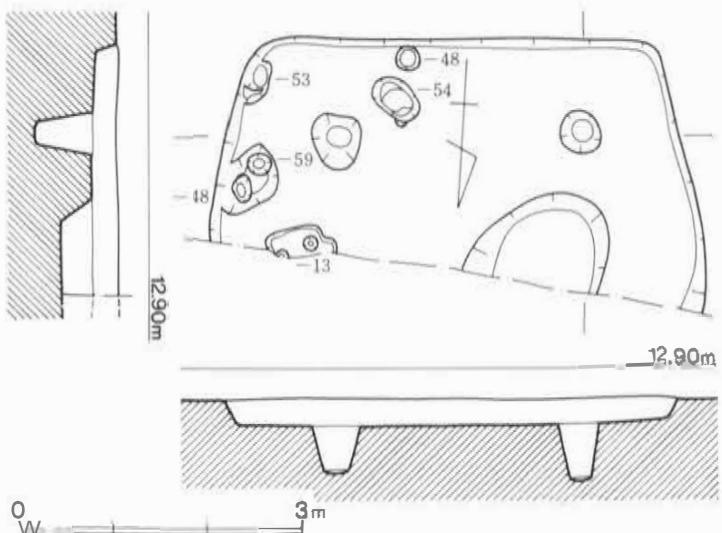
J-1区で検出した竪穴住居であるが、約1/2が調査区外



第164図 98号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

であり完備に至っていない。平面プランは方形であろう。南壁は4.20m、壁高20.0cm強である。支柱は柱穴配置から4本と思われる。2本の柱間は2.60mを測る。その他詳細は明らかでない。

出土遺物は図示不可能な甕の小片があり、内面には箝削りが認められる。



第165図 99号竖穴住居跡実測図(1/80)

100号竖穴住居跡 (図版 8-(2)・9-(1) 第143図)

119号住居より古く、87号住居より新しい竖穴住居跡で、平面形状は長方形を呈する。規模は2辺のみ計測可能で長軸が6.50m、短軸が5.70m、壁高20.0cmを測る。支柱は2本でその内の1本は119号住居の屋内土壌下で確認した。柱間は2.50mを測り、中央には焼痕の残る炉を設けている。床面直上には炭化材、焼土が散在しており、火災に遭遇している。南壁際には長軸1.30m、短軸90.0cm、深さ25.0cmの長方形の屋内土壙を備えている。なお、壁沿いには周溝を廻らすが四周していない。

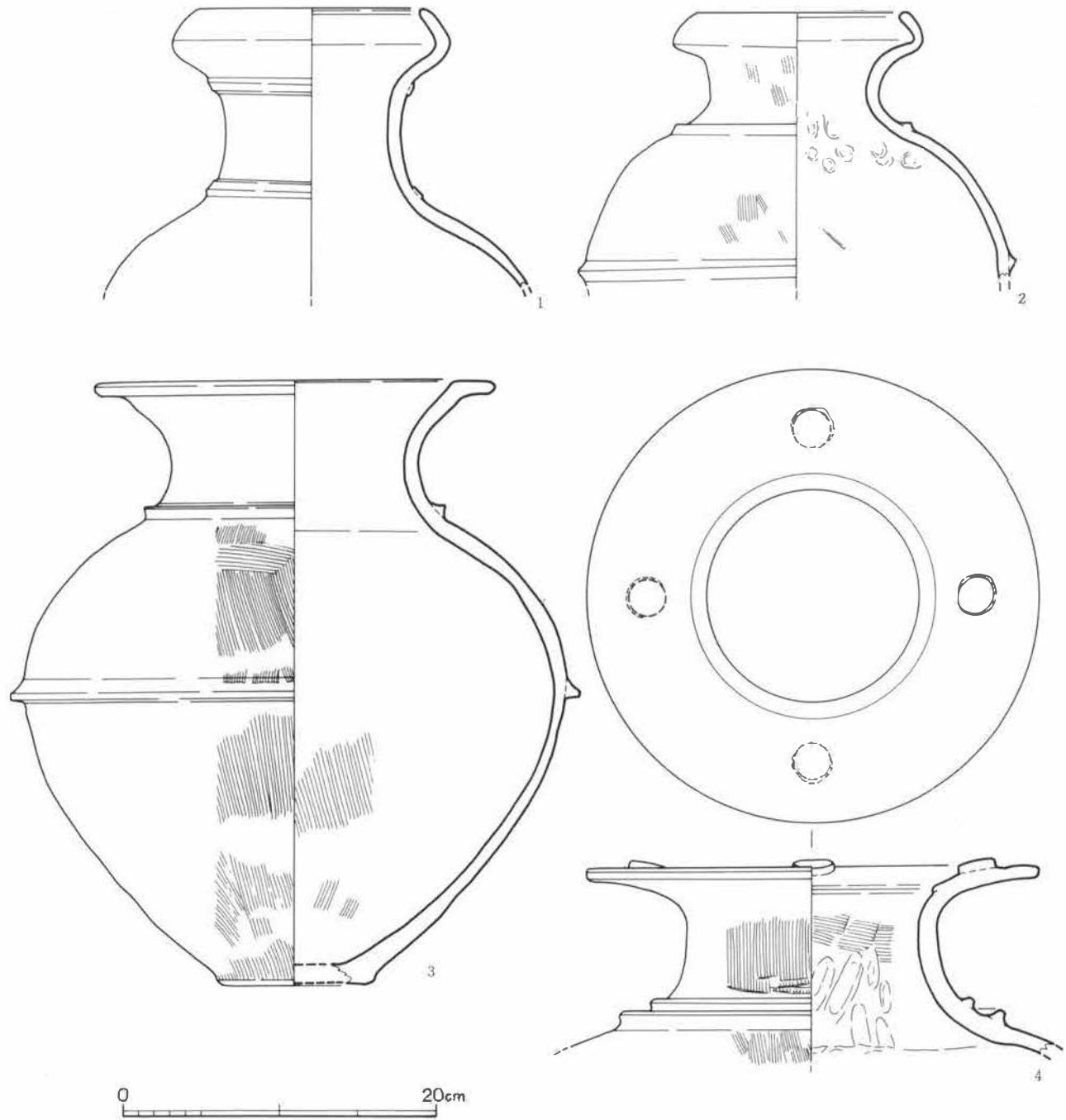
出土遺物は焼失住居のため多くの土器がある。器種は壺・甕・鉢・高杯・器台・手摺ね土器の他、砥石、石庖丁、敲石がある。

出 土 遺 物

土 器 (図版50・51 第166・167・168・170図)

壺は1～7がある。1・2は所謂複合口縁壺で肩折部の稜は不明瞭である。1は口縁下と肩部に低い台形状の凸帯を貼付し、肩部は張る。口径14.4cmを測る。2の頸部は短く肩部と胴部に三角凸帯を付す。口径は13.2cmを測る。両者とも器面が風化し調査は不明瞭であるが、外面ハケ、内面ナデ仕上げであろう。

3・4は鋤先口縁が退化したもので、3は口縁部の平坦部が残る。頸部は細くしまる。肩部から胴部にかけてはやや扁平球状を呈する。肩部には三角凸帯、胴部は台形状凸帯を貼付する。調



第166図 100号竪穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)

盤はハケとナデで仕上げる。復原口径25.6cm、底径10.1cm、器高38.2cmを測る。4は鋤先口縁の面影を僅かに残す。上面には径2.5cmの円形浮文を4箇所（？）に配する。肩部には台形凸沿を二本貼付する。調整はハケとナデで仕上げる。復原口径29.0cm、5は胴下半部に二条の台形凸沿を付す。外面はハケで、底部付近は擦過痕が残る。底径10.2cm。6は「く」字状に外反する口縁を有す盤で、肩部は擦刷を有す。胴中央部には台形凸沿を貼付する。復原口径17.0cmを測る。7は内塗り磨研盤で頸部上半を火失する。口縁部は袋状を呈するであらう。胴部は玉巻状を呈する。底部は上げ底をなす。精製品である。底径8.0cmを測る。

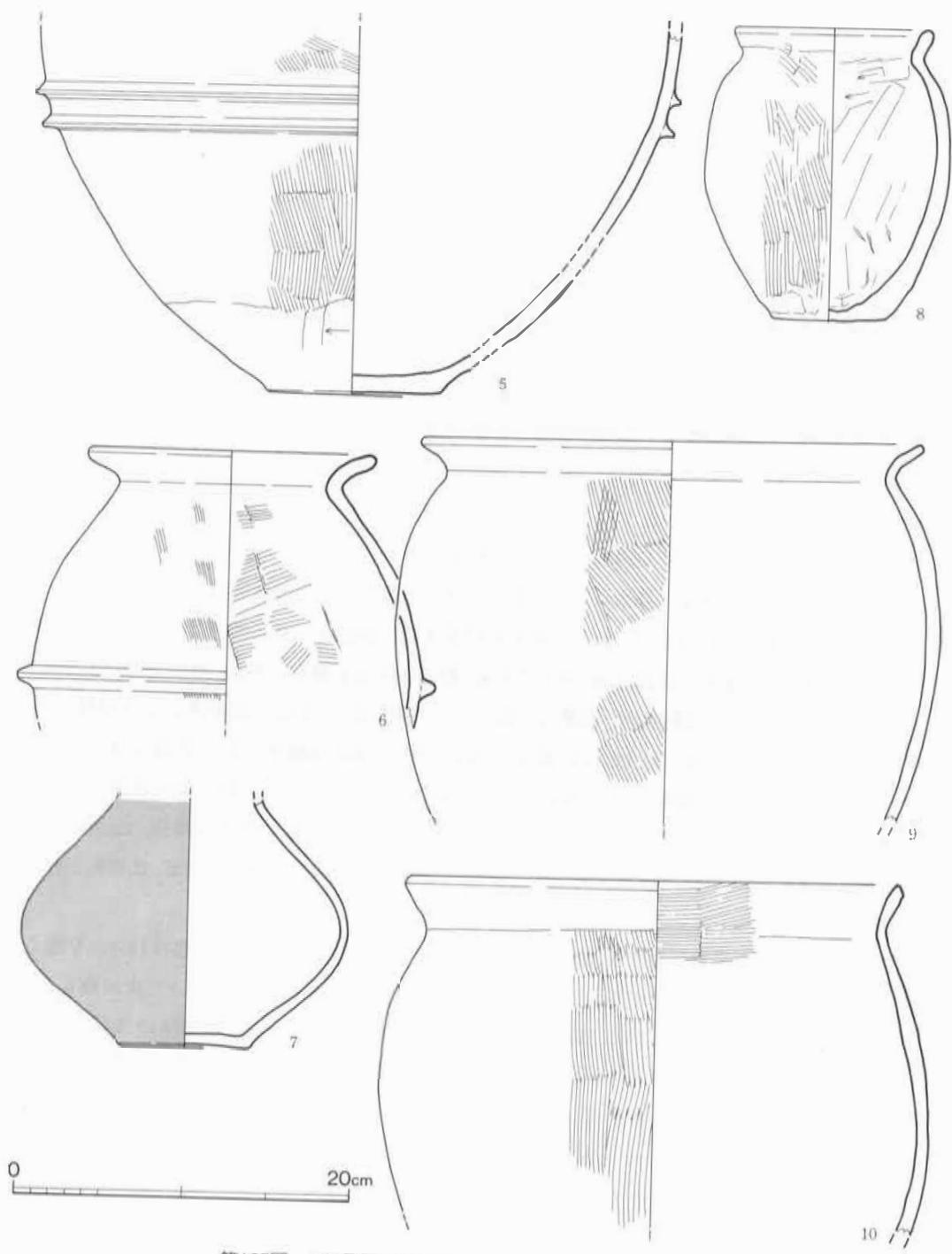
8は8～13がある。8は小型の盤でつくりが粗い。調整は外面が粗いハケ、内面は擦過痕が残る。外面は二次加熱を受ける。復原口径11.8cm、二径7.2cm、器高17.5cmを測る。9・10は「く」字状に外反する口縁を有すが、後者は外反度が鈍い。前者は肩部が盛るが、後者は擦刷である。調整は外面は外反ハケ、内面はナデで仕上げる。両者とも外面に煤が付着する。9の口径30.0cm、10は29.6cmを測る。11は長胴の盤で底部は脚まりやや不安定である。全高に二次加熱を受け深く赤變する。復原口径23.5cm、底径8.5cm、器高36.5cmを測る。12の底径は8.9cmを測る。13の口縁は「く」字状に外反するが、塑部内面の緩線は不明瞭である。最大径が口縁部にある。調整は外面が粗いハケ、内面はナデる。外面に二次加熱を受ける。復原口径25.0cmを測る。

鉢は14～19がある。14は直の鉢で口唇部を肥厚する。調整はハケとナデで仕上げる。外間に二次加熱を受ける。復原口径19.1cm、底径7.6cm、器高6.6cmを測る。15は口縁部を僅かに外反する。肩部は僅かに盛り長胴をなす。調整は外面がハケであるが、下半は二次加熱を受け擦耗する。内面はナデる。口径13.2cm、底径6.0cm、器高16.8cmを測る。16は口縁が内側し胴部は球状を呈する。上げ底の底部をなす。復原口径15.8cm、底径6.7cm、器高12.5cm。17の口径10.3cm、底径4.0cm、器高8.3cm、18の口縁は胴部から口縁部にかけて直線的で逆台形を呈する。復原口径12.0cm、底径5.6cm、器高8.0cmを測る。19は口縁部が直口する鉢で、二次加熱を受ける。口径15.5cm、底径5.1cm、器高7.8cm。

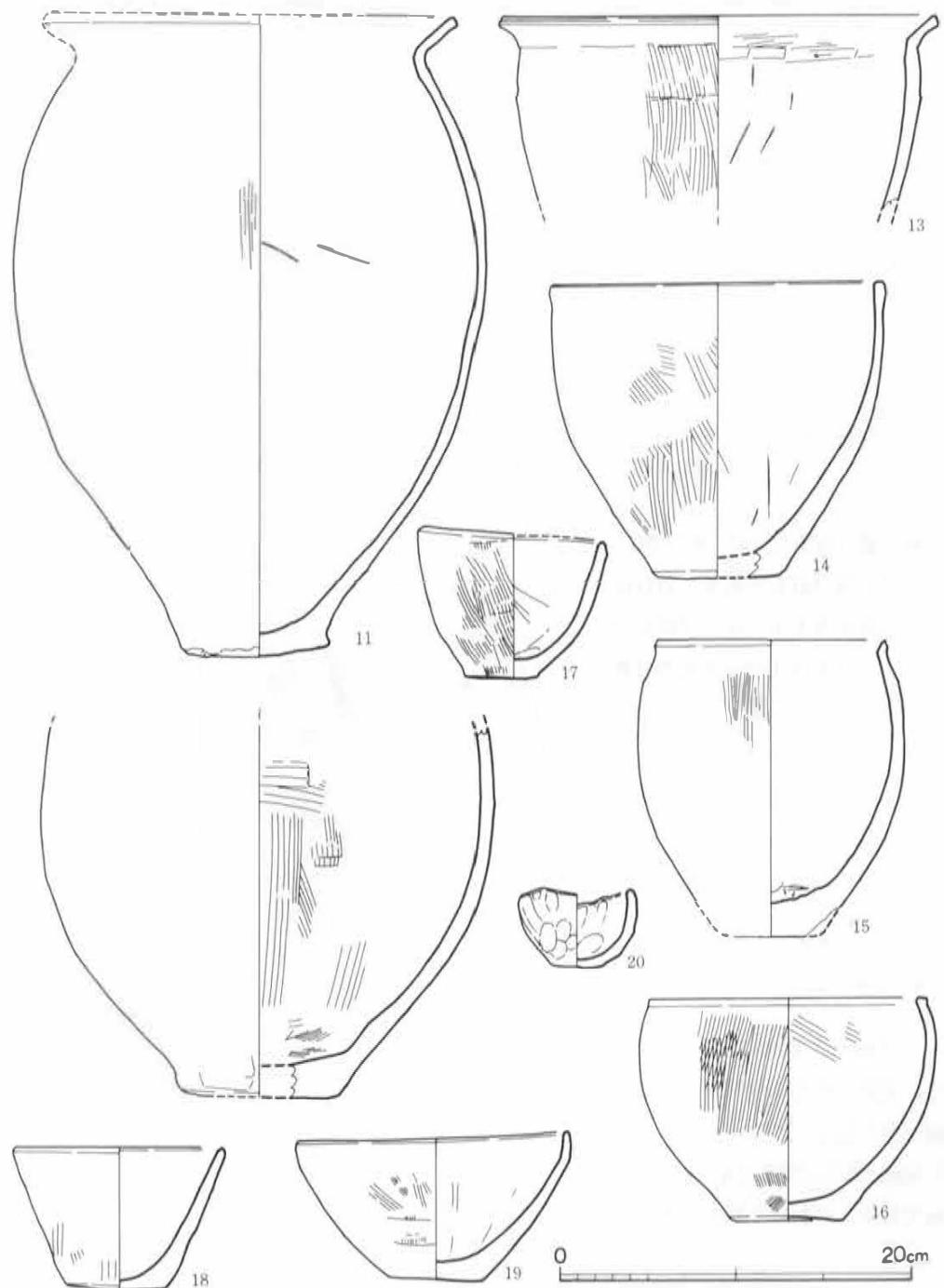
21は高杯で杯部上半を欠失する。脚部は短い、脚部としてはつくりが粗い、脚部径14.7cmを測る。

22・23はつくりの粗い器台である。調整は指ナデで仕上げる。両者とも粗い二次加熱を受けれる。前者は口径10.4cm、脚部径12.2cm、器高18.0cm、後者は口径11.1cm、脚部径12.0cm器高18.8cmを測る。

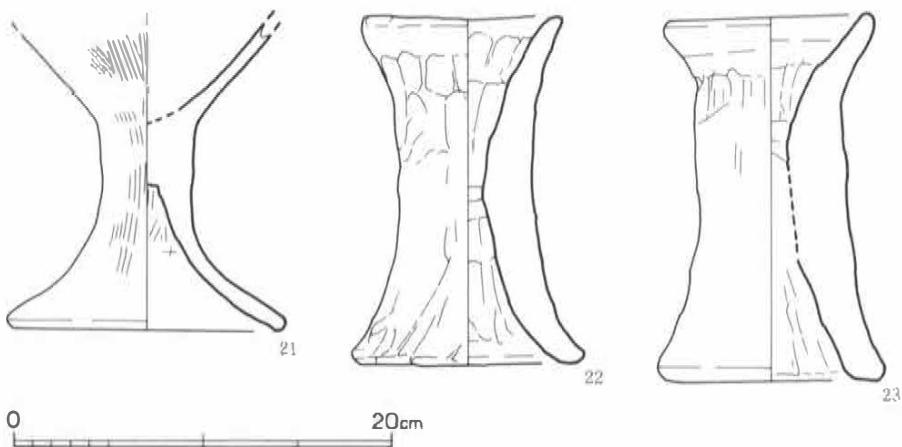
24は大型の壺で胴部としては口縁部が短い。肩部には三角凸沿を貼付する。最大径が胴上半にあり、下半は細まり径の小さな底部へ続く。調整は外側が粗いハケ、内面はナデで仕上げる。口径34.1cm、底径9.6cm、器高51.7cmを測る。



第167図 100号竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)



第168図 100号竪穴住居跡出土土器実測図その3 (1/4)



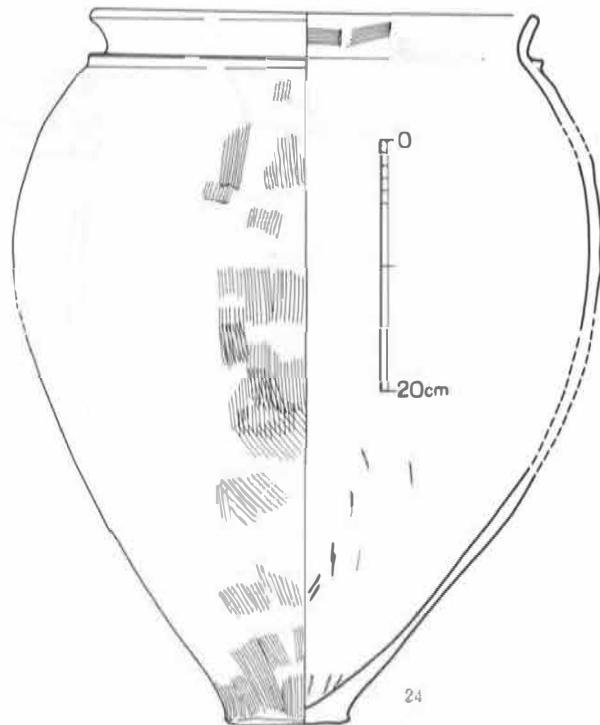
第169図 100号竪穴住居跡出土土器実測図その4(1/4)

石 器 (図版51・52 第171図)

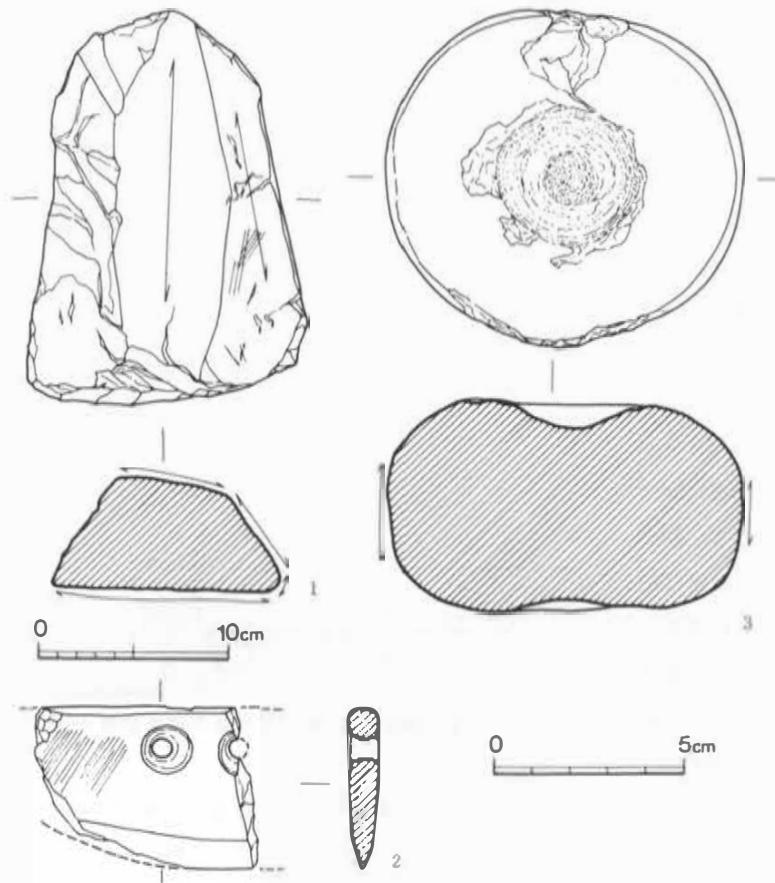
1は大型の砥石である。石材は花崗岩質砂岩で中～仕上げ砥石であろう。研面は4面で3面の自然面を残す。屋内土壤からの出土である。現長21.0cmを測る。

2は雲母片岩製の石庖丁片がある。孔は両方向から穿つが、片面は有段をなす。穿孔具の痕跡であろう。表裏面に粗い研痕が残る。外孔径1.30cm、内孔径7.5mmを測る。

3は敲石で周縁は摩耗している。表裏の中央部は凹面をなし、敲打痕が残る。凹面の径は3.0と2.8cmを測る。深さは6.0mm、3.0mmである。石材は花崗岩である。



第170図 100号竪穴住居跡出土土器実測図その5(1/6)



第171図 100号竪穴住居跡出土石器実測図(1/4、1/2)

101号竪穴住居跡 (図版10-(1)・22-(3) 第172図)

調査区の南側F-7・8区で検出した竪穴住居跡で、耕作による削平及び102号住居の重複などで約1/3が削平を受けている。平面プランは長方形であろう。遺存する北壁は3.50m、壁高は北側で20.0cmを測る。支柱穴は検出できていない。102号と接する床面上には焼痕の残る煙が1/2残存する。屋内土壤は102号住居の隅に僅かに痕跡が残り、両端には小ピットを配する。ピット間は55.0cmを測る。

遺物の出土状況は床面中央にドーナツ状に土器を配しており、単なる投棄ではなく既絶時での祭祀の痕跡と考えられる。

器種は甕・甌・鉢・ジョッキ形土器の他、砥石が1点ある。

出土遺物

土器(図版52 第173

・174・175図)

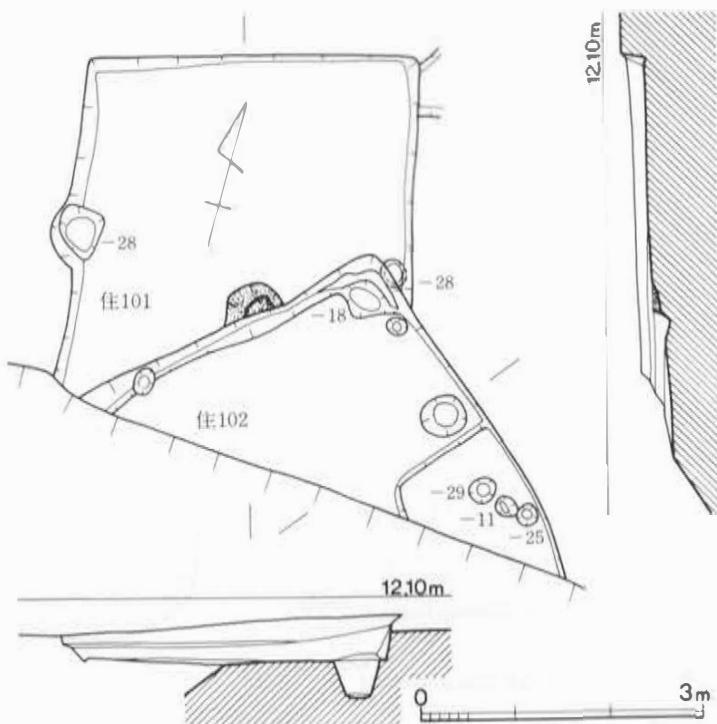
壺は1～5がある。1は袋状口縁壺の系譜を引く壺で肩折部の稜は不明瞭である。頸部は短く、肩部に三角凸帯を付す。口径17.2cmを測る。2は朝顔状に開く口縁を有し、肩部から胴部にかけては球形を呈する。胴中央部には刻み目を密に配する台形凸帯を貼付する。調整は粗いハケを多用する。復原口径19.2cmを測る。3は頸部上半を欠失

する。肩部から胴上半にかけては大きく張り扁平を呈する。器表面の摩耗が激しい。4は無頸壺で、口縁部は大きく内弯する。体部の張りは強く扁平球を呈する。胴部の凸帯は2と酷似する。調整は内外面ともハケを用いる。口径14.2cm、底径8.0cm、器高20.8cmを測る。5は壺の胴下半部で底径8.0cmを測る。1～5は埋土中からの出土である。

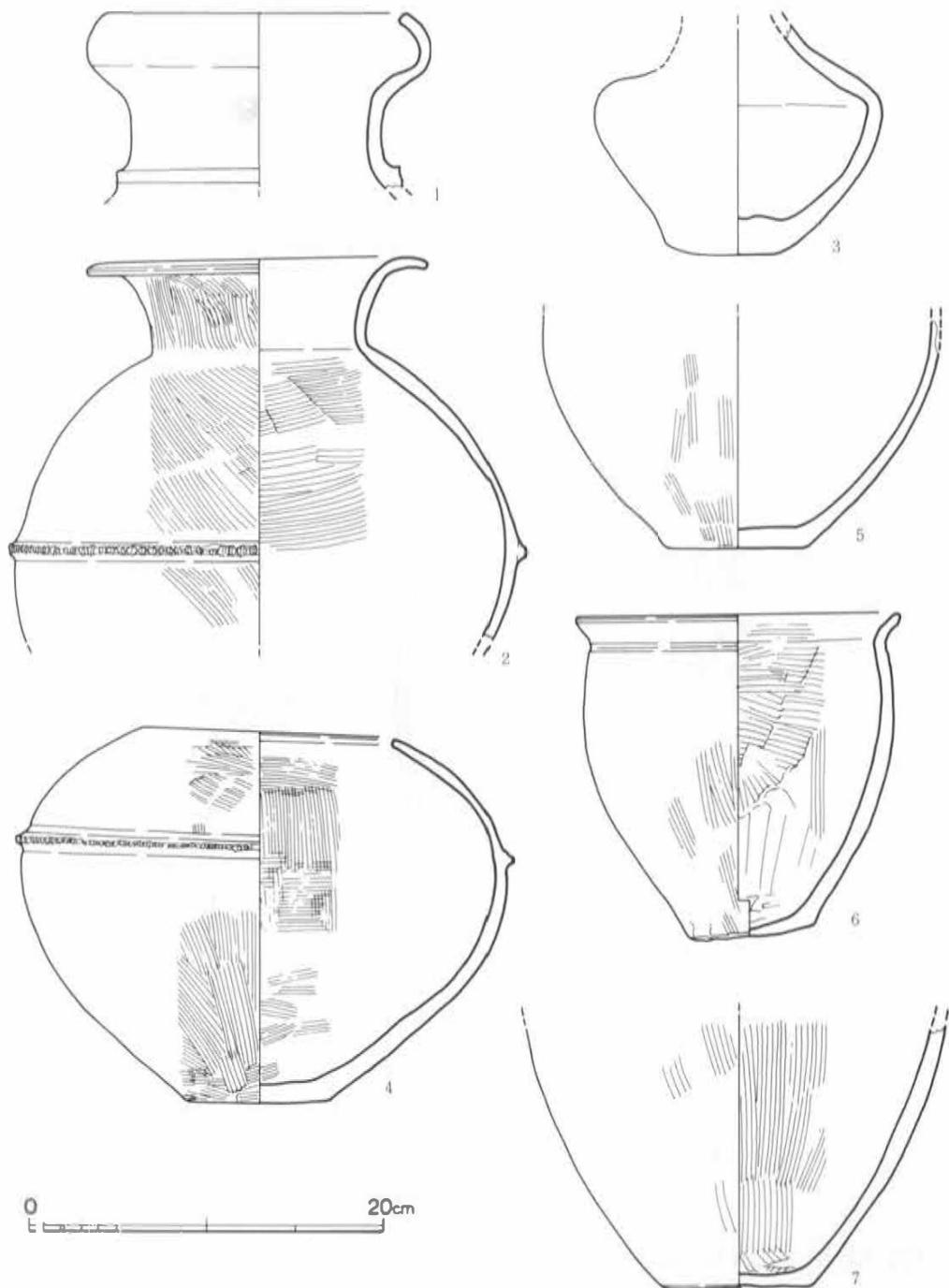
壺は6～9がある。6は小振の壺で最大径を口縁部に持つ。調整は粗いハケが主体で、内面下半は擦過痕を残す。外面は二次加熱を受ける。復原口径18.4cm、底径7.3cm、器高18.0cmを測る。床面からの出土である。7は外面に煤が付着する。底径8.6cm。床面からの出土。8は長めの口縁を有し、最大径を口縁に持つ。粗いハケとナデで仕上げる。外面は二次加熱を受け茶褐色の色調を呈する。復原口径26.0cm。埋土中からの出土である。9は頸部内側の稜が鮮明で体部は大きく張る。底部は体部に比してやや小さくつくる。口径24.2cm、底径8.3cm、器高37.2cmを測る。埋土中からの出土である。

10は鉢の破片で器壁を厚くつくる。調整はハケとナデで仕上げ、復原口径15.8cmを測る。

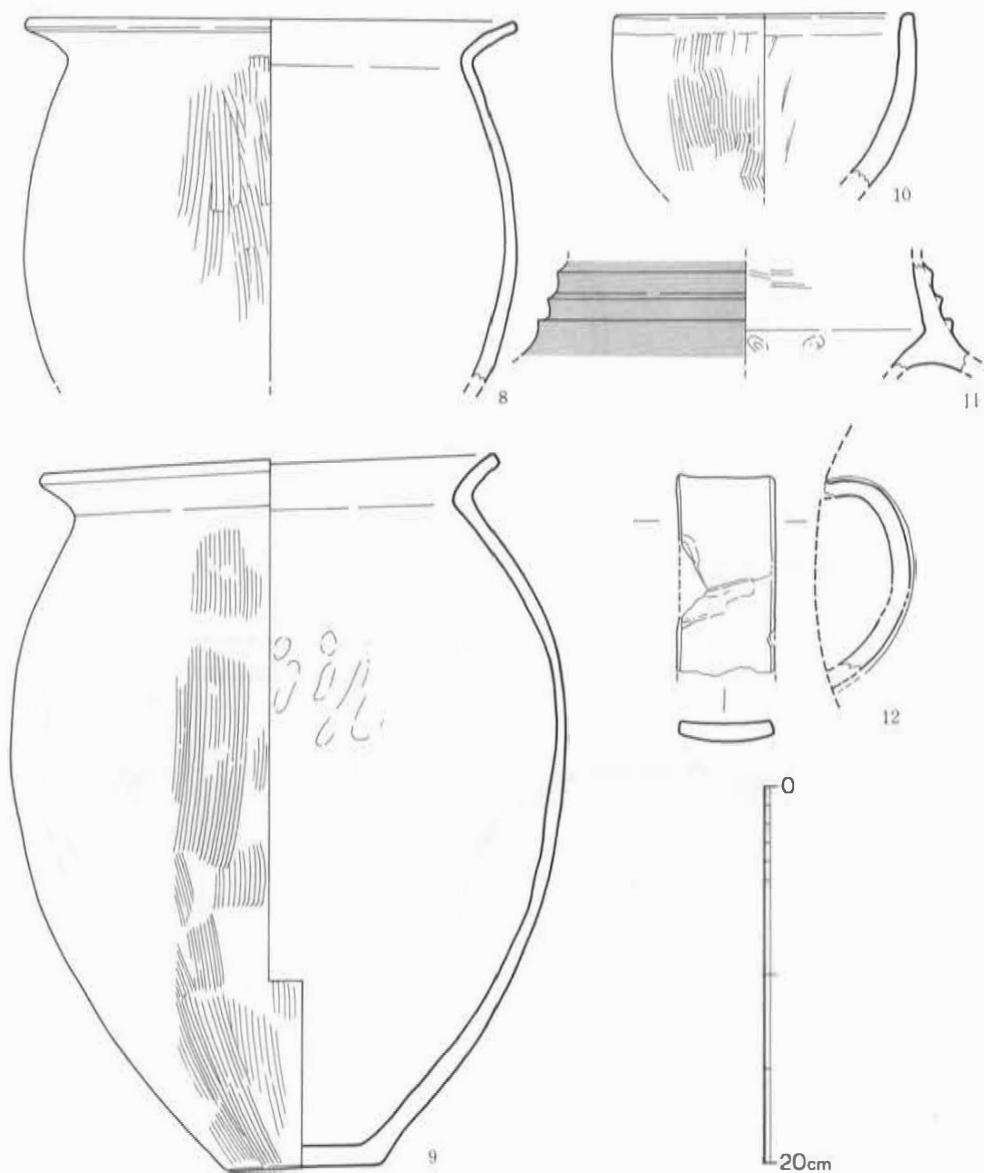
11は筒形器台の破片であるが、鍔の直上に3条の三角凸帯を貼付する。しかし、凸帯を鍔の直上に付す類例は未だ知らない。調整は外面が丹繕り磨研で、内面はナデる。埋土中からの出土である。



第172図 101号、102号竪穴住居跡実測図(1/80)



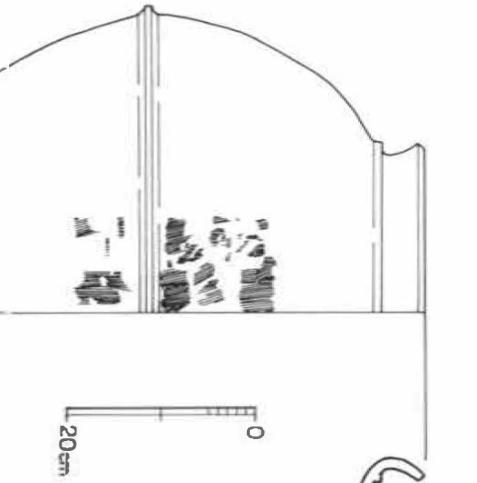
第173図 101号竪穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)



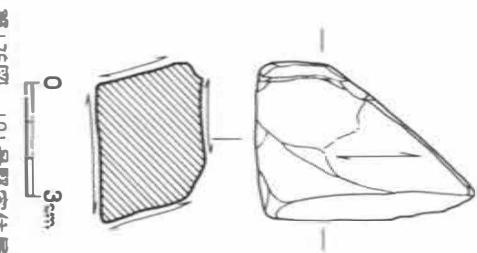
第174図 101号竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)

12は大型のジョッキ形土器の把手である。把手の幅5.0cmを測る。埋土中からの出土である。

13は大型の甕で、短い口縁下には三角凸帯を貼付し、球形の胴部には台形山帶を付す。調整は外面が細かいハケ、内面はナデで仕上げる。復原口径35.2cmを測る。102号住居から出土の破片と接合したが、101号住居に伴う土器であろう。



第175図 101号+102号竪穴住居跡出土土器実測図(1/8)



第176図 101号竪穴住居跡
出土石器実測図(1/2)

101号住居を引っているが、大半が耕作時の削れを受け遺存していない。住居内には焼土、炭化木に混ざり完形に近い土器が散乱しており、火災に遭遇していることが判る。北壁はいには細い、周溝が走り、東壁にはベット状遺構を設けている。その他詳細は不明。

102号竪穴住居跡(図版10-(1)・22-(3) 第172図)

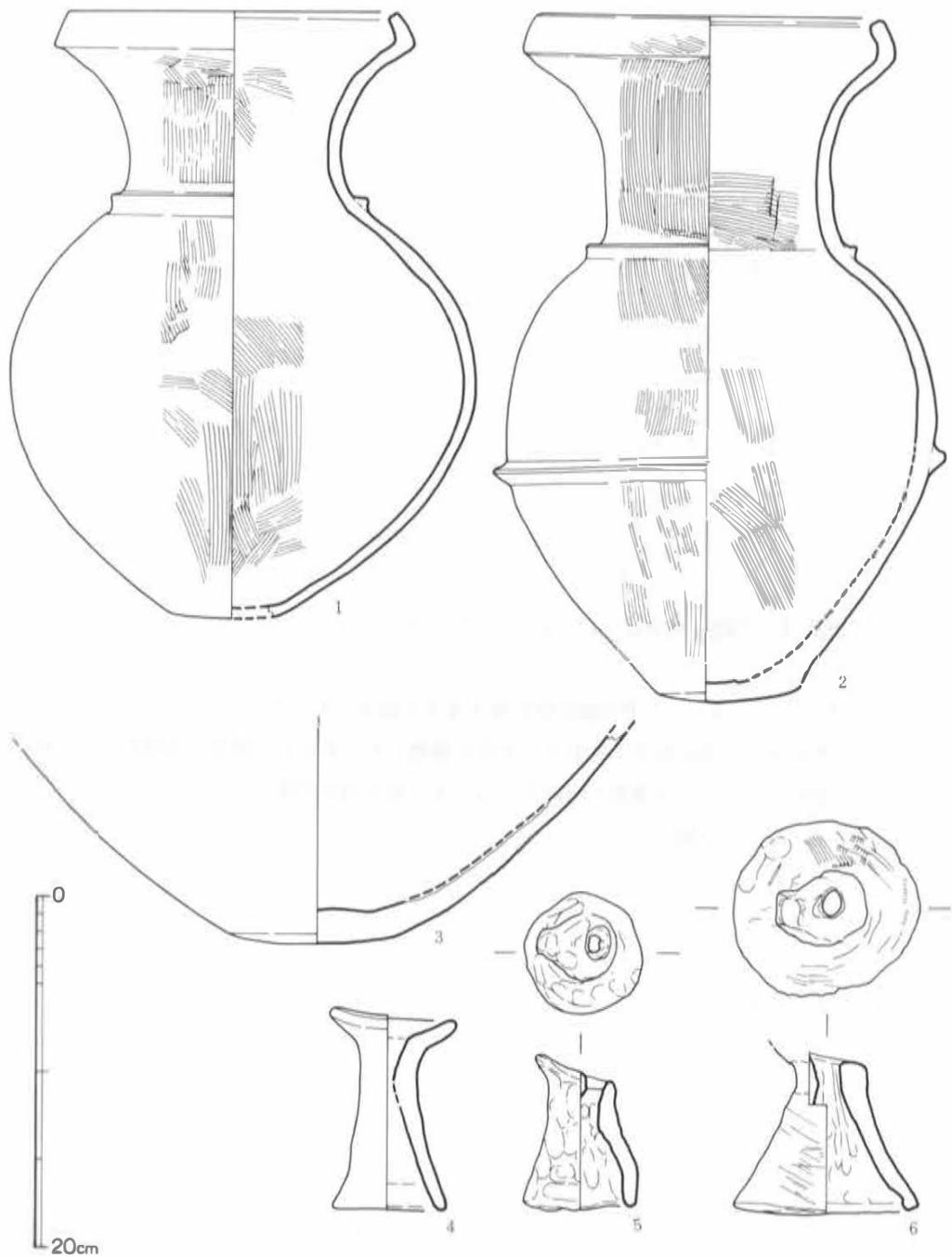
101号住居を引っているが、大半が耕作時の削れを受け遺存していない。住居内には焼土、炭化木に混ざり完形に近い土器が散乱しており、火災に遭遇していることが判る。北壁はいには細い、周溝が走り、東壁にはベット状遺構を設けている。その他詳細は不明。
出土遺物は漆・器台・支脚がある。

出 土 遺 物

一 器(図版53 第175・177図)

器は1～3がある。1・2とも円形状の口縁を有し、頸部は細くしまる。肩部には三角凸沿を付し、1は胴部が蝶状を呈する。底部を欠損しているが、小さな底窓が付くであろう。2は胴部に台形凹沿を貼付し、底部は不安定なレンズ状を呈する。両者の測定は内外面ともハケを多用する。内外面に二次加熱を受ける。1の口径8.6cm、器高34.3cm。2は口径9.6cm、底径8.2cm、器高39.1cmを測る。3は底窓なしで不安定な凸窓を呈する。二次加熱を受ける。すべて底面からの出土である。4は器台でやや歪なつくりである。測定はナデ、胎土は砂利を多く含み粗い。口径7.2cm、底径6.5cm、器高10.9cmを測る。底面からの出土である。

5・6は蝶形支脚で、それも天井部に孔を穿つ。前者は骨質ナデ、後者は川貝が認められる。两者とも二次加熱を受ける。底面からの出土。

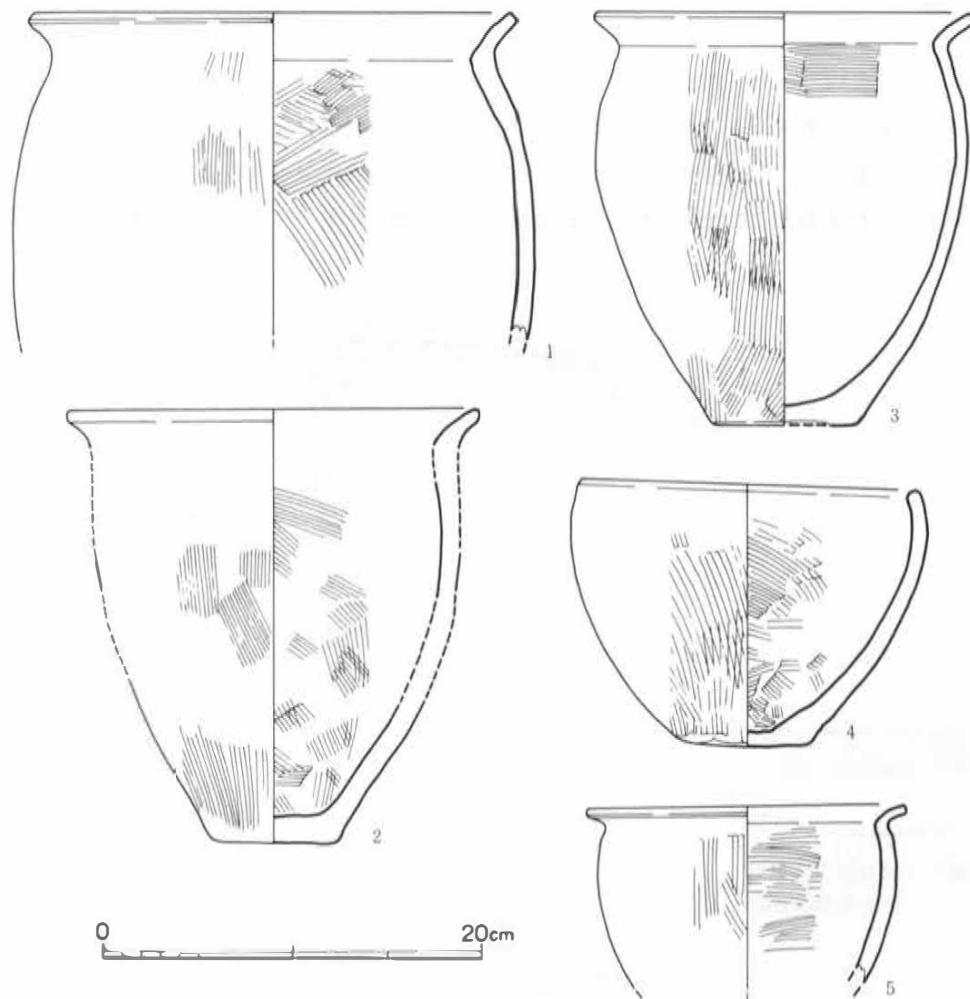


第177図 102号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

103号豎穴住居跡 (図版 6-(1)・18-(2) 第60図)

調査区の西端で検出した豎穴住居跡で、約1/2が土取りで削平されている。45号住居との重複があり、当該住居が新しい。平面形状、規模、支柱穴などは不明。壁高は遺存状況の良い箇所で40.0cmを測る。住居の南側隅には80号住居と同様長軸1.50cm、短軸1.00cm、深さ22.0cmの隅円長方形の屋内土壙が掘られ、底面には灰白色の粘土塊が置かれた状態で検出し、それに伴い砥石2個、土製勾玉が出土した。

出土遺物は上記の遺物の他に、甕、鉢がある。



第178図 103号豎穴住居跡出土土器実測図(1/4)

出土遺物

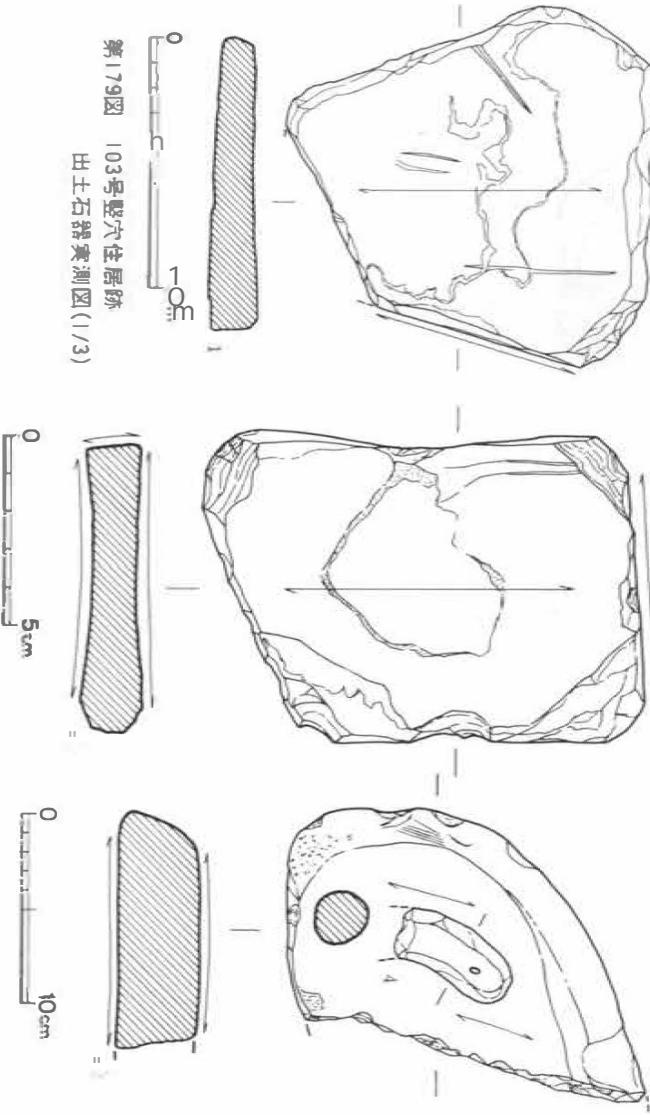
土器(図版53 第178図)

1～3・5は甕である。1・3は口縁を外反させ、2の外反度は緩い。調整はハケとナデで仕上げる。すべて三次川燃を受ける。1の口径25.8cm、2は21.7cm、底径6.5cm、器高22.8cm。3の口径20.1cm、底径7.9cm、器高21.7cmを測る。5は小甕の甕で、縁滑はなくしかも鋭く外反し、肩部は張る。復原口径17.0cmある。すべて堆土中からの出土である。

4は光形の鉢で、縁を内凹させる。調整はハケを多用する。三次川燃を受け強く外反する。口径17.8cm、底径7.3cm、高さ3.7cmを測る。堆土中からの出土。

石器(図版54 第179・180図)

1～3は砾石である。1・2は雲母片岩製の砾石で、両者とも石材の質がよく荒砥として使用されたものであろう。1の研磨面2面、2は5面を数える。層内土塊からの出土。3は花崗岩質砂岩の砾石で、作業台として使用された可能性がある。全面がいびきとなる。層内土塊内のからの出土である。



第179図 103号竪穴住居跡
出土石器実測図(1/3)

第180図 103号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2、1/4)

土製品（第180図）

4の土製勾玉がある。尾部を欠失する。胎土は粗く、黒雲母を多く含む。屋内土壙からの出土である。

104号堅穴住居跡（図版5-(2) 第51図）

39号、41号住居と重複した堅穴住居であるが、41号住居との新旧は明らかでない。壁面は農道と耕作により大半が削平を受ける。平面形状は長方形を呈す。支柱は2本で、柱間は2.80mを測る。柱間に径55.0cmの炉を設けている。壁沿いの一部には周溝が廻るが、若干掘過ぎの感があり残っていない。柱間軸での住居の方位はN72°Eを示す。

出土遺物は土器の図示可能なものはなく、石製紡錘車がある。

出土遺物

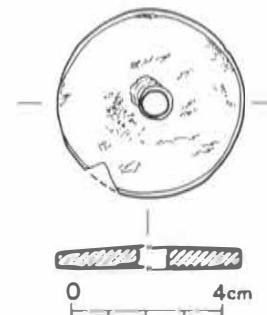
石 器（図版54 第181図）

縞泥片岩製の紡錘車がある。表面とも丁寧に研磨している。中央には7mmの孔を穿つ。径は4.9cm、厚さ5.5mmを測る。重さ24gである。

105号堅穴住居跡（図版4-(1)・10-(1) 第39図）

E-7区で検出した小型の堅穴住居で、古墳時代の29号住居と完全に重複していた。平面形状は長方形を呈する。現存での規模は長壁が4.00m・4.20m、短壁は3.20m・3.00mを測る。床面積は12.49m²である。支柱は2本で、柱間は1.90mである。柱間の南寄りには梢円形の炉を設けているが、新しい柱穴が掘られている。長壁の中央には円形状の屋内土壙が付設されている。北側には細い周溝が走っており、本来ベットが在った可能性が強い。

出土遺物は少なく壺が1点ある。

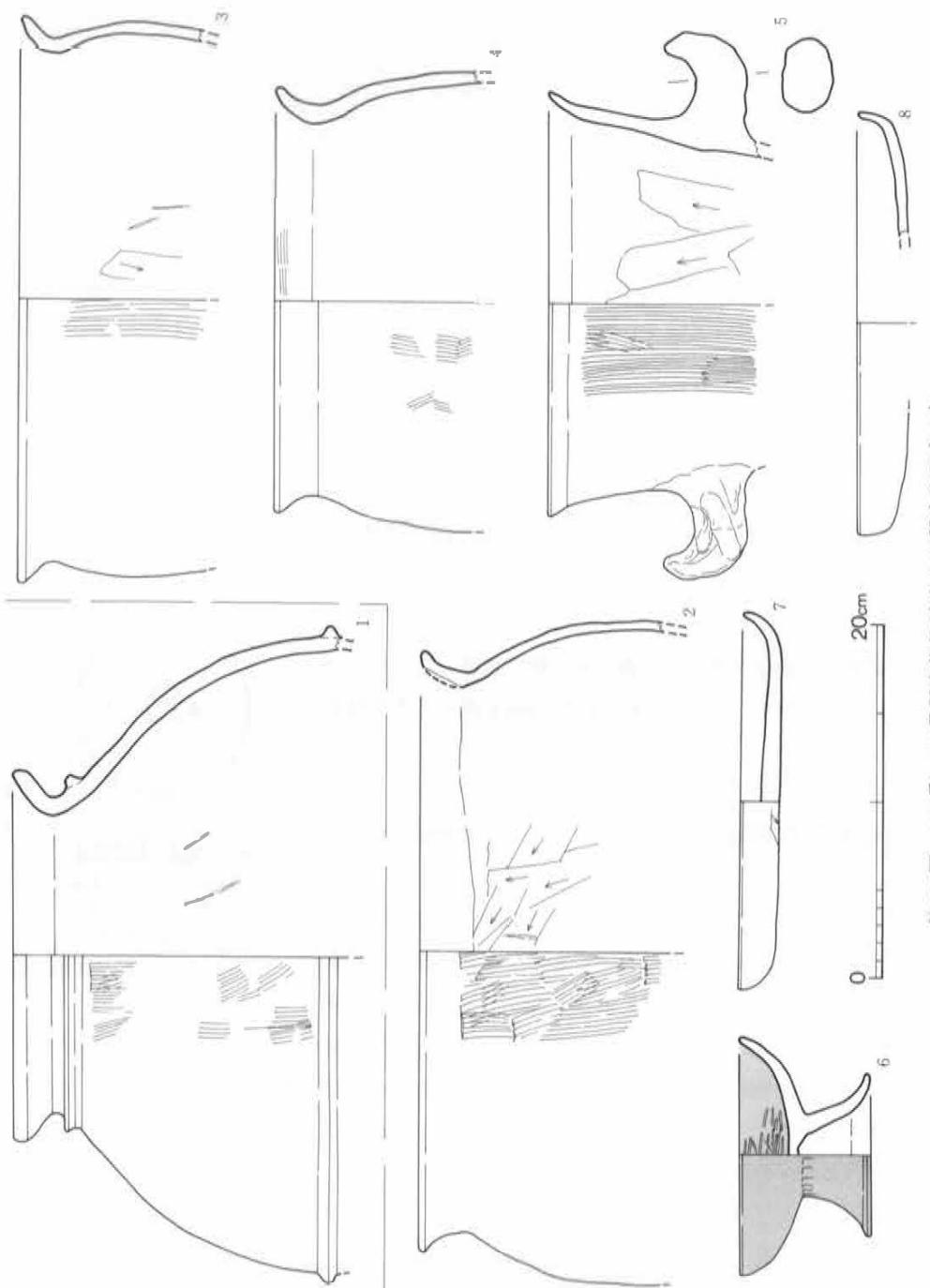


第181図 104号堅穴住居跡
出土石器実測図(1/2)

出土遺物

土 器（第182図）

1の壺がある。口縁部は「く」字状に外反させ、口縁直下には台形凸帯を付す。肩部から胴部



第182図 105号、106号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

にかけての張りは大きく、胴中央部には三角凸帯を貼付する。外面は二次加熱を受け煤けている。復原口径20.1cmを測る。

106号堅穴住居跡出土遺物

土 器 (図版54 第182図)

2～4は甕である。口縁部は外反させるものの頸部内側の稜は明瞭でない。調整は外面が粗いハケ、内面は箒で削る。すべて二次加熱を受ける。2の口径34.0cm、3の口径32.0cm、4は口径24.0cmを測る。2・3はカマド傍の土壤内からの出土である。

5は把手付の櫃で、口縁部は僅かに外反させる。胴部は直線的で中央に扁平な把手をつける。調整は粗いハケと箒張りで仕上げる。二次加熱を受け濃い茶褐色に変色する。口径24.0cmを測る。

6は精製された高杯で、浅い杯部と低い脚部を有す。杯部・脚部とも箒で磨く。表面に丹を塗布していると思われるが、二次加熱を受けくすんだ茶褐色を呈する。口径13.4cm、裾部径9.2cm、器高7.4cmを測る。

7・8は皿であるが、形状から11世紀頃の所産と考えられ混入であろう。7は復原口径21.4cm、器高2.25cm。8は復原口径24.0cmを測る。

107号堅穴住居跡出土遺物

石 器 (図版54 第183図)

砂岩製の砥石片がある。現存での研面は3面である。中砥であろう。現長9.2cmを測る。

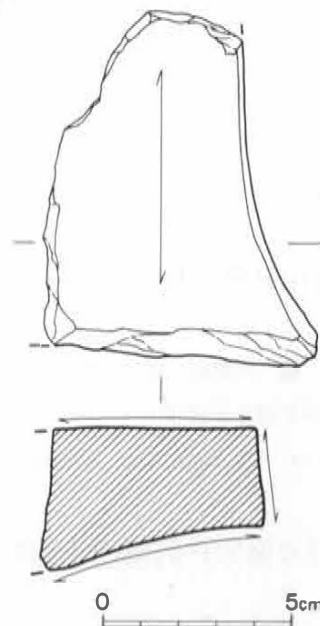
111号堅穴住居跡出土遺物

土 器 (図版54 第184図)

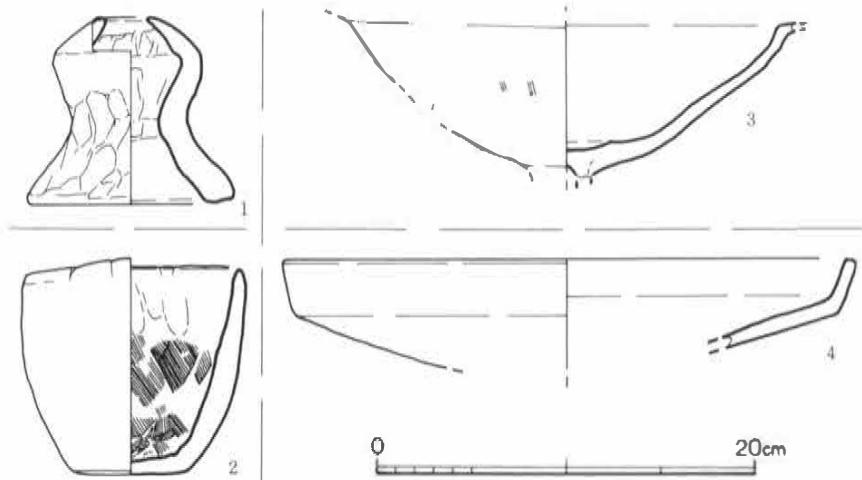
1の支脚がある。天井部には径2.0cmの孔を穿つ。全体に二次加熱を受け淡く赤変する。調整は内外面ともナデている。裾部径11.0cm、器高9.8cmを測る。

112号堅穴住居跡出土遺物

土 器 (図版54 第181図)



第183図 107号堅穴住居跡
出土石器実測図(1/2)



第184図 111号、112号、115号、117号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

2は鉢で完形品である。口縁から胸部にかけての張りは鈍い。調整は外面がナデ、内面には細いハケが残る。全面に二次加熱を受け黒く変色する。口径10.7cm、底径6.1cm、器高11.25cmを測る。

115号竪穴住居跡出土遺物

土 器 (第184図)

3の高杯の杯部がある。口縁を欠失しているが、外側に屈折して平坦をなすであろう。胸部の張りは少ない。調整は、二次加熱を受け摩耗しているが、ハケとナデであろう。

116号竪穴住居跡出土遺物

鉄 器 (図版54 第185図)

鉋の基部片が床面から出土している。刃部は現存していない。両端は折曲げている。現存長5.5cm、基部幅2.5cm、厚さ2.5mmを測る。



117号竪穴住居跡出土遺物

第185図 116号竪穴住居跡
出土鉄器実測図(1/2)

土 器 (図版54 第184図)

4は高杯の杯部片である。胸部は直線的につくり、上方に屈折し口縁につづく。調整は摩耗し

不明。復原口径30.4cmを測る。

119号豊穴住居跡 (図版8-(2)・9-(1)・22-(2) 第143図)

当該住居は4軒の重複があり、90号住居に切られ、86号・100号住居を切った小型の住居である。平面形態は長方形を呈し、規模は南・北壁で4.40m・4.20m、東・西壁が3.30m・3.50m、壁高37.0cmを測る。床面積は14.21m²である。埋土中には焼土及び炭化材が目立ち、床面からも検出されたことから焼失住居であろう。支柱は2本で、ベット際に掘込んでいる。支柱間は1.70mを測る。柱間軸から北側にずれた箇所には円形の炉を設けている。屋内土壌は南壁中央傍に掘られ、内部に2本のピットが見られるが、その内の1本は100号住居の支柱穴である。両短壁沿いには幅1.00mの削り出しのベットを付せる。柱間軸の方位はN84°Wを示す。

出土遺物は壺・甕・鉢・高杯・杯の他、砥石が1点ある。

出土遺物

土器 (図版54・55 第186・187図)

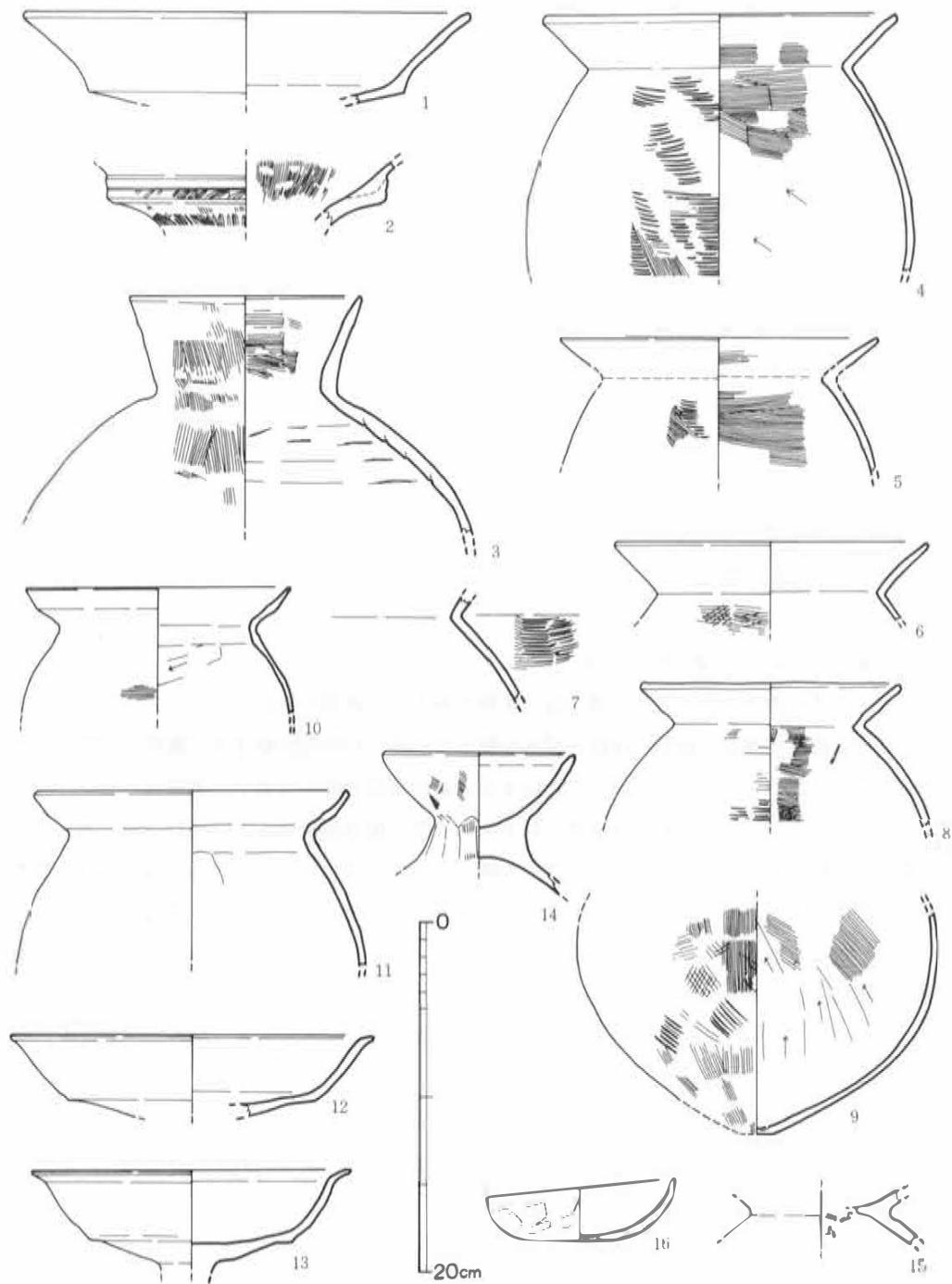
壺は1～3がある。1・2は所謂二重口縁壺である。器表面が風化している。復原口径25.6cmを測る。2は擬口縁部に極細の沈線と刻みを配している。内外面に暗文状の笠磨きが残る。両者は精製された製品である。3は僅かに外反する口縁に肩部の張りは強い。調整は外面がハケ、現存での内面はナデており笠削りは認められず、粘土帶の接合面が残る。口径13.2cmである。

甕は4～11がある。4～9は所謂庄内式の甕で、「く」字状に鋭く外反する口縁を有す。頸部内面の稜線は明瞭である。調整は外面が細かい叩キ、内面は上半が横ハケ、下半は笠で削る。色調は橙色と茶褐色とがある。すべてに煤が付着する。4の復原口径20.2cm、5は18.2cm、6は18.0cm、8は15.0cmを測る。9は径2.0cmの小さな底部を有す。外面はハケと叩キが残る。器壁は薄い。10・11は口縁が内湾する布留式の甕で、内面頸部の一段下部から笠で削る。色調は灰白色を呈する。10の口径15.0cm、11は18.0cmを測る。

12～15は高杯であるが、12・13は前記の土器に伴う高杯ではなく、5世紀前葉頃のものである。14・15は精製された小型の高杯である。14の杯部は小さく浅い。調整は笠で磨く。脚部は大きく開くと思われる。

16は杯で外面を笠で削り、内面はナデる。口径10.8cm、器高3.0cmを測る。

17は在地系の鉢の破片で、器表面には粗い叩き痕を残す。内面はナデで仕上げる。復原口径27.2cmを測る。

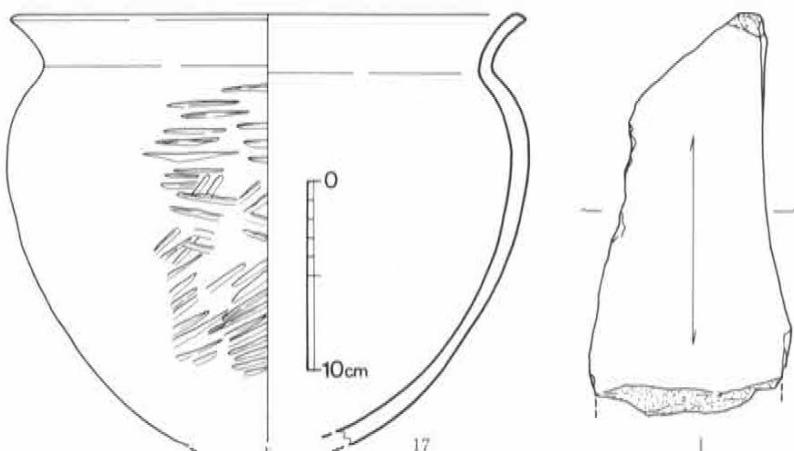


第186図 I-19号竪穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)

石 器 (図版)

55 第188図

花崗岩質砂岩の仕上げ砥石がある。灰白色の色調を持つ。加熱を受け淡く赤変する。表面(図示した面)は使用頻度が高く凹面をなす。屋内土壌からの出土である。



第187図 119号竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)

120号竪穴住居跡 (第142図)

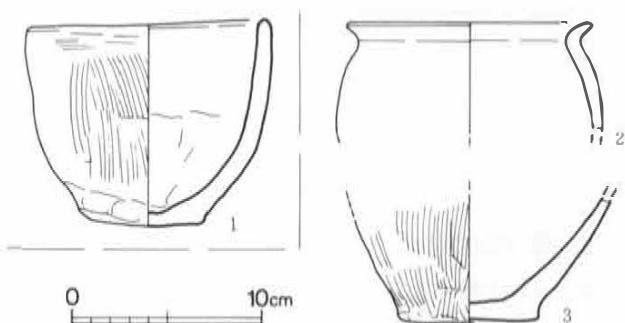
I - 1区で85号住居に切られた竪穴住居であるが、大半が調査区外のため実体は不明である。壁高は30.0cmを測り、南壁沿いには短い周溝が走る。

出土遺物は少なく、小型の鉢がある。

出 土 遺 物

土 器 (図版55 第189図)

Iの鉢がある。完形品で粗いハケとナデで仕上げる。口径I 2.8cm、底径6.5cm、器高10.6cmを測る。

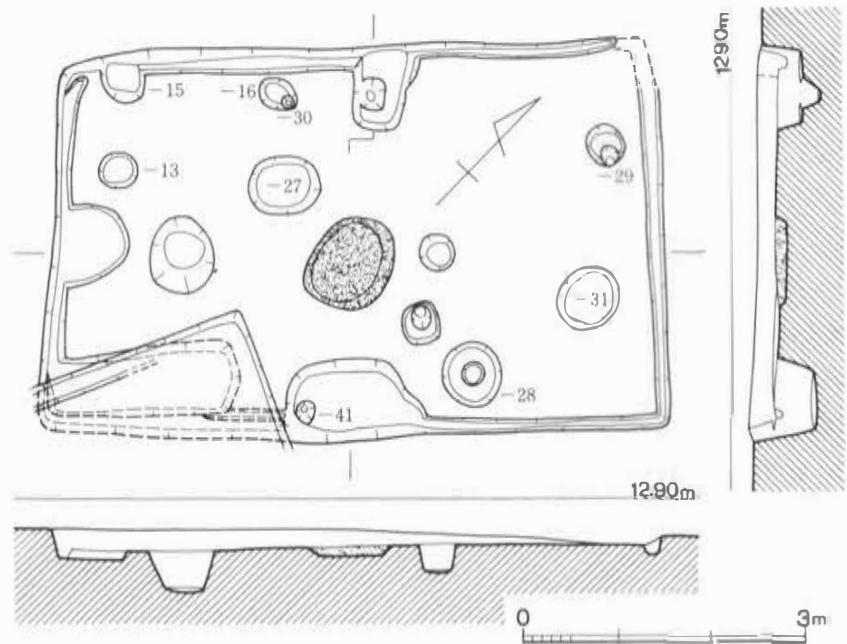


121号竪穴住居跡
(図版11-(1), 22-(4) 第190図)

122号、126号竪穴住居と重複



第189図 120号、121号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



第190図 I-21号竪穴住居跡実測図(1/80)

しており、122号より新しく、126号より古い住居跡である。平面プランは長方形を呈する。規模は長壁が6.62m、短壁は3.85m・4.14m、壁高は遺存状態の良好な箇所で20.0cmの前後を測る。支柱は住居形態のから2本と考えられるが、適正配置がない。床面中央には浅い炉を設けている。南壁際には1.30m×0.85m、深さ44.0cmの梢円形の屋内土壙を付設しており、両端に小ピットを掘っているが、一方は痕跡が残る程度である。対峙する箇所にも2段掘のピットが在るが用途は不明である。壁沿いには周溝を廻らし、屋内土壙に繋がる。

出土遺物は小型の甕、鉢がある。

出土遺物

土器 (第189図)

2・3は小型の甕で、2の口縁は短く「く」字状に外反させる。復原口径13.1cm。3は底部片で粗いハケとナデで仕上げる。底径7.4cmを測る。

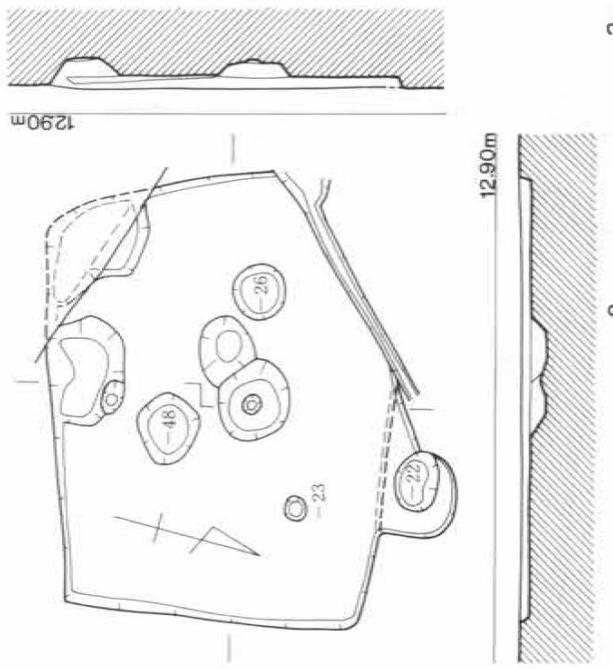
4は口縁部を内削する鉢で、口縁部は肥厚させる。表面は剝落しているが、丹か化粧土を塗布した痕跡が残る。復原口径21.6cm。

122号竪穴住居跡

(図版11-(1)・22-(4)・23-

(1) 第191図)

K-2・3段で検出した竪穴住居跡で、2軒の住居に切り離されている。平面プランは長方形であろう。支柱穴は不明で、屋内土塊は南壁際に付設する。その他詳細は不明で、出土遺物も皆無に近い。

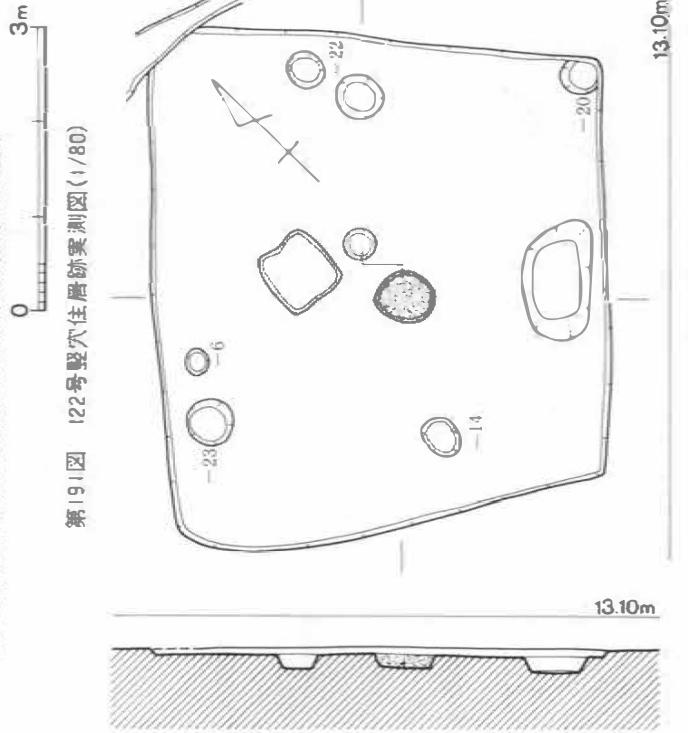


123号竪穴住居跡

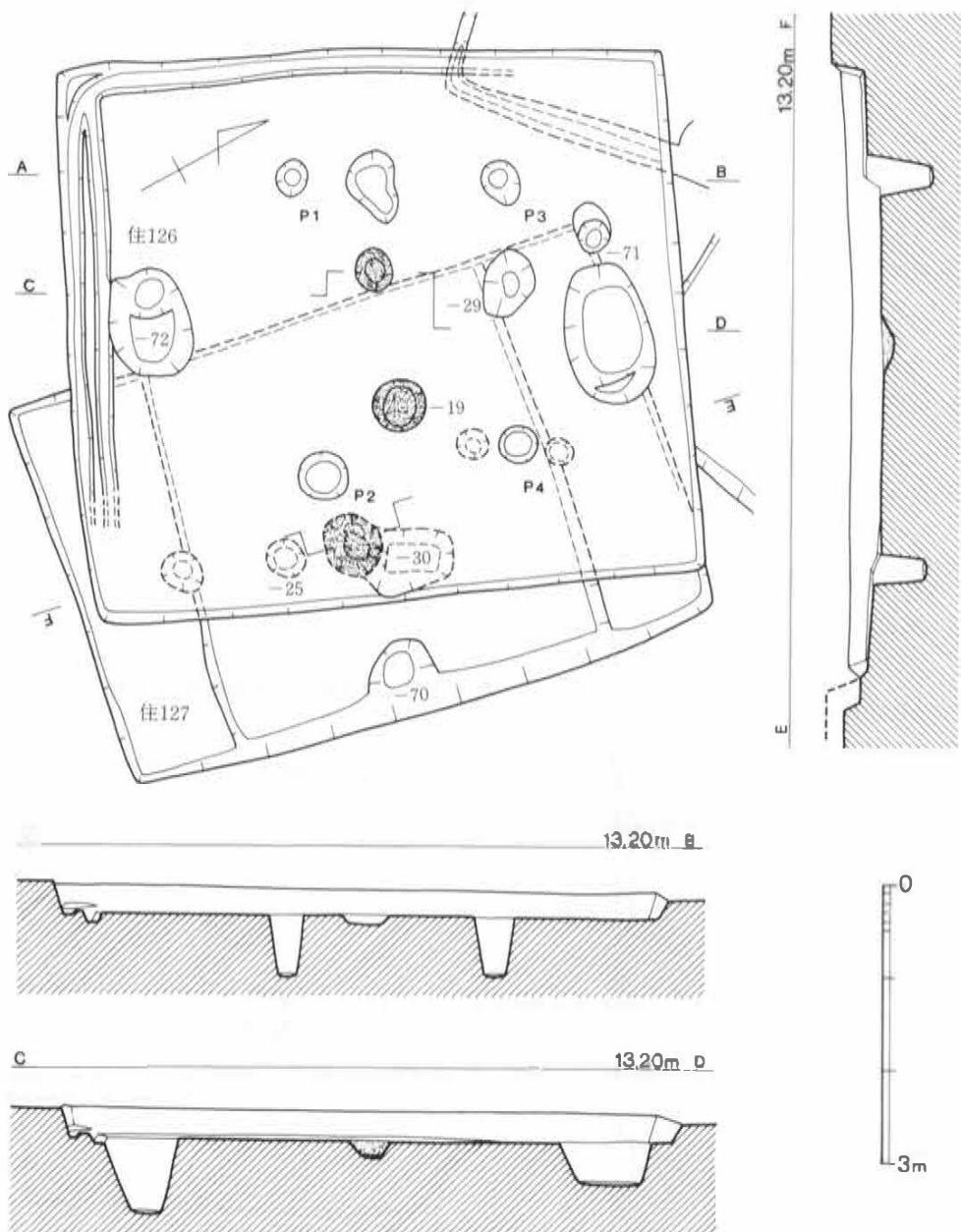
(第192図)

127号に住居の一部を切り離した極めて遺存状況の悪い竪穴住居で、壁高5.00cmを測る。平面形状は布な方形を呈し、北西・南東壁が5.30m・4.40m、北東・南西壁が4.75m・4.50mである。床面積は2.87m²を測る。支柱穴は規則性がなく、図示した柱穴には支柱とはなり得ない。南北壁側には長軸1.20m、短軸70.0cmの楕円形の屋内土塊を握っている。

第191図 122号竪穴住居跡実測図(1/80)



第192図 123号竪穴住居跡実測図(1/80)



第193図 I26号、I27号竪穴住居跡実測図(1/80)

出土遺物は皆焼である。

126号堅穴住居跡 (図版11-(1)・23-(2) 第193圖)

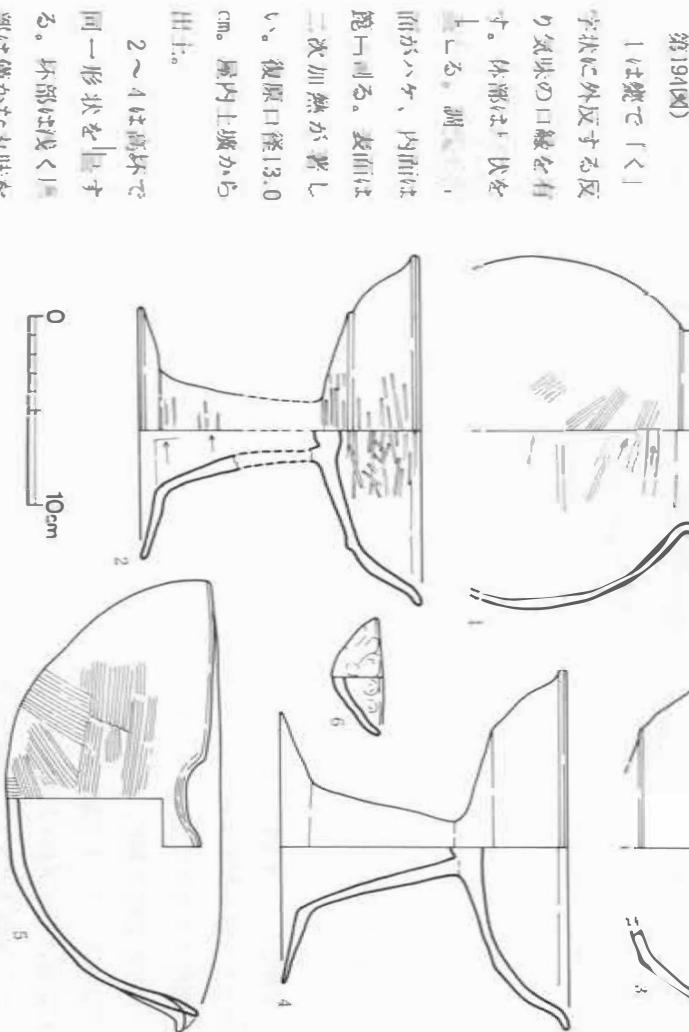
3軒の軒庇のある堅穴住居で重複するすべての住居よりは新しい。平面プランは長方形に近い、形状を示し、規模は南、北壁5.90m・5.60m、東・西壁6.60m・6.55m、高さ30.0cm前後を測る。床面積は36.49m²である。支柱は4本と思われるが、断面A-Bに図示した柱穴と対称的にP₁・P₂が配されておらず、やや歪である。柱間はP₁-P₂が3.30m、P₁-P₃が2.20m、P₂-P₃が2.0m、P₃-P₄が2.90mを測る。4本の柱間空間内には2箇所に火を掘っており、南北壁際のピットを2本の支柱と考え、南壁沿いの2本の周溝などを考慮すれば、住居の建直しを計ったとも受け取られ、2本から4本へ変える時期の所産とも思える。

出土遺物は壺・高杯・片口土器の他、砥石が2点ある。

出 土 遺 物

土 器 (図版55)

第194圖



第194圖 126号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)

1は縦で「く」字状に外反する反り気味の口縫を有す。体部はL字形を呈する。調

前がハケ、内面は鏡面で、表面は二次加熱が著しい。復原口徑13.0cm。屋内上塙から出土。

2～4は高杯で同一形状を呈する。杯部は浅く、部は僅かな丸味を有す。口縫當は若

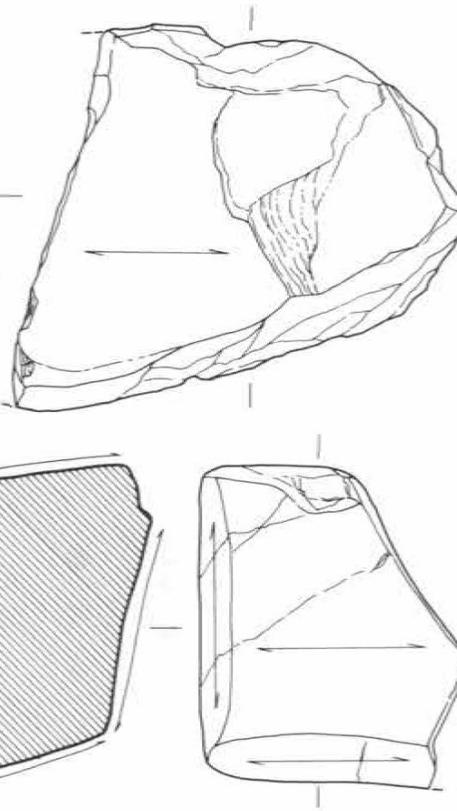
向外反させる。縁部はスマートで輪郭を強く脚する。2 のみ確認でき、鏽磨きで仕上げる。すべて焼製された陶器である。2 の口径18.4cm、輪郭径13.2cm、復原器高15.0cm。3 は復原口徑19.0cm。4 は復原口径19.1cm、輪郭径14.4cm、器高15.0cmを測る。

5 は片口土器で全体がやや歪である。輪郭は外側がハケ、内側は鈍削りの後ナードる。器壁は薄くつくる。器内面には部分的に小さな焼成物が付着する。口径23.9cm、器高1.2cmを測る。

石 器(図版55
第195図)

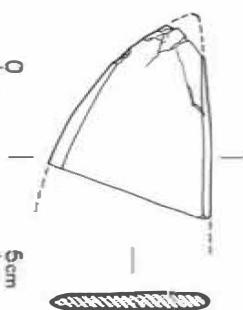
1・2 の砥石がある。1 は鱗片岩製の砥石で、塊の研削面は一面のみである。加熱を受け剥離が激しく全体が赤変する。

2 は花崗岩質砂岩製の仕上げ砥石である。加熱され淡黒色に変色している。表面は6面である。



第195図 126号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)

127号竪穴住居跡(図版11-(1)・23-(2) 第193図)



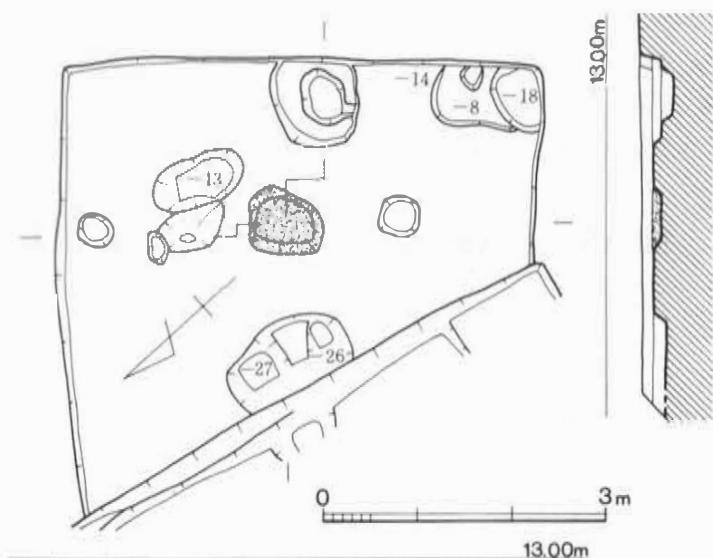
0 5cm

126号と広い範囲で重複した竪穴住居跡であるが、126号住居よりも深く掘削されていたため、床面は遺存していた。平面形態は長方形を呈し、規模は南・北壁4.20m・4.40m、東・西壁6.50mを測る。床面積は27.95m²である。支柱は2本で2本ともベット上端に掘込んでいる。柱間は1.20mを測り、主軸方位はN 11° Eを示す。柱間から東にややずれて円形の炉を設けている。南・北壁沿いには幅1.20m前後のベットを削り出す。出土遺物は少なく、少數の土器片と山地土がある。

出土遺跡

石器(第196図)

片岩質の石庖丁片がある。刃部は表面の使用痕が著しく研面の稜が不明瞭で丸味を有し、裏面は研面が鮮明である。表面はよく研磨され平滑となる。背部は丸くつくる。損失部分は割れ口が刃物で切ったような鋭さである。



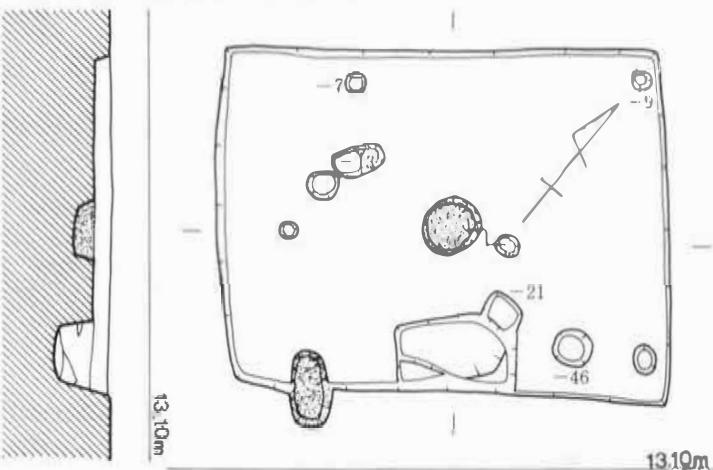
128号竪穴住居跡(図版11-(1)・(2)・23-(2) 第197図)

K-3区で検出した竪穴住居で127号住居に切られている。南壁は5.05m、壁高10.0cm強を測る。支柱は2本であるが、東側の柱穴は浅い。中央には浅い爐を掘っている。南壁際には2段掘りの屋内土壙を付設する。

出土遺物は殆どない。



第197図 128号竪穴住居跡実測図(1/80)



第198図 129号竪穴住居跡実測図(1/80)

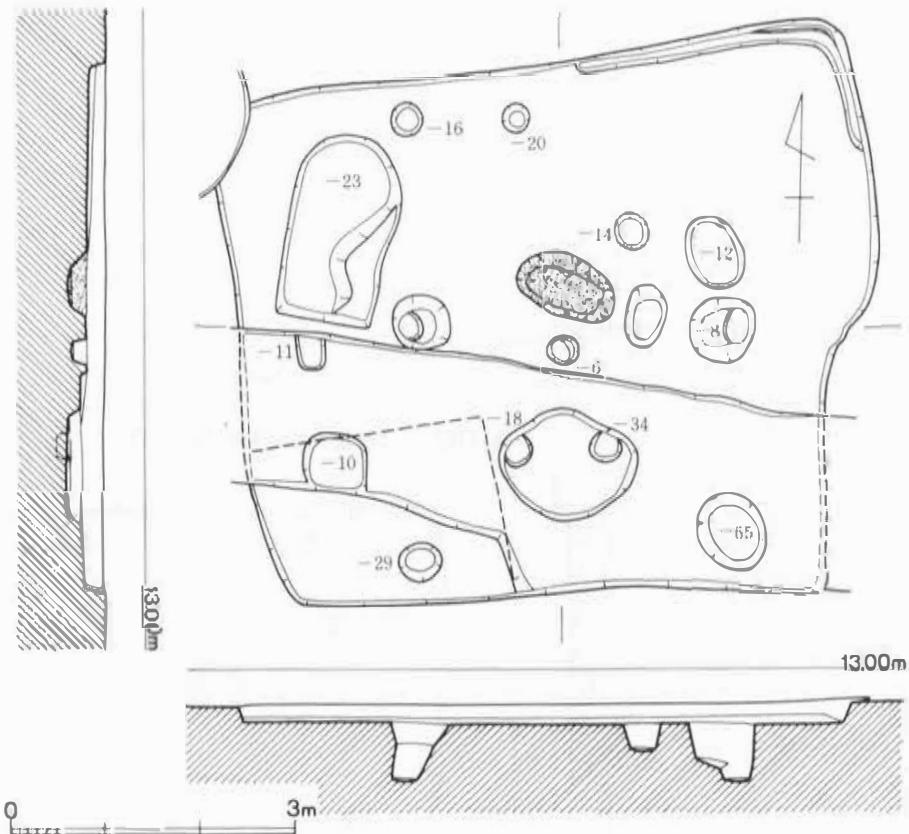
129号竪穴住居跡(図版23-(3) 第198図)

130号住居の西側で検出した竪穴住居跡で、平面形状は長方形を呈する。規模は南・北壁4.60m、東、西壁3.50m、3.75m、壁高20.0cm弱である。床面積は14.97m²を測る。支柱は検出できて

いない。床面中央部には円形のがれを掘込む。屋内土塀は南壁際に設け、長軸1.28m、短軸7.60cm、深さ40.0cmを測る。さらに、南壁には突出した形で精円形のピットがあり、中から灰白色の粘土が出土している。当該住居に伴うから香かは不明。

出土遺物は図示不可能な土器片が少量ある。

130号竪穴住居跡 (第199図)



第199図 130号竪穴住居跡実測図(1/80)

L-4区で検出した竪穴住居であるが、住居内の南側に農道が東西に走り、部分的に削平を受けている。平面形態は直角四辺形を呈しているが、削平された部分はベットを付設していた可能性がある。現存での規模は南・北壁が5.70m・6.60m、東・西壁が5.30m・6.00m、檻高20.0cmを測る。床面積は34.92m²を測り大型である。支柱は2本で、柱間は3.50mである。柱間軸から北側にずれて不整形のがれを設けている。屋内土塀は南壁のやや内側に付設し、両端に2本のピットを配する。ピット間は90.0cmである。柱間軸の方位はN 88° Eを示す。

出土遺物は甕の他、石庖丁、石製円盤、土製勾玉がある。

出土遺物

土 器 (図版56 第200図)

「く」字状に鈍く外反する口縁を有す甕で、体部の張りは少ない。頸部内側の稜も不鮮明である。調整は粗いハケと内面に擦過痕が残る。復原口径16.8cm、底径6.1cm、器高21.8cmを測る。

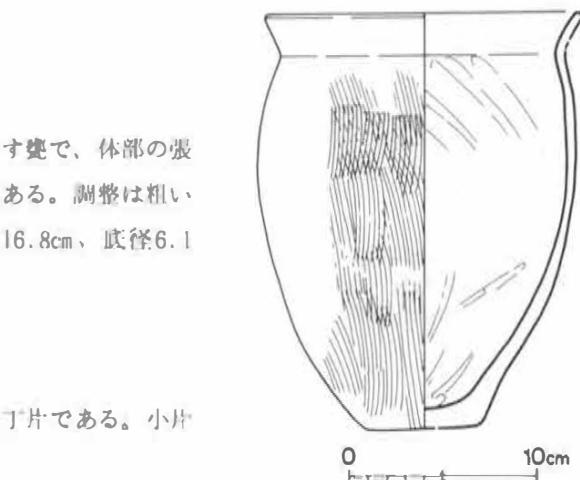
石 器 (第201図)

1は雲母片岩の石材を使用した石庖丁片である。小片であるため全容は不明である。

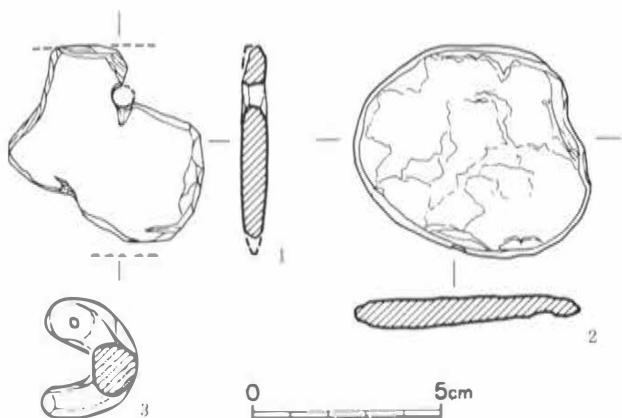
2は雲母片岩製の円盤で、表面が風化しそうつく。径6.2cm×5.6cmを測り、47.7gを計る。

土製品 (図版56 第201図)

3は埋土中から出土した土製勾玉であるが、当該住居に伴うか否かは不明。体部断面はやや扁平で、表面が剥落している。頭部1.2cm、尾部9.0mm、長さ3.2cmを測る。



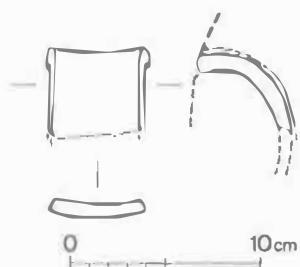
第200図 I30号竪穴住居跡
出土土器実測図(1/4)



第201図 I30号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2)

M-4区で出土した小型の竪穴住居でI40号住居に一部を切られている。平面プランは長方形を呈し、規模は南・北壁で3.30m、東・西壁で3.80m、壁高10.0cmと浅い。復原床面積は12.84m²である。支柱は2本で、柱間は1.50mを測る。柱間に径70.0cmの2段掘りの炉を設ける。東壁際には2段掘りの屋内土壙を付設し、片側にピットを掘る。床面には北壁から西壁にかけて「L」字状の深い溝を床面下に掘っている。柱間軸の方位はN 4° Eを示す。

出土遺物はショッキ型土器の把手片がある。

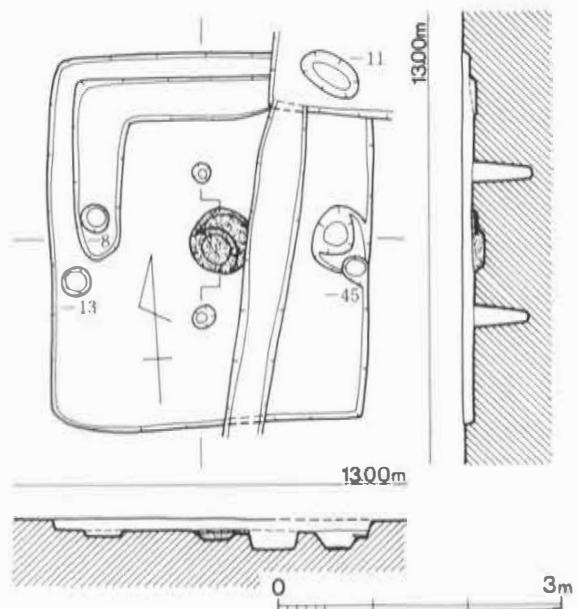


第203図 131号竪穴住居跡
出土土器実測図(1/4)

出土遺物

土器(第203図)

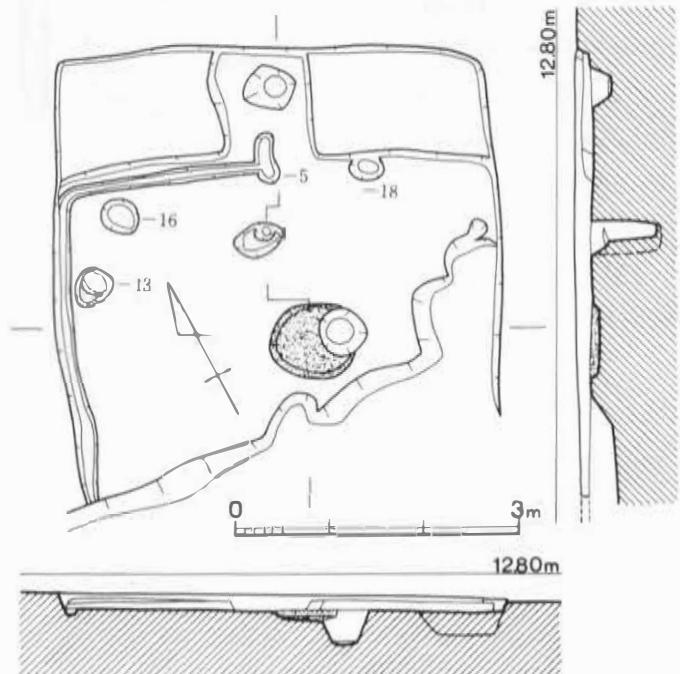
101号住居跡から出土したジョッキ型土器と同タイプの把手片がある。胎土には粗砂粒を多く含む。白黄色の色調を呈する。幅は5.0cmを測る。



第202図 131号竪穴住居跡実測図(1/80)

132号竪穴住居跡(図 (図版12-(1)・24-(1) 第204図)

M-4・5区で検出した竪穴住居であるが、約1/2が耕作による削平を受けている。現存する北壁は4.50 m、壁高20.0cm弱である。支柱は現況で判断する限り2本であろう。床面中央には炉を設ける。北壁には幅1.10mのベットを備えるが、中央部が途切れその間に浅いピットを掘っている。周溝はベット沿いと西壁沿いに廻らす。その他詳細は不明で、出土遺物も無い。



第204図 132号竪穴住居跡実測図(1/80)

133号堅穴住居跡出土遺物

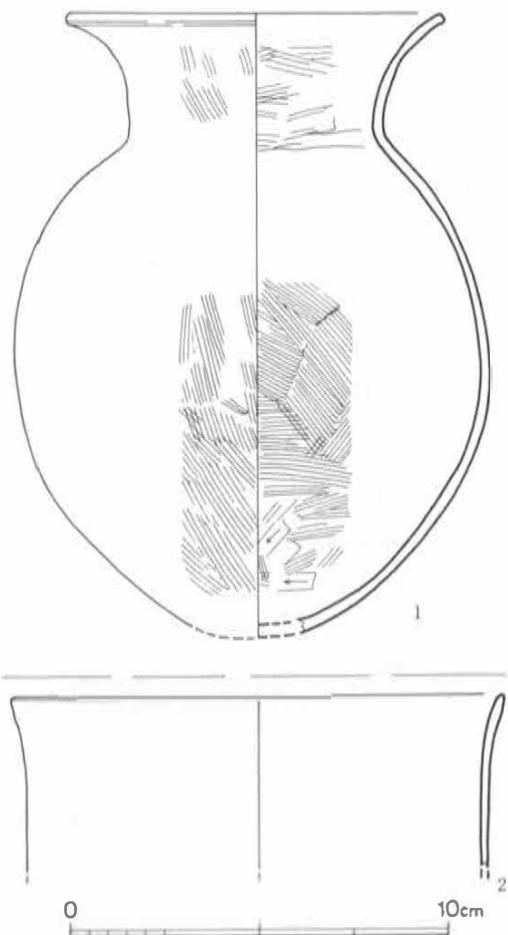
土 器 (図版56 第205図)

1の壺がある。ほぼ完形に近く、口縁は削頬状に外反する。胴部は卵形を呈し、底部は丸底となろう。調整は部分的に磨耗しているが、ハケを多用する。内面一部に箒削りがみられ、器壁を薄く仕上げる。胎土は細砂粒、赤褐色粒、雲母を含む。口径20.0cm、器高32.8cmを測る。

134号堅穴住居跡出土遺物

土 器 (第205図)

2は不明土器の破片である。口縁部は僅かに外反し、一見瓶風に見えるが瓶にしては器壁が薄い。調整はナデで通常の瓶はハケと箒削りで仕上げることから器種は明らかでない。胎土は微砂粒と赤褐色粒子を含む。赤橙色の色調を持つ。復原口径26.0cmを測る。

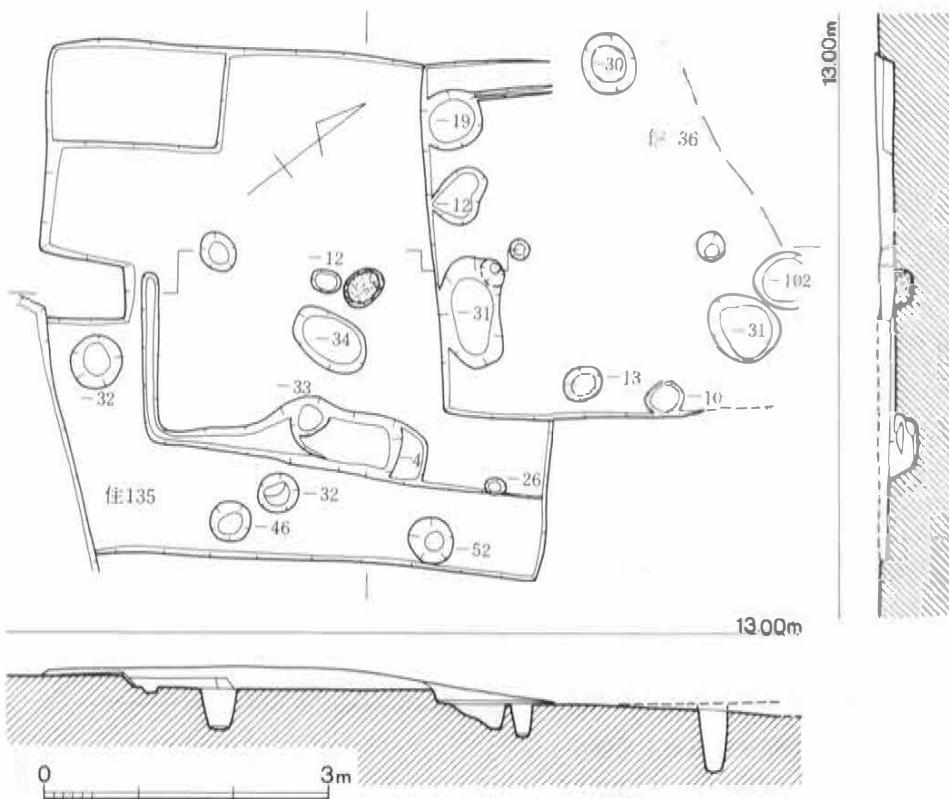


第205図 133号、134号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)

135号堅穴住居跡 (図版11-(1)・(2)・24-(2) 第206図)

L-2・3区で検出した堅穴住居であるが、当該住居跡周辺は住居が稠密するため、調査時に困難を極め不明な点が多くある。135号もその内の1軒で、タイプとしては造出し状の出入口を備える住居であろう。しかし、造出し部にベット状の高まりを設けることに疑問を感じる。東壁は一見ベット状に見えるが、屋内土壇が内側の壁際にある。しかも、130号住居との重複では130号住居が新しくなる。出土土器は当該住居が新しいことなどの要因から外層の高まりは別の住居跡と考えた方が適切であろう。支柱は2本でその内の1本は136号住居の床面下にある。床面中央には小さな炉を設ける。周溝は南壁から屋内土壇へ繋がる。

出土遺物は甕・鉢・支脚・器台の他、石庖丁の破片がある。



第206図 I-35号、I-36号竪穴住居跡実測図(1/80)

出土物

土器 (図版56 第207図)

1は甌の底部片で、レンズ状の不安定な底部をなす。調整は二次加熱を強く受け残らない。復原底径6.0cmを測る。

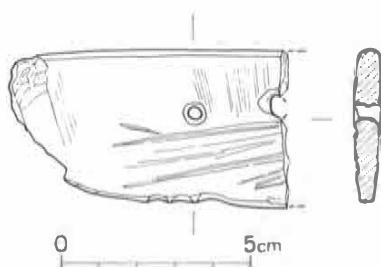
2は甌であるがつくりが雑である。丸底をなし、器表面には指圧痕が残る。口径14.8cm、器高7.6cmを測る。

3は支脚の完形品である。天井部は傾斜をなし、脚部は若干開く。孔は穿っておらず、内面中央部が凹状をなす。二次加熱を受け調整不明。天井径7.4cm、裾部径9.9cm、器高9.7cmを測る。

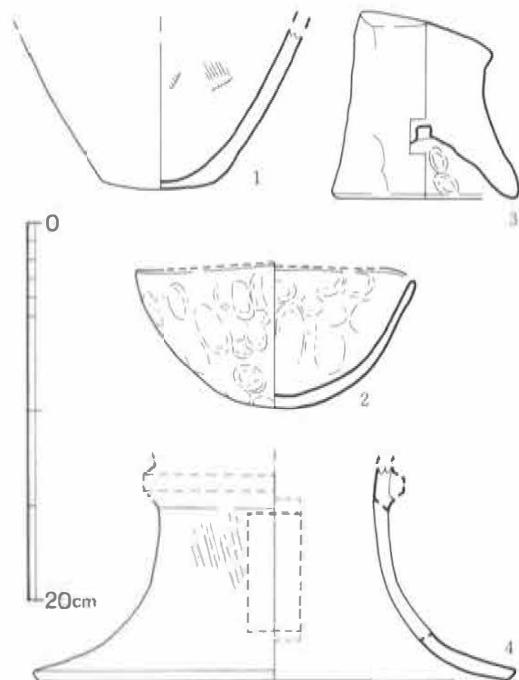
4は出土例の少ない器台の破片である。脚裾部の開きは大きく、長方形の透しを4箇所に配すると考えられる。透しの直上には凸縁の痕跡が残るが、復原した台形凸縁を付すか否かは明らかでない。調整は外面磨き、内面はナデている。裾部径25.6cmを測る。精製された土器である。

石 器 (図版56 第208図)

鯉鱗灘灰岩の石材を使用した石庖丁片がある。石材は質が劣り薄い紫色を呈する。背は丸く面取りを施すが、刃部の研ぎ出しあはみられず、穿孔具様の凹面が3箇所みられる。表面には粗い擦痕が残り、孔は段違いに穿つ。製作途中で破損した可能性が強い。埋土中からの出土で混入であろう。



第208図 135号豊穴住居跡出土石器実測図(1/2)



第207図 135号豊穴住居跡出土土器実測図(1/4)

136号豊穴住居跡 (図版24-(2)・(4) 第206図)

1-2区で検出した豊穴住居であるが、約1/2が茶畑の耕作で削平されている。埋土中から床面にかけては焼土及び炭化材が散見でき焼失住居であることが理解できる。床面上では確実な支柱を1本検出した他は主だった支柱穴は見当らない。

出土土器から当然カマドを付設する時期であるが、その痕跡すら認められない。完全に削平されたのであろう。

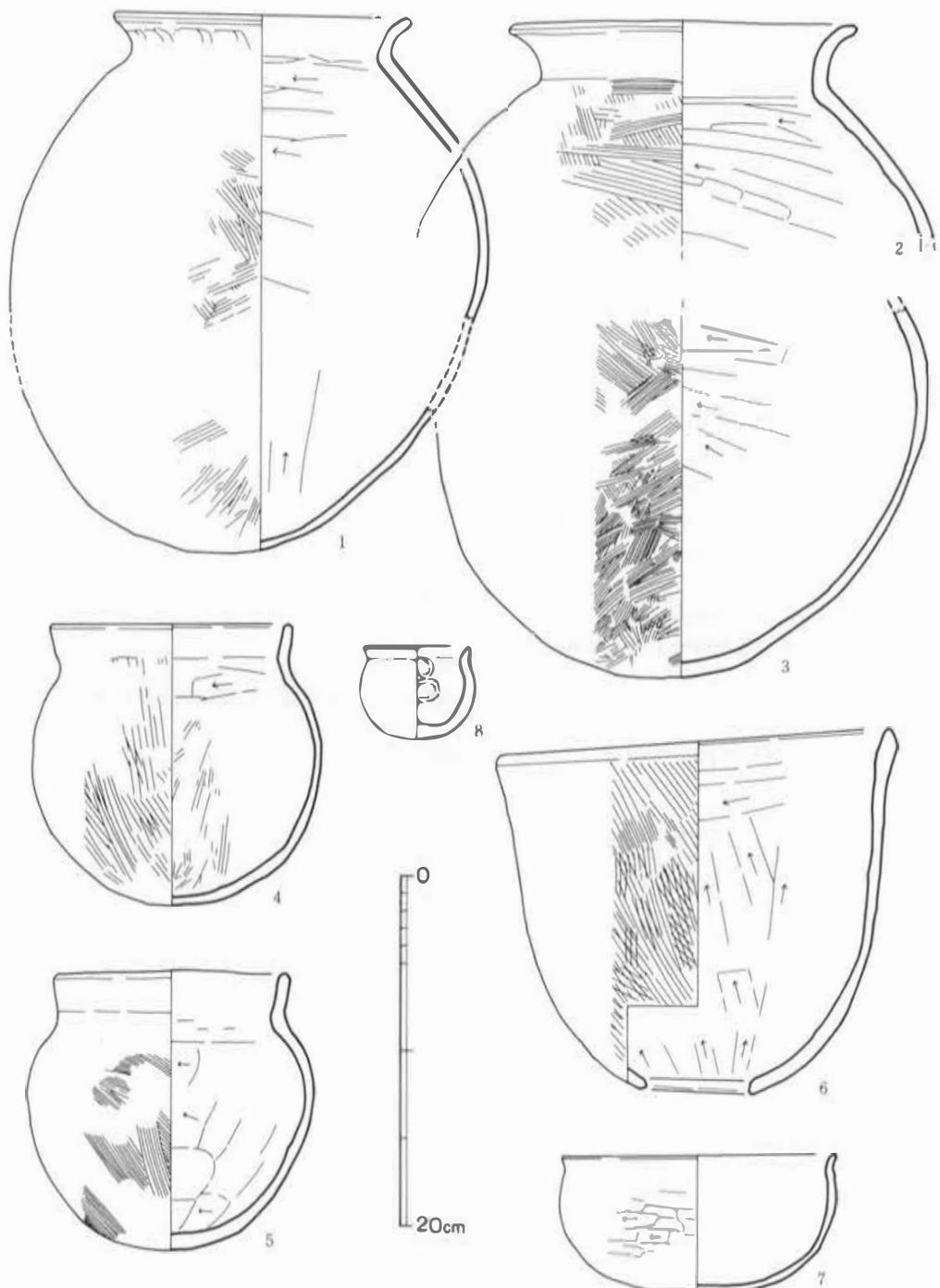
遺物の出土状況は焼失した当時のままの状態で発見され原位置を保っている。特に壺は重ねた状態で出土した。

出土遺物は土師器の壺(甕)・瓶・鉢・壺、須恵器の壺身の他、土玉がある。

出 土 遺 物

土 器 (図版56・57 第209・210図)

土師器 当該住居跡の出土土器は全て二次加熱を受けており、床面からの出土である。壺は1~5があるが、この時期は壺と甕との区別がつけ難く、甕とすべきかも知れない。1は完形品



第209図 136号竪穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)

で短い口縁を「く」字状に外反する。体部は卵形を呈する。頸部は指圧痕が残り、外面は荒いハケ、内面は箆で削る。口径16.7cm、器高30.8cmを測る。2は頸部が立ち口縁を緩く外反する。粗いハケと削りで仕上げる。口径19.9cm。3は胴上半部を欠失する。4・5は同タイプの直口壺である。胴部は球状を呈する。4は外面に粗いハケを施すのに対し5は細いハケを用いる。内面は両者とも削る。4の口径13.8cm、器高16.0cm。5の口径13.5cm、器高16.0cmと法量もほぼ同一である。

6は砲弾形の瓶で口縁部は肥厚する。胴部は脹む。底部には焼成前に径5.8cmの孔を穿つ。調整は粗いハケと削りで仕上げる。口径22.9cm、器高19.9cmを測る。

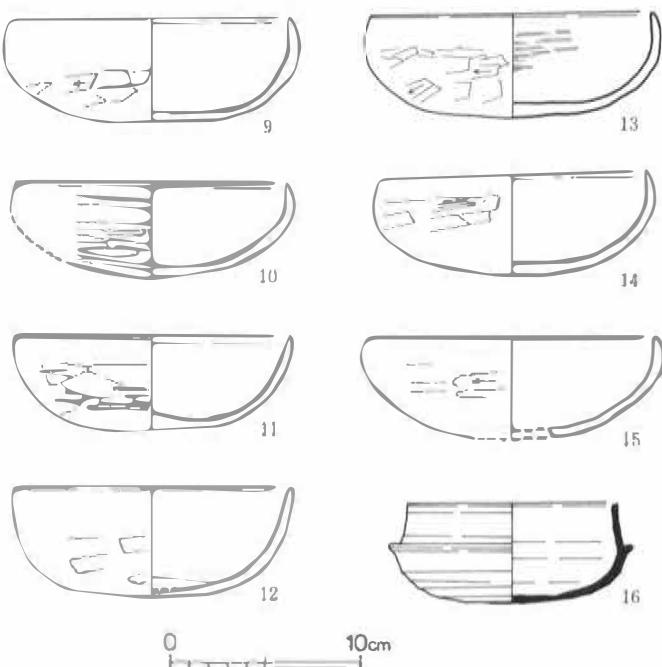
7は器壁の薄い鉢で、口縁部を僅かに外反させる。胴部は張り丸味を有す。調整は外面が削り、内面はナデる。精製された鉢で、口径15.7cm、器高7.7cmを測る。

9～15は坏で精製品である。口縁部を内凹させる9・10・13～15と直に立つ11・12がある。調整は磨きが残るものと箆で削るものとがある。9の口径14.9cm、器高5.4cm。10は口径14.5cm、器高5.1cm。11は口径14.7cm、器高5.0cm。12の口径15.0cm、器高5.75cm。13の口径15.0cm、器高5.4cm。14の口径14.3cm、器高5.3cm。15は口径15.4cm、器高5.4cmを測り、ある一定の法量を示している。

須恵器 完形の坏身がある。口縁はほぼ直に立ち上り長くつくる。胎土・焼成とも良好で製美な坏身である。口径11.0cm、器高5.2cmを測る。

土製品（第211図）

算盤玉状の形をした土玉がある。つくりは粗い。二次加熱を受け赤変する。長さ、径とも2.9cmを測る。

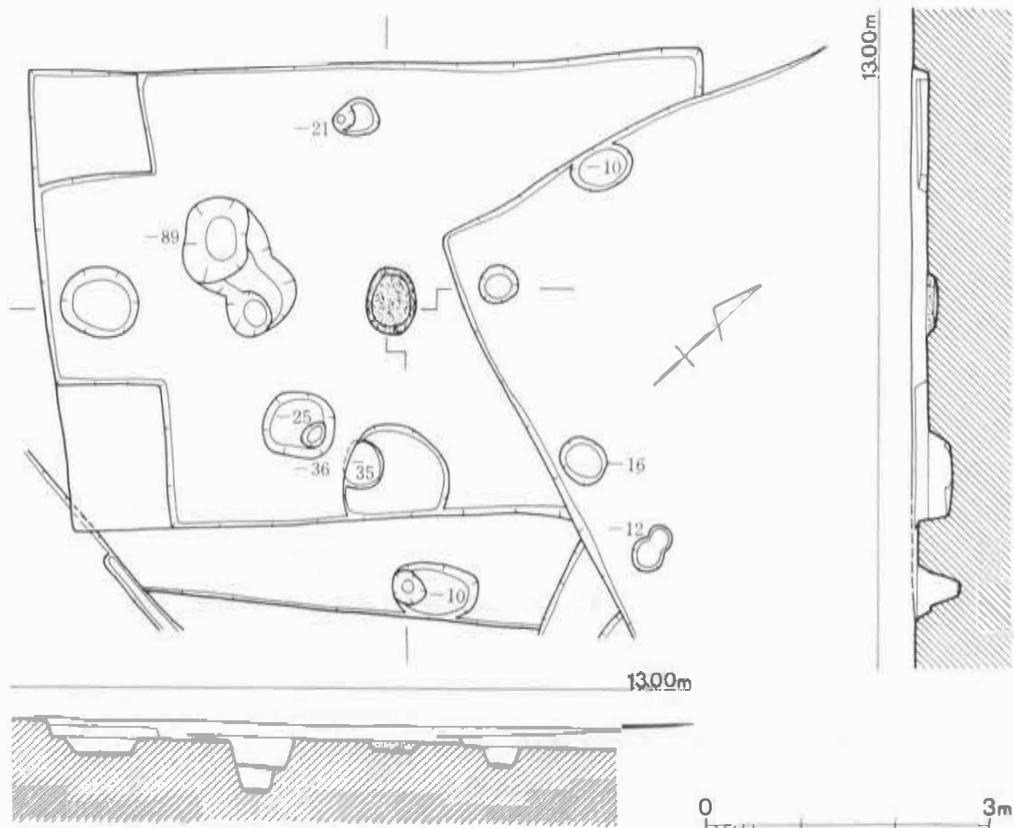


第210図 136号竖穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)



第211図 136号竖穴住居跡
出土土製品実測図(1/2)

137号竪穴住居跡 (図版II-(2)・24-(4) 第212図)



第212図 137号竪穴住居跡実測図(1/80)

1-3、4区で検出した竪穴住居跡で、5軒の重複がある。この内171号、172号住居に切られ、153号、154号住居を切っている。平面プランは長方形である。南壁は4.80m、西壁は7.10m、壁高17.0cm前後である。支柱は2本と思われるが、断面に図示した内の1本は支柱とはなり得ない。床面の中央には楕円形の炉を設けている。東壁際には半円形の屋内土壙を備える。南壁沿いには132号住居と同様なベットを付設する。

出土遺物は甕・脚台付壺・鉢・支脚の他、砥石が3点ある。

出 土 遺 物

土 器 (図版57 第213図)

1・2の縁がある。「く」字状に外反する口縁部を有し、肩部は撫肩をなす。おそらく長胴の縁にならう。調整は焼成しているが、叩き模を施すと思われる。1・2の復原口径28.0cmを測る。

3は脚台付直口壺である。口縁は矧く首口させ、胴部は球状をなす。整はハケが若干残る。外面に三次川燃を受け浅くくすむ。口径18.2cm、脚部径12.4cm、器高25.3cmを測る。

4は跡の口縁片で、口縁は矧る。復原口径17.8cmを測る。

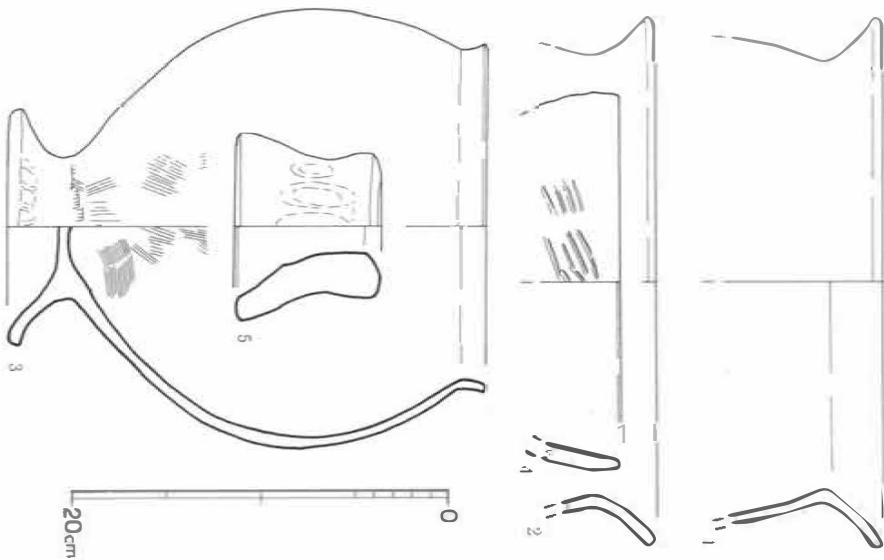
5は低い支脚形土器である。内外面ともナデている。復原口径6.0cm、器深10.0cm、器高7.6cmを測る。

石 器(図版58 第214図)

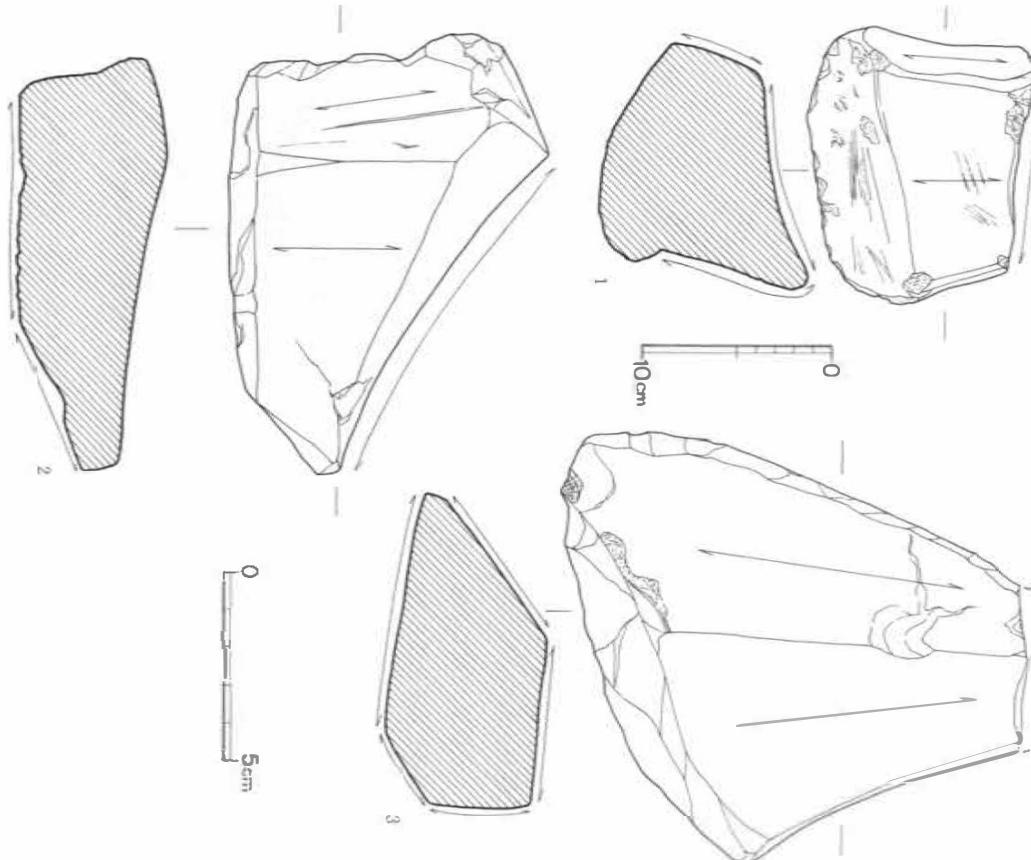
1～3の大振の砥石がある。1は砂岩製の荒砥である。砥面は5面で、損した大型の砥石を再利用したもので、分約(1/3)に川燃が認められる。2は花崗岩質砂岩製の砥石で、黄白色を呈する。研削面は4面で、裏面(図示した下面)には鋭利な刃崎ばかり残る。3は仕上げ砥石である。3も花崗岩質砂岩の砥石で、仕上げ砥石であろう。研削5面を数える。3個とも使用頻度が高く、研面が凹面をなす。すべて屋内土塙からの出土である。

138号竪穴住居跡(図版11-(2)・25-(1)・(2) 第215図)

M-3区で検出した堅火住居で5軒の重複がある。当該住居は139号、141号、155号住居より新しく、172号住居より古い。半面プランは長方形を量める。規模は長幅が7.45m・7.15m、短幅5.20m・5.35m、器高20.0cmを測る。床面積は38.87m²ある。支柱は2本であるが、柱間は4.80mと長い。柱間に横円形の窓を掘込む。屋内土塙は兩張壁の中央に付設し、2段階を量する。土塙の前端にはトピットを配し、トピット間は55.0cmを測る。西側の壁高いには7.0cmの高まり



第213図 137号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

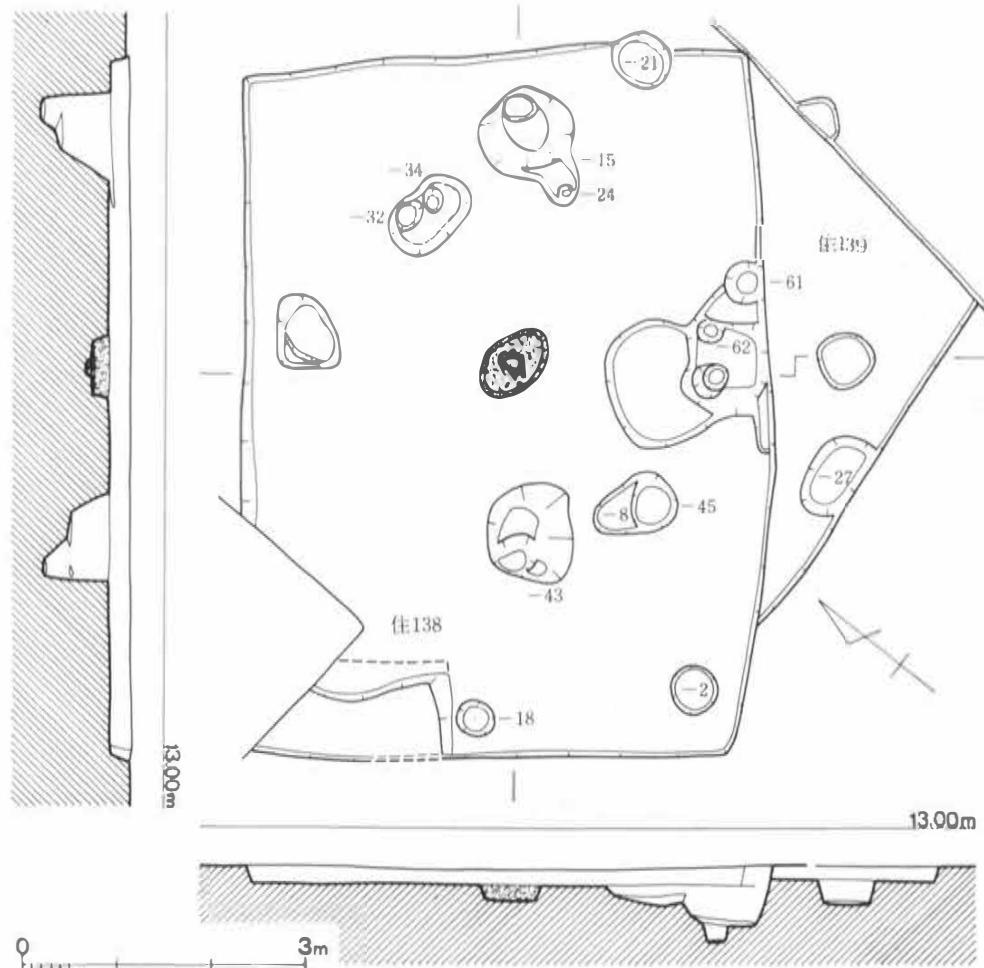


第214図 137号竪穴住居跡出土石器実測図(1/4, 1/2)

があり、類似にベットを有していたことが考えられ極過ぎた可能性がある。柱間軸の方位はN 51°Eを示す。

出土遺物は甕・ミニチュア土器の他、砥石、石庖丁片がある。

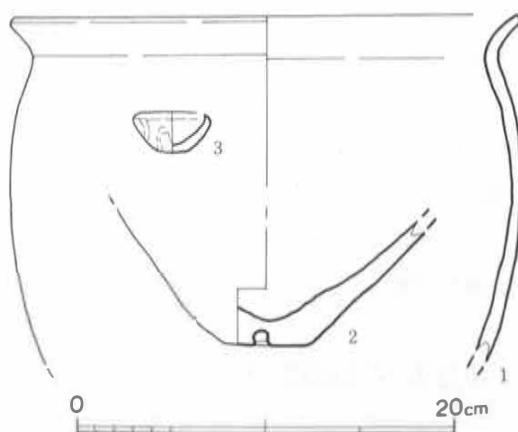
出土遺物



第215図 I38号、I39号竪穴住居跡実測図(1/80)

1・2は甌である。1の口縁は「く」字状に外反するが、頸部内側の稜は不明瞭。復原口径26.9cmを測る。2は小さな平底をなす。底部外面には焼成後の穿孔途中の孔がみられる。調整は摩耗しているが、外面底部付近は鎗で削る。底径4.7cmを測る。

3はミニチュアの完形品で、口径4.1cm、器高2.2cmを測る。



第216図 I38号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

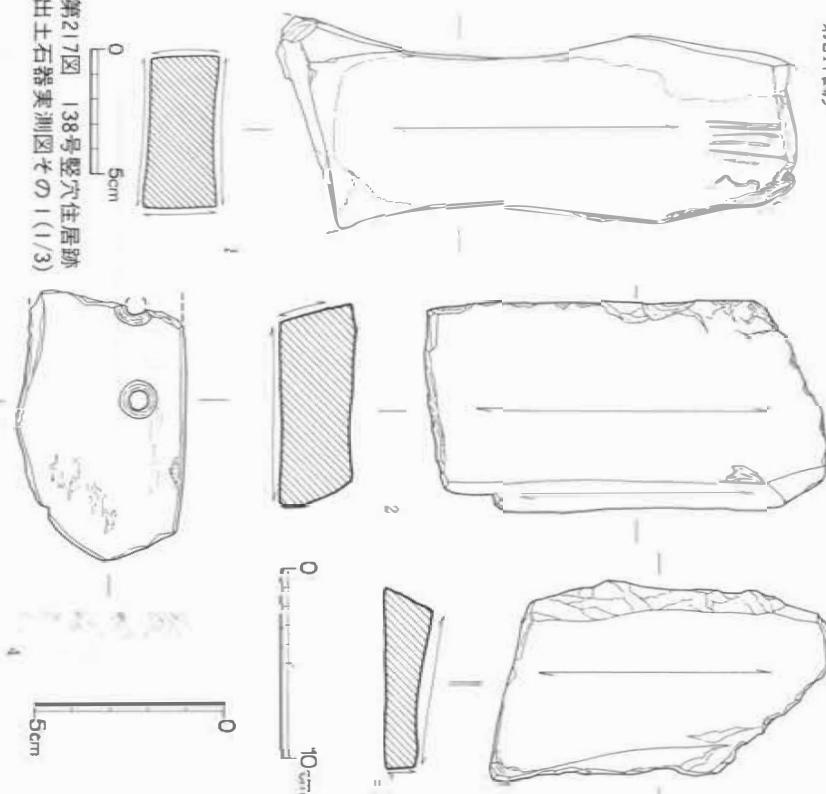
石 器 (図版58 第217図)

1～3の砾石
がある。1は硬質砂岩製の住上
げ砾石で、表裏とも使用頻度が、
高く凹面をなす。研磨は4mm
を数える。埋土中からのH.2で
ある。2は表は片岩製の砾石で
中層であろう。

表面と右側面は
研ぎ込み平滑と
なる。4面の研
面を数える。柱
穴から出土。

3も雲母片岩製
の砾石で斜面には
2面である。加熱され黒く焼ける。

4は雲母片岩製の石砾丁片で刃部の研ぎ痕はない。穿孔は丁寧で内径4.5mmを測る。



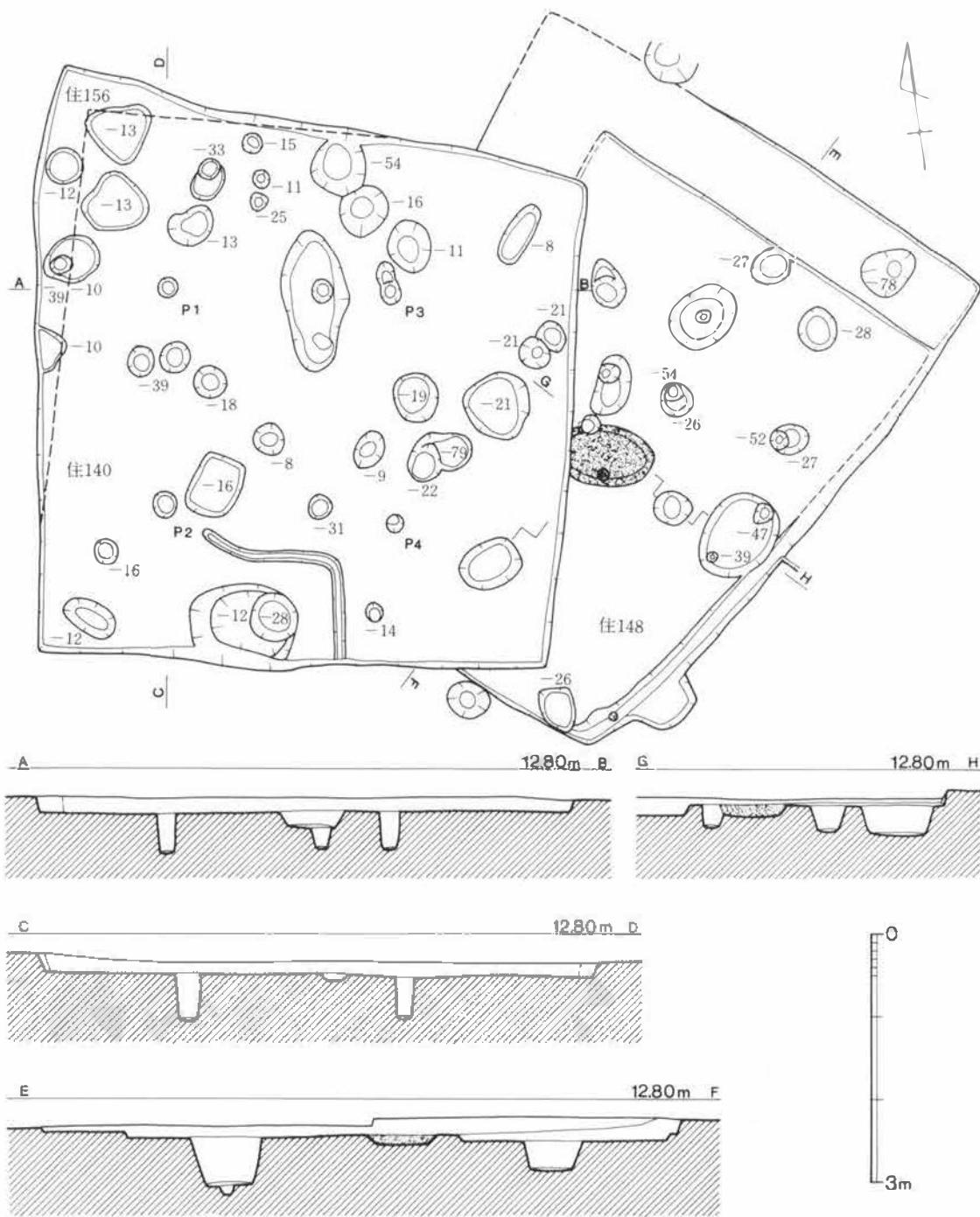
第217図 138号堅穴住居跡
出土石器実測図その1(1/3)

139号堅穴住居跡 (図版11-(2)・25-(1) 第215図)

138号住居に比べて削平され具体的は不明な点が多い。支柱は2本で、両者とも138号住居の床面下で立した。柱間軸と壁とか平行で、床面は南壁際に掘り出形を呈する。柱間軸はN75°Eを示す。
出土遺物は無い。

140号堅穴住居跡 (図版12-(2)・25-(3) 第219図)

138号堅穴住居の隣接する箇所で4軒の重複がある。当該住居は重複してての1軒を切つ



第219図 140号、148号、156号竪穴住居跡実測図(1/80)

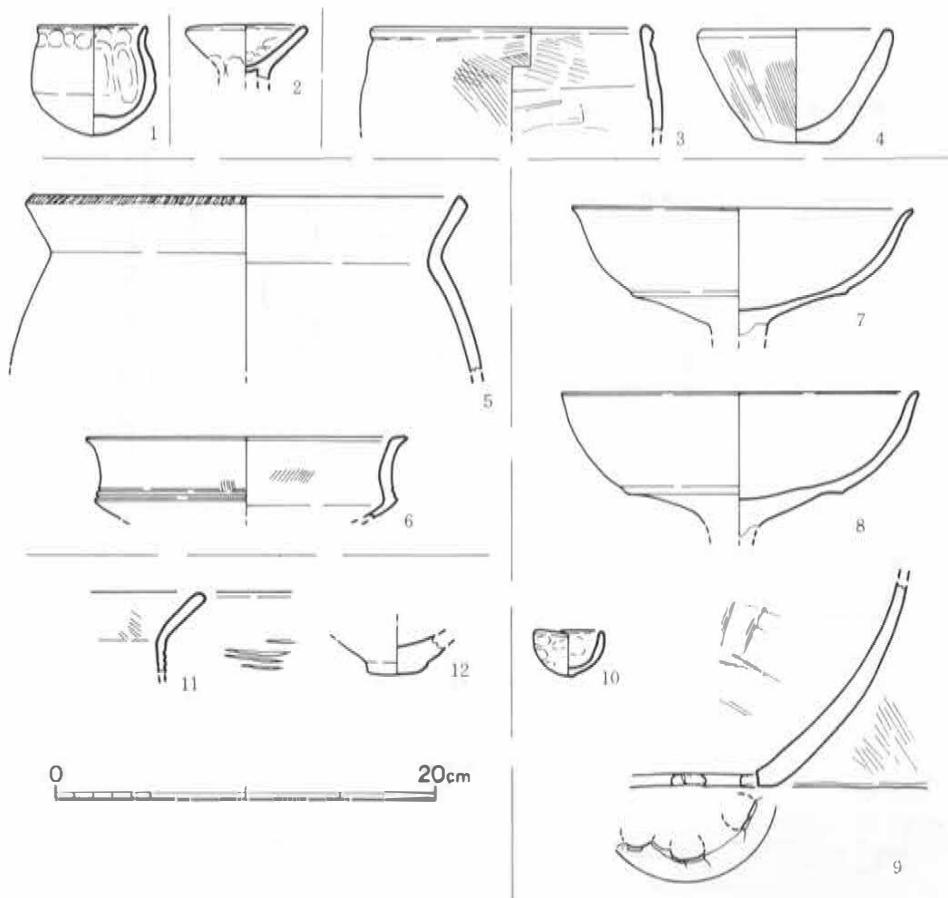
ている。特に156号住居とは完全に重なっており、調査時での識別は困難であった。平面プランは方形を呈し、規模は南・北壁が6.15m・6.05m(復原)、東・西壁5.90m・6.50m、壁高20.0cmを測る。床面積は40.13m²である。支柱は4本で各柱間はP₁—P₂が2.60m、P₁—P₃が2.70m、P₂—P₄が2.75m、P₃—P₄が2.75mを測る。炉は明確でない。南壁際には梢円形の2段階の屋内土壙を付設し、周囲には「L」字状に細い溝を廻らす。

出土遺物は手捏ね状土器の完形品がある。

出 土 遺 物

土 器 (第220図)

1は手捏ね状土器の完形品がある。器面には指圧痕とナデが認められる。口縁を僅かに外反さ



第220図 140号～145号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

せ、胸部は球形を呈する。口径5.9cm、器高5.8cmを測る。

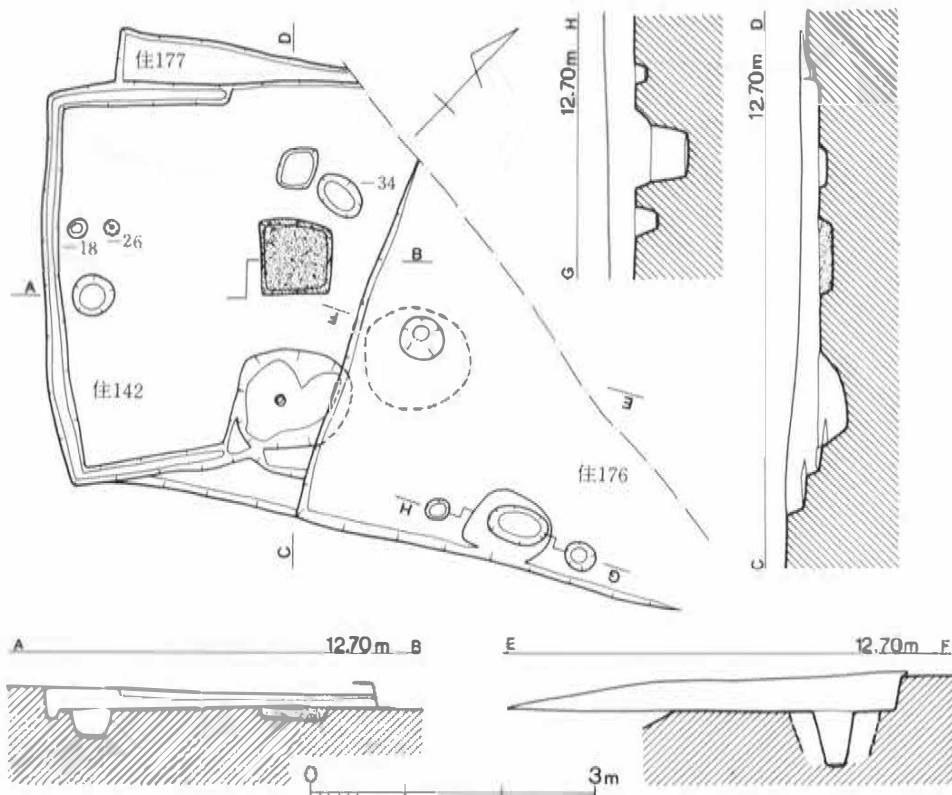
141号竪穴住居跡出土遺物

土 器 (第220図)

2の高壺形のミニチュア土器がある。脚部を欠失する。胎土は精製され、焼成も良い。口径6.5cmを測る。

142号竪穴住居跡 (図版27-①) 第221図)

当該住居を加えて4軒の重複がある。176号→142号→177号→155号の順に新旧関係がある。平面プランは長方形であろう。南西壁は遺存し4.15m、壁高25.0cmを測る。支柱は不明確である。床面中央には75.0cm×80.0cmの方形の炉を設けている。南東壁には円形の屋内土壙を付設する。西壁から東壁の屋内土壙にかけて周溝が廻る。



第221図 142号、176号、177号竪穴住居跡実測図(1/80)

出土遺物は鉢・石斧がある。

出 土 遺 物

土 器 (第220回)

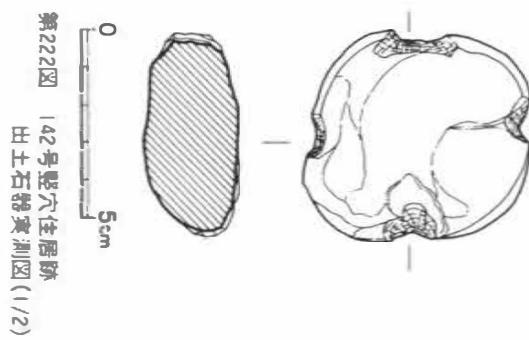
3は鉢の口縁部片で、口唇部を肥厚させる。調整は削り、ハケで仕上げ、内面一部に擦過痕が残る。復原口径15.0cmを測る。屋内土壙内からの出土である。4は小型の鉢で口径10.4cm、底径4.0cmを測る。

石 器 (図版58 第222回)

縄縛のために1箇所を打ち抜いた石斧がある。石材は表面が風化し不明であるが、淡い灰褐色を呈する。大きさは6.0cm×5.6cm、厚さ2.5cmを測り、重さ99.48gを計る。

143号竪穴住居跡 (図版25-(4) 第223回)

全部で1軒の重複がある。144号、176号住居に併せられ、157号住居を切りた竪穴住居跡である。住居の北側及び東側には柴炉で削平を受けている。平面形状は長方形であろう。支柱は2本でその内の1本が確認できている。東壁には不整形の屋内土壙を掘っている。西側の短壁脇には幅1.20mのベット状遺構を付設している。西壁と同様には開溝が廻る。

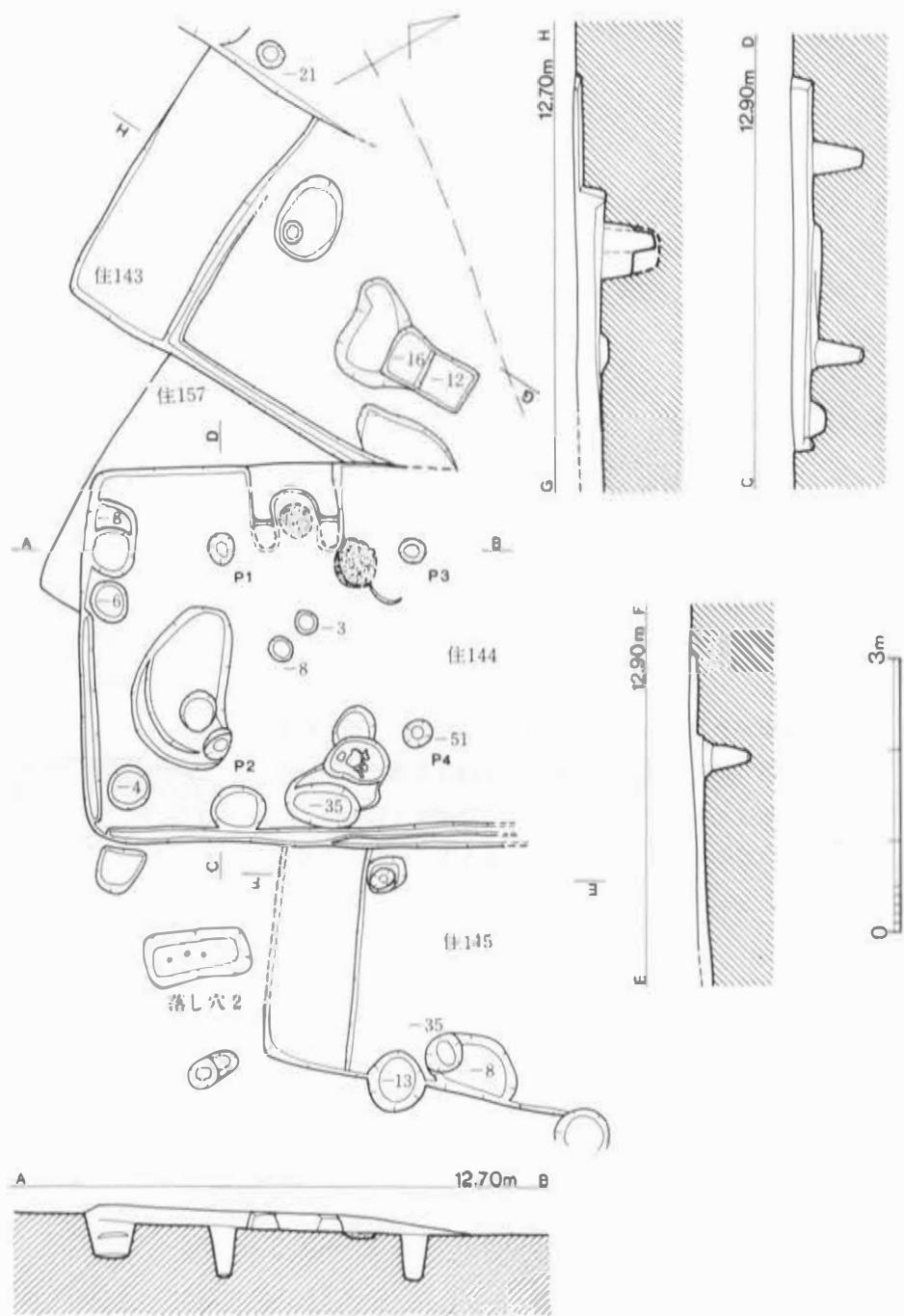


出 土 遺 物

土 器 (第220回)

5は口縁が鋭い外反度を示す縁で体部は長圓をなすであらう。口唇部は刻みを密に配する。調整は摩耗して不明であるが、川き抜を施すであらう。復原口径23.3cmを測る。

6は類例の少ない土器で器種は明らかでない。土器は焼成され、胎土・焼成とも優めて良好である。低い脚を有す脚窪の可能性がある。胴部から口縁にかけての屈折は強く、反り気味の口縁を持つ。口唇部は尖る。屈折部には二条の細い沈線を廻らす。復原口径17.0cmを測る。



第223図 143号-145号、157号竪穴住居跡実測図(1/80)

144号堅穴住居跡（図版25-4） 第223図

この住居を含めて4軒の重複がある。この内3軒を切り最も新しい堅穴住居である。北東壁は削平を受け遺存しない。平面形状は支柱の配置から復原すれば長方形となる。規模は短壁が4.00m、高さ15.0cm前後を測る。支柱は規則的に配置された4本柱で、柱間はP₁-P₂が2.15m、P₁-P₃が2.10m、P₂-P₄が2.15m、P₃-P₄が2.00mを測る。

北西壁の中央部には「U」字状のカマドを付設し、カマド内床面は激しい焼痕が認められた。カマドに對峙する壁際には長軸80.0cm、短軸50.0cm、深さ35.0cmの土壙を掘込んでいた。その傍には不整形の土壙が配され、中から高杯が出土している。周溝は南東から南西壁沿いに廻る。住居の主軸はカマド方向の柱間軸でN 60° Wを示す。

出土遺物は高杯・瓶・ミニチュア土器の他、砾石が2点ある。

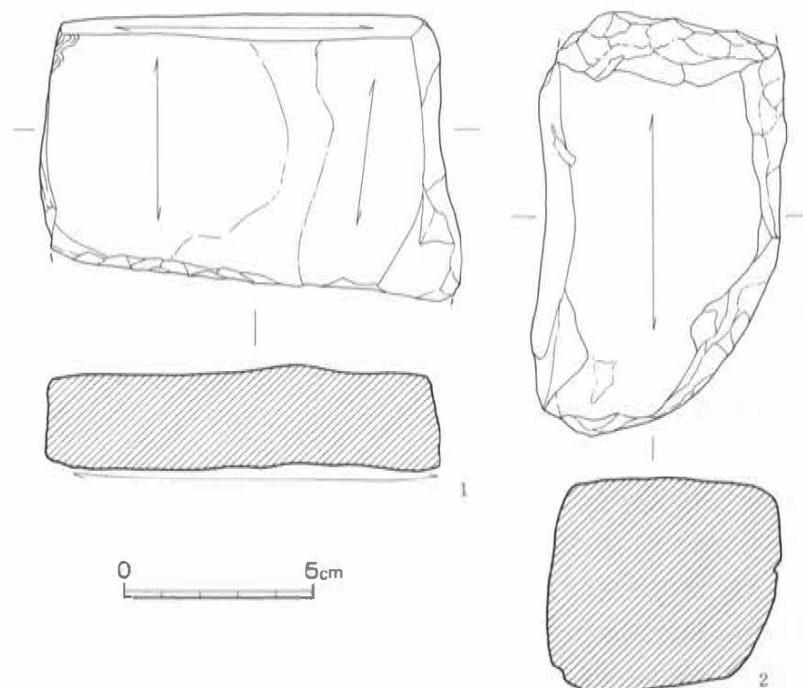
出 土 遺 物

土 器（図版58 第220図）

7・8は高杯の
杯部片である。底
部から洞部にかけ
ての屈折は不明瞭
となり、全体に丸
味を有す。7の口径
17.8cm、8は
19.0cmを測る。

9は瓶の底部片
で、孔部は蓮根状
を呈する。二次加
熱がみられる。外
面がハケ、内面は
ナデる。

10はミニチュア
土器で口径3.8cm、
器高2.45cmを測
る。



第224図 144号堅穴住居跡出土石器実測図(1/2)

石 器 (図版58 第224図)

1・2の砥石がある。1は綠泥片岩製の砥石で1/2を欠失する。研面は3面であるが、裏面の使用類度は少ない。2は花崗岩質砂岩の砥石であるが、表面が風化し研ぎ痕が不明瞭である。研面は4面を数える。黄白色の色調を呈する。

145号竪穴住居跡 (図版25-(4) 第223図)

O-3区で検出した竪穴住居跡で、144号住居に切られている。しかも、東側が削平され全容は把握できていない。短壁沿いには幅90.0cmのベット状遺構を設けている。南壁には橢円形の屋内土壇を掘り、片側にはピットを掘込む。その他詳細は不明である。

出土遺物は甕・砥石がある。

出 土 遺 物

土 器 (第220図)

11は肩部の張らない甕で、口縁は長く斜上方に開く。外面には粗い叩き痕が残る。12は甕の底部片で小さく不安定な平底をなす。底径3.6cmである。

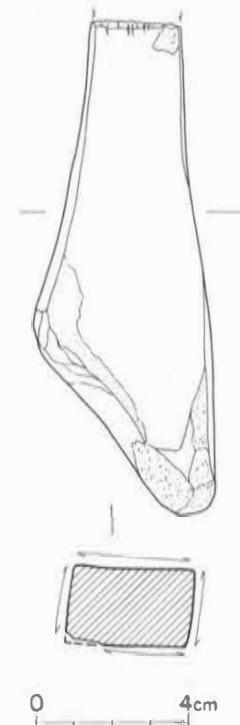
石 器 (図版58 第225図)

花崗岩質砂岩の仕上げ砥石がある。約1/3を欠失する。研面は4面で、使用類度が高く研ぎ込まれている。現存長13.0cmを測る。黄白色を呈する。

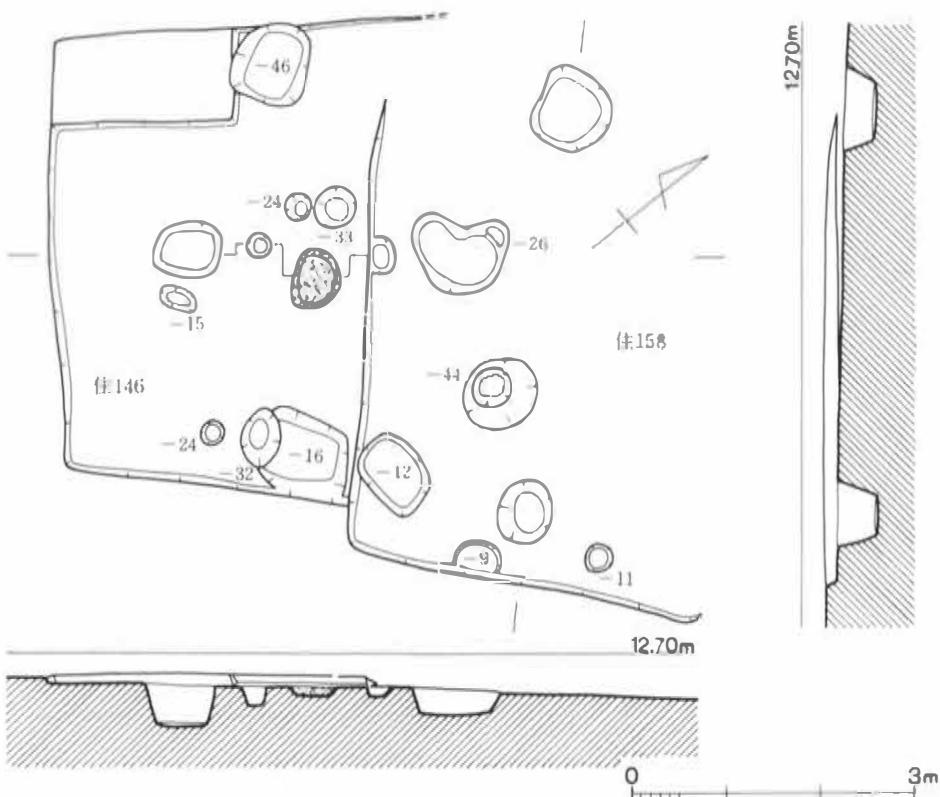
146号竪穴住居跡 (第226図)

時期不明の158号住居に切られた竪穴住居跡で、約1/2が削平を受けている。短壁が4.50m、壁高5.00cm前後を測り、遺存状態は極めて悪い。支柱は炉址を挟んだ2本と思われるが、浅いため疑問が残る。長壁の隅には幅1.00mのベットを付せる。対応する壁際には隅門長方形の屋内土壇を付設する。

出土遺物は甕・甌・鉢がある。



第225図 145号竪穴住居跡
出土石器実測図(1/2)



第226図 I-146号、I-158号竪穴住居跡実測図(1/80)

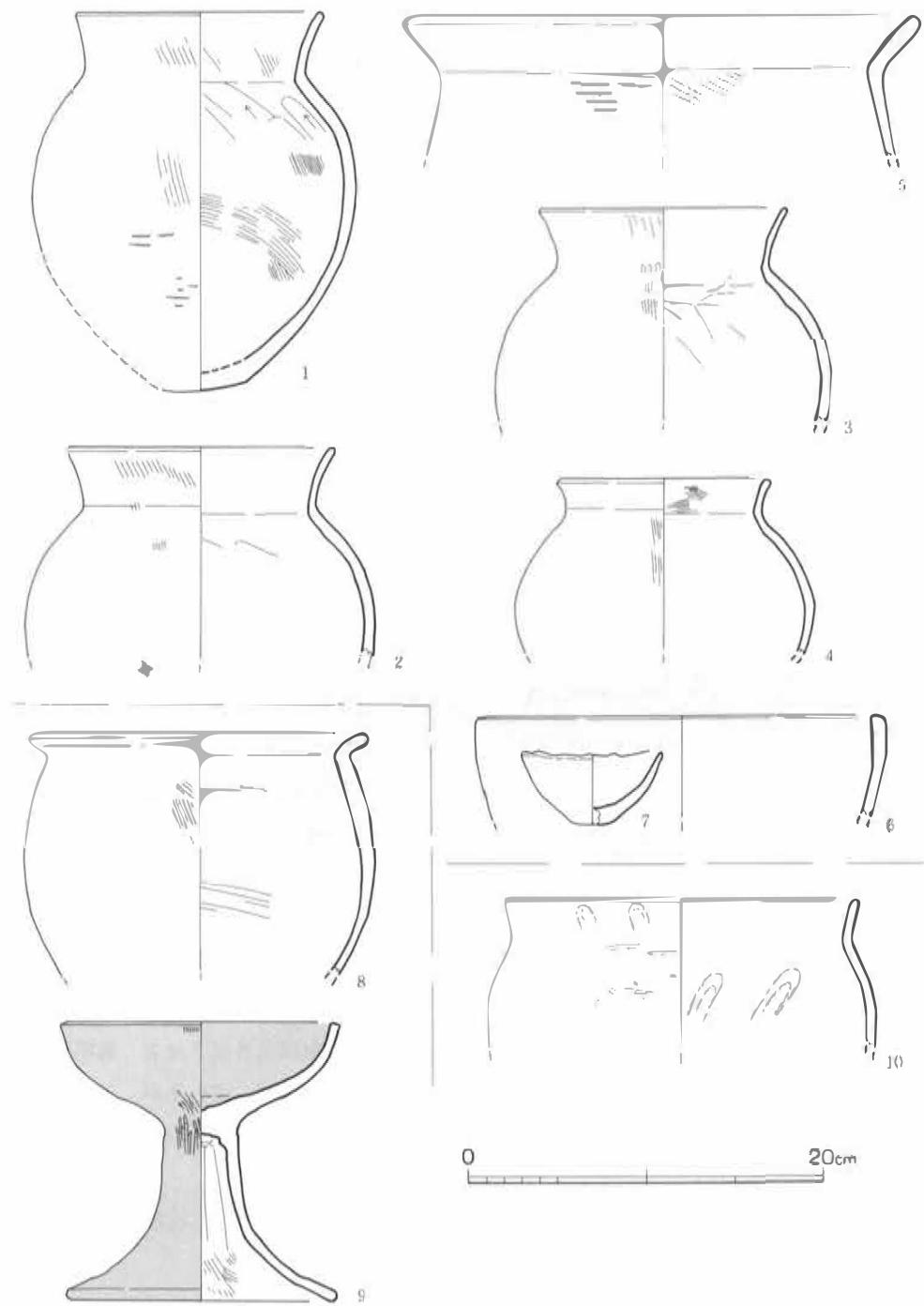
出土遺物

土 器(図版58 第227図)

1～4は壺である。1～3は同タイプの壺で口縁は長く反り氣味に外反させる。肩部から胴部にかけては張り、底部は不安定なレンズ状の平底をなす。器面は摩耗しているが、1には叩き痕が残る。1の口徑14.0cm、底徑5.0cm、器高21.1cm。2の口徑15.0cm。3は14.0cm。4は前者に比べて口縁は短く、胴部は扁平につくる。口徑12.0cm。

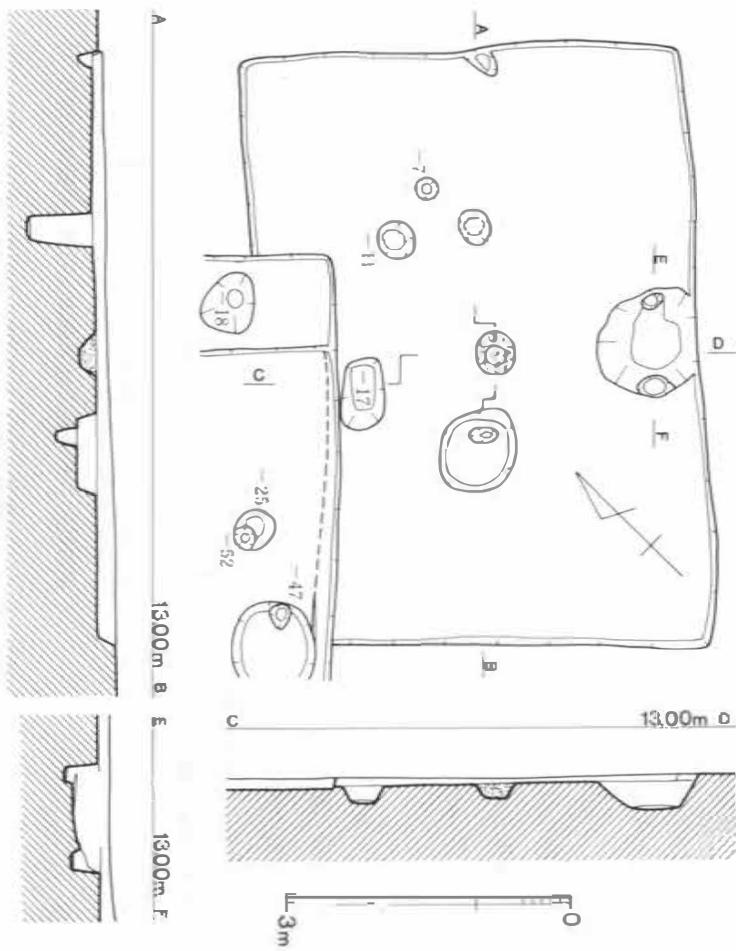
5は「く」字状に外反する口縁部を有し、長胴をなすと思われる。外面には粗い叩き痕が残る
復原口徑29.2cm。

6は鉢で口唇部を肥厚する。復原口徑23.0cmを測る。



第227図 146号—148号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

147号竪穴住居跡(図版12-(1), 25-(3), 26-(1) 第228図)



第228図 147号竪穴住居跡実測図(1/80)

148号 住居に切られた竪穴住居跡で、平面プランは長方形をなす。規模は長邊が6.35m・6.20m(復原)、北壁側の短邊は4.60m、草高10.0cm~20.0cmを測る。支柱2本と思われるか、その内の1本は支柱となり得ない。中央部には径45.0cmのか井を設けている。南東壁には径1.10mの不整円形の植込土壇を備え、両端には小ビットを配する。ビット間は90.0cmを測る。

出土遺物は焼瓦・瓦片の他、砥石、木製石器、不明鉢器がある。

出 土 遺

土 器(第227図)

8の甕は口縫部を「く」字状に外反させ短くつくる。胴部は張る。復原口径19.0cmを測る。

9は輪製された高杯である。底部は碗形を呈し、脚柱状部はスマートである。胴部は緩く削脚する。脚部は手彫り磨研と思われるが、片は削落する。口径15.6cm、底部径15.0cm、高さ15.6cmを測る。

石 器 (図版59 第229図)

1は緑泥片岩製の砥石であるが、中央部が6.0cm×8.5cmの窪みがあり、当初石器として使用したものを使い石として再利用したことが考えられる。現存での砥面は3面で、表面の使用頻度が高く平滑となる。現存長27.0cm、幅13.0cm。

2は頁岩製の製作途中の石器である。4面に数多くの削痕を残し、削痕の幅は6～7mmである。現存長8.5cm、幅3.9cm、厚さ1.9cmを測る。床面からの出土である。

鐵 器 (第229図)

長さ5.0cm、幅5.1cm、背の厚さ3mmの不明鉄器がある。2側面に刃部を研出しているが、用途は明らかでない。

148号堅穴住居跡 (図版12-(1)・25-(3) 第219図)

N-3・4区で検出した大型の堅穴住居跡であるが、140号住居より古く、147号住居より新しい。平面形態は長方形を呈すると想われる。支柱は2本と思われるが、140号床面下で検出した柱穴は支柱穴か否かは疑わしい。床面中央には椭円形の炉を設けている。屋内土壇は南東壁際に在り、長径1.10m、短径85.0cmを測る。土壇の両端には小ピットを配する。ピット間は80.0cmを測る。さらに、北壁沿いにはベットを付設する。

出土遺物は脚台付壺(?)がある。

出 土 遺 物

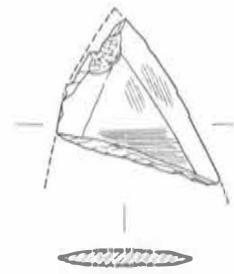
土 器 (第227図)

10は口縁が僅かに外反する土器である。肩部は丸味を持つ。形状から脚台付の壺の可能性がある。外面には叩き痕が僅かに残る。復原口徑20.0cm。

149号豎穴住居跡出土遺物

石 器 (第230図)

硬質砂岩製の石器がある。諸刃であることから石庖丁ではない。石劍及び石戈にしては薄く、しかも鏽が無い。刃部は鋭利に研出している。



0 3cm

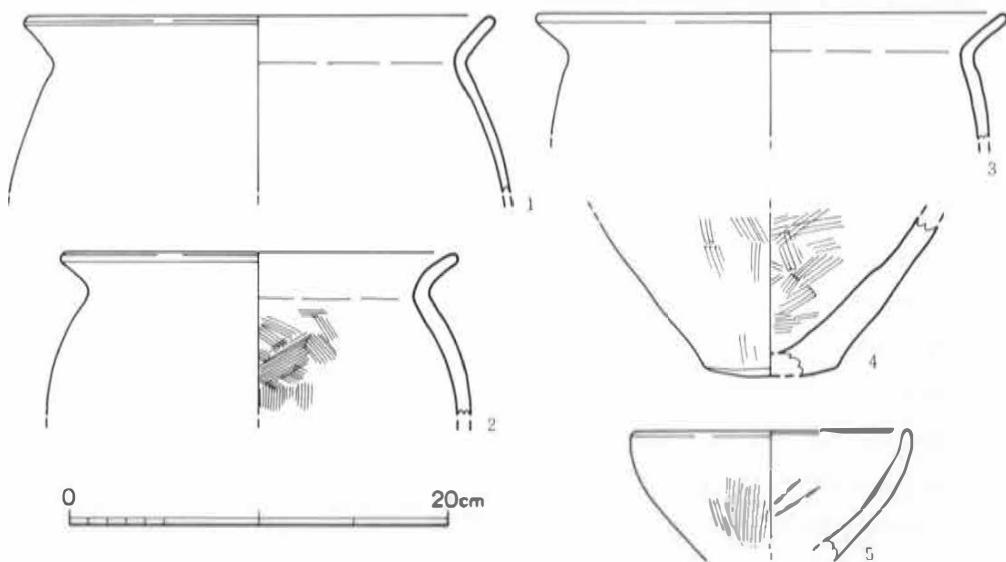
第230図 149号豎穴住居跡
出土石器実測図(1/2)

150号豎穴住居跡出土遺物

土 器 (第231図)

1～4は甌である。1・3は同タイプの甌で2に比較して器壁が薄い。2は肩部が他の甌よりも張る。調整は2の内面にハケが残るのみで他は摩耗している。4は底部片で器壁が厚い。不安定なレンズ状の平底をなす。内外にハケが残る。1の口徑25.0cm、2の口徑11.0cm、3の口徑25.0cm、4の底径9.0cmを測る。

5は口縁が僅かに内彎し、洞部は細まる。復原口徑15.0cmを測る。



第231図 150号豎穴住居跡出土土器実測図(1/4)

151号窓穴住居跡出土遺物 (図版 8-(2) 第137図)

G-1・2区で検出した窓穴住居であるが、83号住居に割られている。現況での平面プランは方形のようにも見える。面積は5.35m²、高さ15.0cmを測る。その他詳細は不明で、出土遺物も無
く。

153号窓穴住居跡出土遺物

土 器 (図版59 第232・233・234図)

壺は1～5がある。すべて埴土中からの出土である。1は袋状口縁部の口縁削りで、円錐り上。器が二次加熱を受け茶褐色を呈している。復原口径11.8cm。2・3は「く」字状に鋭く外反する短い口縁を有す。2は胴上半に最大径を有し、3は胴下半に最大径を持ち鼓形を呈し、安定感がある。

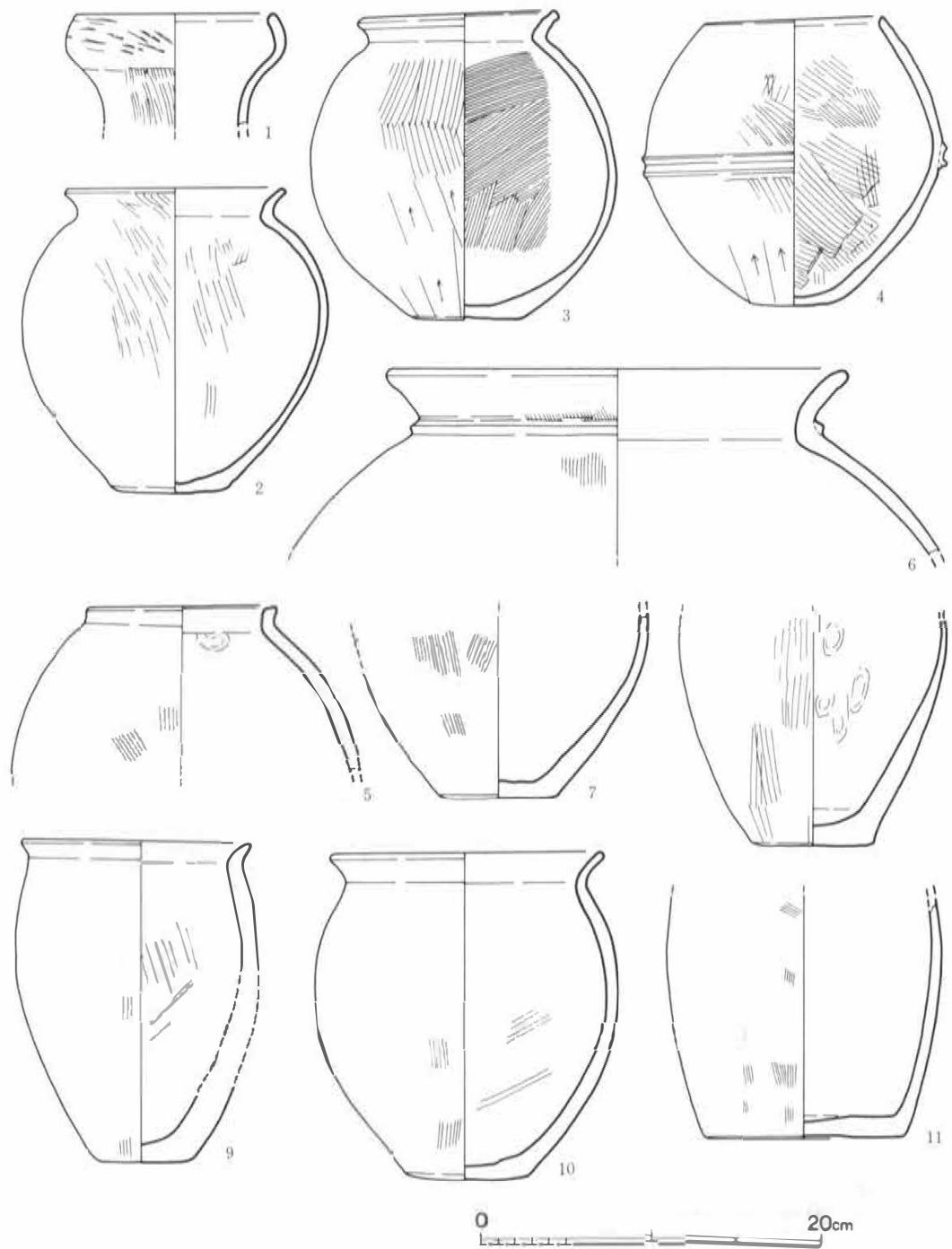
4は調整は無いハケを施し、3の内面は無いハケで仕上げる。2の口径13.0cm、底径7.0cm、器高17.8cm。3の口径11.9cm、底径6.5cm、器高18.0cmを測る。4は無塑壁の完形品である。胴中央部には「M」字状凹槽を施す。調整は内外粗いハケを施し、外而下部は丸で削る。底削は小さく不安定感がある。口径10.6cm、底径5.7cm、器高16.8cmを測る。5は直口壺の復原実測で口縁部は短い、肩部は大きく張る。復原口径1.2cmを測る。

甌は6～11がある。6は大根の縫で口縁は外反度が強く、頸部に三角凹槽を付す。肩部の張りは強い。復原口径27.2cm。9は厚手づくりで口縁の外反度は弱い。体部は張らず長胴をなす。口径3.6cm、底径4.9cm、器高18.8cm。10は緩く外反する口縁に体部は丸味を有す。口径6.1cm、底径7.3cm、器高9.0cm。11は大きな底盤をなし、極めて安定した甌である。表面はハケののち削を施す。二次加熱された茶褐色を呈する。底径11.7cmを測る。

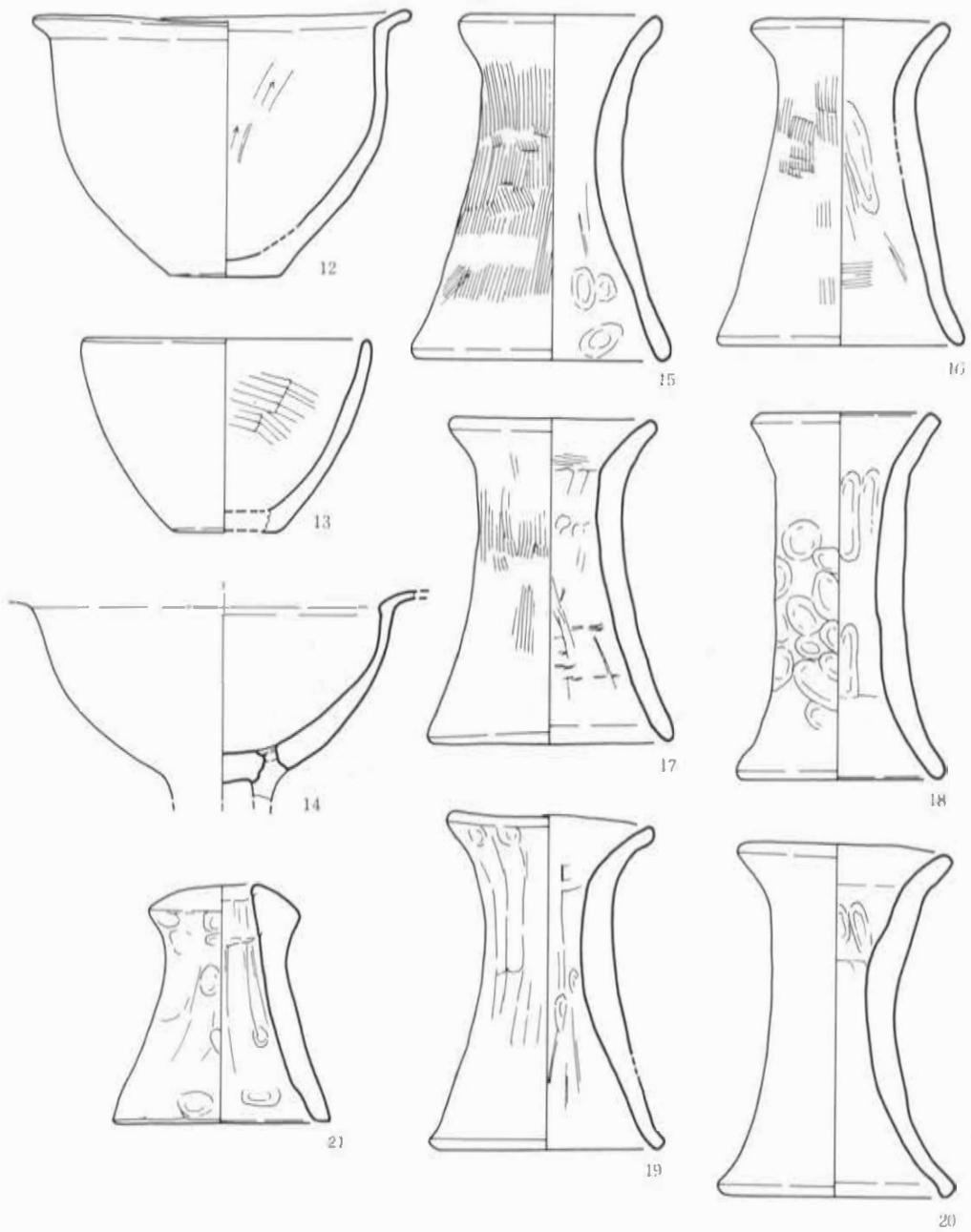
12・13は鉢である。12の口縁は斜め上方に外反し、胴部は僅かに張る。口径20.9cm、底径6.3cm、器高14.3cmを測る。13は口縁から胴部にかけて僅かな張りを有す。復原口径16.1cm、底径5.4cm、器高10.7cmを測る。

14は高杯の杯部で、逆「L」字状に外反し口縁部の上面は内側する。胴部は丸味を持ち中期の高杯に似して深い。調整は風化し不明瞭である。底盤は焼成後に内側から孔を穿ち祭祀的用途として使用している。

15～20は器台であるが、形態、調整手法から15～17と18～20の二つのタイプに区分できる。前者は最小径が上半部にあり、口縁部が底部よりも外反する。調整は外面がハケ、内面をナデで仕上げる。18～20は最小径が胴中央にあり、口縁と底部が対称的につくる。調整も粗く口縁部が残り、総体的につくりが粗い。前者の法量は口径10.0cm～11.5cm、底部径は13.7cm～14.5cm、器高17.9cm～19.2cm内、後者の法量は10.5cm～11.5cm、底部径11.5cm～13.0cm、器高18.3cm～20.4cm内を測る。



第232図 153号竪穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)



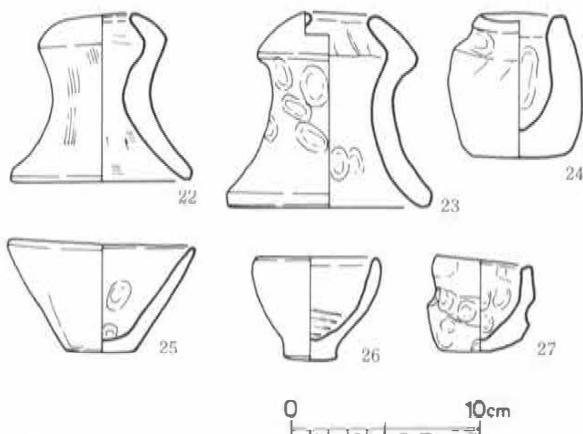
第233図 153号竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)

22・23は支脚で口縁を内傾させ、天井部に孔を穿つ。天井部径は3.5cmと3.7cm、基部径は9.5cm、10.7cm、器高8.7cm、10.2cmを測る。二次加熱を受けている。

24～27はミニチュア土器で、粗くつくる24・27とやや丁寧につくる25・26がある。

土器製（第235図）

土製投弾がある。胎土は砂粒が多く不良。二次加熱を受け脆い。復原長4.7cm、径3.0cmを測る。

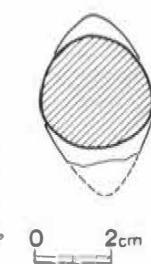


第234図 153号豊穴住居跡出土土器実測図その3(1/4)

155号豊穴住居跡出土遺物

土 器（第236図）

器壁の厚い壺の口縁片がある。口縁の内外面には亀裂が生じたため別の粘土で補修をしている。胎土は細砂粒を含むが良好である。



第235図 153号豊穴住居跡
出土土製品実測図(1/2)

158号豊穴住居跡（第226図）

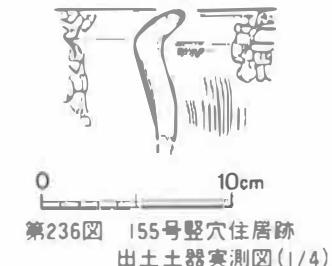
146号住居を切った豊穴住居であるが、東側は耕作による削平を受け遺存しない。支柱は深さ44.0cmの柱穴が1本検出できた他は見当らない。その他詳細は不明である。

出土遺物は砥石が1点ある。

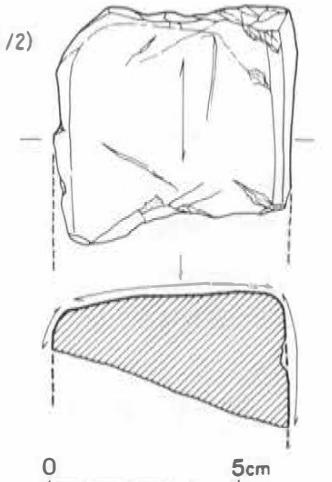
出 土 遺 物

石 器（第237図）

花崗岩質砂岩の石材を使用した砥石がある。現存での研面は3面を数える。黄白色の色調を有す。

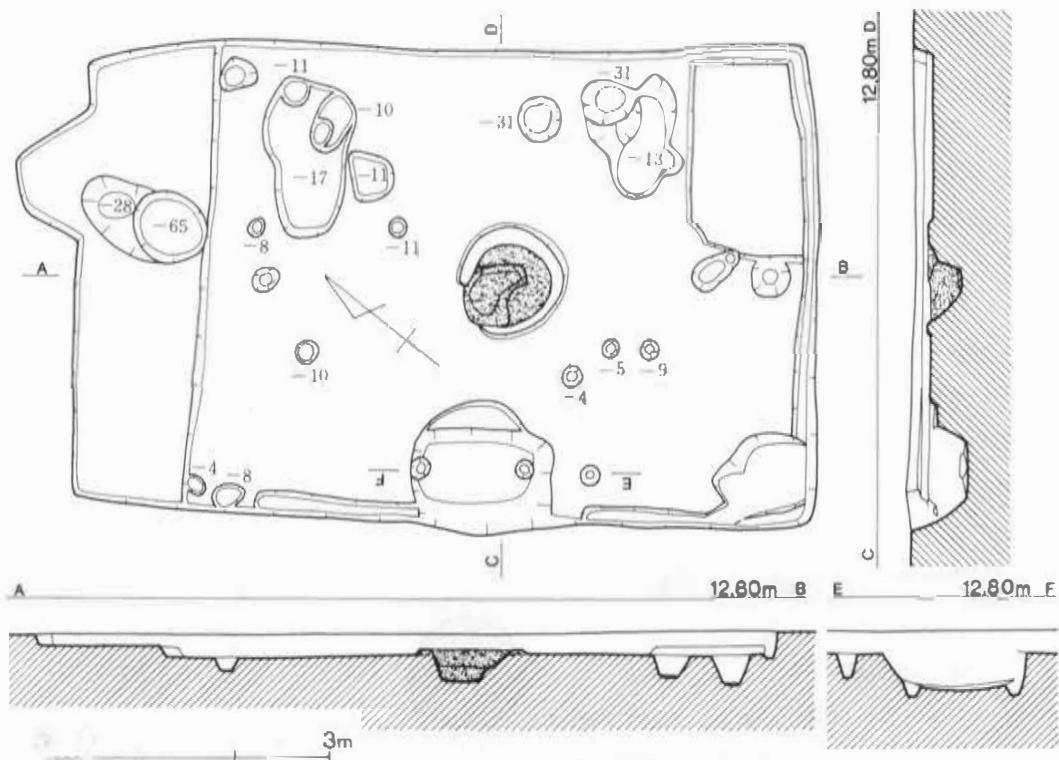


第236図 155号豊穴住居跡
出土土器実測図(1/4)



第237図 158号豊穴住居跡
出土石器実測図(1/2)

159号竪穴住居跡 (図版12-(2)・26-(3)・(4) 第238図)



第238図 159号竪穴住居跡実測図(1/80)

161号住居を切った状態で検出した竪穴住居である。平面形態は長方形を呈する。規模は長壁が7.80m・7.55m、短壁4.60m・5.00m、壁高24.0cm前後を測る。支柱は住居形態から2本と思われるが、断面に図示した柱穴は支柱とはなり得ない。床面中央には径1.20mのがを掘込み、窓の周縁には5.0cm前後の低い土手を廻らすが、庇などの突出部はない。中には炭化粒が充満していた。片側の長壁中央には隅円長方形の屋内土壙を備え、両端に小ピットを配する。ピット幅は1.10mを測る。ベット状遺構は両短壁側に付設するが、片側は部分的な設置である。

出土遺物は甕・甌の他、石庖丁が3点ある。

出土 遺 物

土 器 (図版60 第239図)

1は小型の袋状口縁甕の系譜を引くもので約1/2残存する。肩折部の縁は不明瞭で、頸部は箱

い。肩部は盛るが長脚である。

口径10.2cmを測る。腹内

土壇内からの出土である。

2は小判の型で胴1/2部を
欠損する。内外面に三次加熱
を受け黒く変色する。底径
6.3cmを測る。腹内土壇内か
ら出土。

石 器 (図版60 第240圖)

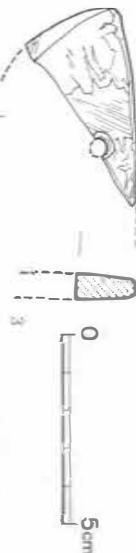
1～3の「石庵丁」がある。1
は雲母片三分の二庵丁で光形
品である。2つの孔は大き
く、内径7.0mm、外径1.2cmを

測る。表面には横方向の擦痕が残る。厚
くつぶられ重層感がある。刃部は鋭く
研ぎ出す。長さ11.4cm、幅5.3cm、厚さ
8.0mmを測る。床面からの出土である。

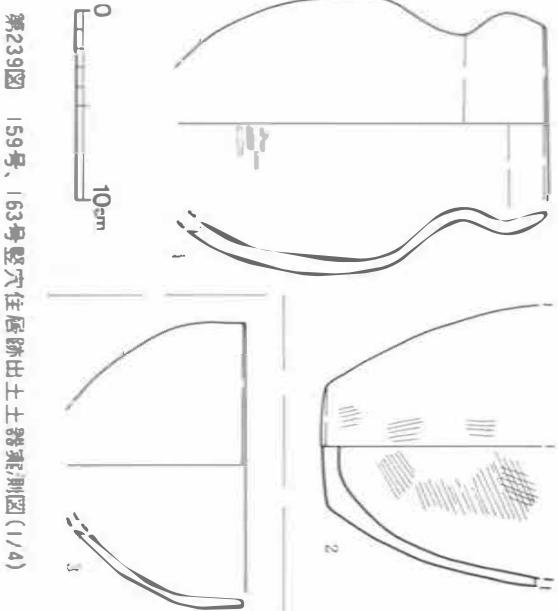
2も雲母片岩製の石庵丁で半月形を量
する。孔は幣形に穿ち、右側の孔の下方
には炭灰とも組織れ痕が残る。孔の内
径5.0mmを測る。長さ10.1cm、幅4.6
cm、厚さ7.0mmである。3は粘板岩質の
石庵丁片である。川熱を受け暗灰色に
変色する。床面からの出土である。

163号竪穴住居跡

(図版12-(2) 第241圖)

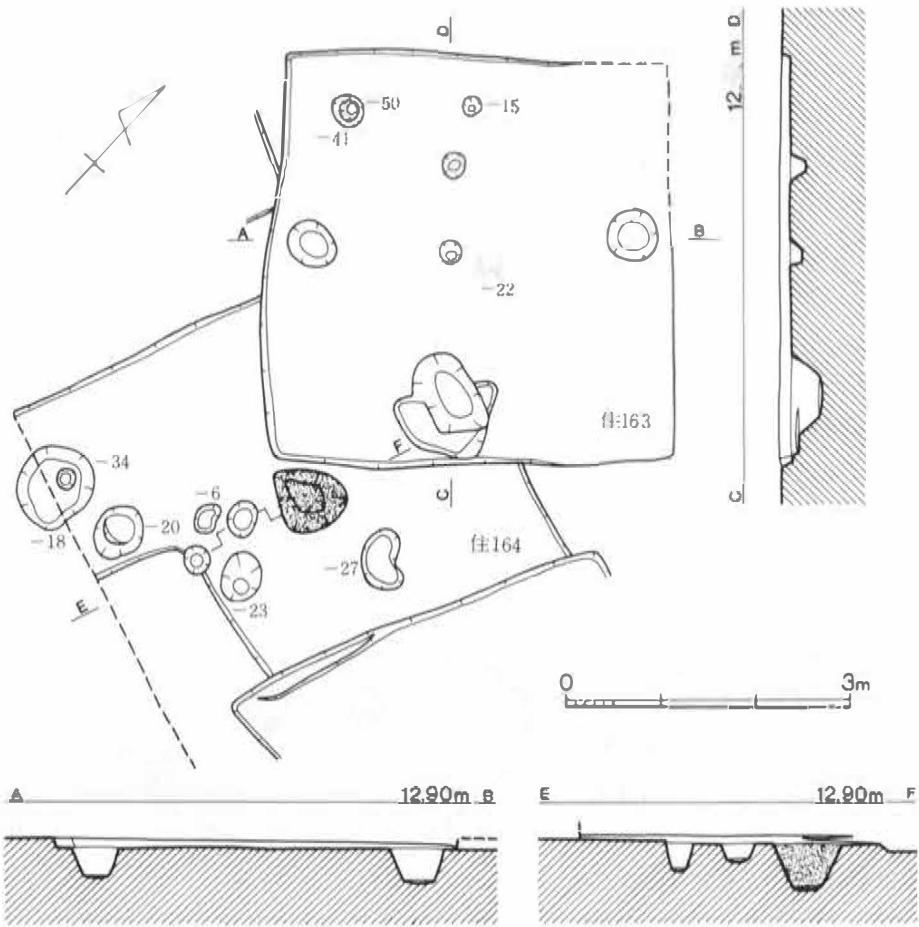


P-3・4区で検出した進行状態の
悪い縫穴住居跡で、164号住居を切り
ている。北東壁は遺存しておらず土色の変化で規模の確認が可能となつた。平面プランは方形を
呈し、規模は4.20m・4.25mを測る。床面積は17.76m²である。支柱は2本とも壁際にあり、柱間



第239図 159号、163号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

第240図 159号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)



第241図 163号、164号竪穴住居跡実測図(1/80)

は3.40mと長い。が址は確認できていない。南東壁際に不整形の屋内土壙を付設する。柱間軸の方位はN 48° Eを示す。

出土遺物は少なく鉢が1点ある。

柱 素

土 器 (第239図)

3の直口する鉢がある。胴下半は細まる。胎土は砂粒の他赤褐色粒子を含む。復原口径15.0cmを測る。

164号堅穴住居跡(図版12-(2) 第241図)

P-4区で検出した堅穴住居跡で、163号・178号住居に切られている。平面プランは長方形であろう。支柱は2本と思われ、その内の1本はベットに接する部分に掘られている。床面中央には深い炉を設ける。撤出した結果によるものであろう。南壁沿いには幅1.00mのベットを付設する。

出土遺物はない。

165号堅穴住居跡(図版12-(2) 第242図)

P-4区で検出した住居で総数4軒の重複があるが、この中で最も新しい住居である。平面形状は方形を呈し、規模は南・北壁長4.88m・4.75m、東・西壁長4.33m・3.95m、壁高15.0cmを測る。床面積は19.52m²である。支柱は4本で柱間はP₁-P₂が2.20m、P₁-P₃が2.30m、P₂-P₄が2.30m、P₃-P₄が2.30mを測り、規則的な配置をなす。

北西壁には「U」字状のカマドを付設するが、顕著な粘土の使用は見当たらない。カマド方向の柱間軸の方位はN 33°Wを示す。

出土遺物は少なく須恵器の壺蓋の他、砥石が1点ある。

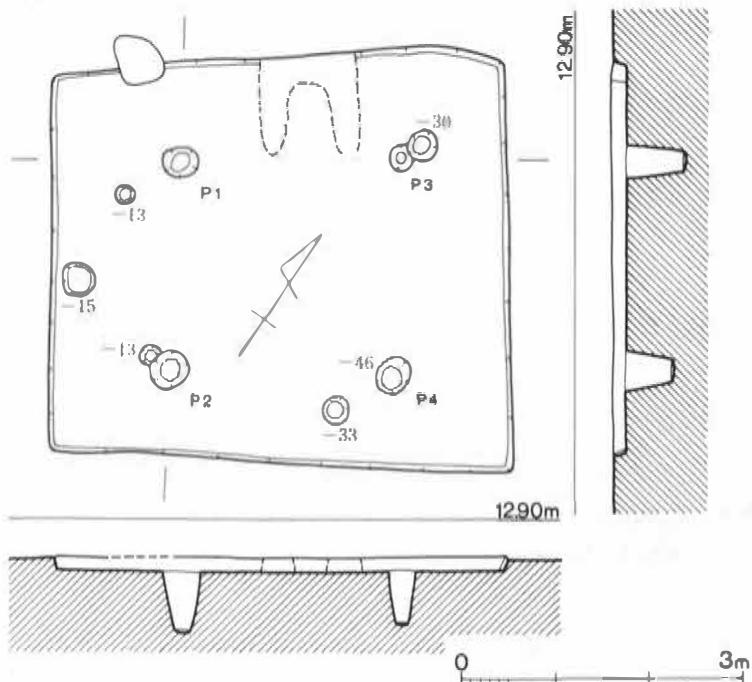
出土 遺 物

土 器 (第243図)

須恵器 口唇部を尖らせ、胴部には低い有段をなす壺蓋がある。

焼成・胎土とも良く、暗灰色の色調を有す。

調査はナデと回転箒削りで仕上げる。復原口径14.9cm、器高4.8cmを測る。



第242図 165号堅穴住居跡実測図(1/80)

石 器 (第243図)

硬質砂岩の石材を使用した仕上げ砥石の小片がある。現存での研面は1面で、全面に加熱を受け淡く赤変する。現長5.7cmを測る。

166号豊穴住居跡 (第245図)

当該住居は総数で4軒の重複があり、163号住居より古いが、169号、231号住居より新しい。平面形態は長方形を呈し、規模は南・北壁が3.40m・3.50m、東・西壁が5.00m・5.20m、壁高8.0cmを測り、遺存状態は良くない。床面積は16.97m²である。支柱は2本で、柱間は1.70mである。柱間に円形の炉を設ける。柱間軸の方針はN28°Eを示す。

出土遺物は甕がある。

出 土 遺 物

土 器 (第243図)

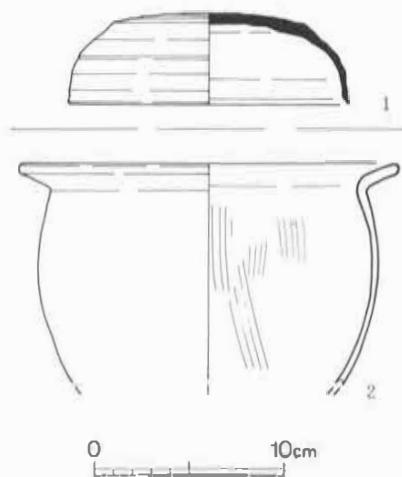
「く」字状に外反する口縁を有する甕で、最大径が口縁部にある。外面は二次加熱を受け黒く変色する。外面は摩耗し、内面は粗いハケが残る。

169号豊穴住居跡 (第245図)

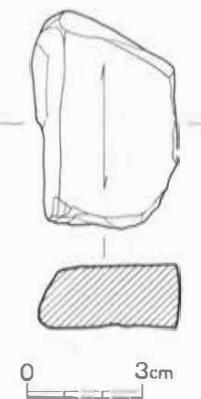
166号住居より古く、231号住居より新しい豊穴住居跡である。南側約1/3は耕作で削平を受けている。支柱は2本であるが、その内の1本は削平を受け消滅する。北壁沿いには一部ベットが残る。その他詳細は不明である。

出土遺物は土製玉杓子の柄がある。

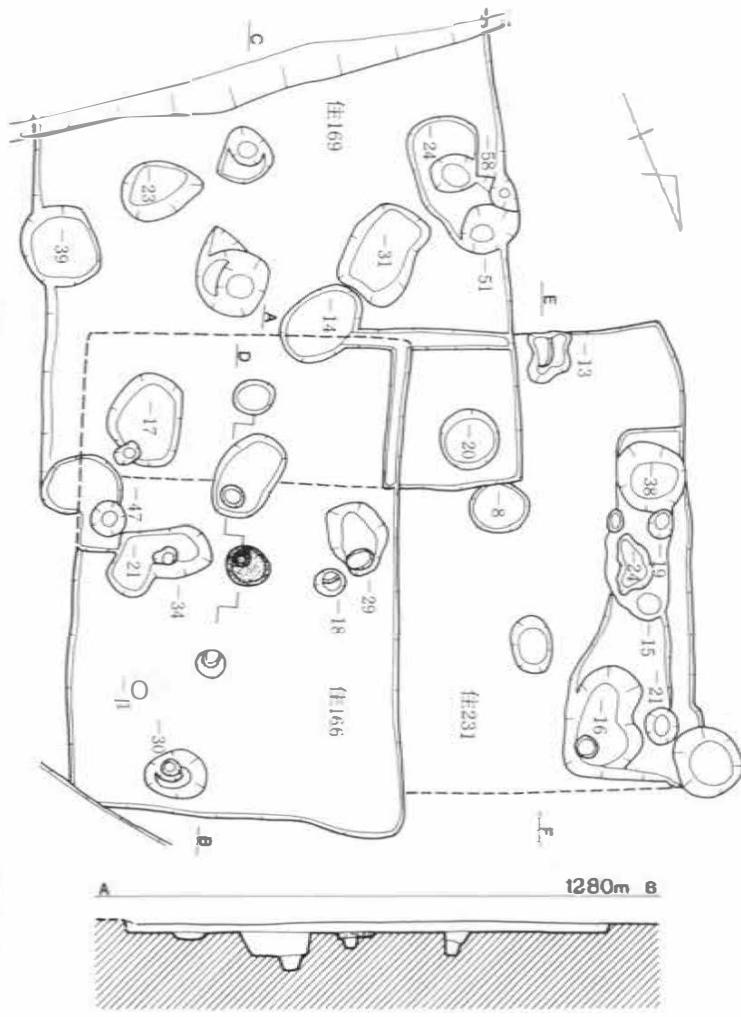
出 土 遺 物



第243図 165号、166号豊穴住居跡
出土土器実測図(1/4)



第244図 165号豊穴住居跡
出土石器実測図(1/2)



第245図 166号、169号、231号竪穴住居跡実測図(1/80)

土製品（第246図）

木杓子の柄の小片がある。丁寧なつくりで、胎土・焼成とも良い。
表面は風化しざらつき、二次燃焼を受けが変する。

170号竪穴住居跡出土遺物



0 3cm

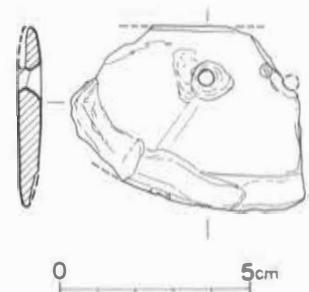
第246図 169号竪穴住居跡
出土土製品実測図(1/2)

袋足片岩の石材を使用した石庵丁片がある。2個の孔を穿っているが、前に穿孔途中の孔の痕跡がある。内孔径4.0mmを測る。表面は剝落が著しい。

171号竪穴住居跡 (図版11-(2)・24-(4) 第248図)

し-3区で検出した小型の竪穴住居で、172号住居と完全に重複する。平面形状は歪な方形を呈し、規模は南・北壁長3.70m・3.60m、東・西壁長2.90m・2.10mを測る。若干測過ぎたため実体を把握することはできない。

出土遺物は土師器の甕・塊、須恵器の杯蓋の他、石瓶丁片があるが混入であろう。

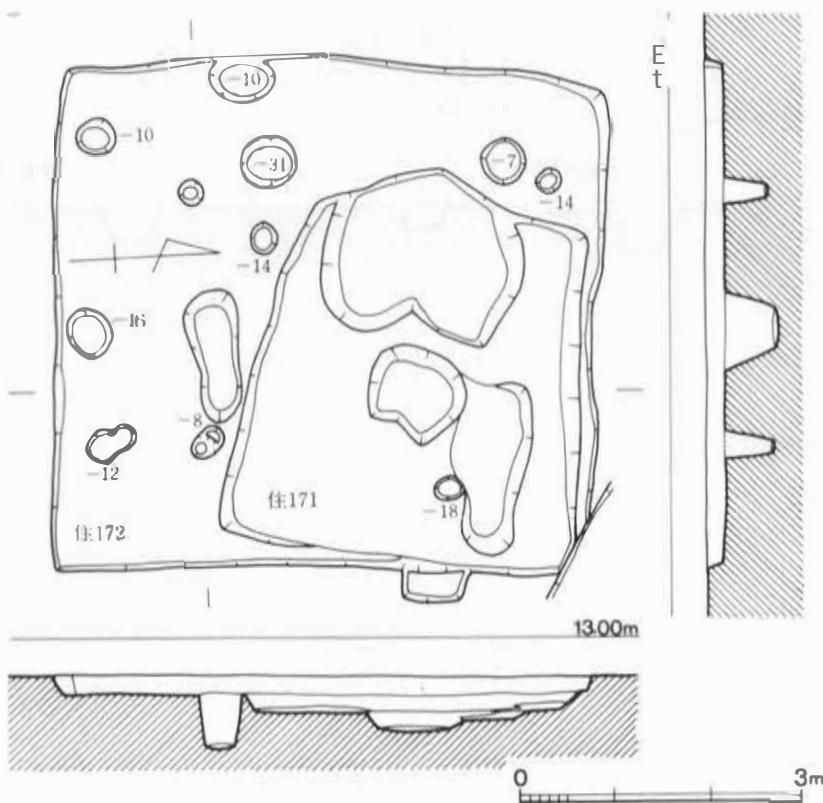


第247図 170号竪穴住居跡出土
石器実測図(1/2)

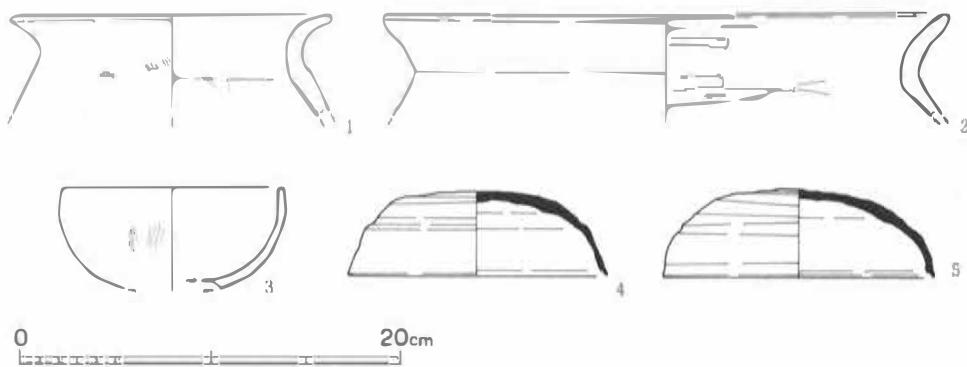
出 土 遺 物

土 器 (第249図)

土師器 1・2は大・小の甕の口縁片で、口縁は反り氣味に外反させる。内面は箇で削り、境



第248図 171号、172号竪穴住居跡実測図(1/80)



第249図 171号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

に稜を持つ。2は煤が付着する。1の復原口径17.0cm。2は30.0cmを測る。

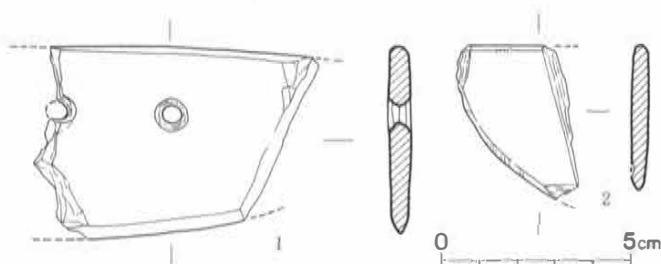
3は壺の破片で口縁を若干内弯する。胴部は丸味を有す。胎土は砂粒と赤褐色粒子を含む。復原口径11.8cmを測る。

須恵器 杯蓋が2個体ある。両者とも口唇部は尖る。胎土は細砂粒が多く、暗灰色の色調を有す。4の口径13.7cm、器高4.4cm。5は口径14.4cm、器高4.6cmを測り、支柱穴内から出土した。

石 器(図版60 第250図)

1・2の石庖丁片があるが混入である。1は縦縫縦灰岩製の大振の石庖丁で中期末頃の形状を示す。表面は平滑に研磨し、刃部は鋭く研いでいる。孔は外径8.0mm、内径5.0mmを測る。

2は硬質沙岩製の小片である。



第250図 171号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)

172号竪穴住居跡(図版11-(2)・24-(4) 第248図)

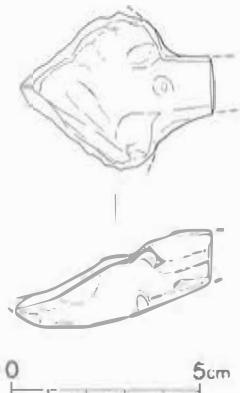
171号住居に約1/2を削平された竪穴住居である。平面形状は方形を呈する。規模は南・北壁長5.30m・5.10m、東・西壁長5.60m・5.70m、壁高20.0cmを測る。支柱穴は4本と考えられるが、北側の2本は削平されている。2本の柱間は2.70mである。その他詳細は不明で、出土遺物は土製玉杓子の破片があるが、混入であろう。土器は極めて少ない。住居の形状、配置状況から126

号、140号住居と同時期の所産であろう。

出土遺物

土製品(図版60 第251図)

土製玉杓子の破片がある。柄の部分は欠失する。胎土は良好で赤褐色粒子が目立つ。埋土中からの出土である。



第251図 172号竖穴住居跡
出土土製品実測図(1/2)

173号竖穴住居跡(図版12-(2) 第252図)

Q-4区で検出した竖穴住居跡で175号住居を切っている。平面形態は方形で、規模は南・北壁が4.20m、東・西壁が3.60m・4.05m、壁高5.0cmと浅い。床面積は16.11m²を測る。支柱は4本であるが、柱間軸が四辺と平行に配されておらず歪である。柱間はP₁-P₂が1.60m、P₁-P₃が1.75m、P₂-P₄が1.85m、P₃-P₄が1.70mを測る。

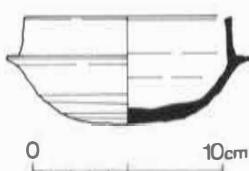
北壁の中央には「U」字状のカマドを付設するが、遺存状態が悪く不明な点が多い。主軸方位はP₁-P₂の柱間軸からN 8° Wを示す。

出土遺物は須恵器の坏身がある。

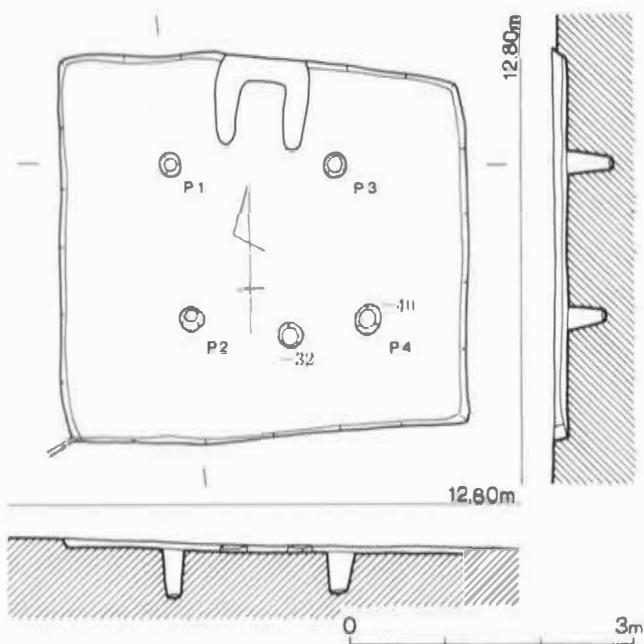
出土遺物

土器(第253図)

須恵器 壊身の完形品がある。口縁部は直に立ち上がり、口唇部は肥厚する。底部外面は左



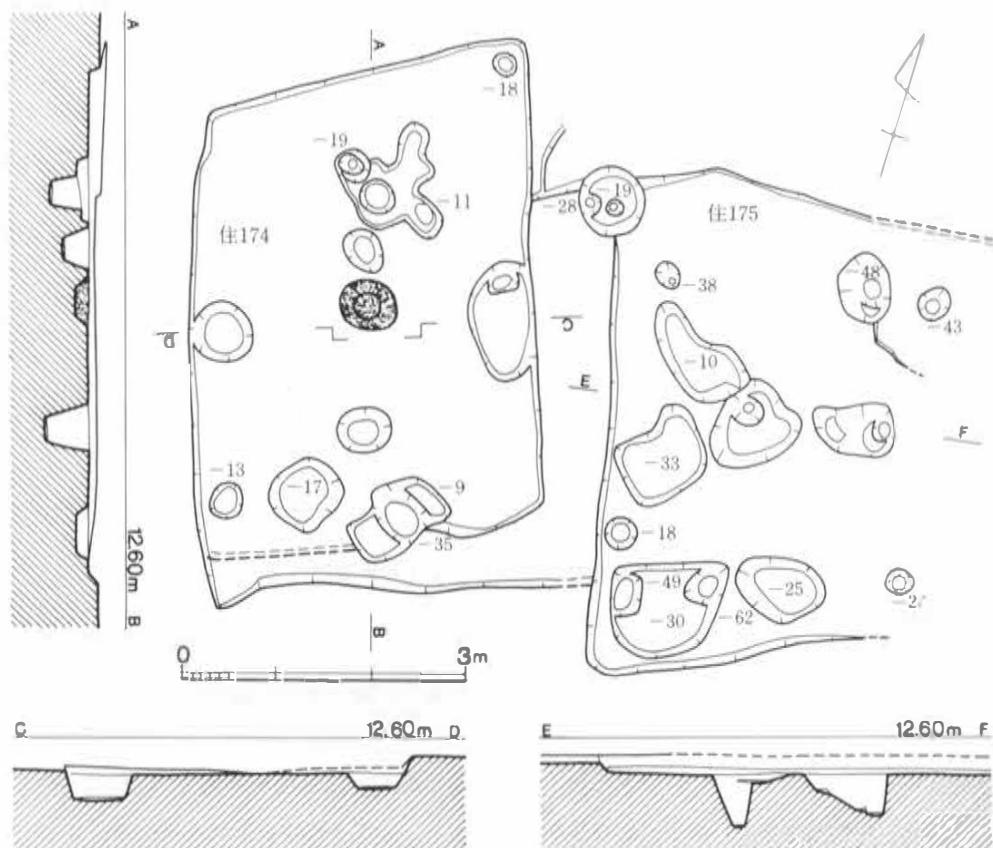
第253図 173号竖穴住居跡
出土土器実測図(1/4)



第252図 173号竖穴住居跡実測図(1/80)

廻りの回転鎌削りで仕上げる。外面には灰かぶりが認められる。口径11.0cm、器高5.6cmを測る。

174号竪穴住居跡(図版12-(2) 第25-1図)

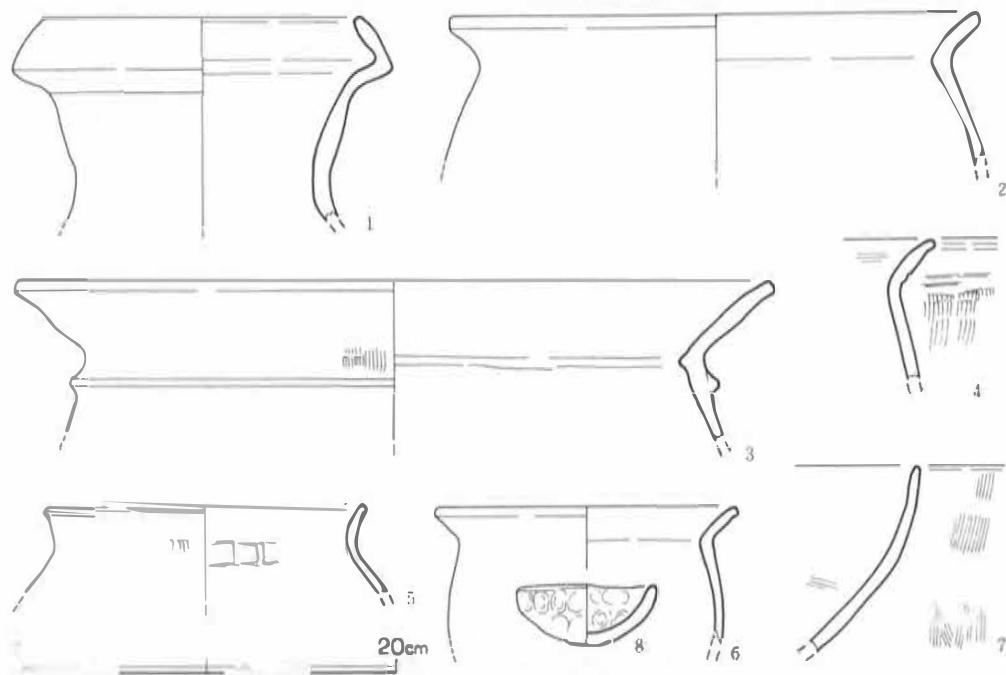


第254図 174号、175号竪穴住居跡実測図(1/80)

165号住居より古く、170号住居より新しい竪穴住居跡である。平面プランは長方形を呈するがやや歪である。規模は南・北壁が3.60m・3.40m、東・西壁が4.90m・4.60m、檜高6.0cm前後である。床面積は16.78m²である。支柱は2本で、柱間は2.50mである。床面中央には焼痕の薄いがを設けている。東壁際には屋内土壙を備え、片側に小ピットを掘込む。柱間軸の方位はN 13°Wを示す。

出土遺物は壺・甕・鉢・手握ね上器がある。

出 土 遺 物



第255図 174号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

土 器 (第255図)

1は複合口縁壺の復原実測である。口縁の屈折部の稜は明瞭である。頸部は細まる。復原口径16.6cmを測る。

甌は2～6がある。2の「く」字状に鋭く外反する口縁部に肩部はやや張る。復原口径28.0cm。3は長い口縁部を有し、頸部内面は僅かに突出する。頸部下には台形状凸沿を貼付する。全面に二次加熱を受け淡く赤変する。復原口径40.0cm。5は他に比べて口縁の外反度は鈍く、口唇部を肥厚させる。復原口径17.0cm。6は小振の甌で最大径が口縁部にある。全体が摩耗する。

7は大振の鉢の破片である。内外面にハケが残る。

8は手捏ね土器の完形品である。全面に指圧痕が残る。口径7.4cm、器高3.2cmを測る。

175号竪穴住居跡 (図版12-(2) 第254図)

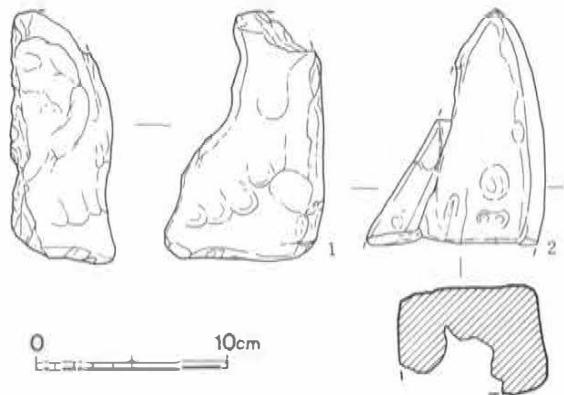
Q-4・5区で検出した竪穴住居で173号住居に切られている。耕作による削平が著しく不明な点が多い。

出土遺物は支脚片が2個体ある。

出土物

土製品（第256図）

支脚の破片が2個体ある。いずれも小片で全容は把握できない。強い二次加熱を受け極めて脆くなる。



176号竪穴住居跡

（図版27-（1） 第221図）

142号、143号、177号住居を切った

状態で検出した竪穴住居である。北側は削平され約1/3遺存する。支柱は2本でその内の1本は不明。南壁には梢円形の屋内土壌を付設し、土壌の外側には柱間1.60mの小柱穴を掘込んでいる。その他詳細は不明である。

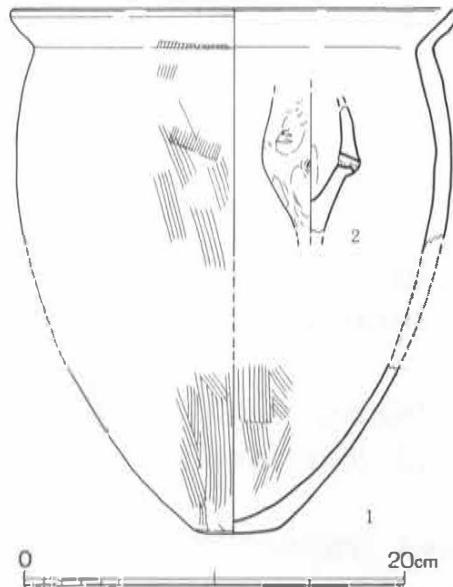
出土遺物は無い。

178号竪穴住居跡出土遺物

土器（第257図）

1は甕の復原実測である。胴の一部を欠損する。口縁部は短く内窓気味につくる。肩部から胴部にかけての張りは鈍く、底部は不安定な小さな平底を呈する。調整は粗いハケが残り、内面上半はナデ消す。復原口径23.6cm、底径4.5cm、復原器高27.7cmを測る。二次加熱で変色する。

2は用途不明の小型の土器で、口縁と底部を欠失する。底部は脚台が付く器種と考えられる。胴部には下方向に径5.0mmの孔を穿っている。祭具とも考えられる。屋内土壌内からの出土である。



石器（図版60 第258図）

第257図 178号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

整美なつくりの扁平片刃石斧の完形品がある。粘板岩の石材を使用している。長さ7.0cm、幅2.8cm、厚さ1.1cmを測る。

180号 縦穴住居跡（図版13-(1)・27-(2) 第259図）

当該住居周辺も激しい調査状況を示す。181号、186号住居を切りた状態で検出した縦穴住居で、平面形状は長方形を呈する。規模は長壁が6.60m、短壁4.60m・3.80m、4壁厚15.0cmを測る。床面積は27.78m²である。支柱は2本であるが、柱穴の掘方は方形を呈する。柱間は3.30mである。柱間の東西部には80cm×90cmの方形の穴¹を掘込み、3辺に10.0cm弱の土手を廻らす。中には炭化粒が充満していた。長壁には火の位置に対するかの様に不整形の焼付土塊を設けている。周辺は片側短壁から屋内土塗にかけて廻る。廻縁には幅1.00mのベット状置構を付設し、一方のベット上には2段掘りの屋内階級²を備えている。

出土遺物は陶灰の他、石廻了、磁石、土製瓦片などがある。

出土

土 製 器（図版60 第260図）

「○」で記された高杯の断部がある。口縁部は長くつくれ、胸部との屈折は明顯である。口¹に対して胸部は小さく扁平である。測定は横きとハケであろう。橙褐色の色調を行す。復原口徑33.0cmを測る。

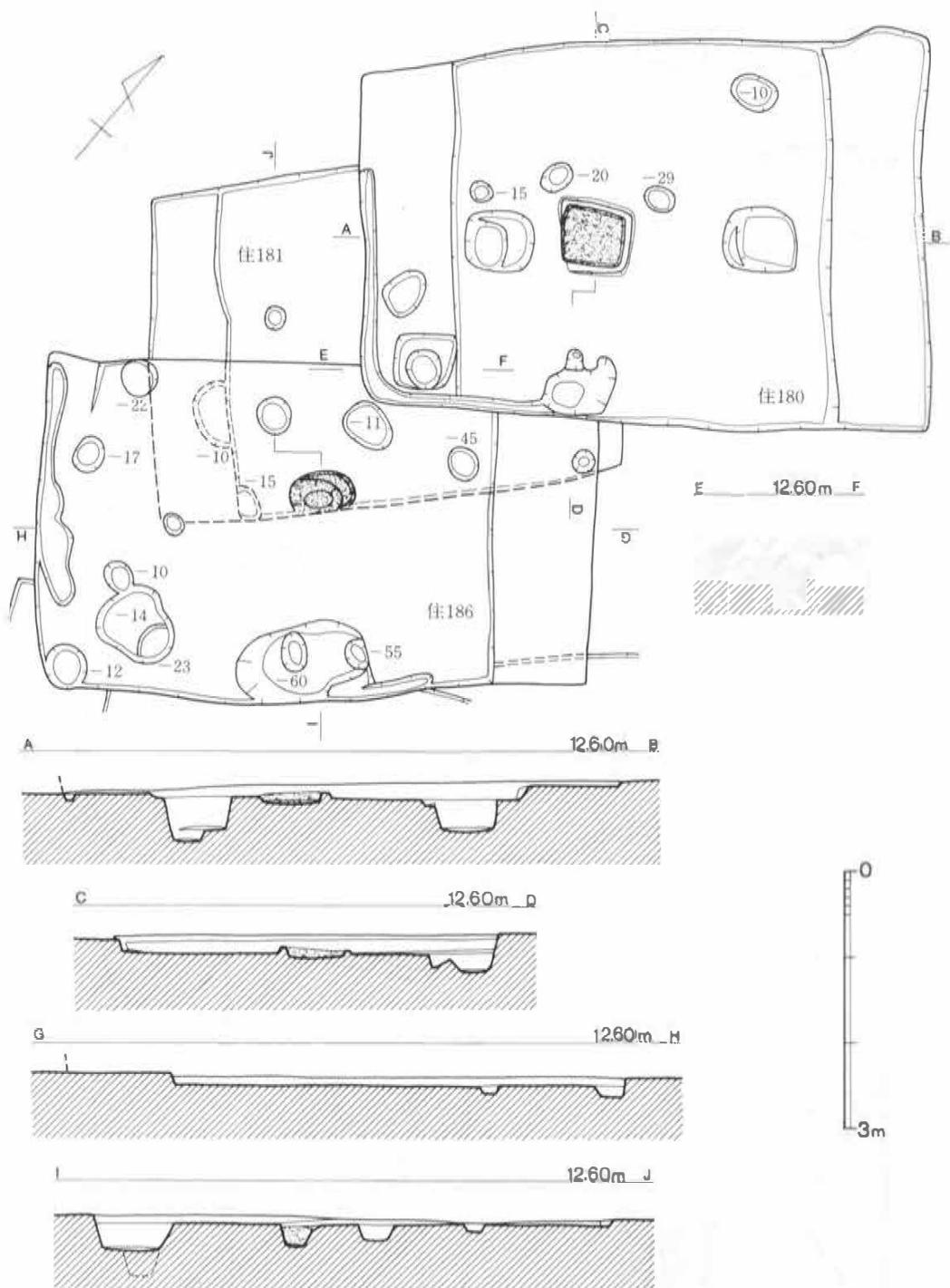
石 器（図版60 第261図）

「△」で記された石廻了¹である。表面は平滑に磨いている。出土土壤と時期が符りせず混入と考える。

2は良質縞泥片岩を使用した仕上げ砥石がある。研削は片面でいすれの面も研ぎ込んでおり[引]面をなす。現長13.2cmを測る。3は花崗岩質砂岩の仕上げ砥石の小片である。

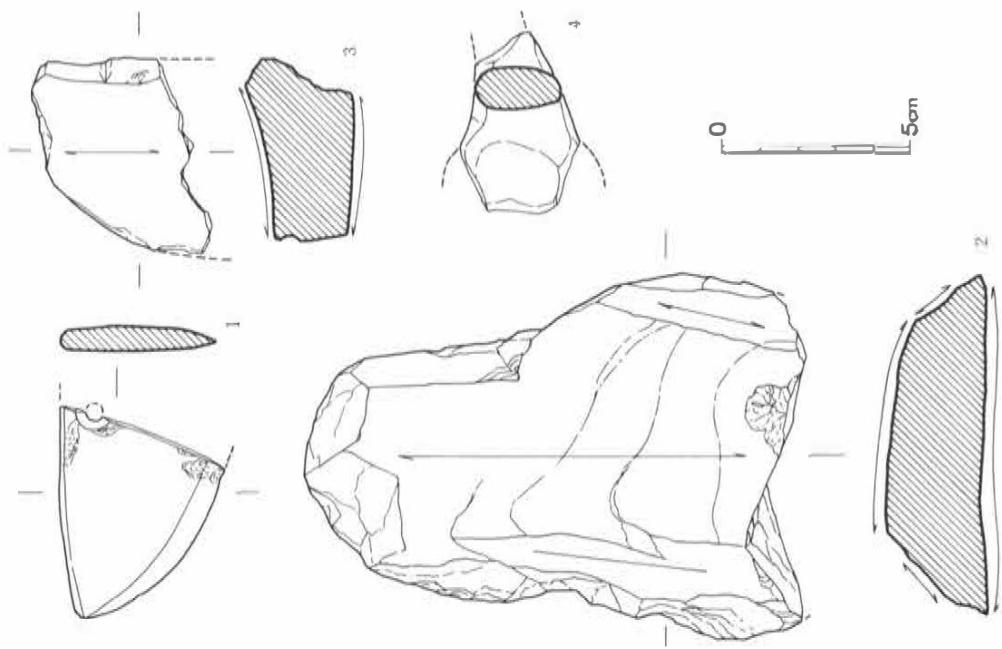
土製品（第261図）

4は土製玉杓子の小片で焼成があまく運行度は良くない。埋土中からの出土である。

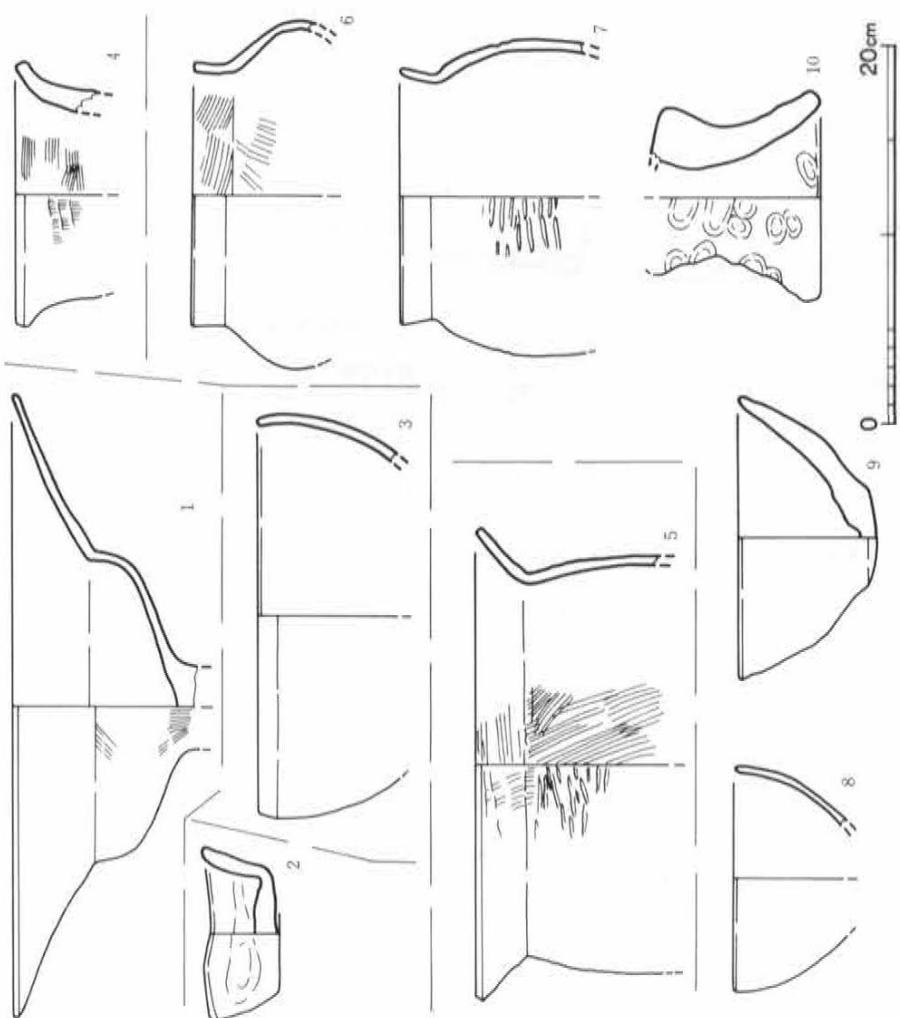


第259図 180号、181号、186号竪穴住居跡実測図(1/80)

第261圖 180号堅穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2)



第260圖 180号、182号、186号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)



181号竪穴住居跡（図版13-(1)・27-(2) 第259図）

180号、186号住居に切られた平面形状が長方形を呈する竪穴住居である。規模は不明確であるが、短壁3.80m、長壁が5.40mを測る。片方の短壁側には幅90.0cmのベットを付せる。床面上には炭化材の破片が若干認められ、火災に遭遇した可能性がある。その他詳細は不明である。

出土遺物は砥石、鉄器がある。

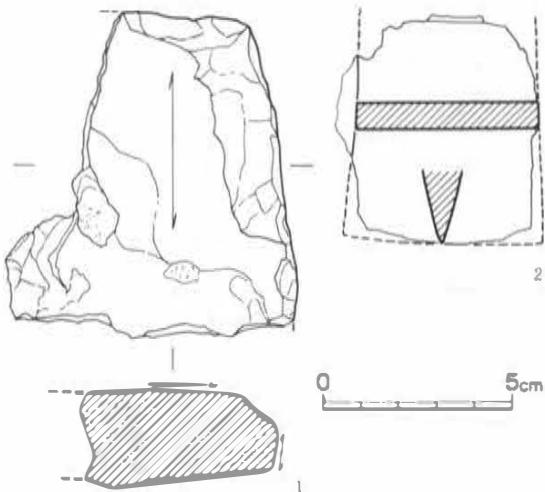
出土遺物

石 器（図版60 第262図）

1は砂岩製の荒砥がある。二次加熱を受け器面が剝落し、さらついている。現存の研面は2面であるが、研面の判別も不明瞭である。埋土中からの出土である。

鉄 器（図版60 第262図）

2は板状鉄斧の破片である。頭部と側部を欠く。刃部は鋭利に研出しているが、銹服れが著しい。幅4.8cm、厚さ7.0mmを測る。床面からの出土である。



第262図 181号竪穴住居跡出土石器、鉄器実測図(1/2)

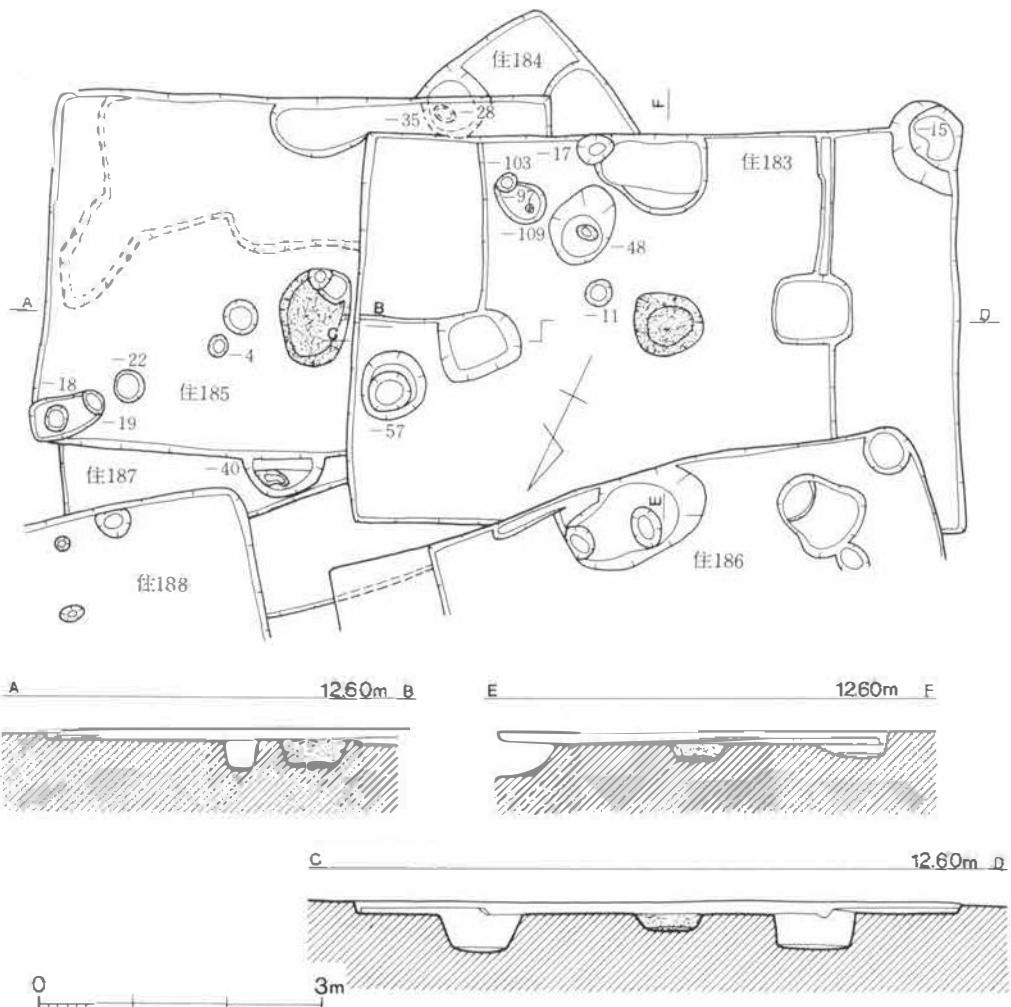
182号竪穴住居跡出土遺物

土 器（第260図）

2の鉢を模した手捏ね土器がある。器形はやや平で、器壁は厚い。胎土は他の土器同様、細砂粒と赤褐色粒子を含む。口径9.2cm、底径6.45cm、器高3.6cmを測る。

183号竪穴住居跡（図版13-(1)・27-(2) 第263図）

5軒の重複がある。186号住居に切られている他は3軒の住居を切っている。平面形状は長方形を呈し、規模は南・北壁6.30m・6.50m（復原）、東・西壁が4.15m・4.30m、壁高10.0cm前後を



第263図 183号～185号、187号竪穴住居跡実測図(1/80)

測る。支柱は2本でいずれもベットに接して據られている。柱間は3.60mである。床面中央には不整円形の炉を設ける。南壁中央には楕円形の屋内土壙を付設する。短壁には幅1.25mのベット状遺構を付設し、東側のベットは1/2の設置である。柱間での主軸方位はN58°Eを示す。

出土遺物は鉢の他、石庖丁、砥石がある。

出土遺物

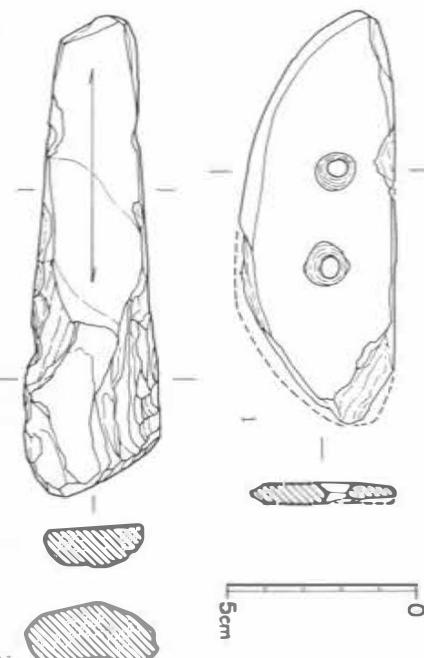
土器(第260図)

3は大振の鉢の破片である。口縁部は内側し、脇部は丸味を行す。胎土は細粒及び角閃石をや
や多く含む。褐色の色調をなす。極原(径20.8cmを測)、残存は1/3である。

石 器(図版61 第2644図)

1は雲母片岩製の石臼丁でやや吸質である。孔の穿ち方も粗く、つくりも難てある。現長10.9cm、幅4.1cm、厚さ6.0mmを測る。

2は雲母片岩製の砥石で完形である。砥石の一方は手で持ち易くするため荒く整形する。研削は3面を数えるが、裏面の使用は少なく、1箇所に鋭利な研痕が残る。長さ25.3cmを測る。屋内(塙から)の出土である。



第2644図 183号竪穴住居出土石器実測図(1/2、1/4)

184号竪穴住居跡出土遺物

土 器(第2604図)

4は小片であるため器軸の断定はできないが、鉢の口縁部であらう。口縁部は丸盛状に外反す。
・調整は内外面ともハケが残る。復原口径14.0cmを測る。

185号竪穴住居跡(図版27-(2) 第2634図)

R-2区で検出した竪穴住居で、183号住居に引られ184号、187号住居を切っている。東壁長3.70m、壁高8.0cmを測る。住居の南側は一段深く掘削し貼土を施していた。支柱は2本と思われるが、一本は検出できていない。床面中央には平整の跡を掘込んでいる。その他詳細は不明である。

出土遺物は鐵がある。

出土遺物

土器(第260図)

5の長い口縁部を「く」字状に外反する壺の破片がある。肩部は張らず長胴をなすと思われる。調整は外面が粗い叩き、内面は粗いハケが残る。胎土は砂粒・赤褐色粒子を含む。淡い茶褐色を呈する。復原口径25.0cmを測る。

186号堅穴住居跡(図版13-(1) 第259図)

総数6軒の重複がある。180号住居に切られ、181号から183号、187号住居を切っている。平面プランは長方形を呈し、規模は長壁が6.30m、短壁が3.80m、壁高10.0cm前後を測る。支柱穴は検出できていないが2本であろう。炉址は181号住居内で検出した。東側の壁沿いには幅1.20mのベットを付す。片側の長壁中央には梢円形の長軸1.55m、短軸90.0cmの屋内土壙を付設し、土壙の底面には2個のピットを掘込んでいる。ピット間は75.0cmを測る。

出土遺物は直口壺・壺・鉢・支脚がある。

出土遺物

土器(第260図)

6は直口壺の復原実測である。胴部は張り扁平となる。外面はナデ、内面に粗いハケが残る。復原口径14.0cmを測る。

7は口縁の外反度の鈍い壺の破片である。胴部には粗い叩き痕が残る。外面には二次加熱を受け黒くくすむ。復原口径13.6cmを測る。

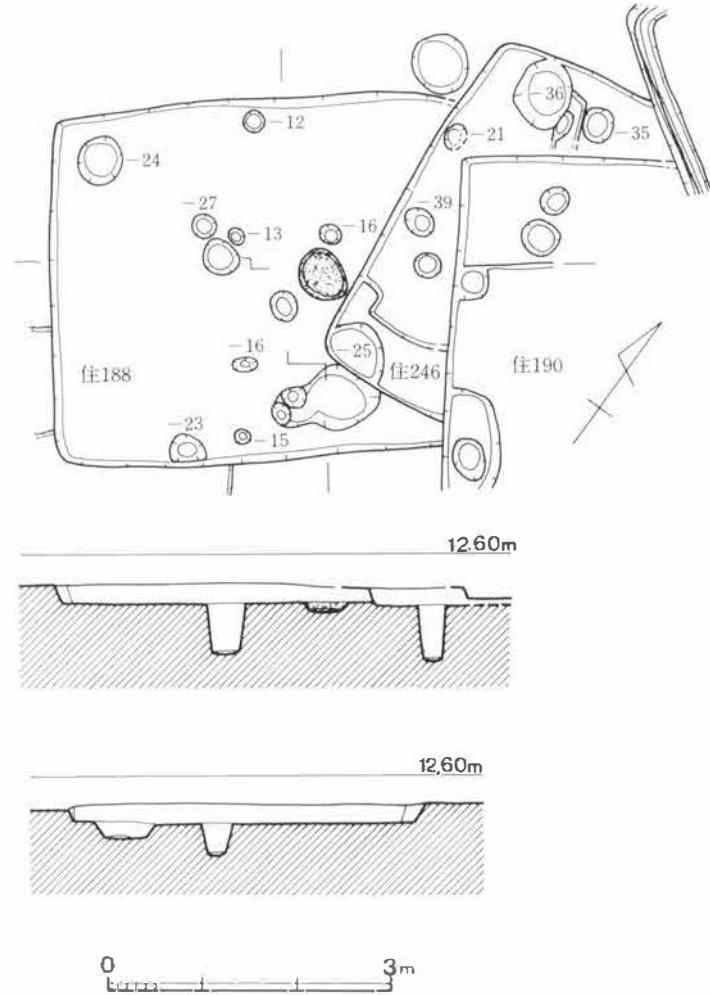
8・9は鉢で、8は器壁が薄く精製品である。9は器壁が厚い粗製で不安定なレンズ状の底部を有す。8の復原口径12.0cm、9は口径15.0cm、底径5.1cm、器高7.2cmを測る。

10は屋内土壙から出土した支脚片で1/3残存する。天井部が傾斜し孔を穿つタイプである。基部径11.0cmを測る。

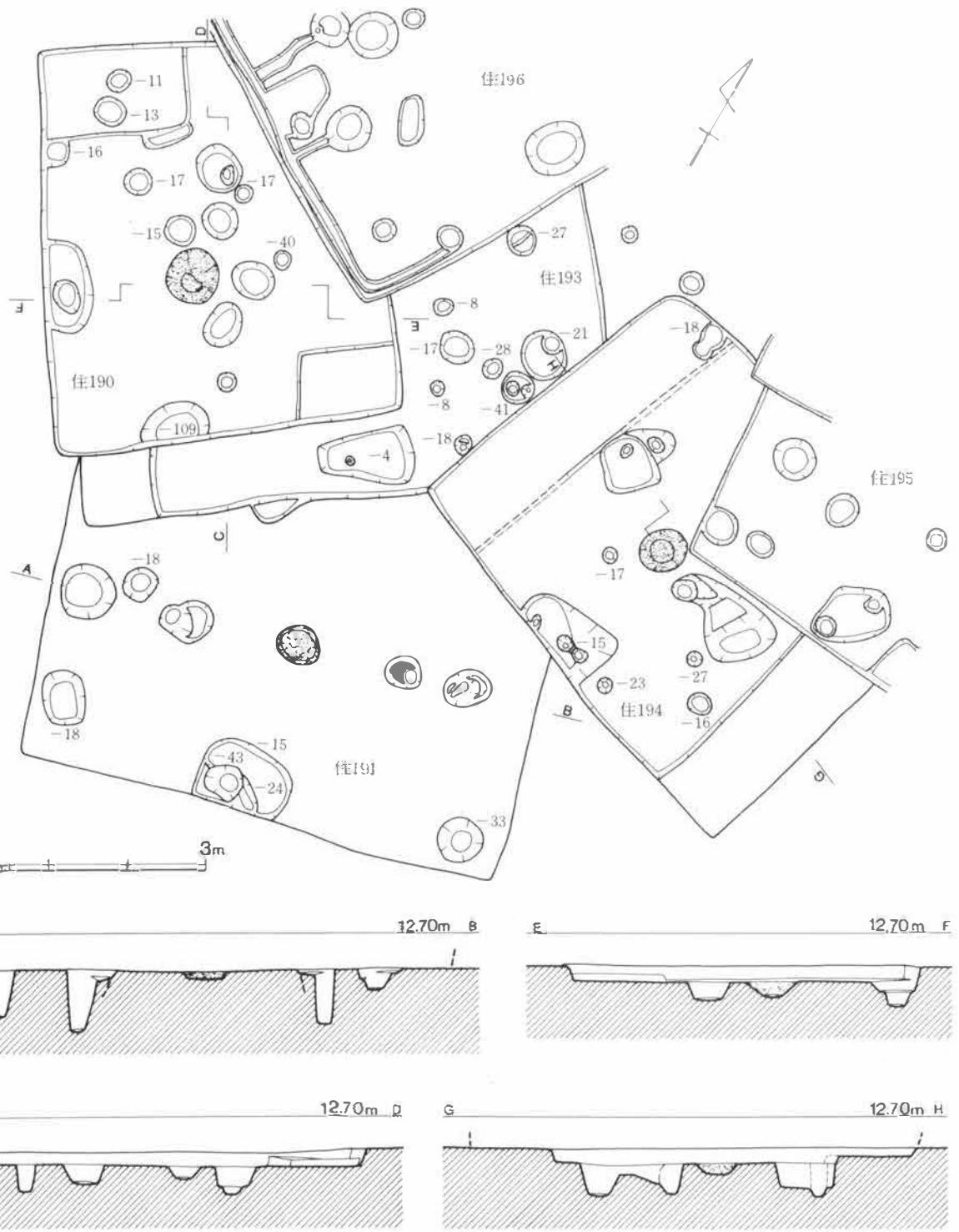
187号堅穴住居跡(図版13-(1)・27-(2) 第263図)

183号、185号、186号、188号住居のすべてに切られた堅穴住居跡で、遺存状態が極めて悪く実態は不明である。

出土遺物は皆無である。



第265図 188号、246号竪穴住居跡実測図(1/80)



第267図 190号、191号、193号、194号竪穴住居跡実測図(1/80)

188号堅穴住居跡 (図版13-(1)・27-(2) 第265図)

R-2区で検出した堅穴住居跡で、190号、246号住居より古く、187号住居より新しい。平面形状は長方形である。西壁長3.60m、壁高18.0cmを測る。支柱は2本でその内の1本は246号床面下で検出した。柱間は2.20mを測る。柱間に不整円形の炉を掘る。南壁傍には屋内土壙を備えてい、るが、壁際ではない。

出土遺物は砥石と鉄製鎌がある。

出土遺物

石 器 (図版61 第266図)

1は片岩質の砥石で完形品である。研面は1面で使用度は低い。長さ12.5cm、幅4.5cm、厚さ1.6cmを測る。

鉄 器 (図版61 第266図)

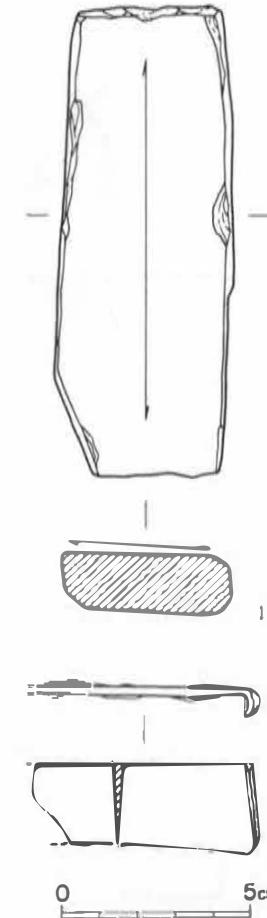
2は小振の鎌である。刃先部を欠失しており、柄の着装部は幅広となり小さく折曲げている。刃部は鋭利で、背の厚さ2.0mm、幅2.1cmを測る。

190号堅穴住居跡 (図版13-(1)・27-(2) 第267図)

当該住居の周辺は著しい調査状況を示す。総数6軒の重複があり、新旧関係は196号→190号→193号・246号→188号・191号である。平面プランは長方形を量し、西壁と南壁長は5.10mと4.40m、壁高15.0cm前後である。支柱は2本で、柱間は1.90mである。柱間にからやや西寄りに壠鉢状の炉を掘込んでいる。西壁中央には楕円形の2段掘りの屋内土壙を設ける。南短壁には部分的にベットを付設するが、南壁は調査時の掘過ぎで短くなる。

出土遺物は直口壺・甕・壺坏・鉢・器台の他、砥石、土製玉杓子の柄がある。

出土遺物



第266図 188号堅穴住居跡出土
石器、鉄器実測図(1/2)

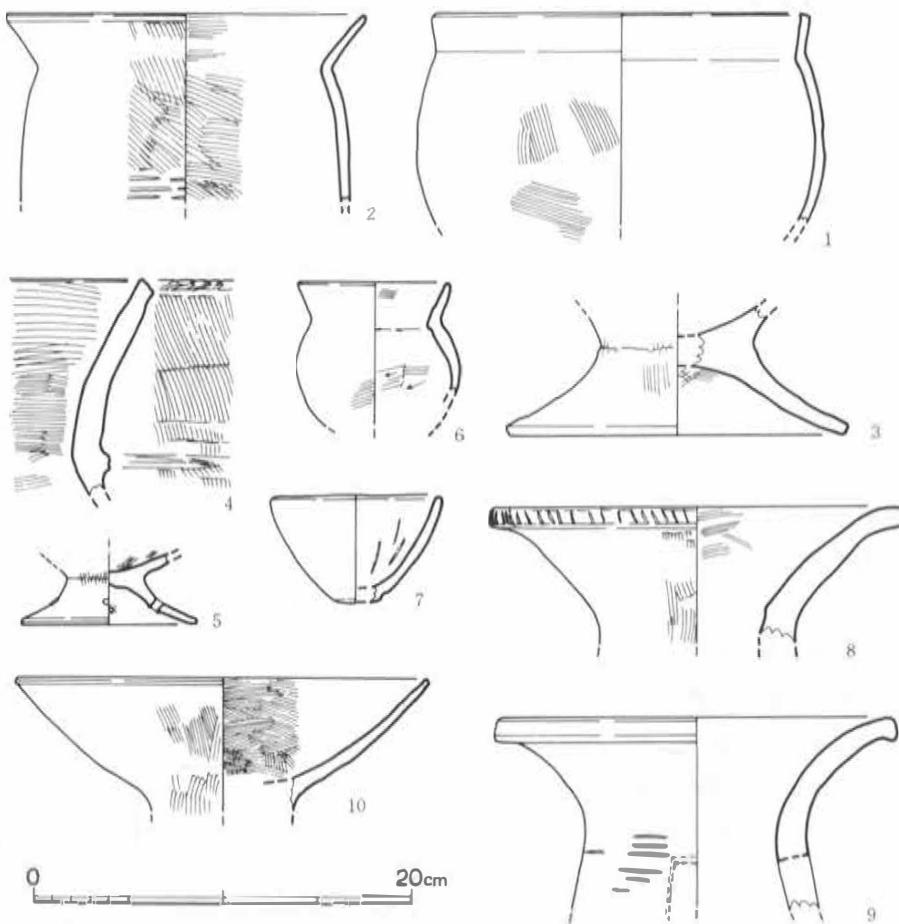
土 器 (図版61 第268図)

1は直口壺の復原実測である。口唇部を僅かではあるが肥厚する。外面にはハケが残り、内面はナデている。復原口径20.0cmを測る。

甕は長い口縁に張りの鈍い胴部をなす2、低い脚台を有する3、大型の甕で口唇部に刻みを配し、頸部に細い刻みを有す低い台形凸帯を貼付する4がある。2・4は荒いハケで仕上げている。2の口径19.0cm、3の裾部径18.0cmを測る。

5は精製された高杯でつくりが極めて良い。杯部は欠失し脚部のみが残る。脚部には1個の孔を穿つ。裾部径9.3cmを測る。

7は小型の鉢の破片である。底部は小さくしかも不安定な平底をなす。復原口径9.0cm、底径2.5cmを測る。



第268図 190号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

8・9は大型の器台の破片である。最小径が頸部にある。口縁は削鉋状に開き、8の口縁部には刻みを配する。9の口縁部は肥厚する。調査は8が内側面ともハケか残る。9は外側面に引き抜が残る。9は長方形の透しを配するが、破片であるため引抜でない。8の口径は22.0cm、9の口径は21.4cmを測る。

10は大型の壺か器台の破片である。底盤である。杯部は浅くつくれられ、器内も薄い。口縁部は僅かに肥厚する。工具にてハケを用いる。復原口径は21.8cmを測る。

石 器 (図版61 第269図)

1は砂岩製の砥石である。大半が欠失しており、研削は2.0cmを残す。現存長6.9cmを測る。

土 製 品 (図版61 第269図)

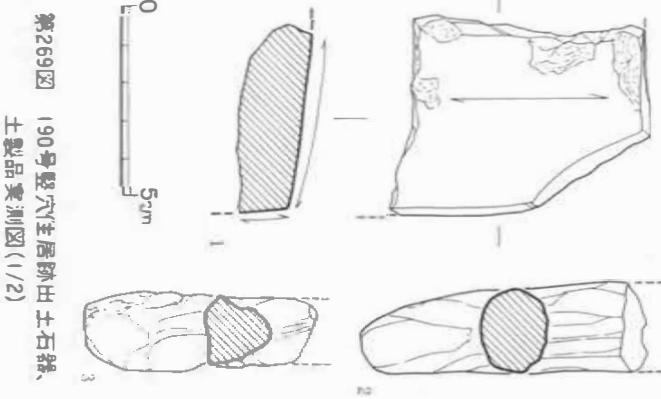
2・3の土製玉杓子の柄がある。つくりは精い。胎土は焼成された粘土を使用し、火照の山湖を行す。

191号 穴住居跡

(図版13-(2) 第267図)

190号、193号、194号住居に認められた堅穴住居跡で、平面プランが長方形を呈する。当該住居の壁はすべて削平された床面が盛りしている。南壁のみ計測でき6.20mを測る。支柱は基本的に2本であり、両者の間に割合的ない穴が認められる。柱間は3.10mを測り、中央には小型のか井を設ける。南壁には梢円形の壁内土礎を掘り、中には1個のピットが在る。

出土遺物は甕・甌・器台の他、



190号堅穴住居跡出土土石器、
土製品実測図(1/2)



第270図 191号堅穴住居跡出土土石器実測図(1/4)

砥石がある。

出土遺物

土器(第270図)

1の縁の口線は長く、しかも逆「L」字状に近い、形状をなす。頸部内面の破は明瞭である。最大径を口縁部に持つ。復原口径31.6cm。

2は壺の胴部片で、形状当辺を示す。外面がハケ、内面はサザで仕上げる。二次加熱を受け、焼結する。壺内土壤からの出土である。

3は壺台の裾部片である。裾部の剥きは純い。調整は外側が丸いハケ、内面は擦過痕が残る。裾部径13.0cmを測る。

第271図 191号堅穴住居跡出土石器実測図(1/4)

石器(図版61 第271図)

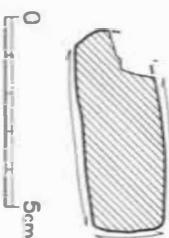
緑泥片岩製の砥石がある。中央部は径6.0cmの浅い窪があり、当初は石皿として使用されていたことが考えられる。現存での研磨は2面である。壺内土壤からの出土である。

193号堅穴住居跡(図版13-(2) 第267図)

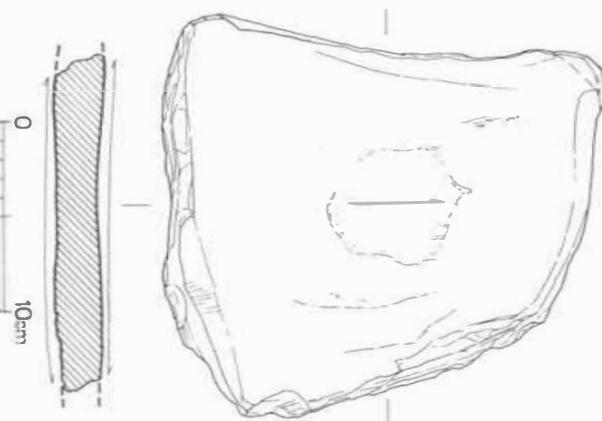
190号、194号、196号住居に切られた堅穴住居跡で遺作部分が少ないため、全容を捉えることはできない。現存から判断すれば、平面プランは長方形であろう。内壁滑らかには不整長方形の屋内土壇を掘る。西壁にはベットの一端が認めできる。

物は土器片があるが、図示可能な土器はない。

194号堅穴住居跡(図版13-(2) 第267図)



S-1・2区で検出した堅穴住居跡で、195号住居に約1/3の割合を受けている。平面形態は長方形を呈し、南壁及5.7m、西壁長4.10m、標高17.0cm前後である。支柱は2本で、柱間は2.90mを



第272図 194号堅穴住居跡出土石器実測図(1/2)



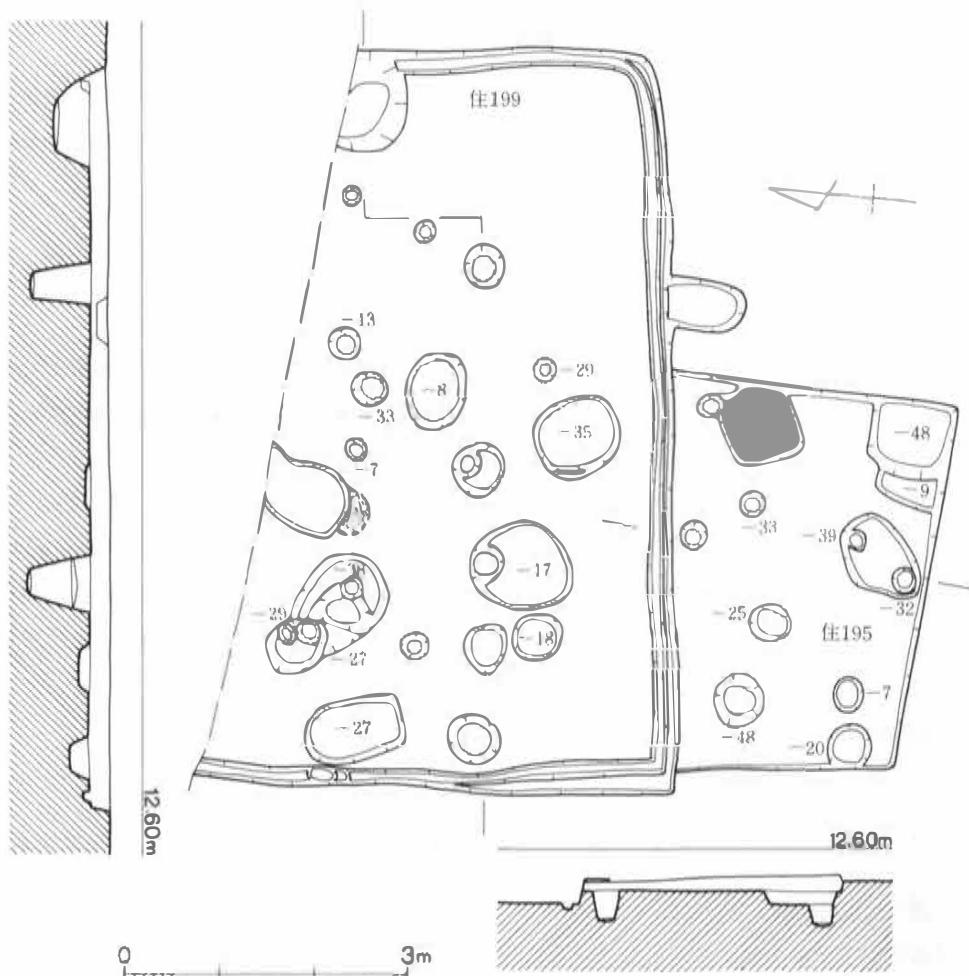
測る。床面のやや西寄りには円形の焼痕著しい炉址が認められる。南壁際には不整形な屋内土壙を掘り、小ピットが内外に4個在る。東・西壁には幅1.00mのベットを備えている。

出土遺物の主だったものは磁石が1点ある。

主 遺 物

石 器 (図版6) 第272図)

花崗岩質砂岩の仕上げ砥石がある。研面は4面を数える。研込みが激しく凹面をなす。長さ11.5cmを測る。屋内土壙の傍から出土した。



第273図 195号、199号竪穴住居跡実測図(1/80)

195号竪穴住居跡（図版13-(2) 第273図）

S-1・2区で検出した竪穴住居で、194号住居を切り、199号住居に切られ約1/2が削平を受ける。南壁長3.90m、壁高14.0cm前後である。支柱は断面で図示した柱穴が相当するか否か不明である。東壁には不整形の屋内土壌を掘込む。南東隅には深さ48.0cmの土壌を備え、屋内貯蔵穴の可能性がある。その他詳細は不明である。

出土遺物は高坏がある。

出土 遺 物

土 器（第274図）

1は長い口縁部を形づくる高坏の杯部片である。胎土は緻密で、焼成は堅固である。器面が擦耗し調整は不明瞭であるが、磨き仕上げであろう。明橙色の色調を呈す。復原口径31.0cmを測る。

196号竪穴住居跡（図版27-(2) 第276図）

R・S-1区で検出した竪穴住居跡で、平面プランは方形を呈する。北壁の一部が未掘であるが、壁長を復原すれば南・北壁5.50m・5.60m、東・西壁5.90m・5.70m、壁高20.0cm前後を測る。復原床面積は32.56m²である。支柱は4本を規則的に配し、北側の柱は建直しを計っている。各柱間はP₁-P₂が2.50m、P₁-P₃が2.30m、P₁-P₄が2.60m、P₂-P₃が2.65m、P₃-P₄が2.50m、P₂-P₄が2.65mを測る。かは床面中央部に設ける。南壁沿いには段違いに2本の柱穴を配し、柱穴と壁とは細い溝で繋がる。その間に浅い屋内土壌を設置する。柱穴間は1.30mを測る。周辺は北壁と東壁の一部が途切れると他は壁沿いに廻らす。P₁-P₃の柱間軸を採用すると住居の方位はN28°Eを示す。

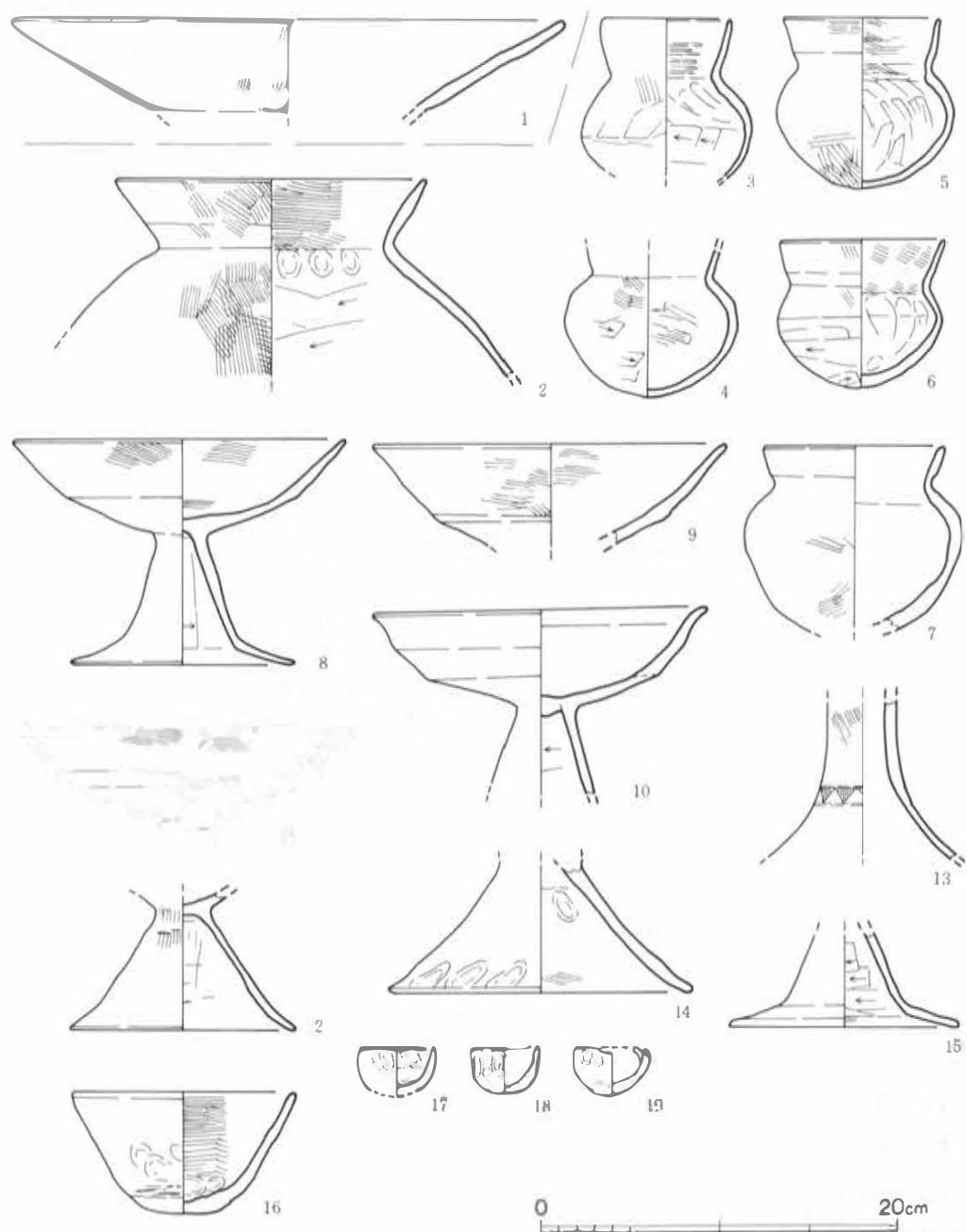
出土遺物は壺・小壺丸底・高坏・鉢・ミニチュア土器の他、石庖丁がある。

出 土 遺 物

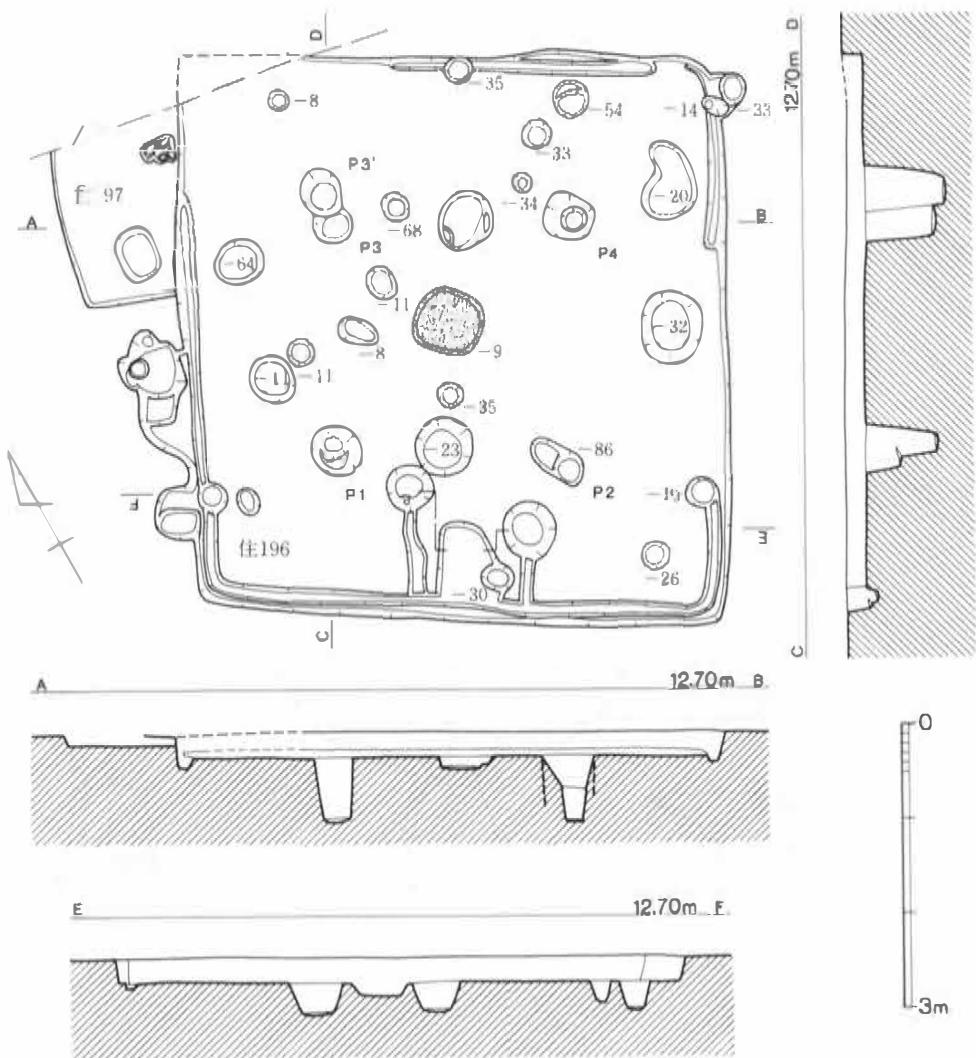
土 器（図版61・62 第274図）

2は壺で胴下半を欠損する。口縁は「く」字状に外反し、肩部の張りは強い。調整はハケと窓削りで仕上げる。復原口径17.5cmを測る。

3～7は小型丸底土器である。口縁部が僅かに内湾する3・5と最大径が口縁部にある6、短



第274図 195号、196号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



第275図 196号、197号竪穴住居跡実測図(1/80)

い口縁に胴部が張るやや大振でつくりの粗い7などがある。この内の6は古相を示す。胴部は扁平球を量する。すべて弱い二次加熱を受け黒くすむ。5の口径8.8cm、器高9.4cm。6は口径9.2cm、器高8.3cmを測る。

高杯は8～15がある。8は完形である。9を除くと杯部は浅くつくられ、体部の肩折は不明瞭である。胴部は直線的で口縁の外反度は鈍い。脚部は3タイプあり、8・15の柱状部が短く裾部で鋭く開くタイプと12・14のスカート状に開脚するもの、13のスマートな脚に鋸歯文を配するものがある。二次加熱が鮮明なものとそうでない高杯はある。8の口径18.7cm、裾部径12.5cm、

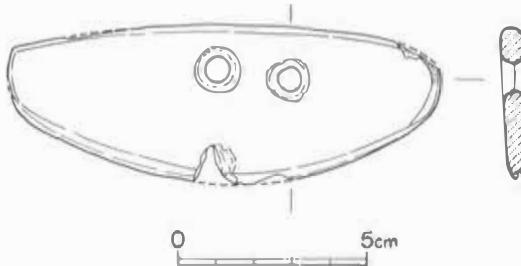
器高12.4cm。9の復原口徑19.6cm。11の復原口徑18.6cm。12の縁部徑12.6cm。14の柄部は17.0cm。15は12.8cmを測る。

16の鉢は混入である。僅かな平底を呈する。外面の一部に叩き痕が残る。弥生時代終末頃の所産であろう。

ミニチュア土器は17~19がある。ミニチュアにしては胎土は精製されている。

石 器 (第276図)

雲母片岩製の石庖丁があるが、混入である。形狀的には弥生後期の特徴を示す。孔は大きく粗く穿つ。孔の内徑6.0mmを測る。



第276図 196号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)

197号竪穴住居跡 (第275図)

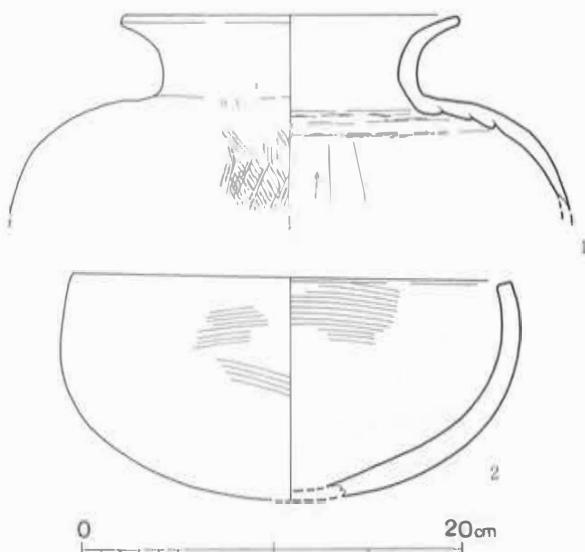
R-1区で検出した竪穴住居であるが、196号住居に切られ、しかも未掘部分が多く、実体は不明である。壁高10.0cmを測る。

出土遺物は無い。

199号竪穴住居跡 (図版13-(2) 第273図)

S-T-1区で検出した大型の竪穴住居跡で、194号、195号、198号住居を切っている。住居の1/2が調査区外のため完掘に至っていない。平面形態は方形であろう。南壁長が計測でき7.80m、檐高20.0cmを測る。支柱は4本で、その内の2本は調査区外にある。2本の柱間は3.10mである。床面の西寄りには焼痕が残る。東壁際には屋内土壙を付設する。現存の壁沿いには周溝を廻らす。

出土遺物は壺・鉢の他、砥石、鐵製鋤先、土製玉杓子の柄がある。



第277図 199号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

出 土 遺 物

土 器 (図版62 第277図)

1は頸部から口縁にかけて反り氣味に外反し、肩部は著しく張る壺である。調整は口縁が横ナデ、外面は粗いハケ、内面は箒で削る。肩部内面は未調整で粘土紐の接合面が残る。二次加熱を受けている。口径18.0cmを測る。

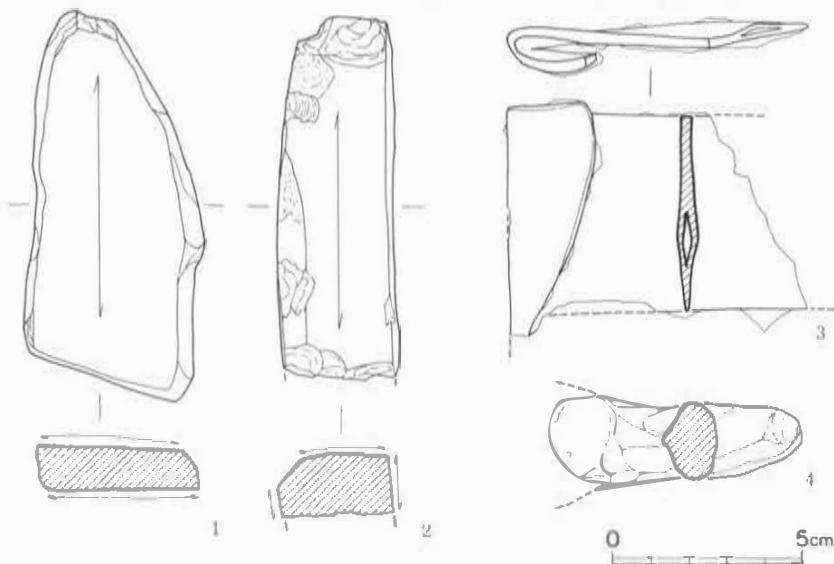
2は大振の鉢で口縁は内湾する。胴部は丸味を持ち、全体に器壁が厚い。復原口径23.1cm、器高11.6cmを測る。

石 器 (図版62 第278図)

1は雲母片岩質の砥石で研面は2面を数える。長さ10.3cmを測る。使用度は少ない。2は硬質砂岩製の仕上砥石である。研面は3面で、裏面は欠損する。加熱を受け黒づんでいる。現存長9.5cmを測る。

鐵 器 (図版62 第278図)

3の鋤先があるが、約1/3を欠失する。全体的に歪んでおり、中央には錆脹れが認められる。刃部は鋭利に研ぎ出しが、研ぎ減りが激しく袋部よりも内側に刃部がある。幅5.1cm、厚さ3.0mmを測る。



第278図 199号竪穴住居跡出土石器、鐵器、土製品実測図(1/2)

土製品（第278図）

4は土製の玉杓子の柄である。胎土は精製された粘土を使用し緻密であるが、つくりは粗い。柄の基部は扁平になり、杓子部との接合面が明瞭に残る。柄の長さ6.6cmを測る。

200号豊穴住居跡（図版13-(2)・27-(3) 第279図）

T-1区で検出した豊穴住居跡で201号住居を切っている。約1/2が調査区外で完掘に至っていない。南壁長3.90m、壁高17.0cm前後を測る。その他詳細は不明である。
出土遺物は殆ど無い。

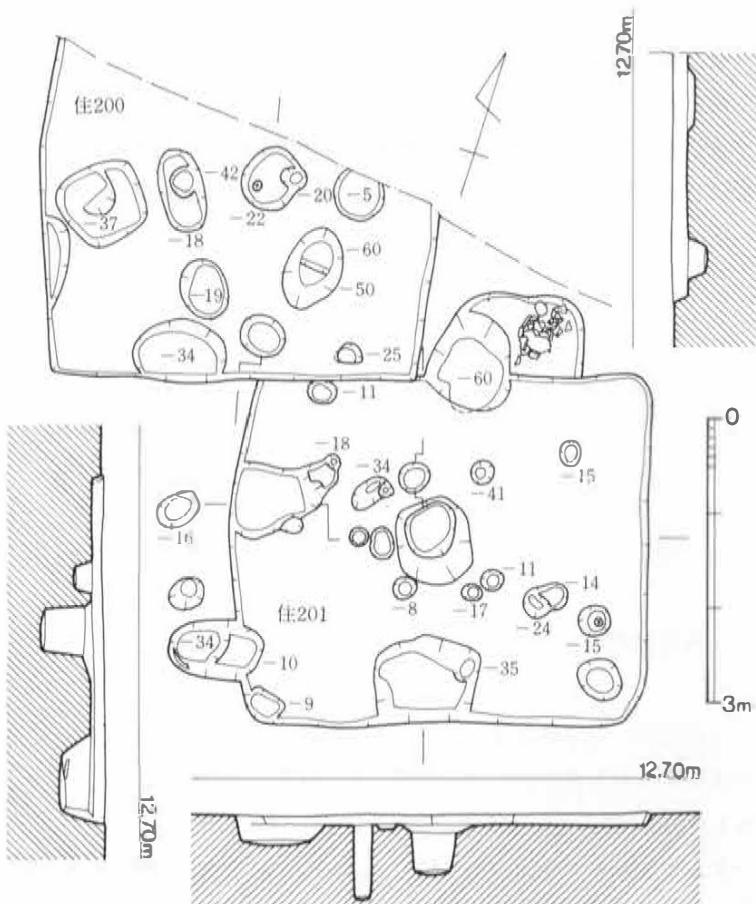
201号豊穴

住居跡

（図版13-(2)・27-

(3) 第279図）

200号住居に切られ、25号土塙を切った状態で検出した小型の豊穴住居である。平面形態は長方形を呈し、規模は南・北壁が4.10m、東・西壁が3.70m、壁高10.0cmを測る。床面積は14.97m²である。支柱の1本は明瞭で他の1本は検出できていない。床面中央には有段をなす深さ52.0cmのピットを掘り、その周囲に小ピットを配するが炉の機能は考え難い。



第279図 200号、201号豊穴住居跡実測図(1/80)

南壁際には不整形の屋内土壙を備え、一方に小ピットを配するが、両端に掘られていた可能性が強い。さらに西壁際にも不整形の土壙が掘られている。

出土遺物は脚台付土器の他、砥石（石皿）がある。

出土 遺 物

土 器 (第280図)

脚台付のコップ形土器がある。約1/2が残存する。胴部上半から口縁部にかけては内傾し、最大径が胴中央にある。脚部は欠失しているが低い脚台が付くであろう。外面にハケがみられる以外はすべてナデで仕上げる。復原口径6.8cmを測る。



石 器 (図版62 第281図)

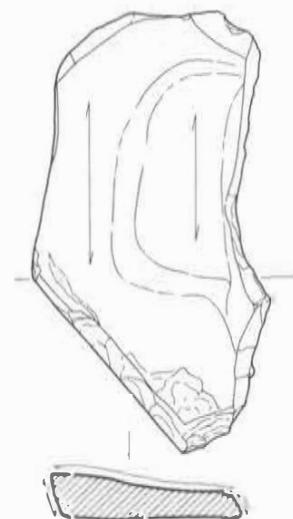
緑泥片岩の石皿を砥石として再利用したもので、約1/2を欠失する。中央には石皿様の凹面を残す。現存での研面は5面で、裏面は1/3を研面とする。現存長23.0cm、厚い所で2.3cmを測る。屋内土壙からの出土である。

第280図 201号竪穴住居跡
出土土器実測図(1/4)

202号竪穴住居跡 (図版13-(2)・27-(4) 第282図)

T・U-2区で検出した竪穴住居跡で、203号住居と7号掘立柱建物に切られている。平面プラン及び規模などは不明で、北壁は3.70mを測る。

出土遺物は無い。

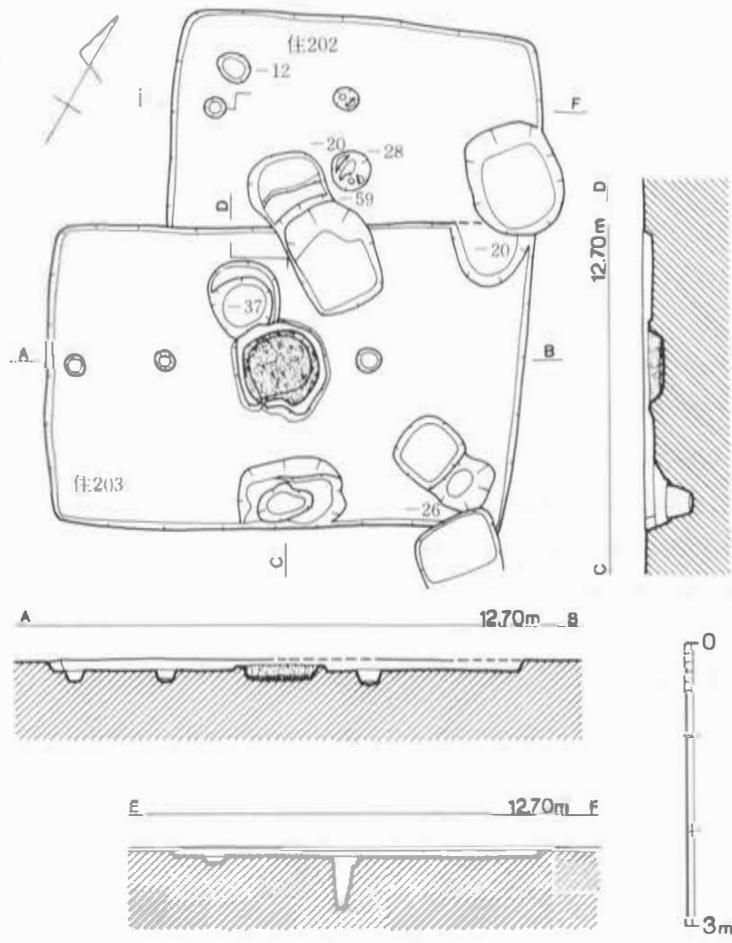


203号竪穴住居跡 (図版13-(2)・27-(4) 第282図)

7号建物に部分的な削平を受けているが、全容は把握できる。平面形状は長方形を呈し、南・北壁4.70m・5.00m、東・西壁3.20m・3.10m、壁高10.0cm前後である。床面積は14.69m²である。支柱は2本で2本とも浅い。柱間は2.15mである。柱間に径95.0cmの炉を設け、南側一部を除いて周縁に土手が廻る。内部は炭化粒が充満していた。南壁中央には不整梢円形の屋内土壙を配する。

出土遺物は壺の他、砥石が1点ある。

第281図 201号竪穴住居跡出土
石器実測図(1/4)



第282図 202号、203号竪穴住居跡実測図(1/80)

出土遺物

土器(第283図)

複合口縁壺の口縁片がある。口縁部は短く、内側させている。崩折部の稜は明瞭である。調整はハケとナデで仕上げる。復原口径16.1cmを測る。



石器(図版62 第284図)

砂岩製の中砥石の破片がある。残す面は表面と右

第283図 203号竪穴住居跡
出土土器実測図(1/4)

側面のみで他はすべて欠損する。現存での研面は2面を数える。現存長7.2cmを測る。埋土中からの出土である。

208号堅穴住居跡 (図版14-(2)・28-(2) 第285図)

当該住居周辺もかなりの調査状況が看取できる。総数5軒の重複がある。209号、211号住居を切っている。平面プランは長方形を呈し、規模は現存での南・北壁が5.20m・4.80m、西壁が4.80mを測る。西壁側には幅1.60m~1.90m、奥行1.30mの有段をなす造出し部が付設され、住居の出入口と考えられる。支柱は2本で、柱間は2.85mを測る。柱間に80.0cmの浅い炉を掘込んでいる。南壁際には方形の屋内土壙を備えている。土壙の床面の両端には柱穴を配し、柱間は85.0cmである。柱間軸での方位はN 90° Eを示し、主軸を東西にとる。

出土遺物は甕・鉢の他、砥石が1点ある。

出土 遺 物

土 器 (図版62 第286図)

甕には1~3がある。すべて「く」字状に外反する口縁を有す。1は肩部に最大径がある。底部は細まり不安定さを感じる。調査は円外面のハケが残るが、三次加熱を受け摩耗し黒くする。復原口径24.1cm、底径9.0cm、器高31.4cmを測る。2の復原口径25.0cmを測る。3は口唇部を肥厚させる。

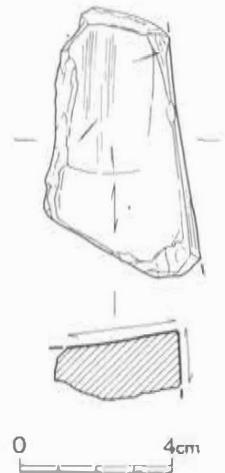
4は鉢の復原実測で、口縁を僅かに外反させ上面は内傾する。器壁は厚い。外面はナデ、内面に横ハケが残る。復原口径13.6cm、底径6.05cm、器高7.0cmを測る。

石 器 (図版63 第287図)

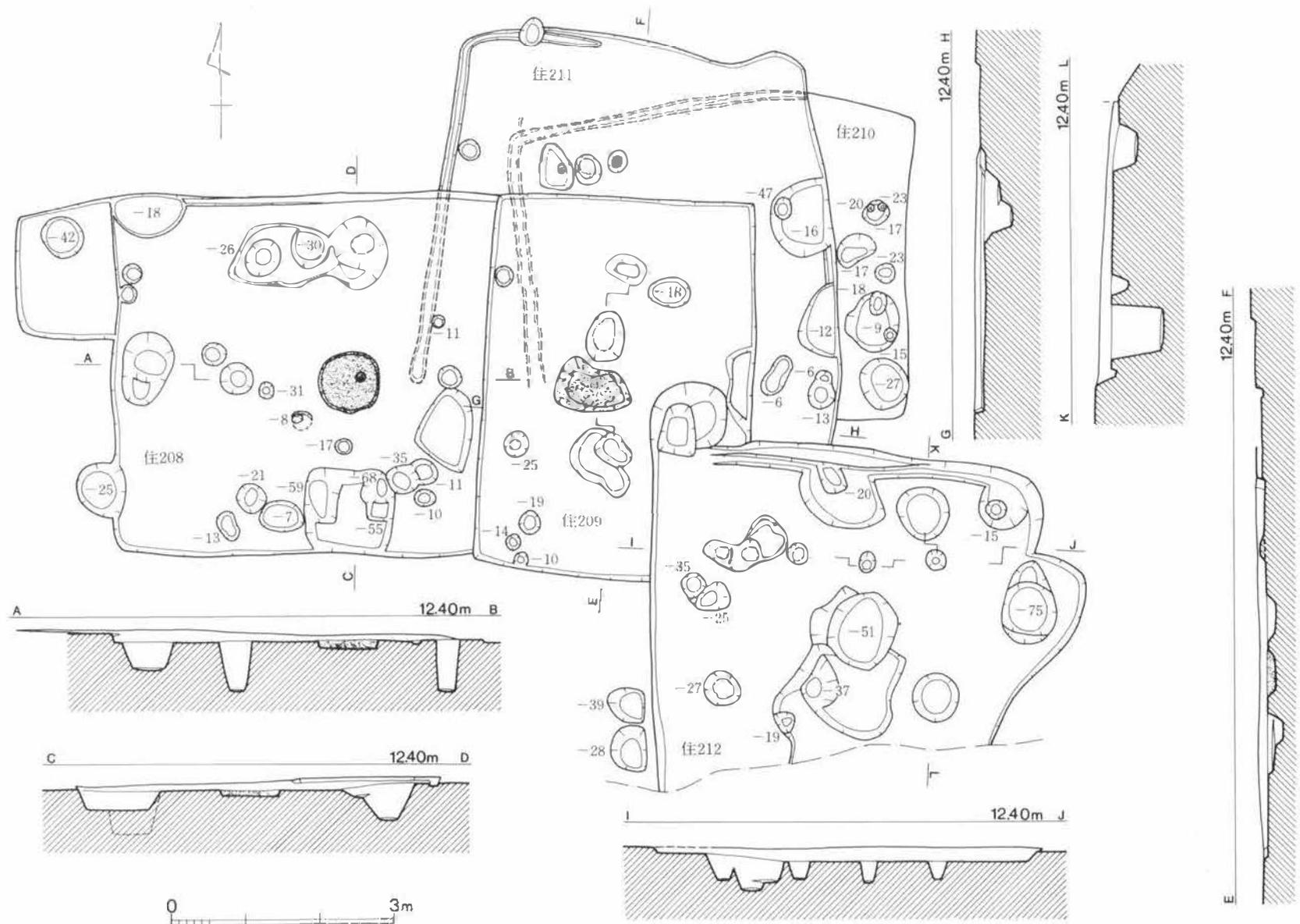
雲母片岩製のはぼ完形の砥石がある。研面は1面であるが、図示した裏面は一部を研面とする。表面は使用頻度が高く凹面をなす。灰緑色の色調を呈している。現存長17.4cmを測る。

209号堅穴住居跡 (図版14-(2)・28-(1) 第285図)

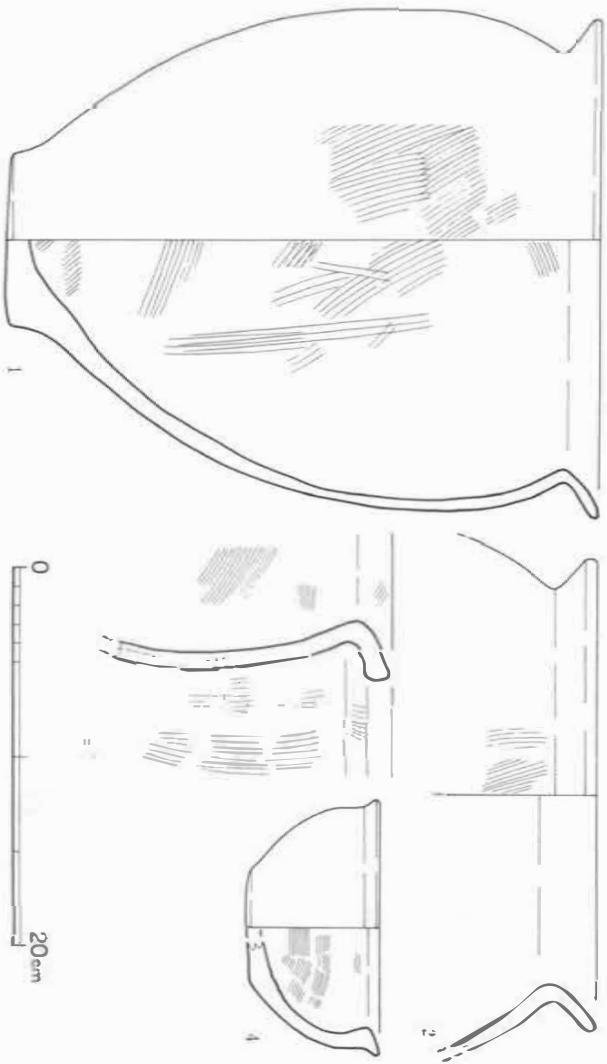
212号住居に切られる以外は他の全ての住居を切った堅穴住居である。平面形状は長方形を呈し、規模は北壁3.45m、西壁4.90m、壁高7.0cm前後を測る。支柱は検出できていないが2本であ



第284図 203号堅穴住居跡
出土石器実測図(1/2)



第285図 208号～212号竪穴住居跡実測図(1/80)



第286図 208号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

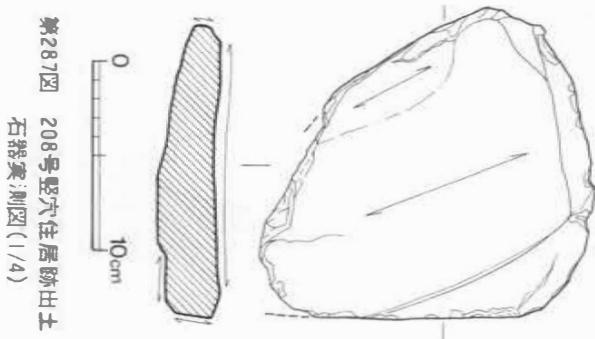
らう。現存での柱穴は支柱とはなり得ない。東壁沿いには不整形の壁内土壤を備える。壁内土壤の傍には黄褐色粘土の高まりがあり、住居の出入口と考えられる。床面中央には不整形の土壤を設ける。床面の北側には黄褐色粘土による小さな高まりを設けているが、機能的には理解できない。

出土遺物は無い。

210号竪穴住居跡 (図版14-(2)・28-(1) 第285図)

211号に大半が削平を受け実体が不明である。北壁と西壁沿いに周溝が廻る。東壁の壁長約10mを測り、形状から柱間軸を東西に向け建てられていたことが判る。

211号竪穴住居跡 (図版14-(2)・28-(1) 第285図)



第287図 208号竪穴住居跡出土
石器実測図(1/4)

210号住居より新しく、他の3軒の竪穴住居より古い、窓穴住居である。西壁沿いに周溝が廻ら

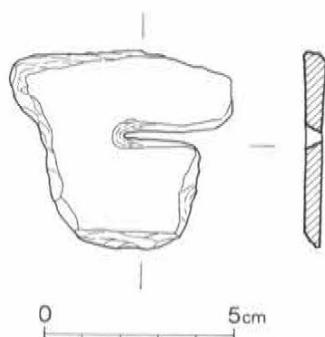
れ、柱間軸を南北にとる。その他詳細は不明である。

出土遺物は皆無である。

212号竪穴住居跡 (図版14-(2)・28-(1) 第285図)

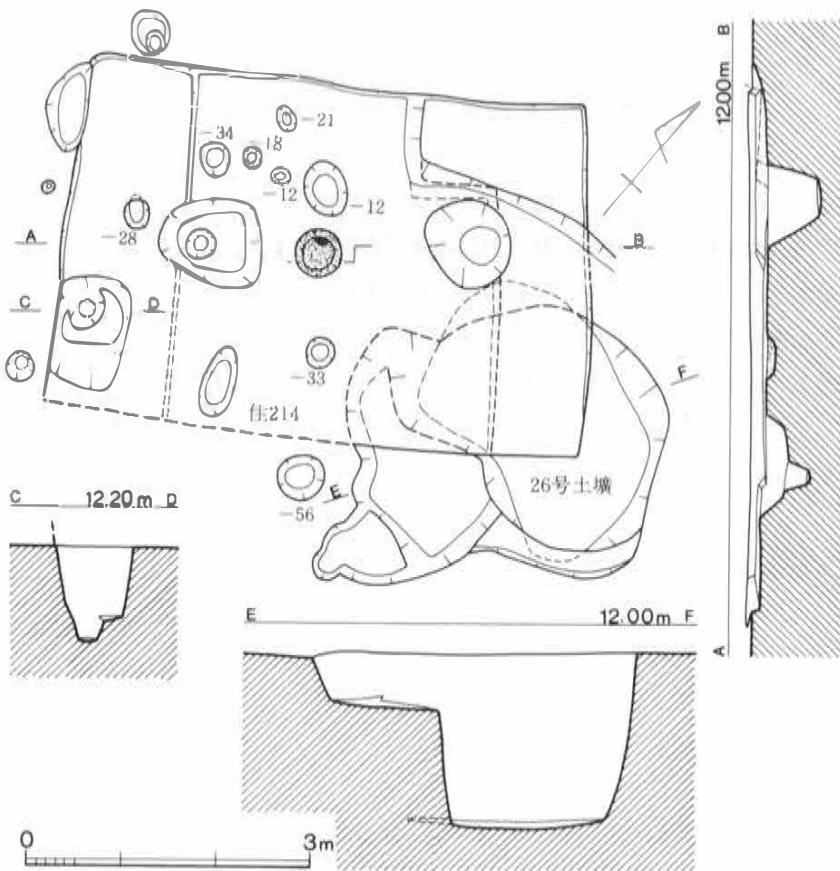
5軒の重複の中で最も新しい竪穴住居である。約1/2は耕作による削平を受ける。北壁長5.10m、壁高14.0cm前後である。その他詳細は不明である。

出土遺物は不明石器がある。



第288図 212号竪穴住居跡出土
石器実測図(1/2)

出土遺物



第289図 214号竪穴住居跡、26号土壌実測図(1/80)

石 器 (第288図)

雲母片岩の石材を使用した不明石器がある。中央部に深い抉りを入れている。周縁が欠失しており用途は明らかでないが、刃部を研削していた可能性がある。また、石庖丁の失敗作とも考えられる。住居内の柱穴からの出土である。

214号堅穴住居跡 (第289図)

T-4・5区で検出した堅穴住居であるが、南壁は耕作のため削平されている。26号土壌より新しい。平面プランは長方形である。北壁長5.20m、壁高10.0cm前後を測る。支柱は2本で、柱間は2.95mである。床面中央には径40.0cmの炉を掘込む。短壁沿いには幅1.10mのベット状遺構を付せるが、東壁のベットは「L」字状を呈する。西側のベット上には屋内貯蔵穴と考えられる土壌を掘り込んでいる。柱間軸の方位はN50°Eを示す。

出土遺物は無い。

217号堅穴住居跡 (図版28-(3) 第290図)

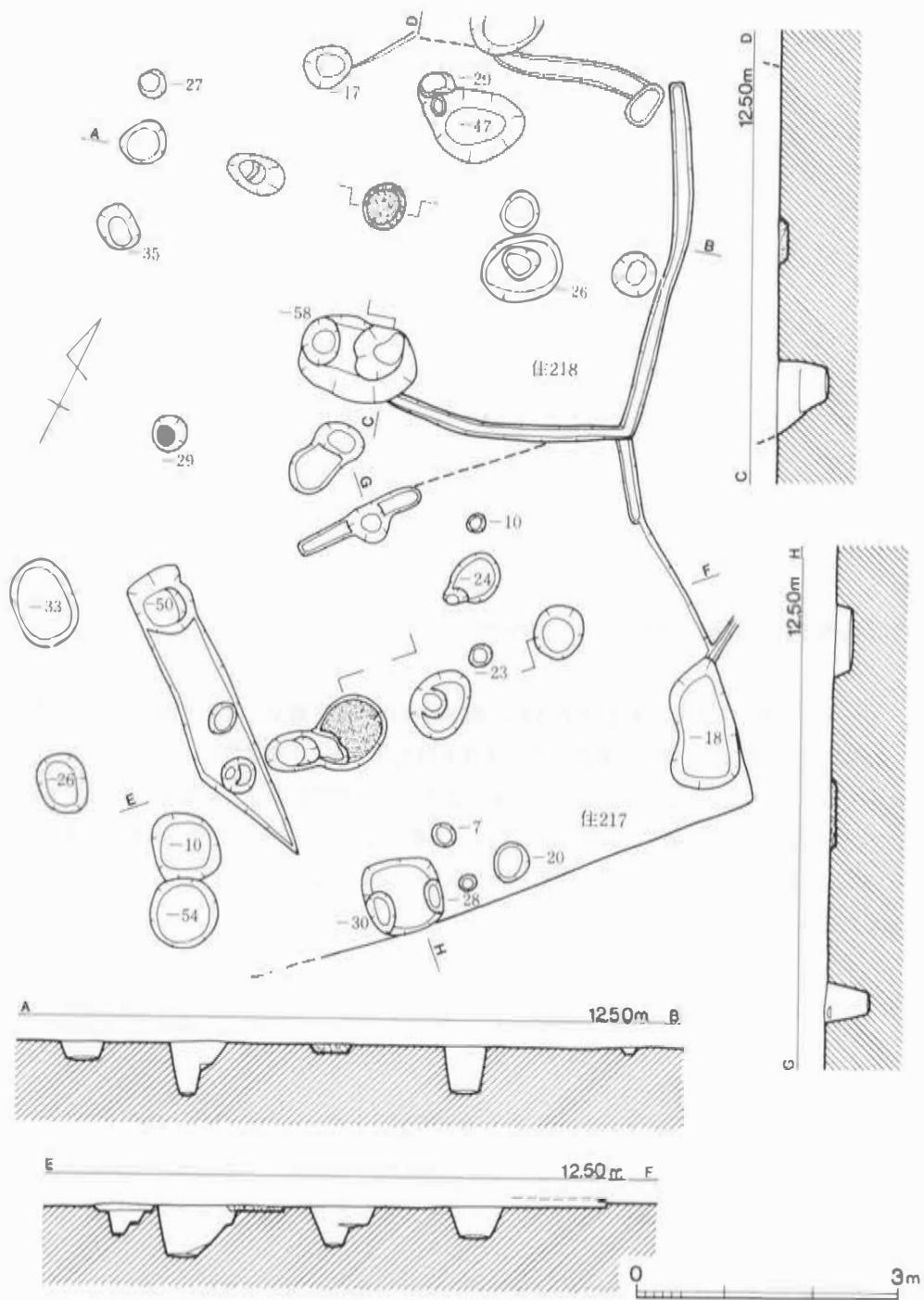
S・T-4区で検出した堅穴住居であるが、検出時既に床面が露呈しており遺存状態は極めて悪い。218号住居に切られており、平面プランは長方形を呈する。規模は明らかでないがかなり大型の住居である。支柱は2本で、柱間は1.70mである。炉は柱間にきっている。片側長壁の中央には隅円方形の屋内土壌を備え、両端には小ピットを配する。ピット間は60.0cmを測る。屋内土壌内からは石剣と砥石が出土した。南西壁沿いには床面よりやや深く掘削し上面に貼床を施していた。おそらく貼床ベットを付設していたのであろう。柱間軸の方位はN45°Eを示す。

第二章

石 器 (図版63 第291・292図)

1は頁岩質の石剣がある。茎と刃先部を欠失する。全体に刃鎧れが著しく、実際に武器として使用した可能性がある。実用武器として耐え得る頑強なつくりである。中央部の鎧は明瞭で丁寧に研摩し表面は平滑となる。現存長23.0cm、最大幅4.4cm、厚さ1.5cmを測る。屋内土壌内からの出土である。

2は花崗岩質砂岩の完形の手持砥石（仕上げ砥）である。研面は3面を数え、表面は使用度が著しく凹面をなす。長さ12.0cmを測る。黄白色を呈し、屋内土壌内から出土した。



第290図 217号、218号竪穴住居跡実測図(1/80)

218号竪穴住居跡

(図版14-(1)・28-(4) 第290図)

—3区で検出した竪穴住居 217号住居跡に、より床面が露呈していた。而アランは長方形を示す。支柱は2木で、柱間距は3.10mと長い。床面中央には焼痕の残るかきを設ける。内壁際には長軸1.30m、短軸90.0cmの内土壌を掘り込み、両端には柱間70.0cmの柱穴を掘る。開口部約1/2が残存する。(註)この付居の方方位N73°Eを示す。

出土遺物は變がある。

出土遺物

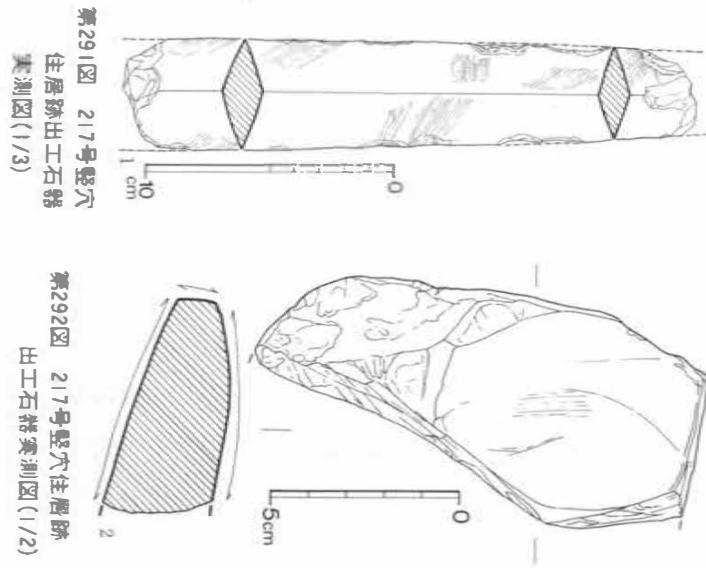
土器(第293図)

1～3は甕であるが、1・2はダイブが異なる。両者とも「く」字形に口縁を外反させるが、1は肩部から胴にかけての張りは強く最大径が胴部にある。2は肩部が張らず、最大径を口縫部に持つ。両者の調整は内面にハケを施す。1の復原口径22.2cm。2の口径は28.0cmを測る。3は甕の底部で一次加熱を受け暗赤褐色に変色する。底径7.9cmを測る。いずれも屋内土壙の堆土中から出土した。

220号竪穴住居跡

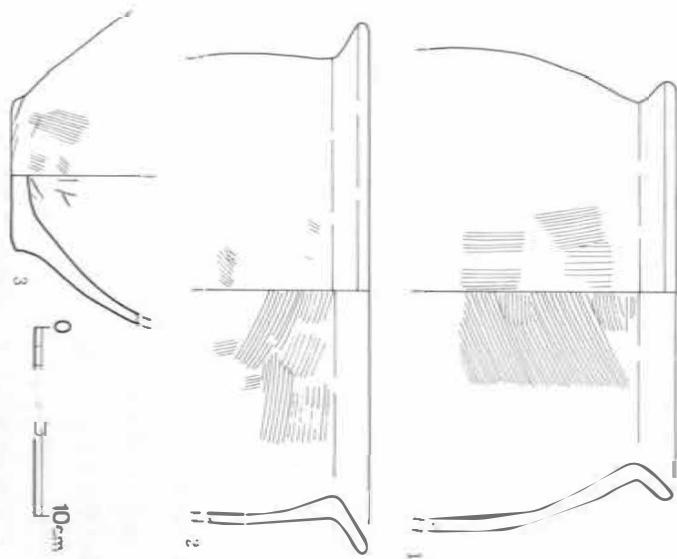
(図版15-(1) 第294図)

U-3区で検出した竪穴住居跡で221号住居に切られている。面形状は



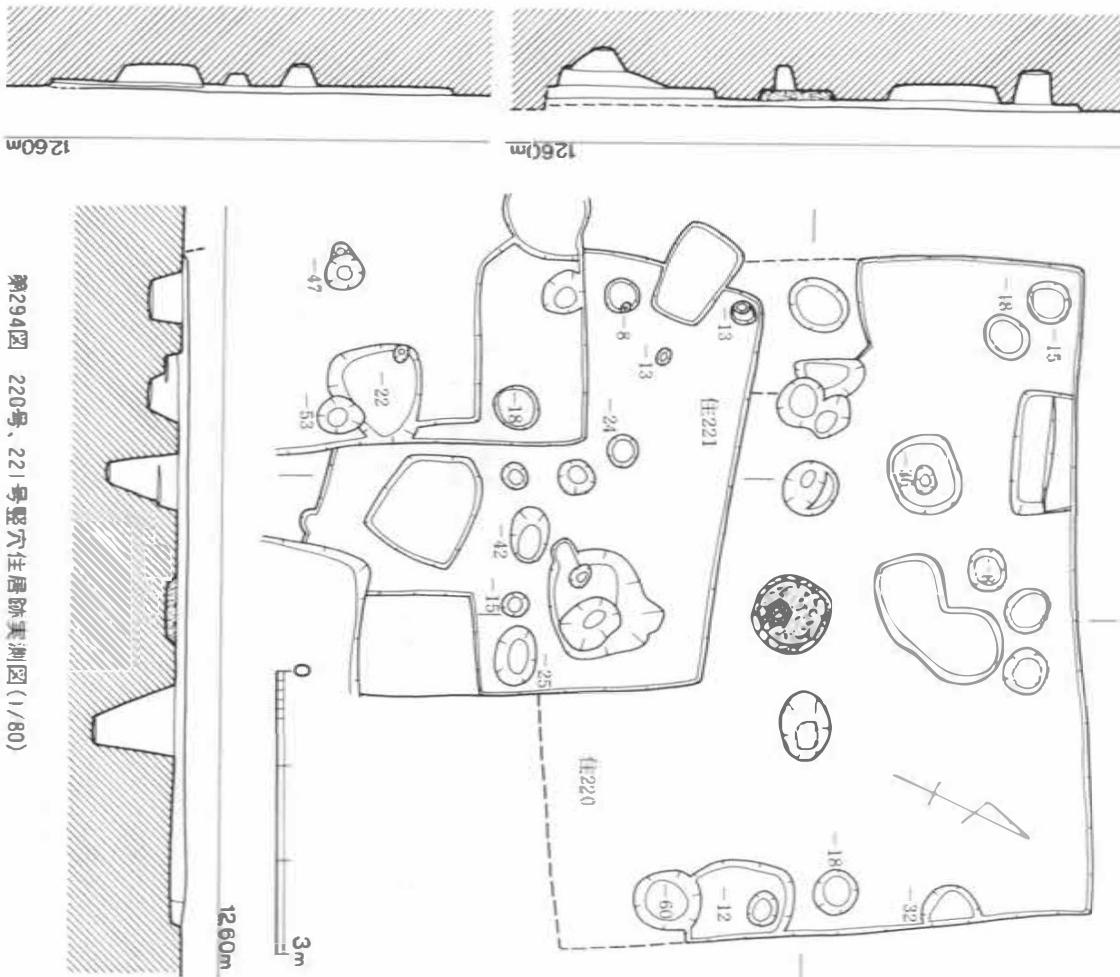
第291図 217号竪穴
住居跡出土石器
実測図(1/3)

第292図 217号竪穴住居跡
出土石器実測図(1/2)



第293図 218号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

長方形を呈する。周縁は明らかないが、東・北壁が計測でき
5.66m・6.80mを測る。制作による削平を受け残りは悪く、南
壁は遺存しない。支柱は2本で、柱間は2.70mである。柱間に
は径80.0cmのがを設ける。屋内上層は南壁中央に掘り、221号住
居の床面下で検出した。西壁側には幅1.35mのベット状遺構を
割り出している様にもみえるが、遺出し部を付設していること



第294図 220号、221号竪穴住居跡実測図(1/80)



第295図 220号竪穴住居跡
出土土器実測図(1/4)

も否定できず疑かでない。柱間軸での住居の方位はN66°Eを示す。
出土遺物は小型の甕の他、大型の砥石がある。

出 土 遺 物

一 器 (図版63 第295図)

小型の甕の破片がある。口縁部は緩く外反する。肩部から胴部の張りは鈍く、最大径が口縁部にある。調整は外而か、丸いハケ、内面はナデで仕上げる。内外に二次川線を受けが褐色に変色する。復原口径15.0cmを測る。

石 器 (図版63 第296図)

練泥片岩の石材を使用したやや大振りの砥石がある。表面には表裏の2面であるが、裏面の使用度は少ない。長さ18.0cm、幅11.7cm、厚さ1.8cmを測る。屋内土壙からの出土である。

221号竪穴住居跡 (図版15-(1) 第294図)

第296図 220号竪穴住居跡
出土石器実測図(1/3)

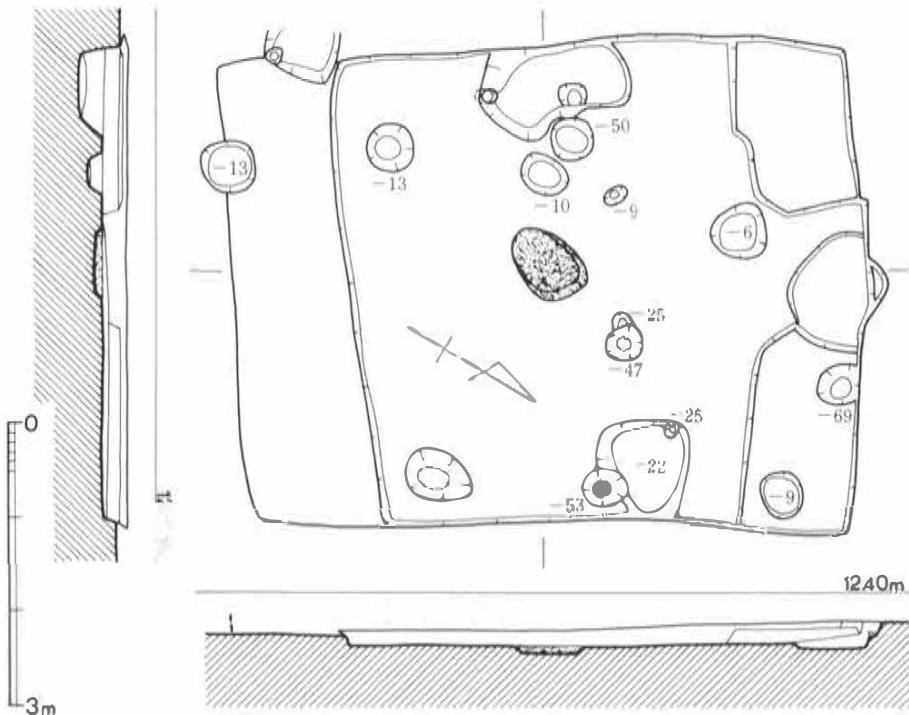
U-3区で出土した竪穴住居跡で総数1軒の重複がある。重複関係は223号・222号・220号・221号の順である。現存では平面プランが方形にみえる。東壁沿いには壁長の約1/2のベットを付設する。その他詳細は不明で、出土遺物も無い。

222号竪穴住居跡 (図版15-(1) 第297図)

U-3・4区で検出したやや大型の竪穴住居跡で、重複関係は先に述べたとおりである。平面形態は長方形を呈する。規模は南・北壁が4.80m・5.10m、東・西壁が6.20m・6.60m、高さ20cm弱である。床面中央には不整形の窓を掘込んでいるが、支柱穴は検出できていない。西壁中央部には不整形の屋内土壙を備える。南端壁沿いには幅1.20mのベットを付設するが北壁側は中央で途切れる。

出土遺物は甕・瓶・支脚がある。

出 土 遺 物



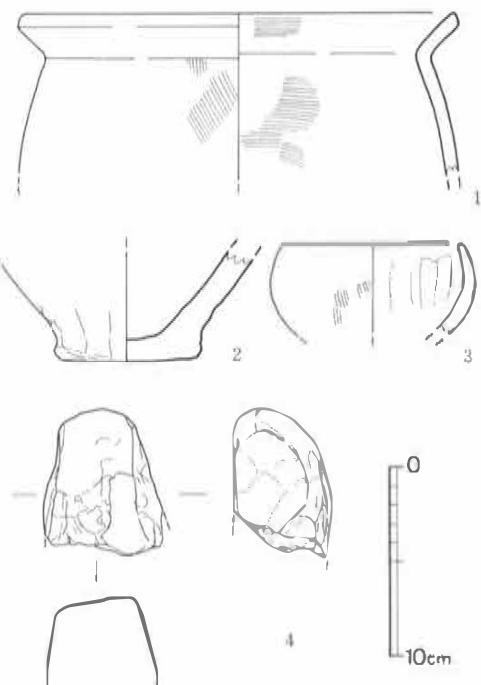
第297図 222号竪穴住居跡実測図(1/80)

土 器 (第298図)

1・2は甕の破片である。「く」字状に外反する口縁部に胴の張りは鈍い。調整は内外にハケがみられる。復原口径23.2cmを測る。2は底部片で歪である。二次加熱を受け暗灰色に変色する。底径7.5cmを測る。

3は甕の破片で口縁部は内湾する。二次加熱で外面に煤が付着する。復原口径9.6cmを測る。

4は支脚の上部片で無い、二次加熱を受けている。支脚にしては胎土が精製されているが、つくりは粗い。

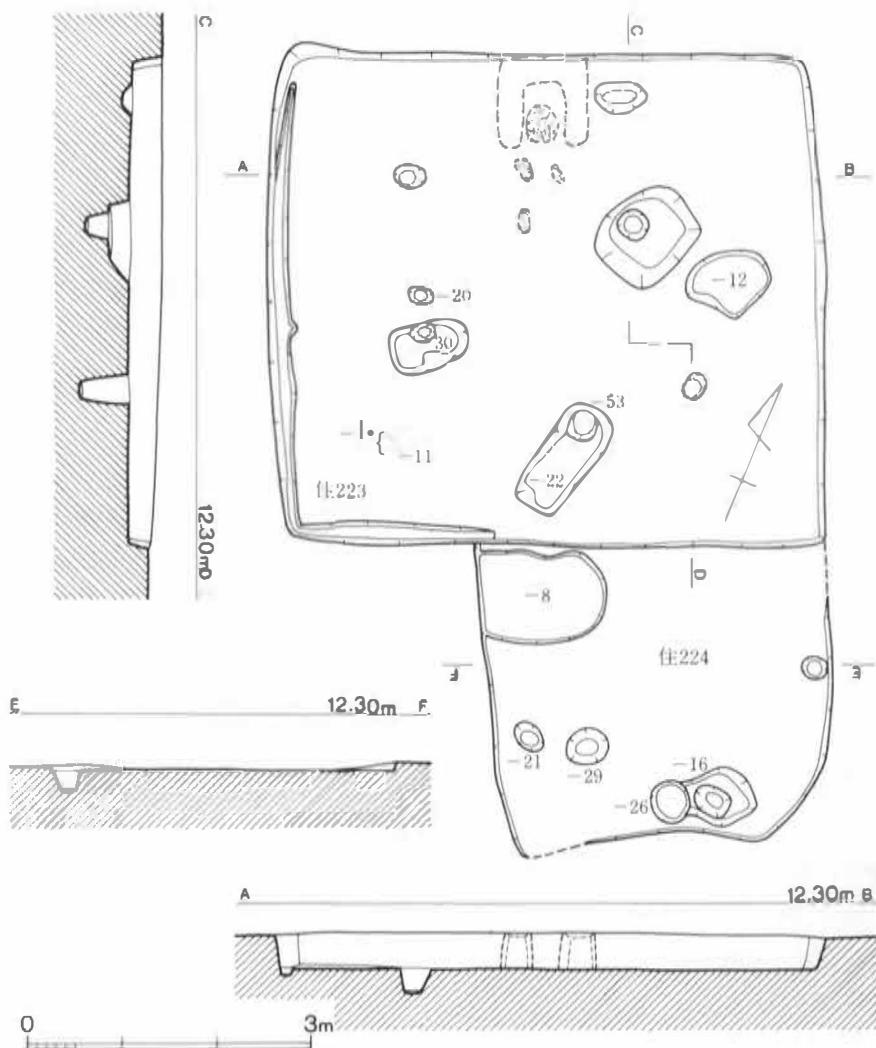


第298図 222号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

223号堅穴住居跡 (図版15-(1) 第299図)

重複する周囲の住居の中でも最も新しい住居跡で、平面形態は方形を呈する。規模は南・北壁が5.70m・5.50m、東・西壁が5.15m・5.20m、壁高35.0cm前後を測る。床面積は28.73m²である。支柱は4本と考えられるが、調査時点での支柱穴は見当らず、図示した柱穴は極めて不規則である。北壁中央には黄褐色粘土と黒色土を用いて「U」字状のカマドを付設していた。カマド底面は真赤に焼けている。

出土遺物は土師器の壺、須恵器の壺身がある。



第299図 223号、224号堅穴住居跡実測図(1/80)

出 土

土 器 (圖版63 第300図)

土師器 1は土師器の耳の破片である。口縁は内窓する。胎土は精製された粘土を使用し、焼成も堅固でつくりが丁寧である。外面が加熱され黒くすむ。復原口徑

16.8cm、器高5.6cmを測る。

須恵器 2は环身の完形品である。口縁部は尖り、全体部は扁平である。底部外面は左廻りの隆削りで仕上げる。蓋受部には蓋との重焼きの痕跡が残る。口徑11.0cm、器高4.4cmを測る。

224号 窯穴 (第299図)

V-4区-C検出した竪穴住居である。223号住居及び耕作による著しい削平、一ヶ不明な点が多いため説明は割愛する。

225号 窯穴住居 (第301図)

U-V-4区-C検出した竪穴住居である。5基の遺構が重複し、しかも南側が耕作により段差がつき完全に削平を受けているた分明な点が多い。当該住居は227号、241号住居に切り替わっているが、13号周溝との重複関係は明らかでない。遺存深度は4.35mを測る。その他詳細は不明である。

出土遺物は壺・台付壺・ミニチュア土器の小片があるが、個々の説明は省く。

227号 窯穴住居 (第301図)

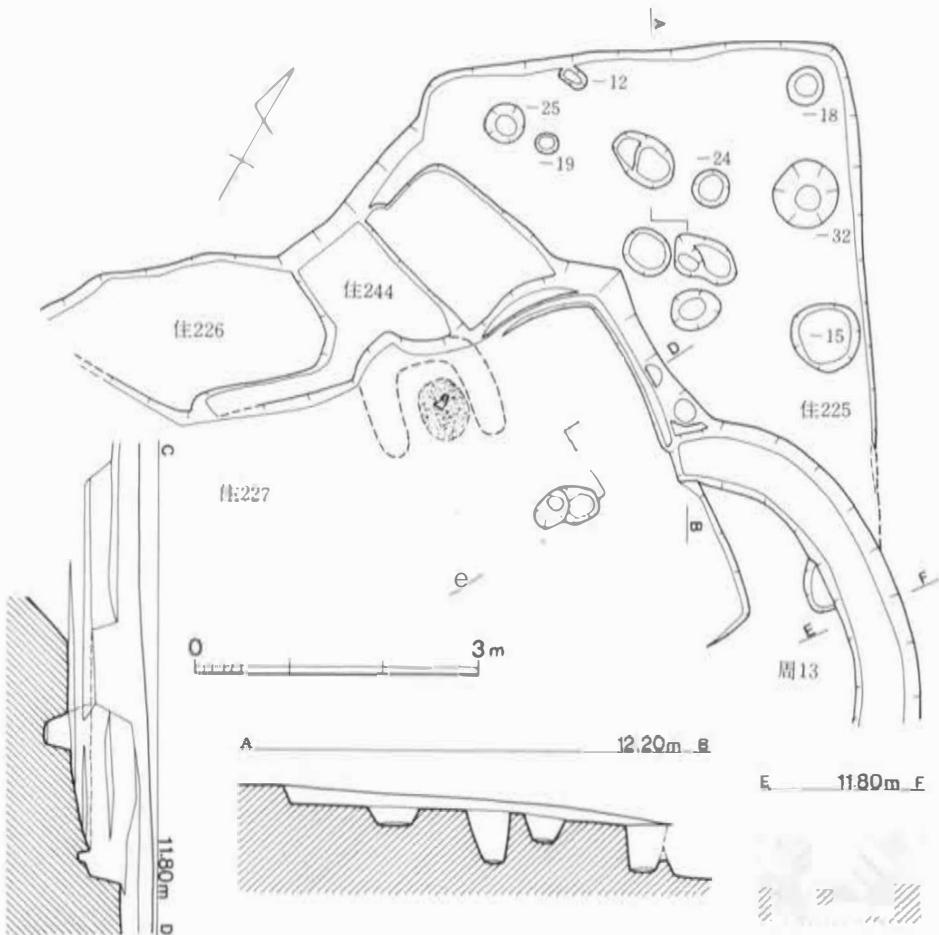
遺存率は1/2弱であるため実体は不明であるが、カマドを付設した竪穴住居である。カマドは北西壁に設け、カマドの設置箇所から推測して小型の住居とされる。支柱穴は1本が一つある。その他詳細は不明である。

出土遺物は小型の壺の他、土製模造鏡がある。

出 土



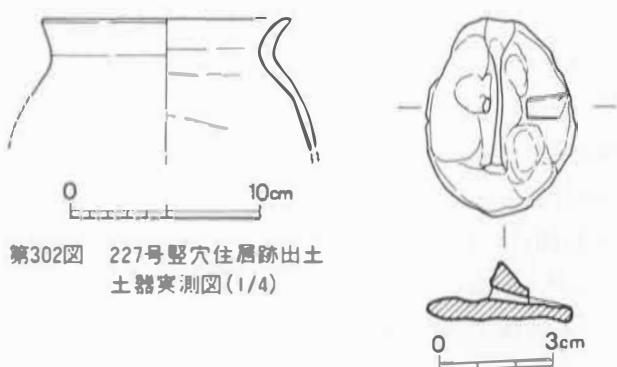
第300図 223号 窯穴住居跡出土
工器実測図(1/4)



第301図 225号-227号、244号竪穴住居跡|3号周溝状遺構実測図(1/80)

土 器 (図版63 第302図)

カマドから脱出した小型の甕がある。胴下半を欠損する。口縁の外反度は鈍く、肩部は張る。内外面に強い二次加熱を受け変色する。カマド内の支脚に転用された甕の可能性がある。口径 13.2cm を測る。



第302図 227号竪穴住居跡出土
土器実測図(1/4)

土 製 品 (図版63 第303図)

第303図 227号竪穴住居跡
出土土製品実測図(1/2)

土製模造鏡の完形品がある。形状が橢円形を呈し歪である。背面は一見人面風につくりあげている。二次加熱を受け赤変し脆い。径は5.2cm×4.0cmを測る。

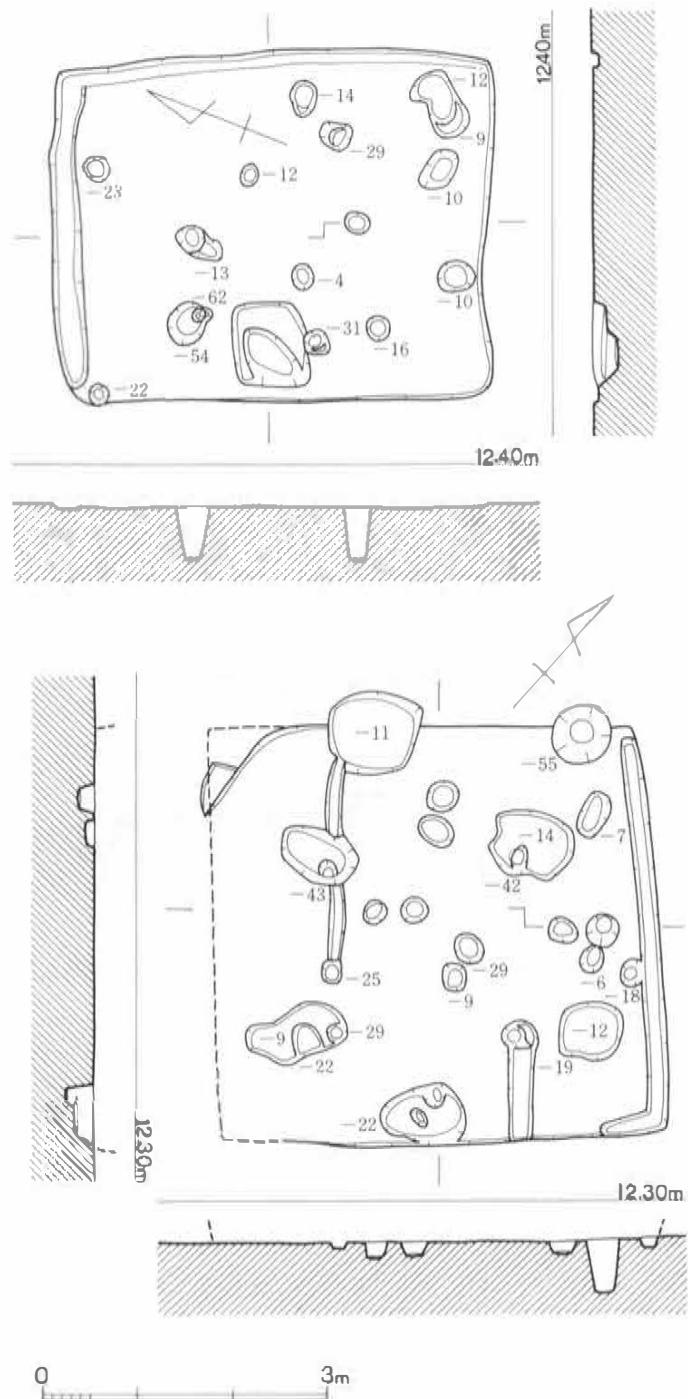
231号堅穴住居跡 (図版12-(1) 第245図)

O-4区で検出した堅穴住居跡で166号、169号住居に切られている。遺存状態が悪く壁は殆ど残っていない。平面形状は長方形であろう。その他詳細は不明である。

出土遺物は皆無である。

236号堅穴住居跡 (第304図)

V・W-2・3区で検出した小型の堅穴住居である。耕作による削平のため遺存状態が極めて悪い。平面プランは長方形を呈し、規模は長壁4.58m・4.30m、短壁3.50mを測る。床面積は16.00m²である。支柱は2本で、柱間は1.75mである。炉は見当らず、西壁中央部に二段壠の屋内土壙を備える。周縁は北側から東



第304図 236号(上)、238号(下)堅穴住居跡実測図(1/80)

壁沿いに廻る。柱間軸の方位はN 27° Wを示す。

出土遺物は無い。

238号竪穴住居跡 (図版15-(1) 第304図)

V-3区で検出した竪穴住居跡である。僅かに痕跡の残る192号住居を切っているが、遺存状態が頗る悪く、周溝と柱穴が遺存するのみである。南西側の周溝配置からベットを付設していたと考えられる。支柱は2本と思われるが、断面に図示した内の1本は支柱とはなり得ない。南東壁中央には梢円形の屋内土壙を掘り、中から審み石が出土した。

出土遺物

石 器 (第305図)

河原石を利用した審み石がある。表裏の中央には径4.0cm、深さ6.0mmと径3.5cm、深さ4.0mmの審みをつくる。審みの周囲は敲打痕が残る。表面の風化が著しく、ざらついており石材は不明。大きさは26.8cm×25.0cm、厚さ9.0cmを測る。屋内土壙内からの出土である。

239号竪穴住居跡

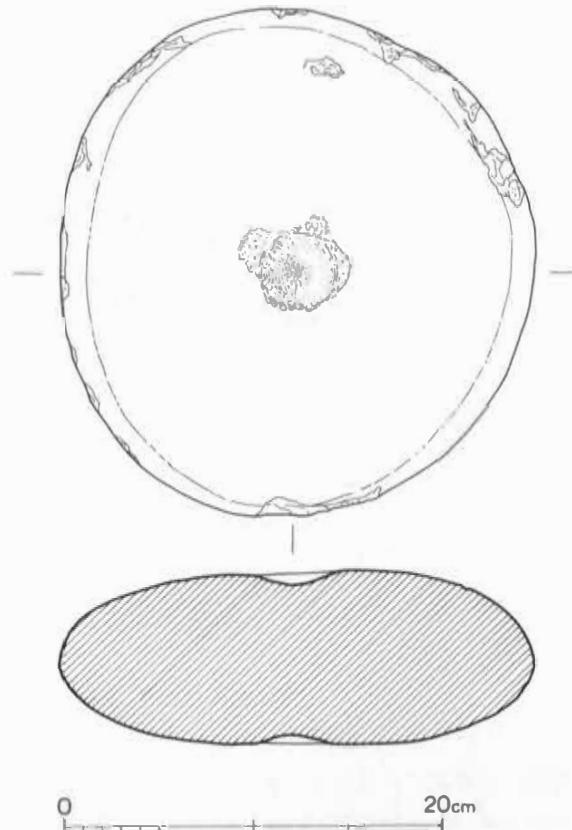
(図版15-(1) 第306図)

240号住居に大半が削平され約1/2が遺存する。西壁のみ計測可能で4.00mを測る。その他詳細は不明で、出土遺物も無い。

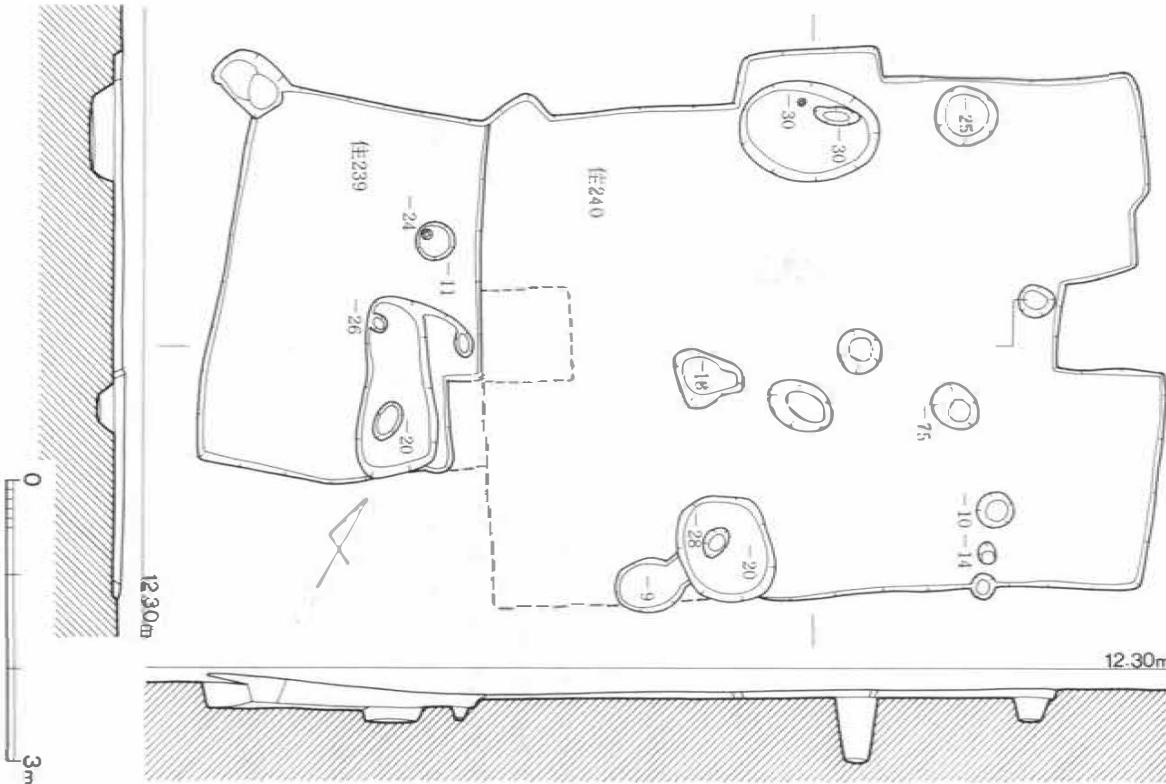
240号竪穴住居跡

(図版15-(1) 第306図)

V-2区で検出した大型の竪穴住居



第305図 238号竪穴住居跡出土石器実測図(1/4)



第306図 239号、240号竪穴住居跡実測図(1/80)

跡で、平底プラン、天井が形を呈する。両側の短壁の中央部が内側に突出するタイプで、B・C-2区で検出した59号堅穴住居と同一形式を示すと考えられる。規模は長壁が6.90m、短壁が5.40m・5.10m、高さ7.0cmを測る。支柱、炉などは不明。屋内土壇は北壁側に掘られ、設置方向としては稀種な例である。土壤沿いの壁面は若干の突出し状を呈する。

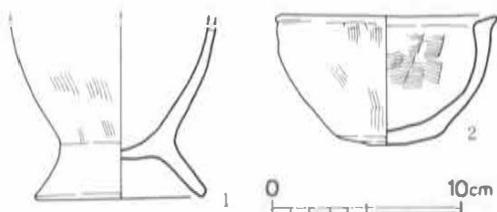
出土遺物は脚台付甕と鉢がある。

出 土 遺 物

土 器 (図版64 第307図)

1は小型の脚台付甕で胴部上半を欠失する。調整は風化し不明瞭である。復原口徑9.1cmを測る。住居内のピットからの出土である。

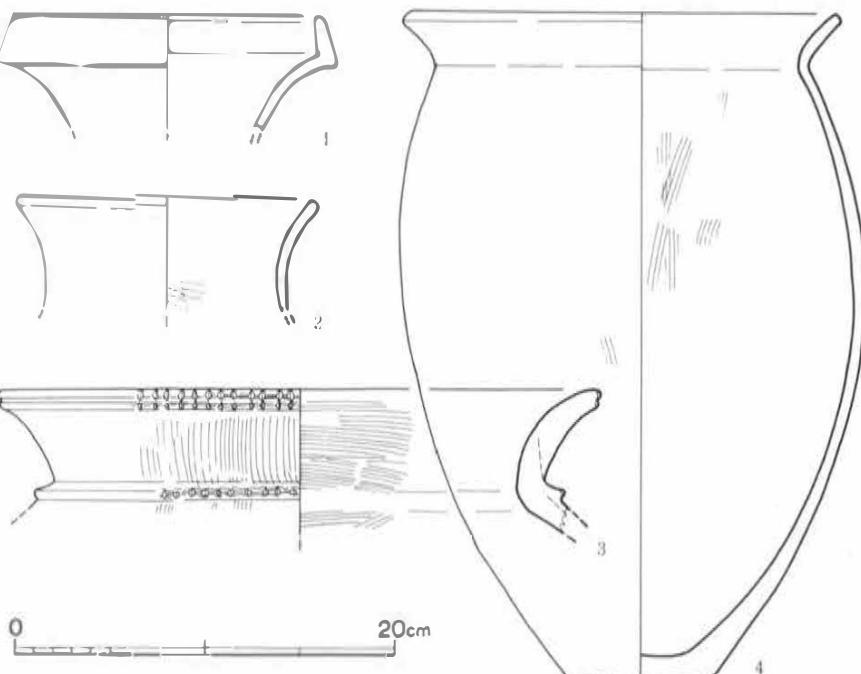
2は厚手づくりの鉢で、口縁を僅かに外反させる。体部は半球形状を呈し、底部は不安定なレンズ状を呈する。調整はハケとナデを併用する。口徑11.7cm、器高6.7cmを測る。



第307図 240号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

243号竪穴住居跡出土遺物

土 器 (図版64 第308図)



第308図 243号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

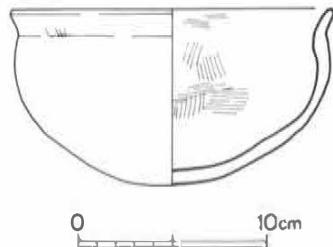
蓋は1～3がある。1は所謂複合口縁蓋の口縁片で、口縁部は立ち気味につくる。擬口縁から頸部にかけては細まる。復原口径16.0cmを測る。2は頸部から口縁にかけて緩く外反する蓋の小片である。復原口径16.0cmを測る。3は反り気味に口縁を外反させる大振の蓋である。口唇部には二段にわたり刻みを配する。肩部には刻みをつけた三角凸帯を貼付する。調整は内外面に粗いハケを施す。復原口径31.8cmを測る。

4は「く」字状に口縁を外反する蓋で、最大径を胴中央に持つ。長胴をなし小さな底部を有す。調整は二次加熱を受け摩耗する。口径22.9cm、底径7.5cm、器高35.4cmを測る。

244号豊穴住居跡出土遺物

土 器 (図版61 第309図)

図示した鉢がある。口縁部は僅かに外反させる。体部は丸味を有し、底部は丸底である。調整は外面が摩耗し、内面はハケが残る。胎土は砂粒、角閃石、赤褐色粒子を含む。口径17.0cm、器高7.2cmを測る。



第309図 244号豊穴住居跡出土
土器実測図(1/4)

246号豊穴住居跡 (図版13-(1) 第265図)

R-2区で検出した豊穴住居で、4軒の重複がある。190号、196号住居に大半が削平され実体は把握できない。

出土遺物は殆ど無い。

以上が豊穴住居跡の個別の説明であるが、総軒数が246軒を数えるうえに紙面の都合及び報告書作成期間の限定などから不掲載の豊穴住居跡が数多くてたことをお詫びすると同時に一覧表にて代用させて頂きたい。

第1表 不掲載豎穴住居跡一覧表

番号	平面形態	規模 (m)	主柱穴	間隔 (m)	屋内土礫	ベット	時期	出土遺物	備考
7	方形		—	—	—	—	古墳時代	環状土礫、ミルチャア(玉) 四	
11			2本(?)	—	—	○	弥生後期(?)	—	1/4号
14	方形(?)		2本(?)	—	○	—	I期	高杯	削平
17	方形		—	—	○	—	不明	—	15号、18号より新
18	—		—	—	—	—	不明	—	17号より古
22	—		—	—	—	—	不明	—	23号より古
23	—		2本(?)	—	—	—	I期	鏡小片、磁石3	22号、71号より新
24	方形		2本	—	○	—	弥生後期(?)	ミミタマ7、玉製品、石盤 土、磁石1、石製刀鑿1	25号より新
25	—		2本(?)	—	—	—	弥生時代	—	24号より古
26	長方形		—	—	—	—	弥生時代(?)	—	
28	長方形	7.0K [5.0] [4.0]	2本	31.5	○	—	弥生後期(?)	鏡小片	
30	長方形		—	—	—	—	弥生後期(?)	甕、壺、メソコ(土製)	一部削平
31	—		—	—	—	—	I期	—	削平著しく 全く不明
32	—		—	—	—	—	—	鏡少底出土	
33	—		—	—	—	—	弥生時代	弥生土器少量	19号に切られる
37	方形		4本(?)	—	—	—	古墳時代	鏡小片	カマドナシ
38	方形(不規)		4本(?)	—	—	—	V期	高杯、甕(土瓶)	カマドナシ
42	—		—	—	—	—	不明	—	実体不明
46	—		—	—	—	—	不明	—	実体不明
55	長方形		2本(?)	—	○	—	V期	第79図に掲載	54号に切られ 55号を切る
56	長方形(?)		—	—	—	—	弥生時代	甕 I 第80図に掲載	55号に切られる
57	方形(?)		4本(?)	—	○	●	IV期	第81図に掲載	55号、56号を切る
80	不整長方形		2本	—	—	—	弥生時代	—	
83	—		—	—	—	—	I期	第95~97図に掲載	64号に切られる
86	長方形	5.0×8.0	2本	30	○	—	—	第110~112図に掲載	87号より新、鏡失 佳心、88号より古 品等、89号より古 鏡佐佐良
87	方形(?)		2本	—	●	○	V期	第113、114図に掲載	
68	方形	.2×4.0	4本	16.8	—	—	V期	第115図に掲載	カマドナシ
94	方形(?)		4本	—	—	—	V期	第158図に掲載	カマド有り
95	—		—	—	—	—	弥生時代	第159図に掲載	
106	方形	4.0×4.5	4本	21.2	—	—	古墳時代	第182図に掲載	カマド11
108	—		—	—	—	—	不明	—	109号よりも新
109	—		—	—	—	—	不明	—	108号よりも古
110	方形	4.0×4.0	4本	16.0	—	—	古墳時代	甕9個体	カマド有り
111	—		—	—	—	—	弥生後期	第184図に掲載	
112	—		—	—	—	—	弥生後期	第184図に掲載	重複関係にあり
113	—		—	—	—	—	不明	—	実体不明
114	—		—	—	—	—	弥生時代	—	115号より古
115	長方形(?)		2本	—	—	—	II期	第184図に掲載	114号より新
116	長方形	4.4×6.8	2本	29.9	○	□	弥生時代	—	124号より古
117	長方形	5.0×6.5	2本(?)	32.5	?	○	III期	第184図に掲載	
118	方形	4.0×4.0	—	16.0	—	○	弥生時代(?)	—	
124	不規方形	3.0×[2.6] [3.0]	—	8.4	—	—	不明	—	116号よりも新
125	—		2本	—	—	—	弥生時代(?)	—	削平
133	—		—	—	—	—	V期	甕 I	削平著しい
134	方形(?)		4本(?)	—	—	—	X期	甕 I	削平著しい カマド有り
141	—		2本(?)	—	—	—	弥生時代	第220図に掲載	138号、155号より 古、周12号よりも新
149	—		2本	—	—	—	不明	—	150号よりも古 農道で削平

番号	平面形態	規模 (m)	支柱穴	面積 (m ²)	屋内土壇	ベット	時期	出土遺物	備考
160	長方形	—	2本	26.0	○	—	V期	第231図に掲載	農道で大半削平
162	—	—	—	—	—	—	不明	—	実体不明
153	長方形	—	2本(?)	—	—	—	Ⅲ期	第232~235図に掲載	137号より古 154号より新 137号、153号より古
154	—	—	—	—	—	—	不明	—	—
155	方形(?)	—	2本	—	—	○	弥生後期	第236図に掲載	138号、142号より古 141号より新 大半が140号に切られ不明
156	—	—	—	—	—	—	不明	—	—
187	—	—	—	—	—	—	不明	—	143号、144号に切られ不明
180	—	—	—	—	○	—	不明	—	161号より新 大半が削平
181	—	—	—	—	○	—	不明	—	159号、160号より古
162	—	—	—	—	○	—	不明	—	大半が削平
167	長方形(?)	—	2本(?)	—	—	○	不明	—	農道と耕作で削平
168	—	—	—	—	—	—	不明	—	削平され実体不明
170	長方形	—	—	—	—	—	不明	—	165号、174号より古
178	方形(?)	—	—	—	—	—	弥生後期	第257図に掲載	165号、170号と重複
179	—	—	—	—	—	—	不明	—	実体不明
182	—	—	—	—	—	—	不明	—	実体不明
184	—	—	—	—	—	—	不明	—	183号、185号より古 実体不明
187	—	—	—	—	—	—	不明	—	183号、185号、188号より古
189	—	—	—	—	—	—	不明	—	実体不明
192	—	—	—	—	—	—	不明	—	193号と重複 同一の仕組み
197	—	—	—	—	—	—	弥生時代	—	196号より古
188	—	—	—	—	—	—	弥生時代	—	196号、199号より古
204	—	—	—	—	—	—	不明	—	229号と重複 削平著しい
205	—	—	—	—	—	—	不明	—	229号と重複
206	—	2本	—	○	—	—	不明	—	削平著しい
207	—	—	—	—	—	—	不明	—	削平を受け実体不明
210	長方形	—	2本	24.8	○	—	不明	—	209号、211号より古
2	—	—	—	—	—	—	不明	—	214号より古
m	長方形	—	2本	—	—	○	1	1	土28より新
215	—	—	—	—	—	—	不明	—	215号より古 削平著しい
216	—	—	—	—	○	—	不明	—	217号と重複 削平著しい
218	長方形	—	2本(?)	—	—	—	不明	—	削平著しい
225	長方形(?)	—	2本(?)	—	—	—	弥生後期	壺、台付甕、ミニチュア	227号、244号より古 削平著しく実体不明
226	—	—	—	—	—	—	不明	—	削平著しく実体不明
227	—	—	—	—	—	—	X期	—	225号、244号 周13号より新
228	—	—	—	—	—	—	不明	—	179号より新 230号より古
229	—	2本	—	○	—	—	不明	—	204号、205号 218号と重複
230	—	—	—	—	—	—	不明	—	未掘部分多く実体不明
232	—	—	—	—	—	—	不明	—	238号より古 削平著しく不明
233	刀形	4.0×4.5	—	18.0	—	—	I期(?)	壺小片	削平著しい
234	長方形(?)	—	—	—	○	—	不明	—	削平著しい
237	長方形	6.0×3.8	2本	19.0	○	—	不明	—	削平著しく床面のみ
241	—	—	—	—	—	—	不明	—	重複関係にあり
242	—	—	—	—	—	—	不明	—	—
243	—	—	—	—	○	V期	壺、壺	1/2が削平	—
244	—	—	—	—	—	—	VI期	壺、台付甕	227号より古
245	方形	—	4本	—	—	—	X期	—	西側にカマド有り

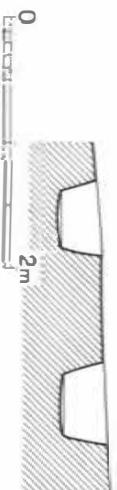
(2) 挖立柱建物

1号掘立柱建物 (第310図)

F—9・10区の南斜面で検出した掘立柱建物である。梁間1間×桁行柱間2間の規模を有する小型の建物である。掘立した建物は柱穴の掘方を圖示したものである。建物の東端より主軸が異なるものの柱間が1間×2間の掘立柱建物が存在しており、両者とも同一時期の建物と考えられる。柱穴内からの出土物がないため、建物の上限期の識別はできない。

柱行柱間軸からN 11° Eを示す。

3号掘立柱建物 (第311図)



第310号 1号掘立柱建物実測図(1/60)

調査区の南西隅、B—6・7区で検出した三辺柱建である。規模は1間×1間の△で、高床式の倉庫としての機能を果たしていたか否かは疑問である。建物のP₁—P₃の柱行柱の西側にはP₅が掘られており、当該建物に付属する柱穴あるいは梯子穴とも考えられる。柱穴の深さはP₁—68cm、P₂—96cm、P₃—76cm、P₄—64cmを測り、掘立柱建物の柱穴としては深く掘られている。弥生時代の集落に伴う建物であろう。

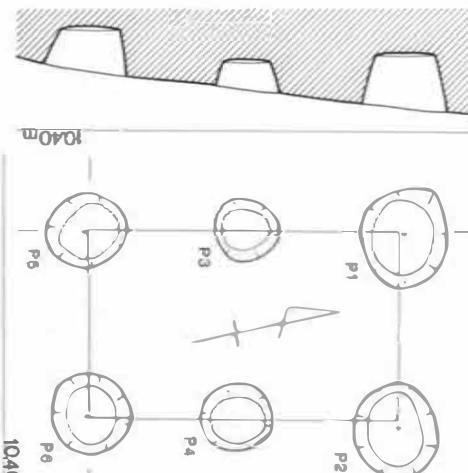
P₁—P₃の柱行柱の方位はN 10° Eを示す。

第3表 3号掘立柱建物計測表 (単位cm)

梁間	間	柱行柱間	
P ₁ —P ₃	P ₃ —P ₄	P ₁ —P ₄	P ₁ —P ₄
280	280	316	340
305	315	220	410

第4表 4号掘立柱建物計測表 (単位cm)

梁間	間	柱行柱間	
P ₁ —P ₃	P ₃ —P ₄	P ₁ —P ₄	P ₁ —P ₄
310	200	190	395
310	200	190	395



版29-(1) ○ 乙

「該構造は、南北の壁

が、新しくて、

新しい、て、

10号柱の間に、

新しい、柱間

で、ない、柱間

1間×桁下2間の

13号柱と6号柱、

と新柱と、

頃の14号柱と、

り、住居の

する限り、跡

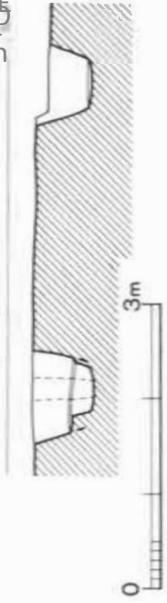
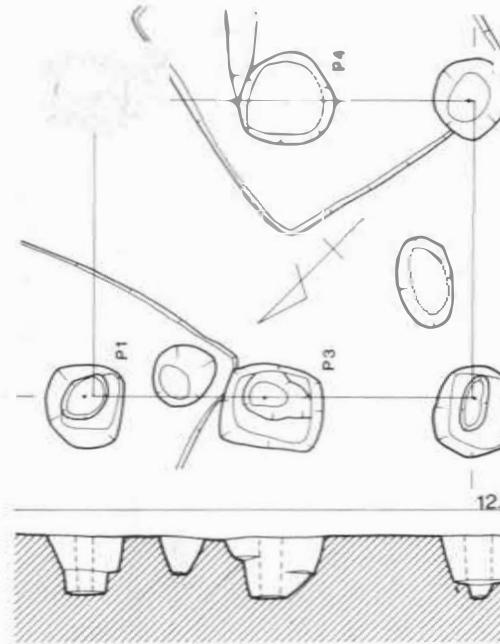
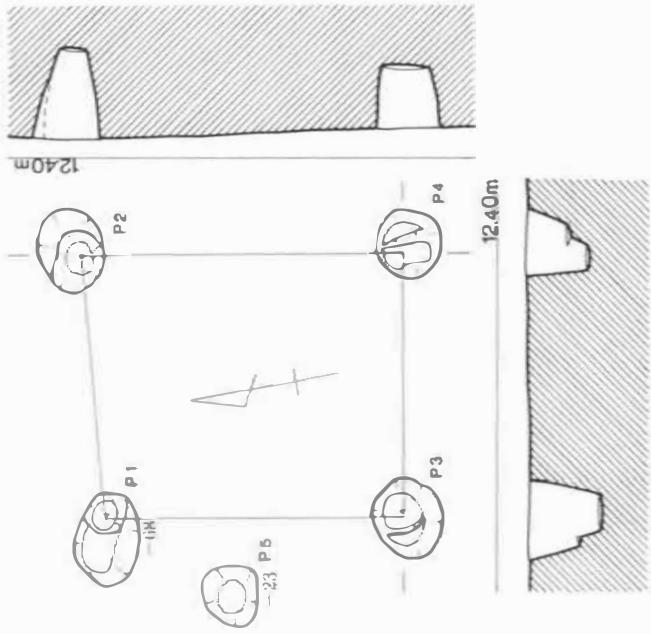
の、壁に、

一、の、工事の

△-60cm、P₁-63cm、P₂-64

cm、P₃-62cm、P₄-63cm、P₅

-57cm、△-71cm



第311図 ○ 乙

柱間の方位はN 64° Eを示す。

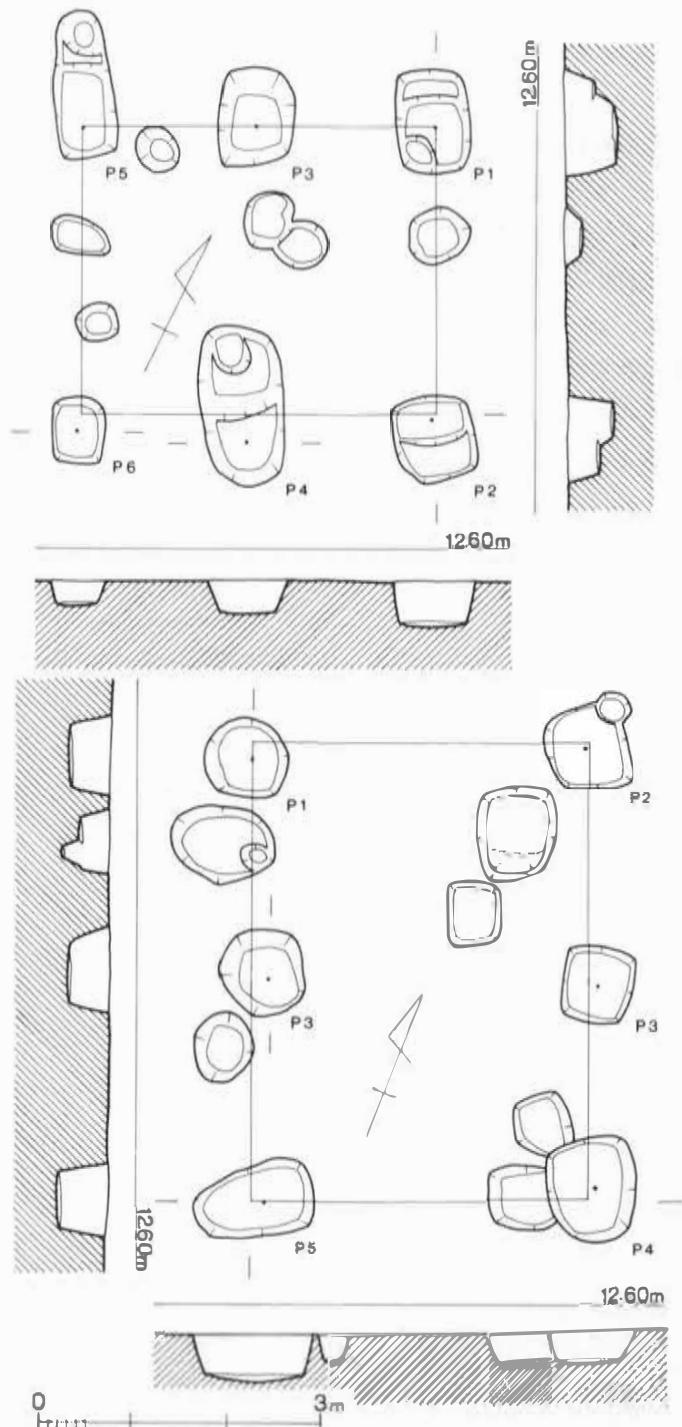
6号掘立柱建物 (第312図)

T-2区で検出した掘立柱建物である。梁間は1間×桁行間2間の規模を有す。柱穴内には黒色土が充満しており、柱痕は明確ではない。各柱穴の深さはP₁-42cm、P₂-30cm、P₃-42cm、P₄-40cm、P₅-50cm、P₆-35cmを測る。桁行間の主軸方位はN 20° Wを示す。

建物の構築時期を示す資料はなく、住居の配置と建物の設置場所から弥生時代とも古墳時代の所産とも考えられ、時期の決め手となる積極的な証拠はない。

7号掘立柱建物 (第313図)

U-2区で検出した掘立柱建物である。規模は梁間1間×桁行間2間を測る。202号、203号竪穴住居と8号掘立柱建物との重複があるが、8号建物との直接的な切り合いはない。柱穴の



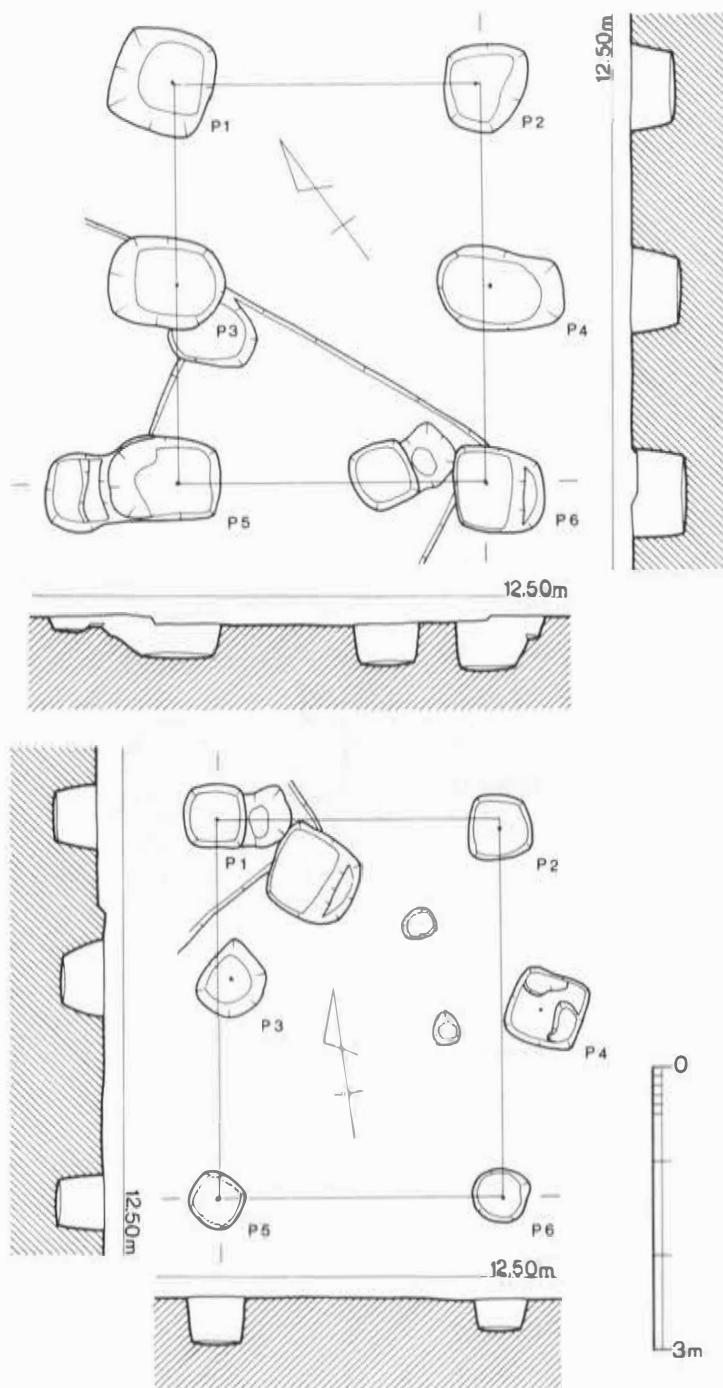
第312図 5号(上)、6号(下)掘立柱建物実測図(1/80)

平面プランは方形状を呈するが、必ずしも画一的ではない。

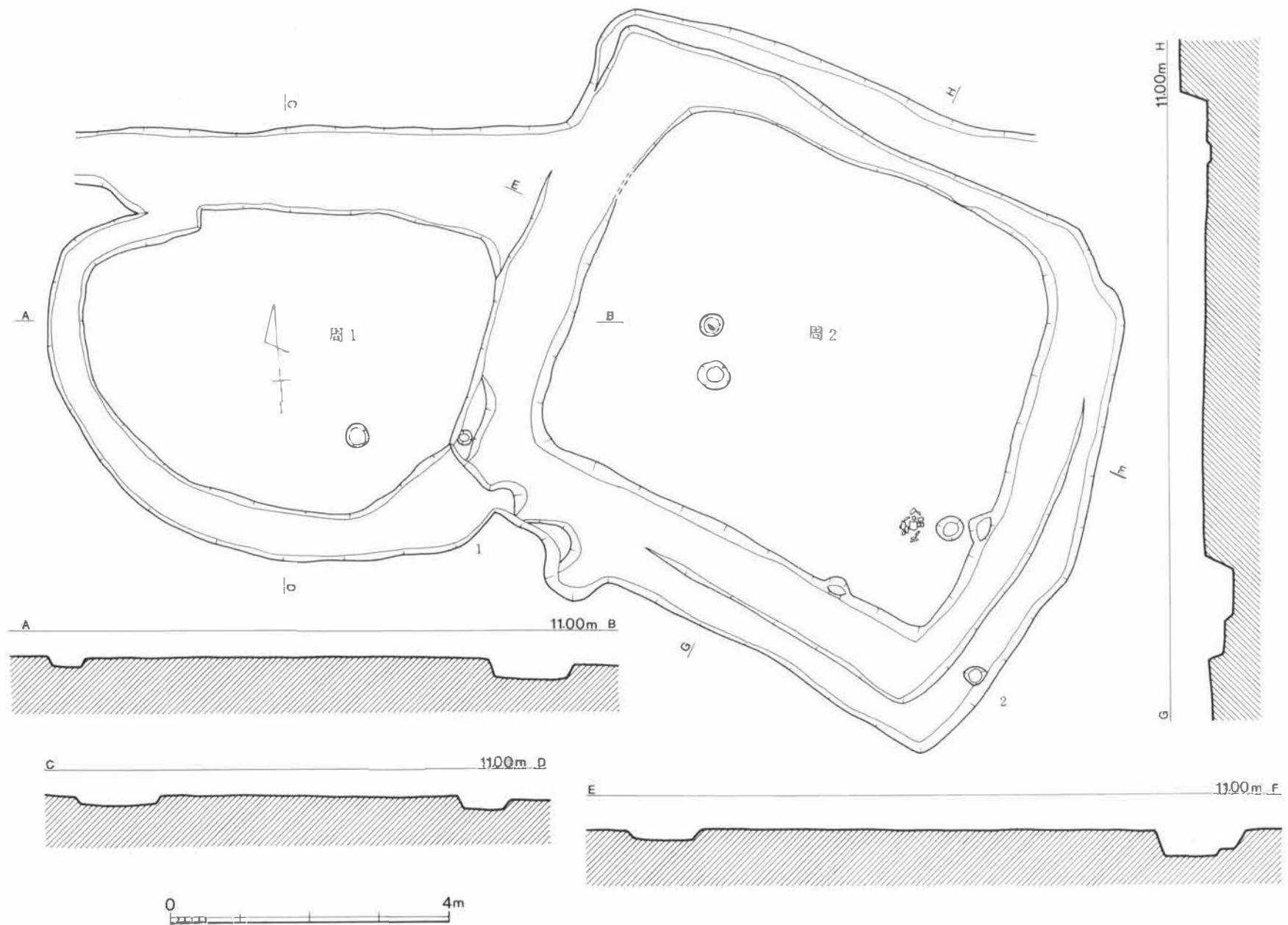
建物の時期は出土遺物がないため明らかではないが、弥生時代後期前葉頃の住居を切っていることから、少なくとも後期前葉以降である。

8号掘立柱建物 (第313図)

建物として設定するには柱穴の配置状況から若干の無理があるが、一応8号建物として説明する。柱穴は平行中央柱が柱間軸上に掘られておらずややずれている。柱間からも適正配置にない。各柱穴の深さはP₁-44cm、P₂-40cm、P₃-44cm、P₄-32cm、P₅-50cm、P₆-30cmを測る。



第313図 7号(上)、8号(下)掘立柱建物実測図(1/80)



第314図 1号、2号周溝状遺構実測図(1/80)

(3) 周溝状遺構

1号周溝状遺構(第314図)

調査区の南側斜面のP-9区で検出された周溝状遺構である。2号周溝状遺構との重複があり2号が新しい。平面形態は船形を呈し、北側辺は削平を受け変形する。規模は東西軸7.0m

(復原)、南北軸5.00m(復原)、深さ10cm~20cmと浅く、全体的に耕作による削平を受けているようである。出土遺物は少なく甕の小片がある。

出土遺物

土器(第315図)

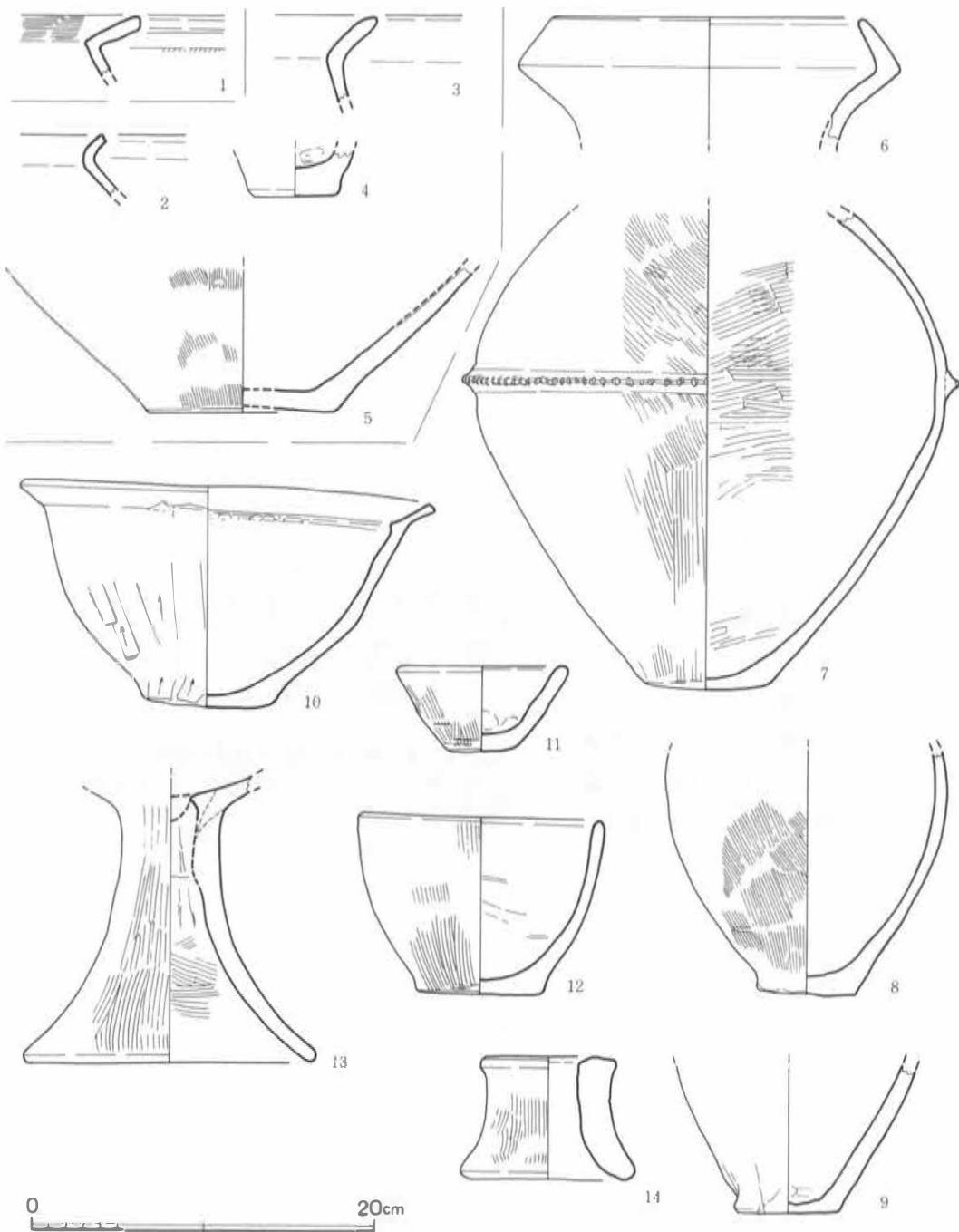
1は周溝内の埋土中から出土した甕の口縁片で「く」字状に外反する口縁を有する。頸部内側の縫は明顯である。二次加熱を受け黒くすむ。

2号周溝状遺構(第314図)

本遺跡内で検出した周溝状遺構で最大の規模を有するもので、平面形態が長方形を呈する。規模は長軸約9.00m、短軸7.50m、溝の深さは深い箇所で40cm、浅い所で14cm前後を測る。しかし、全体的に削平が著しく本來の深さではない。溝の内側の方形区間に3個のピットが在るが、周溝に伴うか否かの識別は困難である。内側の方形区間の占有面積は約30.1m²である。出土遺物は日常用器の甕と甕の他、石毬丁がある。

出土遺物

土器(第315図)



第315図 1号、2号、4号周鼎状遺構出土土器実測図(1/4)

2～4は縁の小片で周溝内の川土中からの出土である。2は口縁が短く、肩部の張りは強い。3は二次加熱を受け焦茶色を呈する。4は小刀の縁の底部で底径5.3cmを測る。

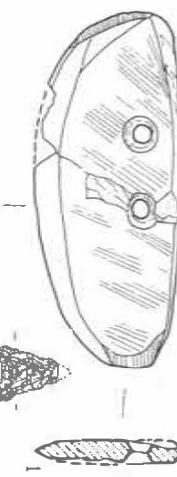
5は縁の底部分で、調査はハサとナードで仕上げる。復原底径11.2cmを測る。

石 器(図版61 第316図)

弥生時代後期の知里形の石庖丁がある。背

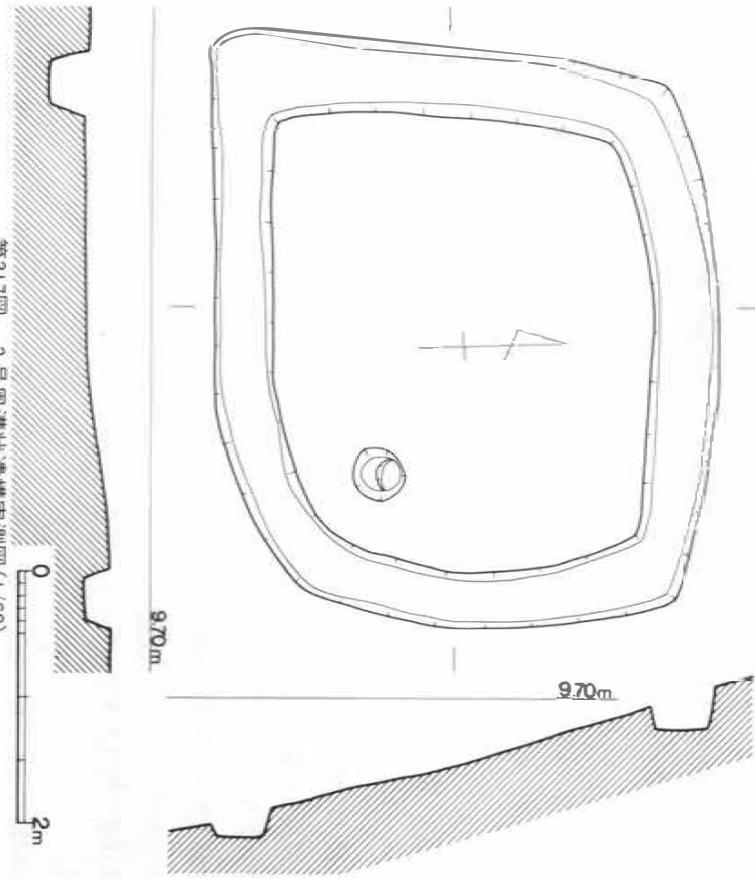
部は幣美な面取りを施し、刃部は鋭利に研ぎ出。孔は正四角を描き内径5.0mm、外径1.0cmを測る。全体に加熱を受け黒ずむと同時に表面が剝離する。長さ9.4cm、幅3.9cmを測る。

その他、2の黒曜石の石鏃がある。



3号周溝状遺構(図版29-(2) 第317図) 第316図 2号周溝状遺構出土石器実測図(1/2)

調査区の南西隅で検出した周溝状遺構で、不整円四角形の形状を呈し、断面は逆台形である。規模は長軸4.55m、短軸4.00m、溝幅45cm削後を測る。緩斜面に掘込んでいるにも拘わらず遺存しており、本斜面に設置していたことが判る。溝の内側の方形区画部には1個のピットが



第317図 3号周溝状遺構実測図(1/60)

あるのみで、他の遺構の痕跡はない。

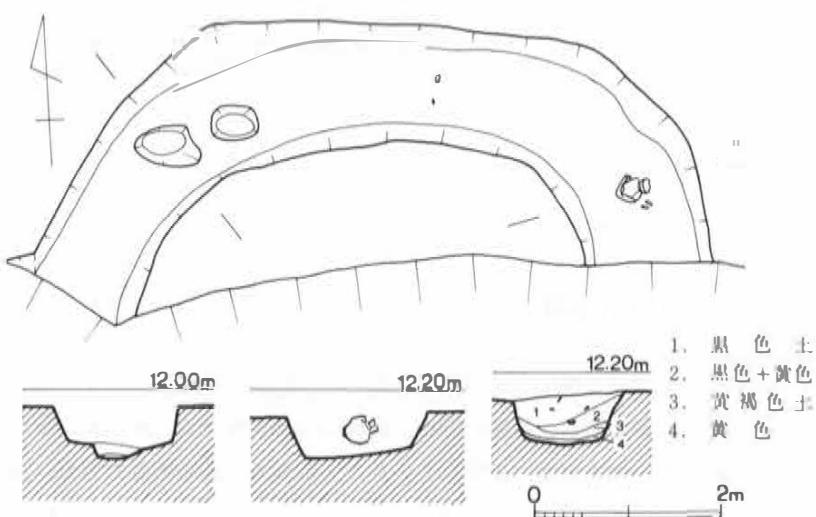
出土遺物は無い。

4号周溝状遺構(第318図)

調査区の南西隅13
～7区で検出した周
溝状遺構で、耕作に
よる削平で約2/3が
欠損している。溝幅
は1.20m、深さ40cm
前後を測る。溝内の
土層堆積では周溝の
外側から流土がみら
れるが、黒色土が堆
積しており、掘削し
た堆土を外側に盛っ
た痕跡はない。溝内
からかなりの土器が

出土しているが、いずれも堆土中からの出土で、当該周溝に伴うとは考えられないが、出土した
土器と近い時期に機能していたと思われる。

出土遺物は壺、甕、鉢、高杯、器台などの日常什器がある。



第318図 4号周溝状遺構実測図(1/80)

出土遺物

土器(図版64 第315図)

6・7の複合口縁壺があるが、色調などから同一個体であろう。口縁の屈折部は明瞭な棱をなす。頸部は欠失する。胴中央には刻みを密に配する台形状凸帯を貼付する。胴下半は細まり、不安定な平底を有す。調整は内外面とも粗いハケを施す。口径18.0cm、底径7.0cmを測る。堆土中からの出土である。

8・9は甕で胴部上半を欠損する。両者とも弱い二次加熱を受ける。8の底径5.9cm、9は6.0cmを測る。

10～12は鉢で11は小型である。10の口縁は僅かに外反させ、頸部内側は低い突出部をつくる。

体部全体は歪んだつくりである。調整は胸部に擦過痕がみられる以外はナデで仕上げる。口径24.2cm、底径7.35cm、器高12.7cmを測る。12の口縁は直口し体部に丸味を持つ。口径14.4cm、底径7.2cm、器高10.35cm。

13は高壇の脚部で柱状部から裾部にかけての開きは鈍い。調整は裾部がハケ、柱状部は笠で磨く。裾部径17.0cm。

14は低い器台で直径7.8cm、裾部径10.0cm、器高7.0cm。

5号周溝状遺構

(第319図)

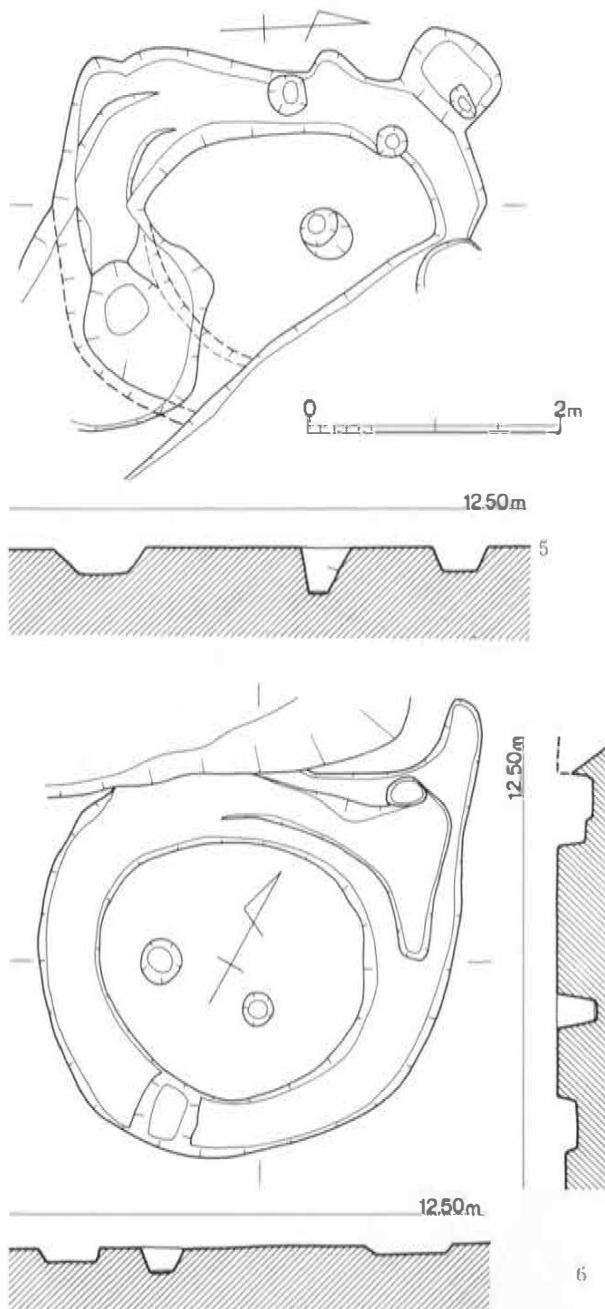
調査区の南西側で検出した周溝状遺構で、12号竪穴住居に切られてしまつており、1/3が欠失する。平面形状は不整円形を呈する。規模は南北軸で3.40m、深さ20cmを測る。溝の断面は逆台形を呈する。内側の円形区画には1本の柱穴がある。

出土遺物は皆無である。

6号周溝状遺構

(第319図)

5号周溝と近接して設置された周溝状遺構で、12号竪穴住居に一部切られている。平面形状は円形、断面逆台形を呈する。規模は



第319図 5号、6号周溝状遺構実測図(1/60)

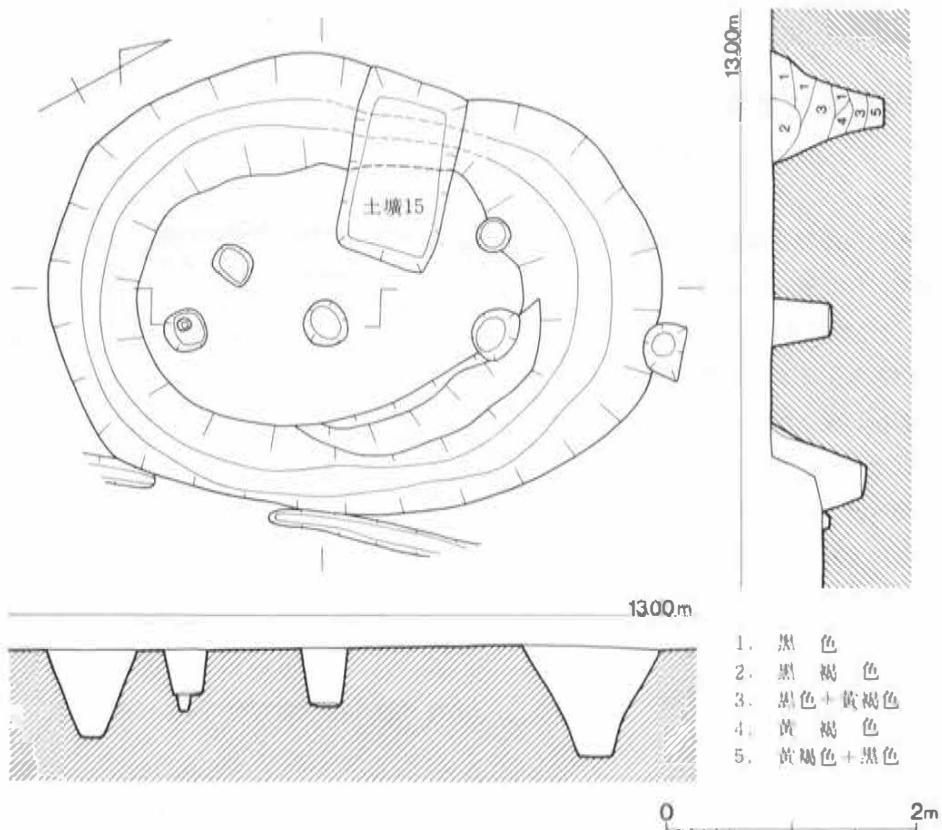
東西軸で3.30m、溝の幅50.0cm～65.0cm、深さ10.0cmを測り、遺存状況は良くない。円形区画内には2本の柱穴がある。

出土遺物は無い。

7号周溝状遺構(第320図)

B-1・2区で検出した周溝状遺構で、59号竪穴住居を切り、15号土壙に切られている。平面形状は梢円形を呈し、断面形はV字状である。規模は長軸4.86m、短軸3.65m、溝の深さ70.0cmを測り深く掘っている。内側の平坦部には5個の柱穴があるが、当該遺構に伴うか否かは不明である。

出土遺物は甕と鉢がある。



第320図 7号周溝状遺構実測図(1/60)

出 土 遺 物

土 器 (第321図)

1は短い口縁を「く」字状に外反させる甕の口縁片である。三次加熱を受け内外面に焼が付着する。復原口径26.0cmを測る。

2は鉢の破片で如意状の口縁を有す。外面に粗レバ、内面はナテる。

8号周溝状遺構 (第322図)

第321図 7号、10号周溝状遺構出土土器実測図(1/4)

B-1区で検出した周溝状遺構で約1/2が5号竪穴住居に切られている。現行での規模は2.30m、溝の深さ10.0cm前後を測り、遺存状態は悪い。

出土遺物は無く時期も不明である。

10号周溝状遺構 (第322図)

C-1区で検出した周溝状遺構である。平面形状は円形を呈するが東側は何らかの遺構と重複しているため幅広となる。規模は東西3.80m、南北軸3.50m、深さ25.0cm前後を測る。溝の断面は逆台形を量する。内側の円形区域上3個のビットと土壙様の掘込みがある。

出土遺物は甕の破片が1点ある。



第322図 10号周溝状遺構実測図(1/60)

出土遺物

土器 (第321図)

3は壺の底部片で、ハケとナデで仕上げる。胎土は精製され、角閃石を多く含む。底径10.3cmを測る。

11号周溝状遺構 (付図1)

F-7区で検出した周溝状遺構で周辺の全ての豊穴住居に切られており、遺存状態が悪い。ここでは遺構の説明は省略する。

出土遺物は磨製石鎌片がある。

出土遺物

石器 (第323図)

磨製石鎌様の石器片がある。現存での刃部が側面と基部側に研ぎ出しており、石劍その他の石器の再利用が考えられるが、用途は不明。現存長2.2cm、厚さ3.0mmを測る。硬質砂岩製である。



第323図 11号周溝状遺構
出土石器実測図(1/2)

12号周溝状遺構 (付図1)

L-3区で検出した周溝状遺構である。時期の不明な141号豊穴住居に切れられ、しかも、北側は削平を受けており遺存しない。このため詳細は不明である。

出土遺物は無い。

13号周溝状遺構 (付図1)

V-4区で検出した周溝状遺構である。耕作により大半が削平を受け一部遺存するに過ぎない。

出土遺物は無い。

(4) 落し穴状遺構

1号落し穴状遺構 (図版29-(4) 第324図)

B-1・2区で検出した落し穴である。平面形態は隅円長方形を呈する。規模は長軸1.75m、短軸90.0cm、深さ1.26m、底面の長軸は1.08m、短軸は82.0cmを測る。覆土は黒色土のみが下層まで堆積していた。両小口部分はテラス状の平坦部がみられ、これが意識的に掘られたのか崩落したのかは明らかでないが、昇降のための施設の可能性を秘めている。他にこの周辺での落し穴状遺構は見当らない。

出土遺物は皆無である。

2号落し穴状遺構 (図版29-(4) 第324図)

O-3区で検出した落し穴で、平面形態は隅丸長方形、断面は逆台形を呈する。規模は長軸1.16m、短軸50.0cm前後、深さ80.0cm、底面の長軸90.0cm、短軸30.0cmを測る。覆土は1号と同様黒色土が充満していた。底面には逆刺用の杭を埋める3個の小ピットが等間隔に掘られており、中央のピットは主軸からややずれている。ピットの深さは10.0cm~15.0cmである。周囲には同様の遺構はなく単独で設置されている。

出土遺物は皆無である。

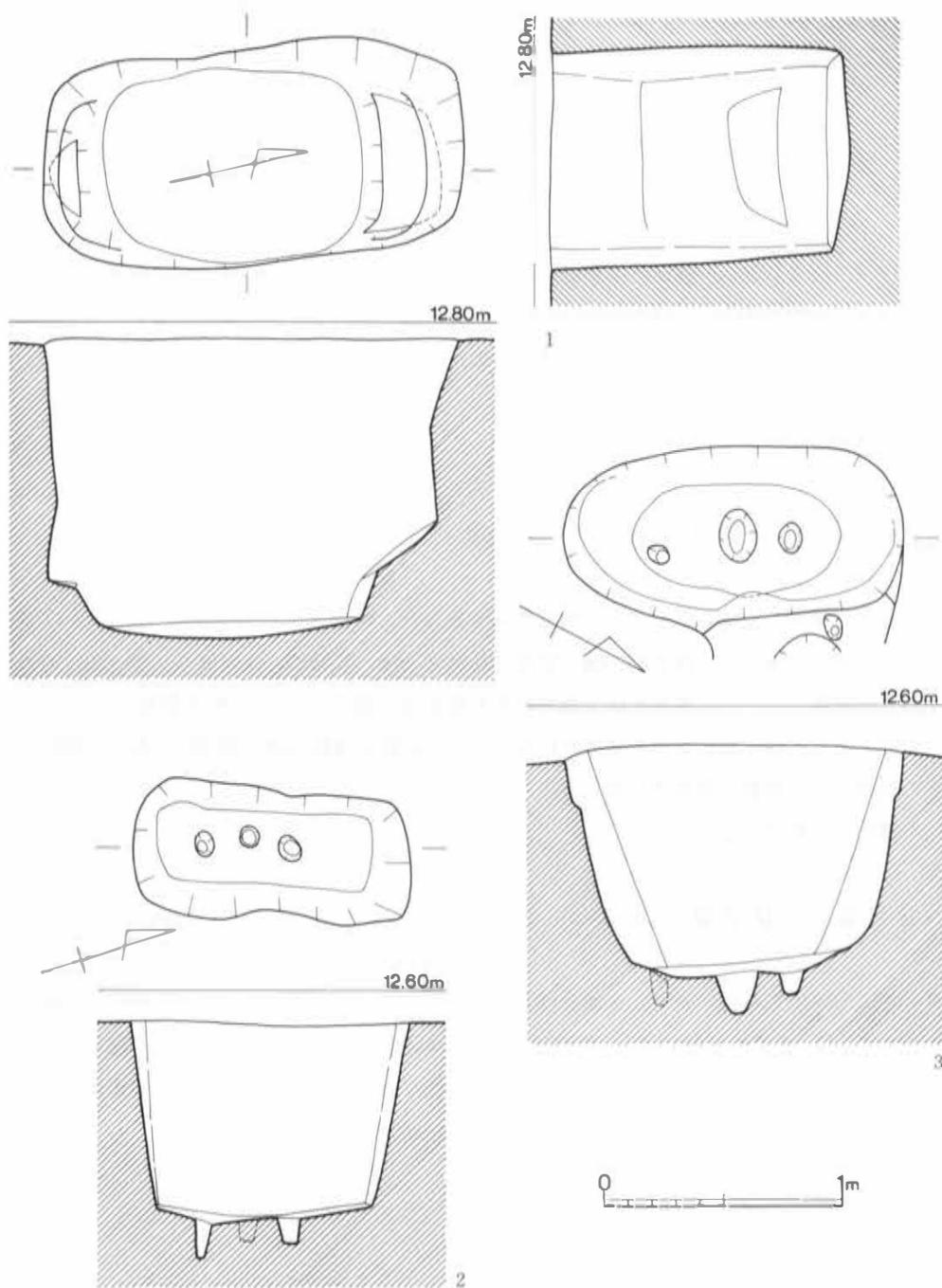
3号落し穴状遺構 (図版30-(1) 第324図)

P-5区で検出した落し穴で、平面形状が橢円形を呈し、断面逆台形である。規模は長軸1.42m、短軸72.0cm、底面の長軸87.0cm、短軸45.0cm、深さは95.0cmを測る。覆土は他の落し穴と同様黒色土の堆積が認められる。底面には3個の逆刺の杭を立てるためのピットが不規則に掘られているが、中央ピットはやや大きい。深さは10.0cm~15.0cmである。

出土遺物は皆無である。

(5) 土 壤

土壤は26号まで確認したが大小があり、しかも確實に土壤の形態をとっているものとそうでないものがある。ここでは8基を図示したが不掲載の土壤について出土遺物のあるものは遺物のみ



第324号 1号、2号、3号落し穴状遺構実測図(1/30)

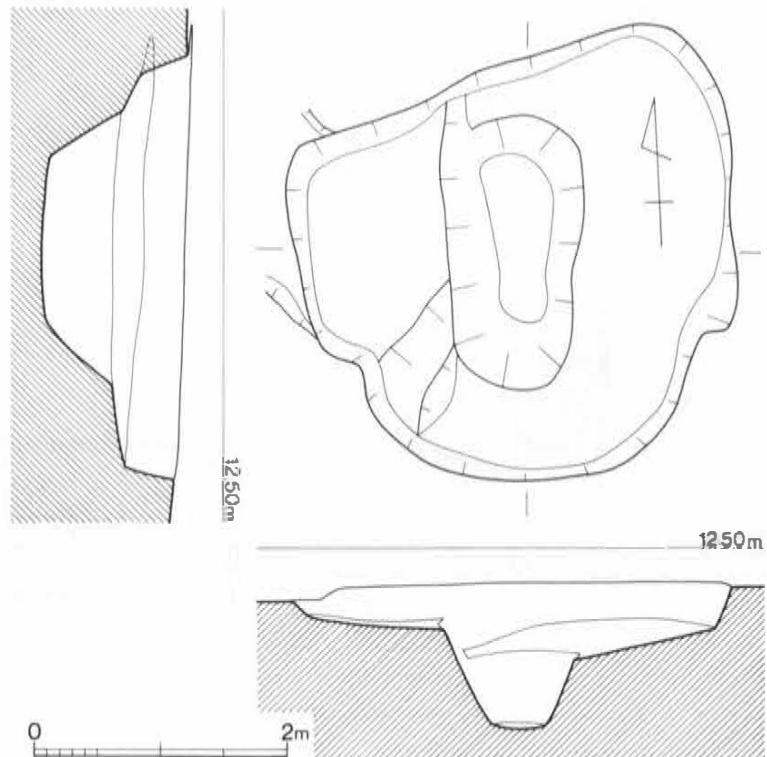
の説明とする。

3号土壙 (図版30-(z) 第325図)

C-7区で検出した土壙である。平面プランは不規則形に近い形状を示す。2段掘りを呈し内側にさらに小型の椭円形の土壙を掘込んでいる。規模は南北軸3.40m、東西軸3.45mを測る。テラス部は緩斜面をなす。内側の土壙は長軸2.17m、短軸1.05m～1.10m、深さ55.0cm前後、上面からの深さは1.15mを測る。

出土遺物は壺・甕・鉢・壺があり、13

号、19号住居と同一時期と考えられる。機能については定かでない。



第325図 3号土壙実測図(1/60)

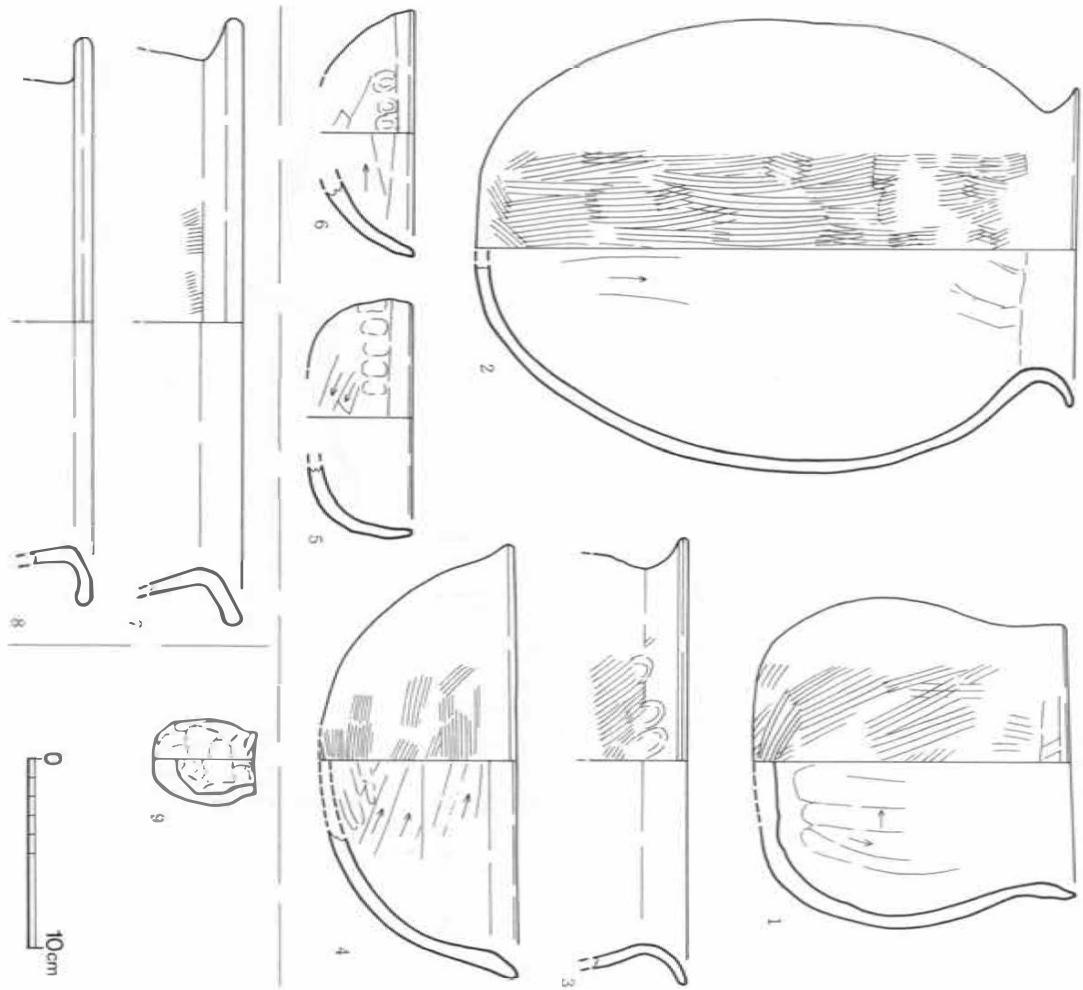
出土 遺 物

土 器 (図版65 第326図)

1はつくりの粗い直口壺である。体部が下脹れの形状で安定感がある。外面には二次加熱を受ける。調整は粗いハケと箒削りで仕上げる。復原口径14.5cm、器高16.6cm。

2・3は甕で、前者はほぼ完形である。反り気味の短い口縁を有し長胴をなす。調整は粗いハケと箒削りで仕上げる。口径16.6cm、器高31.6cmを測る。3は器體の薄い甕の口縁片で復原口径23.3cmを測る。

4は口縁部を若干外反・肥厚する鉢である。胴部はやや丸味を有す。調整は外面がハケ、内面



第326図 3号、6号、9号土壙出土土器実測図(1/4)

は削る。復原口径23.0cm、器高10.2cm。

5・6は浅で、5は口縁を内側させ胴から底部にかけては盛る。6の口縁は直線的で、胴部は細まる。5の復原口径12.2cm。6の復原口径13.0cmを削る。

6号土壙出土遺物

土 器 (第326図)

7・8の甕の口縁部片がある。7は「く」字状8は逆「L」字状の口縁を有し、後者は口唇部が肥厚する。両者とも最大径が口縁部にある。前者の口径32.0cm、後者は30.0cmを測る。

8号土壙 (第327図)

D-4区で検出した土壙で、平面形状は不整円形を呈する。規模は1.90m×1.75m、深さは35.0cmを測る。周縁及び底面にピットがみられるが、当該土壙に伴うか否かは不明である。覆土は黒色土が堆積していた。

出土遺物は無いが、集落に関係する遺構であろう。

9号土壙出土遺物

土 器 (図版65 第326図)

9の手捏ね土器がある。口縁は内傾させ、小さな底部をつくる。器面は粗くナデている。口径3.3cm、底径2.2cm、器高5.2cmを測る。

11号土壙 (第327図)

C-2区で検出した61号竪穴住居の床面下で検出した土壙である。平面形状は円形状を呈し、規模は東西軸2.05m、南北軸2.15m、深さ20.0cm前後を測る。底面には2本の柱穴があるが、その内の1本は61号住居の支柱穴である。

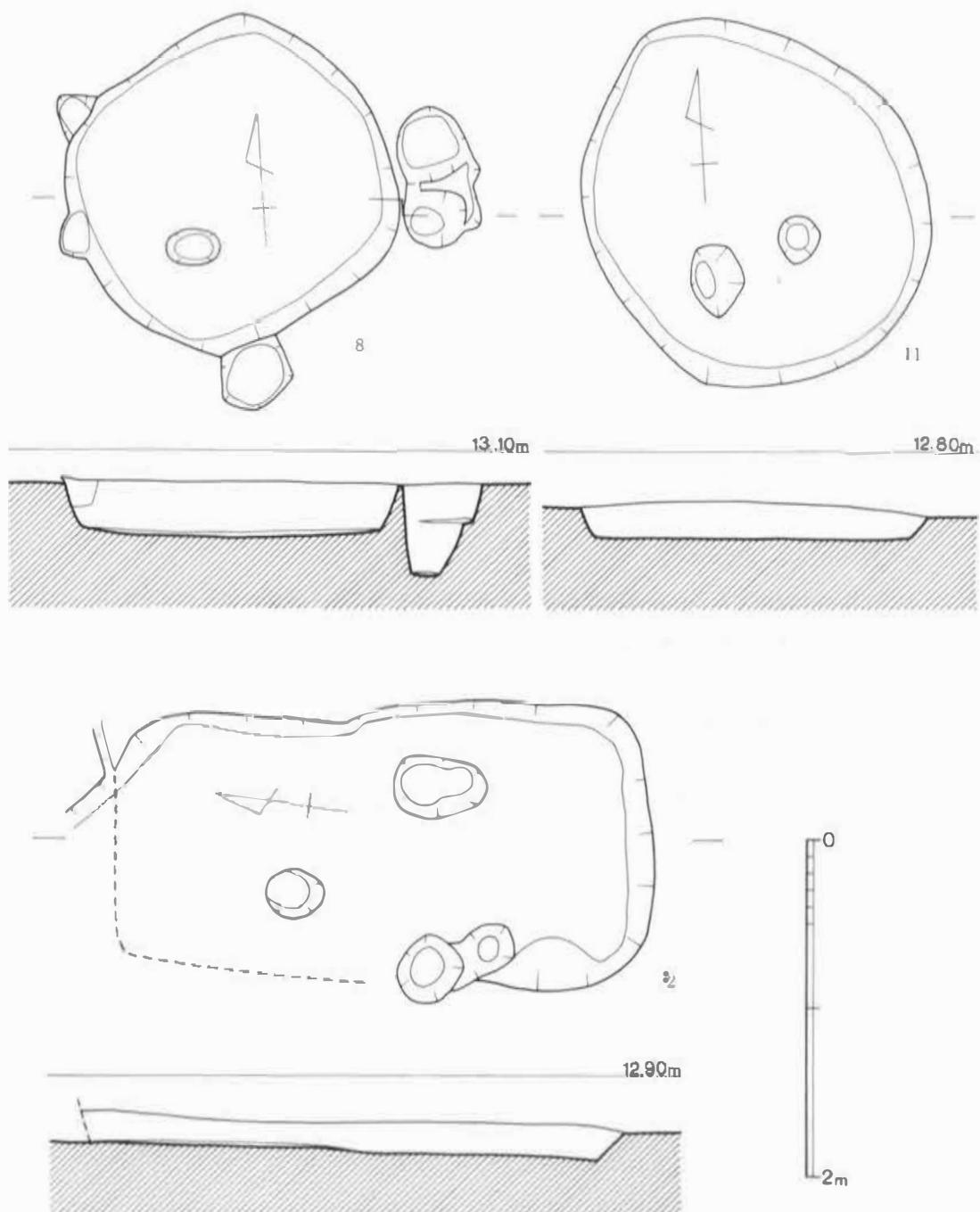
土壙の用途は明らかでなく、出土遺物が無いことから時期も不明である。

12号土壙 (第327図)

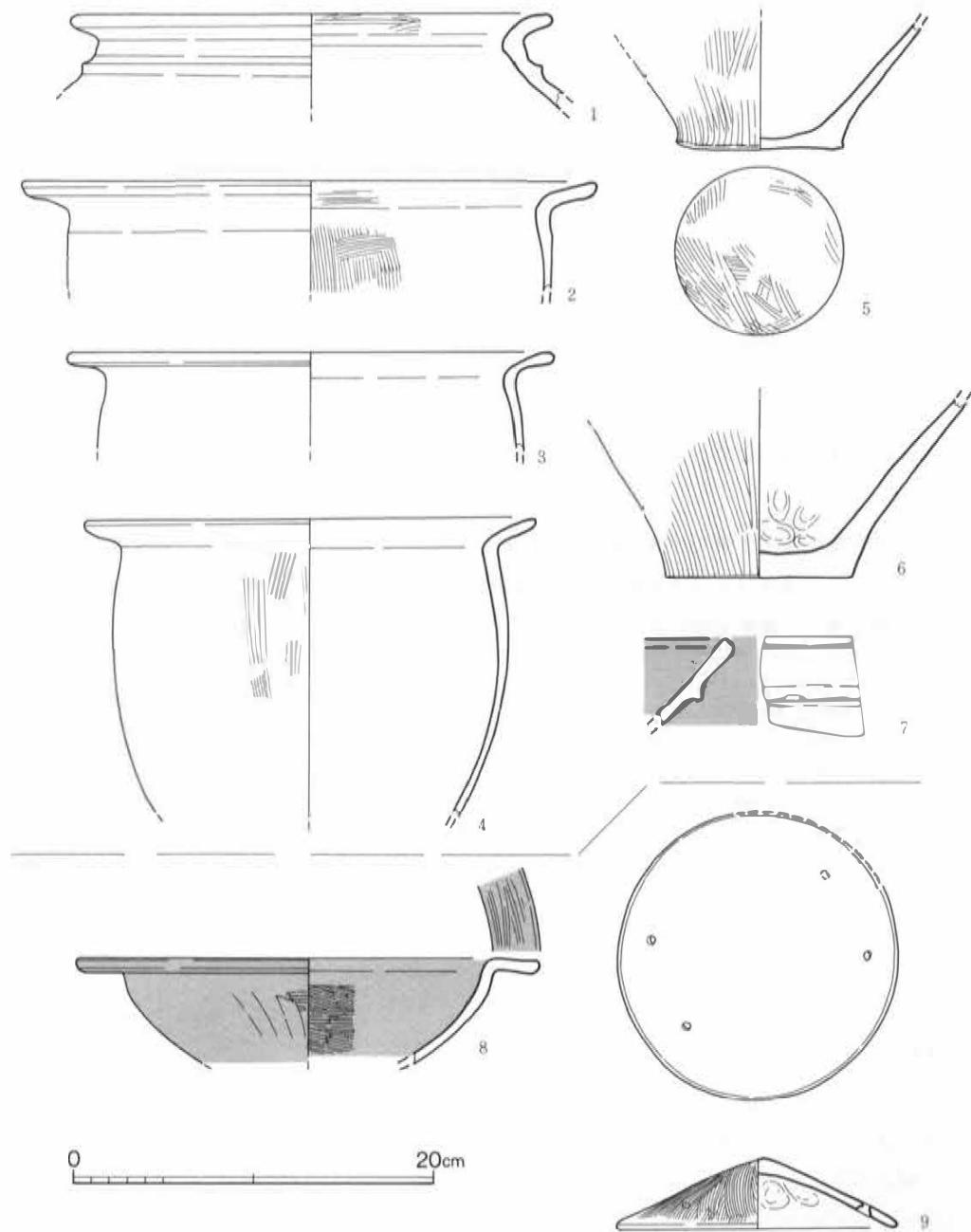
C-2区で検出した土壙であるが、61号、62号住居と重複し2軒の住居よりも古い。北壁と西壁の一部は住居により削平を受け遺存しない。平面プランは復原すると長方形となる。規模は東壁と南壁が計測可能で3.10mと1.60mを測る。

出土遺物は漆・甕・丹塗り磨研土器がある。

出 土 遺 物



第327図 8号、11号、12号土壤実測図(1/40)



第328図 12号、17号土壤出土土器実測図(1/4)

土 器 (図版65 第328図)

1は「く」字状の口縁を有す壺の口縁片である。肩部には低い三角凸帯を貼付する。口縁内面に煤が付着する。口径26.6cmを測る。6は壺の底部片である。底径10.4cm。

甕は2～5がある。口縁は逆「L」字状に近い形状をなし、逆「L」字から「く」字状に変化する過渡的様相を示す。口縁部に最大径を有す。総体的には器壁を薄くつくる。2の復原口径32.0cm。3は27.0cm。4は25.0cmを測り、2、4は弱い二次加熱を受ける。5は底部片で外面のみならず底部にも粗いハケを施す。二次加熱を受け黒くすむ。底径9.4cmを測る。

7は丹塗り磨研の土器で、小片のため器種は明らかでない。口唇部は肥厚し、口縁下には三角凸帯を付せる。胎土は精製された粘土を使用しつくりの丁寧な土器である。

14号土壙 (第329図)

13-3区で検出した土壙で平面形態が梢円形を呈する。規模は長軸2.18m、短軸95.0cmを測る。南・北の小口部分はテラス状をなし、中央部が一段と深くなり、最深部で60.0cmを測る。出土遺物は無く、機能も明らかでない。

17号土壙出土遺物

土 器 (図版65 第328図)

8は高杯の杯部片である。口縁は中期の鋤先口縁の系譜を引くもので、逆「L」字状口縁を呈する。肩部は丸味を有す。調整は内外面とも丹塗り磨研である。復原口径25.6cmを測る。

9は蓋形土器で整美なつくりである。据部には焼成前に4孔を外側から穿つ。調整はハケとナデで仕上げる。据部径15.6cm、器高3.35cmを測る。

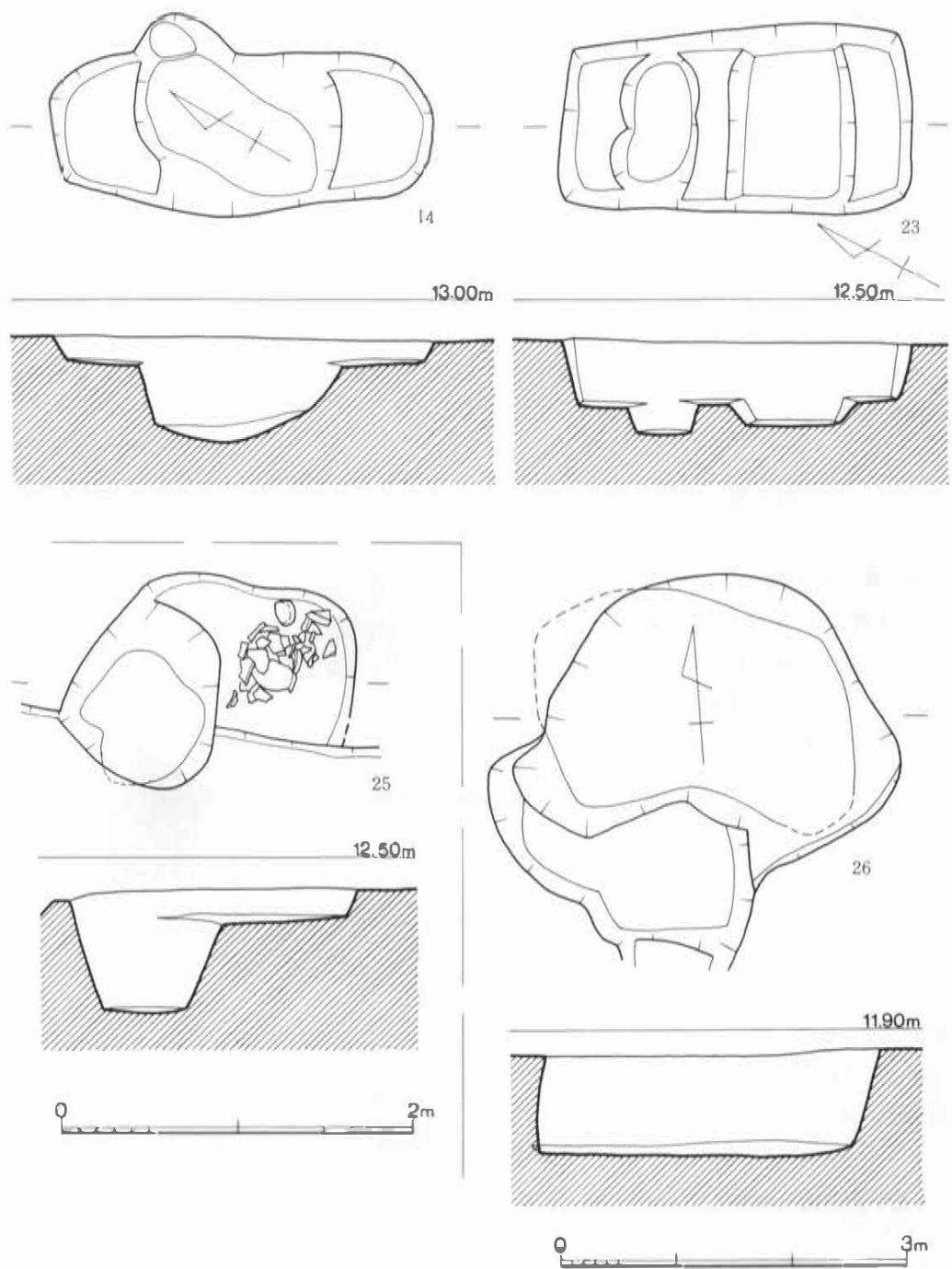
23号土壙 (第329図)

R-4区で検出した土壙である。R-3・4区とS-4区周辺は堅穴住居が設営されておらず、一層の中央広場的機能が窺える。

土壙の平面形態は長方形を呈し、底面2箇所に深い拘込み部を設けている。規模は南・北壁が95.0cm・90.0cm、東・西壁1.88m・1.95mを測る。

出土遺物は無い。

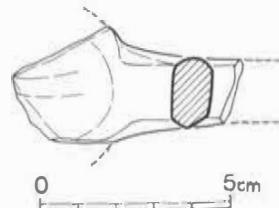
24号土壙出土遺物



第329図 14号、23号、25号、26号土壤実測図(1/40、1/60)

土製品（第330図）

土製玉杓子の破片がある。柄の断面は長方形を呈する。全体に二次加熱を受け淡く赤変する。



25号土壤（図版30-(3) 第329図）

T-1区で検出した土壤である。ピットと201号堅穴住居に切られしており、約1/2が欠損する。平面形状、規模などは不明で、深さ20.0cmを測る。

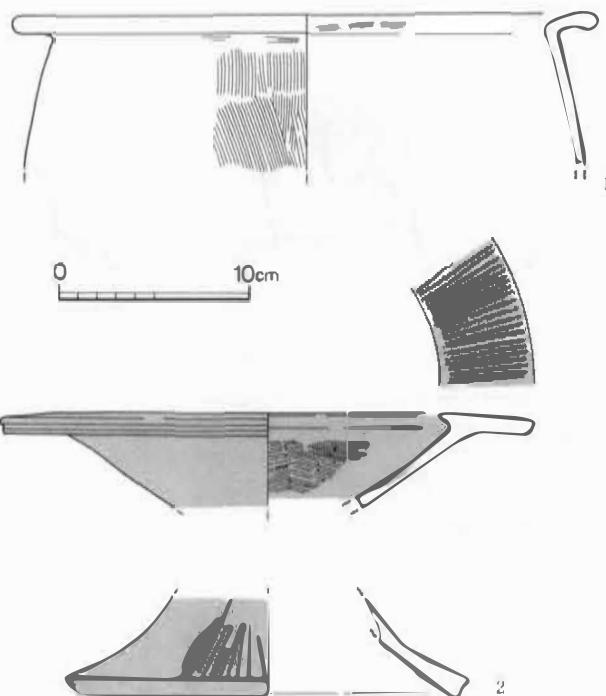
遺物は甕と丹塗り磨研の高杯があり、その傍からは10.0cm前後の河原石が出土した。集落祭祀の関係遺構であろう。

出土遺物

土器（第331図）

1は甕の口縁部片で、逆「L」字状の口縁部をつくる。口唇部を肥厚させ、最大径が口縁にある。調整は外面に細いハケ、内面はナデる。復原口径31.0cmを測る。

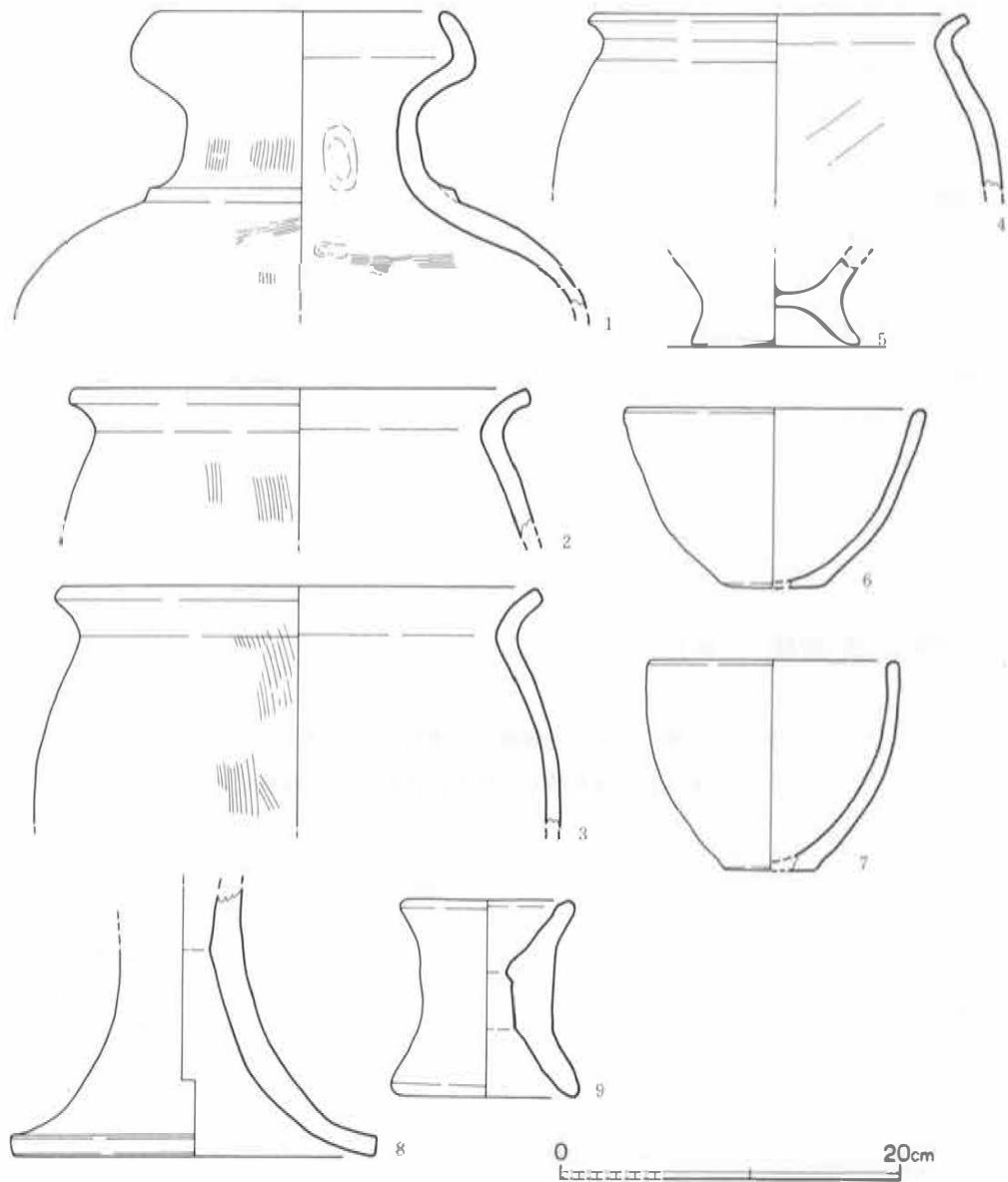
2は精製品の高杯の杯部と脚部片で同一個体である。杯部は鉤先状口縁を有し、脚部を浅くつくる。調整は丁寧な丹塗り磨研で、口縁平坦面と脚部に暗文状の磨き痕を残す。復原口径28.0cm、脚部径21.0cmを測る。



26号土壤（第329図）

第331図 25号土壤出土土器実測図(1/4)

T-4・5区で検出した土壤で、214号堅穴住居に切られているが、調査時点では同時に発掘をした。平面は不整形プランを有し、南側にはテラスを設ける。断面形は部分的にオーバーハング気味に削削している。規模は東西軸2.90m、南北軸はテラス部分を含めると3.15m、深さ85.0cm



第332図 26号土壙出土土器実測図(1/4)

三〇

出土遺物は壺・甌・鉢・高杯・器台があり、器種も豊富である。

出
土

土器 (第332図)

1は複合口縁並で肩折部の破片不明瞭である。頸部は短く、肩部には低い三角凸帯を有する。肩部の張りは鋭い。復原口径14.9cm。

壺は2~5がある。2~4はすべて同タイプの壺で、「く」字状口縁を有し最大径が胴部にある。測定は一次加熱を受け器面が剥離する。2の口径は24.2cm、3は25.5cm、4は20.2cmを測る。5は低い脚台を有する壺で、基部径9.0cmを測る。

6~7は鉢の破片を復原実測したものである。6は脚部から口縁にかけて開き、7は脚部が丸味を有し口縁は直口する。6の口径16.0cm、底径5.5cm、器高9.3cm。7の口径13.3cm、底径5.0cm、器高11.0cmを測る。

8は高环の脚部片である。高环にしては胎土が不良で、砂粒を多く含む。復原脚部径19.3cmを測る。9は小型の器台で上下対照的な外反度を示す。口径9.2cm、基部径9.9cm、器高10.3cmを測る。

土器はすべて埴土中の出土である。

(6) 穫穴状遺構 (付図)

I~6は検出した竪穴状遺構で、36号住居跡の北東傍に設置する。平面プラン形を呈し、規模は2.00m×2.20m、深さ20.0cmを測る。底面には柱穴などは無く、用途は不明である。出土遺物は控別がある。

出土

土製品 (図版65 第333図)

一部欠失するが整美なラグビー球状を呈する控別がある。長さ4.3cm、大径2.3cmを測る。口径19.0cmである。



第333図 穫穴状遺構出土
土製品実測図(1/2)

(7) 潤状遺構 (付図1)

V-X-I区で検出した潤状遺構で、W-I区で途切れる。その間隔は9.0mを測る。溝幅は1.0mで削平されたためか遺存状況は良くない。245号住居(古墳時代後期)に埋られており、弥生時代の所産と考えられるが、機能的には明らかでない。可能性の問題としては源性時代の集落に伴う墓地を開拓する溝と考えることもできよう。

(8) 墓地

調査区内で墓地を検出したのは、73号竪穴住居内の中世墓は除くとしてX-2区の弥生時代の3基のみであるが、調査区の北東40.0m付近では甕棺墓の存在が周知の事実として挙げられる。今回の調査で検出した墓地はその南限とも受け取られよう。

出土した3基の墓地は各々異った形態を示し、石蓋土壙墓、木蓋土壙墓、横口式木蓋土壙墓である。しかも、近接した配置を示していることから家族墓的様相を示唆している。

石蓋土壙墓（図版31-(2) 第334図）

主軸をほぼ東西に向けた石蓋土壙墓で、2段掘りの長方形の墓壙を掘っている。墓壙の規模は南・北辺2.50m・2.40m、東・西辺1.45m・1.25m、テラスまでの深さ35.0cm前後である。墓壙内には緑泥片岩の板石を鱗状に覆い蓋石とする。蓋石は全面に灰白色の粘土で目貼りを施し、被葬者を丁寧に埋葬していた。被葬者を埋葬する土壙の両小口には緑泥片岩の板石を立てているが、側壁には板の痕跡すら確認できていない。埋葬した土壙の規模は長さ2.00m、幅は東小口部で40.0cm、西小口部で55.0cmを測り、西側が幅広となる。しかも底面には多くの朱の散布が確認できたことから頭位を西側とする。被葬者を埋葬した後に頭部から脚部にかけて鱗状に蓋を覆ったことが理解できる。なお腰の部分にも朱が認められた。床面には全面に灰白色の粘土を舟底状に貼り詰めている。

土壙内には約1/2ほど土砂が流入しており、中からは人骨は無論のこと副葬品も出土していない。

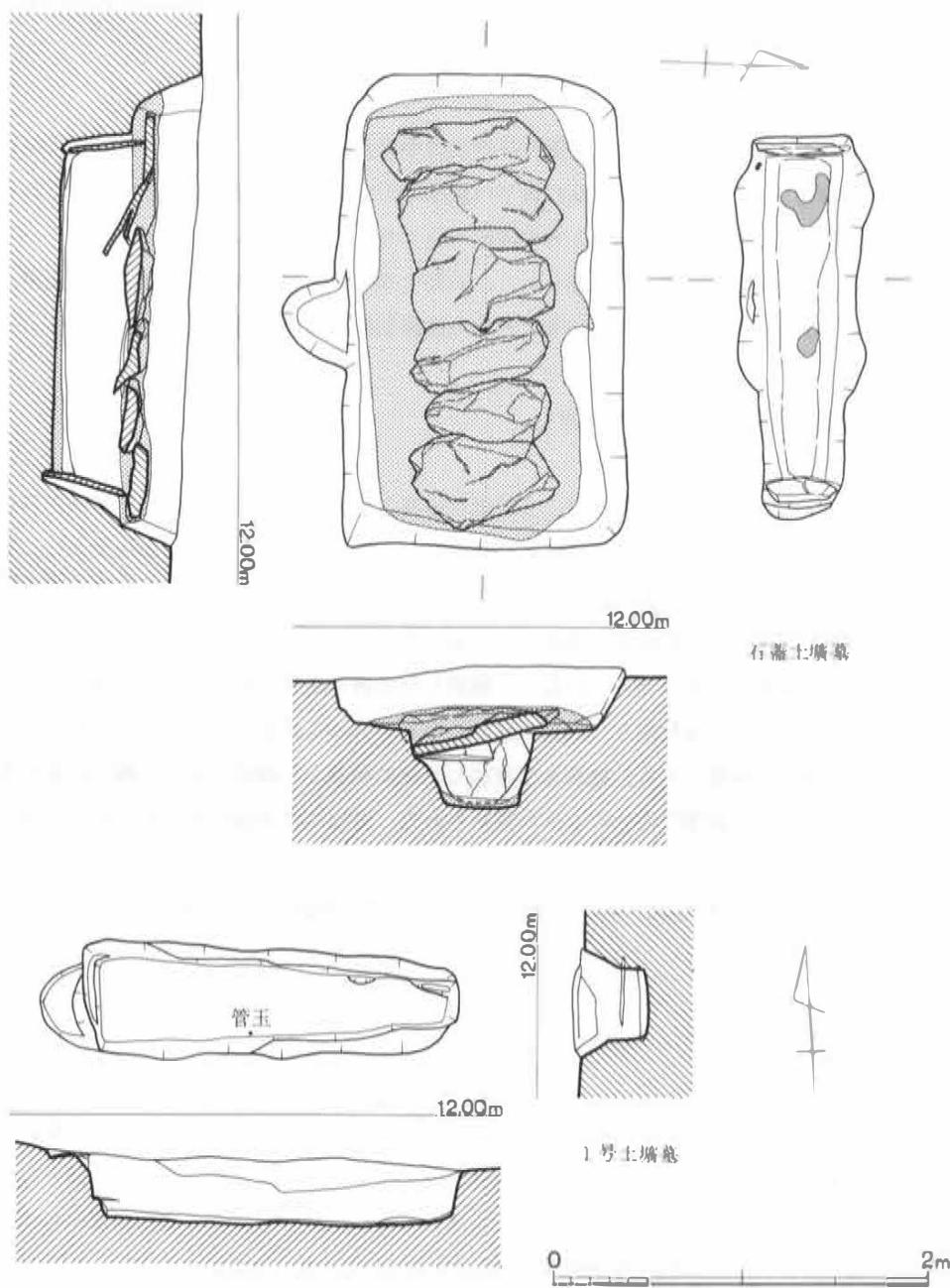
1号土壙墓（図版30-(4) 第334図）

石蓋土壙墓の北側傍で検出した木蓋土壙墓である。規模は長辺が1.90m・1.95m、短辺が28.0cm、60.0cm、深さ35.0cmを測り、石蓋土壙墓同様西側が幅広となることから頭位は西側となる。

床面には朱の散布は確認できておらず、人骨も遺存していない。被葬者の右側腰部から鶴玉製の管玉が出土したが、残念ながら移動時に紛失した。

2号土壙墓（図版31-(1) 第335図）

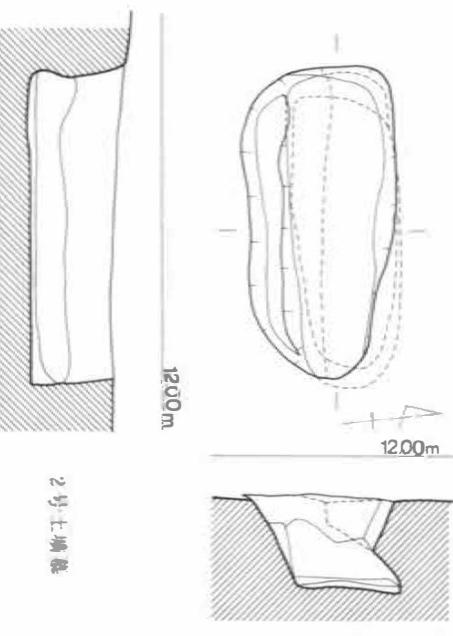
石蓋土壙墓と1号土壙墓に挟まれた状態で検出した小型の土壙墓である。前記の墓を夫婦墓とすればその子供を埋葬したことが考慮される。墓地の形態は所謂横口式木蓋土壙墓で上部が崩壊



第334図 石蓋土墳墓、1号土墳墓実測図(1/40)

していた。規模は長軸1.20m、上面の短軸30.0cm、奥行で60.0cm、深さ35.0cmを測る。面には広範囲にわたり朱を散布していた。出土遺物及び人骨は随伴していない。

3号 (第335図)

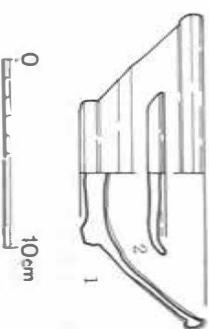


E-4区で検出した73号略穴住居跡内に掘込んだ土壙墓である。黒色土の覆土中に掘込んでいたため床面まで掘下げた時点で確認された。平面形状は略円長方形とし、規模は長軸が1.70m、短軸は北側が60.0cm、南側が40.0cm、現在の深さ8.0m～15.0cmを測り北側が深くなる。頭部は幅広となり、口に向かって埋葬していたと考えられる。頭部の

これは青磁壺と小皿が副葬され、被葬者の胸部に置いたと考えられる短刀が出土した。

出土遺物から土壙墓の時期は13世紀前半頃と考えられる。

第335図 2号、3号土壙墓実測図(1/30)



第336図 3号土壙墓出土土器実測図(1/4)



器(第336図)

陶器 1は縦縫を行す青磁の高台付丘の完形品である。底面には大きく厚みのある高台を付せる。面の内側一面面下部まで施釉をし、底面部近は露胎を示す。胎土は精製されて

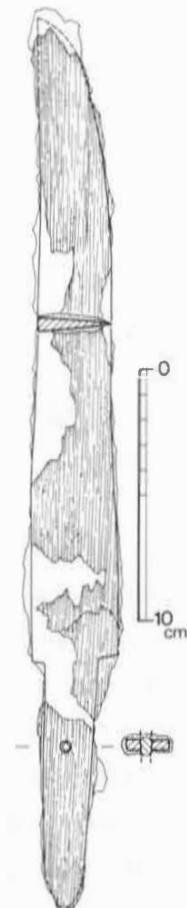
り、微量の砂粒を含む。白緑色の色調をなす。口径16.4cm、高台径7.6cm、器高6.4cmを測る。

土師器 小型の皿の完形品がある。底部は糸切痕が残る。口径8.5cm、底径6.8cm、器高0.9cmと低い。

鉄 器 (図版337)

土墳墓の床面から出土した短刀の完形品である。全体に鞘と基部の木質が残り全容は把握しにくい。刃部と背部は関付近で直になり、切先部に延るに従って反りを持つ。刃部は中央部で研ぎ減りが目立つ。両側をなし、基部には1孔の目釘穴を穿つ。目釘穴には釘が破損して残っている。基の先は木質が残り不明瞭であるが、尖るタイプのものであろう。

全長35.0cm。峰の幅6.0mm、基長9.6cmを測る。



(9) その他の遺物

P-3出土遺物 (図版66 第338・339)

2・4の砥石がある。両者とも硬質砂岩の石材を使用する。2の研面は5面、4は4面を数える。2の現長6.5cm、3は約1/4を欠失しており、現長12.5cmを測る。

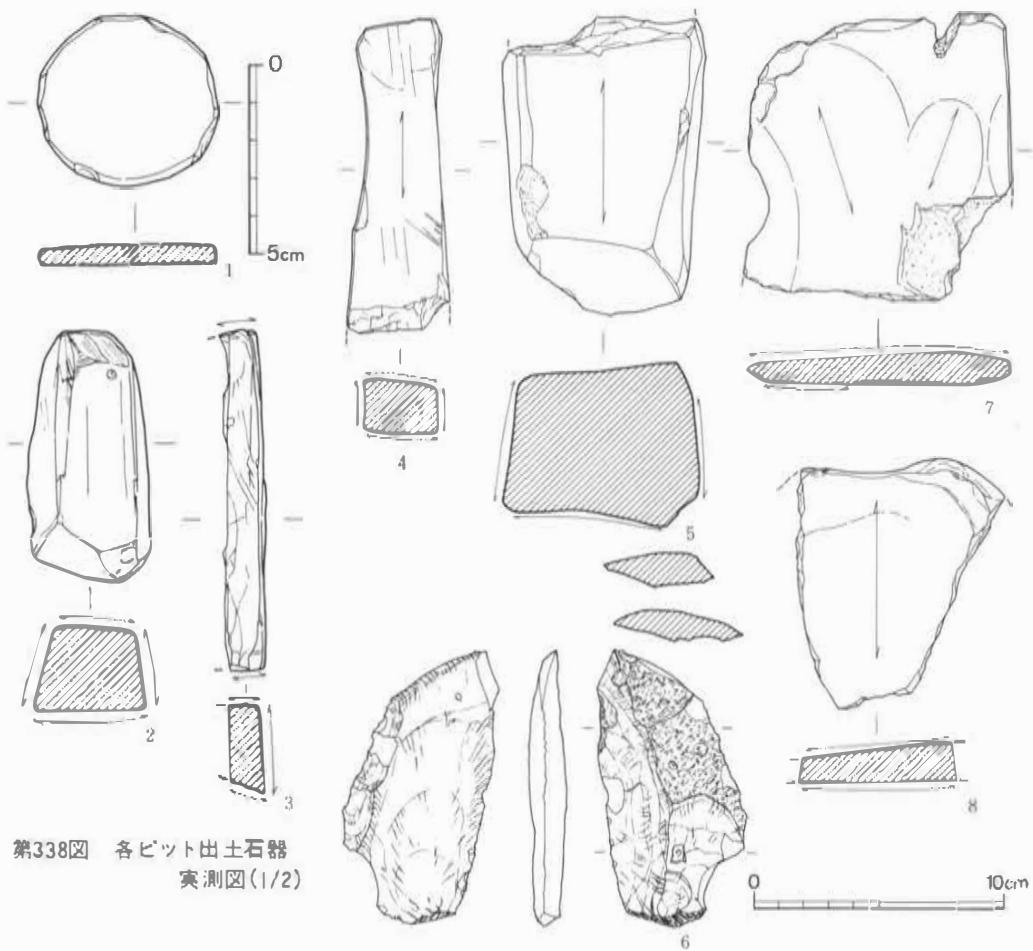
第337図 3号土墳墓出土
鉄器実測図(1/3)

P-28出土遺物 (図版66 第338)

1の雲母片岩製の円盤がある。周縁は図示した下方のみを摩っており、未製品の感を受ける。紡錘車の木製品の可能性がある。径4.6cm、厚さ5.0mmを測る。重さは21.7gである。

P-32出土遺物 (図版66 第339)

5の花崗岩質砂岩の仕上げ砥石があるが、約1/2を欠失する。研面は4面を数える。黄白色の色調をなす。現長12.0cm。



第338図 各ピット出土石器
実測図(1/2)

第339図 各ピット出土石器実測図(1/3)

P-127出土遺物(第338図)

3のフリント状の細長い石器がある。図示した上下2面を摩り平滑となる。一般的に砥石に使用される石材ではなく、用途は明らかでない。現長9.0cmを測る。

P-139出土遺物(図版66 第339図)

6のサヌカイトの石材を使用した不定形石器がある。片面を一部破打し刃部を形づくる。片側には茎部状を叩き出している。現長11.0cmを測る。

P-146出土遺物(図版66 第339図)

8の粗悪な縁泥片岩を使用した砥石がある。研面は表裏の2面で、表は平滑で裏面はざらついている。

P-213出土遺物(図版66 第339図)

7の縁泥片岩製の砥石片がある。研面は2面で、表面は2方向に研ぎ込んでおり平滑となる。裏面は一部に研面を残す。上部側面には刃部で敲打した痕跡が残る。現長11.2cm、厚さは1.2cmと薄い。

VI おわり

森ノ木遺跡は標高12m前後の低位丘陵の南側約15,000m²を調査したが、学校建没に伴う緊急調査の観点から調査制限の制約を受け約3ヶ月間の短期間に内調査であり、十分な調査体制とのもとでの実施是不可能であった。しかも、検出した遺構は縫穴住居を主体とした約246軒もの莫大な集落群であり、極めて調査した状況を示していた。その規模からしても、調査期間及び調査体制に不備があつたことは否めず、今後の反省課題を残したものといえる。

ともあれ、南筑後における弥生時代を中心としたこれはどの大規模集落はいまだ発見されておらず、当該地の弥生時代の一指標ともなる資料であり、慎重な検証及び分析が重要視されるが、何より、報告の時期別簡約があり、この項では集落の時期別変遷過程とそれに付随する若手の問題点を述べるに留め、いまだ刊行な資料の提示の無い南筑後のみ生時後期の土器編作については機会をあらためて述べることにする。

森ノ木遺跡の集落変遷について

当該遺跡で検出した遺構の内訳は、縄文時代の落し穴式遺構3基、弥生時代中期末から古墳時代後期（主に6世紀後半から7世紀初頭頃）の縫穴住居跡246軒以上（削平された箇所を含めると300軒以上）、掘立建物8棟以上、周溝式遺構12基、土塊26床、溝式遺構1条、墓地1基（中世墓を含む）などがあげられる。しかも、当該地には舌状に伸びる低位丘陵の南側斜面の一部を調查したに過ぎず、この集落がどれ程の規模を有し、縫穴住居の推定総数は幾倍のものかは計り知れない。

ここでは検出した縫穴住居と出土土器資料をもとに集落の変遷過程（土器の変遷過程にも繋がる）を森ノ木一期からX期に区分して説明したい。当然、この区分には1時期内でのa、bに区分すべき箇所があると考えるが、一応この項では1つの日安として述べ、別機に詳細な検討を加える必要があろう。調査した縫穴住居の中で数多くの時期不明の住居があり、一概には断言できないが、ここでは時期の判別した住居の範囲内で考えたい。なお、集落の変遷期が必ずしも土器の編年とは一致しないことを断つておく。

森ノ木一期の集落

I期の縫穴住居は14号、48号から50号、54号、63号、78、81号等41基が相当する。これらは縫穴住居は重複するすべての住居より古く、調査区内で最も古期 営まれた集落である。口況

での配置を見るとD区の西側にのみ分布しており、西、北側調査区外に拡大すると推測される。しかも、C-2、3区及びD、E-1、2区が広場として設定され、広場Aとしたエリアとは関連性はない、と考える。

なお、調査区の東側T-1区で祭祀土壇の25号土壇を検出しており、当該土壇が集落祭祀としての位置付けが可能であれば、周辺の時期不明の堅穴住居はエリアを奥にする集団とも推測できる。

この時期に共伴する土器群を見ると、帝においては48-1の鋤先状口縁及び袋状口縁があり、墳は「T」字状、逆「L」字状の口縁が主体を占めるが、63号住居の共伴遺物を見ると逆「L」字状口縁と「く」字状口縁が共存しており、63号住居は1期よりも後出する可能性がある。

ともあれ、当該期の住居群は調査区内で発見した基本的エリアである広場Aを共有する集団とは異質群と考えられ、1期では広場Aは機能していないと理解されよう。

森ノ木Ⅱ期の集落

調査区内での当該期の堅穴住居は、1期に比較しかなりの増加傾向を示す。設営状況も広範囲に認められ、巨視的に概観すれば広場Aを周縁する形で設営する集団と広場Bを共有するグループとか存続しているかのような配置状況が看取できる。しかし、広場Aに対して各住居の主軸を必ずしも直交させる設営方法は採用しておらず、広場Aの核とした配置規制の他は特別細かい規制は存在しないと考えられる。

個々の堅穴住居を見ると1期の住居に対して大型の堅穴住居が出現し、59号住居のような大型で特異な形態の住居の出現が注目される。この住居の設営場所をⅡ期のみの堅穴住居で見る限り特段選定されたエリアに配置されたとは看取できないが、出土土器（特に壁から）で判断すれば、逆「L」字と「く」字状口縁が共存しており、繊細的な設営を考える上で1期の時期に併設していたとも受け取られ、1期の住居を加えて考えれば59号住居を中心として個々の住居が配置されているとも見てとれる。何れにせよ、現況では1期からⅡ期へ移行する時点で広場A、Bを核とする集団規制が明確に把握できることが指摘されよう。なお、周溝状遺構が出現するのも当該期からである。

出土土器で見ると、壁は中期の袋状口縁の系譜を引く所謂複合口縁帯が出現する時期であるが、いまだ削折部の歯は不明瞭で底部は粗く短い。鋤先口縁の系譜を引くタイプは鋤先端が残存するか退化し、31号住居の2の上に逆「L」字状に変化する。

墳では逆「L」字状の口縁は姿を消し、「く」字状に鋭く外反する口縁を有する壁に統一される。窓跡は中期特有の鋤先状口縁が残存するが、胴部はやや深くなる。

森ノ木Ⅲ期の集落

当該期にも広場A、BエリアはⅡ期の規制を踏襲しており、円空間から逸脱して設営した堅穴住居はなく秩序は保たれている。現況では広場Aを中心としてⅢ期よりも広範囲な分布状況を示しており、集落の一層の拡大が認められる。拡大するにも拘らず設置規制から逸脱しておらず、共同意識の顕在化が窺われる。

これに対してP～Vの範囲内で検出した広場Bに対応する一群は、広場Aを中心とする一群に比較して意識的な設置が認められないことが指摘でき、広場Bが当該期に機能した確証は認め難い。

個々の住居ではⅡ期で認められた大型の住居がⅢ期でも確認でき、この傾向もⅡ期を踏襲した形を示唆している。しかも、広場の前面に配置されていることは注目されよう。58号住居に見られる造り出し部は堅穴住居の出入り口と考えられるが、造り出し部を持つ住居はⅠ期からⅥ期まで継承されている。しかし、広場とは直交する方向に設けられており、出入り口が必ずしも中央広場方向に付設されていない。住居内の屋内土壇を出入り口とする考え方もあるが、大半が住居の南東側に設置しており、広場に対応する設置方法は採用していない。また、97号、159号住居が屋内土壇の設置方位を異にするなど、仮に屋内土壇が出入り口と假定しても中央広場に対応した形はとらない。

出土土器では、34号住居の一群はⅢ期としたが、掲載した1の複合口縁壺の口縁の屈折部の絞は明瞭であるにも拘らず、鋤先口縁壺が残るなどⅡ期の余韻を継いでいる。58号住居では共伴する甕は古相の感を残し、Ⅱ期内のa、bの差とも考えられるが、時間的都合から検討は別の機会に譲りたい。

森ノ木Ⅳ期の集落

Ⅳ期の集落は、Ⅰ期からⅢ期の広場を周縁する形で配置がなされたのに対し、住居の設営規制に乱れが生じ93号住居の広場A内の設営を見る限り広場Aは無視された形となり、集団内の規制緩和の兆候が窺われる。規制の崩壊が何に起因するのか定かでない。仮にそうでなければ、広場Aのエリア内に特殊な堅穴住居を設営したことになるが、特別な規模や形態を有した住居でもなく、普遍的な住居形態を示すことから集落の設置形態が変化したことになる。

出土土器では、44号(B)と61号住居出土の甕は同形状を呈し、最大径が胴部中央に有す。脚台付きの甕は長胴となる。

64号住居の一括土器は、堅穴住居が焼失しておりその後放置されていたことから好資料が得られた。今回は仔細な検討は加えないが、甕は5タイプが共存しており1の複合口縁壺の口縁は屈

折部の稜が鮮明で、肩部から胴上半部が前期に比べて張る。4、6、7のタイプの壺は口縁を短く内湾させ複合口縁を形づくり、頸部は頗る短い。このタイプの口縁を有す壺は、筑後地方では野口遺跡に出土例があるが、小型で調整手法もやや異なる。当該住居出土の壺の調整手法は、外面に擦過状の削り痕が見られ、Ⅲ期にない手法が現れる。

壺の口縁は「く」字状となるが、頸部内部の稜が明瞭なものと不明瞭なものが混在しタイプが異なる。外面底部付近には壺同様削り痕が出現するが、15の壺は新相の感がある。外面底部付近の削り痕は小型の壺や鉢にも用いられるようになる。

森ノ木V期の集落

V期に至ると中核となる広場Aは完全に廃れ、竪穴住居は2分して設営されたことが窺える。つまり、A～F区に集中するグループとL～W区に設営されるグループとに区分される。踏襲されてきた広場が崩壊した証左として、Ⅱ期からⅣ期にかけての住居は広場Aを中心として棟木方位が直交する方向を採用する場合が多いのに対し、当該期の住居は設営方位が異なることで理解でき、中核エリアが移動した事が考慮される。

出土土器では、62号住居の壺1はⅣ期のような反り気味に大きく外反するのに対し、口縁の外反度は鈍くなる。複合口縁壺では口縁の屈折が顕著でスマートな頸部を有す。

壺は口縁部が長く、しかも長胴の壺が出現する。底部の径は小さく、レンズ状を呈し不安定となる。Ⅳ期で出現した底部外面付近の削り痕は継承されている。

森ノ木VI期の集落

VI期に至ると住居の分布状況は東側に移動している。I部F区に見られるが、大半がI～V区で設営している。おそらく、調査区外の北側に広がり集団を構成していたと考えられる。北側の調査に期待したい。

出土土器は、102号住居に一括資料があるが、壺を欠落する壺は短く内傾する口縁を有し、胴部は球状に近い形状をなす。底部は不安定となり、小さな平底か丸底となる。137号住居出土の脚台付き無頸壺も同時期であろう。共伴する壺は長い口縁を有し、頸部の屈折は不鮮明なものもある。長胴、丸底に近い形状を呈すると考えられる。190号住居出土土器については、VII期の範疇で考えたほうが妥当とも思えるが、一応VI期に位置付けておく。その他、大型の器台が3点出土している。

森ノ木Ⅶ期の集落

Ⅶ期になると将米された土器（土師器）、つまり庄内系の土器を伴う一群で、古墳時代初期頃の集落である。8軒を当該期に当てたが、180号住居は出土資料が少なくて疑問が残る。調査区内ではⅥ期の集落から減少傾向が看取でき、集団の縮小化なのか調査区の北側に拡大するのかは判断できない。

個々の住居で、Ⅶ～Ⅷ世紀後期の住居とは異なる内部構造が出現する。つまり、弥生時代の住居では短轍沿いにベット状遺構を巡らすのに対して、Ⅶ期の住居は「匁」字状にベットを配する形の構造で、この形狀は最古式土師器を伴う時期の住居から出現すると考えられる。他に、弥生時代と同様のベット配置を継承する住居も存在する。ほかの遺跡では4本柱の例も存在するが、本遺跡ではすべて2本柱である。

出土土器では、16号と119号住居から好資料が得られたが、16号住居は3の小型盤かやや新相を呈し、119号住居は庄内系と伊賀系の變が共存する時期の所産であろう。しかし、12、13の溝塹は5世紀代に比定される土器で混入である。

森ノ木Ⅷ期の集落

Ⅷ期に該当する集落は5世紀代に成立したもので、Ⅶ期の集落との間には空白期がある。総数10軒の堅穴住居を確認した。分布状況をみるとB-1区からH、I-7区の各住居は分散傾向にあり、集団規制による設置のあり方は示さない。しかし、H-1区からR、S-1区に分布する住居については、等間隔にしかも弧を描きながら設置され、調査区外の北側に恰も中火ノ堀を形成しているかのような設営方法が看取できる。集団の中核は北側調査区外に存在すると考えられる。

個別住居では、全ての堅穴住居にカマドの付設は認められず、筑後地方でのカマド出現期直前の住居であろう。平面形態は平行形が主体で、27号堅穴住居のような例外的に長方形をなすものがある。疑問視されるのは73号住居で、先にも述べたが住居形態は長方形、2本柱など弥生的要素を色濃く残すが、柱間の室内から当該期の土師器が出土しており、肆に適わざれ確定要素が強いといえる。H-1～S区にかけての構造は、規模の大型化が窺える。

出土土器では、伊賀系統の繊細な作りの土器は姿を消し、やや粗い作りとなる。全体的に器種は漸減するが、26号住居出土の2のように口縁が反り気味をなすと共にスマートな脚とスカート状の開脚する脚とが共存するものこの時期からである。その中には、196号住居の一部は小型丸底土器を残すと共にその型はシャープさを残し、高杯の外縁が深く直線的に伸びるなどやや古相

を示し、布留系土器に後出する一群といえよう。

森ノ木Ⅹ期の集落

Ⅹ期の堅穴住居は、Ⅳ～Ⅶ区にかけて分布するが、総軒数は少なく6軒を数えるに過ぎない。分布状況を見る限りではⅢ期のような整然とした設営は認められず分散傾向にある。6軒の住居の内199号住居は特に大型を呈し、突出した規模を有していることが注目される。

個別住居では、1辺の壁際にカマドが付設され、森ノ木遺跡ではカマドの初現が認められる。

土器では、坏を除けば粗い作りとなり、土器製作の簡略化が目立つようになると共に須恵器の共伴が認められる。

森ノ木Ⅺ期の集落

Ⅺ期の集落とはやや時期差をなしⅩ期の集落が形成される。Ⅹ期での堅穴住居は広範囲の分布状況を示し、調査区内では集落の拡大が認められる。カマドは北側か北西側に付設される。当該期の住居は各遺跡の実例からカマドに対峙する箇所に出入り口を設けることが判明しており、南側低湿地が当時の恰好の水稻耕作地帯であることを考慮すれば当然の帰結ともいえる。

以上が森ノ木遺跡の集落変遷であるが、先にも述べたように短期間内での報告書作成のため詳細な分析がなされていない。出土した弥生土器は、南筑後地方における指標となるべき資料であり、短期間での検討は不可能であった。別の機会に再検討を期したい。

図 版



1 森ノ木遺跡西側俯瞰



2 森ノ木遺跡東側俯瞰

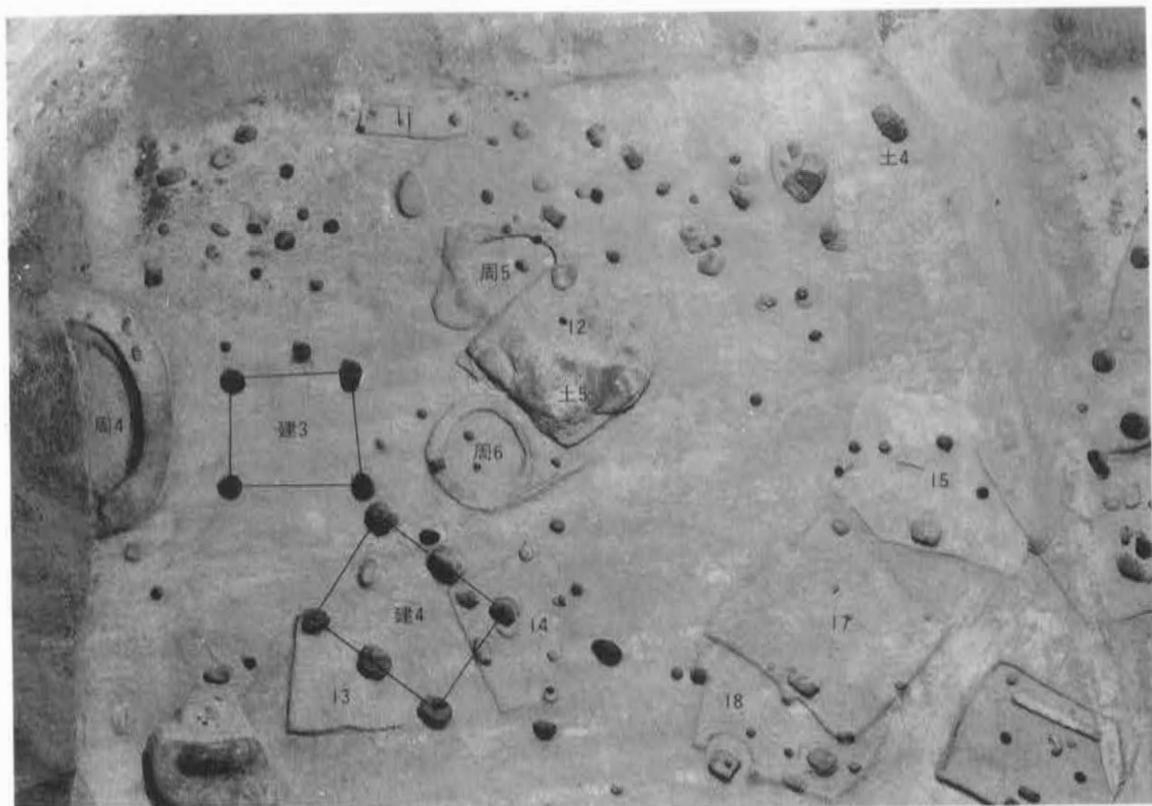
図版 2



1 9号竪穴住居跡周辺遺構



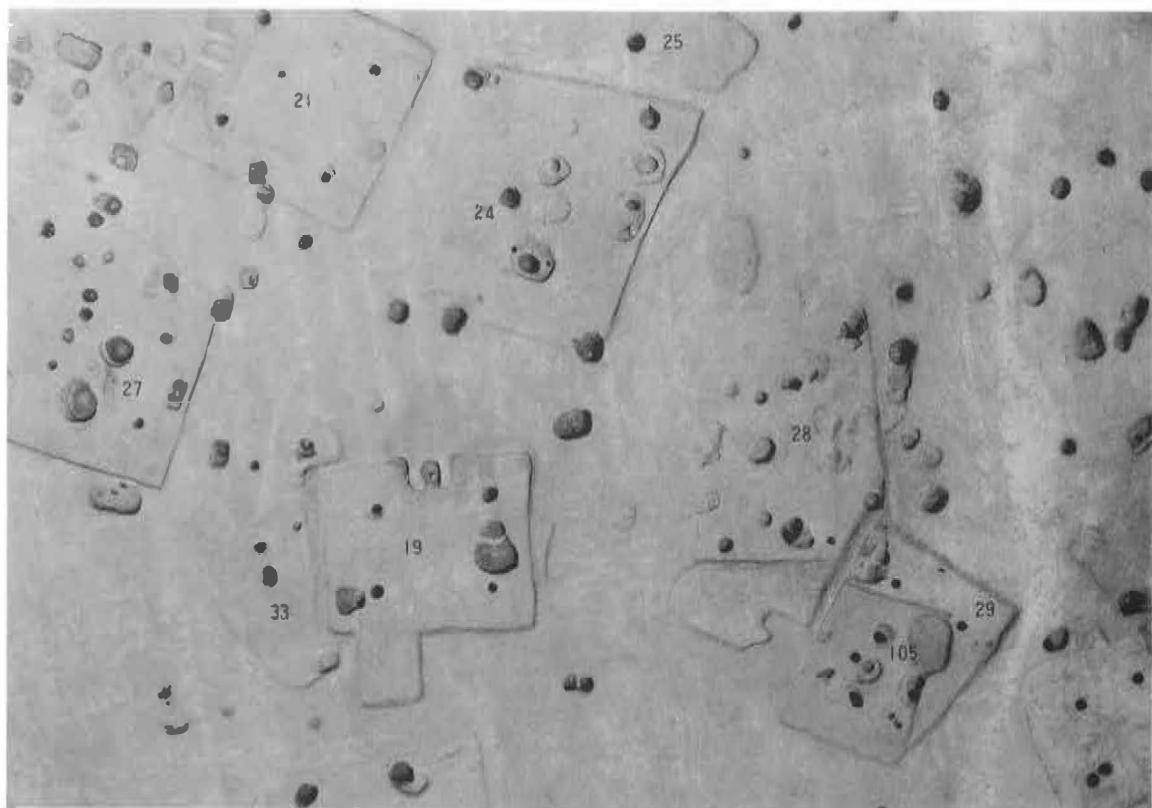
2 9号・10号竪穴住居跡、3号周溝状遺構



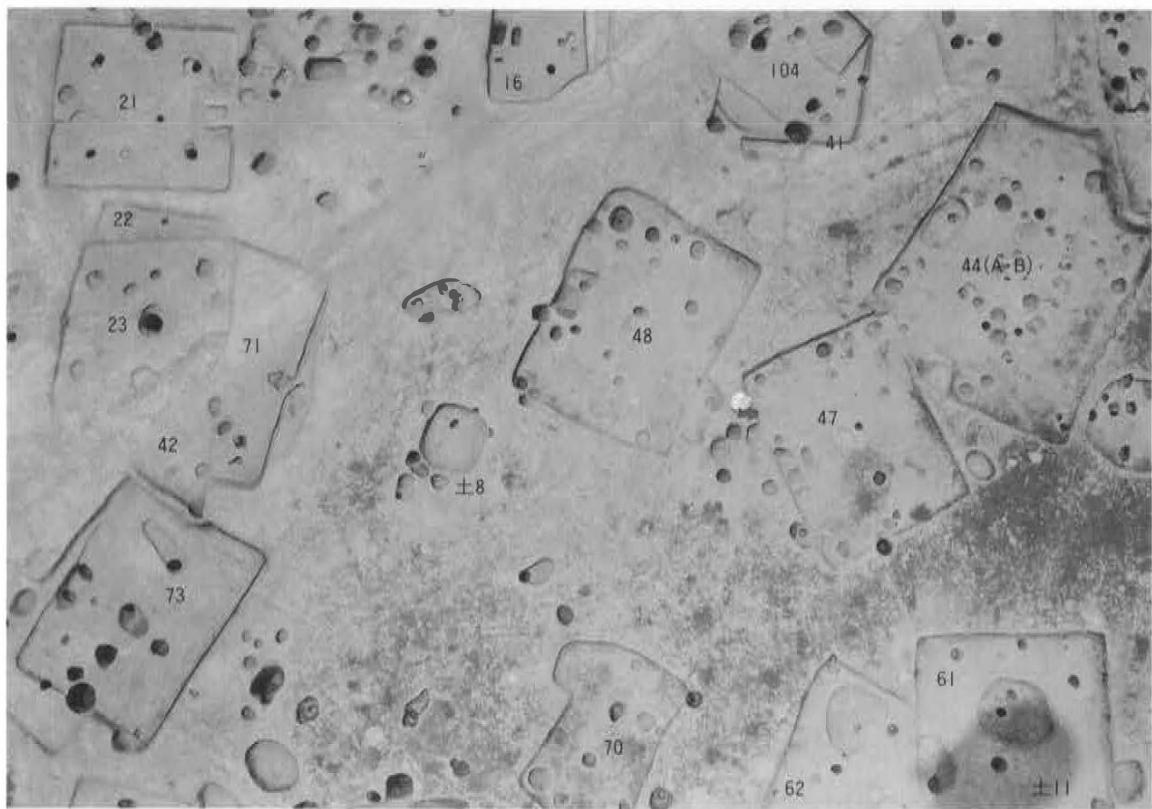
1 12号竪穴住居跡周辺俯瞰



2 16号・21号竪穴住居跡周辺俯瞰



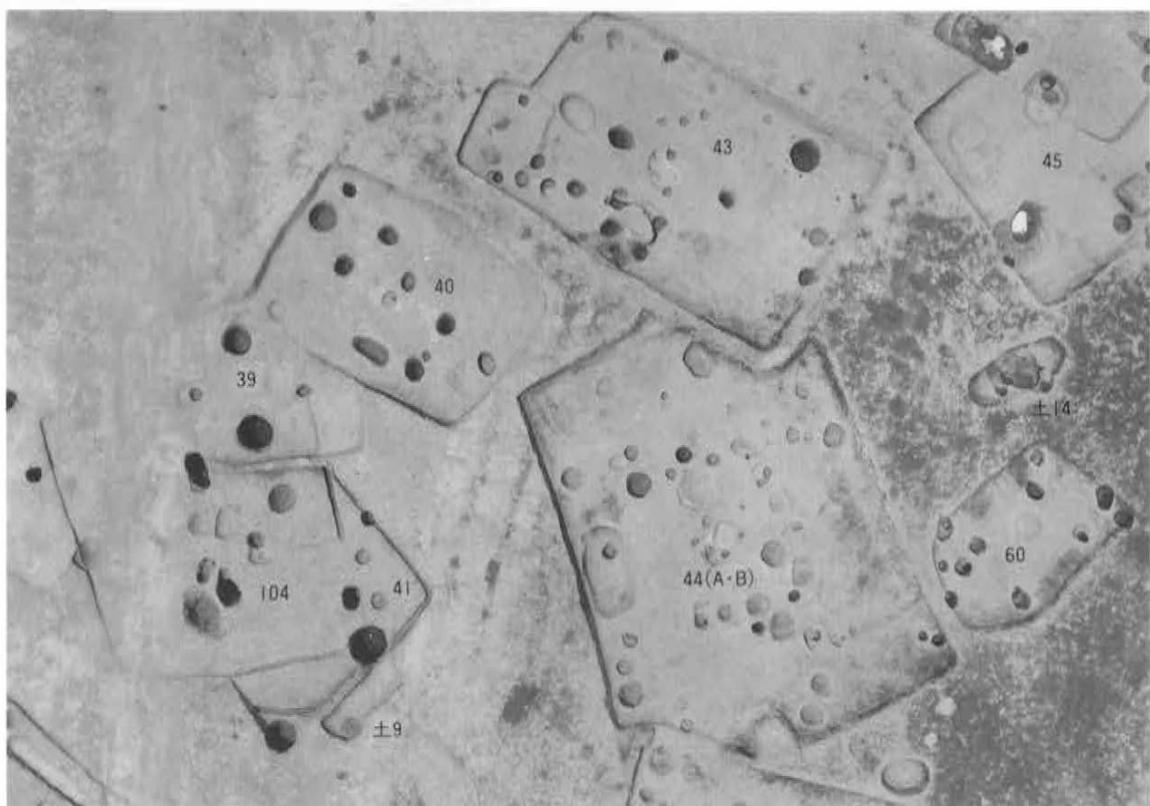
1 19号竪穴住跡周辺俯瞰



2 23号・48号竪穴住跡周辺俯瞰



1 34号～38号竪穴住居跡周辺俯瞰



2 43号竪穴住居跡周辺俯瞰



1 43号竪穴住居跡周辺俯瞰



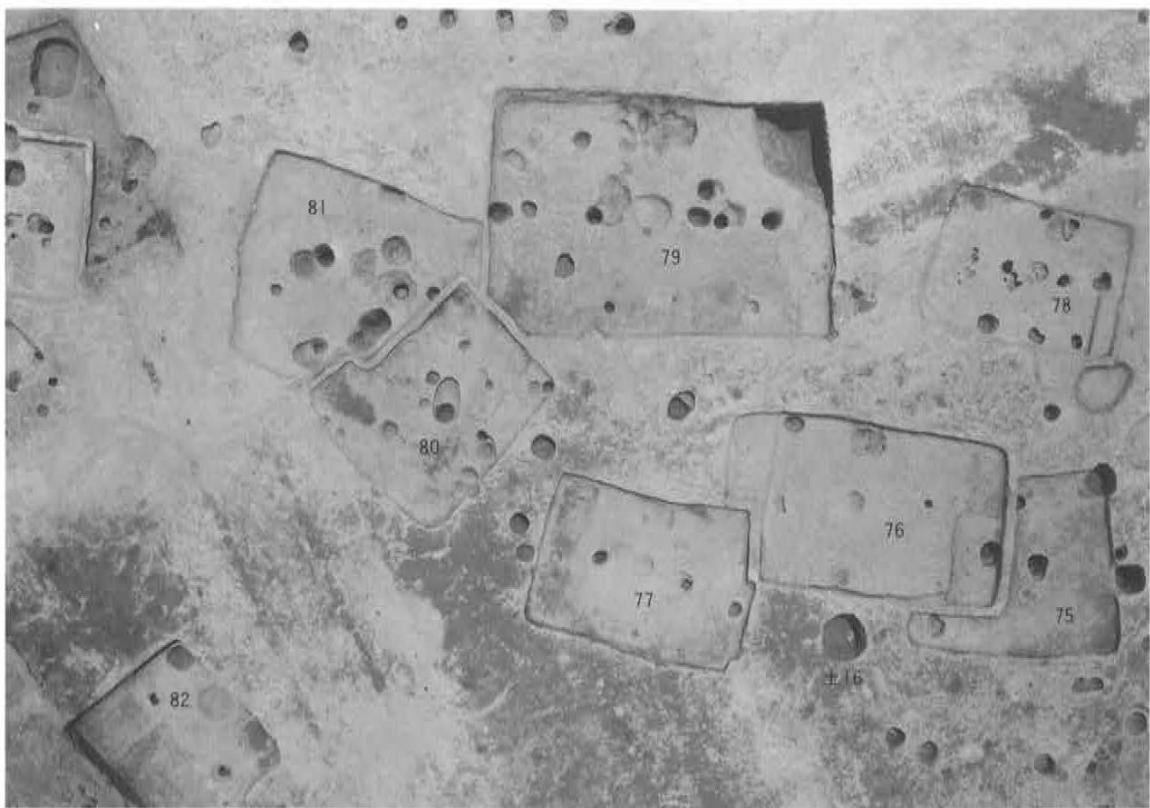
2 58号竪穴住居跡周辺俯瞰



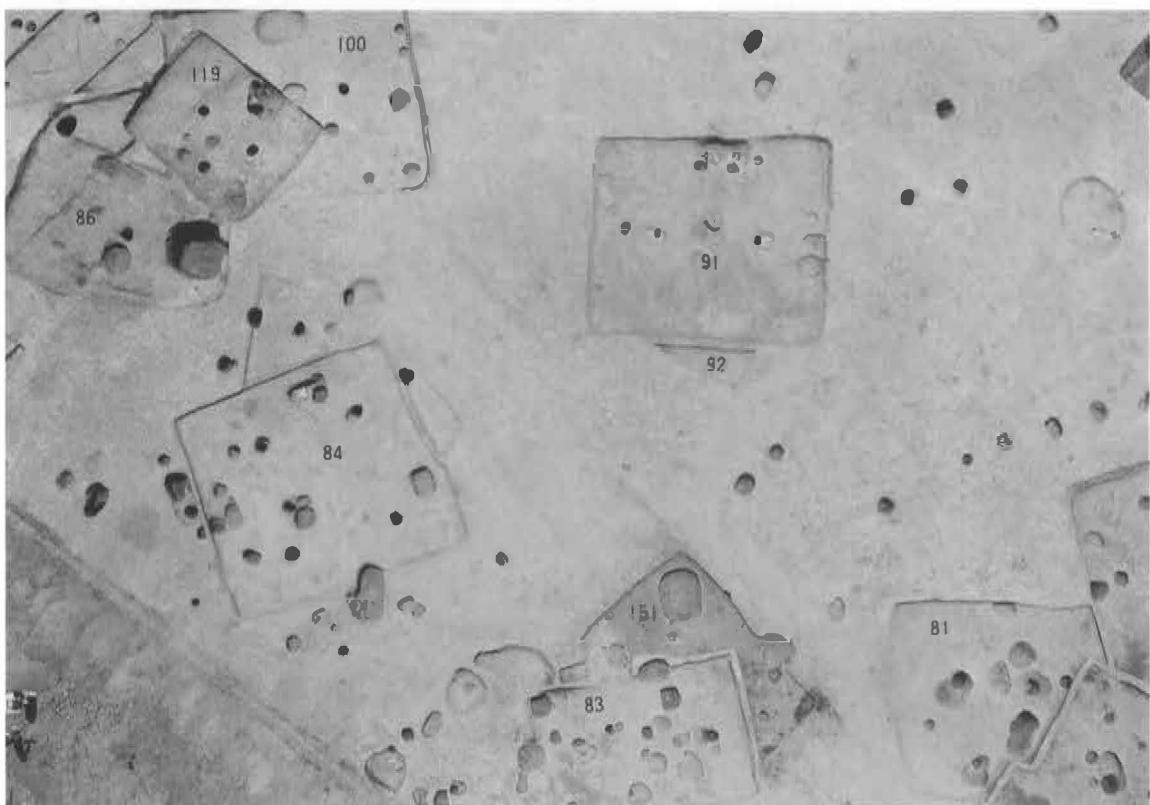
1 59号竪穴住居跡周辺俯瞰



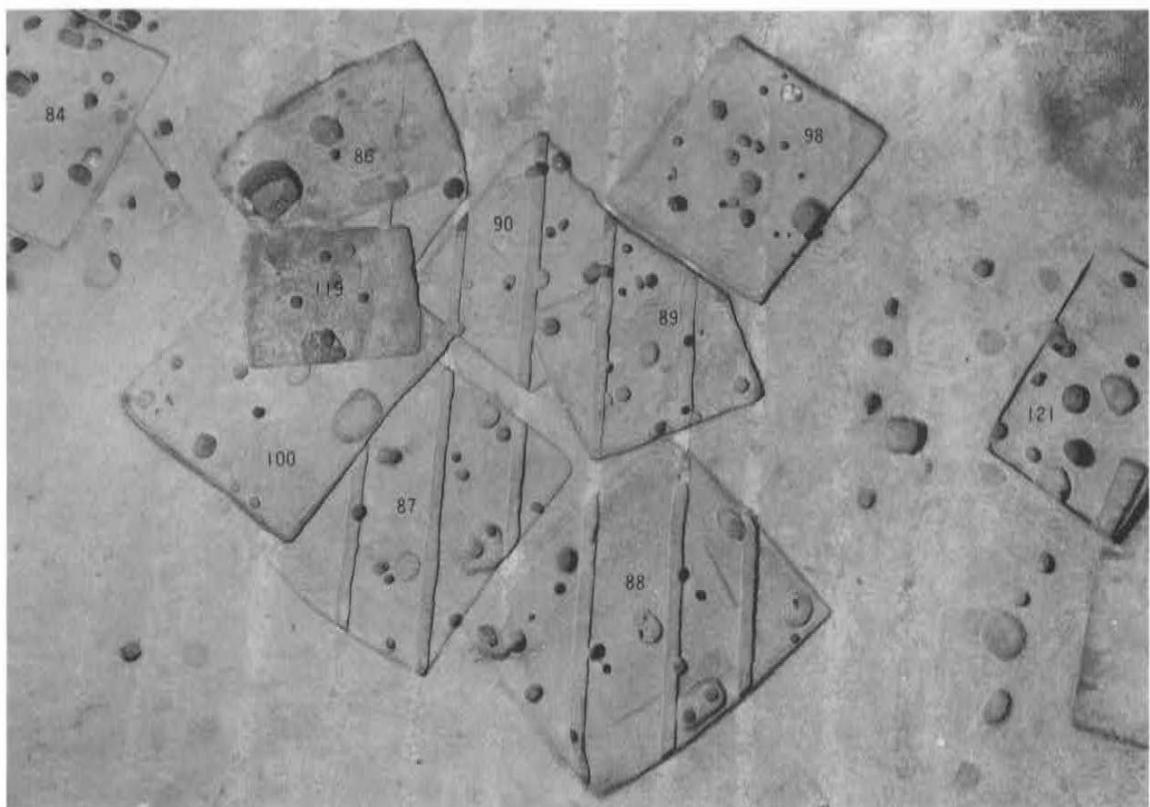
2 66号竪穴住居跡周辺俯瞰



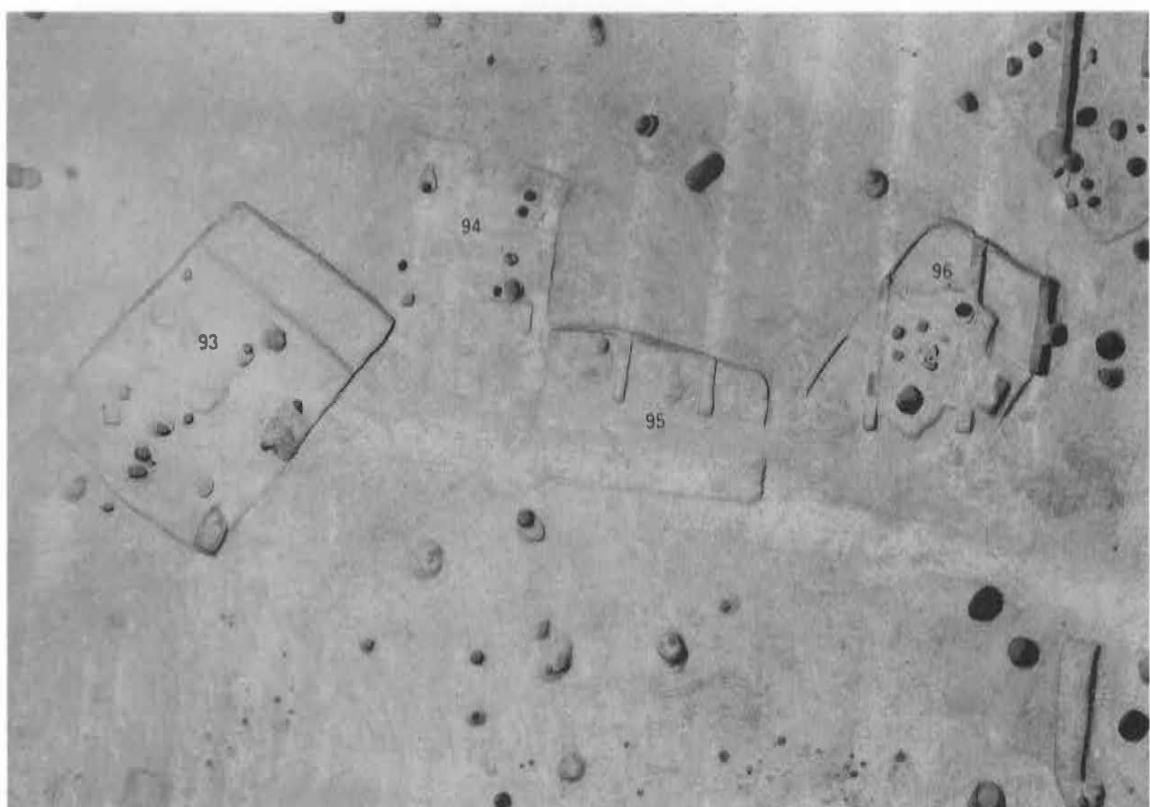
1 79号竪穴住居跡周辺俯瞰



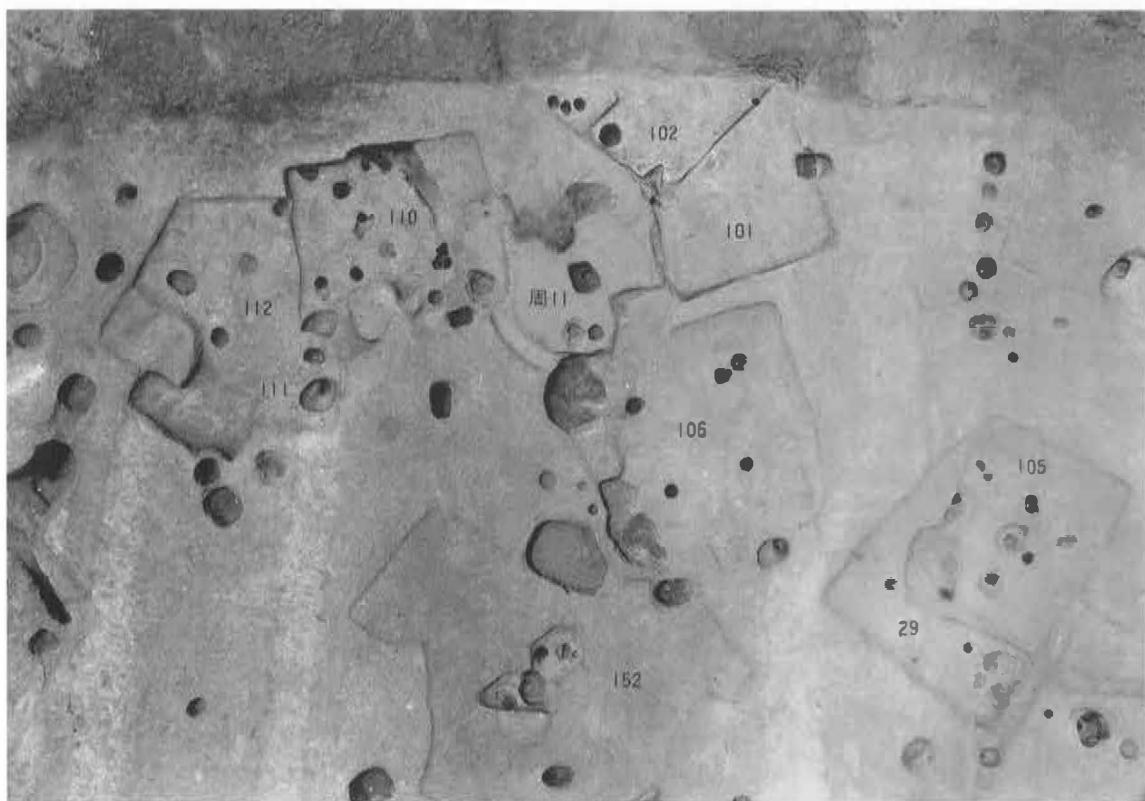
2 91号竪穴住居跡周辺俯瞰



1 100号竪穴住居跡周辺俯瞰



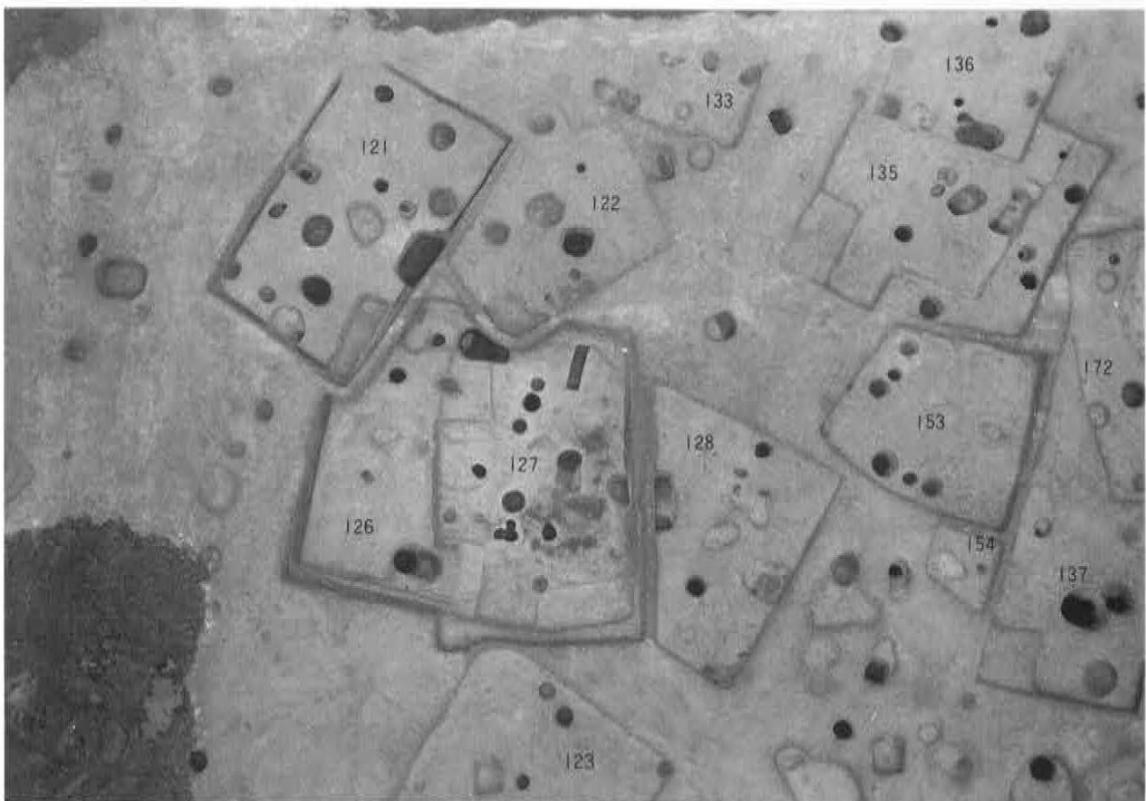
2 93号～96号竪穴住居跡俯瞰



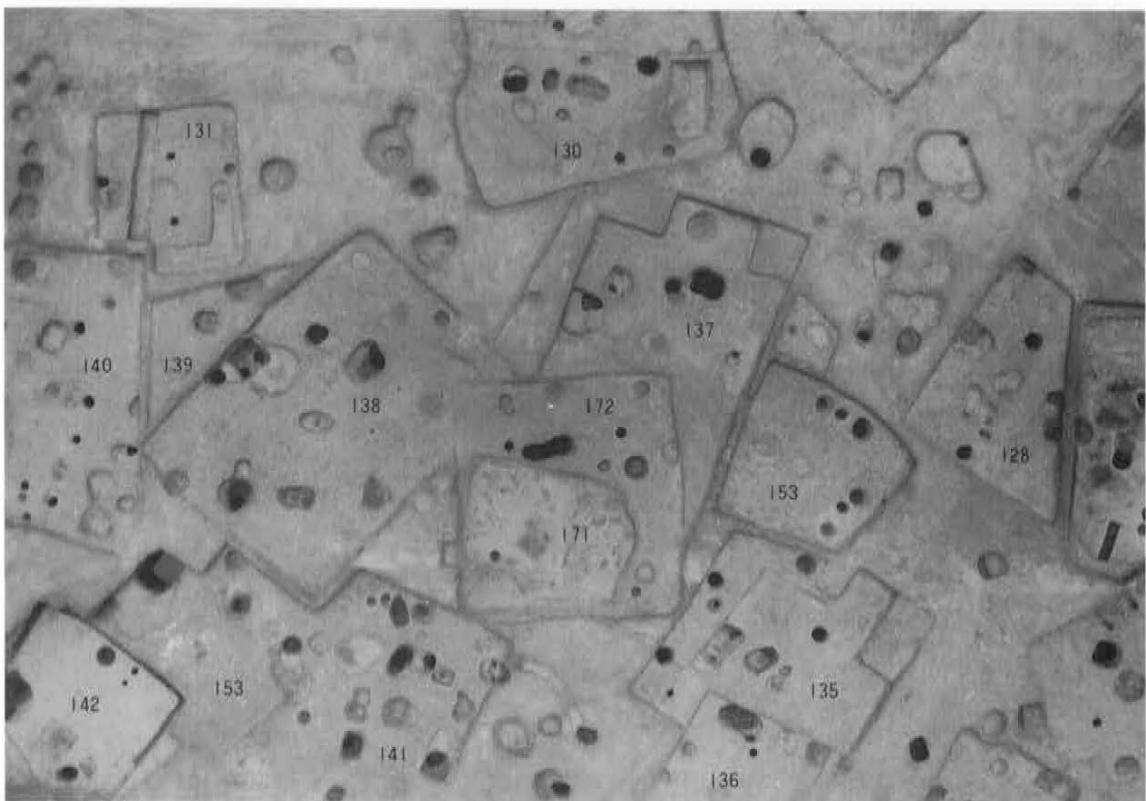
1 106号竪穴住居跡周辺俯瞰



2 116号・117号・124号竪穴住居跡俯瞰



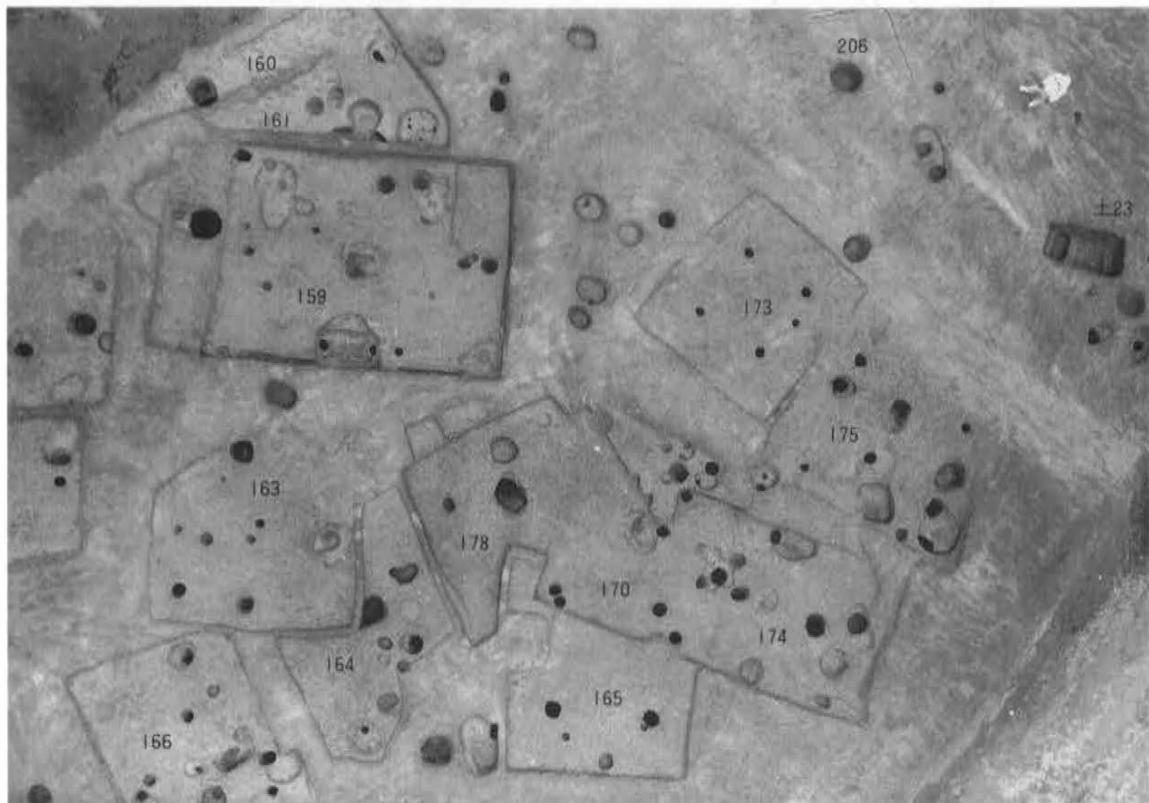
1 127号竪穴住居跡周辺俯瞰



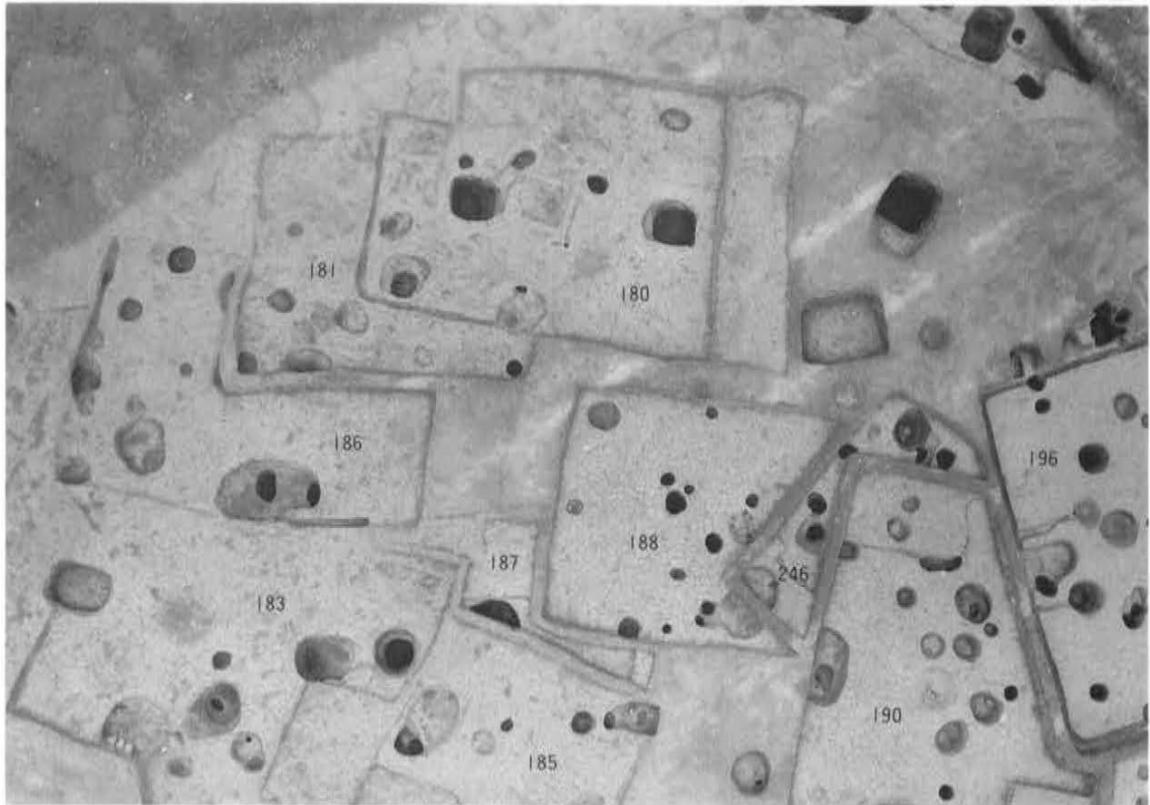
2 137号竪穴住居跡周辺俯瞰



1 140号竪穴住居跡周辺俯瞰



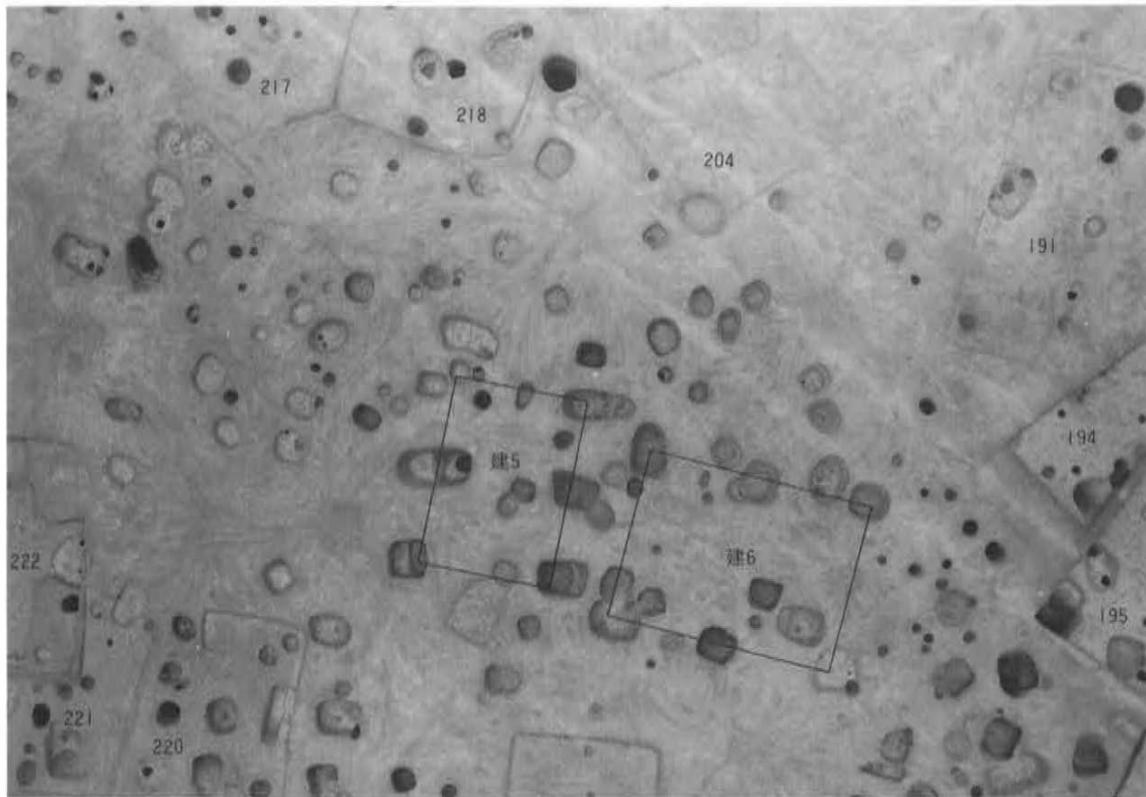
2 159号竪穴住居跡周辺俯瞰



1 180号竪穴住居跡周辺俯瞰



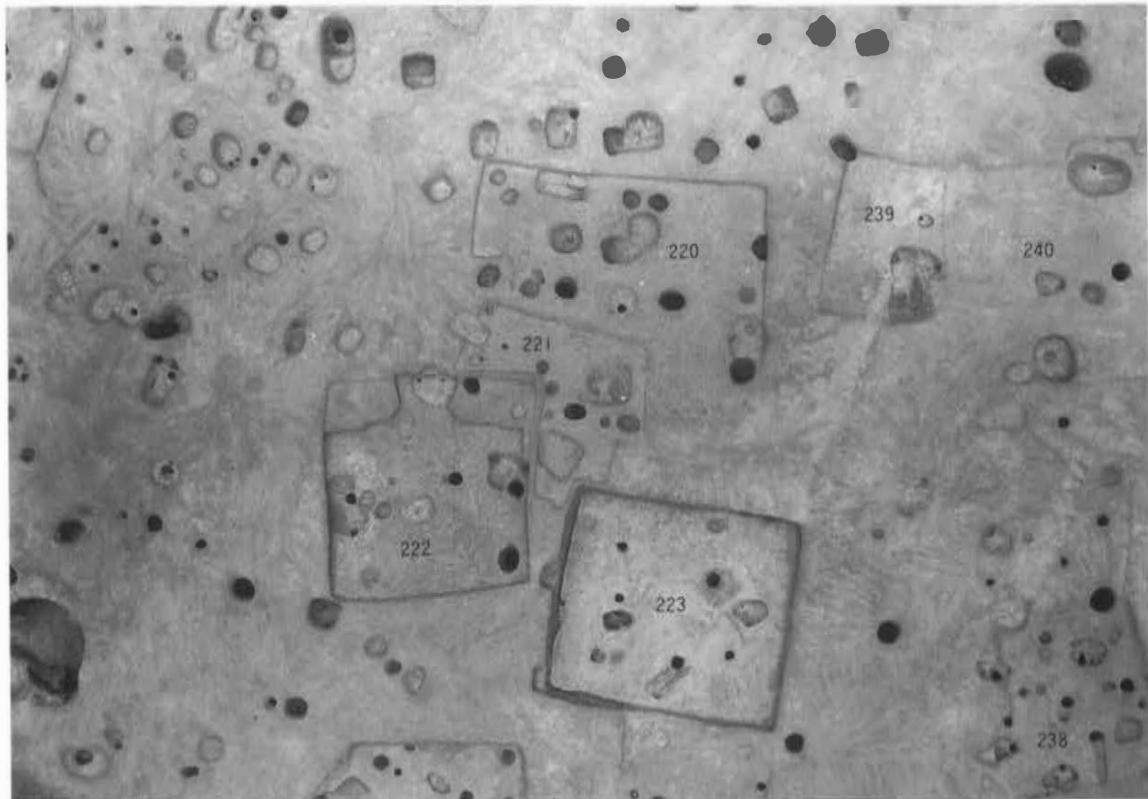
2 199号竪穴住居跡周辺俯瞰



1 204号・218号竪穴住居跡、5号・6号掘立柱建物周辺俯瞰



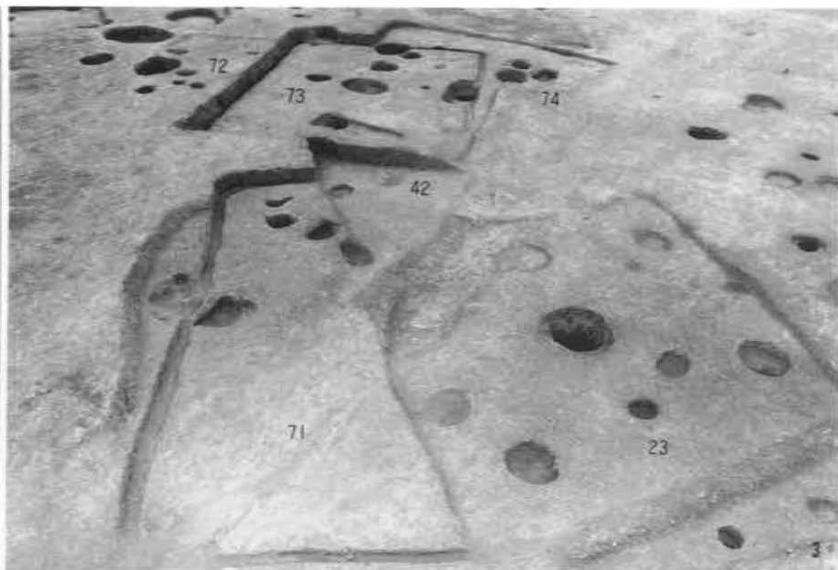
2 208号～212号竪穴住居跡 24号土塁俯瞰



1 220号竪穴住居跡周辺俯瞰



2 1号・2号土壙基、石蓋土壙基俯瞰



1 12号竖穴住居跡、5号・6号周溝状遺構

2 16号竖穴住居跡

3 23号・42号・71号～74号竖穴住居跡

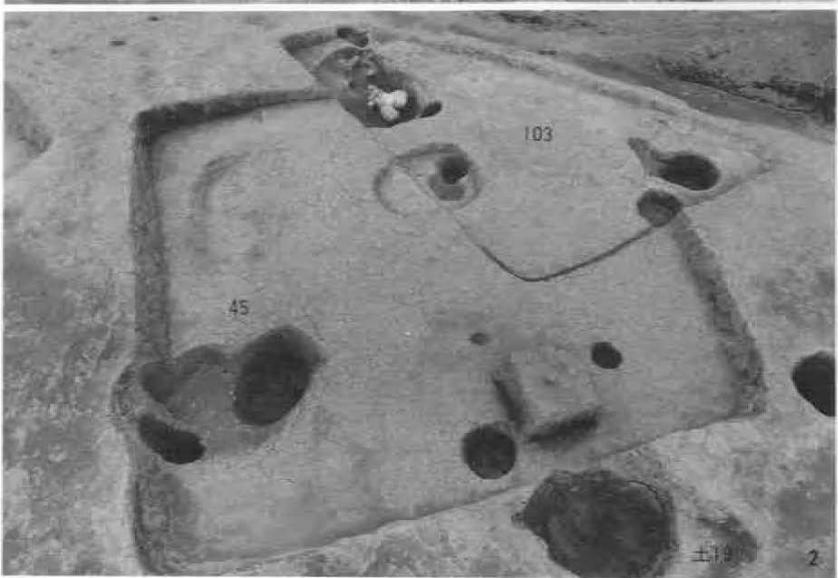
4 19号竖穴住居跡



1 19号竪穴住居跡カマド 2 35号～38号竪穴住居跡



3 34号竪穴住居跡遺物出土状態 4 44号(B)竪穴住居跡遺物出土状態



1 40号・43号竪穴住居跡

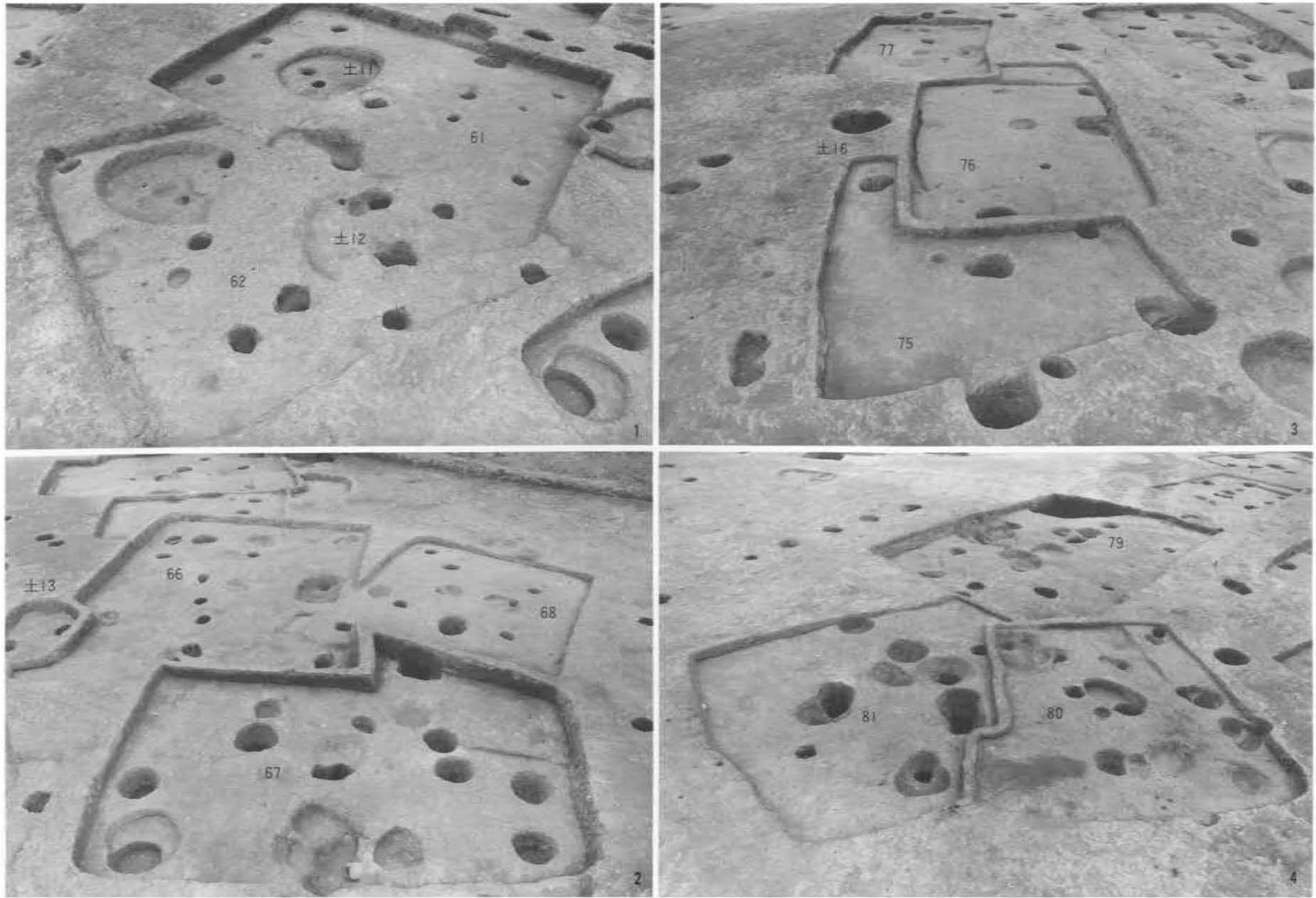
2 45号・103号竪穴住居跡

3 103号竪穴住居跡屋内土塙

4 53号・54号竪穴住居跡



1 59号竪穴住居跡 2 7号竪穴住居跡、1号落し穴
3 64号竪穴住居跡遺物出土状態 4 63号・64号・65号竪穴住居跡



1 61号・62号竪穴住居跡、11号・12号土壙

2 66号～68号竪穴住居跡、13号土壙

3 75号～77号竪穴住居跡

4 79号～81号竪穴住居跡



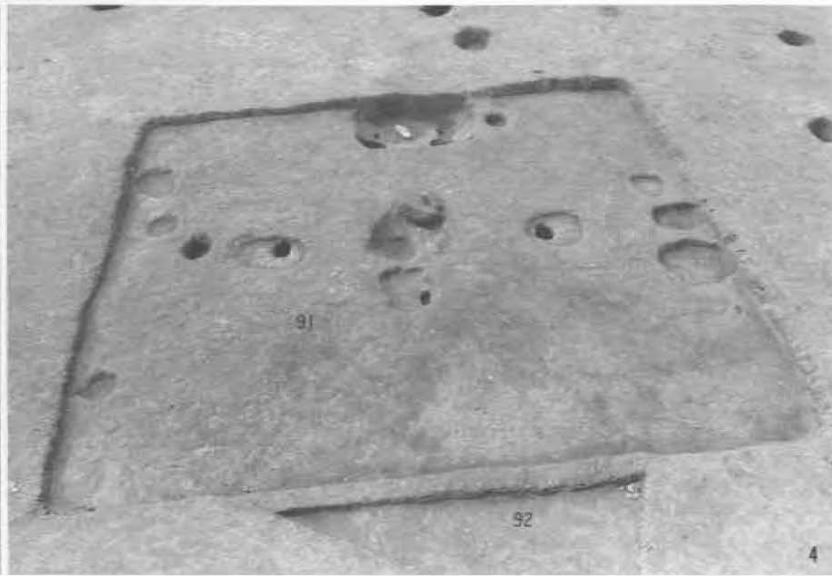
1



2



3



4

1 82号竪穴住居跡 2 83号竪穴住居跡、10号周溝状遺構

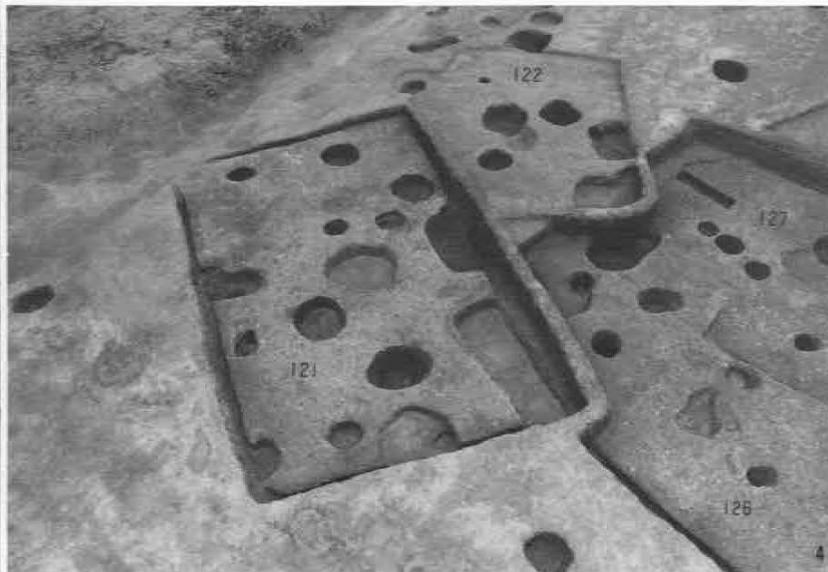
3 84号竪穴住居跡、20号土壙 4 91号・92号竪穴住居跡



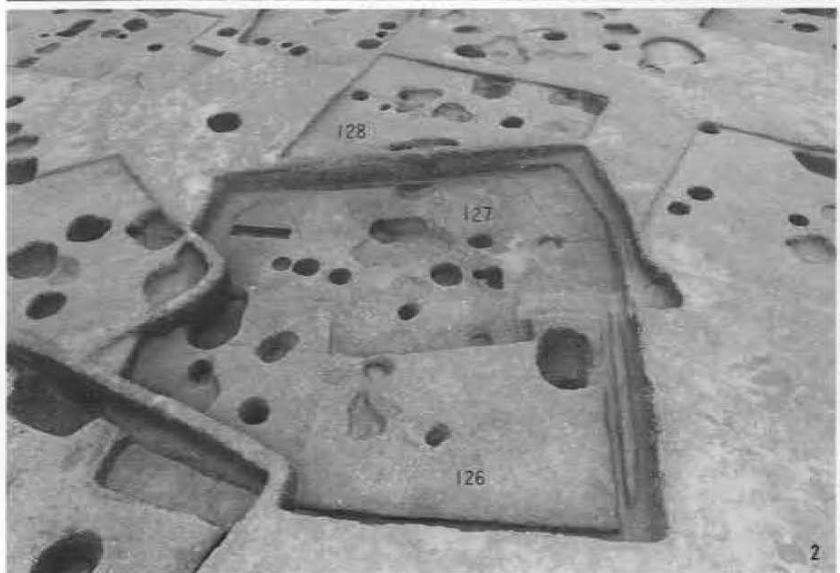
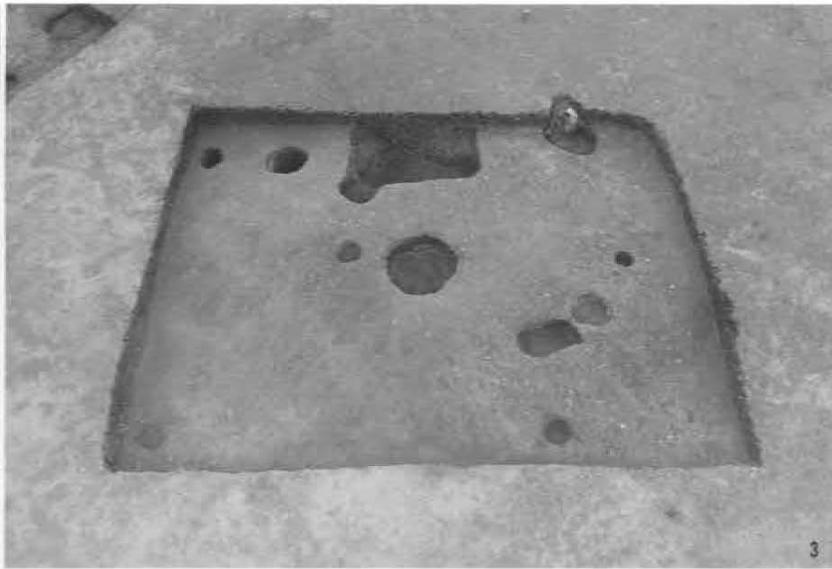
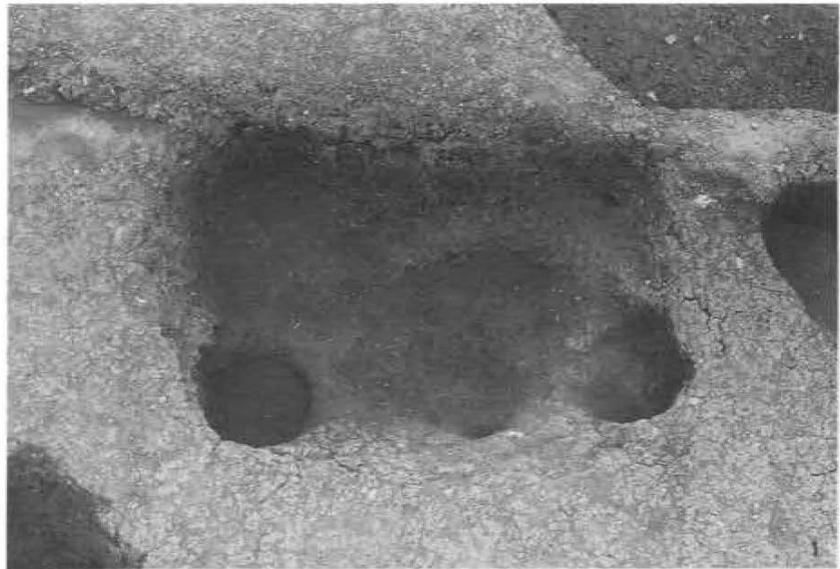
1 93号竪穴住居跡



3 101号・102号竪穴住居跡遺物出土状態



4 121号・122号竪穴住居跡



1 122号竪穴住居跡屋内土壤

2 126号～128号竪穴住居跡

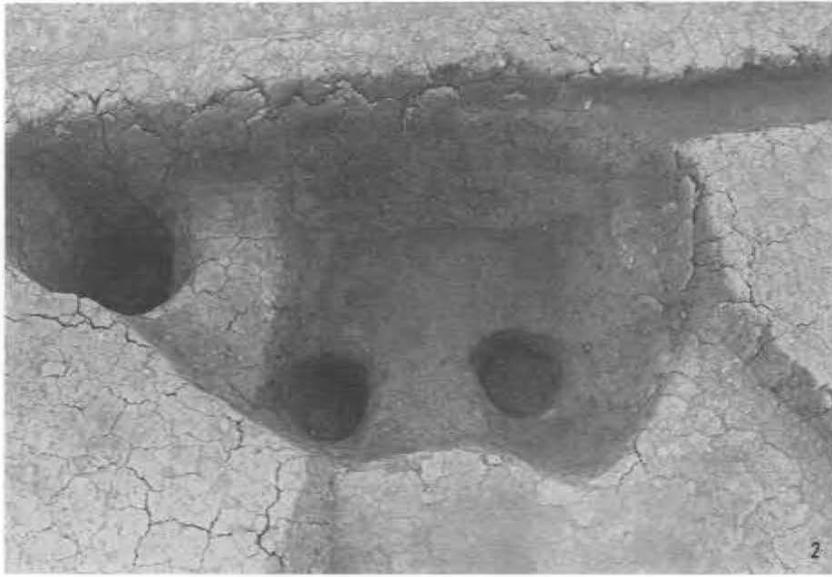
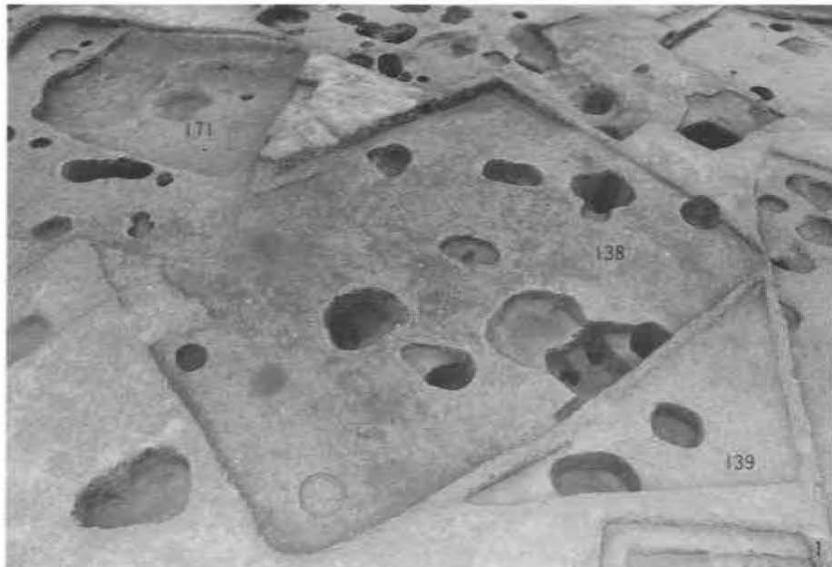
3 129号竪穴住居跡

4 130号竪穴住居跡



1 132号竪穴住居跡 2 135号・136号竪穴住居跡

3 136号竪穴住居跡遺物出土状態 4 137号・153号・154号・171号・172号竪穴住居跡

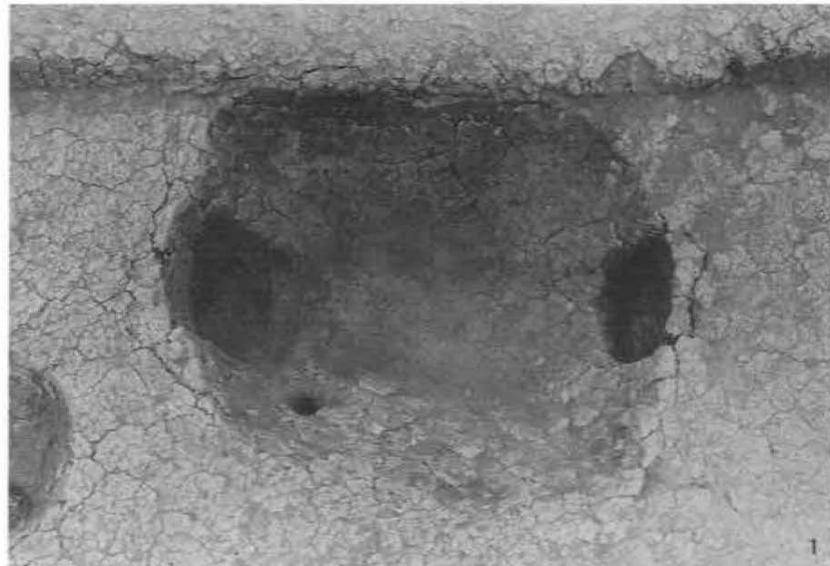


1 138号・139号・171号竪穴住居跡

2 138号竪穴住居跡屋内土壤

3 140号・147号・148号竪穴住居跡

4 143号～145号竪穴住居跡



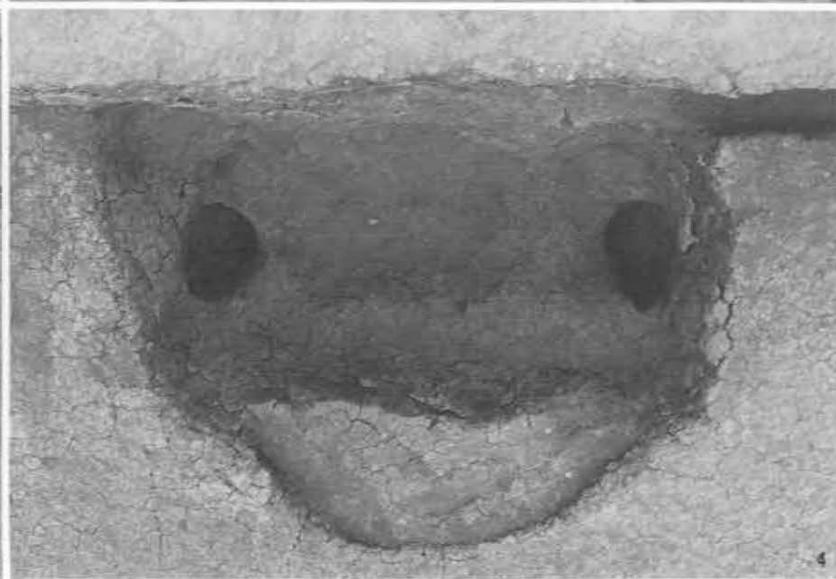
1



2



3



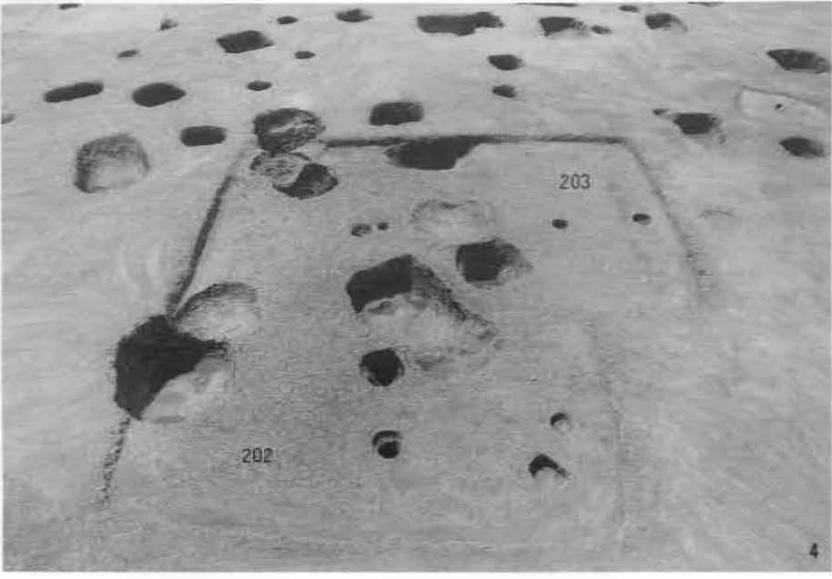
4

1 147号竪穴住居跡屋内土壤

2 150号・167号竪穴住居跡

3 159号～161号竪穴住居跡

4 159号竪穴住居跡屋内土壤

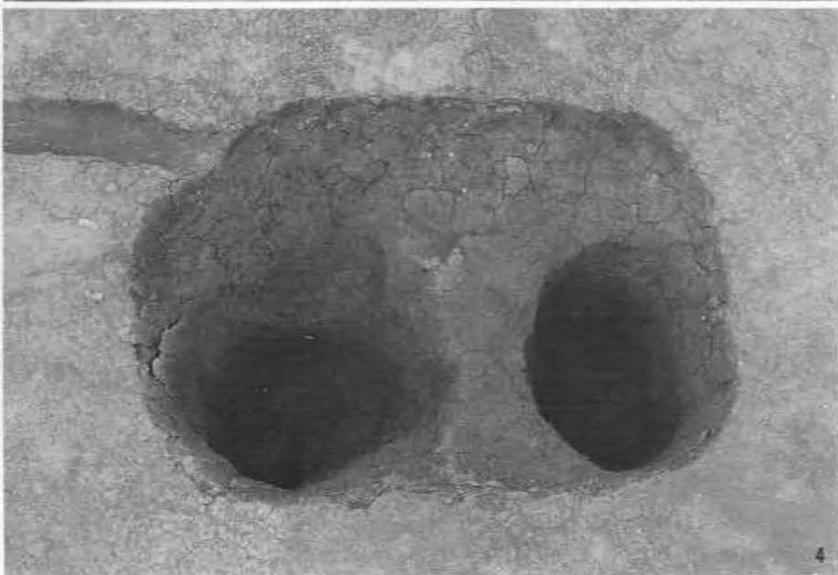


1 142号・176号・177号竪穴住居跡

2 180号～183号、185号・187号・188号・190号・192号・196号竪穴住居跡

3 200号・201号竪穴住居跡

4 202号・203号竪穴住居跡



1 208号～212号竪穴住居跡

2 208号竪穴住居跡屋内土壤

3 217号竪穴住居跡屋内土壤

4 218号竪穴住居跡屋内土壤



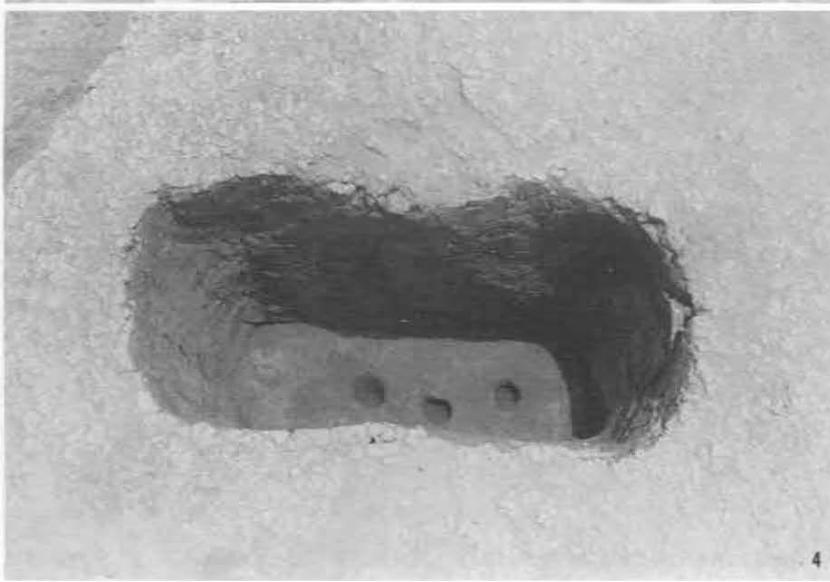
1



3



2



4

1 4号据立柱建物 2 3号周溝状遺構

3 1号落し穴状遺構 4 2号落し穴状遺構



1



2



3



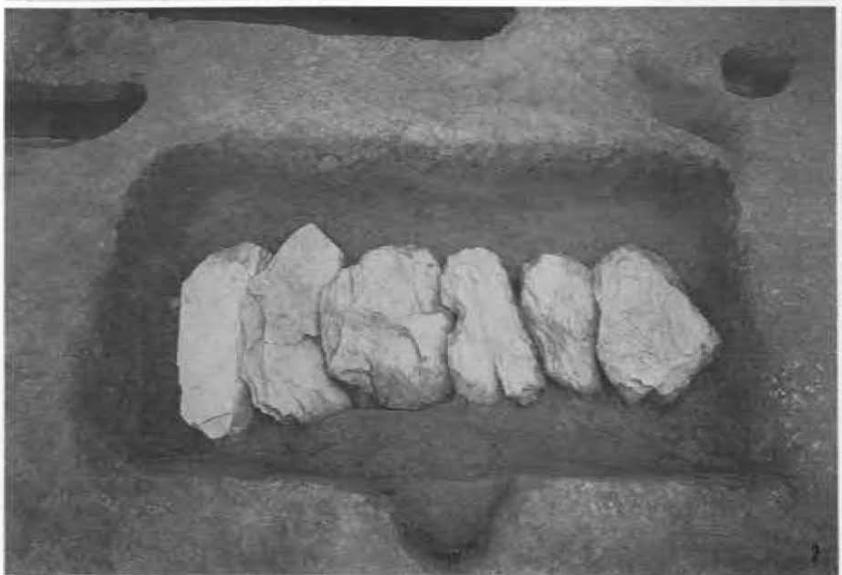
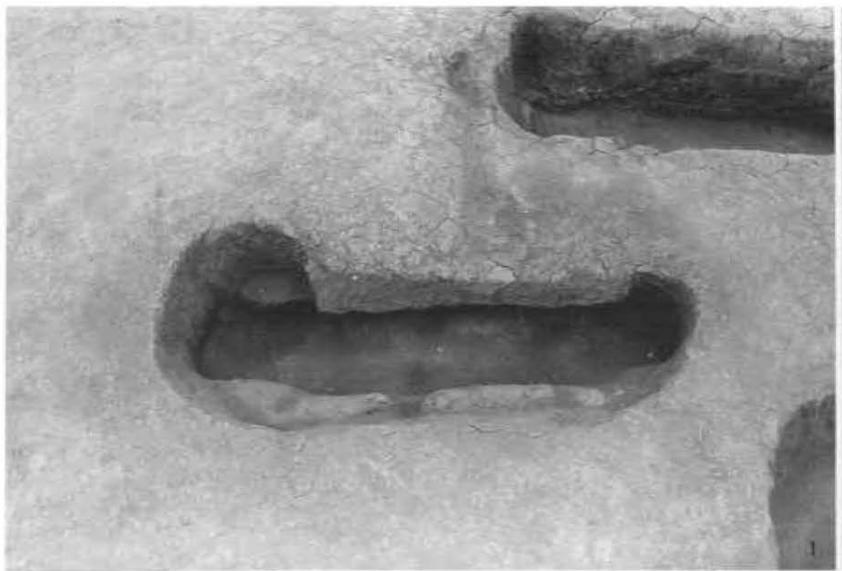
4

1 3号落し穴状遺構

2 3号土壤

3 25号土壤

4 1号土壤基

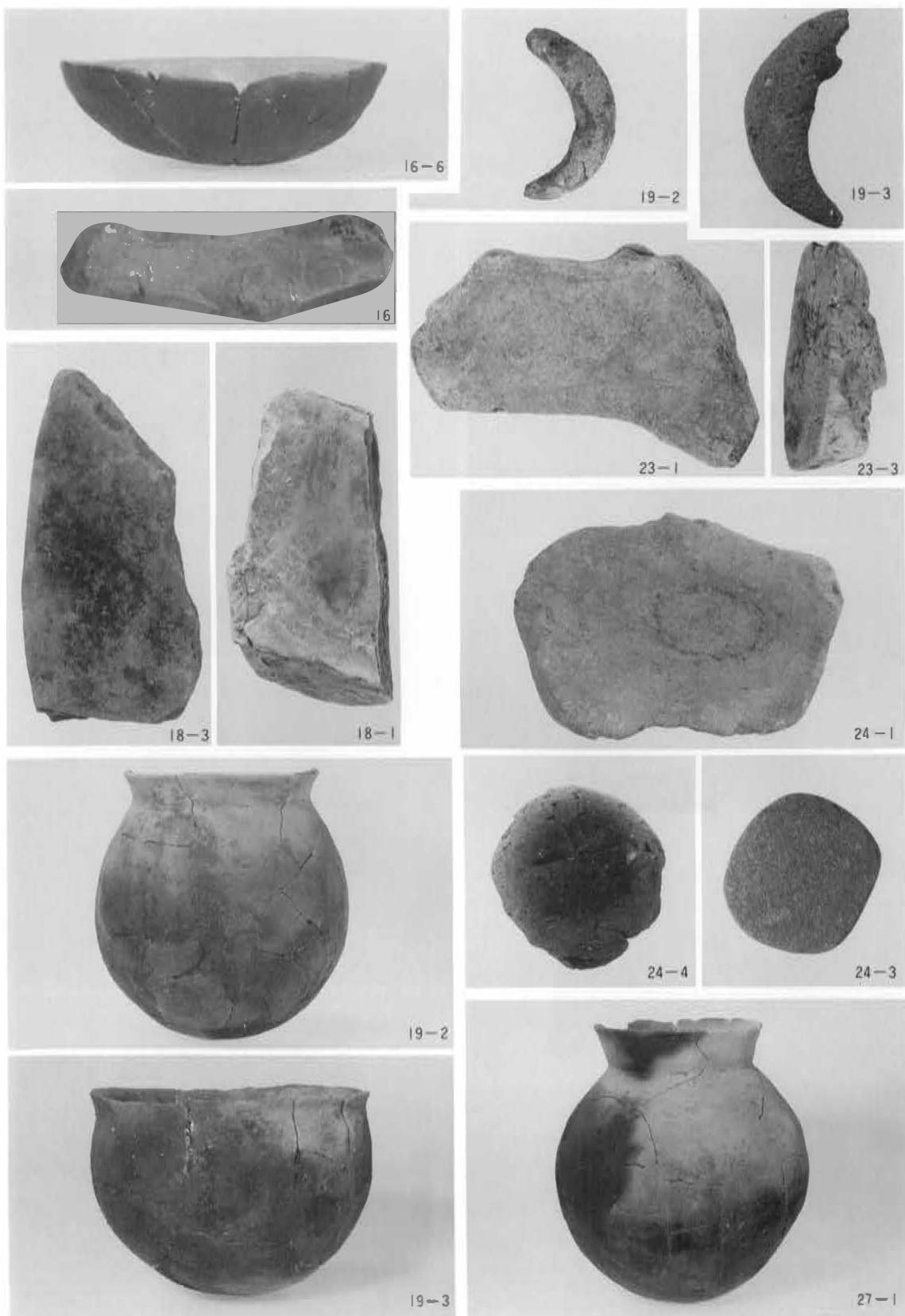


1 2号土壤墓 2 石盖土壤墓

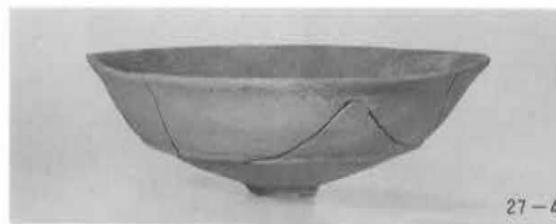
3 石盖土壤墓盖石除却後 4 3号土壤墓



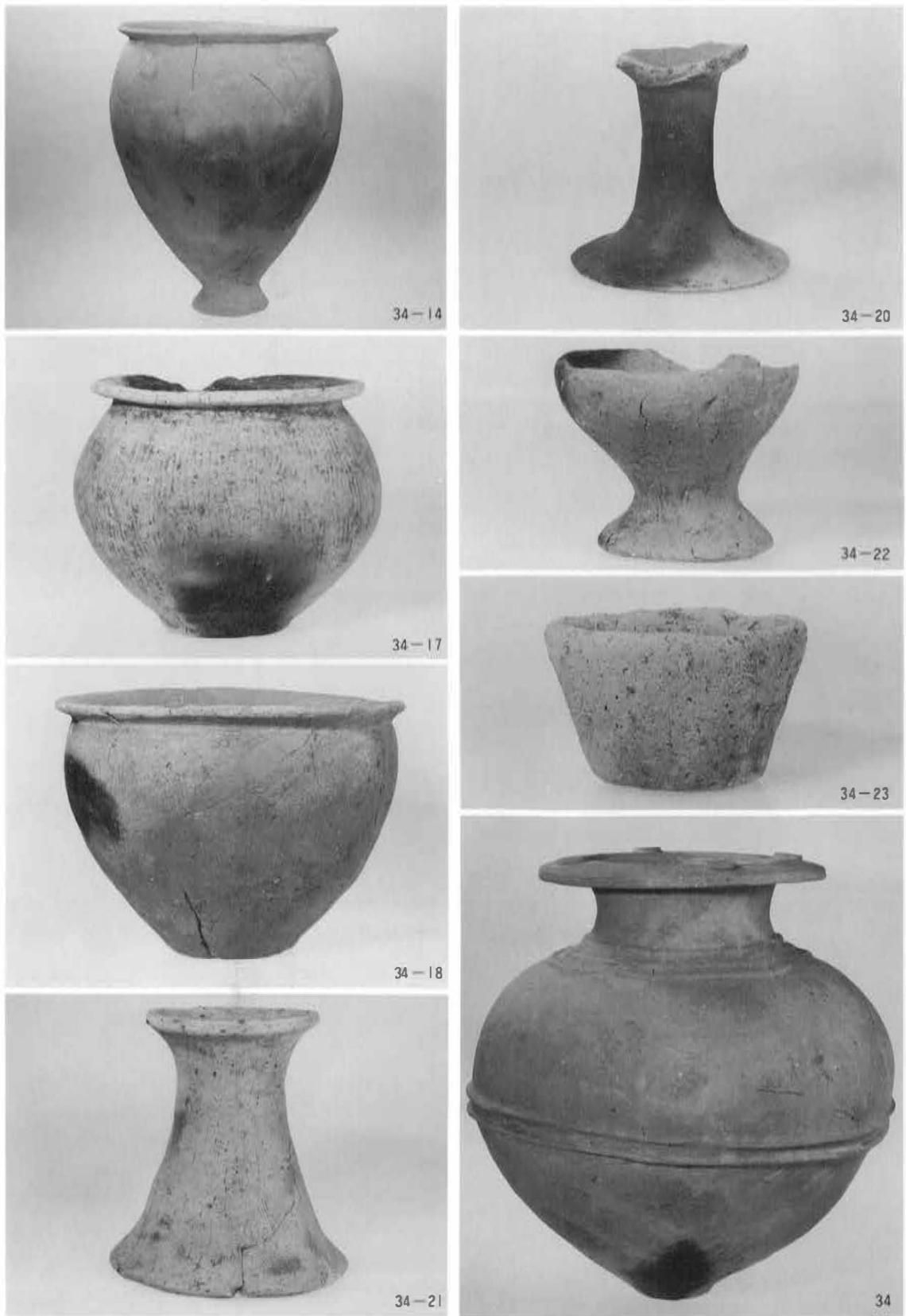
3号・9号・14号・16号竪穴住居跡出土遺物



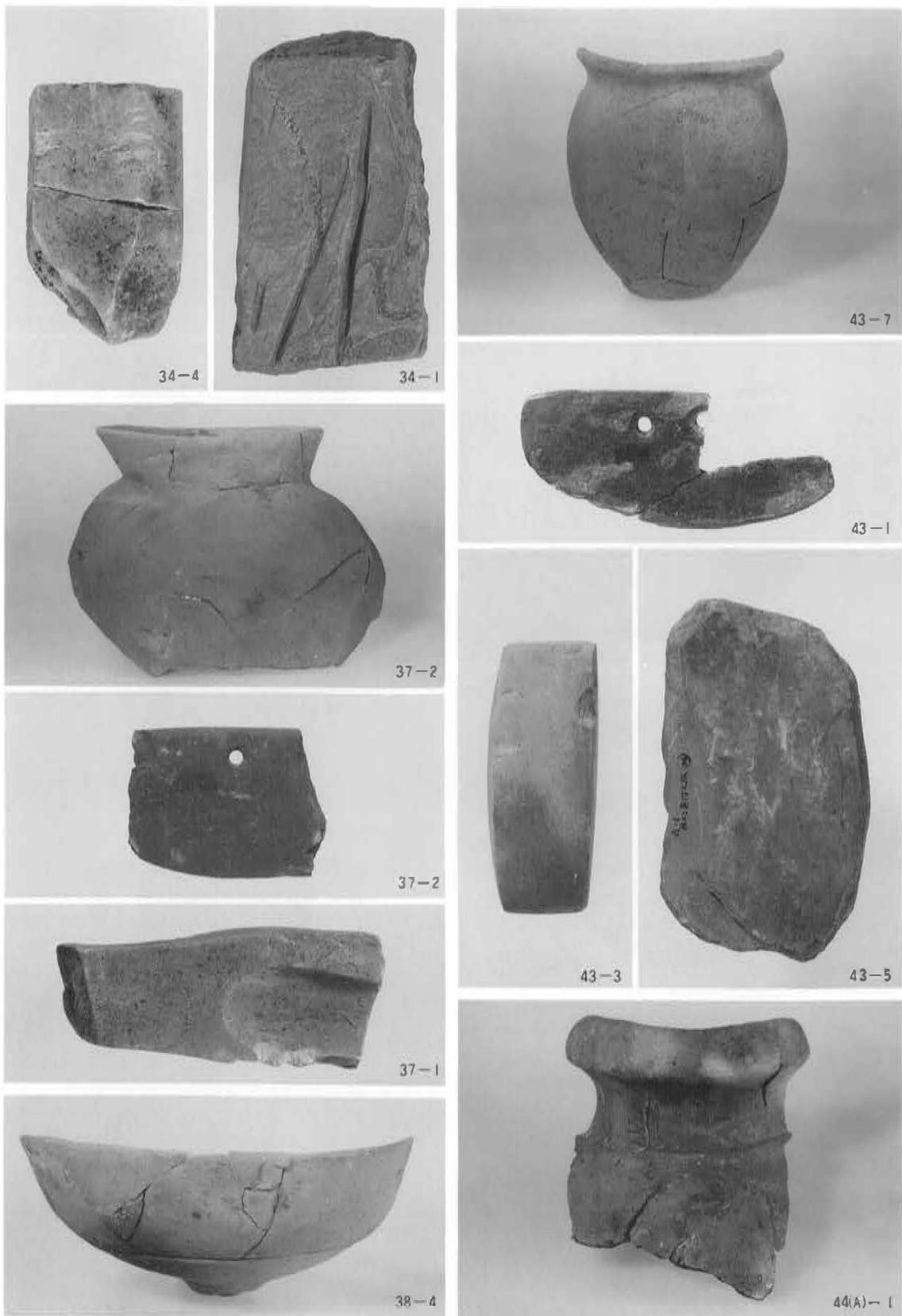
16号・18号・19号・23号・24号・27号竪穴住居跡出土遺物



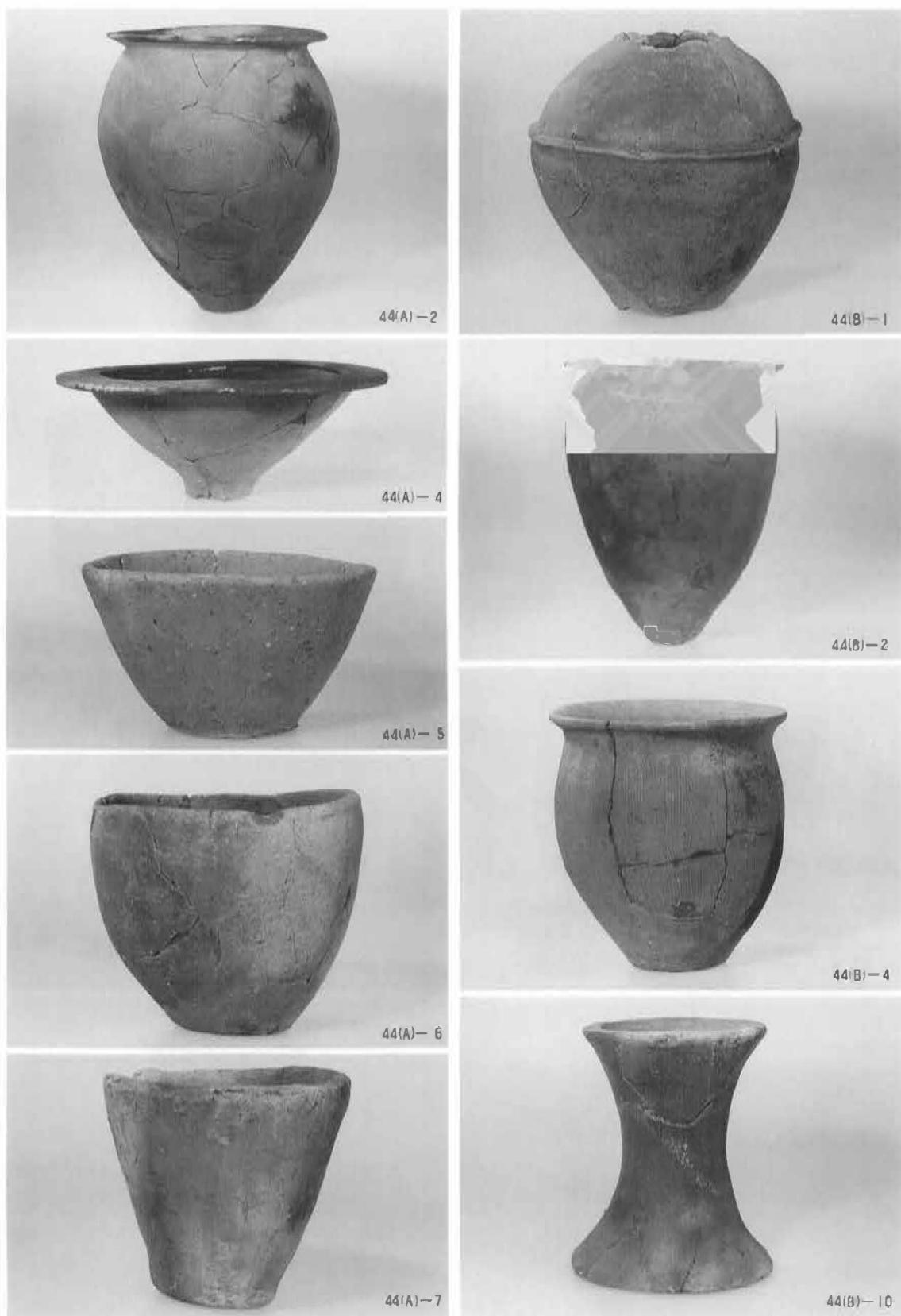
27号・29号・34号竪穴住居跡出土遺物



34号竖穴住居跡出土遺物



34号・37号・38号・43号・44(A)号竪穴住居跡出土遺物



44(A)・(B)号竪穴住居跡出土遺物



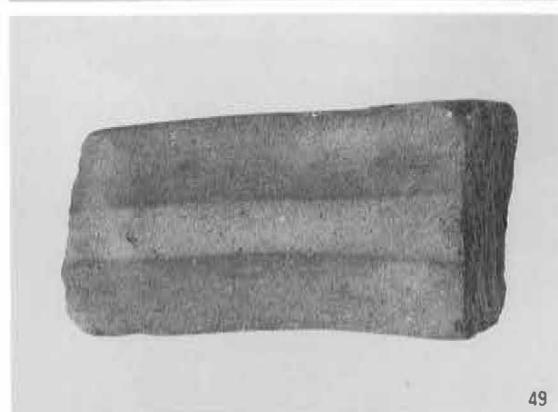
45-6



48-6



45-8



49



47-1



54-4



48-4

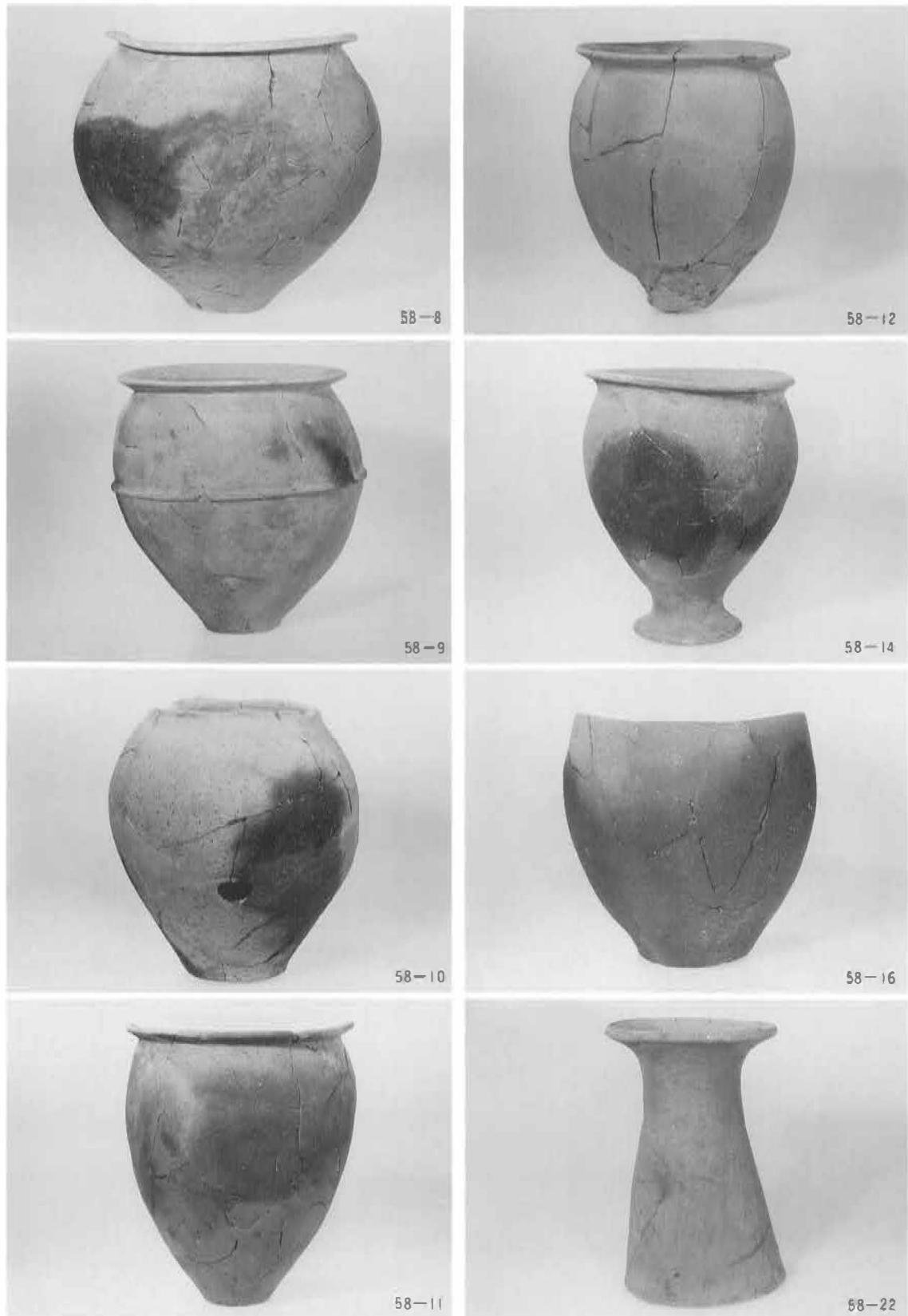


54-5

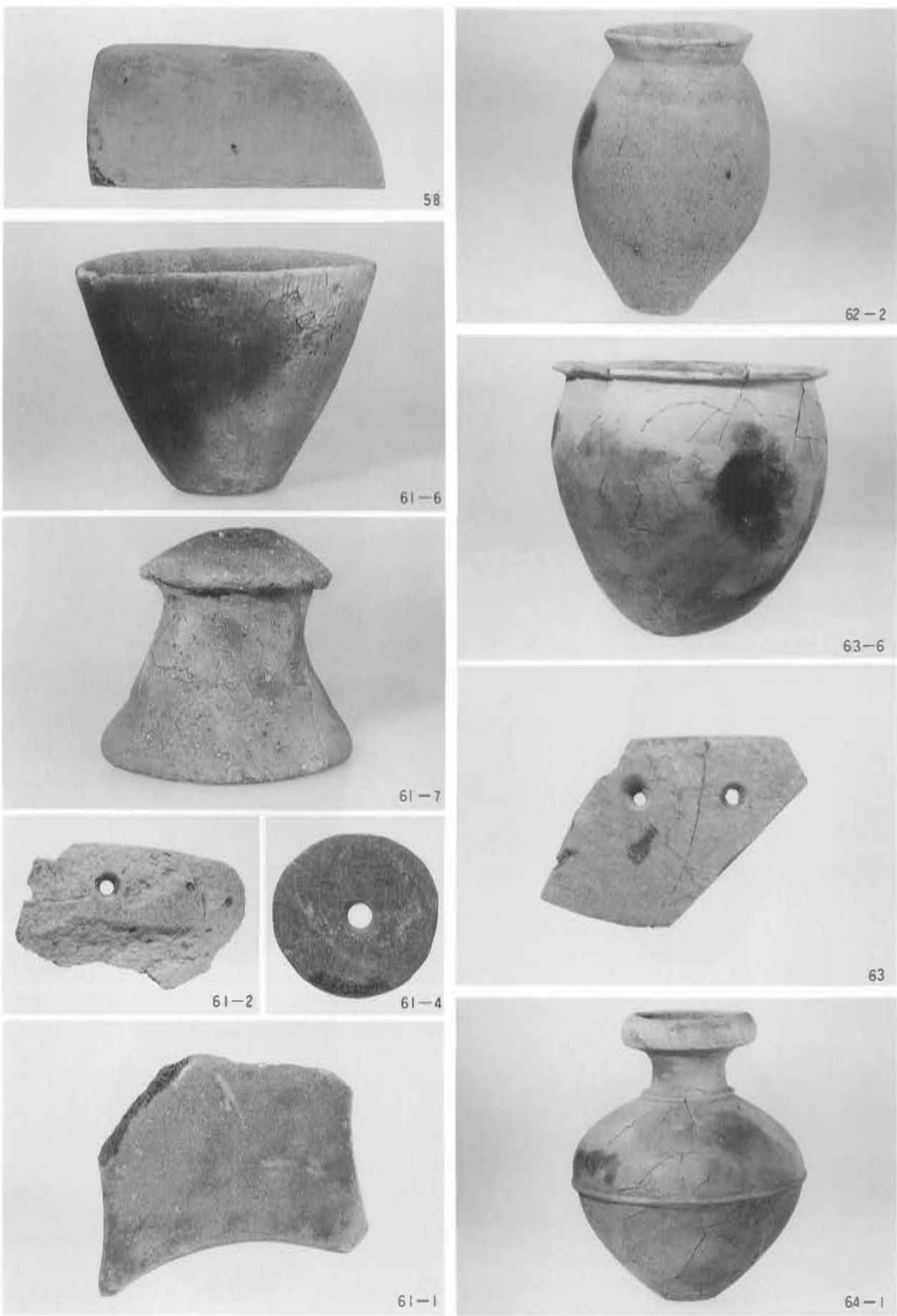
45号・47号・48号・49号・54号竪穴住居跡出土遺物



55号・57号・58号竪穴住居跡出土遺物



58号竪穴住居跡出土遺物



58号・61号・62号・64号竪穴住居跡出土遺物

図版 42



64-2



64-7



64-3



64-8



64-4



64-10

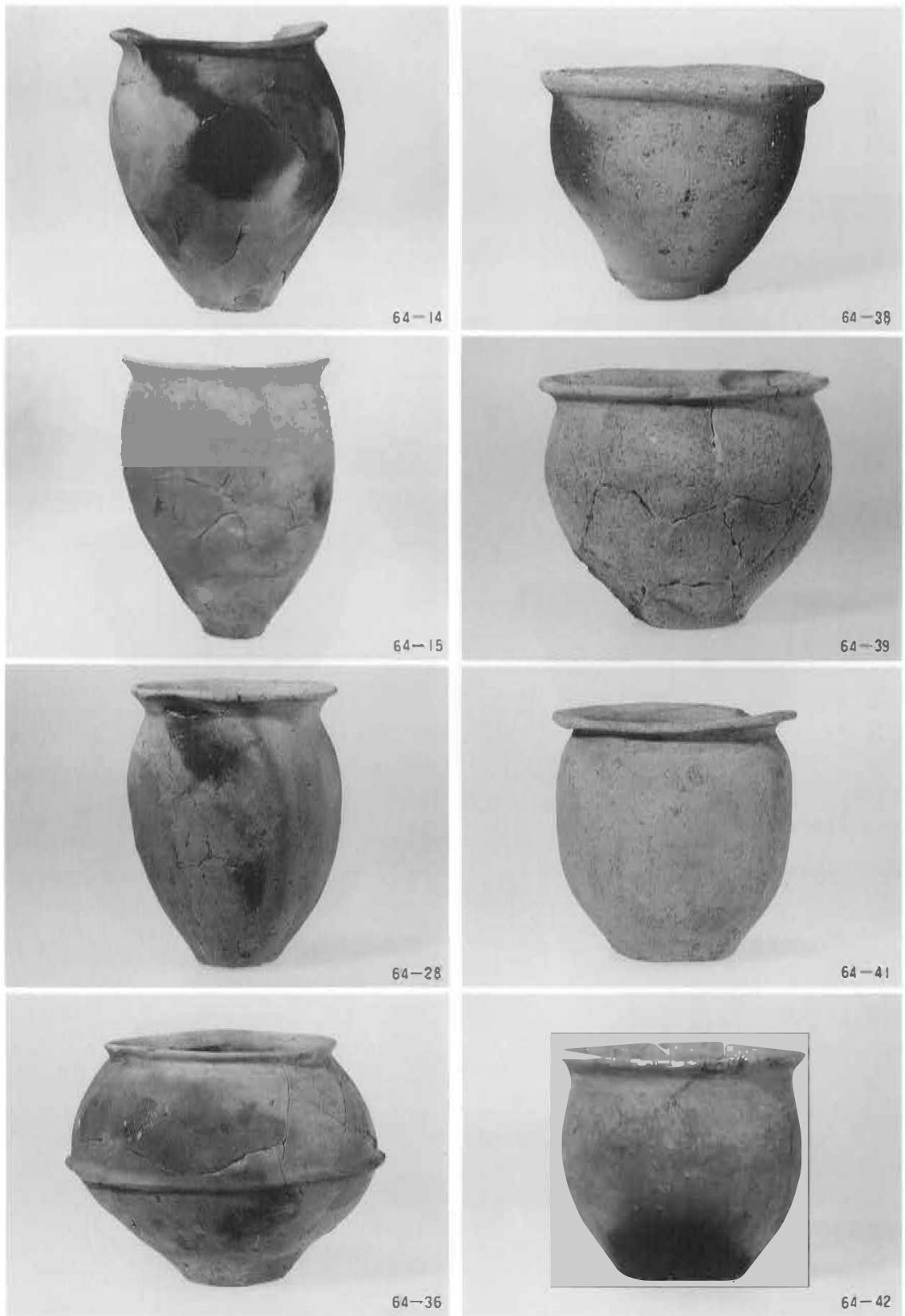


64-6



64-11

64号竪穴住居跡出土遺物



64号竖穴住居跡出土遺物



64-44



64-54



64-45



64-55



64-47



64-56



64-49



64-59



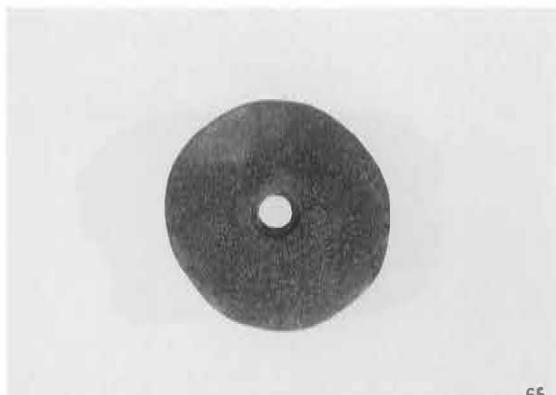
64-52



64-60



64-61



65



64-63



66-2



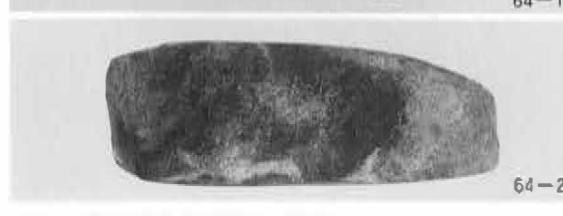
64-65



66-5



64-1



64-2



66-8

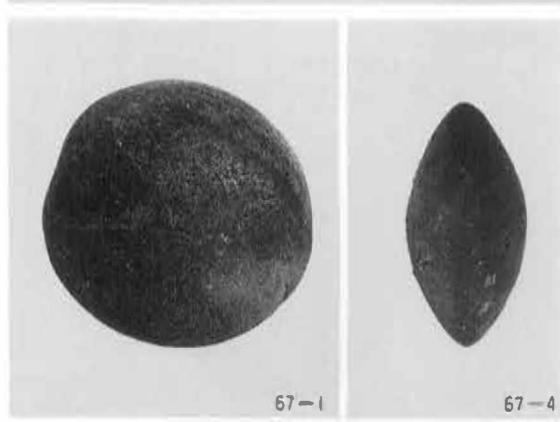
64号～66号竪穴住居跡出土遺物



66



68-6



67-1



67-4



68-7



68-1



68-10

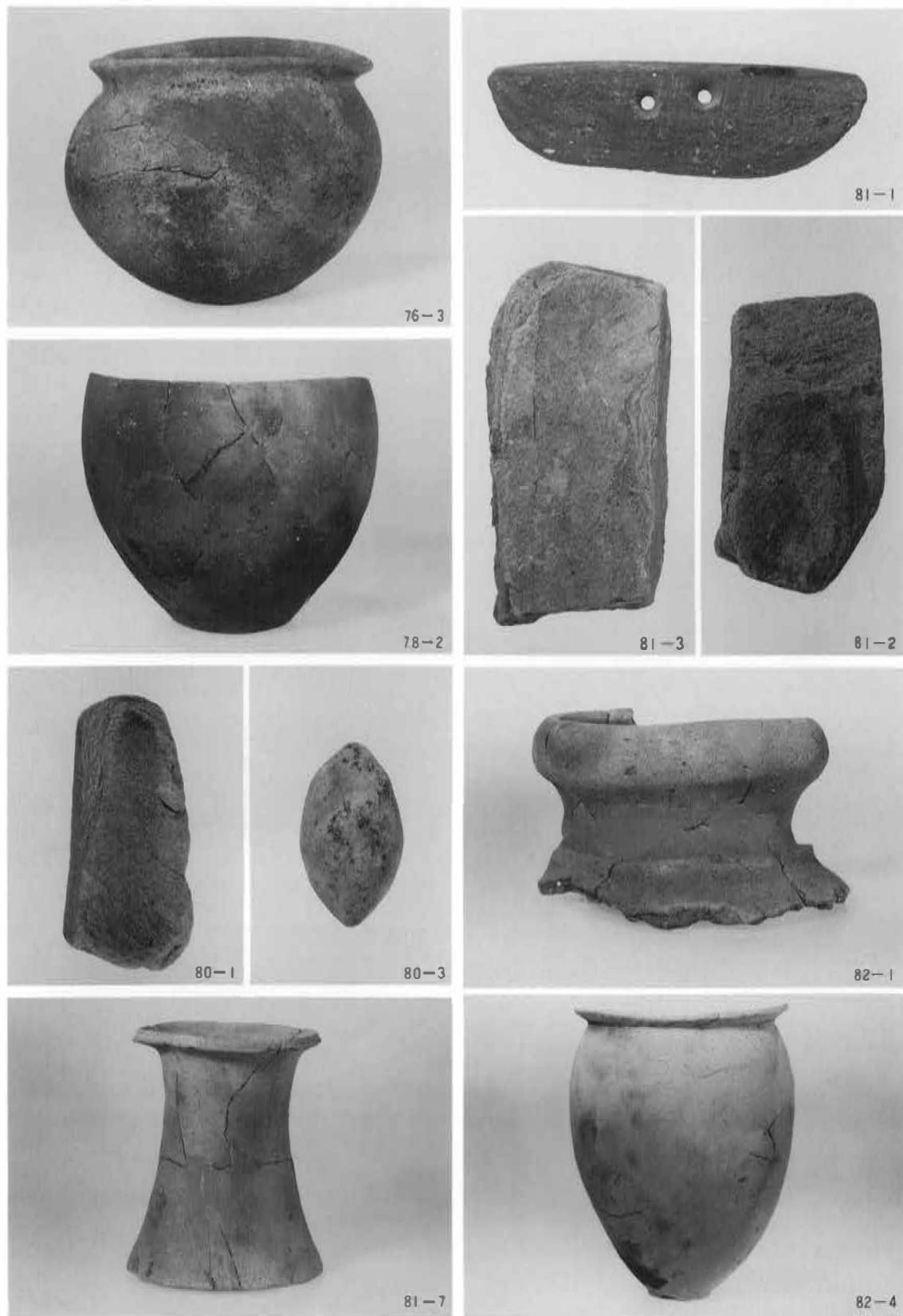


68-5



75-1

66号～68号・75号竪穴住居跡出土遺物



73号・78号・80号・81号・82号竪穴住居跡出土遺物



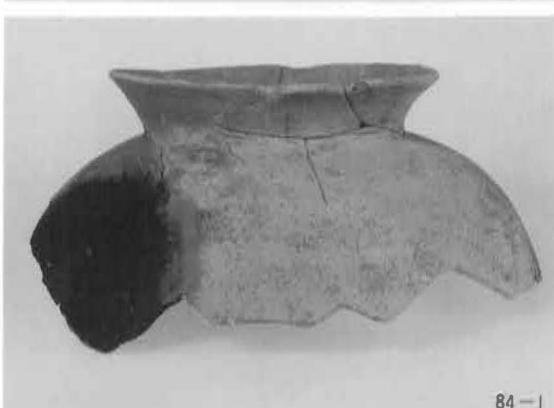
82-9



83-4



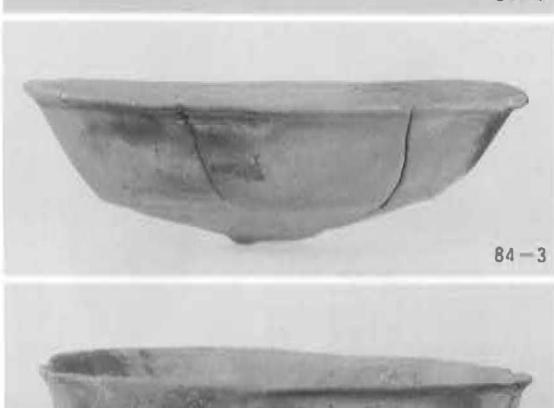
82-10



84-1



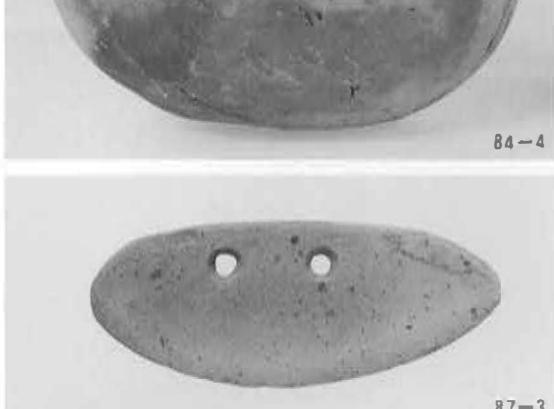
83-2



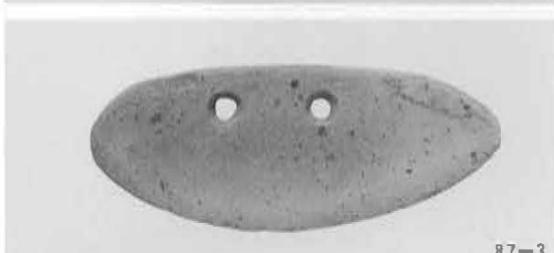
84-3



83-3



84-4



87-3

82号～84号・87号竪穴住居跡出土遺物



87-1



91-1



87-2



91-9



88

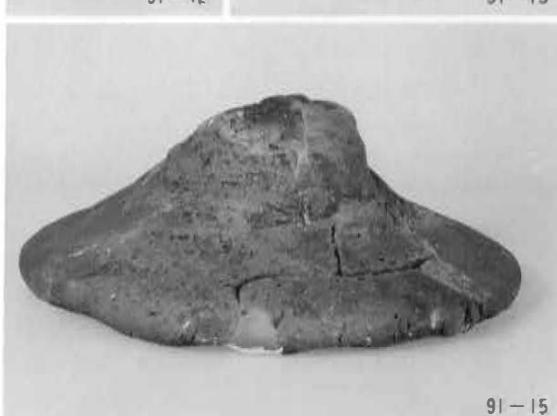


91-12

91-13



90



91-15

87号～89号・91号竪穴住居跡出土遺物



93-2



98



94-4



100-1



95-5



100-2



96-5



100-3

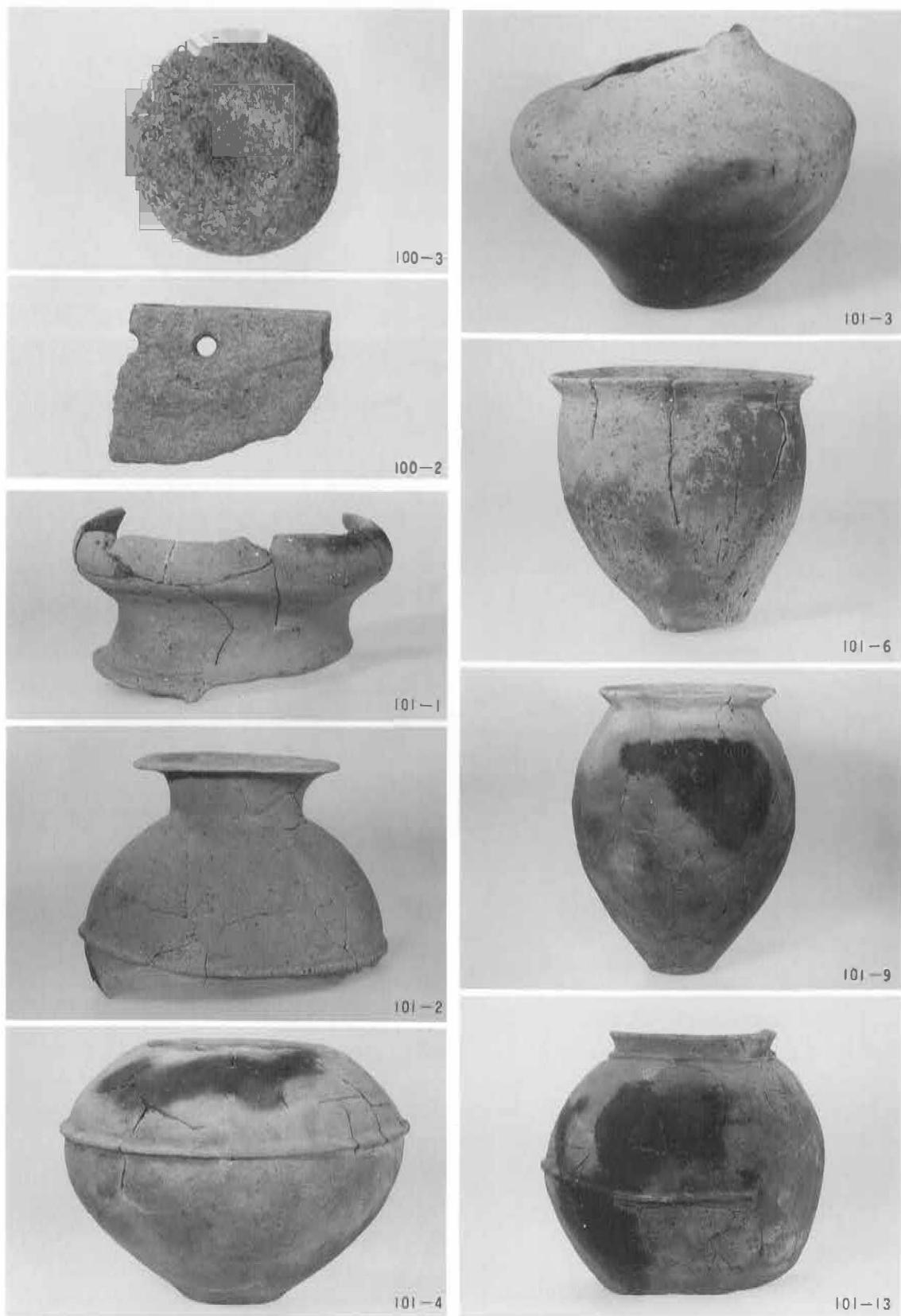


96-6

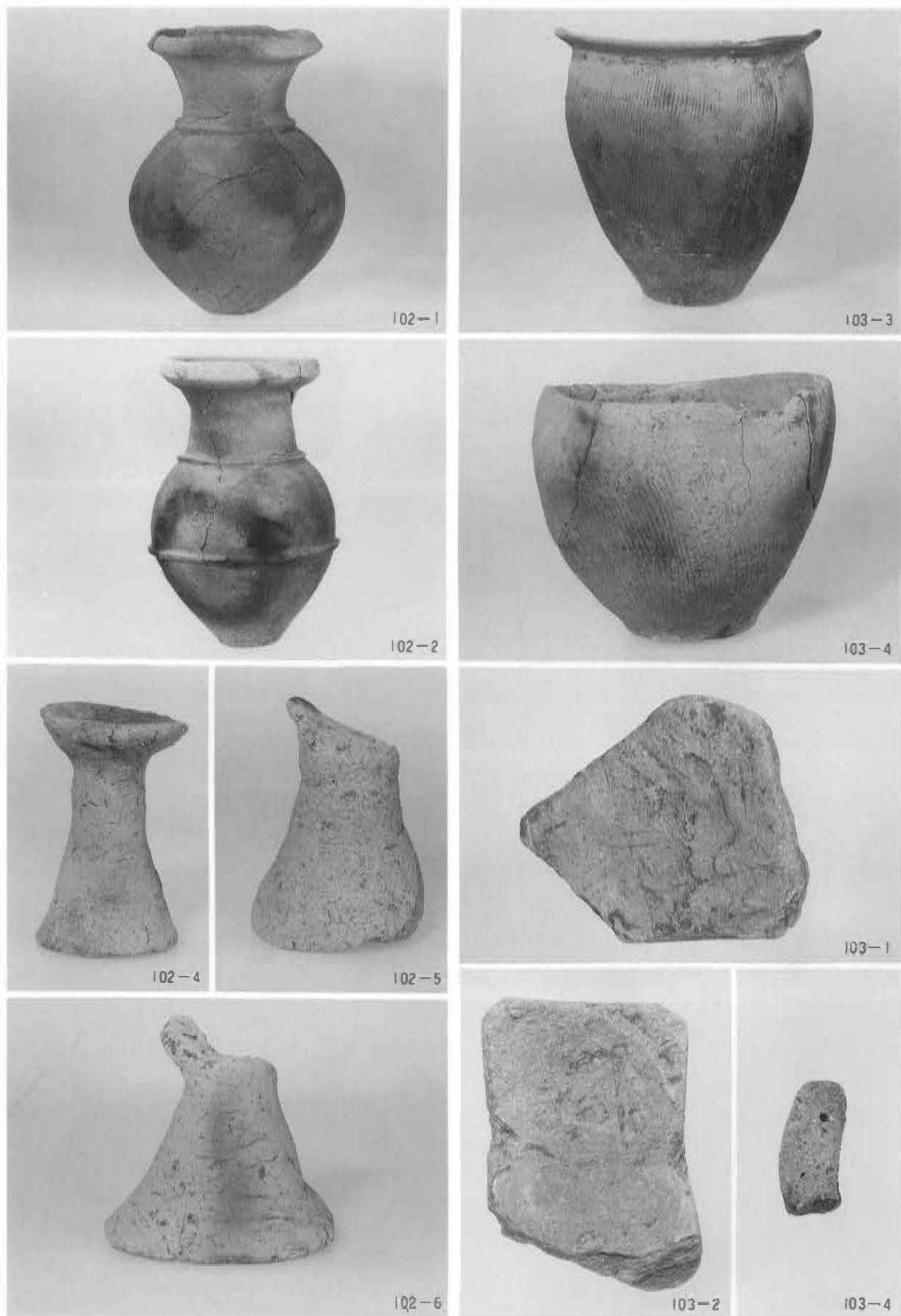
93号～96号・98号・100号竪穴住居跡出土遺物



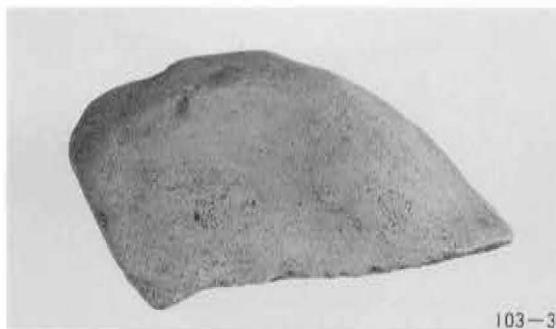
100号竪穴住居跡出土遺物



100号・101号竪穴住居跡出土遺物



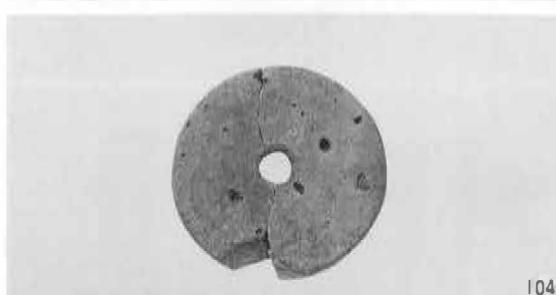
102号・103号竪穴住居跡出土遺物



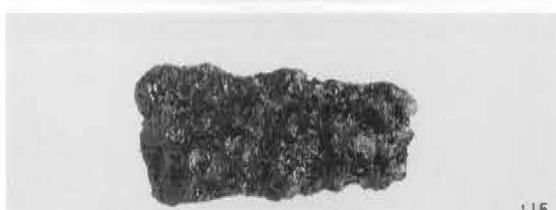
103-3



112-2



104



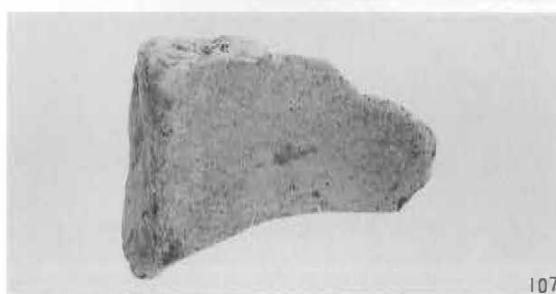
116



106-6



117-4



107



119-3



111-1

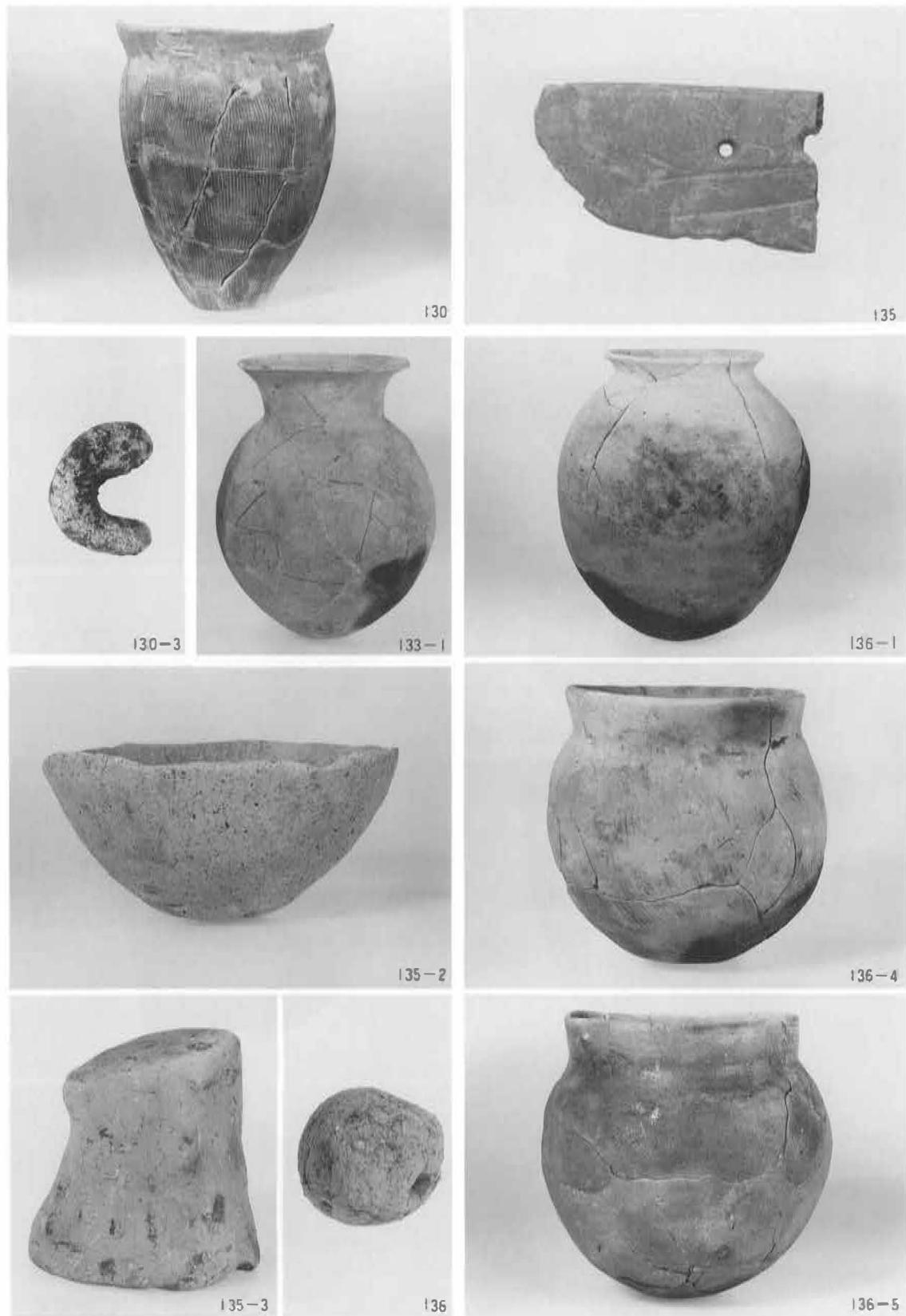


119-4

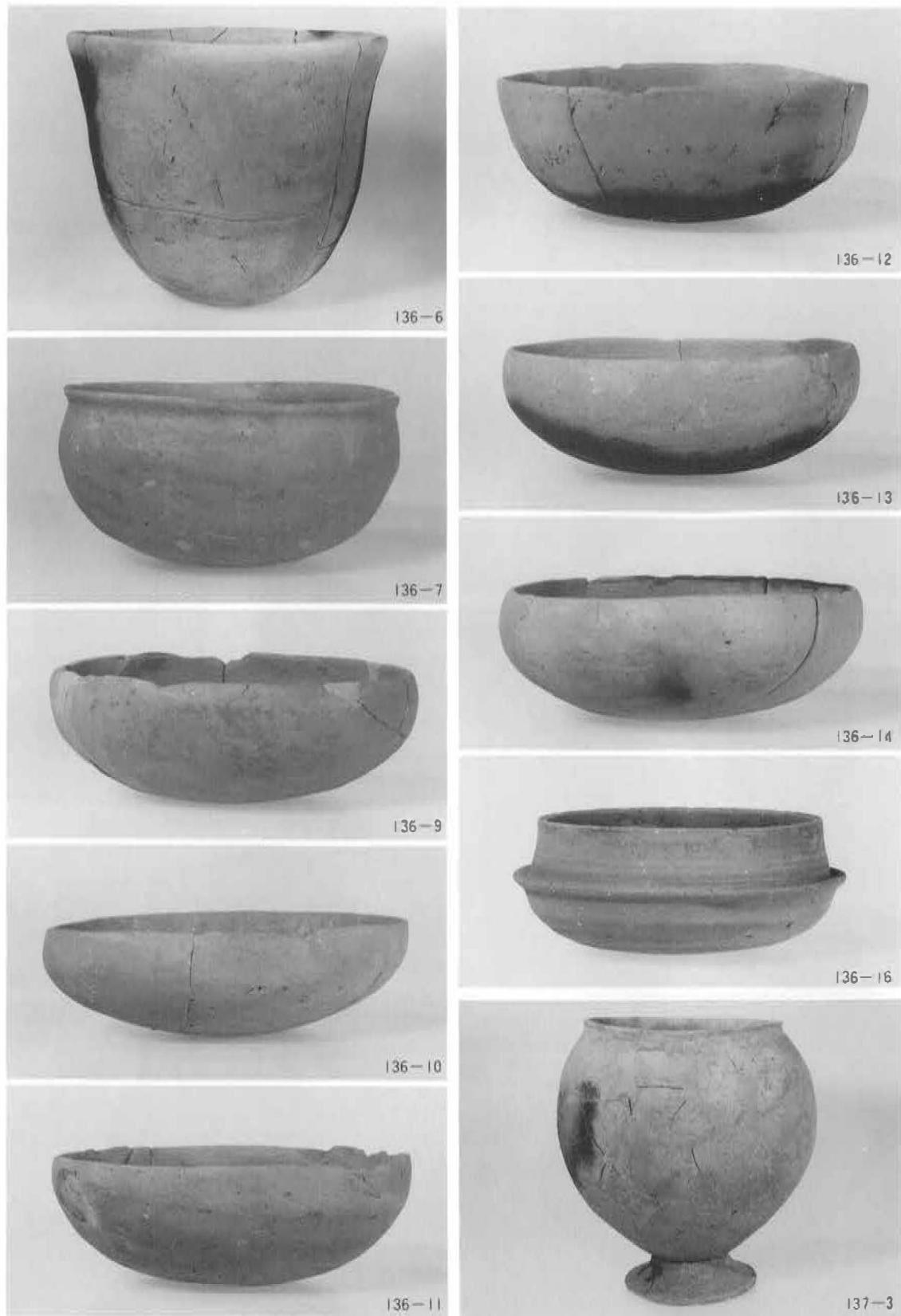
103号・104号・106号・107号・111号・112号・117号・119号竪穴住居跡出土遺物



119号・120号・126号(127号)竪穴住居跡出土遺物



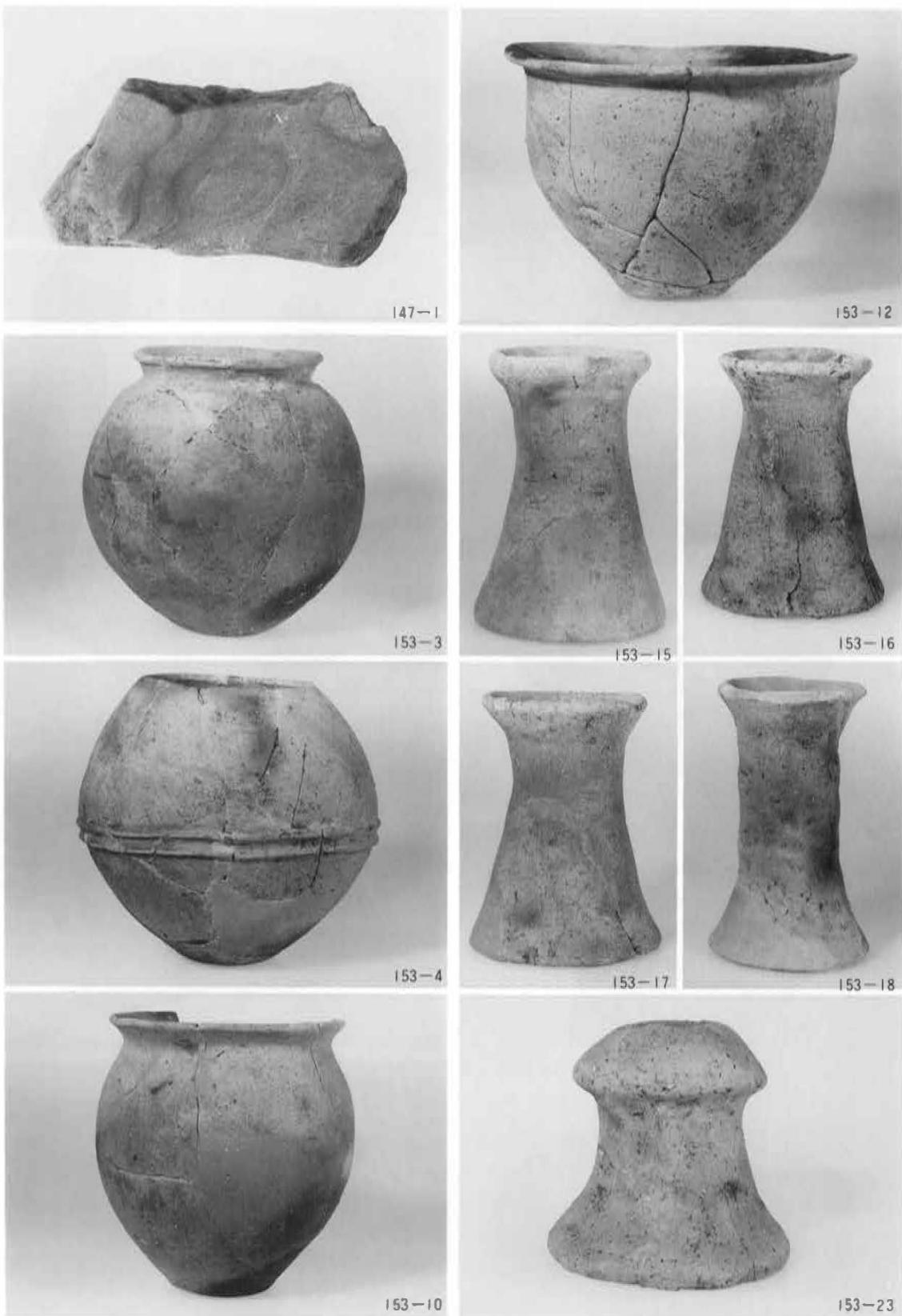
130号・133号・135号・136号竪穴住居跡出土遺物



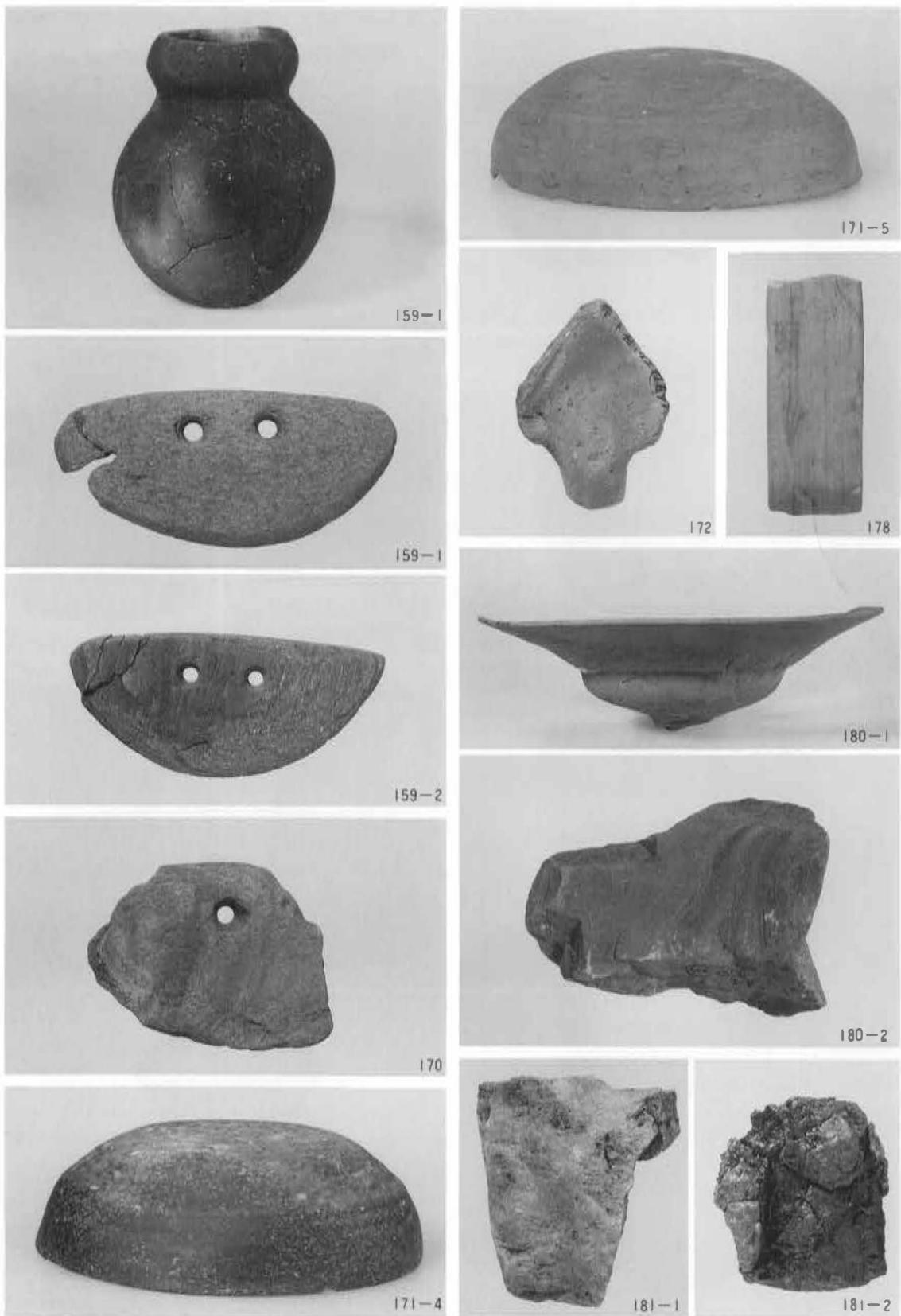
136号・137号竪穴住居跡出土遺物



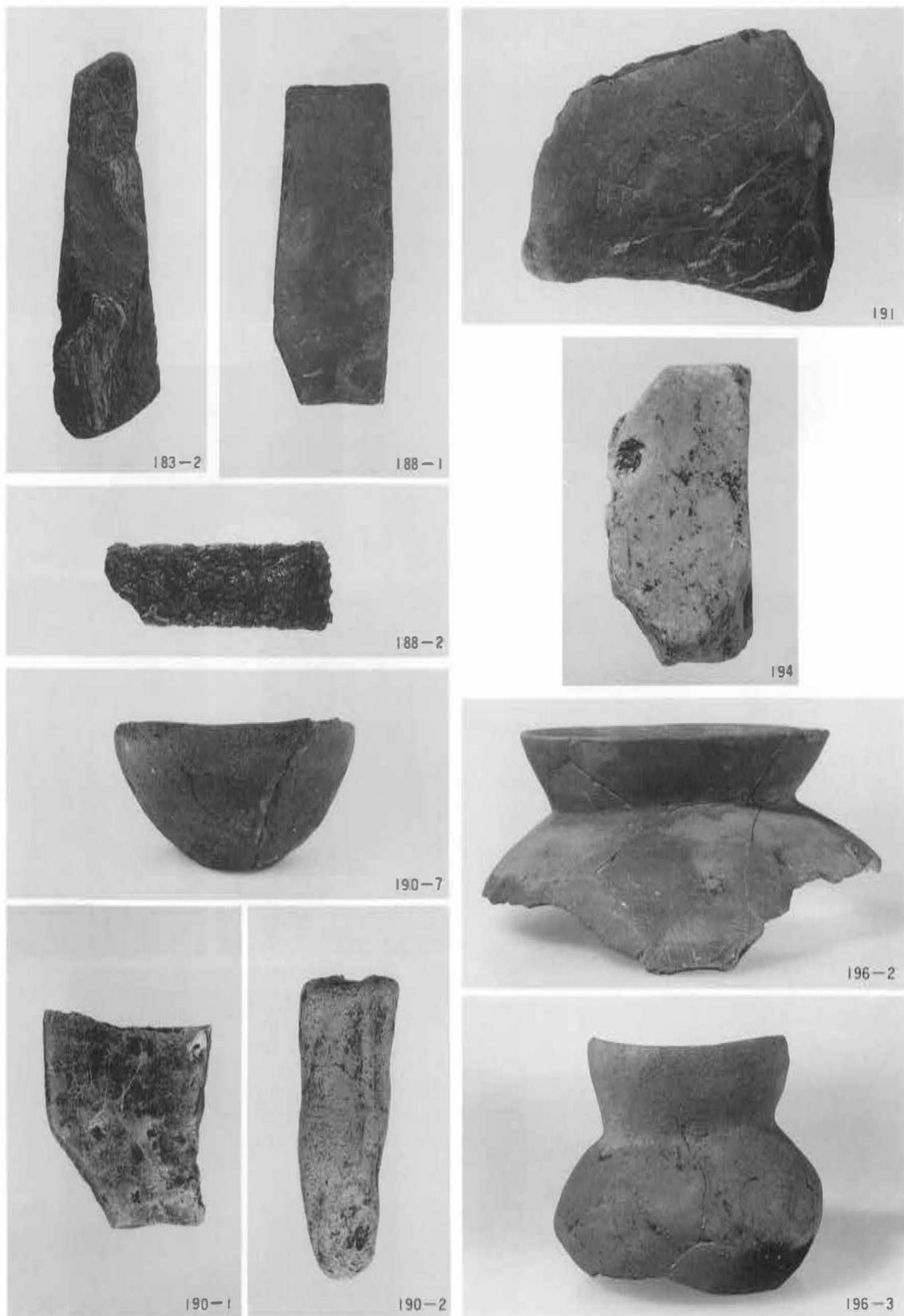
137号・138号・142号・144号～146号竪穴住居跡出土遺物



147号・153号竪穴住居跡出土遺物

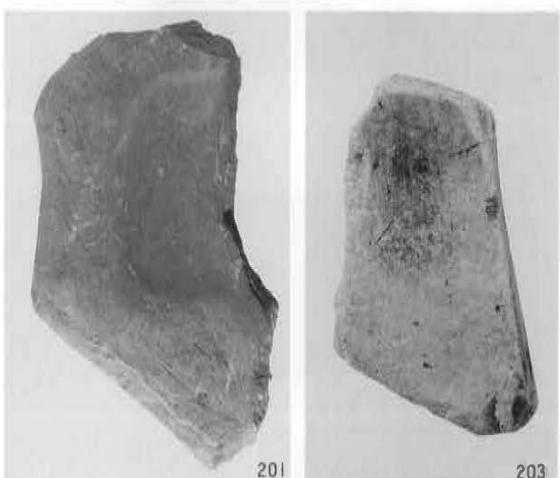
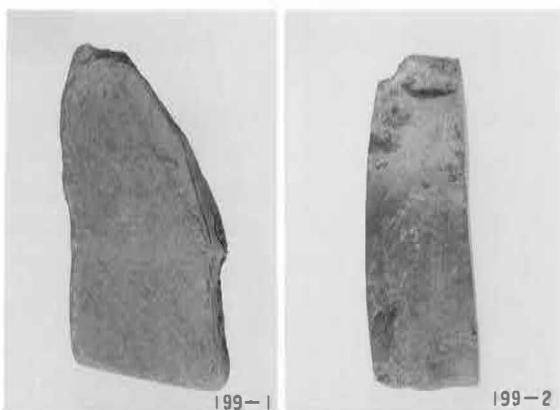


159号・170号・171号・172号・178号・180号・181号竪穴住居跡出土遺物

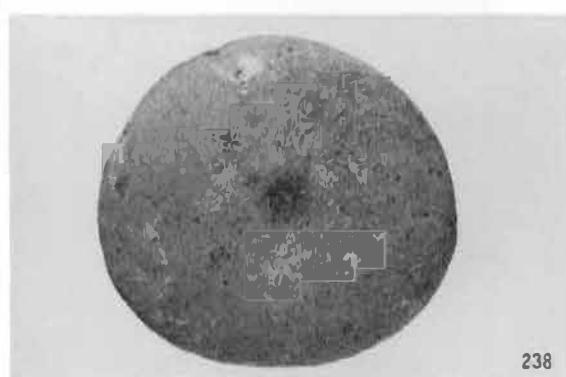
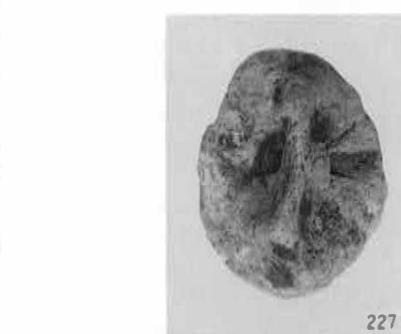
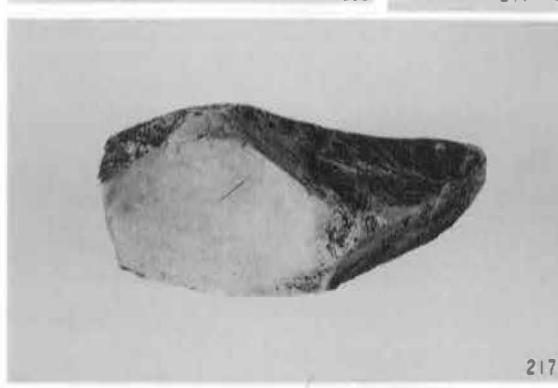


183号・188号・190号・191号・194号・196号竪穴住居跡出土遺物

図版 62



196号・199号・201号・203号・208号竪穴住居跡出土遺物



208号·217号·220号·223号·227号·229号·235号竖穴住居跡出土遺物



240-1



周2-1



240-2



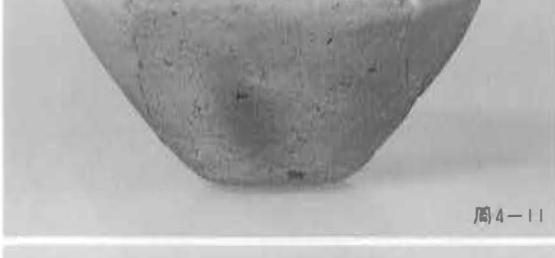
周4-7



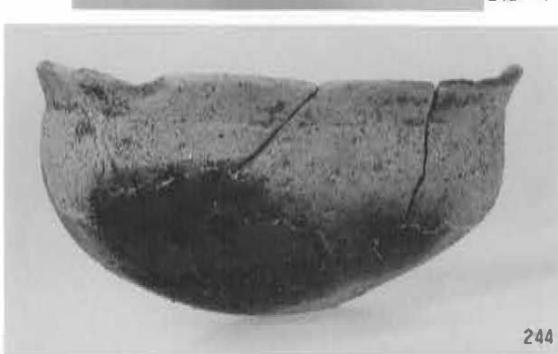
243-4



周4-10



周4-11

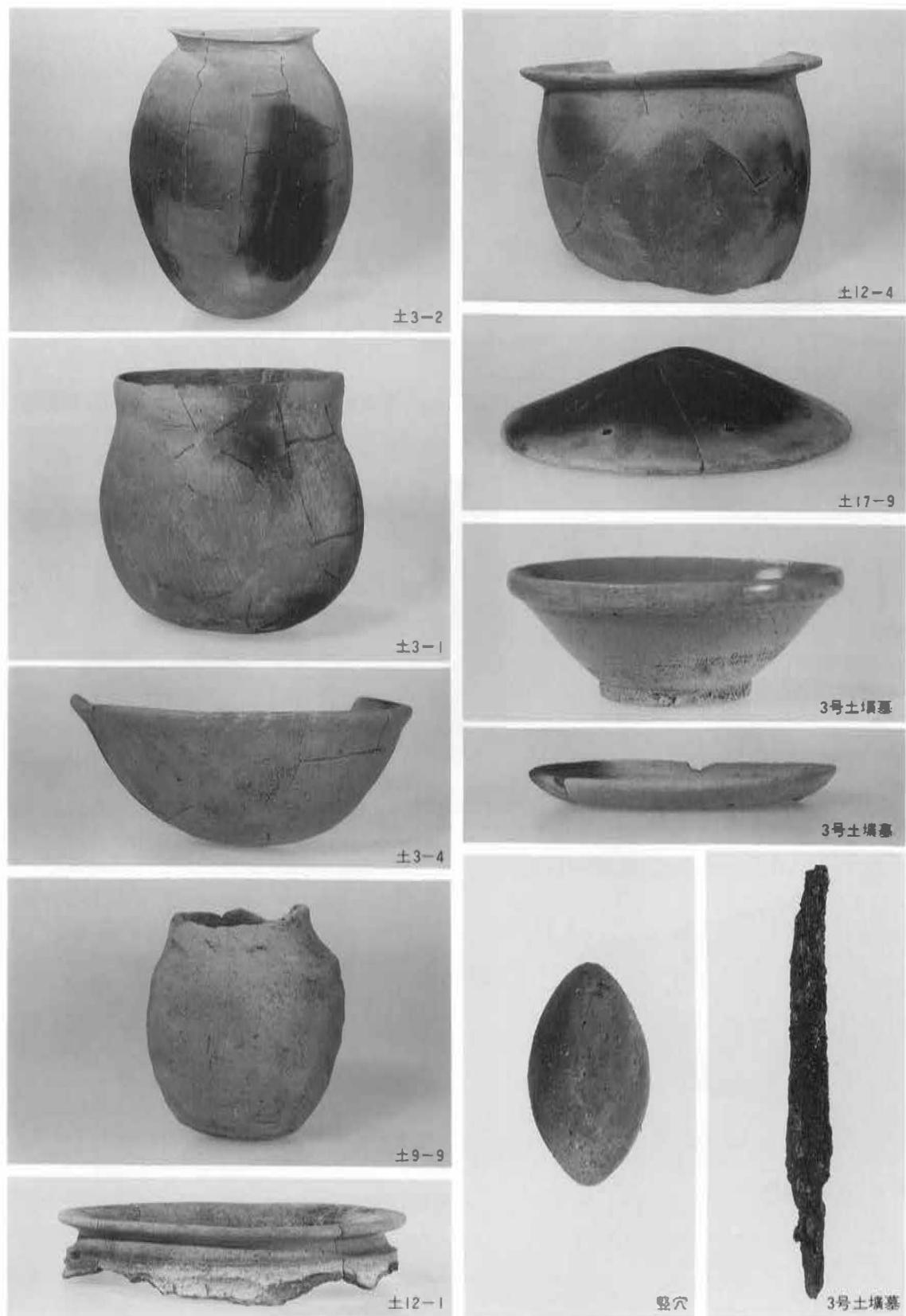


244



周4-12

240号・243号・244号竪穴住居跡、2号・4号周溝状遺構出土遺物



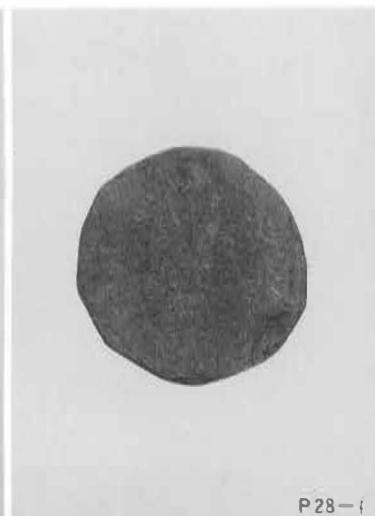
3号・9号・12号・17号土壤、3号土壤墓、竪穴状遺構出土遺物



P 3-2



P 3-4



P 28-1



P 32-5



P 124-3



P 139-6



P 146-8



P 213-7

各ピット出土遺物

群跡遺數藏

筑後市文化財調査報告書

第 6 集

平成 2 年 3 月 31 日

発行 筑後市教育委員会
筑後市大字山ノ井 898

印刷 アオヤギ株式会社 印刷事業部
福岡市中央区渡辺通 2 丁目 9-31

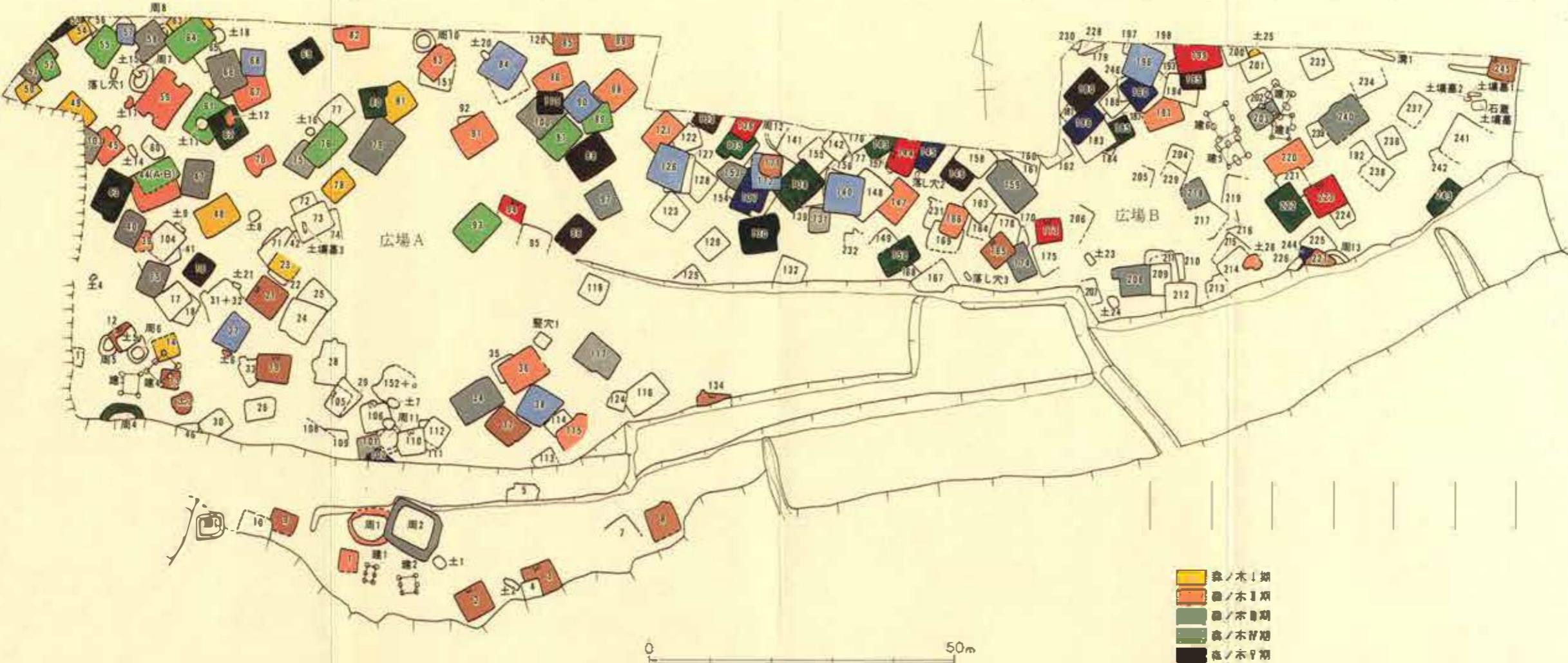


付図1 森・木造跡遺構配置図 (1/400)

0

50m

2 | A | B | C | O | E | F | G | H | I | J | K | L | M | N | O | P | Q | R | S | T | U | V | W | X



付図2 森ノ木遺跡集落時期割定図 (1/800)

- 森ノ木Ⅰ期
- 森ノ木Ⅱ期
- 森ノ木Ⅲ期
- 森ノ木Ⅳ期
- 森ノ木Ⅴ期
- 森ノ木Ⅵ期
- 森ノ木Ⅶ期
- 森ノ木Ⅷ期